

一般県道多伎江南出雲線  
地域活力基盤創造交付金（交通安全）  
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 下古志遺跡（第3次調査）

2012年3月

島根県教育委員会



下古志遺跡全体写真(合成)





1. 1区-1 SK102 出土弥生土器



2. 1区-2 Pit1170 出土中世土師器坏

一般県道多伎江南出雲線  
地域活力基盤創造交付金（交通安全）  
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 下古志遺跡（第3次調査）

2012年3月

島根県教育委員会

## 序

島根県教育委員会では、平成 22 年度に島根県土木部から依頼を受けて、出雲市下古志町において県道多伎江南出雲線に伴う発掘調査を行いました。この報告書は、下古志遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

下古志遺跡は、出雲平野西部の神戸川左岸の自然堤防上に位置しています。この地域には、古志本郷遺跡や知井宮多聞院遺跡など、弥生時代から古墳時代の遺跡の多いところであり、宝塚古墳や妙蓮寺山古墳といった著名な古墳も位置します。

今回の発掘調査では、弥生時代後期の掘立柱建物や溝を発見しました。また、鎌倉時代から戦国時代の井戸や土坑を発見しました。この発見により、当時の集落の範囲が想定できるようになり、弥生時代や鎌倉時代の集落のうつりかわりを把握することができるようになりました。

これらの調査成果は島根県の歴史を明らかにする上で欠くことのできない貴重な成果です。本書がこの地域の歴史や文化を明らかにするための基礎資料として活用され、地域の人々が自らの土地の下に眠る埋蔵文化財に興味を持っていただくとともに、郷土への誇りを醸成する一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び本書の刊行にあたりましては、島根県土木部ならびに出雲市、出雲市教育委員会、地元の方々をはじめとした関係者の皆様にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

島根県教育委員会  
教育長 今 井 康 雄

## 例 言

- 1 本書は島根県教育委員会が平成 22 年度に実施した県道多伎江南出雲線 地域活力基盤創造交付金（交通安全）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査地は次の通りである。  
下古志遺跡 出雲市下古志町 908 ほか
- 3 調査主体 島根県土木部より依頼を受けて島根県教育委員会が実施した。  
調査組織は本文中に記した。
- 4 調査期間 平成 22 年 5 月 21 日～平成 23 年 1 月 21 日
- 5 現地調査及び報告書では以下の方々から指導、助言をいただいた。（五十音順、敬称略）  
田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、渡邊貞幸（出雲弥生の森博物館館長）
- 6 現地調査及び報告書の作成に関しては、以下の機関、個人にご協力、ご助言いただいた。  
出雲市文化財課、槇原博之氏、有限会社サンイン住販
- 7 挿図中の方位は測量法による第Ⅲ系座標軸 X 軸の方向を指す。平面直角座標系 X Y 軸は世界測地系による。レベルは海拔高を示す。
- 8 第 4 図は国土地理院発行の 1/25,000 図「大社」（平成 21 年）を使用して作成した。
- 9 本文、図版中に用いた遺構の略号は以下の通りである。  
SB：掘立柱建物跡、SD：溝、SE：井戸、SK：土坑、SX：性格不明遺構
- 10 本書の図面の作成は調査員、調査補助員、整理作業員が行った。
- 11 出土した木質遺物・金属製品の一部は、財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所に保存処理を委託した。
- 12 本書の執筆は大庭と中川が行い、分担は目次に記した。本書の編集は大庭と中川が協議して行った。
- 13 本書掲載の遺物、実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（島根県松江市打出町 33）で保管している。

## 凡 例

- 1 遺物実測図の内、須恵器は断面黒塗りにし、陶器は断面網掛けにしている。金属器と石器は断面に斜線を入れた。木質遺物の断面の線は木目の方向を示す。土器の赤彩部分は網掛けをした。
- 2 本文、挿図、写真図版の遺物番号は一致する。
- 3 遺構名は、遺構略号の次に調査区（1区なら「1」、2区なら「2」）を記し、次に遺構番号を2ケタで表記した。また、調査時と遺構名を変えたものがあり、本文中に記した。
- 4 遺物番号は調査区ごとに1からつけた。
- 5 本書で用いた土器の分類及び編年観は、下記の各論文・報告書に依拠した。

### (1) 弥生土器・土師器

松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 - 山陽・山陰編 -』 木耳社 1992

(V-3 様式まで)

鹿島町教育委員会『南講武草田遺跡』 1992（草田4～7期）

### (2) 須恵器

岡田裕之・土器検討グループ「出雲地域における古代須恵器の編年」島根県古代文化センター編『出雲国形成と国府成立の研究 - 古代山陰地域の土器様相と領域性 -』 13～43頁、2010

### (3) 備前焼

岡山県教育委員会『山崎古窯跡』、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 167、2002



# 本文目次

第1章 調査に至る経緯（中川）	1
第2章 下古志遺跡の位置と歴史的環境（中川）	5
第3章 1区の調査（大庭）	9
第1節 調査の方法	9
第2節 1区-1の調査	10
第3節 1区-2の調査	22
第4節 1区-3の調査	73
第5節 1区-4の調査（中川）	101
第4章 2区の調査（中川）	109
第1節 調査の方法	109
第2節 層序	110
第3節 弥生時代・古墳時代の遺構と遺物	114
第4節 奈良時代・平安時代の遺構と遺物	161
第5節 鎌倉時代・室町時代の遺構と遺物	165
第6節 その他の遺構	190
第7節 小結	195
第5章 総括（大庭・中川）	203

報告書抄録

# 挿 図 目 次

第 1 図	下古志遺跡の位置	1
第 2 図	調査区の配置とトレンチ位置図・土層図	2
第 3 図	調査区の配置と地区割り図	3
第 4 図	下古志遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第 5 図	下古志遺跡 1 区調査区配置図	12
第 6 図	1 区 - 1 遺構配置図	13
第 7 図	1 区 -1 調査区土層実測図	14
第 8 図	SK102 実測図	15
第 9 図	SK102 弥生土器実測図	16
第 10 図	SB101 遺構・遺物実測図	17
第 11 図	Pit1012 土器出土状況実測図	18
第 12 図	Pit1012 弥生土器実測図	19
第 13 図	SB102 実測図	20
第 14 図	1 区 -1 遺物実測図	20
第 15 図	SK101 実測図	21
第 16 図	1 区 -2 遺構配置図	23
第 17 図	1 区 -2 東西土層図	24
第 18 図	1 区 -2 調査区中央南北土層図	25
第 19 図	SK169・SD156 実測図	26
第 20 図	SD141 実測図	27
第 21 図	SD141 南北横断土層図	28
第 22 図	SD141 遺物出土状況図 1	29
第 23 図	SD141 遺物出土状況図 2	30
第 24 図	SD141N8 東ゲリット 遺物出土状況図	31
第 25 図	SD141 出土遺物実測図 1	32
第 26 図	SD141 出土遺物実測図 2	33
第 27 図	SD141 出土遺物実測図 3	34
第 28 図	SD141 出土遺物実測図 4	35
第 29 図	SD141 出土遺物実測図 5	36
第 30 図	SD141 出土遺物実測図 6	37
第 31 図	SD141 出土遺物実測図 7	38
第 32 図	SD141 出土遺物実測図 8	39
第 33 図	SD141 出土遺物実測図 9	40
第 34 図	SD141 出土遺物実測図 10	41
第 35 図	SD141 出土遺物実測図 11	42
第 36 図	SD141 出土遺物実測図 12	43
第 37 図	SB103 実測図	44
第 38 図	SB103 弥生土器実測図	45
第 39 図	SE102 遺構・遺物実測図	45
第 40 図	SB104 実測図	46
第 41 図	SB105 実測図	47
第 42 図	SE101 実測図	48

第 43 図	SE101 出土遺物実測図 1	49
第 44 図	SE101 出土遺物実測図 2	50
第 45 図	SB106 実測図	51
第 46 図	SB106・SB107 出土遺物実測図	52
第 47 図	SB107 実測図	53
第 48 図	SB108・SE103 実測図	54
第 49 図	SB108・SE103 出土遺物実測図	55
第 50 図	SB109 実測図	56
第 51 図	SK1147 実測図	57
第 52 図	SB110 実測図	58
第 53 図	SK146 実測図	61
第 54 図	SK142・154 実測図	62
第 55 図	SE105・SE110 実測図	63
第 56 図	SE108・109 実測図	64
第 57 図	SE106・107・SX103 実測図	65
第 58 図	SX104・105 実測図	66
第 59 図	Pit1170 遺構・遺物出土状況実測図	67
第 60 図	Pit1170 出土遺物実測図	68
第 61 図	SK150・SD142・Pit1159・1161 実測図	69
第 62 図	1 区 -3 遺構配置図	73
第 63 図	1 区 -3 西側遺構配置図	74
第 64 図	1 区 -3 東側遺構配置図	75
第 65 図	1 区 -3 調査区土層図	76
第 66 図	集石 5 及び SK130 実測図	77
第 67 図	SE112 実測図	78
第 68 図	SE112 出土遺物実測図	79
第 69 図	SE111 実測図 1	80
第 70 図	SE111 遺構実測図 2・出土遺物実測図 1	81
第 71 図	SE111 出土遺物実測図 2	82
第 72 図	SE111 出土遺物実測図 3	83
第 73 図	SE111 出土遺物実測図 4	84
第 74 図	SD134 実測図	85
第 75 図	SK107 実測図	86
第 76 図	SK106 実測図	87
第 77 図	SK106 出土遺物実測図 煙管、毛抜き原寸大、土師器	88
第 78 図	1 区 -3 各遺構出土遺物実測図	88
第 79 図	集石 4 実測図	88
第 80 図	下古志遺跡 1 区 -4 調査区全体図	101
第 81 図	下古志遺跡 1 区 -4・SD141 実測図	102
第 82 図	1 区 -4 SD141 出土土器実測図 1	104
第 83 図	SD141 出土土器実測図 2	105
第 84 図	下古志遺跡 2 区遺構平面図	111
第 85 図	下古志遺跡 2 区 -1 土層図	112
第 86 図	調査区土層図	113
第 87 図	弥生・古墳時代の遺構	115

第 88 図	SD203 実測図	116
第 89 図	SD206 実測図 1	117
第 90 図	SD206 実測図 2	118
第 91 図	SD215・216 実測図 1	119
第 92 図	SD215・SD216 実測図 2	120
第 93 図	SD202 実測図 1	121
第 94 図	SD202 実測図 2	122
第 95 図	SD203・206・215・216・202 出土土器実測図	123
第 96 図	SD220 実測図 1	126
第 97 図	SD220 実測図 2	127
第 98 図	SD220 遺物出土状況図	129
第 99 図	甕口縁 分類図	130
第 100 図	SD220 出土土器実測図 1	134
第 101 図	SD220 出土土器実測図 2	135
第 102 図	SD220 出土土器実測図 3	136
第 103 図	SD220 出土土器実測図 4	137
第 104 図	SD220 出土土器実測図 5	138
第 105 図	SD220 出土土器実測図 6	139
第 106 図	SD220 出土土器実測図 7・石器実測図	140
第 107 図	SD223 実測図	148
第 108 図	SD222 実測図	149
第 109 図	SD222・223 実測図	151
第 110 図	SD221 実測図	153
第 111 図	Pit2261 実測図	155
第 112 図	SD223・SD222 出土土器実測図	156
第 113 図	SD221・Pit2261 出土土器実測図	157
第 114 図	遺構外出土遺物実測図 1	159
第 115 図	SK201 実測図	162
第 116 図	SX207 実測図	163
第 117 図	Pit2371 実測図	164
第 118 図	遺構出土土器実測図 1	164
第 119 図	遺構外奈良時代・平安時代の土器出土状況図	166
第 120 図	遺構外出土遺物実測図 2	167
第 121 図	遺構外出土遺物実測図 3	168
第 122 図	鎌倉時代・室町時代の遺構	170
第 123 図	SB201 実測図	172
第 124 図	SB202・203 実測図	173
第 125 図	SB204・SB205 実測図	174
第 126 図	SD218 実測図	175
第 127 図	SD219 実測図	176
第 128 図	SD208・SD209 実測図	177
第 129 図	SD211 実測図	178
第 130 図	SX216 実測図	179
第 131 図	SX218 実測図	180
第 132 図	SK203 実測図・出土遺物実測図	182

第 133 図	Pit2281・2284・2305・2325 実測図	183
第 134 図	遺構出土土器実測図 2	185
第 135 図	柱根実測図	186
第 136 図	遺構外出土遺物実測図 4	187
第 137 図	遺構外鎌倉時代・室町時代の土器出土状況図	188
第 138 図	遺構外出土遺物実測図 5	188
第 139 図	石製品実測図	191
第 140 図	古銭	192
第 141 図	SD217 実測図	193
第 142 図	SD204 実測図	194
第 143 図	遺構平面図 1	197
第 144 図	遺構平面図 2	198
第 145 図	遺構平面図 3	199
第 146 図	下古志遺跡 弥生・古墳時代の遺構配置図	204
第 147 図	下古志遺跡住居域推定図	205
第 148 図	下古志遺跡 鎌倉・室町時代の遺構配置図	206

## 巻頭写真図版目次

1-1	下古志遺跡全体写真(合成)
2-1	1区-1 SK102 出土弥生土器
2-2	1区-2 Pit1170 出土中世土師器坏

## 写真図版目次

1-1	下古志遺跡 1区空中撮影(西上空から)	11-1	SD156(東西方向の溝)遺構出土状況(南から)
1-2	1区-1 調査前(南から)	11-2	SD141 検出状況
2-1	1区-1 遺構検出状況全景(南から)	11-3	SD141 2層除去後
2-2	下層遺構及びSK102 検出状況	12	SD141 土層堆積状況(西から)
3-1	SK102 土器出土状況	13-1	SD141 東側(N8グリッド内)南北土層断面(西から)
3-2	SK102 発掘状況	13-2	SD141 N8グリッド西2-2層土器出土状況
4-1,2	SK102 土器出土状況	14-1	SD141 M8グリッド2-2層土器出土状況
4-3	SK102 完掘状況	14-2,3	SD141 N8グリッド東2,3層土器出土状況
5-1	調査区西部SB101 調査状況	15-1	SD141 以南遺構群検出状況(東から)
5-2	調査区東下層遺構SB102 完掘状況	15-2	布掘建物SB103 検出状況
6-1	SB101 Pit1016 柱根出土状況	16-1	SB103 発掘状況(北から)
6-2	SB101 Pit1012 埋襲出土状況	16-2	SB103,SE102 完掘
6-3	SB101 Pit1012 完掘状況	17-1	SE102 上部土層断面
7-1	SK101 検出状況	17-2	SB103,104,SE101,102 完掘
7-2	SK101 土層断面(北から)	18-1,2	SB105 完掘
7-3	SK101 完掘状況(南東から)	19-1	SE101 井戸上部土層断面
8	1区-2 空中撮影	19-2	SE101 井戸枠
9-1	1区-2,3 調査前	20-1	布掘建物SB106とPit1187 検出状況
9-2	1区-2 調査区中央南北方向土層断面(西から)	20-2	布掘建物SB106 完掘
9-3	1区-2 調査区南側東西南方向土層断面(北から)	20-3	Pit1187 土層断面(南から)
10-1	SK169 弥生時代中期土坑墓検出状況(西から)	21-1	SB107 検出状況(北から)
10-2,3	SK169 石及び高坏出土状況	21-2	SB107 Pit1177 土器出土状況



21-3	SB107 完掘	38-3	1区-3 東集石5 発掘状況
22-1	SE103 及び SB108 検出状況 (西から)	39-1	SE112 遺構検出状況
22-2,3	Pit1204(SB108 祭祀土坑) 鼓形器台出土状況	39-2,3	1区-3 東 SE112 井戸発掘状況
22-4	SE103 螺旋構造検出状況	40-1 ~ 3	SE112 井戸粹残出土状況
23-1	SE103 下段半裁土層断面 (南から)	41-1	SE111 検出状況
23-2	SB108,SE103 完掘	41-2	SE111 石組検出状況
24-1	SB109,SE104 検出状況	41-3	SE111 井戸底部発掘状況
24-2	SB109 完掘	42-1	SE111 石組発掘状況
25-1	SK1147 検出状況 (北から)	42-2	SE111 井戸底部検出状況
25-2	SK1147 検出状況	43	1区-3 東発掘状況 (東半部、西から)
25-3	SB110 完掘 (北から)	44-1	SK107 発掘状況 (東から)
26-1	SB110 及び SK1147 完掘	44-2	SK106 検出状況 (北から)
26-2	1区-2 東詰弥生時代後期遺構群	44-3	SK106 土層断面 (西から)
26-3	1区-2 調査区東端遺構群完掘	45-1,2	SK106 棺材, 副葬品出土状況
27-1	SK146 土器出土状況	45-3	SK106 完掘 (北から)
27-2	SK142 東西土層断面 (南から)	46	1区-1 SK102 弥生土器
27-3	SK154 検出状況 (南から)	47	1区-1 及び 1区-2 遺物
28-1	SK154 完掘 (南から)	48	1区-2 SE101 遺物
28-2	SK150 半裁土層断面石出土状況 (南から)	49	SE101 遺物及び 1区-2 弥生土器
28-3	SK150 完掘	50	1区-2 遺物
29-1	SE105 検出状況 (北から)	51	1区-2 及び 3 遺物
29-2	SE105 東西土層断面 (南から)	52	1区-3 東 SE111 及び SE112 遺物
29-3	SE105 発掘状況 (西から)	53	SE111 木製品・井戸粹部材
29-4	SE108 検出状況 (西から)	54	1区-3 遺物
29-5	SE109,108 完掘 (東から)	55	1区-2 SD141 弥生土器 1
29-6	SE109,108,107 (東から)	56	SD141 弥生土器 2
30-1	SE110 発掘状況 (東から)	57	SD141 弥生土器 3
30-2	SE109 検出状況 (南から)	58	SD141 弥生土器 4
30-3	SE109 完掘	59	SD141 弥生土器 5
31-1,2	Pit1170 祭祀土坑土師器環皿出土状況	60-1	1区-4 SD141 検出
31-3	Pit1170 祭祀土坑完掘	60-2	SD141 土器出土状況
32-1	SX103 検出状況 (西から)	61-1	南壁土層
32-2	SX103 完掘 (北から)	61-2	SD141 東側土層 (BB')
32-3	SX104 検出状況 (北東から)	61-3	SD141 西側土層 (CC')
33-1	SX104 発掘状況 (北から)	62-1	SD141 土器出土状況 2
33-2	SX105 検出状況 (北から)	62-2	1区-4 完掘
33-3	SX105 完掘	63	SD141 出土土器 1
34-1	SD142 中世溝発掘状況 (南から)	64	SD141 出土土器 2
34-2	SD142 発掘状況 (北から)	65-1	SD141 出土土器 3
34-3	平成 21 年度調査 SD07	65-2	SD141 出土土器 4
35-1,2	1区-3 西遺構検出状況 (東から)	66-1	SD141 出土土器 5
35-3	1区-3 SK106 検出状況 (北から)	66-2	SD141 出土土器 6
36-1	1区-3 西 SK106 ほか完掘, 牛馬耕痕跡 (西から)	67-1	調査区西側土層 (BB')
36-2	1区-3 西残部遺構検出状況 (東から)	67-2	調査区北東土層 (CC')
36-3	1区-3 西残部 SD160 ほか完掘	67-3	2区調査前風景
37-1	1区-3 東造成土除去後 (西から)	67-4	2区-1 南側完掘
37-2	1区-3 東 SE111 周辺遺構検出状況 (北西から)	68-1	2区-1 東側土層 1 (AA')
37-3	1区-3 東調査区中央部遺構検出状況 (北西から)	68-2	2区-1 東側土層 2 (AA')
38-1	1区-3 西 南壁土層堆積状況	68-3	2区-1 東側土層 3 (AA')
38-2	1区-3 東集石5 発掘状況,SK130 検出状況	69-1	SD203 土層 (DD')

69-2	SD203 EE' 土層	89-1	SD219 検出
70-1	SD206 FF' 土層	89-2	SD219 CC' 土層
70-2	SD206 GG' 土層	89-3	SD219 完掘
71-1	SD206 HH' 土層	90-1	SD211 完掘
71-2	SD206 完掘	90-2	SD211 土層
72-1	SD215,216 II' 土層	91-1	SX216 東西土層
72-2	SD215,216 JJ' 土層	91-2	SX216 完掘
73-1	SD215,216 KK' 土層	91-3	SX218 土層
73-2	SD215,216 完掘	92-1	SK203 完掘
74-1	SD202 西側検出状況	92-2	SK203 土層
74-2	SD202 LL' 土層	93-1	SK203 古銭出土 (231)
74-3	SD202 NN' 土層	93-2	SK203 古銭出土 (232)
75-1	SD202,203 MM' 土層	94-1	Pit2281 検出
75-2	SD202,203 完掘	94-2	Pit2281 土層
75-3	SD202 完掘	94-3	Pit2281 完掘
76-1	SD220,221 検出	95-1	Pit2305 土層
76-2	SD220 OO' 土層	95-2	Pit2284 土層
77-1	SD220 PP' 分層前	95-3	SD204 土層
77-2	SD220 PP' 土層	96-1	SD217 EE' 土層
78-1	SD220 QQ' 土層	96-2	SD217,218 BB' 土層
78-2	SD220 RR' 土層	97-1	2区南側完掘
79-1	SD220,223 SS' 土層	97-2	2区北側完掘
79-2	SD221 UU' 土層	98-1	2区南側空撮
80-1	SD221 TT' 分層前	98-2	2区空撮 (南西から)
80-2	SD221 TT' 土層	99-1	2区北側空撮
81-1	SD222 VV' 土層	99-2	2区空撮 (南から)
81-2	SD222 WW' 土層	100-1	SD203,206,216,202 出土土器
82-1	SD222,223 YY' 土層	100-2	SD206,215,216,202 出土土器
82-2	SD220 完掘	101	SD216,202,220 出土土器
83-1	SD220 ~ 222 完掘	102-1	SD220 出土土器 1
83-2	SD222,223 完掘	102-2	SD220 出土土器 2
84-1	SK201 検出	103-1	SD220 出土土器 3
84-2	SK201 土層	103-2	SD220 出土土器 4
84-3	SK201 完掘	104-1	SD220 出土土器 5
85-1	SX207 検出	104-2	SD220 出土土器 6
85-2	SX207 完掘	105	SD220 出土土器 7
85-3	Pit2371 須恵器 (184) 出土状況	106-1	SD220 出土土器 8
86-1	SB202 ~ 205 西から	106-2	SD220 出土土器 9
86-2	SB203	107-1	SD220 出土土器 10
87-1	SB202 Pit2165	107-2	SD220 出土土器 11
87-2	SB202 Pit2184	108-1	SD220 出土土器 12
87-3	SB202 Pit2192	108-2	SD220 出土土器 13
87-4	SB202 Pit2199	109	SD220 出土土器 14
87-5	SB203 Pit2222	110	SD220 出土土器 15
87-6	SB205 Pit2218	111-1	SD220 出土土器 16
87-7	SB205 Pit2158	111-2	SD220 出土土器 17
88-1	SD218 検出	112-1	SD220 出土土器 18
88-2	SD208 完掘	112-2	SD220 出土土器 19
88-3	SD218 AA' 土層	113	SD220 出土土器 20
88-4	SD218 完掘	114-1	SD220 出土土器 21

114-2	SD220 出土土器 22	124-2	遺構外出土土器 5 (裏面)
115	SD220,223,222 出土土器	125-1	遺構外出土土器 6
116	SD220,223,222 出土遺物	125-2	遺構外出土土器 6 (裏面)
117-1	SD222 出土土器 1	126	遺構外出土土器 7
117-2	SD222 出土土器 2	127-1	遺構外出土土器 8
118	SD221,222・223 合流部 ,Pit2261 出土土器	127-2	遺構外出土土器 9
119	遺構外出土土器 1	128	石製品 1
120	遺構外出土遺物	129	石製品 2・木質遺物
121	SK201,SX207,Pit2371,2247, 遺構外出土土器	130	古銭
122-1	遺構外出土土器 2		
122-2	遺構外出土土器 3		
123-1	遺構外出土土器 4		
123-2	SB202,203,SD218,SX216,218,SD208,209,211, Pit2325 出土土器		
124-1	遺構外出土土器 5		

## 表 目 次

第 1 表	1 区土器・陶磁器・土製品観察表	90
第 2 表	1 区木製品観察表	98
第 3 表	1 区金属製品観察表	98
第 4 表	1 区遺構種別一覧表	99
第 5 表	1 区井戸一覧表	100
第 6 表	1 区主要遺構の各時代ごとの様相	100
第 7 表	1 区 -4 土器観察表	107
第 8 表	下古志遺跡 2 区主要遺構一覧表	113
第 9 表	SD203・206・215・216・202 出土土器観察表	124
第 10 表	SD220 出土土器観察表 1	141
第 11 表	SD220 出土土器観察表 2	143
第 12 表	SD220 出土土器観察表	145
第 13 表	SD223・222・221・Pit2261 出土土器観察表	157
第 14 表	遺構外出土遺物観察表 1	160
第 15 表	遺構出土遺物観察表 1	164
第 16 表	遺構外出土遺物観察表 2	168
第 17 表	遺構出土遺物観察表 2	182
第 18 表	遺構出土遺物観察表 3	185
第 19 表	柱根観察表	186
第 20 表	遺構外出土遺物観察表 3	189
第 21 表	石製品観察表	192
第 22 表	古銭計測表	192
第 23 表	溝計測表	200
第 24 表	遺構計測表	200
第 25 表	掘立柱建物一覧表	200
第 26 表	掘立柱建物計測表	201
第 27 表	出土土器数量表	202

# 第 1 章 調査に至る経緯

## (1) 事業概要と調査までの協議

一般県道多伎江南出雲線は、出雲市多伎町久村から同市大津町にかけての全長およそ 15.6km の道路である。

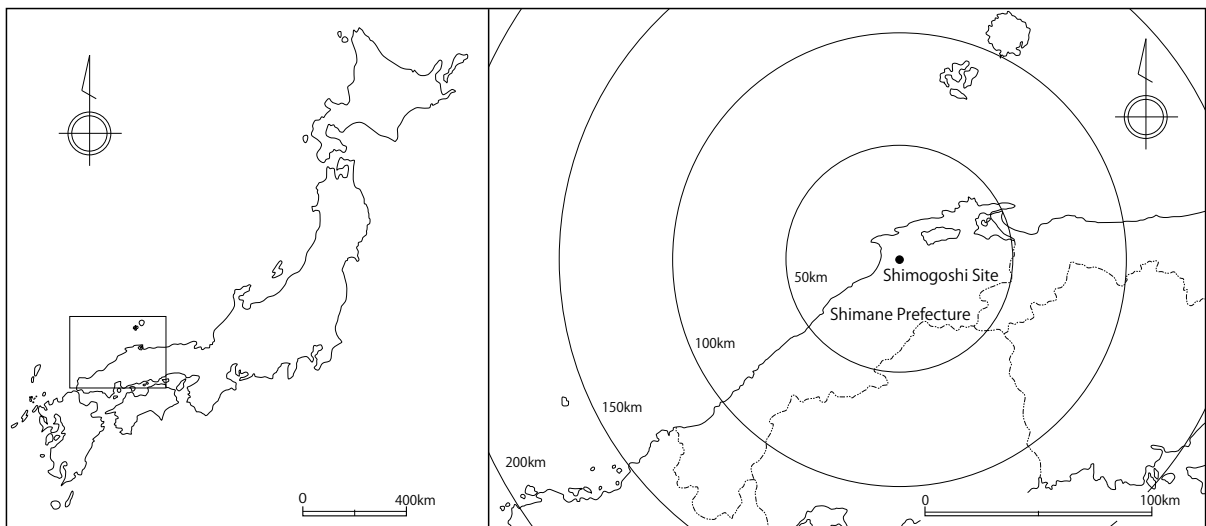
このうち、新古志橋から下古志町までの古志橋工区・古志工区は昭和 62 年度から、出雲市芦渡町から出雲インター線までの西出雲工区は平成 8 年度に道路建設の事業を着手し、平成 12 年度に事業が完了した。これらの工区における埋蔵文化財発掘調査は、平成 7 年度から 9 年度にかけて島根県出雲土木建築事務所（当時：現在は出雲県土整備事務所）の依頼を受けて出雲市教育委員会が下古志遺跡の発掘調査を行った（これを下古志遺跡第 1 次調査と呼称する）。

下古志遺跡が所在する古志工区と西出雲工区の間約 1km については、平成 13 年度に事業を着手した。平成 19 年 5 月に島根県土整備事務所から出雲市文化財課へ下古志町地内の多伎江南出雲線予定地内における埋蔵文化財の有無についての照会があった。出雲市文化財課が平成 19 年 6 月にトレンチ調査を行ったところ、5 箇所設定したトレンチのうち 1T、3T、5T で遺物を、1T、2T、3T、5T で遺構を確認したため、発掘調査が必要であること、4T 付近は発掘調査の必要がないことを島根県土整備事務所長あて平成 19 年 6 月 21 日付文財第 166 号で報告した（第 2 図）。その後平成 20 年 2 月に土木部道路建設課、島根県土整備事務所、出雲市文化財課、島根県教育委員会文化財課で協議を行い、平成 22 年度に島根県教育委員会が発掘調査を行うことを決定した。

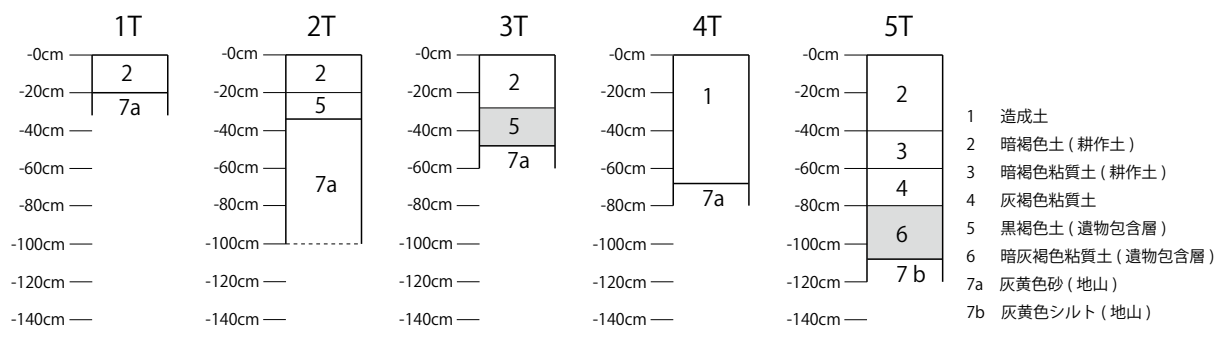
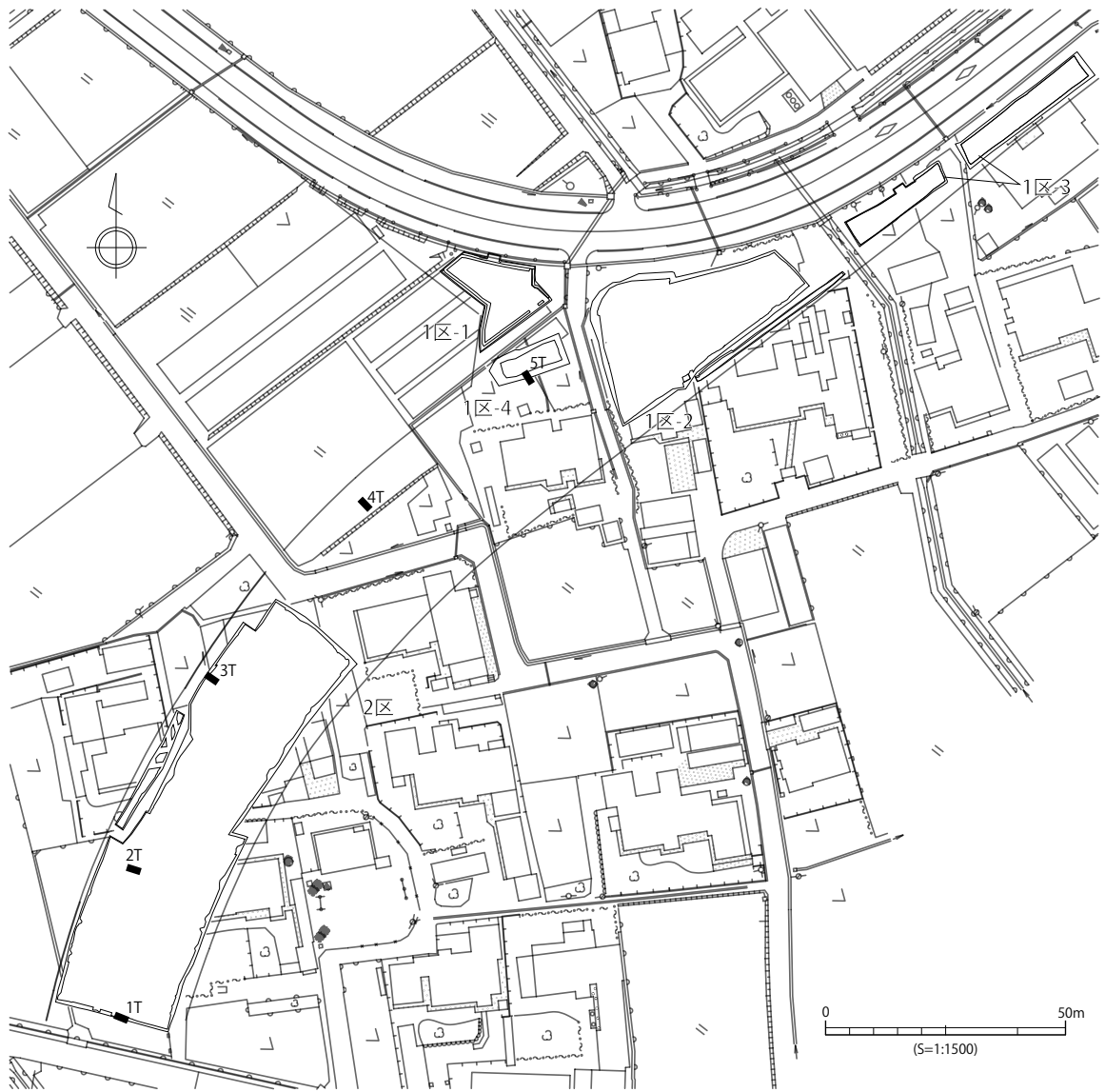
## (2) 文化財保護法上の措置と遺跡の取り扱い

平成 21 年 10 月 29 日付第 2935 号で島根県土整備事務所から文化財保護法第 94 条の通知があり、同年 10 月 30 日付島教文財第 2 号の 37 において島根県土整備事務所長あて発掘調査が必要な旨を勧告した。

本発掘調査の文化財保護法第 99 条第 1 項にかかる発掘通知は、平成 22 年 4 月 16 日付で島根県教育委員会教育長から提出した。発掘担当者は大庭俊次・中川 寧である。発掘調査は、調査範囲を出雲市教育委員会の発掘調査やトレンチ調査に基づいて第 2 図のように設定し、平成 22 年 5 月 21 日から平成 23 年 1 月 21 日まで行った。調査終了後の遺跡の取り扱いの協議は調査の工程

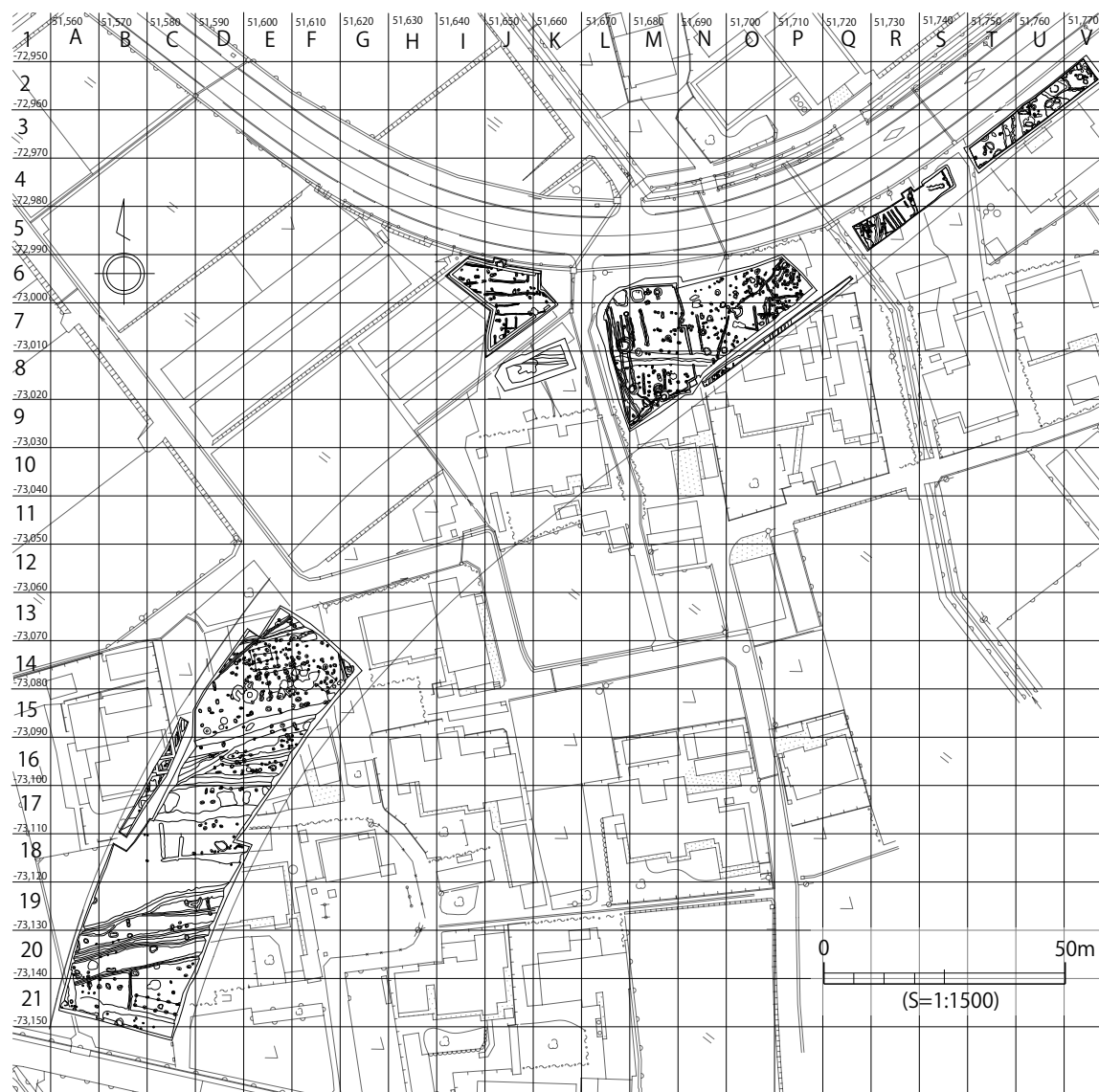


第 1 図 下古志遺跡の位置



第2図 調査区の配置とトレンチ位置図・土層図





第3図 調査区の配置と地区割り図

の関係から三度に分けて行い、平成22年7月2日付島教文財第344号、平成23年1月4日付島教文財第836号、平成23年1月24日付島教文財第1064号により土木部道路建設課長あて通知し、記録保存としての取り扱いを行った。遺物の発見通知は、出雲警察署長あて平成23年2月4日付け島教文財第277号の14により提出した。現在、平成23年度開通へ向けて工事が進んでいる。

下古志遺跡の調査面積は、1区1,400 m<sup>2</sup>、2区2,200 m<sup>2</sup>の合計3,600 m<sup>2</sup>である。

なお、下古志遺跡の発掘調査においては、出雲市教育委員会により2度の発掘調査が行われ、以下の報告書が刊行されている。

(第1次調査)

『下古志遺跡 一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、2001

『下古志遺跡—考察編—』出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集、2002

(第2次調査)

『古志本郷遺跡 下古志遺跡 平成11年度古志遺跡群範囲確認調査報告書』、2002

## 【調査組織】

平成 22 年度（下古志遺跡調査）

〈事務局〉川原和人（埋蔵文化財調査センター所長）、山根雅之（総務グループ課長）、今岡一三（調査第 4 グループ課長）

〈調査担当者〉大庭俊次（調査第 4 グループ主幹）、中川 寧（同企画員）

〈調査補助員〉田中玲子、松山智弘、岩橋康子、渡部桂司

平成 23 年度（報告書作成）

〈事務局〉川原和人（埋蔵文化財調査センター所長）、三島 伸（総務グループ課長）、熱田貴保（調査第 3 グループ課長）

〈調査担当者〉大庭俊次（調査第 3 グループ主幹）、中川 寧（同企画員）

〈調査補助員〉田中玲子、福田沙織

調査に際しては、国土座標の X=-72,940、Y=51550 を原点に、第 3 図のように東へ向けて A～V、南へ向けて 1～21 の 10 m グリッドを設定して、このグリッドに基づいて遺構の位置表示や遺物の取り上げを行った。遺構の実測および遺物の取り上げについては、(株)コンピュータ・システムの遺跡調査システム「SITE5」を使用した。整理作業に際して、遺構・遺物のトレースや加工は Adobe 社製 Illustrator、Adobe 社製 Photoshop を用いて行った。原稿執筆、編集作業は Adobe 社製 InDesign で行った。調査の経過については、それぞれの調査区ごとに記述する。

## 第2章 下古志遺跡の位置と歴史的環境

本報告書に掲載した下古志遺跡は、島根県出雲市下古志町に所在し、出雲平野の南端、神戸川左岸の自然堤防上に位置している。神戸川は『出雲国風土記』に「神門川」という名で記されており、中国山地の飯石郡飯南町に源を発して中国山地を北流し、出雲市を通過して日本海へ注ぐ、全長約82kmの川である。出雲平野は南北約8km、東西約20kmの沖積平野である。約7,000年前のいわゆる「縄文海進」とその後の海退によってできた場所に、約3,600年前の三瓶山の噴火による噴出物が堆積したことにより平野の形成が始まったと考えられる。江戸時代に至り、中国山地におけるたたら製鉄に伴う「鉄穴流し」や斐伊川東流による土砂の流入により、現在の地形が完成したと考えられる。

出雲市には約900ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、国史跡である西谷墳墓群や今市大念寺古墳など、有名な遺跡・古墳も多い。

### 旧石器時代・縄文時代

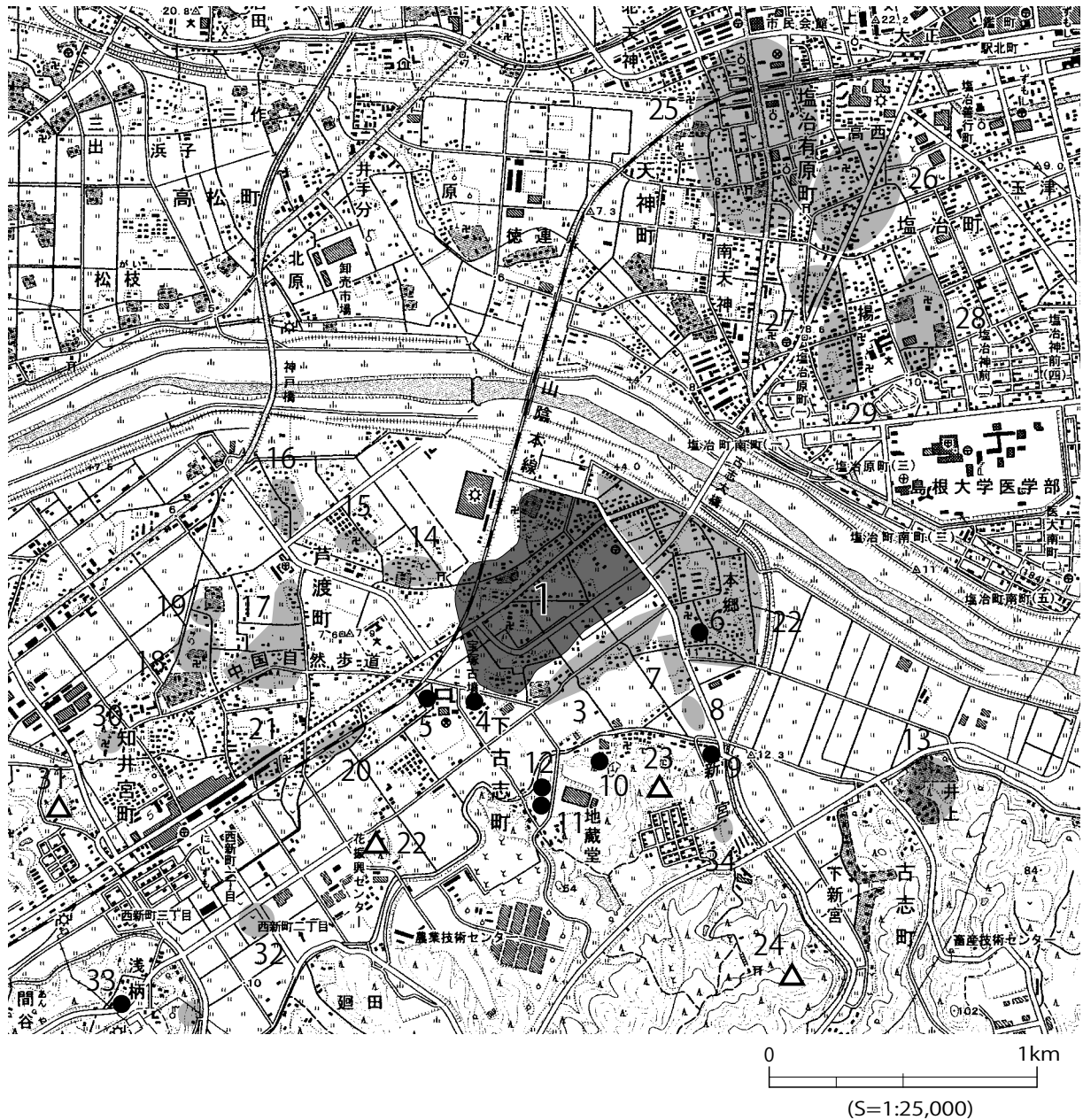
旧石器時代の遺跡として、畑ノ前遺跡（船津町）がある。畑ノ前遺跡では黒曜石製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代では、菱根遺跡（大社町）で、この地域では最も古い早期末の土器が出土している。後期には三田谷Ⅰ遺跡（上塩冶町）で丸木舟が見つかったほか、約3,600年前の三瓶山の噴出物による土石流によって形成された埋没林が確認されている。三田谷Ⅰ遺跡では晩期の土器も多数見つかり、三波川変成帯を起源とする可能性の強い砂泥質片岩製の石棒が見つかった。その他晩期の遺跡では、人面付土器が見つかった築山遺跡（上塩冶町）がある。

### 弥生時代

弥生時代の遺跡としては、原山遺跡（大社町）が弥生前期の遺跡として古くから知られていたが、新内藤川の改修工事に伴って調査された矢野遺跡（矢野町）からは、この地域で最も古い弥生土器が、石器や木製品を伴って出土した。これによって、出雲平野で最初に農耕を行った人々の使った道具が明確になった。その他、弥生前期の遺跡としては前述の三田谷Ⅰ遺跡や保知石遺跡（芦渡町）などがある。弥生中期には下古志遺跡の第1次調査において溝や竪穴住居が見つかったほか、隣接する古志本郷遺跡や田畑遺跡（下古志町）、知井宮多聞院遺跡（知井宮町）でも遺跡が築かれている。この時期の集落遺跡は、自然堤防上や平野内の微高地に築かれていたことがうかがわれるが、青木遺跡（東林木町）や中野美保遺跡（中野町）では四隅突出形墳丘墓や貼石墓といった中国山地と関連のある墓制が築かれており、広域な交流を背景にした区画墓の出現をうかがうことができる。弥生後期になると下古志遺跡や古志本郷遺跡の規模は大きくなり、矢野遺跡や三田谷Ⅰ遺跡など弥生中期に遺跡が築かれていた場所に加えて、長廻遺跡（大津町）のように丘陵斜面にも居住を拡大している。また、下古志遺跡や山持遺跡（西林木町）などで布掘建物も築かれており、視覚的な変化が集落内に表れていることを示す。この時期の墓制は西谷墳墓群に代表され、一辺が40mを越えるような大規模な四隅突出形墳丘墓が築かれる。平野内の微高地や自然堤防上にも青木遺跡や中野美保遺跡でやや小規模の四隅突出形墳丘墓が築かれている。

弥生後期末から古墳前期にかけて、出雲平野の複数の遺跡で築かれた溝に大量の土器が廃棄され



- 1 下古志遺跡
- 2 古志本郷遺跡 3 田畑遺跡 4 宝塚古墳 5 天神原古墳 6 大梶古墳 7 思案橋北遺跡 8 古志遺跡
- 9 放レ山古墳 10 妙蓮寺山古墳 11 地藏山横穴墓群 12 地藏山北横穴墓群 13 井上横穴墓群
- 14 下古志天満宮付近遺跡 15 阿弥陀寺西遺跡 16 極楽寺付近遺跡 17 東原遺跡 18 知井宮多間院遺跡 19 多間院北遺跡 20 芦渡遺跡 21 嘉儀遺跡 22 比布智館跡 23 浄土寺山城跡 24 栗栖城跡
- 25 天神遺跡 26 高西遺跡 27 弓原遺跡 28 神門寺境内廃寺 29 塩冶小学校付近遺跡 30 観知寺付近遺跡 31 智伊館跡 32 浅柄遺跡 33 間谷古墳 34 宇賀池堤跡

第4図 下古志遺跡の位置と周辺の遺跡

たかのように出土する。下古志遺跡や古志本郷遺跡のほか、山持遺跡や天神遺跡（天神町）、小山遺跡（小山町）でも確認されている。また、中野清水遺跡（中野町）でも集落の端と考えられる地点から大量の土器が出土しており、出雲平野における共通の『習俗』の存在をうかがうことができる。

#### 古墳時代

古墳時代の遺跡は、弥生時代から継続して築かれる古志本郷遺跡や山持遺跡や、古墳時代になって築かれる井原遺跡（松寄下町）や九景川遺跡（東神西町）などがあるが、弥生時代に比べて遺跡の規模は小さいようである。このことは古墳前期の出雲平野に大規模な古墳ではなく、山地古墳（神西沖町）や大寺1号墳（東林木町）などの直径約20m～全長約50mの古墳が築かれていることと関連があるのかもしれない。一方古墳後期には今市大念寺古墳（今市町）や上塩冶築山古墳（上塩冶町）などの出雲を代表するような古墳が築かれるほか、上塩冶横穴墓群（上塩冶町）や井上横穴墓群（古志町）、神門横穴墓群（神西沖町）などの大規模な横穴墓群が築かれる。下古志遺跡の周辺でも、精美な横穴式石室を持つ宝塚古墳や妙蓮寺山古墳、深田谷横穴墓群などの古墳・横穴が築かれる。

#### 奈良・平安時代

『出雲国風土記』によると、下古志遺跡のあるこの地域は神門郡古志郷にあたと考えられる。古志本郷遺跡G区では規格的に配置された大型の掘立柱建物が確認され、神門郡家に比定されている。また、天神遺跡や三田谷I遺跡、古志遺跡（古志町）からも官衙に関連する遺構・遺物が見つかっている。寺院跡としては神門寺境内廃寺（塩冶町）や長者原廃寺（上塩冶町）があるほか、『出雲国風土記』では古志郷内に新造院が築かれていることが記されている。

#### 鎌倉・室町・戦国時代

居館跡として蔵小路西遺跡（渡橋町）を挙げることができる。また、築山遺跡では、居館と考えられる方形の区割りが想定されている。蔵小路西遺跡では朝山氏、築山遺跡では塩冶氏との関係が指摘されている。他に集落遺跡として、渡橋沖遺跡（渡橋町）や白枝本郷遺跡（白枝町）、余小路遺跡（松寄下町）がある。

生業に関しては、上長浜貝塚（西園町）や九景川遺跡では貝塚が築かれている。特に上長浜貝塚では多数の漁撈具が出土しており、神門水海における漁撈活動をうかがうことができる。

城館として、浄土寺山城、栗栖城跡、比布智館跡、智伊館跡などがある。このうち、浄土寺山城や栗栖城跡はこの地に居住した古志氏の居城と考えられている。

#### 【参考文献】

島根県教育委員会 1980 『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財発掘調査報告』

島根県教育委員会 2008 『九景川遺跡』

出雲市教育委員会 2009 『築山遺跡Ⅲ』





写真1 現地説明会1



写真2 現地説明会2

11月13日の現地説明会には、約100名の参加者があり、熱心に出土遺物を見学したり、調査員の説明に耳を傾けていた。

## 第3章 1区の調査

下古志遺跡のうち、調査対象地の北側を「下古志遺跡1区」として調査を行った。調査対象面積は1,400㎡である。現況（調査前）の標高は、9.0mから9.5m。調査区内においては、おおむね東から西、あるいは南から西に向かってしだいに低くなっている。近年までの土地利用状況は、水田（1区-1）、畑地（1区-2、1区-3）、宅地（1区-2）、店舗駐車場（1区-3）など様々である。現地表から60cm～1.4m掘削した部分から遺構が検出され始める。そこまでは水田や畑作の耕土の堆積（遺物包含層でもある）、あるいは住宅基礎などの地下構造物があった。また、耕土の下では牛馬耕の馬の足跡が多く見られた。

調査の結果、弥生時代中期から近世に至るまでの遺構が検出されたが、その内容は、弥生時代後期及び中世から近世初頭の遺構がほとんどで、弥生時代中期Ⅱ様式以前及び奈良時代、平安時代の遺構は皆無であった。

### 第1節 調査の方法

1区を5分割して各調査区を設定した。グリッドは2区と共通して設定した。各調査区では、重機や人力で遺物包含層まで表土掘削した後、遺物包含層を層順に従って人力で掘削し、掘り下げて遺構の有無を精査した。検出した遺構や遺物の出土状況をデジタル測量し、また、図面、写真にも記録した。遺構に伴わない遺物は、グリッドごとに取り上げた。取り上げた土器は水洗注記して、分類整理し、必要なものは個別に図面写真の記録をとって本報告書に掲載した。

1区では、恒久構造物と工事行程の影響から、細切れに5分割して調査せざるを得なかった。特に、平成21年度調査区は、本事業の県道工事により改築することになった民家に沿った側溝の工事に伴って狭小な調査区を設定せざるを得なかった。

以下に調査経過を記す。

#### 1区-1

5月26日 調査開始 人力表土掘削  
6月8日 耕土3-3層まで掘削  
6月11日 遺構検出  
6月23日 遺構掘削  
7月5日 SK101 拡張掘削検出 SK102 検出  
7月12日～21日 SK102 土器取り上げ実測  
7月14日 埋文センターによる完了検査  
7月21日 調査終了 1区-1のみ島根県土木部に引き渡し

#### 1区-3西

7月9日 調査開始 人力表土掘削  
7月22日 2層まで掘削  
7月26日 遺構検出  
7月28日 遺構掘削  
7月30日 SK106 中世墓検出  
8月9日 調査指導 文化財課石見银山室 守岡正司氏  
8月11日 調査終了

#### 1区-3東

7月22日 調査工程調整会議（埋文センター、山陰住販㈱、工事請負業者）  
8月2日～3日 表土掘削（重機）開始  
8月11日～23日 耕土（2層まで）掘削  
8月19日 遺構検出  
8月26日 SE111、SE112 検出  
10月6日 埋文センターによる完了検査  
10月8日 調査終了  
10月13日 埋戻完了 店舗前路面高復元

#### 1区-3残部

11月30日	調査開始
12月22日	調査終了
1区-2	
8月23日	住宅基礎撤去
8月31日	西半部表土掘削完了
9月3日	調査開始
9月9日	耕土(2層まで)人力掘削
9月10日	土器溜り1 中世土師器出土
10月15日	SD141、SB101、SE101、SD156 他 調査区南西端遺構群検出
10月20日	各遺構検出
10月26日	埋文センター発掘技術指導 中間協議
11月1日	調査指導 島根県文化財保護審議会委員 田中義昭氏
11月13日	現地説明会
11月17日	東半部表土掘削完了
11月18日	東半部耕土(2層まで)人力掘削
11月19日	埋文センター発掘技術指導 中間協議 耕土(4層まで)人力掘削
12月21日	SB106 検出
1月5日	SK169 弥生時代中期土坑墓完屈 SB108、SE109 完屈
1月6日	SE103 検出 Pit1170 土器埋納土坑完屈
1月7日	調査指導 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所都城発掘調査部長 深沢芳樹氏
1月11日	SE108 検出
1月12日	SB107 弥生土器(高坏)出土(SB106 出土高坏と接合)
1月13日	調査指導 出雲市立弥生の森博物館長 渡邊貞幸氏
1月18日	空撮 SE105 完屈
1月19日	SK154 中世土坑墓完掘
1月20日	埋文センターによる完了検査
1月21日	空撮再撮影 1区を島根県土木部に引き渡し

## 第2節 1区-1の調査

### 1区-1 調査の概要

層序でも触れるが、1区-1で造成土や表土を除去すると2層の耕土層があり、この耕土層を掘りきると、ほとんどレベル差なく弥生時代後期後半～終末期の遺構と、中世以降の遺構が検出される。この二時期の遺構がほとんどレベル差なく検出される傾向は、1区の各小調査区すべてに当てはまる。

1区-1で検出された主な遺構としては、まず、弥生時代後期後半～終末期の土器埋納土坑(SK102)が挙げられる。この土坑からは、弥生時代後期後半～終末期の土器(甕壺類、注口土器、鼓形器台)が一括して出土している。また、弥生時代後期後半～終末期の掘立柱建物跡が2棟(SB101及びSB102)が検出された。いずれも1間×2間、柱間距離3.3mの大型の掘立柱建物跡を想定している。このうちSB101の域内には、ほぼ完形品の弥生土器の甕が逆さに埋められた状態で出土したPit1012が検出された。そのほか、弥生時代後期後半～終末期の溝跡、ピット、中世土師器の破片が出土する溝跡、近世以降の柵列、土坑などが検出されている。

弥生時代後期後半～終末期の溝跡は、1区-1調査区内においては、すべて東西方向に直線的に延びており、幅20～40cm、深さ15～25cm前後と多少の差はあるがほぼ同程度の規模である。SD108については2重に掘られており、他の溝跡よりも幅広になっている。後述する弥生時代後期後半～終末期の建物跡とは、軸方位は必ずしも一致しない。

中世土師器の破片が出土する溝跡は、南北方向に延びるもので弥生時代後期後半～終末期のものと対照的である。

近世以降の遺構と考えられる柵列と、SK101土坑が検出された。土坑からは近世以降の陶器が出土した。

このように、1区-1では弥生時代後期後半～終末期にかけてと中世の溝跡、ピット、近世以降

の遺柵列や土坑が検出された。そのほかの時代の遺構は検出されなかった。

## 1 区 -1 の層序

造成土や表土を除去すると3層からなる40cm程度の耕土層があり、この耕土層を掘りきると、標高7.5m程度でほとんどレベル差なく弥生時代後期後半～終末期の遺構と、中世以降の遺構が検出される。この2時期の遺構がほとんどレベル差なく検出される傾向は1区の各小調査区すべてに当てはまる傾向である。

## 1 区 -1 弥生時代の遺構と遺物

### SK102 (第8～9図)

SK102は調査区の南端で検出された土坑である。SK102からは、弥生時代後期後半～終末期の土器(甕壺類、注口土器、鼓形器台)が一括して出土している。周囲に組み合う遺構はなく、調査区内においては単独の遺構である。掘り上がりの土坑は、幅90cm、長さ1.1m、深さ45cmを測る。この土坑内に甕6、壺1、注口土器1、鼓形器台3の計11個体分が、割れたものも含めてある程度整然と埋納されていた。甕、壺の中には一部完形品に組み上がらないものもある。壺8は口縁がなく、約半個体分、甕4は、口縁の破片のみであった。

SK102から出土した1～11の土器は、草田3～4期の弥生時代後期後半～終末期の土器と思われる。1～4、6、7は甕、5は注口土器、8は壺、9～11は鼓形器台である。5は把手がつかず注口が先細るタイプの注口土器で、多条平行線文と貝殻による刺突文を交互に巡らす。6は、口縁部に擬凹線はないが、形態は草田3期の特徴を残し、器壁も厚く、底部が凸状になっている。施文も整ったものでなく外面調整にミガキを多用することから、草田4期の粗製品と思われる。後述する1区-2SD141N8グリッド2-2層出土の粗製品69等との共通点がある。1～3、5～6、8～11は粗製品で甕の底部は凸状に突き出ている。7は小型羽状文の下に、平行線文を巡らす。SK102出土土器の中でただ一つの精製品である。鼓形器台は扁平な器形になっておらず草田4期の特徴を有している。

弥生時代後期後半～終末期の土器が出土したSK102は、その土器出土状況から単なる廃棄土坑とは考えにくく、何かの祭祀的意味があるものと考えられる。後述する1区-2のSD141直行溝から出土した土器群にも粗製品、精製品の混在が見られ、土器の時期にも共通性が見られる。

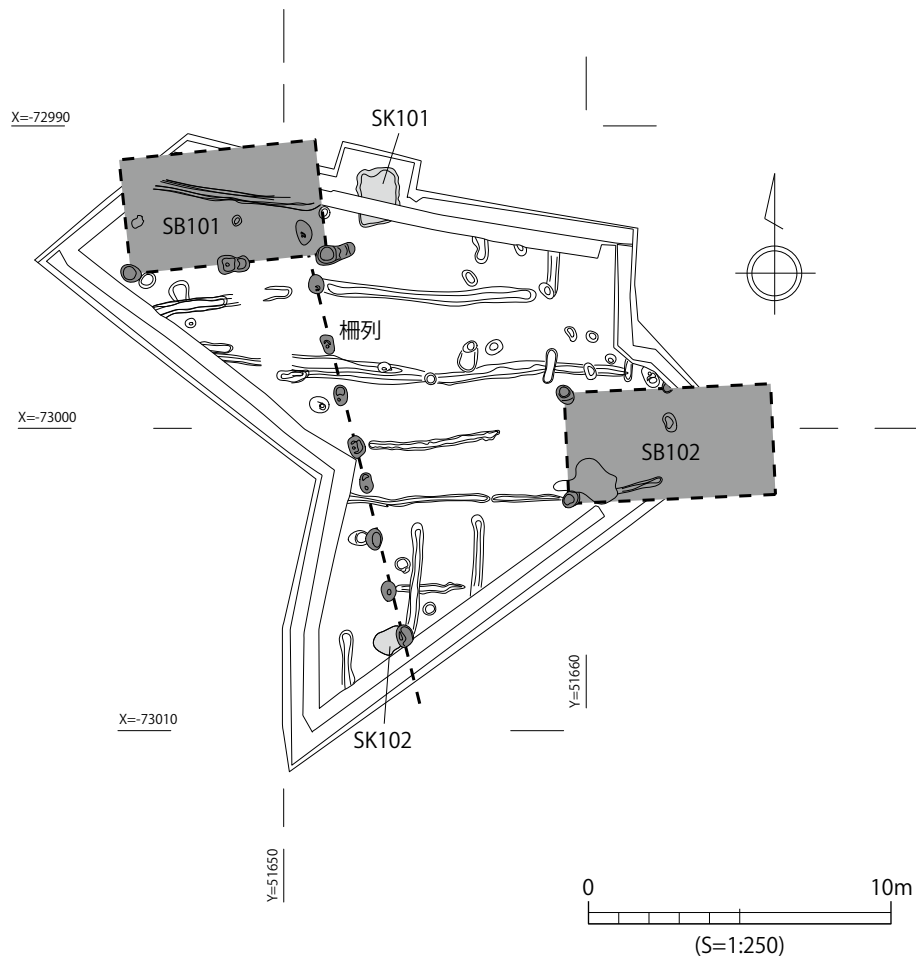
### SB101・Pit1012 (第10～12図)

SB101は調査区内の北西隅で検出された柱穴列とPit1012とから想定した掘立柱建物跡である。1間×2間の構造で柱間距離3.3mを測る比較的大形のものを想定した。Pit1016には14の柱根が残っていた。礎板の可能性も考えられる。また、Pit1016からは12の草田3期の土器の破片が出土している。13の低脚坏はPit1053から出土している。

Pit1012からは、第12図に挙げた、間隔のせまい波状文と多条平行線文を巡らす草田4期の特徴を持つ甕(15)が逆さまに埋められた状態で出土した(第11図)。出土状況をみると、底部の破片をピットの深さのちょうど中間あたりに横に敷いたその上に、上半部を逆さまにうつ伏せている。逆さまに埋められた口縁はほとんど水平を保っている。このような埋甕15の出土状況から、Pit1012には何かの祭祀的意味があると思われる。



第5図 下古志遺跡1区調査区配置図



第6図 1区-1遺構配置図

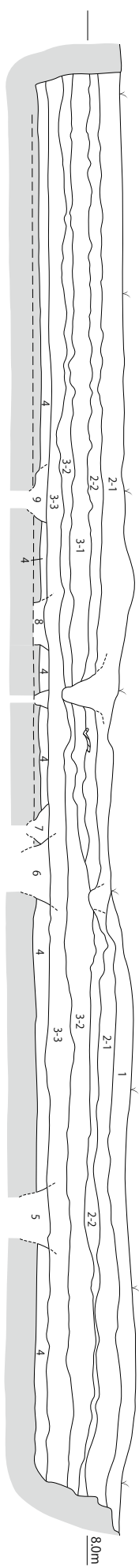
**SB102** (第13図)

SB102は調査区の南東端で検出された柱穴群から想定される掘立柱建物跡である。これもSB101同様に1間×2間の構造で柱間距離3.3mを測る比較的大形のものを想定した。Pit1032から、草田3～4期の特徴を持つ弥生土器の破片が出土している。棟軸方位もほぼ合致しておりSB101とSB102は共存していた可能性も考えられる。また、このような大形の掘立柱建物跡は1区-2でも1区-3でも市1次調査でも検出されていないので、特殊な機能を持っていた可能性が考えられる。

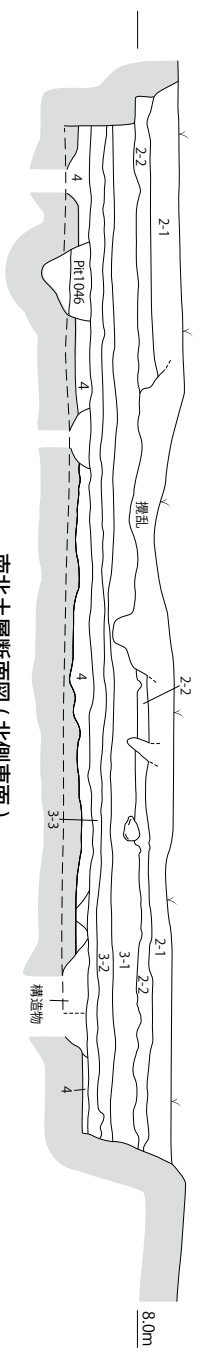
1区-1では第14図に挙げた弥生時代後期後半～終末期の土器が出土している。

**SK101** (第15図)

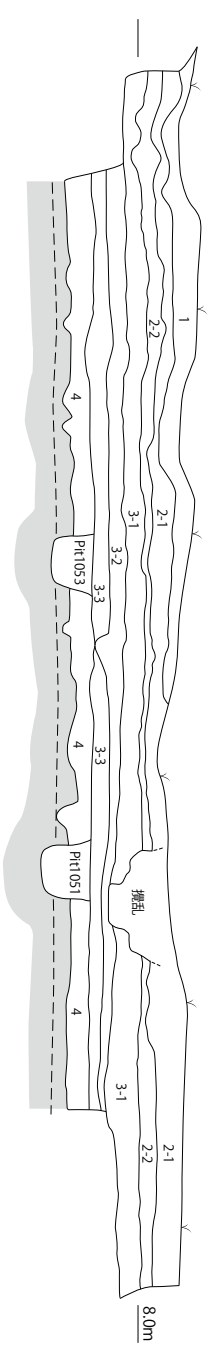
調査区の北辺、県道沿いの中央部分で近世陶器が出土するSK101を検出した。当初設定していた調査区の北端で遺物が検出されたため、一部調査区を北側に拡張して発掘調査した。平面形及び断面形ともほぼ四角形で、幅0.9m長さ1.85m、深さは0.5mを測る。近世以降のものと思われる陶器が出土している。水平に堆積する土層の状況と土坑の形容から、墓坑とは考えにくい。現況では、レベル的に、そこまで達していないかもしれないが、若干湧水する状況があるので水利関係の遺構かもしれない。



東西土層 6line 断面図 (北面)

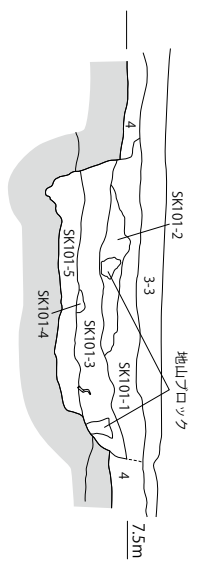


南北土層断面図 (北側東面)



南北土層断面図 (南側東面)

1. 造成土
2. 表土
  - 2-1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 砂非常に多く混じり、粒子に均一性欠く。粘着性なし
  - 2-2 黒褐色土 (10YR3/1) 2-1に比し大砂の粒子少なく、粘着性あり
3. 水田耕土
  - 3-1 黒褐色土 (2.5Y3/2) 粘土を主体にやや荒い砂が混じる。粘着性強い
  - 3-2 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1) 礫・砂をあまり含まない細かい粘土
  - 3-3 黒褐色粘質土 (10YR2/2) 礫・砂をあまり含まない均一な粘土。生痕多数
4. 黒褐色土 (10YR3/2) 地山の土壌化したような層。砂が混じる。
5. 黒褐色土 (2.5Y3/1)
6. 黒褐色土 (10YR3/2)
7. 暗オリーブ褐色土 (10YR3/4)
8. 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3)
9. 黒褐色土 (10YR3/1)

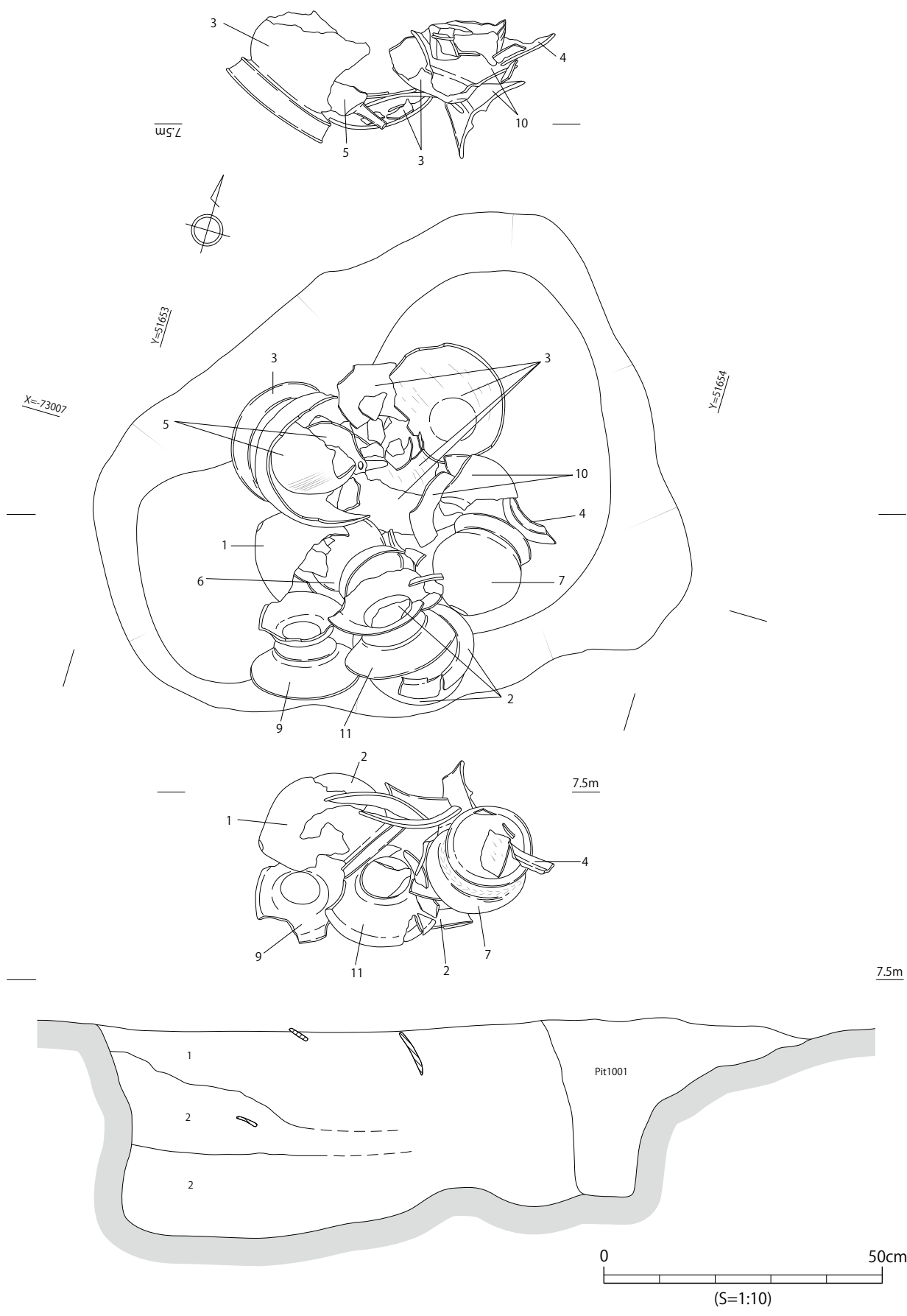


SK101 を含む調査区北端東西土層断面図

- SK101
1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘着性弱い
  2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) いくつかの土がブロック状に混在
  3. 黒褐色粘質土 (10YR2/2)
  4. オリーブ褐色粘土 (2.5Y4/3) 地山のシルトが酸化?
  5. 黒色粘質土 (7.5YR2/1) 粘着性強い



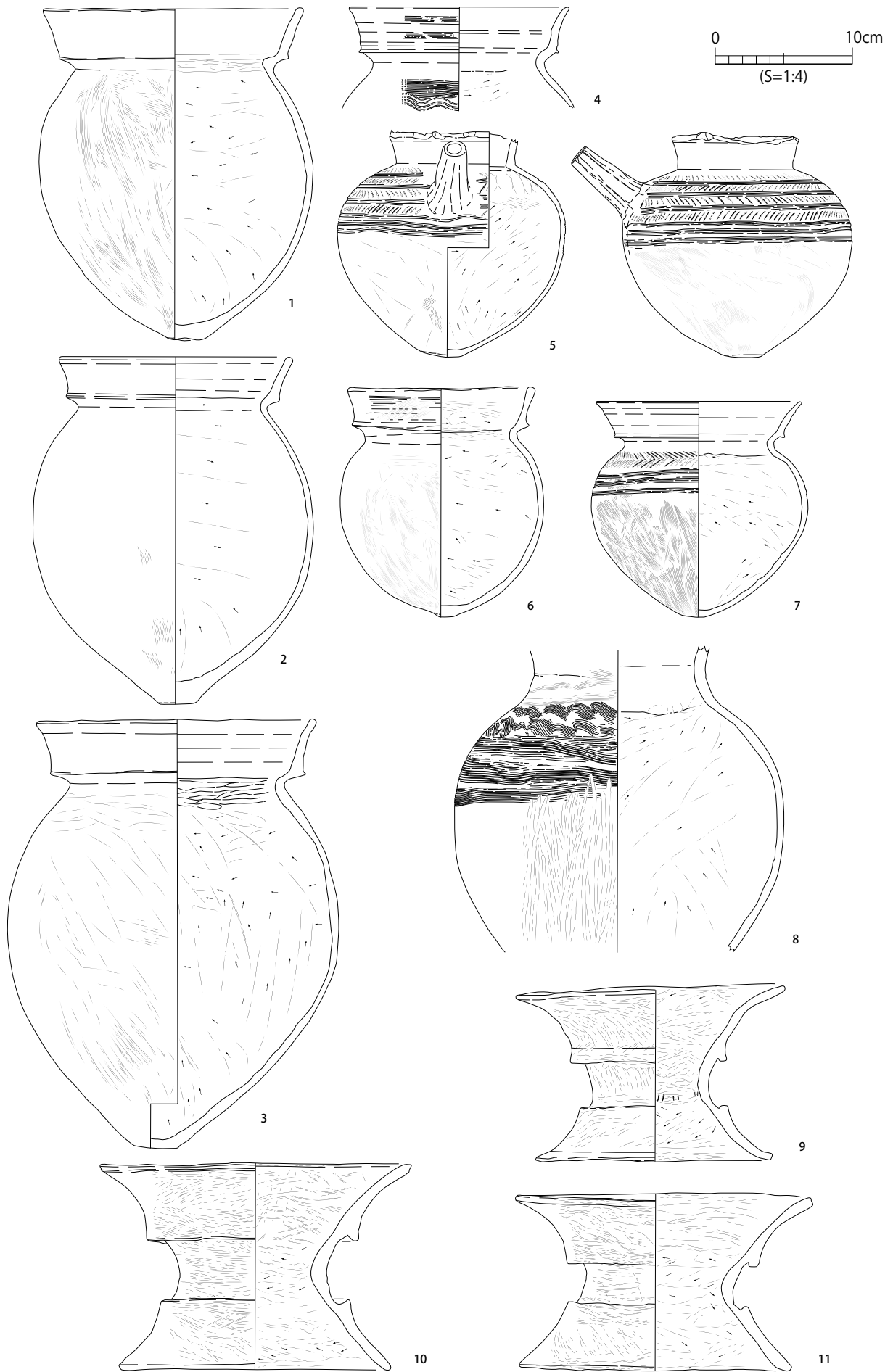
第7図 1区-1調査区土層実測図



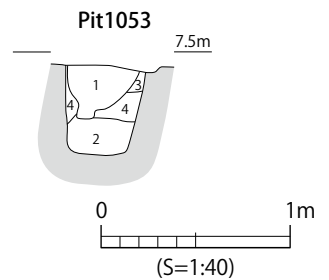
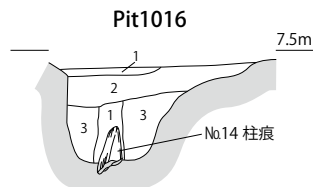
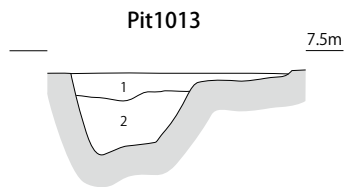
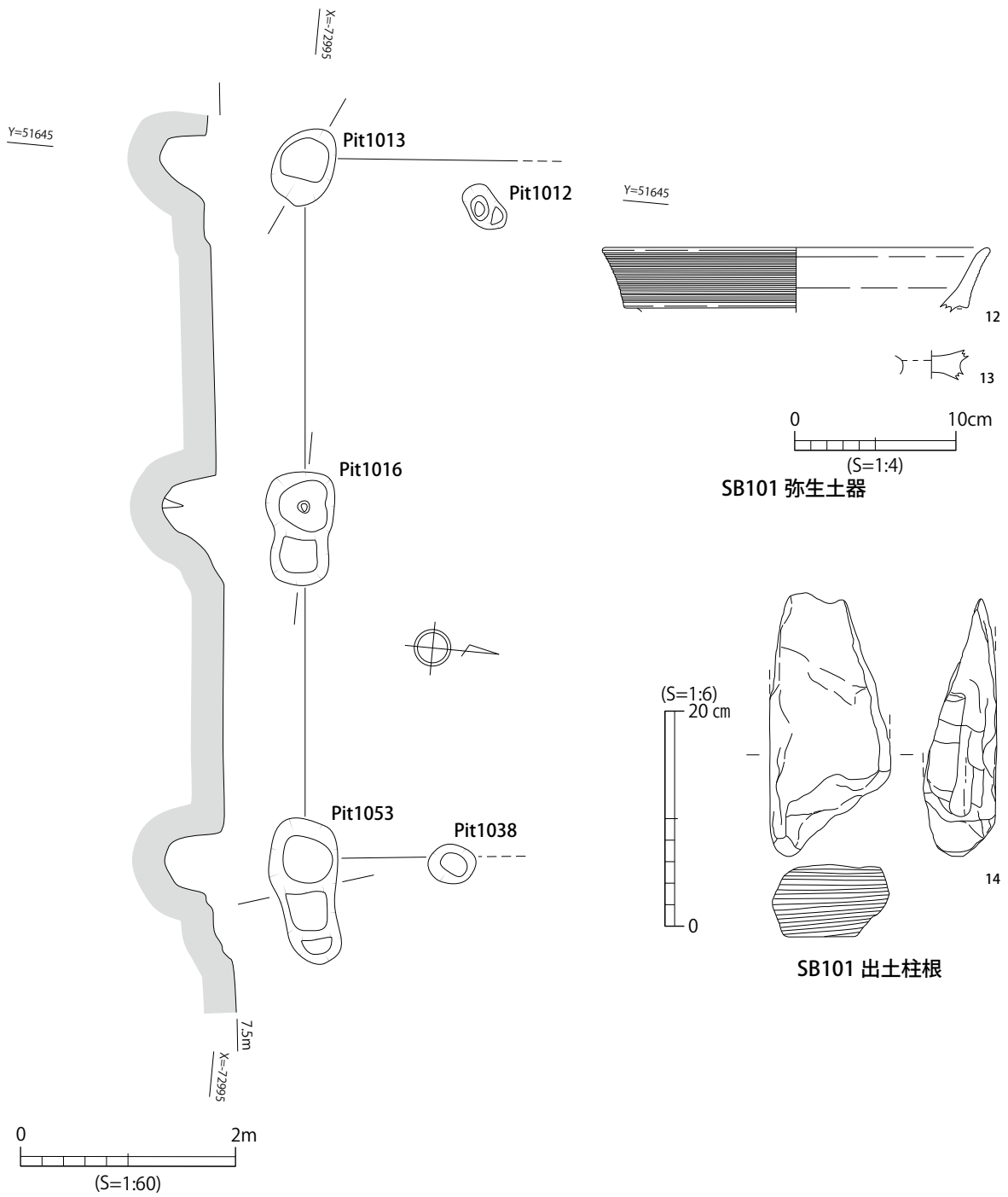
SK102  
 1. 黒褐色粘質土 (2.5Y3/1) 砂混じらない  
 2. 黒褐色粘質土 (2.5Y3/2) 砂がブロック状に多く入る  
 3. 黒褐色粘質土 (2.5Y3/1) 均一な粘土

第8図 SK102 実測図





第 9 图 SK102 弥生土器实测图

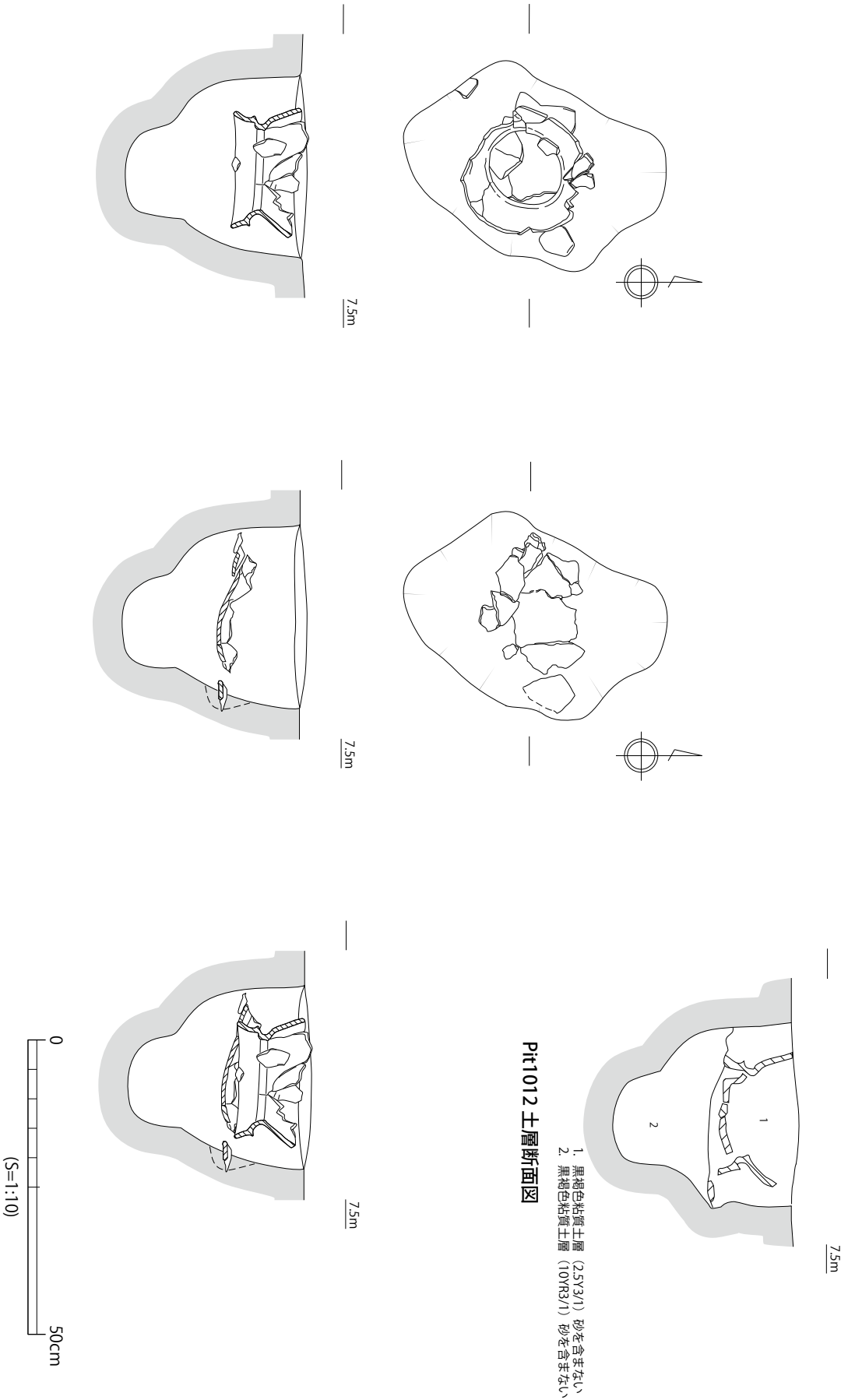


Pit1013  
 1. 灰黄褐色 (10YR4/2)  
 砂の粒子あり。1cm 程度の炭化物含む  
 2. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2)  
 黄色の粘土ブロックを所々含む

Pit1016  
 1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)  
 有機質が腐食し、泥化したような土。  
 柱痕の痕跡

Pit1053  
 1. 黒褐色土 (10YR2/2)  
 2. 褐灰色砂層 (10YR6/1)  
 3. 暗褐色砂層 (10YR3/3)  
 4. 褐色砂層 (10YR4/4)

第 10 図 SB101 遺構・遺物実測図



第 11 図 Pit1012 土器出土状況実測図

## 小結

### 掘立柱建物跡について

1区-1で設定した弥生時代の後期後半から終末期の掘立柱建物跡SB101及びSB102は、柱間3.3mと1間×2間の建物としては比較的大きな規模であるが、調査区外に組み合う柱穴群が存在する可能性がある。建物の規模が大きいことと、周囲の調査区からこのような大形の建物跡が検出されていないことから、何かの特殊な機能を担っていた可能性が考えられる。

### 土器埋納土坑について

1区-1で検出されたSK102は、弥生時代後期後半～終末期にかけての粗製土器を含む土器埋納土坑である。接合しきれない破片もあるが、完形品を多く含み、坑内に密集していた。ある程度整然と並べられている形跡もあるので、廃棄とは考え難い。何かの祭祀的意味があるものと考えられる。調査区の端で検出されたこともあり、SB102以外、周囲に関連があると考えられる遺構は全く見当たらない。しかし、土坑内から多く出土した弥生後期土器の粗製品は、後述する1区-2のSD141直行溝からも相当数出土しており、遺物の時期や内容に共通性があると考えられる。

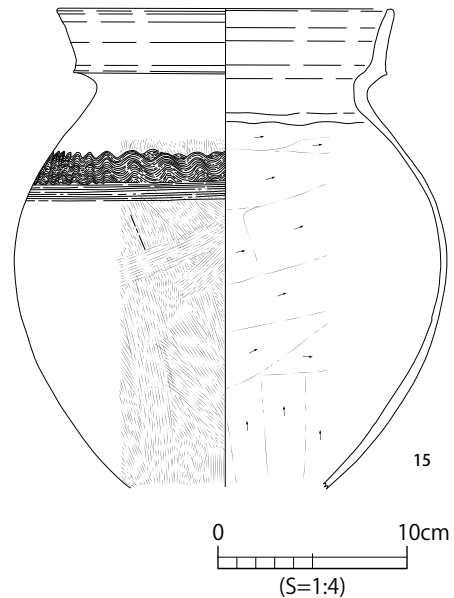
### 出雲市1次調査との関連について

なお、1区-1は、出雲市1次調査のB区に隣接しているが、両者の間で、直接あるいは間接にでも関連があると考えられる遺構は検出されていない。後述する1区-2は、やはり市1次調査B区と隣接しているが、こちらの方は、B区SB06布掘建物跡と1区-2SB103及びSB106の布掘建物跡などがあり、検出された布掘建物跡どうしに時期差はみられるものの、布掘建物を同様の立地で、ある期間、継続的に建てられている点については、関連があると言え、集落内における土地利用と機能分担の継続性がうかがえる。

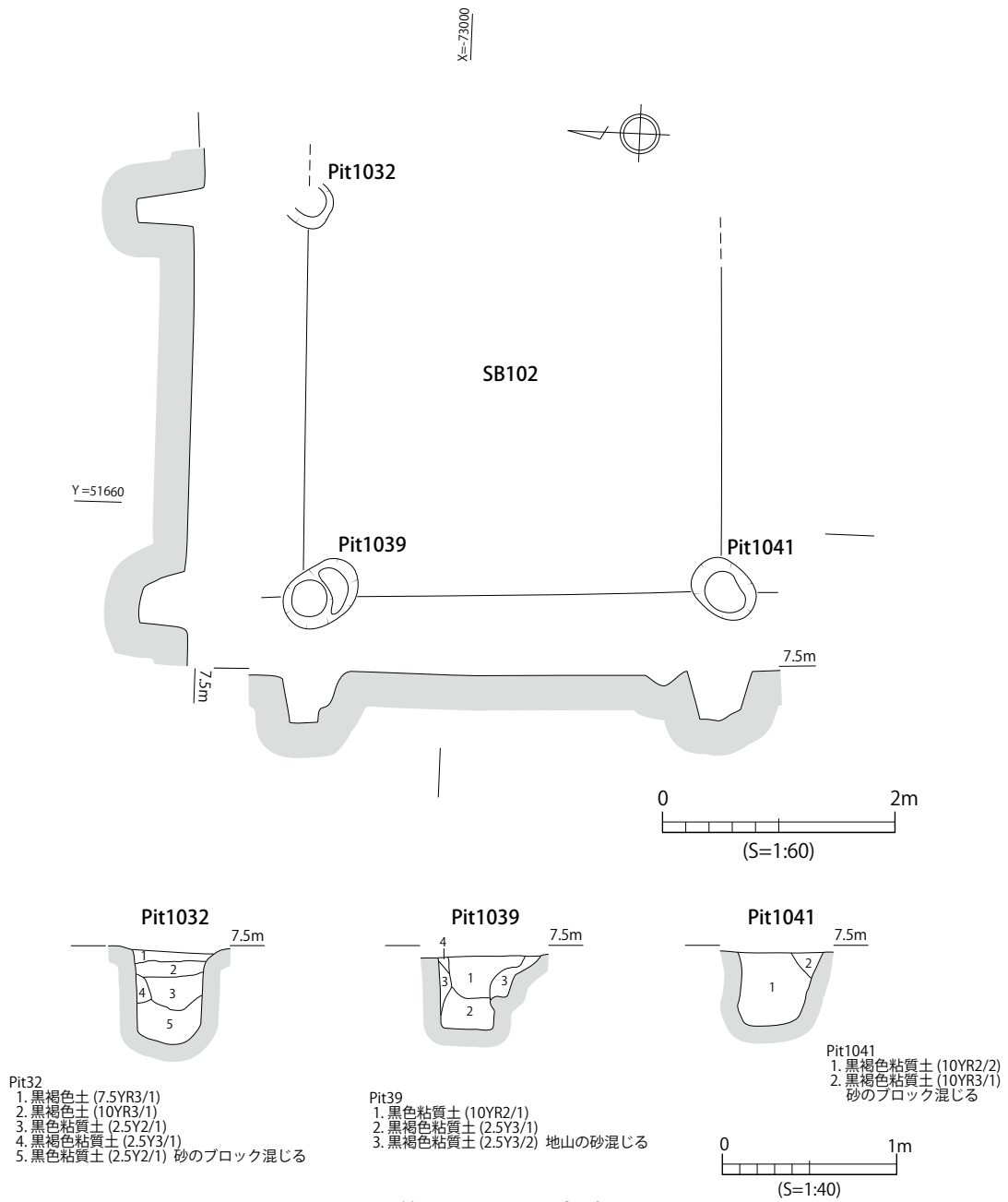
また、中世の溝跡である1区-2SD142は、出雲市1次調査B区のSD38に接続するものと見られるなど、弥生時代後期や中世に今回調査と関連のある遺構があるようだ。

### 注)

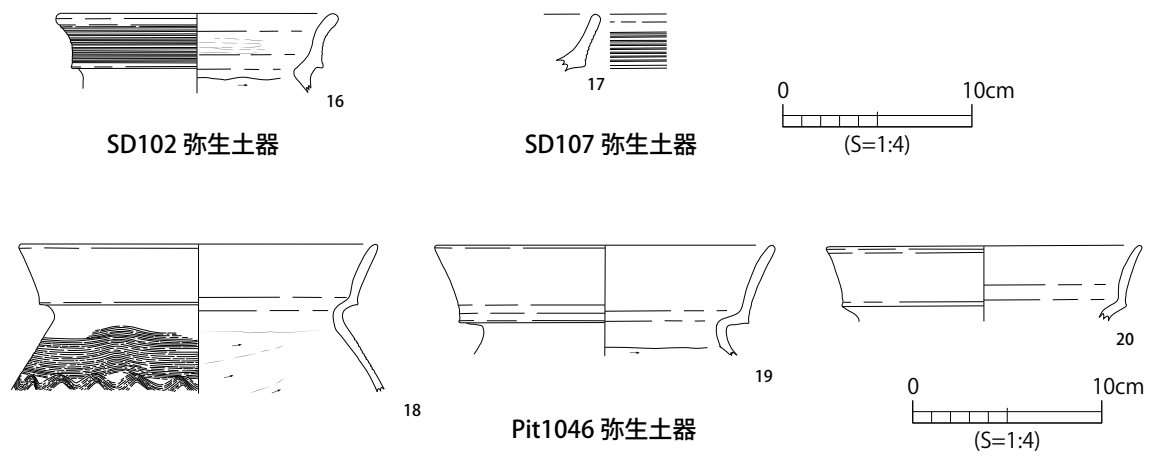
(1) 出雲市教育委員会 2002『下古志遺跡』一考察編一



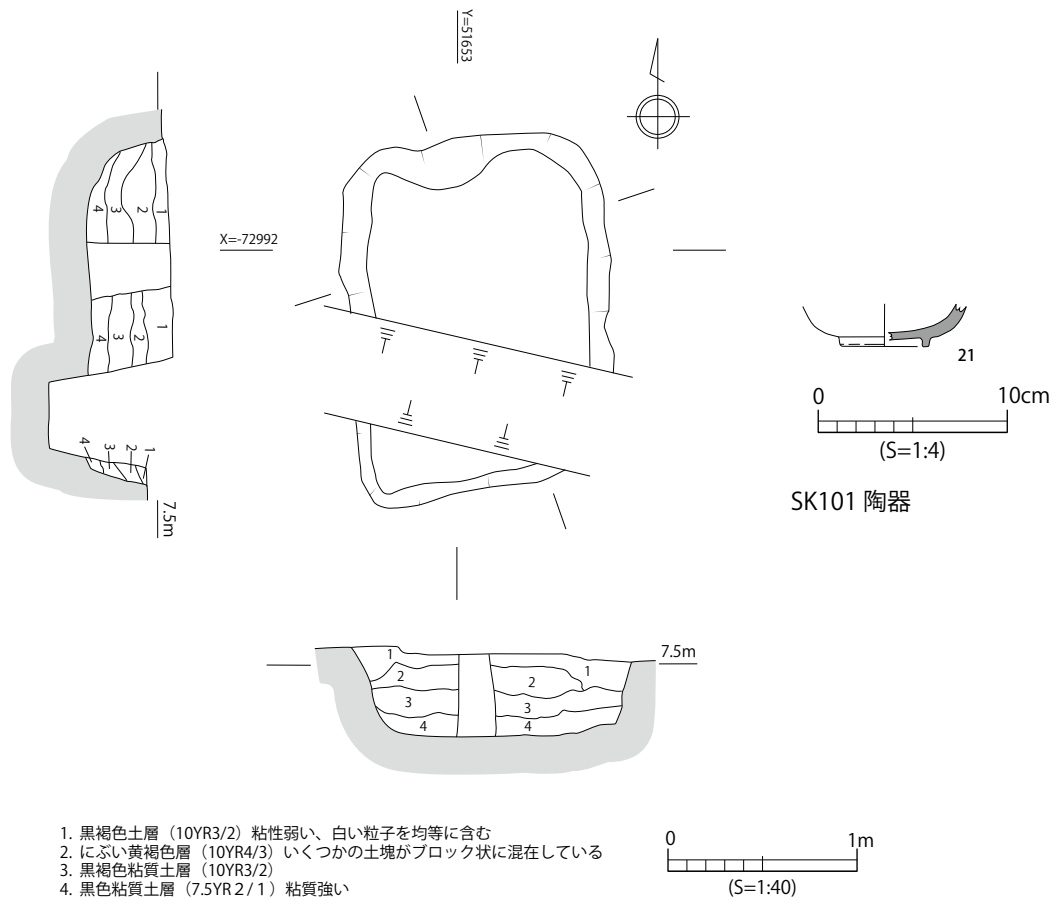
第12図 Pit1012 弥生土器実測図



第13図 SB102 実測図



第14図 1区-1 遺物実測図



第 15 図 SK101 実測図

## 第3節 1区-2の調査

### 1区-2 調査の概要

1区-2で検出された主な遺構の概要については、弥生時代中期の遺構としては、中期の土坑1基が検出されたのみであり、これが、1区の調査区内で最古の遺構である。弥生時代後期後半～終末期にかけての遺構としては、掘立柱建物跡6棟、布掘建物跡2棟、井戸跡4基、溝跡4本以上、土器廃棄土坑1基が検出された。

中世の遺構としては、井戸跡6基、土坑墓4基、土器埋納坑1基が検出された。また、中世以降のものと思われる湧水土坑が3基が検出された。

これらの遺構に伴って、弥生時代から近世にかけての金属製品、木製品、土器、土師器、須恵器、陶磁器など各種遺物が出土している。また、井戸跡からは、井戸枠に使用した建材、器材、転用材などの木材、木器が出土している。さらに、土器廃棄土坑からは、弥生時代後期後半の土器（甕壺類）が一括して出土している。また、中世の土器埋納土坑からは、3種類の法量の坏が一括して17個体出土している。その他、遺物包含層からも土器、須恵器、陶磁器などの遺物が出土しているが、古墳時代から奈良・平安時代の遺物は非常に少ない。

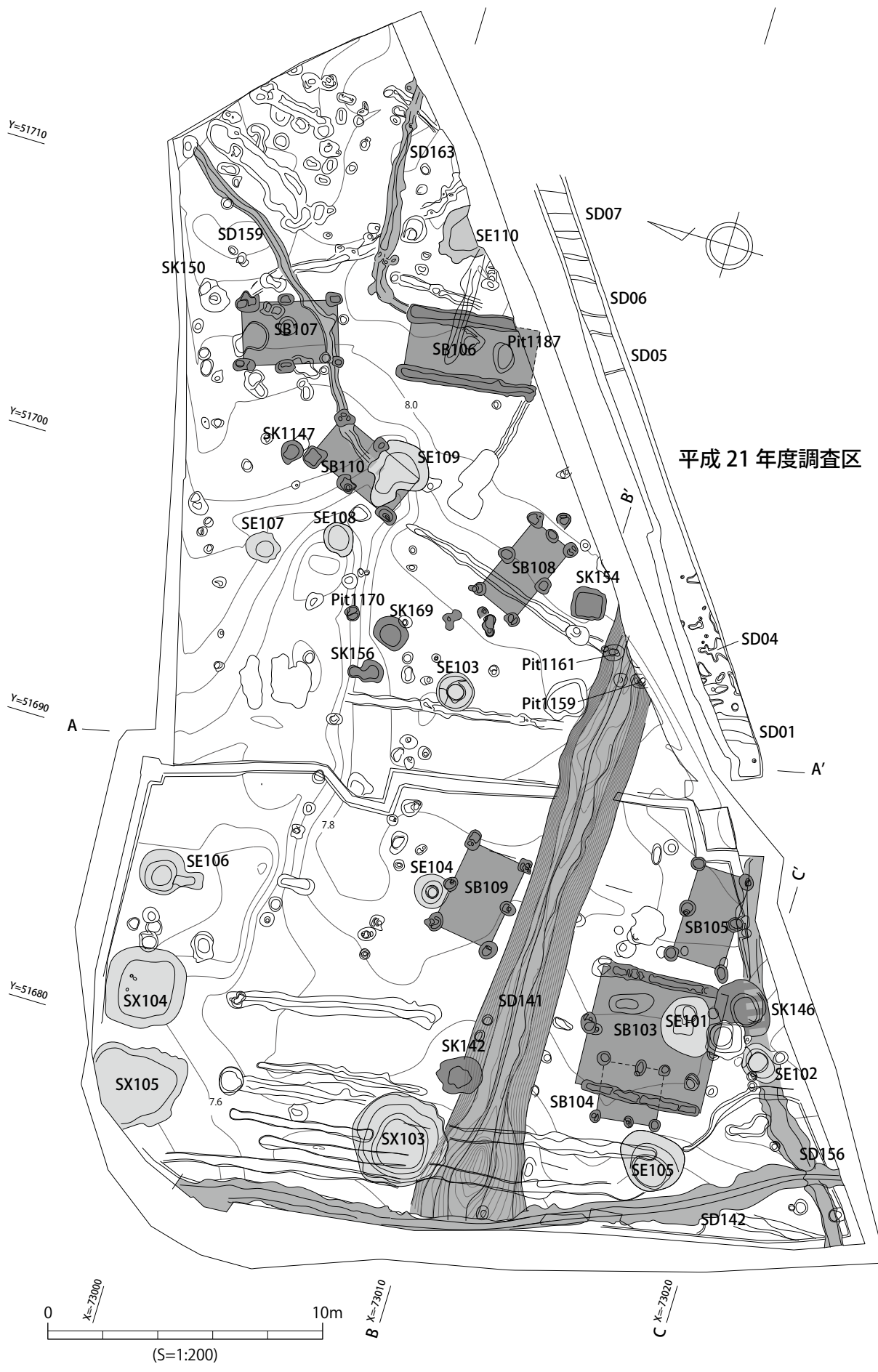
1区-2の調査では、弥生時代後期～終末期にかけての布掘建物跡と井戸跡、あるいは掘立柱建物跡と井戸跡の組合せが確認された。これらの井戸跡の中には、土層断面と丸太割り抜き木材の遺存状態から、深さ2m以上の円筒形井戸枠を持っている例があることがわかった。

1区-2で検出された溝跡SD141は、最大幅2.7m、最大深さ90cm、調査区内で確認された長さ24m（1区-4まで合わせると40m）を測り、断面逆台形であった。調査区内では、湾曲も屈曲もせず直線的に伸びており、特徴的である。また、Ⅲ系座標の東西軸にほぼ沿っていることも特徴的である。この溝跡は、最初に深く掘られているが、最終的に廃棄される時期の掘り返しは浅く、弥生時代後期～終末期の土器や炭化物が多く溜まっていた。最初に深く掘られた部分については、地形に沿う形で西に向かって排水しているようだが、後述する4層が堆積した段階で排水路としての役割は停止している。また、この溝跡の両側には、弥生時代後期後半の掘立柱建物跡や布掘建物跡が併存している様相があり、両側の建物跡の構造なり機能に顕著な差異はないと考えられる。しかしながら、溝自体が大規模で直線的であることから、遺跡内を区画するための溝と考えられる。

なお、下古志遺跡出雲市1次調査では、本報告1区-2に隣接平行してB区が、また、1区-3に隣接平行してC区の調査区が設定され調査されている。この出雲市1次調査と本報告1区-2の調査では、長駆する溝跡の対応関係、あるいは接続関係がみられた。遺構種別一覧に示したように、1区-2SD142は市1次調査B区SD38、1区-3SD132は市1次調査C区SD16、同様に1区-3SD135はC区SD05、1区-3SD140はC区SD26、1区-3SD138はC区SD21にそれぞれ接続するものと考えられる。

### 1区-2 層序

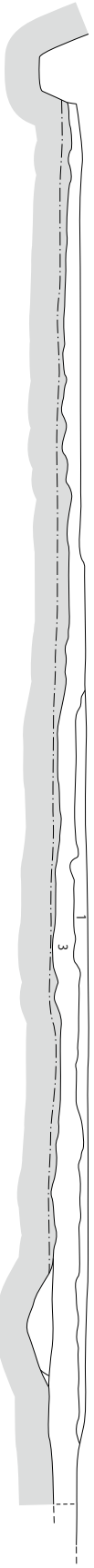
1、2層は耕土であり宅地造成前は畑地あるいは水田であったと思われる。その下には、中世及び弥生時代の遺構がほとんど高低差なく検出されるシルト質粘土の層に至る。この地山層は全体としては淘汰のよい層である。出雲市調査の下古志遺跡第1次調査のC区と同様の様相であるが遺構検出面のレベルは若干下がっている。自然地形の傾斜と合致する様相を呈しているものと思われる。



第 16 図 1 区 -2 遺構配置図

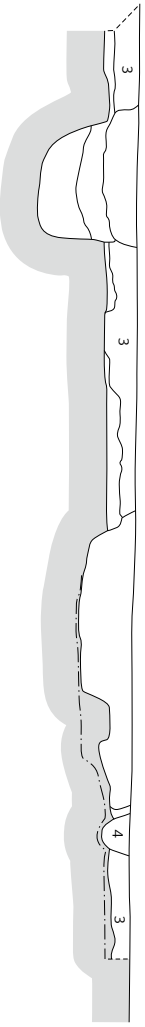


B —



7ライナー1

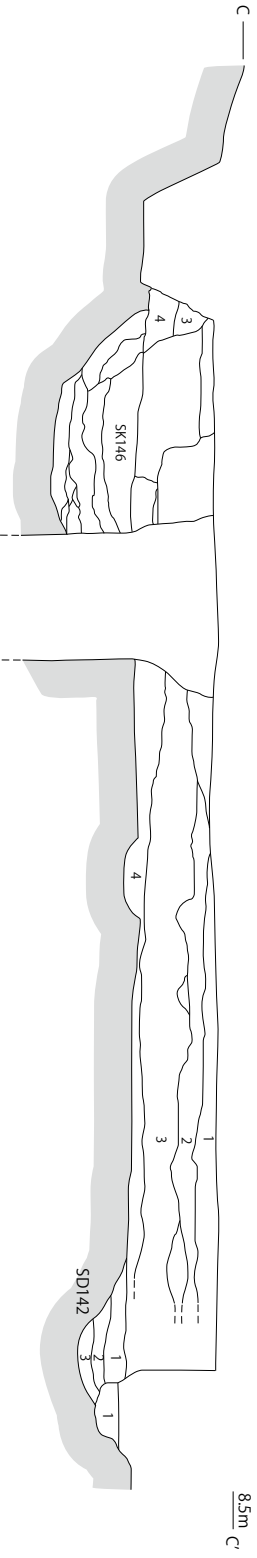
—



7ライナー2

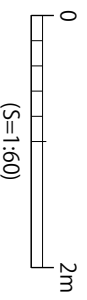
- 7ライナー土層
- 1.黄灰色粘質土 (2.5Y6/1) 砂と粘土の混じり合った泥
  - 2.黄灰色粘質土 (10YR4/1) 隙を含まない均一な層
  - 3.黄灰色粘質土 (10YR4/1) 隙を含まない均一な層
  - 4.黒褐色土 (10YR2/2) 粘着性はあまりない。均一でよくしまる

C —



8ライナー

- 8ライナー土層
1. 黄灰色土 (2.5Y6/1) 砂と粘土の混じり合った泥
  2. 黄灰色土 (2.5Y6/1) 5mm程度の隙混じる均一な層
  3. 黄灰色粘質土 (10YR4/1) 隙を含まない均一な層
  4. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 5mm程度の隙を含む



第17図 1区-2東西土層図

る。

## 1区-2 弥生時代の遺構と遺物

### SK169 (第19図)

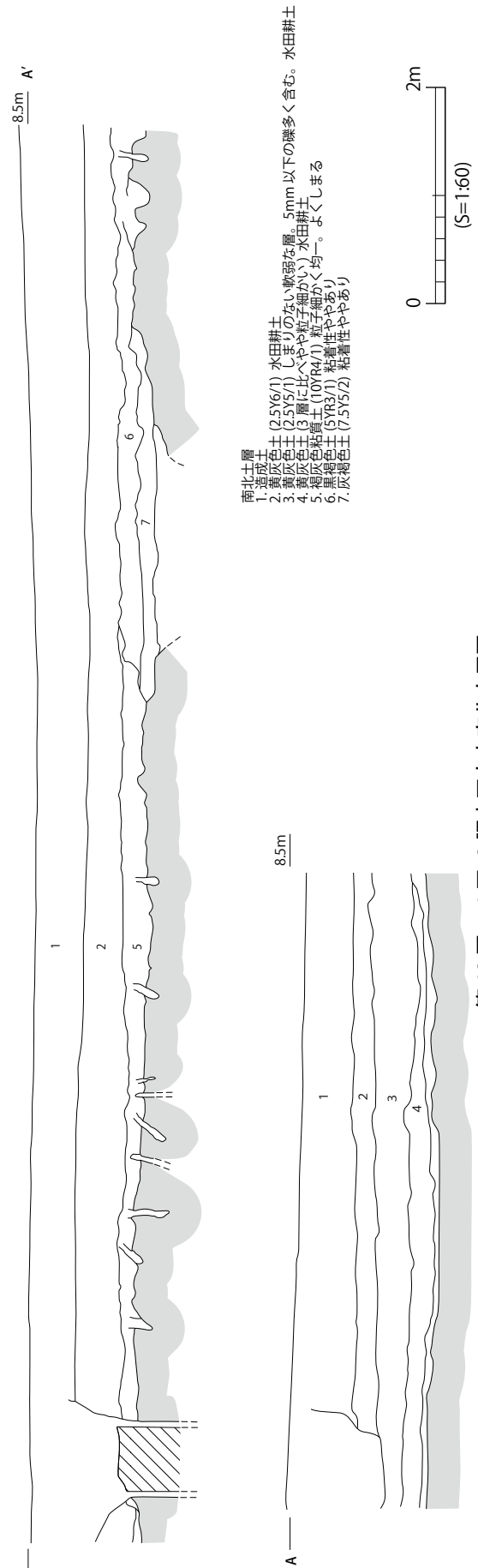
SK169は弥生時代中期中葉の土坑墓であり、1区の調査区内で最古の遺構である。幅1.2m×1.3m、深さ40cmを測る。平面形は隅丸五角形、断面方形である。墓坑最底部から22の高坏が、2個のこぶし大の垂円礫とともに出土している。22の高坏は、受部と脚部の接合部を焼成後に打ち抜いたものであり、何かの祭祀的な行為と考えられる。高坏と石は被葬者の枕とされた可能性もある。

### SD156 (第19図)

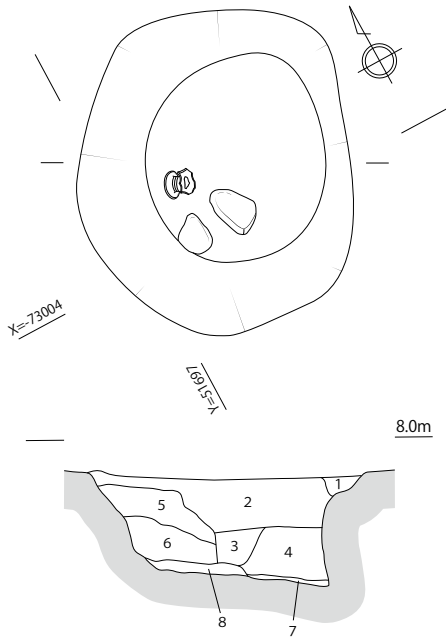
調査区の南西端で東西に蛇行気味に延びる溝跡である。調査区内での延長は13.4m程度とみられるが東側半分は井戸跡や建物跡などの遺構で連続的に切られており、判然としない。幅は最大1.1m、深さは25cmを測り断面形は扁平な逆台形を呈する。堆積土中からは弥生時代中期の土器のみ出土しており、他の時代の遺物は混じっていない。23は広口壺の口縁。24は同じく広口壺の頸部、25は高坏の脚部の破片である。SD156溝跡は、調査区内ではSK169に次いで古い遺構である。

### SD141

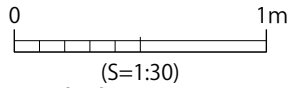
1区-2で検出された溝跡SD41は、最大幅2.5m、最大深さ75cm、調査区内で確認された長さ40mを測り、断面逆台形であった。調査区内では、湾曲も屈曲もせず直線的に伸びており、特徴的である。この溝跡は、最初に深く掘られているが、最終的に廃棄される時期の掘り返しは浅く、弥生時代後期～終末期の土器や炭化物が多く溜まっていた。場所によって深浅があり、一定の方向に向かって流れる様子はなく、排水路とは考えにくい。また、この溝跡の両側には、弥生時代



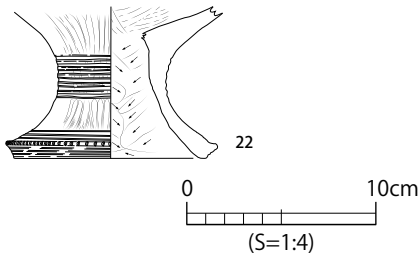
第18図 1区-2 調査区中央南北土層図



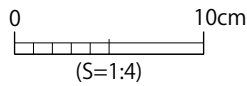
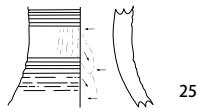
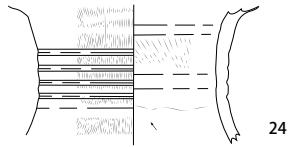
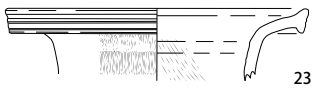
- SK169  
 1. 灰白色シルトブロック層 (SY7/2)  
 2. 灰オリーブ砂質砂層 (SY4/2)  
 3. 灰色粘質砂層 (SY4/1) 細かいシルトブロック含む  
 4. オリーブ黒色粘質土 (SY3/1) シルトブロック少量含む  
 5. オリーブ黒色粘質土 (SY3/1) シルトブロック少量含む、3mm軽石片含む  
 6. オリーブ黒色粘質土 (SY3/1) シルトブロック非常に多く含む混交層  
 7. 灰色シルト層 (SY5/1)  
 8. 灰白色砂礫層 (SY7/2)



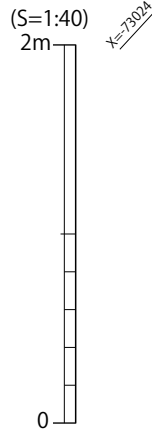
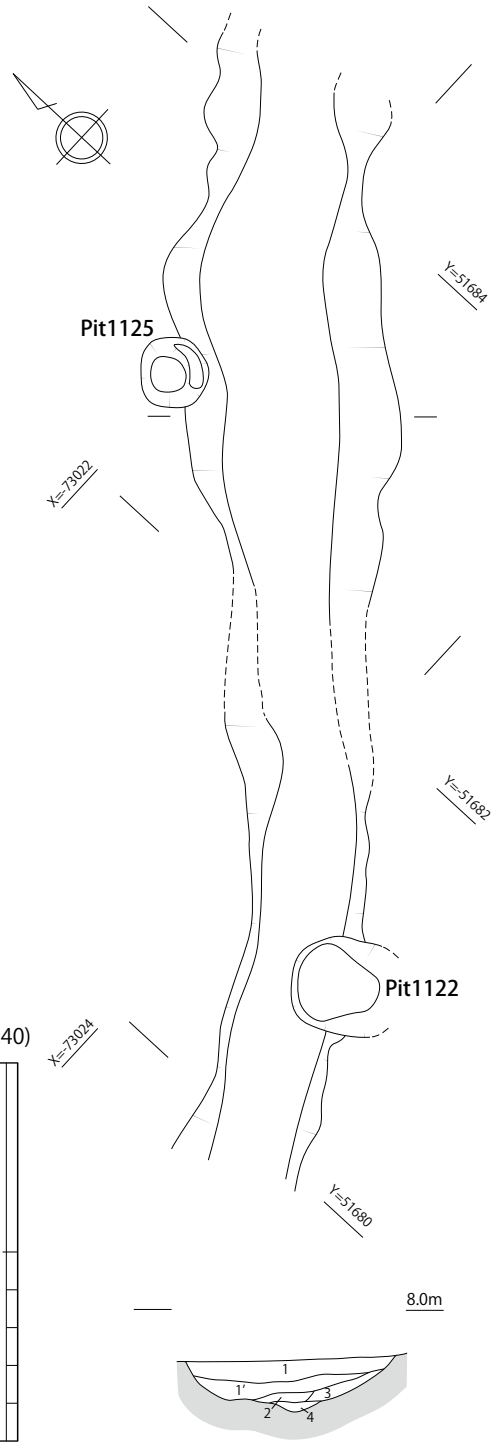
SK169 実測図



SK169 弥生土器



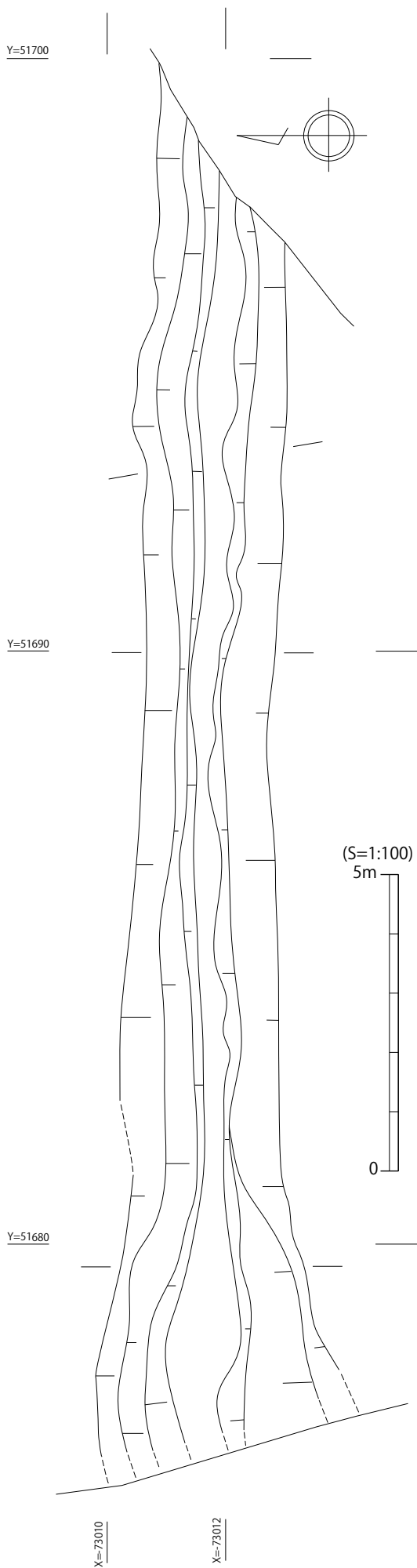
SK169 弥生土器



- SD156  
 1. 褐灰色土 (10YR2/2)  
 2. 黒褐色土 (7.5YR3/1)  
 2. 明黄褐色砂礫層 (10YR7/6) 粗砂、若干の黒褐色土を含む  
 3. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘着性あり  
 4. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘着性なし。砂質

SD156 実測図

第 19 図 SK169・SD156 実測図



第 20 図 SD141 実測図

後期後半の掘立柱建物跡や布掘建物跡が併存している様相もあるが、何かの区画溝と考えざるを得ない。

### SD141 層序

1～2層は、SD141の溝としての機能が失われた後に自然堆積した土層である。最上部は、中世以後の遺物包含層によって、ほぼ水平に切られていて飛んでいる。1～2層の基質は、シルト質粘土で、全体としては淘汰のよい層である。

溝跡と周辺の遺構は、弥生時代後期後半から終末期にかけての限定された期間のものしかなく、土器等の遺物が溝の中に廃棄された後は、自然堆積によって埋没していることから、遺構どうしが切り合うSB109を除いては、SD141と周辺の建物は同時期に廃絶した可能性も考えられる。

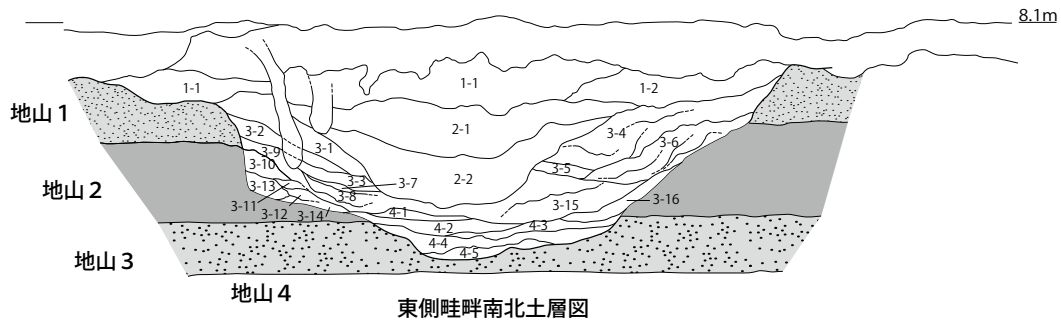
なお、3地点の横断土層においては、1～4層まで大まかに分層できたが、枝番号を含めて全く共通しているのは2-2層のみである。

3層は、シルトの地山ブロックが多くみられることから、溝の壁体の崩壊や周辺での人為的な活動が要因となって流入した土などが堆積したと思われる。3層は堆積後に最低1回は掘り返し（浚渫）がなされている。

4層は、雨水程度の弱い水流による自然堆積層である。溝の底は、東から西に向けて傾斜しており、雨水等はあまり滞留せずに西の方に流れていたようである。溝跡の西側では東側よりも厚く堆積している。4層の上面のレベルはいずれも7.3mで、水平になっていることから、西側から堆積が始まり全体が水平に堆積を終えた段階で、西側への排水機能は停止したものと考えられる。

### SD141の遺物出土状況について

東寄りほど多くの土器が出土している。N8東グリッドからの出土量ももっとも多い。2層の下端ラインに沿って土器が出土しており、溝

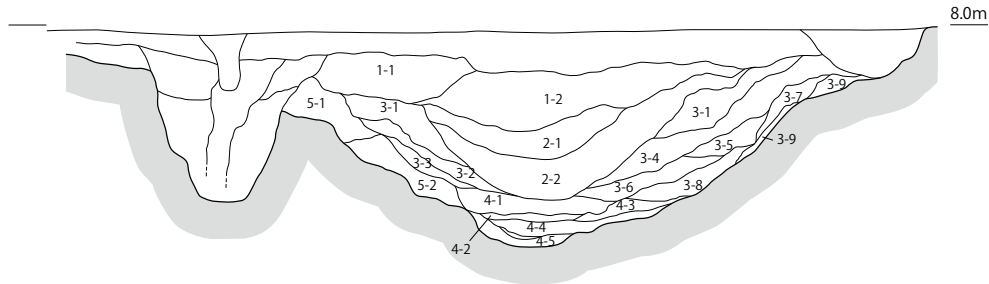


東側畦畔南北土層図

東側南北土層図

- 1-1. 褐灰色粘土 (10YR4/1) 5mm 以内の砂粒を含む
- 1-2. 黒褐色粘土 (10YR3/1) 5mm 以内の砂粒を含む
- 2-1. 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 可塑性、粘着性とも強いが、1-1層より弱い。5mm 程度の砂粒、1cm 以上のデイスイト若干含む。管状斑鉄多くみられる
- 2-2. 黒褐色粘土～シルト質粘土 (2.5Y3/2) 1-1・2-1層より弱いが可塑性、密着性強い。木炭片多く含む
- 3-1. 褐灰色粘土 (10YR5/1) 可塑性やや弱い。2～3mm 砂粒、木炭片含む
- 3-2. 褐灰色粘土 (10YR4/1) 可塑性やや弱い。2～3mm 砂粒、木炭片含む
- 3-3. 褐灰色粘土 (10YR4/1) 可塑性やや弱い。2～3mm 砂粒、木炭片含む。中央にシルト(地山)が斑点状に混じる
- 3-4. 褐灰色粘土質シルト (2.5Y8/3) 可塑性中程度。5mm 以内の砂粒含む。酸化度強く赤味を帯びる部分多い
- 3-5. 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 3-6を主体にシルト(地山)が粒状に混じる
- 3-6. 褐灰色シルト質粘土 (10YR4/1) 可塑性中程度。酸化し赤味を帯びる部分あり
- 3-7. 灰色シルト質粘土 (5Y4/1) 3-8層を主体にシルト(地山)が細かい粒状に多く混じる
- 3-8. //
- 3-9. 灰色シルト質粘土 (5Y4/1) 可塑性弱い。1cm 程度のシルト(地山)ブロックを含む
- 3-10. 灰色シルト質粘土 (5Y5/1) 可塑性弱い。層というよりはブロック状

- 3-11. 褐灰色粘土質シルト (10YR5/1) 可塑性中程度。5mm 以内の砂粒含む、酸化しており赤味を帯びる
- 3-12. 灰色シルト質粘土 (5Y5/1) 可塑性弱い。1cm 程度のシルト(地山)ブロックを含む
- 3-13. 灰白色シルト (5Y5/1)
- 3-14. 灰色シルト質粘土 (5Y5/1) 可塑性弱い。1cm 程度のシルト(地山)ブロックを含む
- 3-15. 黒褐色粘土質シルト (10YR5/1) 2～3mm 砂粒多く含む。酸化しており赤味を帯びる
- 3-16. 灰色シルト (5Y5/1)
- 4-1. 灰白砂 (5Y7/1) 幅 2mm 程度の黒灰色土がラミナ状に数層ある
- 4-2. 黄灰色砂質シルト (2.5Y4/1) シルト(地山)ブロックが混じる部分あり
- 4-3. 灰白砂 (5Y7/1) シルト(地山)と灰色粘土が 1cm 以下の粒状に混じる
- 4-4. 浅黄色シルト (2.5Y7/4) ブロック状ないしラミナ状にシルト(地山)が堆積し、1～2cm の灰色粘土がブロック状に混じる
- 4-5. 灰白～灰色砂 (5Y7/1～6/1) 3cm 程度の薄い灰色土がラミナ状に 2層挟まる
- 地山 1. 灰白～黄色砂 (2.5Y8/1～8/6)
- 地山 2. 灰白色シルト (7.5Y7/1)
- 地山 3. 橙色砂礫 (7.5YR6/8) 3mm 程度が多い
- 地山 4. 灰白色砂 (7.5Y7/1) 1mm 以下が多い

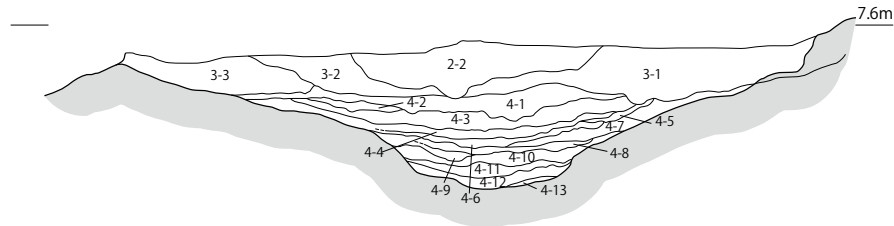


中央畦畔南北土層図

中央南北土層図

- 1-1. 灰色砂質シルト (5Y5/1) 基本は灰色のやや淡い色調の砂質シルト
- 1-2. 灰色シルト質粘土 (5Y4/1) 暗灰色の粘土ブロック (5mm 以内) を含む。比較的大きいデイスイト含む
- 2-1. 黄灰色シルト質粘土 (2.5Y4/1) 比較的淘汰のよい層。砂礫あまり含まない
- 2-2. 黒褐色シルト質粘土 (2.5Y3/1) 1-2層とよく似ているが、砂粒・デイスイト(砂礫層(地山))に多く含まれている)などを含む。炭、木炭片、土器を多く含む
- 3-1. オリーブ黒色シルト質粘土 (5Y3/1) 酸化により赤褐色になっている部分多く、根痕に沈着したサビの影響と思われる
- 3-2. 灰色シルト質粘土 (5Y4/1) シルト(地山)わずかに含む
- 3-3. 灰色シルト質粘土 (5Y5/1) シルト(地山)の小さなブロック多く含む
- 3-4. オリーブ黒色シルト質粘土 (5Y3/1) 3-1に近いが酸化度弱く、暗褐色粘土のブロック含む

- 3-5. オリーブ黒色砂質シルト (5Y3/1) 3-2に近いが、淘汰やや悪く、地山シルトブロック多く含む
- 3-6. 灰オリーブシルト質粘土 (5Y5/2) 淘汰あまりよくない。シルト(地山)が斑点状に入る。
- 3-7. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) 黄色シルトブロック混じる
- 3-8. オリーブ黒色粘質土 (7.5Y3/1) 淘汰やや悪い
- 3-9. にぶい黄色土 (2.5Y6/3) 地山が風化したような層
- 4-1. 灰色砂 (N6/1) 1mm 以下の砂粒含む
- 4-2. 黒褐色粘土 (7.5Y3/1) 植食土層
- 4-3. 黒褐色粘土 (10YR3/2) シルト(地山)ブロックあり
- 4-4. 灰白色シルト (2.5Y8/2)
- 4-5. 黒褐色砂質シルト (2.5Y8/2)
- 5-1. 地山の風化土層か
- 5-2. 地山の風化土層か

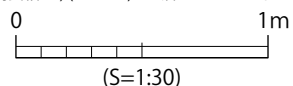


西側畦畔南北土層図

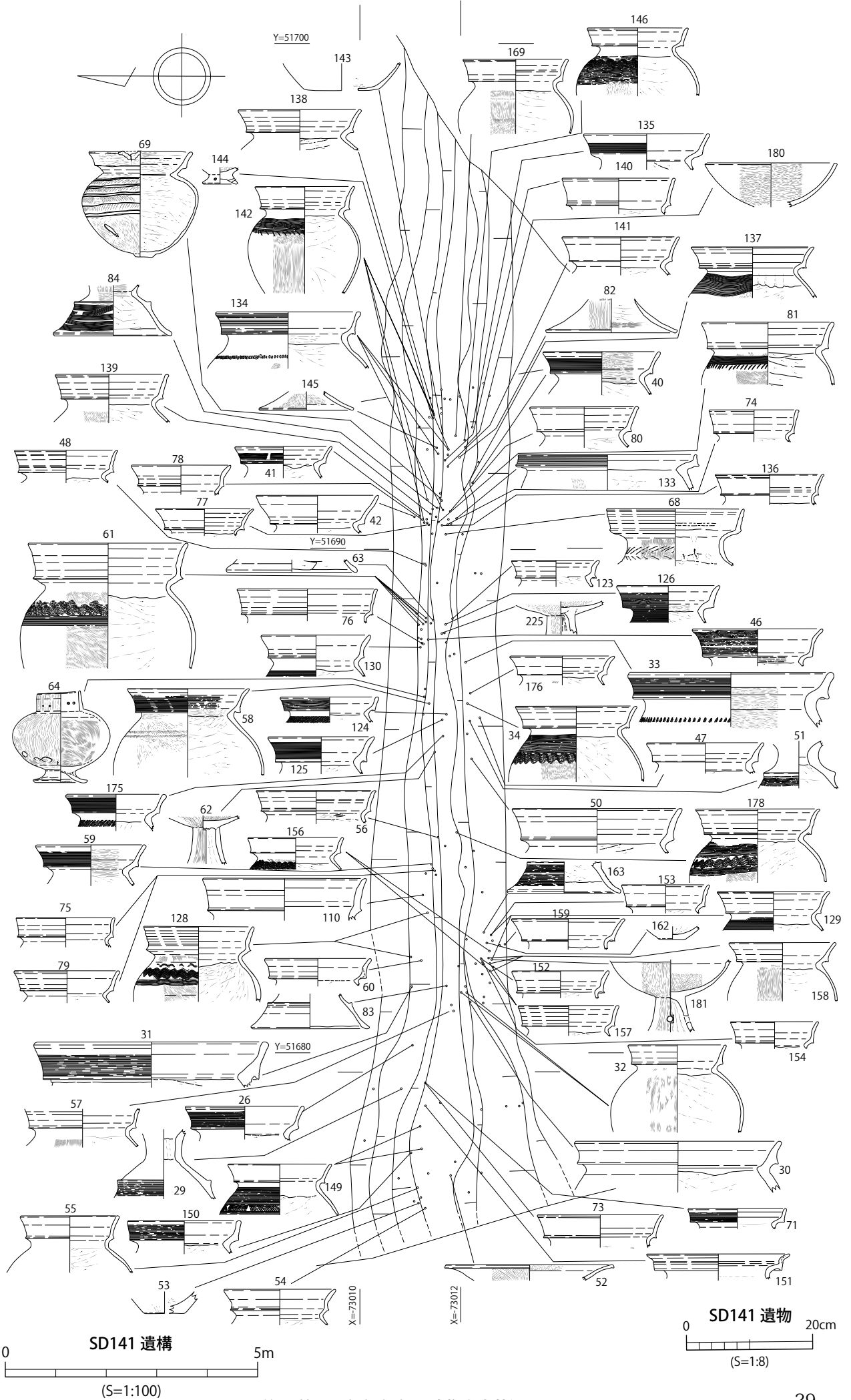
西側南北土層図

- 2-2. 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 可塑性、粘着性非常に強い。高師小僧が多くみられる
- 3-1. 砂質シルト 粘着性あるが可塑性弱い。2～3mm の細礫含む。管状斑鉄が多くみられる
- 3-2. 褐灰色粘土 (10YR4/1) 2-2層と共通するが、やや還元状態
- 3-3. にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) 可塑性強い。1mm 程度の砂多い。酸化度強い
- 4-1. 灰黄色砂質シルト (2.5Y6/2) シルト・砂・黒色土(腐植)が細かいラミナを形成
- 4-2. オリーブ褐色粘土 (2.5Y4/3)
- 4-3. 暗オリーブ褐色粘土 (2.5Y3/3) 可塑性強い。1mm 程度の砂礫多い。酸化度強い
- 4-4. 黄灰色砂 (2.5Y6/1)
- 4-5. 灰黄色砂 (2.5Y6/2)

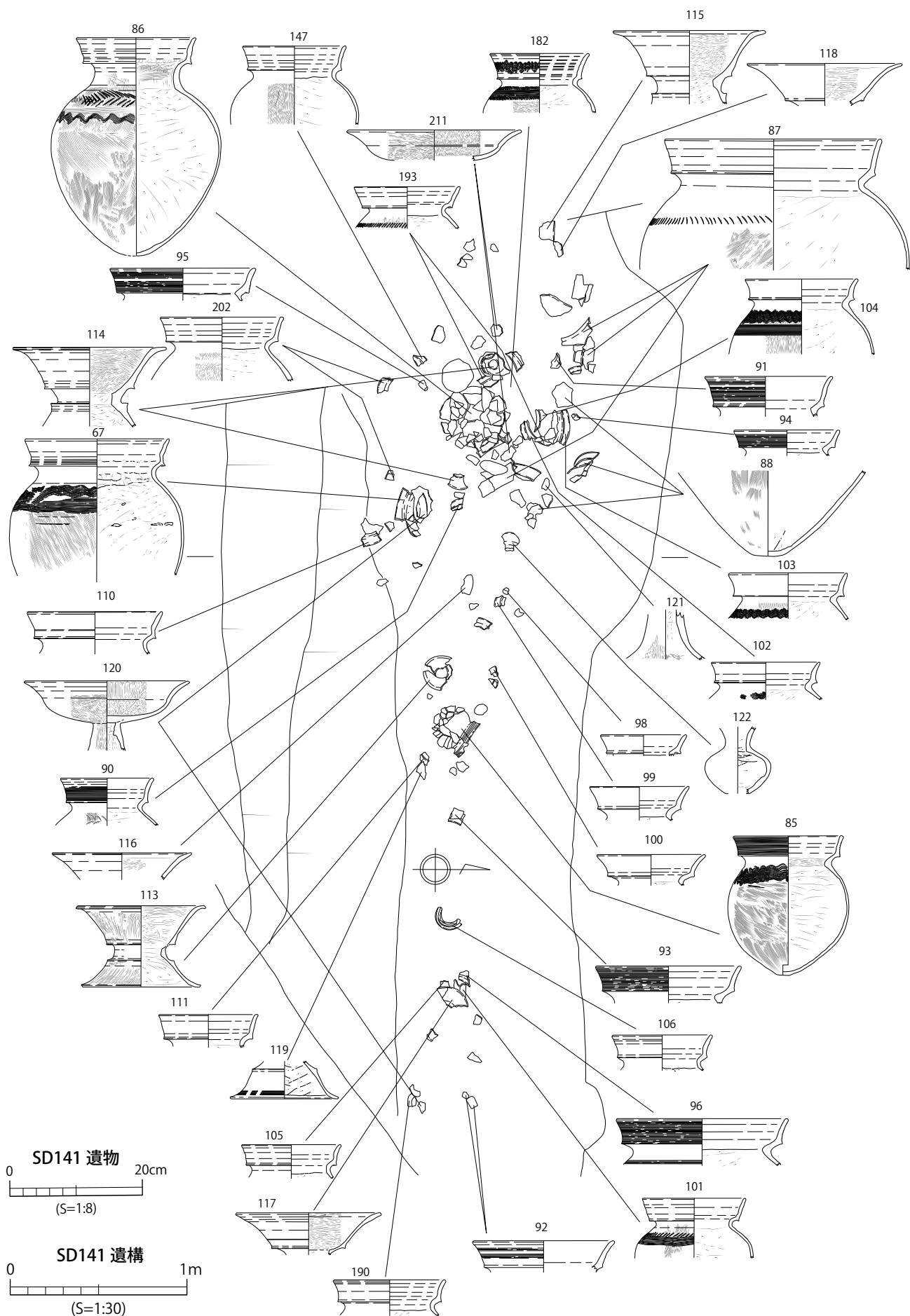
- 4-6. 黄灰色砂 (2.5Y6/1)
- 黄褐色シルト (2.5Y5/3)
- オリーブ褐色粘土(腐食粘土) (2.5Y4/6) 3層が 1cm 未満の厚さでラミナになる
- 4-7. 黄灰色砂 (2.5Y6/1)
- オリーブ褐色粘土(腐食粘土) (2.5Y4/6) 2層がラミナになる
- 4-8. 黄灰色砂 (2.5Y6/1) 細砂中心
- 4-9. 黄灰色砂 (2.5Y6/1)
- 黒色粘土 2層が細かいラミナになる
- 4-10. 黄灰色砂 (2.5Y6/1) 細礫中心
- 4-11. オリーブ黒色粘土 (5Y3/1) 粘着性強い。砂がラミナ状に入る部分あり
- 4-12. 黄灰色砂 (2.5Y6/1) 腐植土がわずかに小さなブロック状に混じる
- 4-13. 黄灰色砂 (2.5Y6/1)
- オリーブ褐色粘土(腐食粘土) (2.5Y4/6) 2層がラミナになる



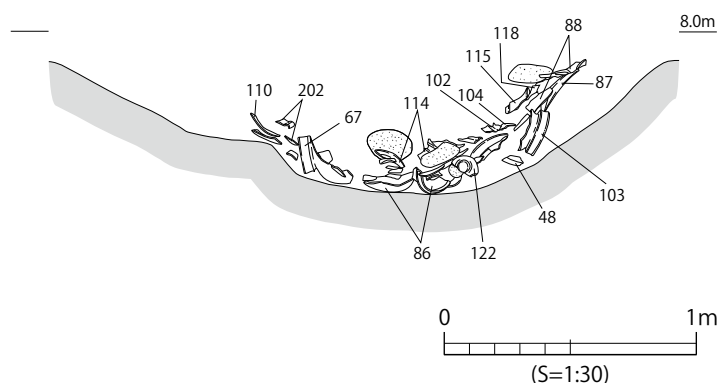
第 21 図 SD141 南北横断土層図



第 22 図 SD141 遺物出土状況図 1



第 23 図 SD141 遺物出土状況図 2



第 24 図 SD141N8 東グリッド 遺物出土状況図

跡の北側の斜面から底にかけて多く出土した。この遺物出土傾向は、おそらく、土器や木製品が廃棄された後に、2層が自然堆積し、2層の下半は廃棄された有機質の遺物が腐食したため、炭化物を多く含む泥炭化したものと考えられる。

SD141 は、国土座標の東西軸に沿って直線的に伸びているため、調査区に設定した L8、M8、N8 の各グリッドによって比較的整然と区分けできる。さらに M8 及び N8 の両グリッドを東西に二分して遺物を仕分けると、SD141 に廃棄された遺物はそれぞれその正面に来る建物跡や遺構に属する遺物である可能性が高いと考えられる。すなわち、M8 グリッド西から出土したものは SB104 に最も近い。M8 グリッド中程から M8 グリッド東にかけての出土遺物は SB103 の布堀建物跡や SE101、SE102、SE104 の各井戸跡あるいは SB105 の掘立柱建物跡により近い。N8 グリッド西は SB105 の掘立柱建物跡に最も近いので、それを反映している可能性がある。また、調査区外南側に展開する遺構があるとすれば、それらの遺物が出土している可能性も考えなければならぬと思われる。N8 グリッド東からは、SD141 溝跡の各区画の中でもっとも多く多くの遺物が出土している。この区画は SD141 溝跡が調査区の南壁に入り込んで民家の下に伸びている部分である。SB105 の掘立柱建物跡の東側同様、建物跡などの遺構があり、集落の展開が予想される。しかし、調査区内における現状としては、SB108 の掘立柱建物跡と SE103 の井戸跡しか出土遺物と合致する時期の遺構はない。したがって、N8 グリッド東の出土遺物はこの両遺構の様相を反映している可能性が高いものと考えておきたい。

M8 グリッド東に最も近い遺構は SB109 の掘立柱建物跡だが、第 21 図 SD141 中央南北横断土層図に示したように、SB109 の掘立柱建物跡は、SD141 を切っており、基本的には SD141 が溝跡の機能を喪失した後、あるいは 1 層が水平に堆積した後に建てられたものであり、SD141 の土層堆積内に遺物があるとは考えにくい。何か関連があるとしても、1 層の上面程度に限定して考えるべきかもしれない。

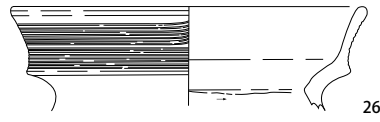
## SD141 出土土器

### 4 層出土土器

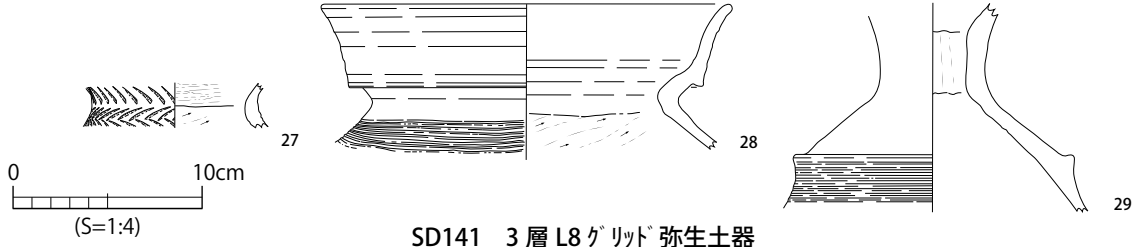
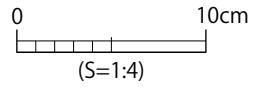
4 層出土遺物として実測図化できたのは 26 のみであった。口縁に擬凹線を施す草田 3 期の特徴を示す。M8 グリッド西から出土しており、SB104 に最も近い。

### 3 層出土土器

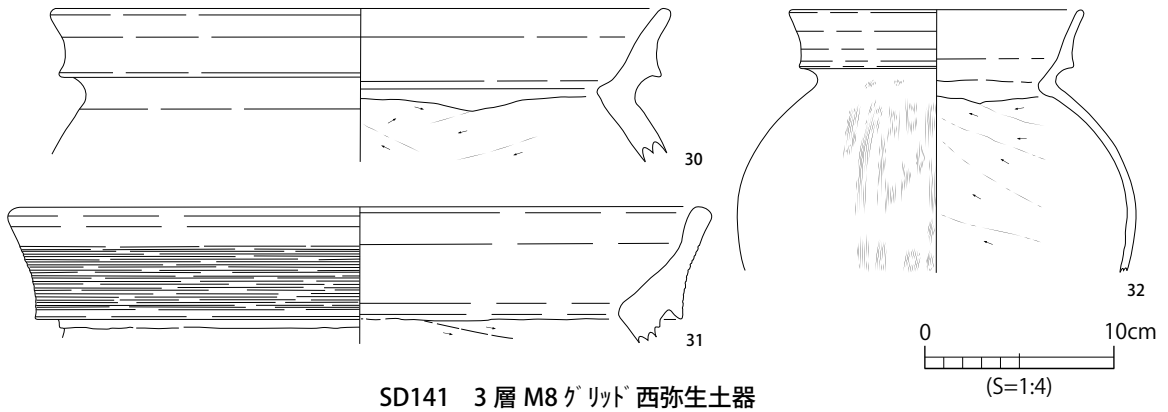




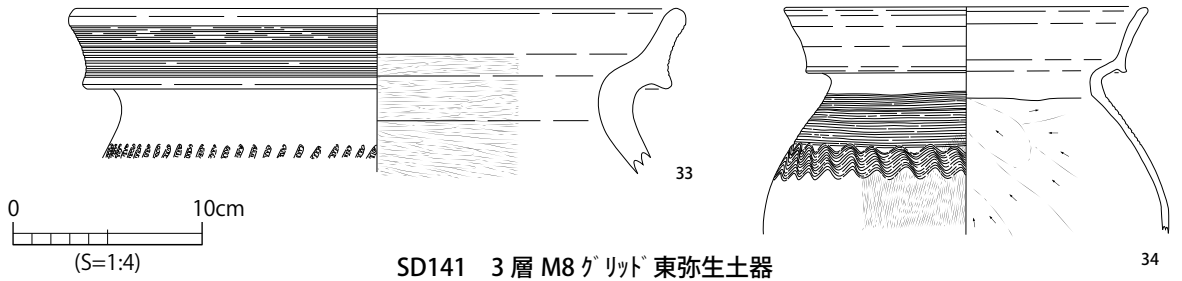
SD141 4層 M8グリッド 西弥生土器



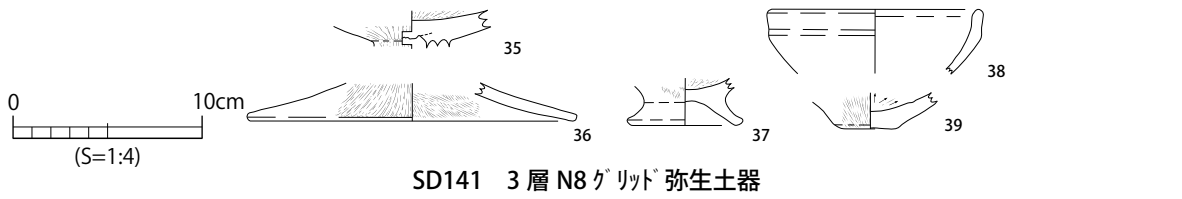
SD141 3層 L8グリッド 弥生土器



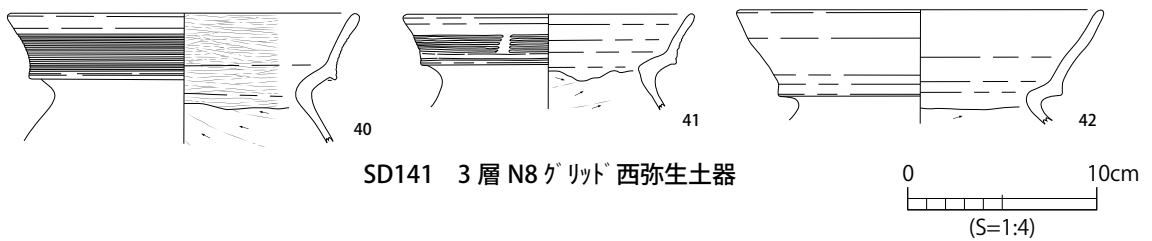
SD141 3層 M8グリッド 西弥生土器



SD141 3層 M8グリッド 東弥生土器

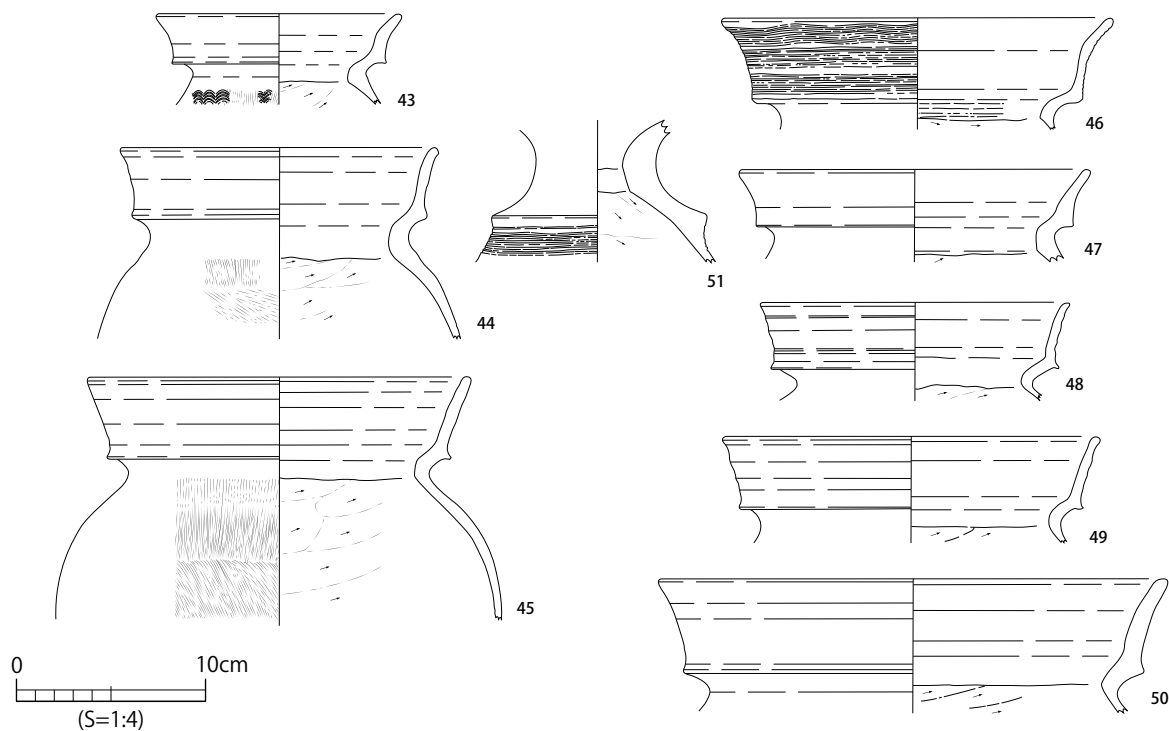


SD141 3層 N8グリッド 弥生土器



SD141 3層 N8グリッド 西弥生土器

第25図 SD141 出土遺物実測図1



SD141 3層 N8グリッド 東弥生土器

第26図 SD141 出土遺物実測図2

3層から出土した土器は草田3期と4期からなるが、口縁に擬凹線のないものも器壁が厚いものや頸部内面が屈曲するなど草田4期でも古相を示すものを中心となっている。44は施文もなく粗製のタイプである。鼓形器台218は、擬凹線は無いが形態やミガキ調整の多用から草田3期と考えたほうがよいかもしれない。28・32・43・47・50・216は頸部内面の屈曲、一次口縁と二次口縁の接合部の器壁に厚みがあり、草田3期の特徴を残している。34は草田4期のうち量的に多いタイプであろう。

## 2-2層出土土器

草田3期から4期の土器からなるが、草田3期の形態的特徴を脱し、草田4期の典型的なものが過半を占める。全体の様相としては3層に比べ新しいといえる。

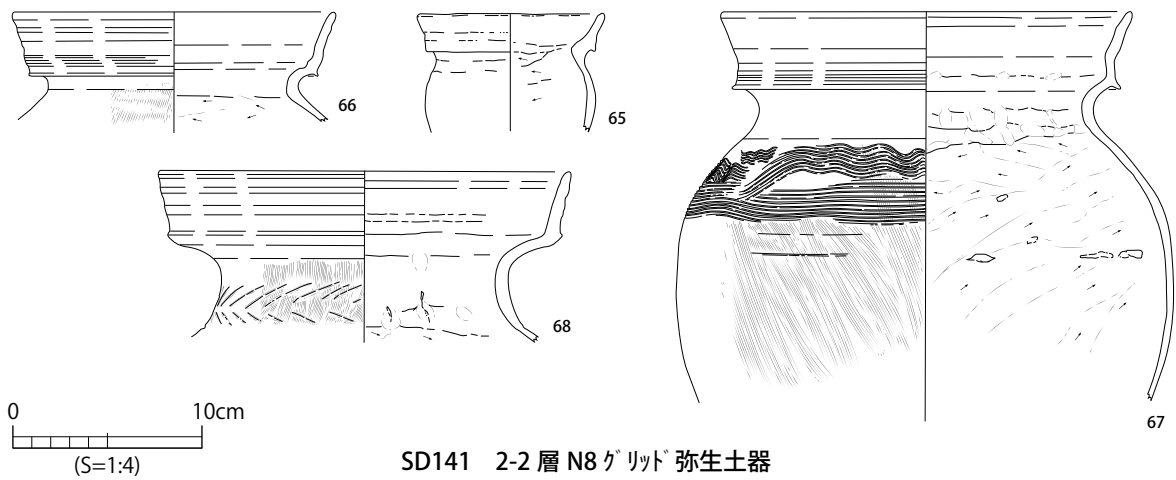
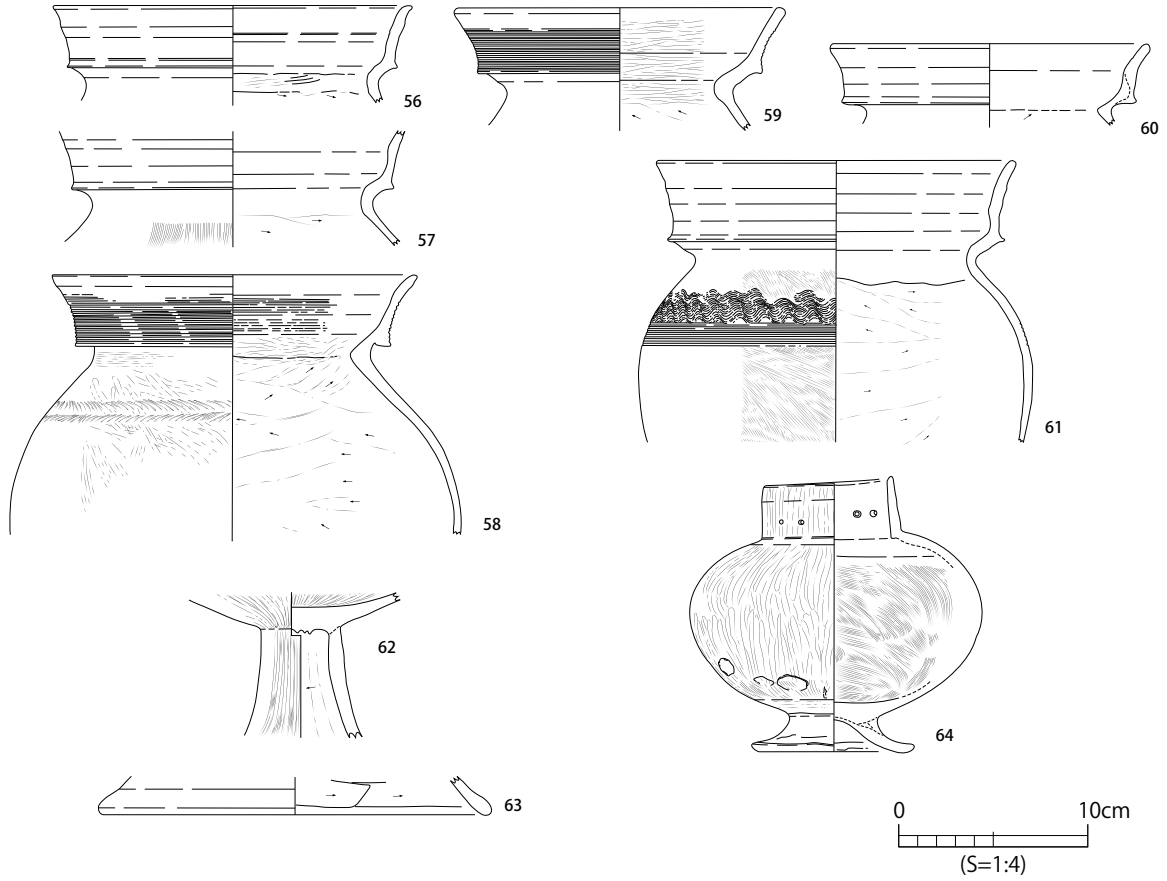
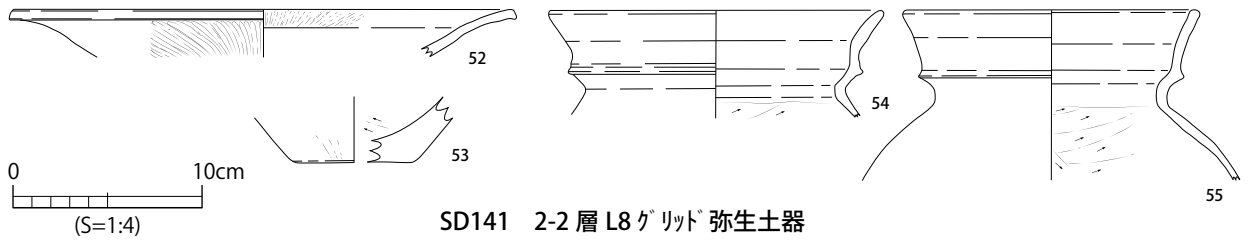
### 2-2層 M8 グリッド出土土器

58は、全体的にシャープなつくりをしている。口縁部の下端は下垂する部分に幅広な面を持たせている。61は、口縁部は長くなっているが、外面は波状に凹凸あり、肩部の波状文は間隔の狭いタイプであるから草田4期である。

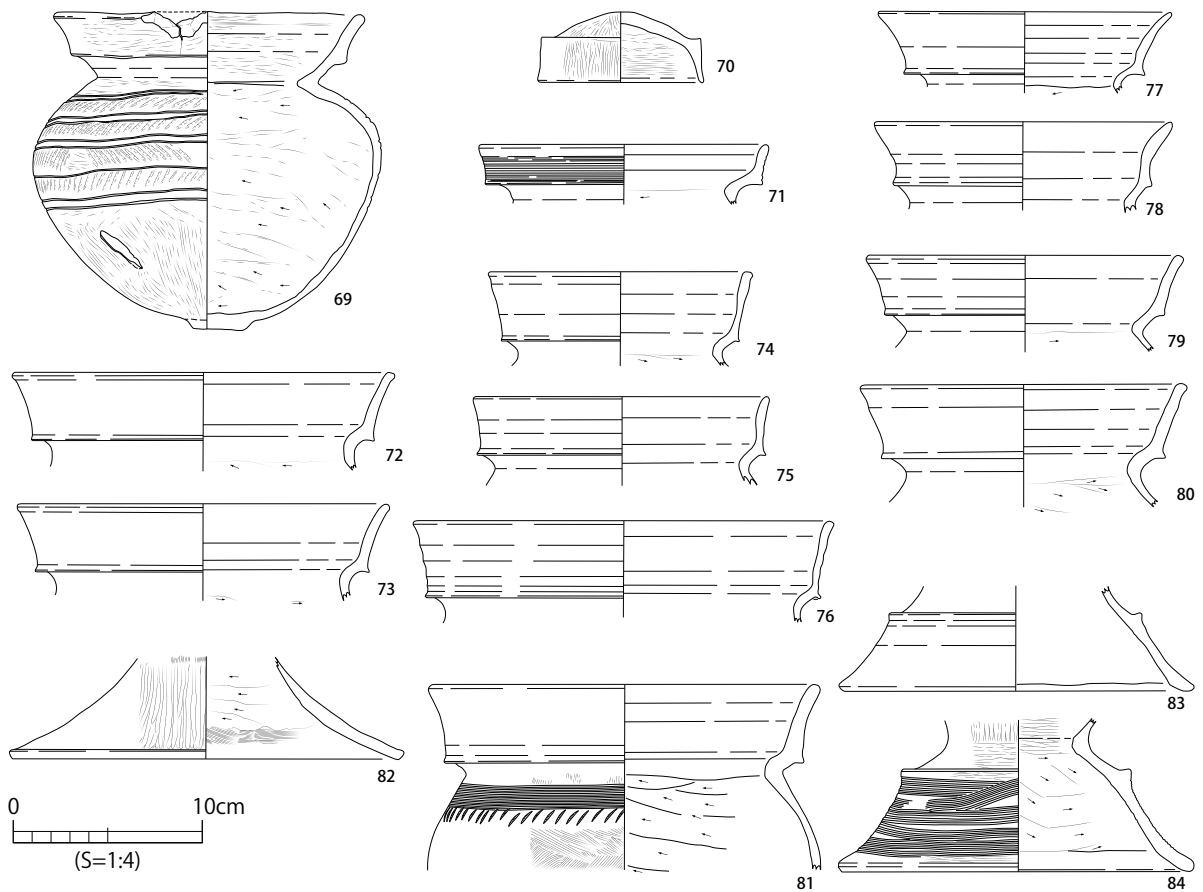
64は、脚付直口壺で全面にミガキをかける優品である。脚は低脚坏と同じもので接合方法も同じである。口縁には双孔が対で見られることから蓋が備わるものと考えられるが、N8グリッド70もミガキ調整を多用していることからセットになる可能性がある。

### 2-2層 N8 グリッド及び N8 グリッド西出土土器

68壺は、頸部に羽状文を持つものである。草田4から頸部に羽状文を入れるものが増えてくる。69は、口縁部に擬凹線はないが、形態は草田3期の特徴を残す、器壁も厚く、底部が凸状になっている。施文も整ったものでなく外面調整にミガキを多用することから、SK102出土の粗製品との共通点がある。草田4期の粗製品と思われる。この土器は完形品ではあるが口縁部に2か所打



第 27 図 SD141 出土遺物実測図 3



SD141 2-2層 N8グリッド 西弥生土器

第28図 SD141 出土遺物実測図4

ち欠いたような部分があり、底部にも縦長の孔が2か所ある。目的については不明だが、焼成後に意図的に施されたものと考えられる。81は、口縁に厚みがあり頸部も屈曲している。内面の篋削りも左上がりである。草田3期の様相を持っている。

### 2-2層 N8 グリッド東出土土器

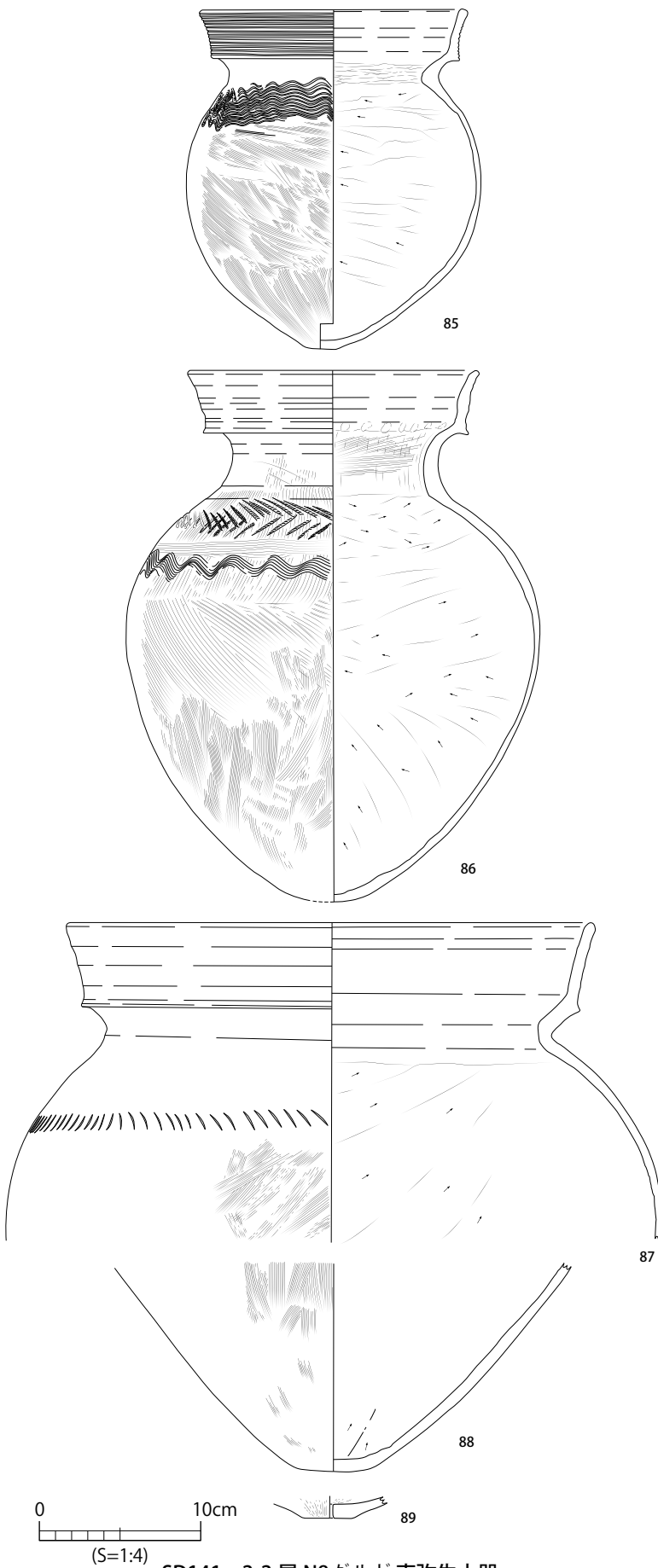
85は、草田3期の甕である。胴部の形態はやや下膨れの感がこのころが、外面はハケ調整で肩部には間隔の狭い波状文がある。86は、口縁の下段突出が下垂する。口縁外面には凹凸が多いことから草田4期である。大振りの羽状文が肩部に入り、この時期には比較的波長が長い波状文が肩部に入る、上半は粗いハケ、下半は細かいハケ、底部は一部しか残っていないが痕跡的な底で自立はしないようである。口縁内面には、ほぼ等間隔で指圧痕が残る。87・88の大型の甕は、胴部最大径が上部にあり肩のかなり張る形態になるようである。波状文があるものは(102・103・104・108)間隔の狭いタイプである。

鼓形器台は、119が草田3期の可能性があるがその他は草田4期である。113は、やや小型で全体に薄いシャープなつくりである。高坏120は、坏部の口縁と底部の境界が明瞭で、底部に充填された円盤には軸痕が無いことから草田4期となるが、坏部は口径が大きく新しい様相も伺える。

### 2-1層出土土器

出土状況や土層の形成の理由などから、2-1層から出土したものは、基本的には2-2層と同時に廃棄されたものと理解できる。出土土器の全体の様相も同様である。

### 2-1層 M8 グリッド出土土器



SD141 2-2層 N8グリッド 東弥生土器

第29図 SD141 出土遺物実測図5

125・126は草田3期よりも古いもので、一次的に遺構に伴うものではない。

### 2-1層 N8 グリッド西出土土器

133は後期初頭のもので遺構に伴うものではない。

### 1層出土土器

1層はSD141の廃絶後に遺物が投棄されたものが完全に埋まった後に堆積した層である。草田5期に下がる可能性のものを若干含んでいる可能性はあるが、ほとんどは2-2層・2-1層同様に草田3・4期のもので占められている。

SD141 直行溝の廃絶後に、周辺区域は、基本的には生活空間として利用されていなかった可能性が高い。

### 1層 L8 グリッド出土土器

149は、右下がりと左下がりの刺突文を単位ごとに交互に施文している。SE101の甕249と共通する施文である。一点一点の刺突がやや大きいことから草田4期と判断した。

### 1層 M8 グリッド西出土土器

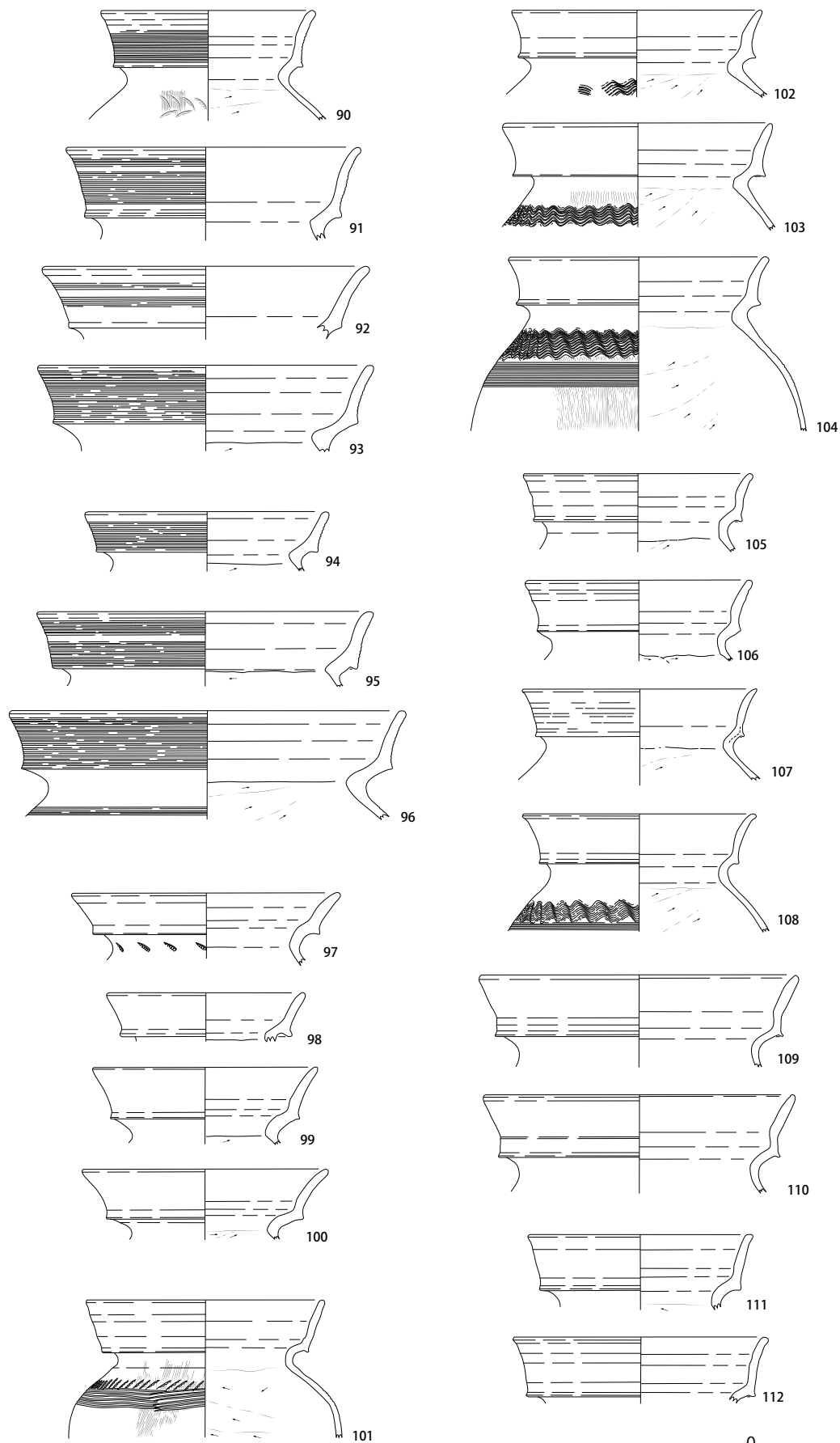
155、156甕の肩部上位の波状文、また、波状文の間隔などの様相は、草田4期の典型的なものである。

### 1層 N8 グリッド出土土器

高坏の179は、口縁部が屈曲しないことから時期は下る可能性がある。鼓形器台218は、擬凹線は無いが形態やミガキ調整の多用から草田3期と考えたほうがよいかもしれない。216は頸部内面の屈曲、一次口縁と二次口縁の接合部の器壁に厚みがあり、草田3期の特徴を残している。

### 1層 N8 グリッド東及び西出土土器

182は、草田5期まで下がるが可能性があるが、その他は草田3から4期の中に収まるものである。



SD141 2-2層 N8グリッド 東弥生土器

第30図 SD141 出土遺物実測図6

## SD141 以南の遺構群について

1区-2調査区の弥生時代後期後半～終末期遺構群は、大きくは、Ⅲ系座標の東西軸にほぼ合致するSD141 直行溝によって、南北に分けられる分布となっている。この遺構分布の意味については、当調査区の様相だけでは理解できない部分もある。これらのうち、SD141の南側の比較的狭い範囲に、建物跡と井戸跡とが錯綜して検出された。(第16図)

主な遺構としては、SB103 布掘建物跡とSE102 井戸跡、SB104 掘立柱建物跡、SB105 掘立柱建物跡とSE101 井戸跡である。後述するが、建物跡と井戸跡はセット関係にあるものと考えられ、これらの遺構の変遷については、SB104 掘立柱建物跡→SB103 布掘建物跡・SE102 井戸跡→SB105 掘立柱建物跡・SE101 井戸跡と考えられる。出土土器やSD141の様相などからいずれの遺構も弥生時代後期後半～終末期の中での変遷と考えられる。

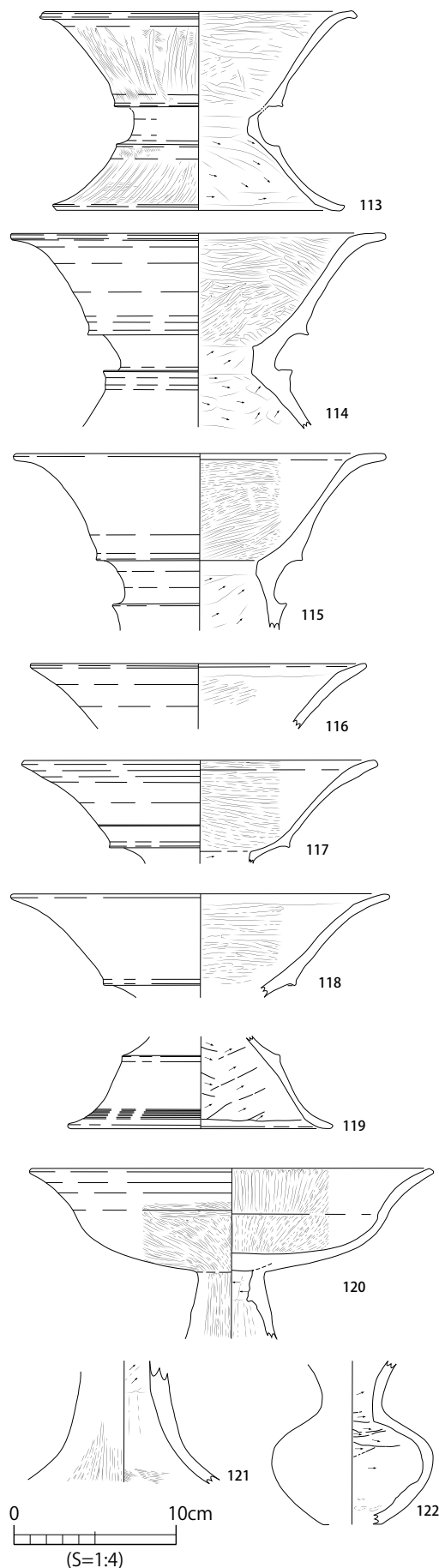
### SB103・SE102 (第37～39図)

SB103は2本の溝からなる布掘建物跡である。布掘溝跡の長さは2本とも4.4m、溝間は4.3mと溝長に比べて広く、平面プランは正方形に近い。いずれの溝幅も40cm～50cm、深さは25cm～30cmを測る。また、東溝跡北端は攪乱と考えられる。溝間が溝長に比べて広いことから、南北にPit1039とPit1090の棟持柱を持つ構造と考えた。遺物は第38図に挙げた228～232の土器が出土している。いずれも甕で228と232は草田3期、そのほかは草田4期のものである。

SB102 布掘建物跡の南正面1.5mの位置にSE102 井戸跡を検出した(第39図)。円筒形二段掘りの土層断面に立ち上がりの土層が一对みられることから、下段の掘方に合致する丸太刳抜きの井戸枳を備えていたことがわかる。深さは95cmを測る。遺物は233壺と234甕の破片が出土している。234は草田4期である。

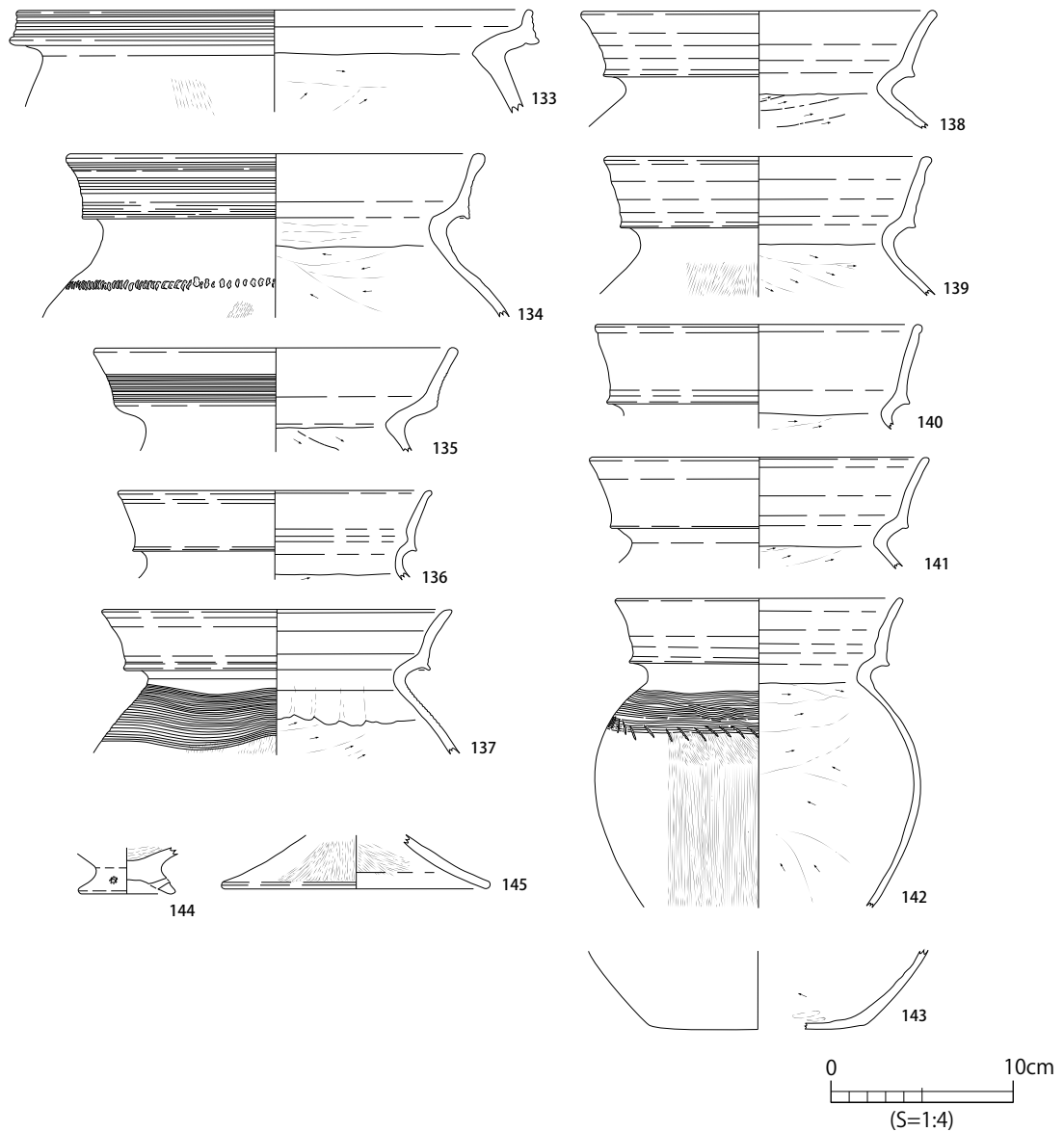
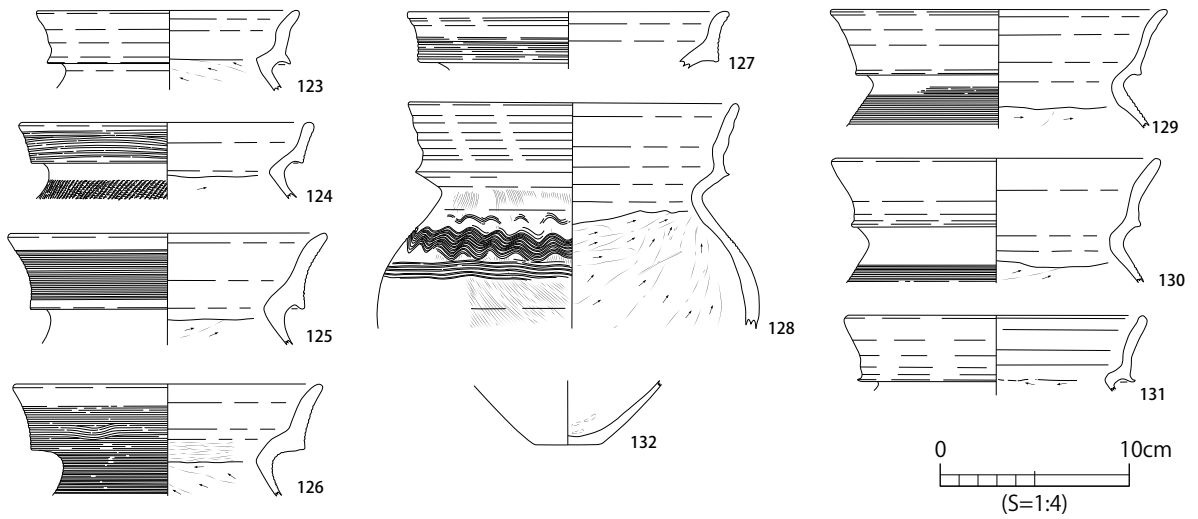
### SB104 (第40図)

SB103 布掘建物跡の西溝をまたいでSB104が検出された。掘立柱建物跡SB104は、1間×2間と



SD141 2-2層 N8グリッド 東弥生土器

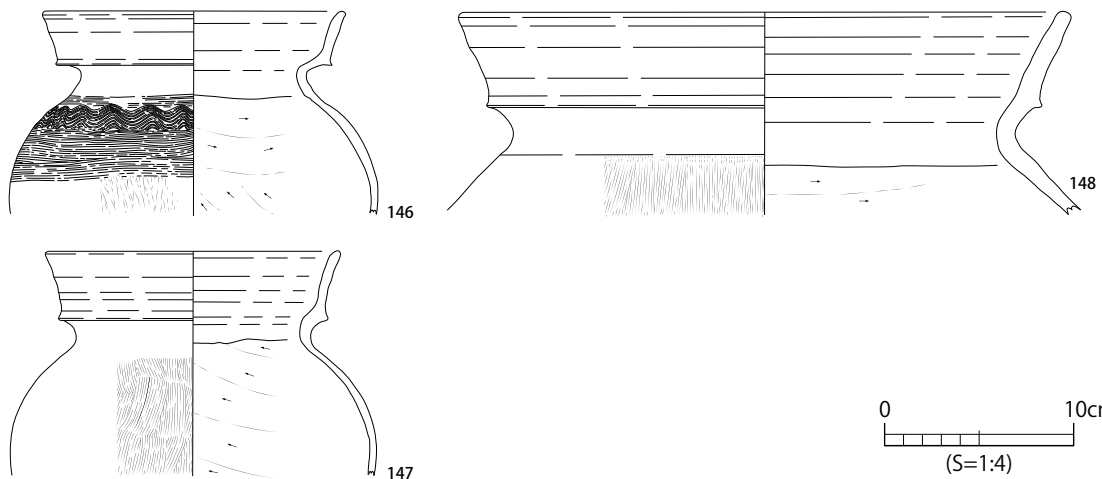
第31図 SD141 出土遺物実測図7



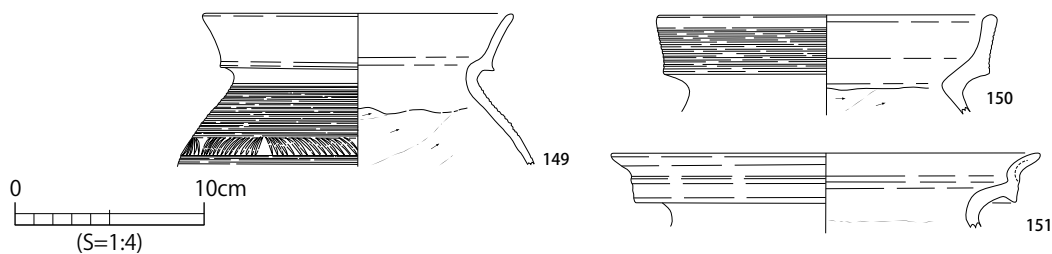
SD141 2-1層 N8グリッド 西弥生土器

第32図 SD141 出土遺物実測図 8

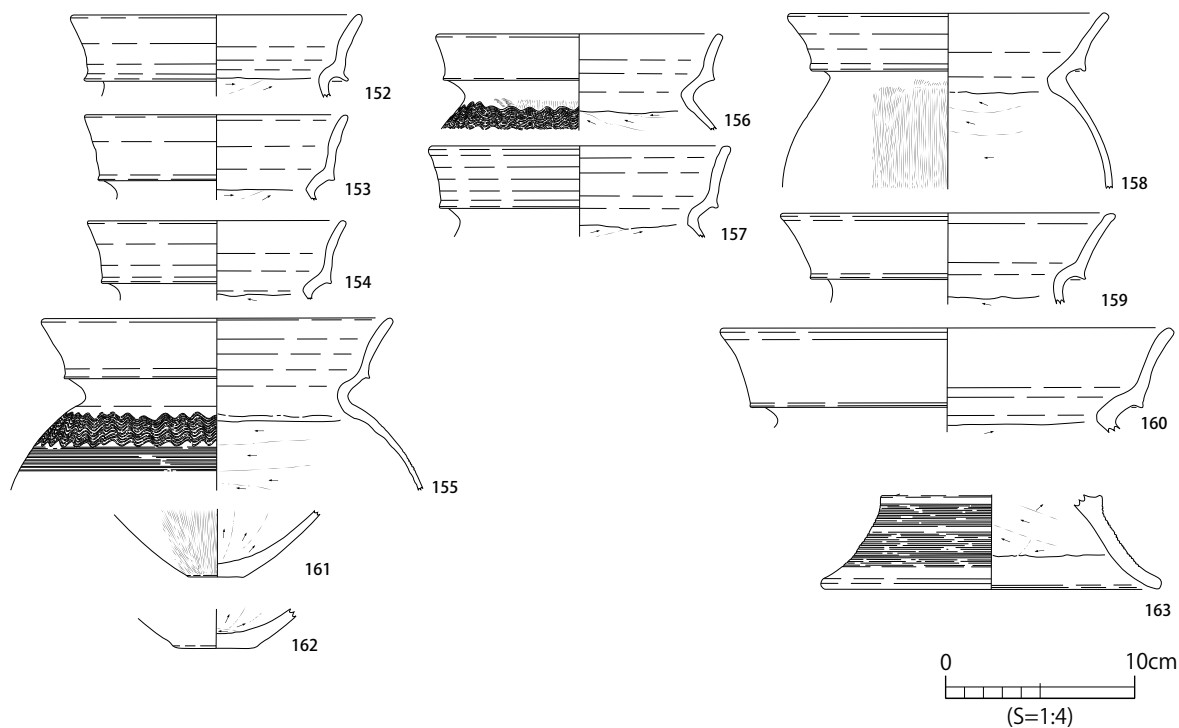




SD141 2-1層 N8グリッド 東弥生土器

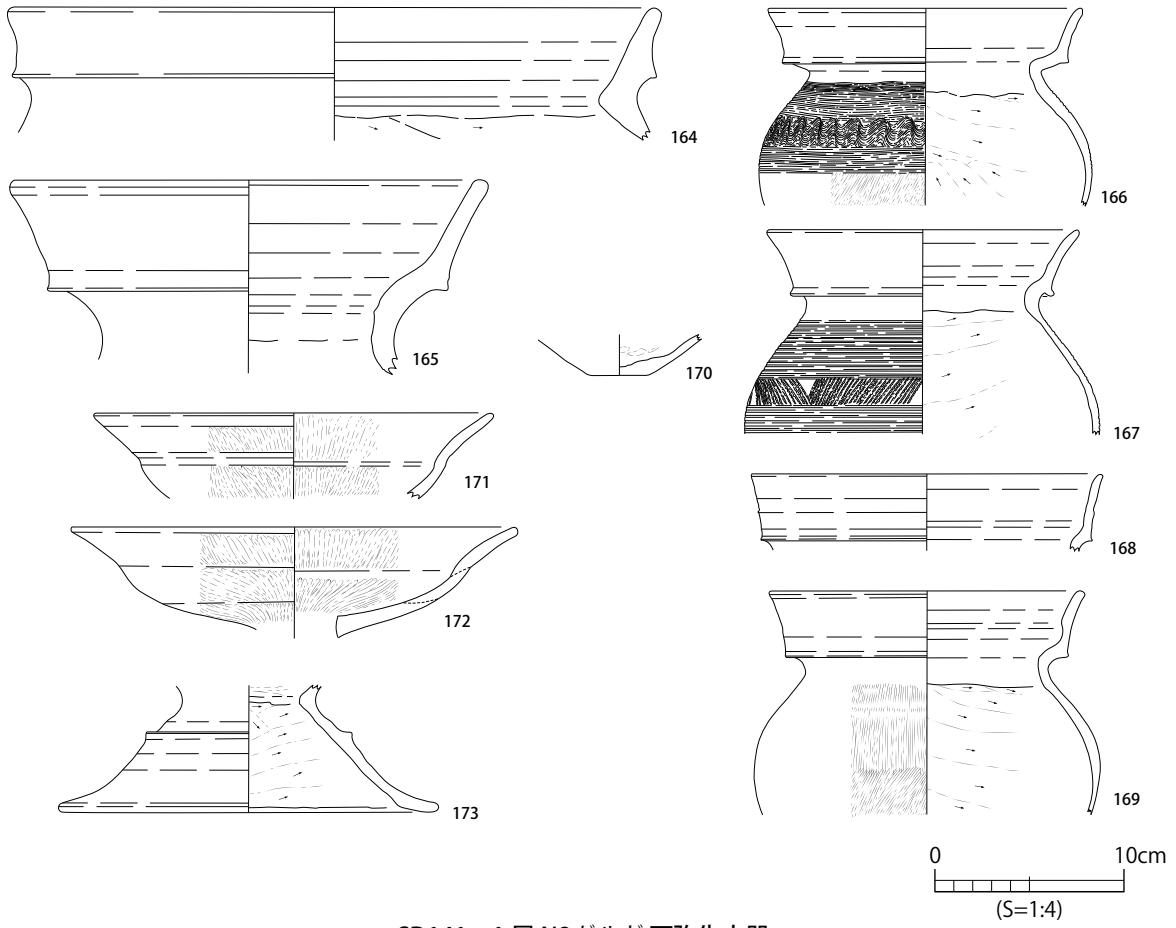


SD141 1層 L8グリッド 弥生土器

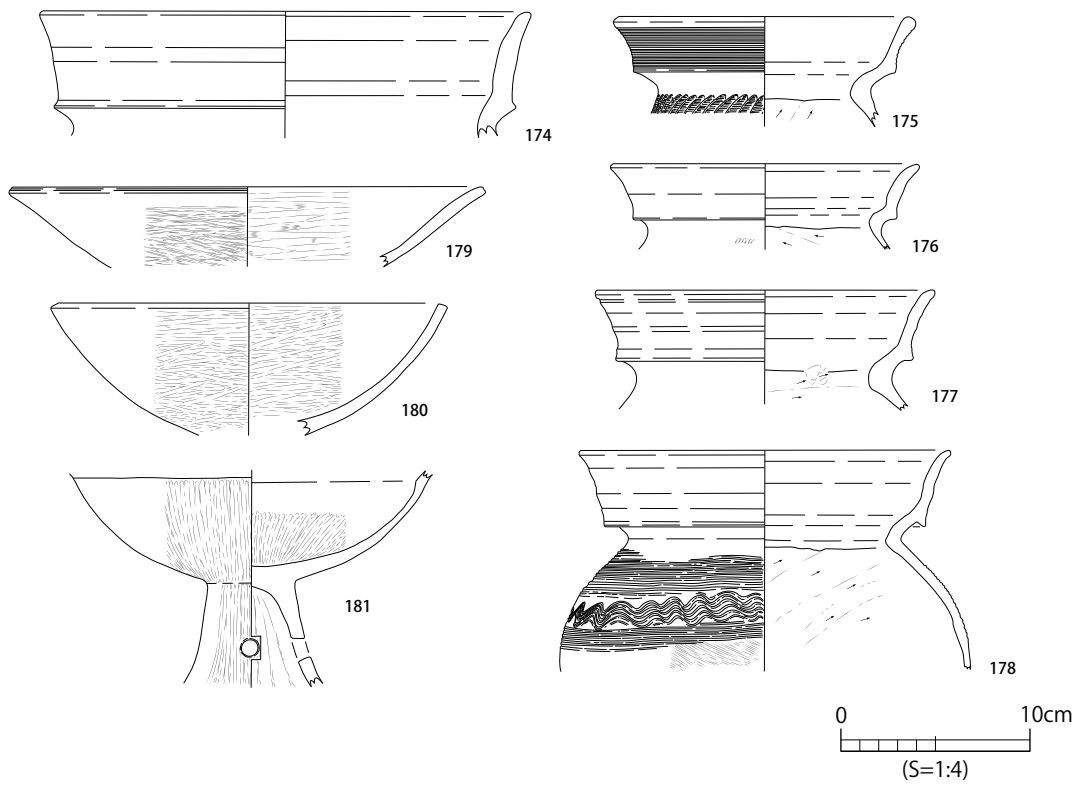


SD141 1層 M8グリッド 西弥生土器

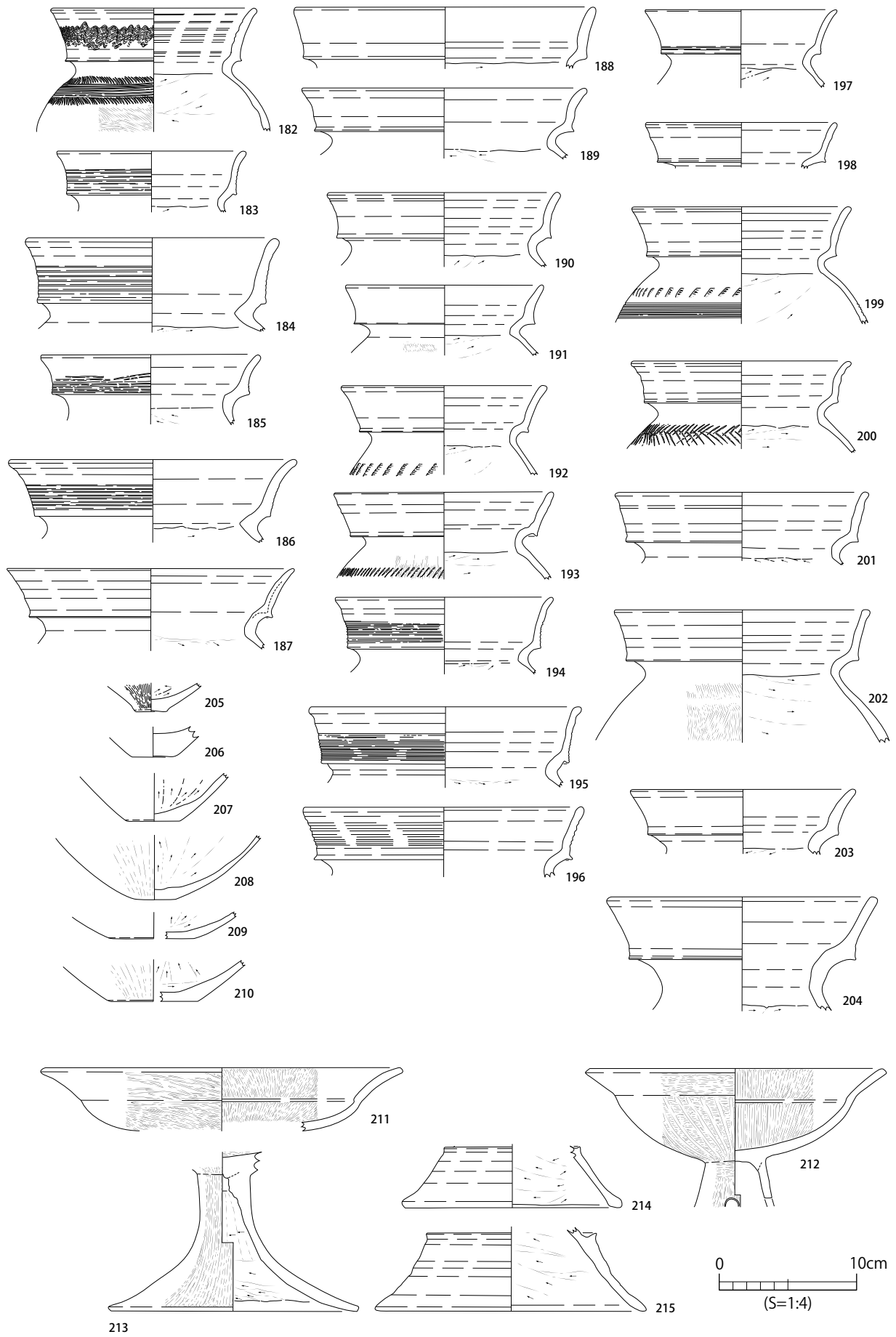
第33図 SD141 出土遺物実測図9



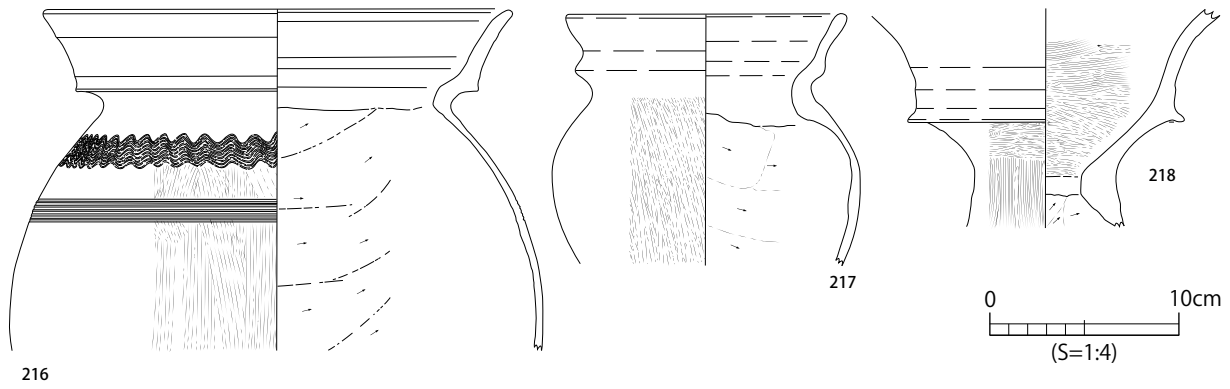
SD141 1層 N8 グリッド 西弥生土器



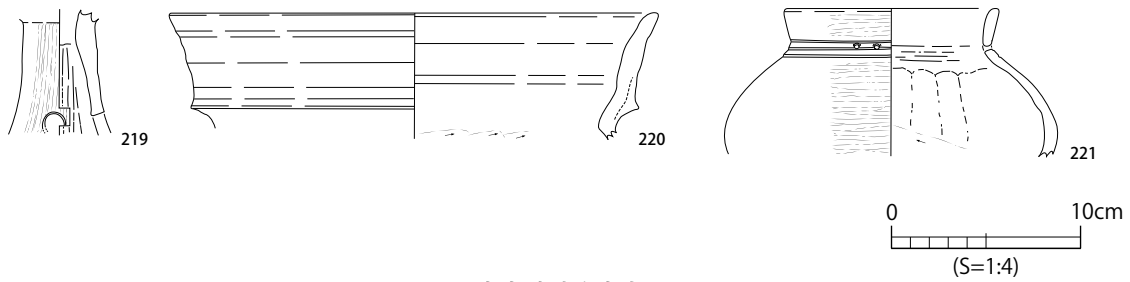
SD141 1層 N8 グリッド 東弥生土器



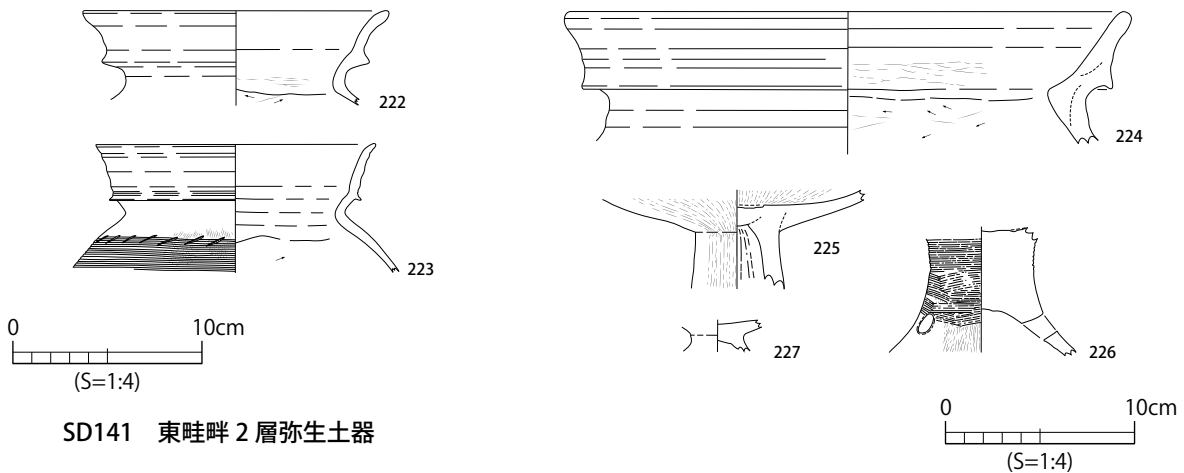
SD141 1層 N8グリット 東弥生土器  
 第35図 SD141 出土遺物実測図 11



SD141 1層 N8グリッド 東弥生土器



SD141 中央畦畔弥生土器



SD141 東畦畔 2層弥生土器

SD141 東畦畔 1層弥生土器

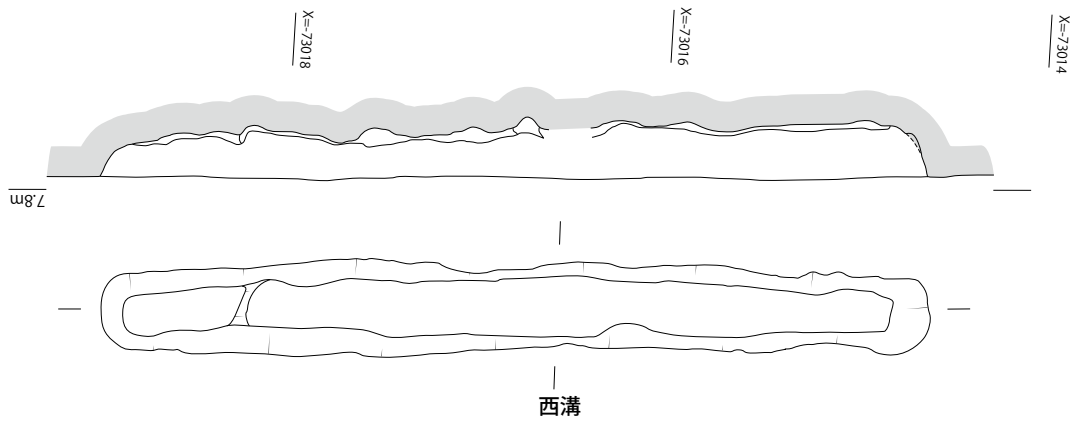
第 36 図 SD141 出土遺物実測図 12

構造は他の掘立柱建物跡と共通するが、2m × 2.2m と小規模で平面プランは正方形に近い。南側と北側で柱間距離に偏りがみられる。南側のはみ出た柱穴が SB103 の構造に関係するかどうかは不明である。南東隅の柱穴から 235 鼓形器台の破片が出土した。草田 4 期の土器である。

SB105・SE101 (第 41 ~ 44 図)

SB105 は 1 間 × 2 間の構造で、2m × 3.5m の規模の掘立柱建物跡である。SD141 以南の遺構群の中では最東端に位置する。SB105 北側の柱穴群がこの掘立柱建物跡の構造に関係するかは分からない。遺物は 236、237 の甕の破片が出土しており、いずれも草田 3 期である。

SB105 の西正面 (やや南) 2m の位置で SE101 井戸跡が検出された (第 16 図)。平面は不整形な楕円で幅 1.8m、長さ 2.2m である。検出面から井戸底まで 1.6m を測る。その井戸底には、丸太刳抜きの井戸枠が残っていた (第 42 図)。井戸枠材は 50 ~ 60cm の高さで残っており、復元す



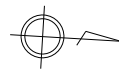
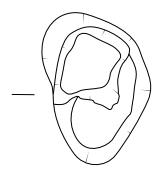
Y=51684

Pit1032  
棟持柱 (南)

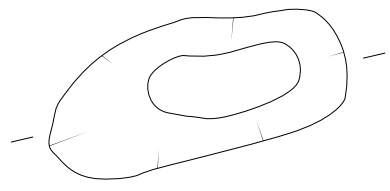


Y=51686

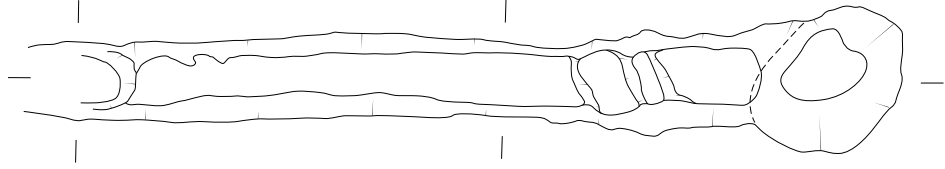
Pit1090  
棟持柱 (北)



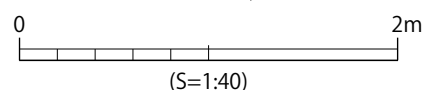
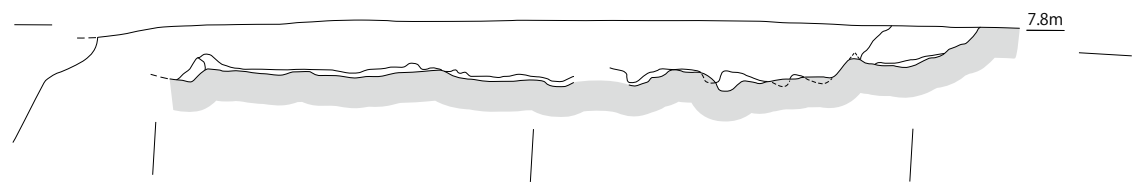
SK144



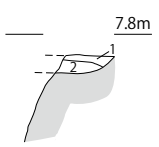
東溝



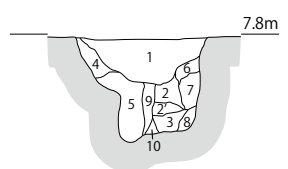
Y=51688



Pit1032  
棟持柱 (南)



Pit1090  
棟持柱 (北)



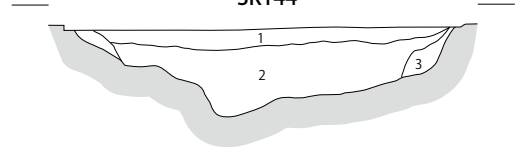
西溝 (中央)



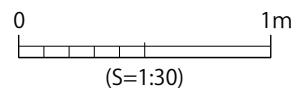
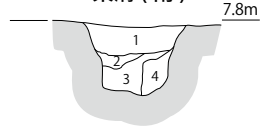
東溝 (中央)



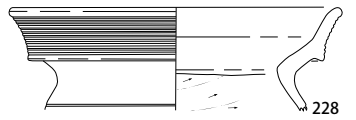
SK144



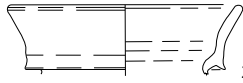
東溝 (南)



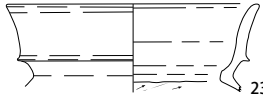
第 37 図 SB103 実測図



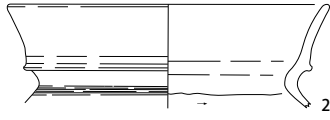
228



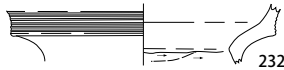
229



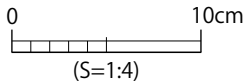
230



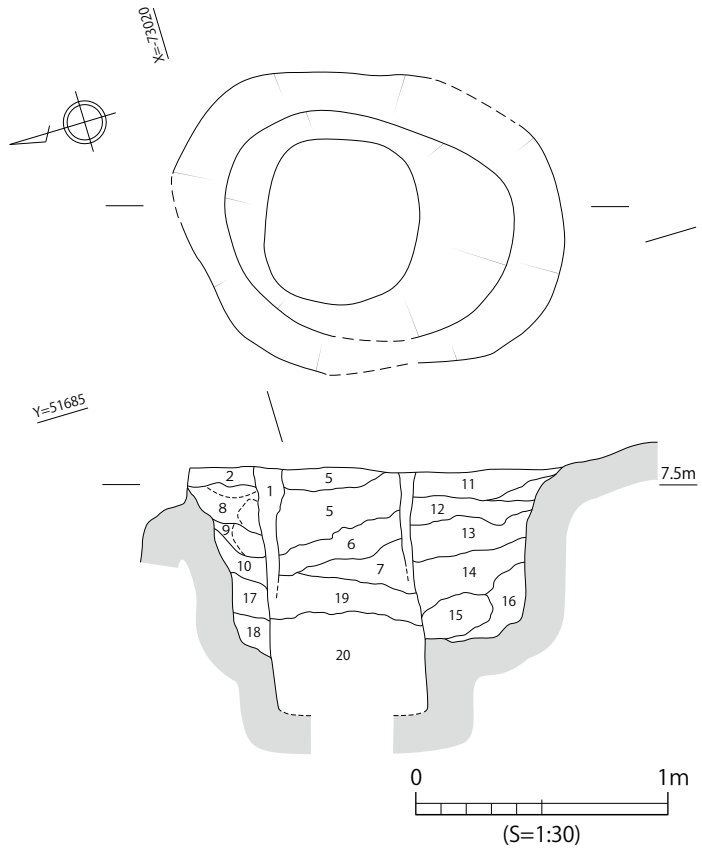
231



232



(S=1:4)



第 38 図 SB103 弥生土器実測図

独立棟持柱 (南)

1. 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 砂質で粘着性ないが粒子細かい
2. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/3) 地山の砂がやや汚れたような土層

独立棟持柱 (北、Pit90)

1. 灰白色土 (5Y4/1) 礫含まず粒子の細かい均一でよくしまった層。粘着性あまりない
2. 黄灰色土 (2.5Y5/1) 粒子きめ細かく、よくしまる。シルト質
- 2'. 黄褐色土 (2.5Y5/4) 2層を主体に1cm程のシルトが斑点状に混じる
3. 灰白色シルト (2.5Y8/1) 地山ブロック。地山主体で2層のブロック1cm程が上半に入る
4. にぶい黄色砂 (2.5Y6/3) 地山の砂と同じ層
5. 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘着性あまりない。粒子やや粗いがよくしまる
6. 黄灰色土 (2.5Y5/1) 粒子きめ細かく、よくしまる。シルト質。地山の砂混じる
7. 黒褐色土 (2.5Y3/1)
8. 5層と同じ
9. 黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘着性強い。粒子均一でよくしまる
10. 灰白色土 (5Y4/1) 粘着性なくシルト質。地山シルトが汚れたような土

西溝 (中央)

1. 黄灰色土 (2.5Y4/1) 礫等を含まない均一な層。粘着性弱い
2. 黄灰色土 (2.5Y4/1) やや砂質で粘着性ない
3. 黒褐色土 (2.5Y3/1) 壁際に砂のブロックあり。均一で粘着性比較的強い
4. //
5. 黒色土 (2.5Y2/1) 一番黒い層。粒子やや粗いが粘着性あり
6. 灰褐色粘質土 (7.5Y5/2) 黒褐色土、地山の砂が汚れたようなブロック混じる。最下部に黄褐色粘土が強く沈着

東溝 (中央)

1. 黒褐色土 (2.5Y3/1) 礫等を含まず均一な粒子の層。粘着性比較的あり
2. 地山の灰白砂、黒褐色土が混じり合った層
3. オリーブ褐色土 (2.5Y4/3) 砂質でザラツとした感あるが、粘着性若干あり。地山シルトの砂を多く含む
4. にぶい黄色土 (2.5Y6/4) 5mm程度の小さな黄色シルトブロックを斑点状に多く含む
5. 黄褐色土 (2.5Y5/3) 地山の砂、褐色土がきれいに混じり合った層
6. 黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘着性なくきめ粗い。砂のブロック所々含む
7. 黒褐色土 (2.5Y3/2) 砂・シルトをブロック状に多く含む

東溝 (南)

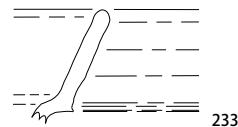
1. 黒褐色土 (10YR8/1) 礫等を含まず均一な粒子の層。粘着性比較的強い
2. 黒褐色土 (2.5Y3/1) 地山の砂質土を含むため粘着性ない
3. 地山の灰白砂、黒褐色土が混じり合った層
4. 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 砂質で粒子細かい。粘着性ない

SK144

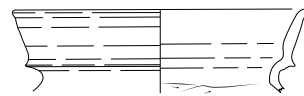
1. 灰褐色土 (7.5YR4/2) 粘着性強く、よくしまる
2. 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘着性強く、よくしまる。粘土質均一
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 地山シルトがやや汚れたような色調。地山ブロックか

SE102

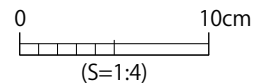
1. 黒褐色シルト質粘土 (2.5Y3/1) 粘土質の強い密な土。可塑性比較的強く、粒子均一
2. 黒褐色シルト (7.5Y3/1) 1cm程度の地山シルトブロック多く含む。可塑性、粘着性弱い
3. 黒色シルト (7.5Y2/1) 地山ブロック少ない
4. 黒褐色土シルト (10YR3/1) 2cm程度の地山シルトブロック多量を含む
5. 黒褐色粘土質シルト (7.5Y3/1) 1~2cmの地山シルトブロック多く含む
6. オリーブ黒色シルト質粘土 (5Y3/1) 地山ブロック少ない。粘着性可塑性強い
7. オリーブ黒色シルト質粘土 (5Y3/1) 2cm程度の地山ブロック多い。粘着性、可塑性強い
8. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) 10cm程度の地山シルトブロック含む
9. 8と同じシルトブロックの境界で分ける
10. 黒色シルト質砂 (2.5Y2/1) 1~2cmのシルトブロックと砂が混じり合う
11. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 1~2cm程度のシルトブロック若干含む
12. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 1~2cm程度のシルトブロック多く含む井戸掘削前の地山シルトで砂を埋め戻したもの (10層も同様)
13. 浅黄橙色シルト (10YR8/3) 砂、黒褐色土混じる。地山シルト80%
14. 浅黄褐色シルト (10YR8/3) 砂80%
15. 浅黄褐色シルト (10YR8/3) 地山シルトの塊
16. 浅黄褐色シルト (10YR8/3) 砂
17. 浅黄褐色シルト (10YR8/3) 80%シルトの塊
18. //
19. 黒色粘土 (2.5Y2/1) 粘着性、可塑性中程度。1cm程度の粒状地山ブロック混じる
20. //



233



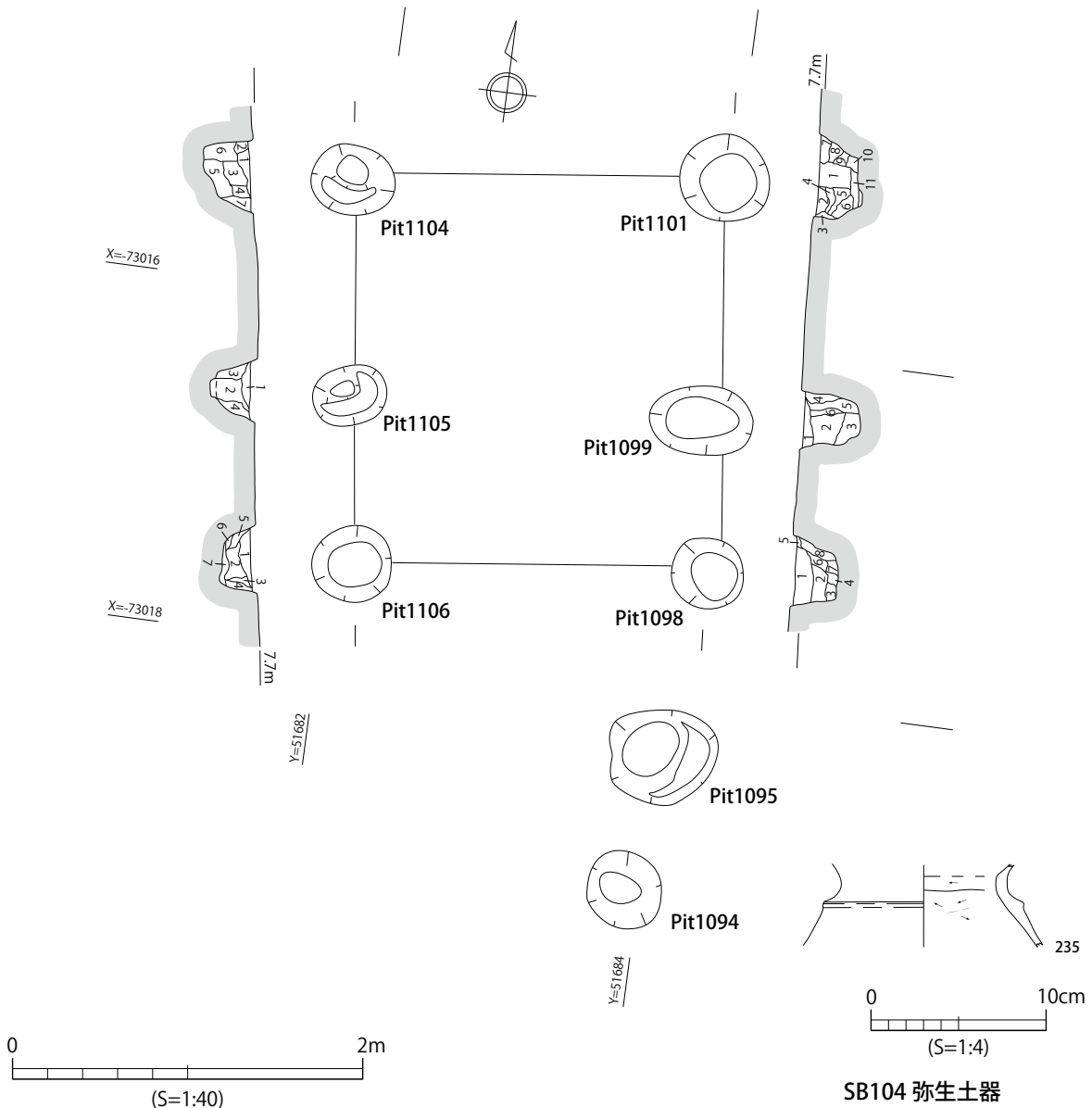
234



(S=1:4)

SE102 弥生土器

第 39 図 SE102 遺構・遺物実測図



SB104 弥生土器

SB104

Pit1104(西北柱)

1. 黄灰色シルト質粘土 (2.5Y5/1) 粘着性弱い。管状斑鉄多くみられる
2. 黄色シルト (2.5Y8/6) 地山シルトのブロック
3. 黄褐色シルト質粘土 (2.5Y5/3) 黄色地山シルトが1cm以内の粒状に多くみられる
4. 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 粘着性強い
5. 褐灰色粘土 (10YR4/1) 粘着性かなり強い。腐植土か
6. 褐灰色砂質シルト (10YR4/1) 地山シルト粒状に若干入る
7. 黄色砂 (2.5Y7/8) 地山の砂主体。淡い褐色土若干混じる

Pit1105(西中柱)

1. 褐灰色シルト質粘土 (7.5Y4/1) 粘着性弱い。管状斑鉄多くみられる
2. 黄灰色砂質シルト (2.5Y4/1)
- 2層下、黒褐色砂質シルト (10YR3/1) 粘着性非常に弱い。よくしまっており密。底付近は地山の砂がブロック状に入る。黒色味強く均一な層。腐植土と思われる
3. 灰色シルト質砂 (5Y4/1)
4. " 地山の砂が粒状の塊で多く入る

Pit1106(西南柱)

1. 暗黄灰色土 (2.5Y4/2) 粘着性あり、粒子やや均一性欠く。1~2mmの礫比較的多い
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘着性があるがざつつく。よくしまる。左半分粘着性強い
3. 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1) 地山の砂が黒っぽく汚れた色
4. 灰黄色砂 (2.5Y6/2) 地山の砂がやや黒ずんだ色
5. 黒褐色土 (2.5Y3/2) 砂、粒状ブロック多く含む。下半に黄色粘土ブロック多く含む
6. 色調性格は4層と同じ。地山の砂に起源あり
7. "

Pit1101(東北柱)

1. 褐灰色粘土 (10YR4/1) ~シルト質粘土 粘着性強く密で均一。上部に管状斑鉄みられる
2. 灰白色シルト (2.5Y8/2) 地山シルトのブロック層
3. 黒褐色粘土質シルト (10YR4/1) 粘着性弱い。管状斑鉄がみられ酸化部分多い
4. 灰オリーブ色砂質シルト (5Y4/2) 粘着性中程度。1cm程度の地山シルト塊が多くみられる
5. 灰オリーブ色粘土 (5Y4/2) 粘着性強く、密で均一な層。4・5層主体共通
6. 砂層 地山砂ブロック。灰色系の土のブロック若干混じる
7. 淡黄色シルト (2.5Y8/4) 地山シルトをそのまま裏込めに使用
8. 淡黄色シルト (2.5Y8/4) 7層と比べ灰褐色系の土が所々入る
9. にぶい黄色シルト (2.5Y6/4) 7→8→9層と灰褐色系の土比率高まる
10. 砂層 砂をそのまま裏込めに使用
11. オリーブ黒色シルト質粘土 (5Y3/1) 粘着性強い

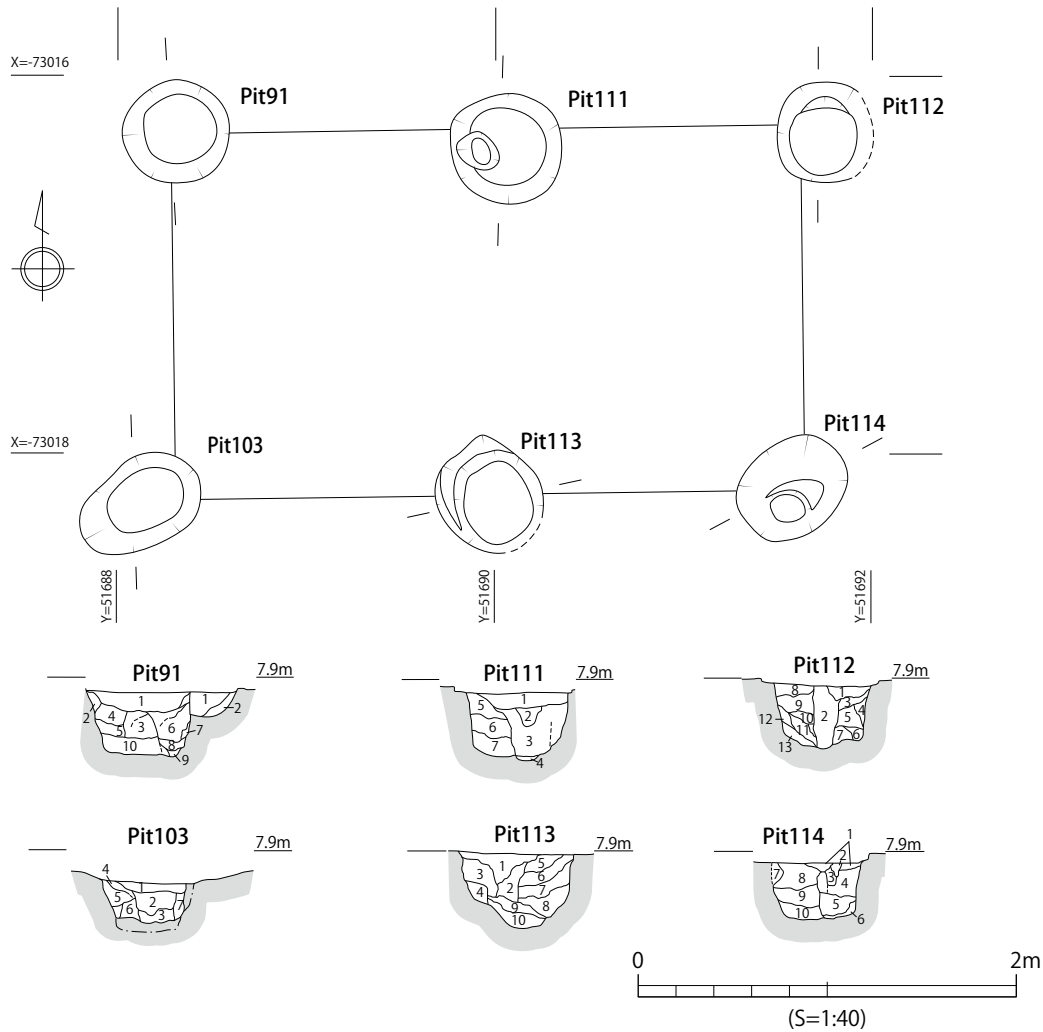
Pit1099(東中柱)

1. 褐灰色シルト質粘土 (10YR4/1) 粘着性強い。管状斑鉄が多くみられる
2. 黄灰色粘土質シルト (2.5Y4/1) 粘着性弱い。上部わずかにシルトブロック含む
3. 黒褐色シルト質粘土 (2.5Y3/1) 粘土質強い。粘着性強く密で均一な層。腐植土層か
4. 褐灰色砂質シルト (10YR4/1) 地山シルト粒状に多く入る
5. 黒褐色粘土 (10YR3/1) 粘着性弱い。砂・シルト混じらない
6. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 地山シルト粒状に若干入る

Pit1098(東南柱)

1. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 粘着性弱い。管状斑鉄多くみられる
2. 黄灰色粘土 (10YR4/1) 粘着性強く、密で均一。腐植土層
3. 淡黄色砂 (2.5Y8/4) 地山の砂にわずかに灰褐色系の土がブロックで入る
4. 黒色シルト質粘土 (2.5Y2/1) 粘着性、黒色味強い
5. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1)
6. 暗黄灰色粘土質シルト (2.5Y5/2) 均一な層で砂・シルト混入なし
7. 黄灰色シルト質粘土 (2.5Y3/1) 上部1cm程度地山の砂が乗る
8. 浅黄色砂 (2.5Y7/4) 灰褐色系の土若干混じる

第40図 SB104 実測図



SB105

Pit1091

(北西柱)

1. 灰色粘質土 (N4) 可塑性、粘着性強い。管状斑鉄多数みられる。主体の土は比較的還元状態にあったような色調
2. 黒褐色砂 (10YR3/1) 淡黄色砂混じる
3. 黒褐色粘土質シルト (2.5Y3/1) 均一で非常に密。可塑性、粘着性強い
4. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 可塑性強い
5. 4層+淡黄色砂 (地山) 砂が細かい単位で全体に混じる
6. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2) 可塑性中程度。均一な層
7. 6層+地山シルト
8. 灰白色砂 (2.5Y8/2) 地山の砂と同じもので混入する土なし
9. 暗灰黄色シルト質砂 (2.5Y4/2)
10. オリーブ黒色粘土 (5Y2/2) 非常に淘汰よく均一な粘土。シルト・砂のブロックはほとんど混じらない。可塑性、粘着性強く密

Pit1111(北中柱)

1. 灰色粘質土 (N4) 可塑性、粘着性強い。管状斑鉄多数みられる。主体の土は比較的還元状態にあったような色調
2. 黄灰色シルト質粘土 (2.5Y4/1)
3. 黒褐色砂質シルト (10YR3/1)
4. 灰色シルト (地山) ブロック 柱のあたり部分か
5. 褐灰色粘土 (10YR4/1) 管状斑鉄多くみられる
6. 黒褐色シルト質粘土 (2.5Y3/1)
7. 灰色シルト (地山)・6層がマール状に不規則に混じる

Pit1112(北東柱)

1. 暗灰黄色粘土質シルト (2.5Y5/2) 可塑性、粘着性弱い
2. 暗灰黄色シルト (2.5Y4/2) 淘汰よく密で均一。下から5cm範囲にシルトブロックあり
3. 黄灰色砂質シルト (2.5Y5/1) 可塑性非常に弱い
4. 浅黄色シルト (地山) (2.5Y7/4) 黄灰色土混じる
5. 浅黄色シルト (地山) (2.5Y7/4) 4層より黄色シルト少ない
6. 浅黄色シルト (地山) (2.5Y7/4) シルト少なくなる
7. 灰黄色シルト (地山) (2.5Y7/2) 黄灰色土若干混じる
8. オリーブ黒色シルト質粘土 (5Y3/1)
9. 灰オリーブ色砂質シルト (5Y4/2)
10. 暗灰黄色シルト (2.5Y4/2)
11. にぶい黄色シルト (2.5Y6/2) 黄色、灰色シルト、黄灰色土が不規則に混じりあう
12. 灰黄色シルト (2.5Y6/2) 本来の地山よりややくすんだ色
13. 灰白色シルト (2.5Y7/1) 地山ブロック。灰色土若干混じる

Pit1103 (南西柱)

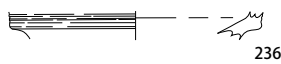
1. 黄灰色シルト質粘土 (2.5Y4/1)
2. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 可塑性、粘着性弱い
3. 2層+地山シルト粒状ブロック シルト質で可塑性、粘着性弱い
4. 黒褐色シルト (7.5Y3/1)
5. " 可塑性、粘着性なし
6. 褐灰色シルト (10YR4/1) 可塑性、粘着性なし
7. 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山シルトが粒状に多く入る

Pit1113(南中柱)

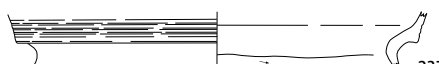
1. 黄灰色粘土質シルト (2.5Y5/1) 可塑性、粘着性弱い
2. 根痕
3. 黄色砂 (2.5Y7/8) 地山ブロックか。根痕もしくは柱痕の可能性
4. 褐灰色シルト質粘土 (10YR4/1)
5. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 4層より粘土質高い。可塑性、粘着性強く非常に密。上部2cm程度の所に灰白シルトが粒状に多く入る
6. 灰白色シルト、黒褐色土が1cm程度の小さいブロックで混じる
7. 褐灰色粘土 (10YR4/1) 可塑性強い。砂がラインの淵に沿って縦に入る。柱痕か
8. 褐灰色シルト質粘土 (10YR4/1)
9. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1)
10. 黒色シルト質粘土 (10YR2/1) 8・9層より粘土質弱い、淘汰よく非常に密。地山シルト斑点状に一部入る

Pit1114(南東柱)

1. 灰白色粘土質シルト (5Y5/1) 可塑性、粘着性弱い。2mm以下の砂粒あり
2. 黄灰色砂質シルト (2.5Y4/1) 可塑性、粘着性非常に弱い。砂粒少ない。非常に淘汰よく、密。1~2mmの灰色シルトブロック1カ所みられる
3. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 可塑性弱く、砂粒少ない
4. 黒褐色シルト質砂 (2.5Y3/1) 可塑性弱い。地山の黄色シルト砂が主体
5. 黒褐色砂質シルト (10YR3/1) 可塑性弱い
6. 黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 可塑性中程度。黄色地山シルトが粒状に入る
7. 黒褐色シルト質粘土 (2.5Y3/1) 可塑性強い。非常に淘汰のよい均一で密な層。砂粒少ない
8. " " " " " "
9. オリーブ黒色粘土質シルト (5Y3/2) 可塑性中程度。粘着性弱い。非常に淘汰よく均一で密な層
10. オリーブ黒色粘土 (5Y3/1) 主体は粘土。灰白地山シルトがブロック状に多く入る。この層のみブロック土多い

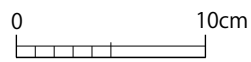


236



237

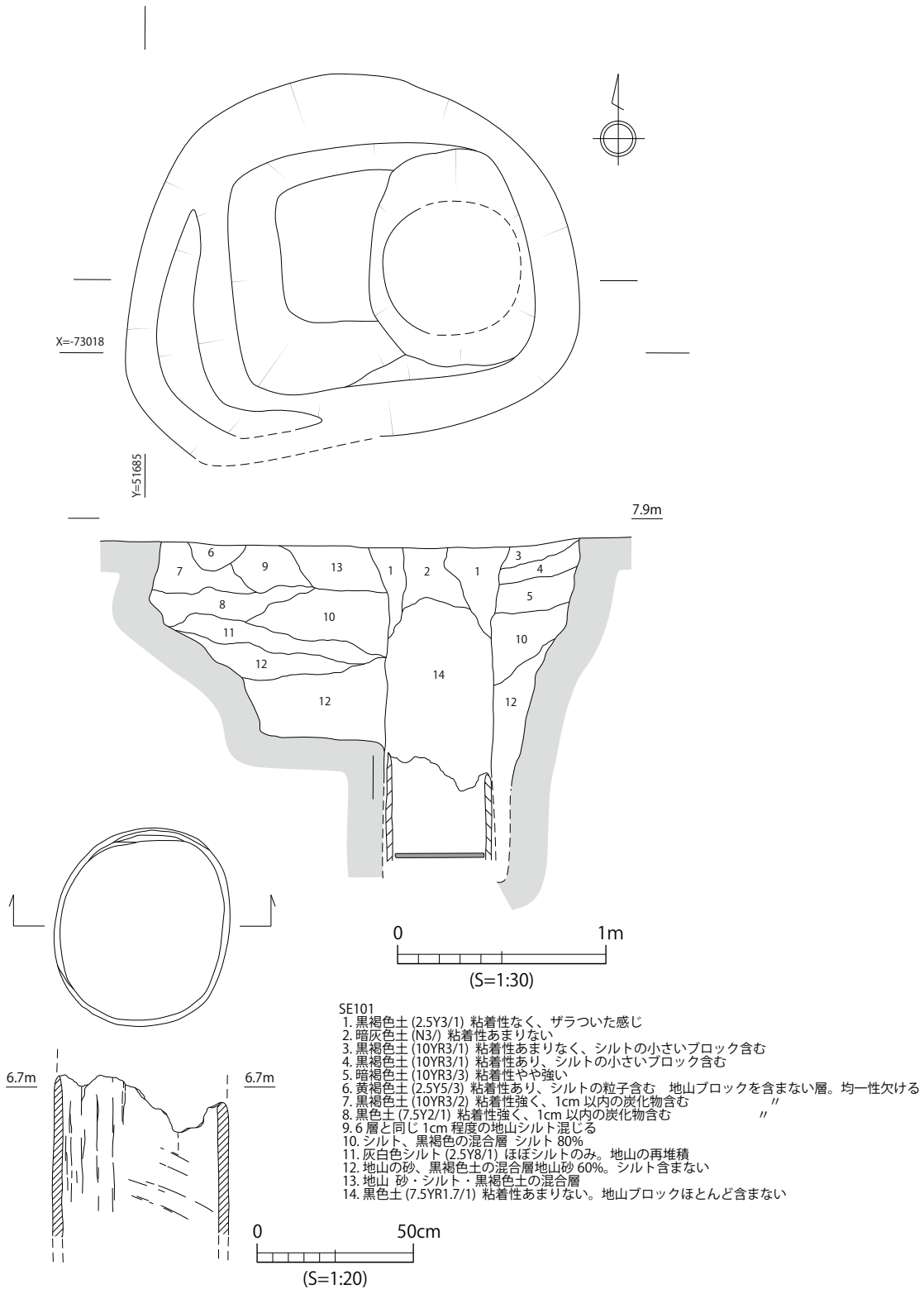
SB105 弥生土器



(S=1:4)

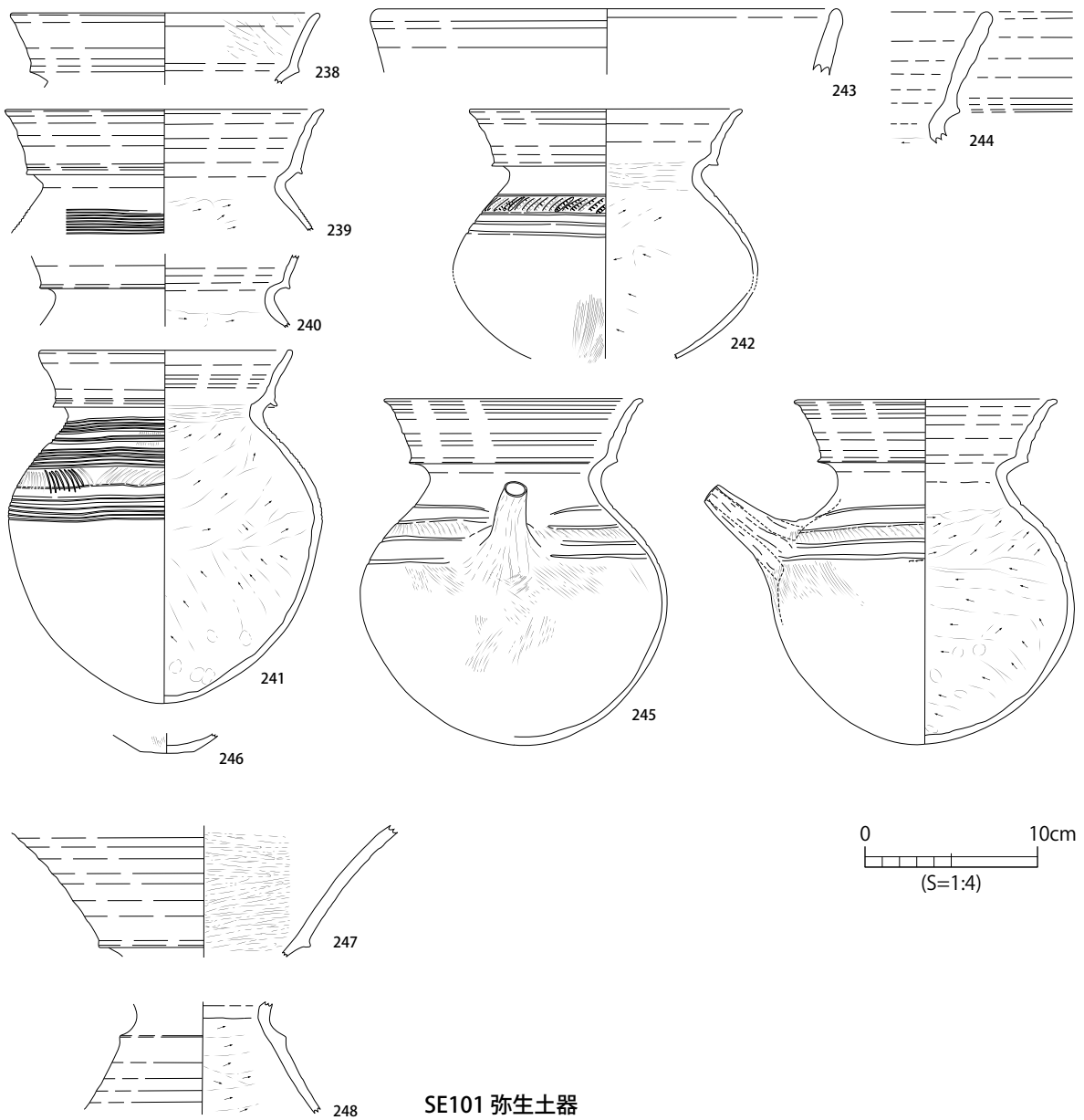
第41図 SB105 実測図



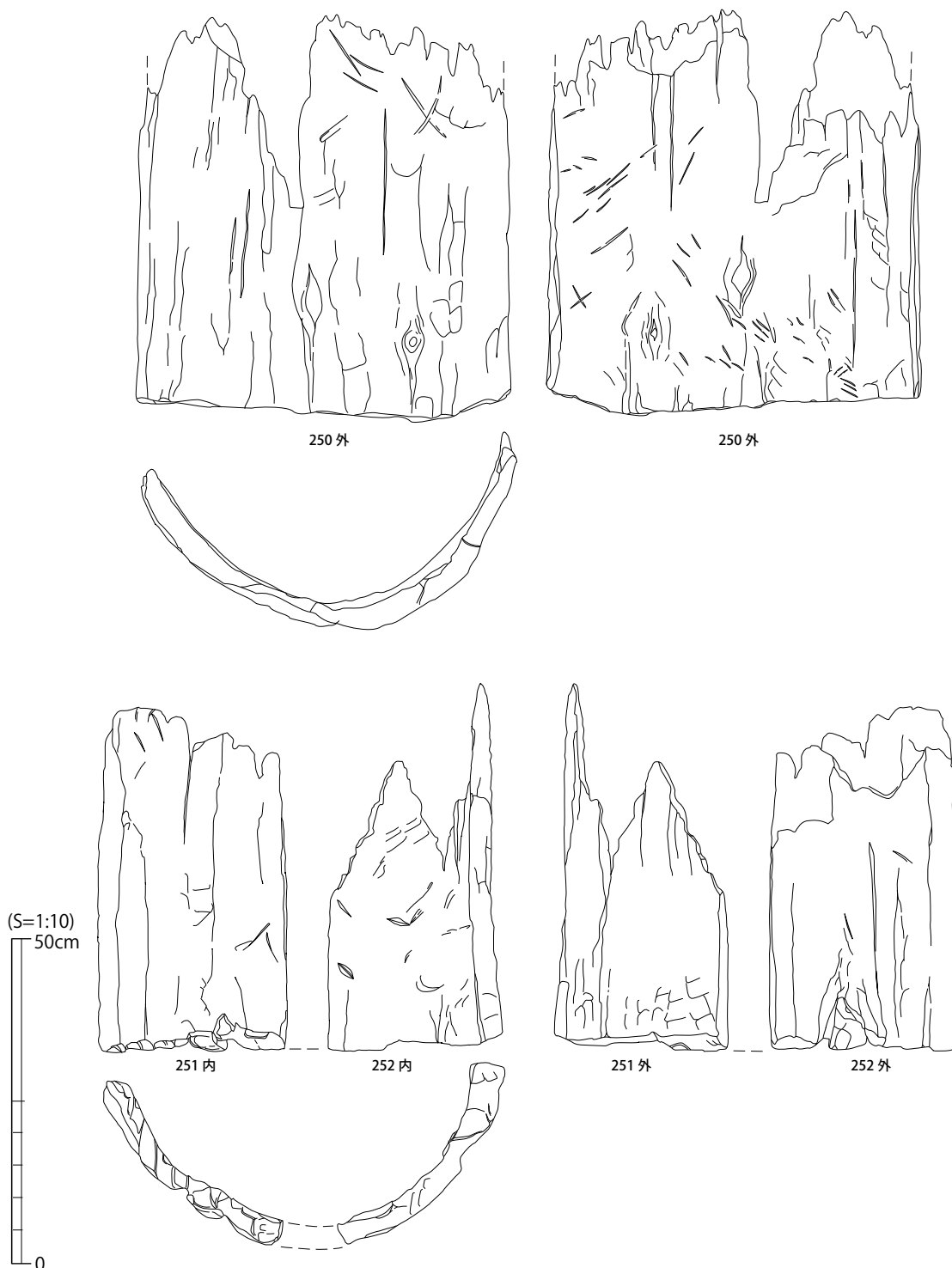


ると径 55～65cm となる。大きく 3 分割で取り上げることとなったが、部材の縦断面に切断痕があり、丸太をそのまま用いたのではなく径を調節して組み直したことがうかがえる。井戸底最底部には注口土器 245 の破片 1 個体分が一面に敷き詰められていた。

SE105 からは、主に井戸底部に近い部分から第 43 図に挙げた土器と木製品が出土した。238～242 は甕、243、244 は壺口縁の破片、245 は注口部が先細るタイプの注口土器、247、248 は鼓形器台である。



第 43 図 SE101 出土遺物実測図 1

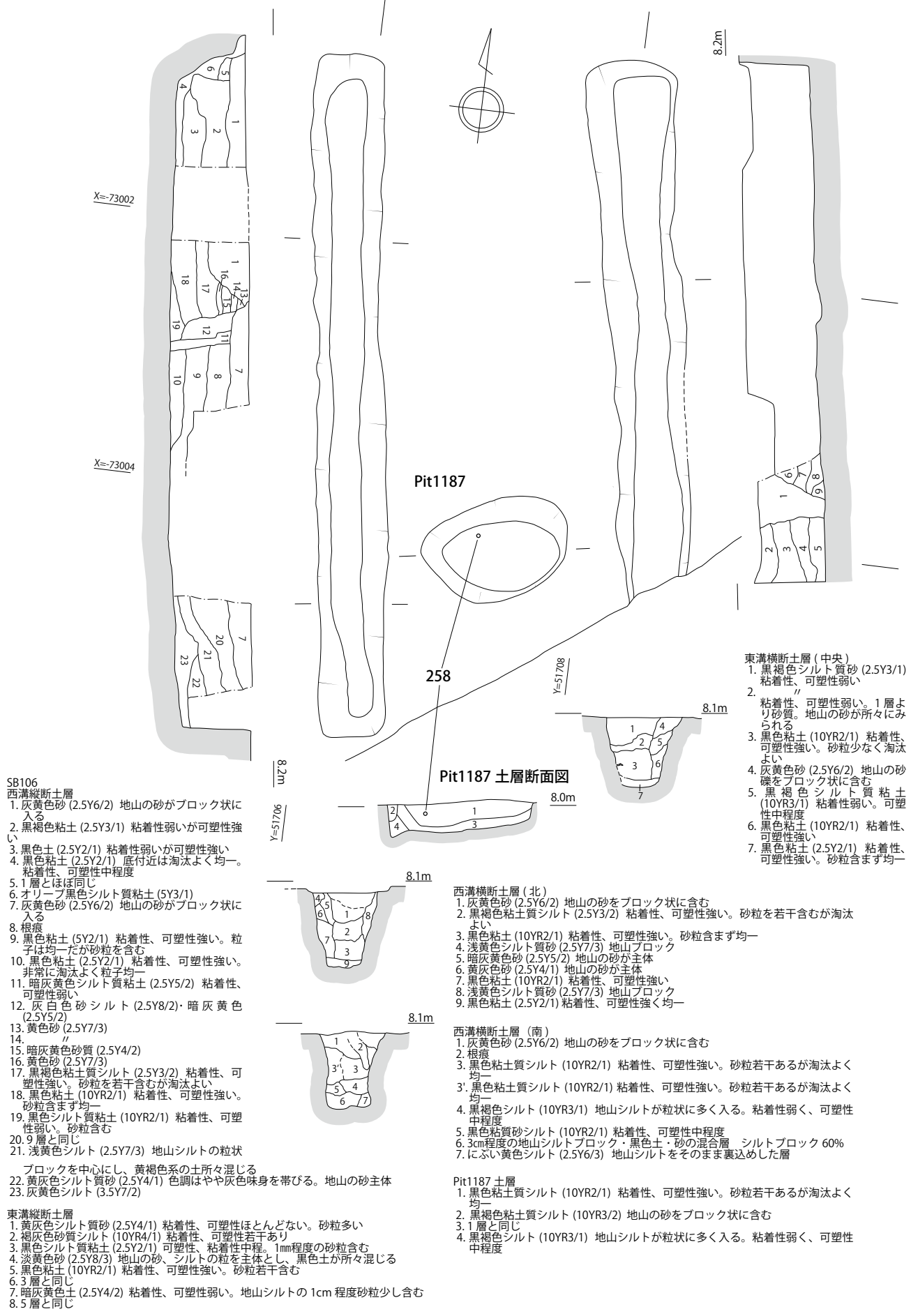
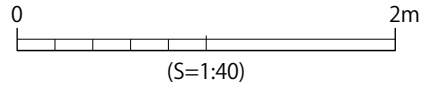


第 44 図 SE101 出土遺物実測図 2

241 は下段突出が下垂すること、施文の刺突がやや大きい。242 は肩が下がるが張っている。注口土器 245 は注口が比較的短い。鼓形器台も高さがあり扁平な感じにはなっていない。これらの特徴から草田 4 期と考えたい。

### SD141 以北の遺構群について

SD141 以北の遺構群は以南の遺構群に比べてまとまりを欠く。南側の遺構群の軸方位が SD141 に対してほぼ直行あるいは平行するのに比べ、北側の遺構群は、棟軸の方位に任意性が強いように

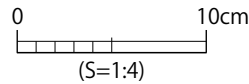
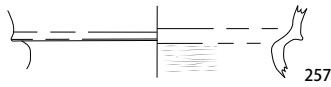
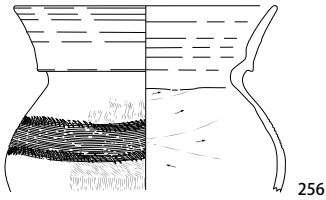
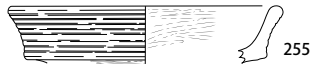
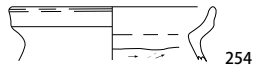
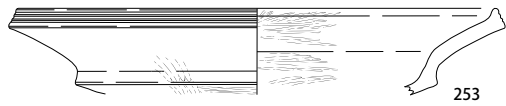


- SB106  
西溝縦断土層
1. 灰黄色砂 (2.5Y6/2) 地山の砂がブロック状に入る
  2. 黒褐色粘土 (2.5Y3/1) 粘着性弱い可塑性強い
  3. 黒色土 (2.5Y2/1) 粘着性弱い可塑性強い
  4. 黒色粘土 (2.5Y2/1) 底付近は淘汰よく均一。粘着性、可塑性中程度
  5. 1層とほぼ同じ
  6. オリーブ黒色シルト質粘土 (5Y3/1)
  7. 灰黄色砂 (2.5Y6/2) 地山の砂がブロック状に入る
  8. 根痕
  9. 黒色粘土 (5Y2/1) 粘着性、可塑性強い。粒子は均一だが砂粒を含む
  10. 黒色粘土 (2.5Y2/1) 粘着性、可塑性強い。非常に淘汰よく粒子均一
  11. 暗灰黄色シルト質粘土 (2.5Y5/2) 粘着性、可塑性弱い
  12. 灰白色砂シルト (2.5Y8/2)・暗灰黄色 (2.5Y5/2)
  13. 黄色砂 (2.5Y7/3)
  14. //
  15. 暗灰黄色砂質 (2.5Y4/2)
  16. 黄色砂 (2.5Y7/3)
  17. 黒褐色粘土質シルト (2.5Y3/2) 粘着性、可塑性強い。砂粒を若干含むが淘汰よい
  18. 黒色粘土 (10YR2/1) 粘着性、可塑性強い。砂粒含まず均一
  19. 黒色シルト質粘土 (10YR2/1) 粘着性、可塑性弱い。砂粒含む
  20. 9層と同じ
  21. 浅黄色シルト (2.5Y7/3) 地山シルトの粒状ブロックを中心に、黄褐色系の土所々混じる
  22. 黄灰色シルト質砂 (2.5Y4/1) 色調はやや灰味身を帯びる。地山の砂主体
  23. 灰黄色シルト (3.5Y7/2)
- 東溝縦断土層
1. 黄灰色シルト質砂 (2.5Y4/1) 粘着性、可塑性ほとんどない。砂粒多い
  2. 相灰色砂質シルト (10YR4/1) 粘着性、可塑性若干あり
  3. 黒色シルト質粘土 (2.5Y2/1) 可塑性、粘着性中程。1mm程度の砂粒含む
  4. 淡黄色砂 (2.5Y8/3) 地山の砂、シルトの粒を主体とし、黒色土が所々混じる
  5. 黒色粘土 (10YR2/1) 粘着性、可塑性強い。砂粒若干含む
  6. 3層と同じ
  7. 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 粘着性、可塑性弱い。地山シルトの1cm程度砂粒少し含む
  8. 5層と同じ

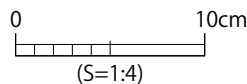
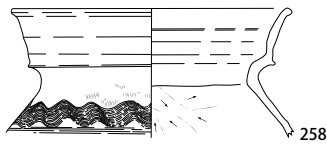
- 東溝横断土層 (中央)
1. 黒褐色シルト質砂 (2.5Y3/1) 粘着性、可塑性弱い
  2. //
  3. 黒色粘土 (10YR2/1) 粘着性、可塑性強い。砂粒少なく淘汰よい
  4. 灰黄色砂 (2.5Y6/2) 地山の砂礫をブロック状に含む
  5. 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/1) 粘着性弱い。可塑性中程度
  6. 黒色粘土 (10YR2/1) 粘着性、可塑性強い
  7. 黒色粘土 (2.5Y2/1) 粘着性、可塑性強い。砂粒含まず均一
- 西溝横断土層 (北)
1. 灰黄色砂 (2.5Y6/2) 地山の砂をブロック状に含む
  2. 黒褐色粘土質シルト (2.5Y3/2) 粘着性、可塑性強い。砂粒を若干含むが淘汰よい
  3. 黒色粘土 (10YR2/1) 粘着性、可塑性強い。砂粒含まず均一
  4. 浅黄色シルト質砂 (2.5Y7/3) 地山ブロック
  5. 暗灰黄色砂 (2.5Y5/2) 地山の砂が主体
  6. 黄灰色砂 (2.5Y4/1) 地山の砂が主体
  7. 黒色粘土 (10YR2/1) 粘着性、可塑性強い
  8. 浅黄色シルト質砂 (2.5Y7/3) 地山ブロック
  9. 黒色粘土 (2.5Y2/1) 粘着性、可塑性強く均一
- 西溝横断土層 (南)
1. 灰黄色砂 (2.5Y6/2) 地山の砂をブロック状に含む
  2. 根痕
  3. 黒色粘土質シルト (10YR2/1) 粘着性、可塑性強い。砂粒若干あるが淘汰よく均一
  - 3'. 黒色粘土質シルト (10YR2/1) 粘着性、可塑性強い。砂粒若干あるが淘汰よく均一
  4. 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山シルトが粒状に多く入る。粘着性弱く、可塑性中程度
  5. 黒色粘質砂シルト (10YR2/1) 粘着性、可塑性中程度
  6. 3cm程度の地山シルトブロック・黒色土・砂の混合層 シルトブロック 60%
  7. に近い黄色シルト (2.5Y6/3) 地山シルトをそのまま裏込めた層

- Pit1187 土層
1. 黒色粘土質シルト (10YR2/1) 粘着性、可塑性強い。砂粒若干あるが淘汰よく均一
  2. 黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 地山の砂をブロック状に含む
  3. 1層と同じ
  4. 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山シルトが粒状に多く入る。粘着性弱く、可塑性中程度

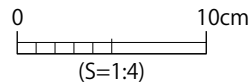
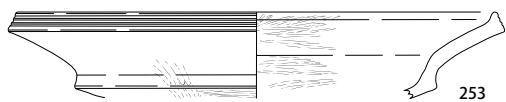
第 45 図 SB106 実測図



SB106 弥生土器



Pit1187 弥生土器



SB107 弥生土器

第 46 図 SB106・SB107 出土遺物実測図

思われ、SD141 との関連は強くないと思われる。

### SB106・Pit1187 (第 45 図)

SB106 は 2 本の溝からなる布掘建物跡である。調査区東部に位置し、遺構の一部が調査区南壁に食い込んでいる。溝長は 5.1m、溝間は 2.3m、溝自体の深さは 55cm を測る。SB103 と比較すると溝間は狭く、溝長は長い。溝の深さは深いがこのことは SB106 の方が検出面が高いことも関係していると思われる。SB106 の平面プランは、むしろ、市 1 次調査 B 区で検出された SB04 ～ 06 の布掘建物跡と共通する。

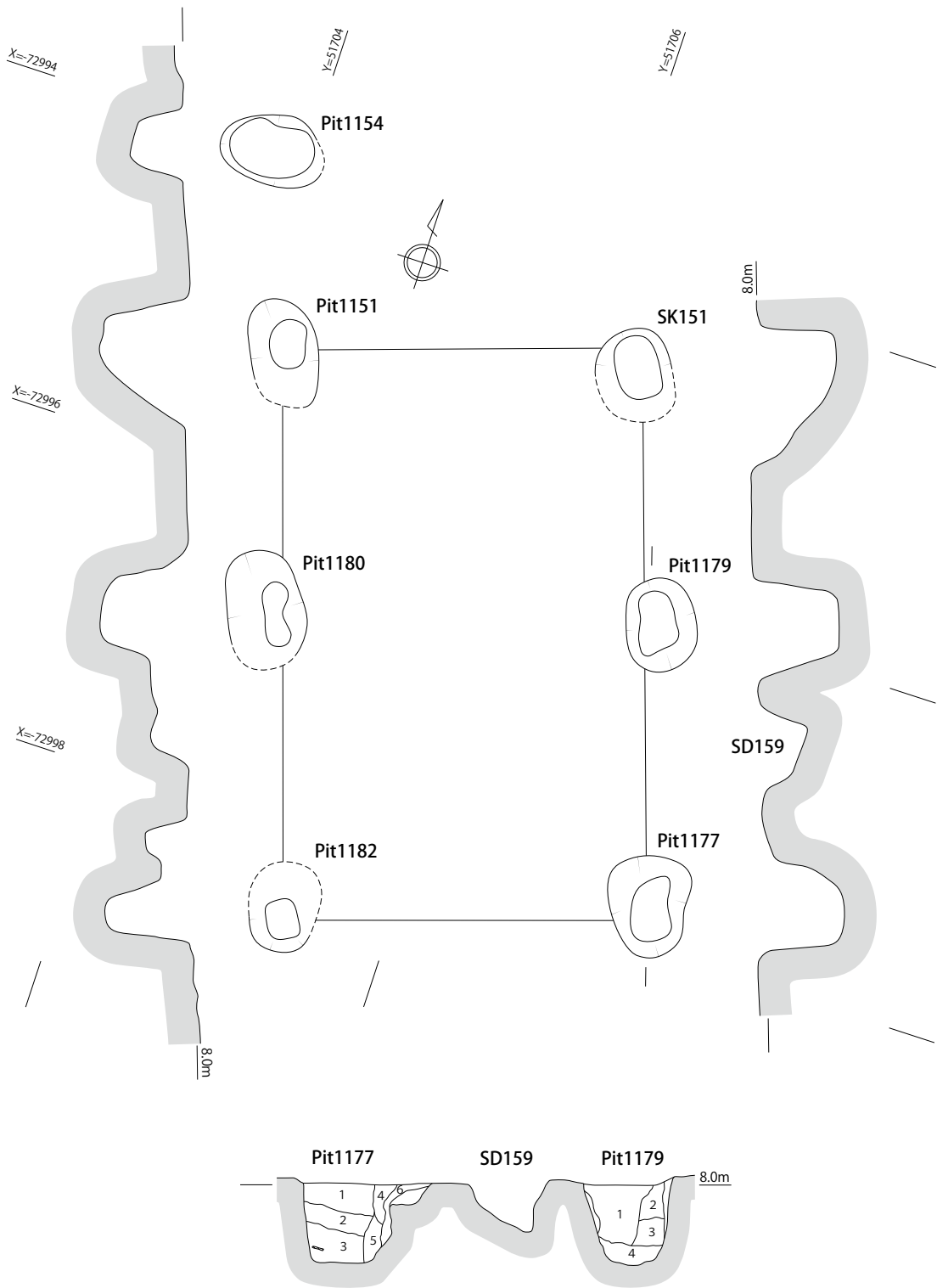
東溝跡から第 46 図に挙げた 253 ～ 257 の土器が出土している。253 は搬入系の高坏と思われる。この土器は坏部の中腹が 2 段に屈曲する形状から、弥生時代後期後半～終末期の中におさまるものと思われる。この高坏は、SB107 の南東隅 Pit1177 の底部から出土したものと接合関係にある。254 は甕の小品、255 は草田 3 期の甕口縁の破片、257 は鼓形器台の破片である。256 は胴部最大径の位置が下がり、刺突文で多条平行線文の上下を挟み巡らしている。草田 5 期の土器である。

SB106 布掘建物跡は、検出面からみて Pit1187 の伏甕土坑を内包している可能性がある。この土坑は、平面楕円形、断面皿状を呈し幅 75cm、長さ 1.1m、深さ 20 センチを測る。堆積土の上層で 258 甕が逆さまに出土している。下半分が打ちかけられ、肩部から上のみ残っていた。比較的波長の短い波状文と多条平行線文を巡らす草田 4 期の土器である。

出土土器に草田 5 期の土器を含んでいることと、253 高坏が分割して SB107 から出土していることから、SB106 は SB107 と廃絶時期が一致し、1 区 -2 建物遺構の中で最も新しいと考えられる。

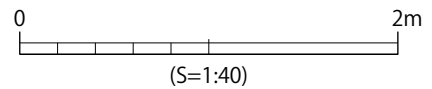
### SB107

SB107 は、調査区東部で検出された。1 間 × 2 間の構造で 2.3m × 3.5m の規模である。棟軸方位が若干ねじれているが、SB106 と対の位置にあると考えられる。出土土器が接合関係にあることから

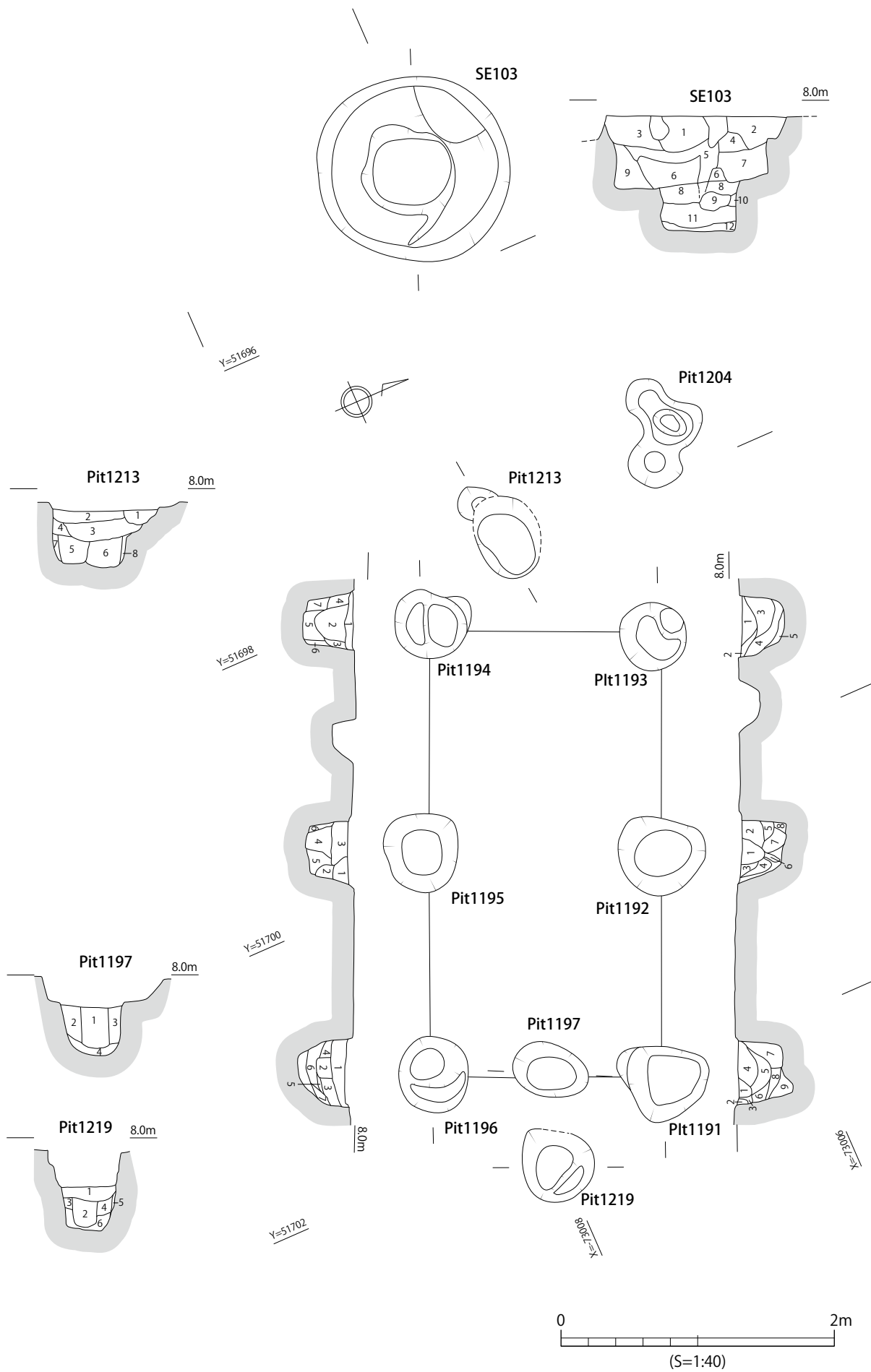


- SB107  
Pit177
1. オリーブ黒色粘質砂 (5Y3/1) 灰白色シルト少し含む (5Y7/2)
  2. オリーブ黒色粘質土 (5Y2/2) 灰オリーブ色砂若干含む (5Y4/2)
  3. 黒色粘質土 (5Y2/1) 均質で粘性性強い。弥生後期土器含む
  4. オリーブ黒色粘質シルト (5Y3/1) 灰オリーブ色砂ブロック (5Y5/2) 一部含む
  5. オリーブ黒色粘質土 (5Y2/2) しまり弱い
  6. 灰オリーブ色砂 (5Y5/2)・オリーブ黒色粘質土 (5Y2/2) 混交層

- Pit179
1. オリーブ黒色粘質砂層 (5Y3/1) 灰白色砂 (5Y7/2) 少し含む
  2. オリーブ黒色粘質砂 (5Y2/2)
  3. //
  4. 黒色粘質シルト層 (5Y2/1) 灰白色砂シルト (5Y7/1) 若干含む  
地山 灰白色砂シルト (5Y7/2)



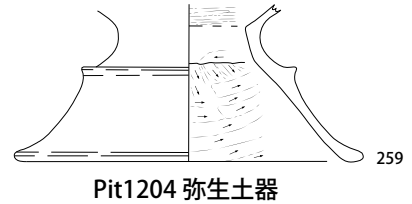
第 47 図 SB107 実測図



第 48 图 SB108・SE103 実測图

SE103

1. 灰オリブ色砂質土 (SY4/2) 灰色シルトブロック (SY7/2) を非常に多く含み、3mmの小石多く含む
2. オリブ黒色砂質土 (SY3/1) 灰色シルトブロック (SY7/2) を非常に多く含み、3mmの小石多く含む
3. オリブ黒色砂質土 (SY3/2) 1cm 軽石片、砂礫若干含む
4. オリブ黒色粘質砂層 (SY3/1)
5. オリブ黒色砂質層 (SY3/2)
6. オリブ黒色砂層 (SY3/1) 1cm 程度シルトブロック砂礫を若干含む
7. 黒色粘質砂層 (SY2/1) シルトブロック多く含む
8. オリブ黒色粘質砂層 (SY3/1)
9. 黒色粘質砂層 (SY2/1)
10. 浅黄色粘質砂ブロック層 (SY7/4)
11. 黒色粘質砂層 (SY2/1)
12. 砂礫層 (SY2/1) 黒色粘質砂多く混じる



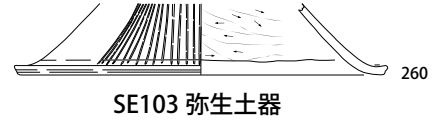
Pit1204 弥生土器

SB108

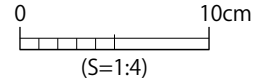
南西列

Pit1196

1. オリブ黒色粘質土 (SY3/1)
2. オリブ黒色粘質土 (SY3/1) 灰白色砂ブロック (SY7/2) 混じる。3・4層に比べしまり弱い
3. オリブ黒色粘質土 (SY3/1) 灰白色シルトブロック (SY7/2) 若干混じる
4. //
5. オリブ黒色粘質土 (SY3/3)
6. 黒色粘質土 (SY2/1)
7. 灰色粘質土 (SY4/1) 浅黄砂ブロック (SY7/3) 混じる



SE103 弥生土器



Pit1195

1. 灰色粘質土 (SY4/1) しまり弱い
2. オリブ黒色粘質土 (SY3/1) 灰白色シルト (SY7/2) 若干混じる
3. オリブ黒色粘質土 (SY2/2) 砂粒少し混じる
4. 黒色粘質土 (SY2/1)
5. 黒色粘質土 (SY2/1) 灰白色シルト (SY7/2) 若干混じる
6. //

第 49 図 SB108・SE103 出土遺物実測図

Pit1194

1. 灰色粘質土 (SY4/1)
2. オリブ黒色粘質土 (SY2/2)
3. オリブ黒色粘質土 (SY3/1)
4. オリブ黒色粘質土 (SY3/1) 灰白色シルト (SY7/2) 少し混じる
5. 黒色粘質土 (SY2/1)
6. 黒色粘質土 (SY2/1) 灰白色シルトブロック (SY7/2) 多く混じる
7. 黒色粘質土 (SY2/1) 5層に比べしまり強い

中央列

Pit1213

1. オリブ黒色粘質土 (SY3/1)・灰オリブ砂 (SY4/3)・灰白色シルト (SY7/2) 混交層
2. オリブ黒色粘質土 (SY3/1) 3mm程の礫若干混じる。均質な層
3. オリブ黒色粘質土 (SY3/1) 1~3mm 砂礫少し混じる
4. オリブ黒色粘質土 (SY3/2)
5. オリブ黒色粘質土 (SY2/2) 6層に比べしまり強い
6. オリブ黒色粘質土 (SY2/2) 5層に比べしまり弱い
7. オリブ黒色粘質土 (SY3/1)
8. 灰色粘土層 (SY4/1) 灰白色シルトブロック (SY7/2) 多く混じる

北東列

Pit1193

1. オリブ黒色粘質土 (SY3/2) 砂粒若干
2. 灰色粘質土 (SY4/1) 灰白色シルト (SY7/2) 混じる
3. 黒色粘質土 (SY3/1) 灰白色シルト (SY7/2) 多く混じる
4. 黒色粘質土 (SY2/1) 浅黄砂ブロック (SY7/3) 混じる
5. 灰オリブ色砂層 (SY6/2) 4層土混入

Pit1197

1. オリブ黒色粘質土 (SY3/1) 2・3層に比べしまり弱い
2. 黒色粘質土 (SY2/1)
3. //
4. オリブ黒色粘質砂 (SY2/1)

Pit1192

1. オリブ黒色粘質土 (SY3/1) 灰白色シルトブロック (SY7/2) 混じる
2. オリブ黒色粘質土 (SY3/1) 灰白色シルトブロック (SY7/2) 混じる。1層に比べしまり強い
3. //
4. 暗オリブ色砂層 (SY4/4) 灰白色シルト (SY7/2) 混じる
5. //
6. 灰オリブ色砂層 (SY5/2)
7. 灰白色シルト層 (SY7/2) 灰オリブ砂 (SY5/2) 多く混じる
8. オリブ黒色粘質砂層 (SY2/2)

Pit1219

1. 黒色粘質土 (SY2/1)
2. オリブ黒色粘質土 (SY2/2)
3. オリブ黒色粘質土 (SY3/1)
4. //
5. 4層土・灰白色シルトブロック (SY7/2) 混交層
6. 黒色粘質土 (SY2/1) 砂粒多く混じる

Pit191

1. オリブ黒色粘質土 (SY3/2) 白色細砂粒若干混じる
2. オリブ黒色粘質土 (SY3/2) 白色細砂粒多く混じる
3. 灰色砂 (SY4/1)・灰白色シルト (SY7/2) 混交層
4. オリブ黒色粘質土 (SY3/2) 2mm 程度の白色砂粒多く混じる
5. オリブ黒色粘質土 (SY3/1) 2mm 程度の白色砂粒若干混じる
6. オリブ黒色粘質土 (SY3/2)
7. オリブ黒色粘質土 (SY3/1) 灰白色シルト (SY7/2) 多く混じる
8. オリブ黒色粘質土 (SY3/1) 灰白色シルト (SY7/2) 非常に多く混じる
9. 灰白色シルト (SY7/2)・灰色土 (SY4/1) 混交層

SB106 と廃絶時期が一致し、1区-2建物遺構の中で最も新しいと考えられる。柱穴痕跡の平面形が隅丸長方形を呈する特徴がある。

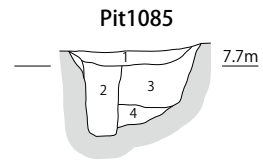
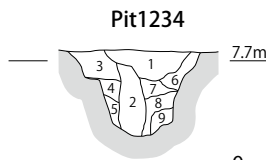
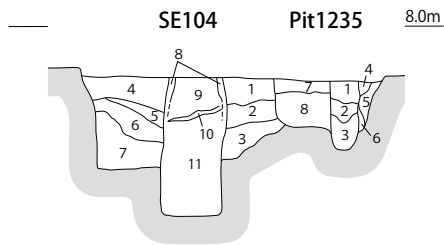
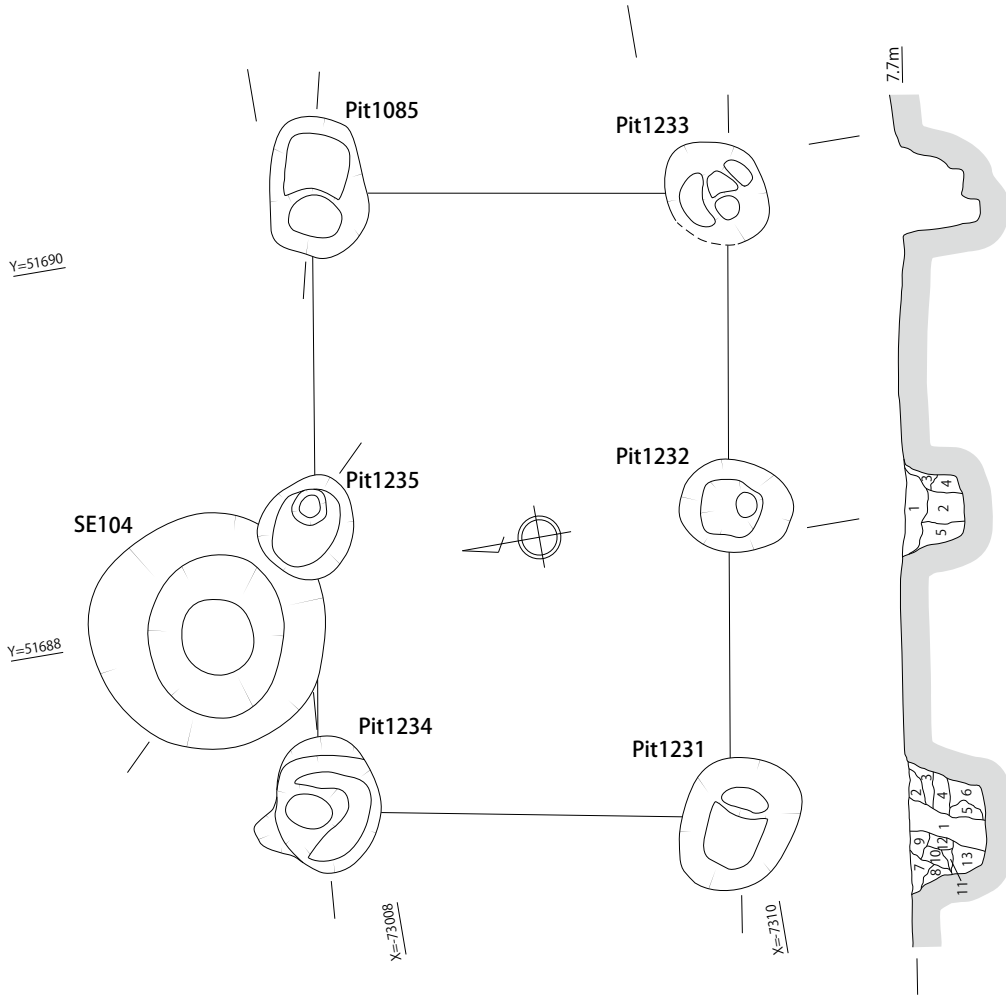
**SB108・SE103** (第 48 図)

SB108 掘立柱建物跡は、SD141 直行溝の東端が調査区の南壁に突入するあたりから北 3.5m の位置で検出された (第 16 図)。西側の棟線の西延長線上 3m の位置に、SE103 井戸跡が検出されており、位置関係と出土遺物の時期が同時期であることから、両者がセット関係にあることが考えられる。

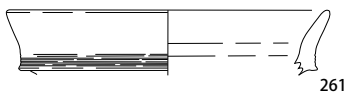
SB107 は 1 間×2 間の構造で 1.75m×3.3m の規模である。調査区内の建物跡群の中では SB104 に次いで小規模である。構造的には、プラン西側の Pit1213 と東側の Pit1219 が棟持柱である可能性があると思われる。また、Pit1204 は不整形なピットで 259 の草田 4 期の鼓形器台の破片が出土している。東側の棟線の延長線上にあり、SB108 と関連があると思われる。

SE103 の平面形はほぼ円形、断面は二段掘りの逆凸状である。中段がステップになっている。中段の床面から、第 52 図に挙げた 260 の草田 4 期の鼓形器台が出土している。





(S=1:40)



(S=1:4)

SB109 弥生土器

SE104

1. 灰黄褐色土 (10YR5/2)
2. 灰白色シルト (2.5Y7/1) 地山の粒による層
3. 黄灰色土 (2.5Y4/1) 地山の砂が薄く層状に入る
4. 灰黄褐色土 (10YR5/2)
5. 灰白色地山シルトブロック (10YR8/1)
6. 灰白色シルト (2.5Y7/1) 地山の粒による層
7. 地山シルトの10cm以上大きな塊からなる層
8. 暗褐色土 (7.5YR3/3)
9. 黒褐色土 (10YR3/2)
10. 黒褐色土 (10YR2/2)
11. 暗褐色土 (10YR3/3) 均一で細かい粒子

SB109

南列

- Pit1232
1. 暗灰黄色土 (2.5Y4/2)
  2. 黒褐色土 (2.5Y3/2)
  3. オリーブ黒色土 (5Y3/2)
  4. オリーブ黒色土 (5Y3/1)
  5. "

Pit1231

1. 黒褐色土 (2.5Y3/1)
2. オリーブ褐色土 (5Y3/1) シルトの砂混じる
3. オリーブ褐色土 (5Y3/1) シルト3cm程度の塊を含む
4. オリーブ褐色土 (5Y3/1) シルト含まない
5. 黒色土 (5Y2/1)
6. 黒色土 (5Y2/1) シルトが粒状に多く含まれる
7. 淡黄色砂 (5Y8/3) 黒色土混じる
8. 黄色シルト (7.5Y8/6)
9. 黄灰色土 (2.5Y5/1)
10. "
11. "
12. 黄灰色土 (2.5Y4/1) 灰白色地山粘土を粒状に多く含む

北列

Pit1085

1. 黒褐色土 (2.5Y3/2)
2. オリーブ黒色土 (5Y2/1)
3. オリーブ黒色土 (5Y3/1)
4. 灰色地山シルト

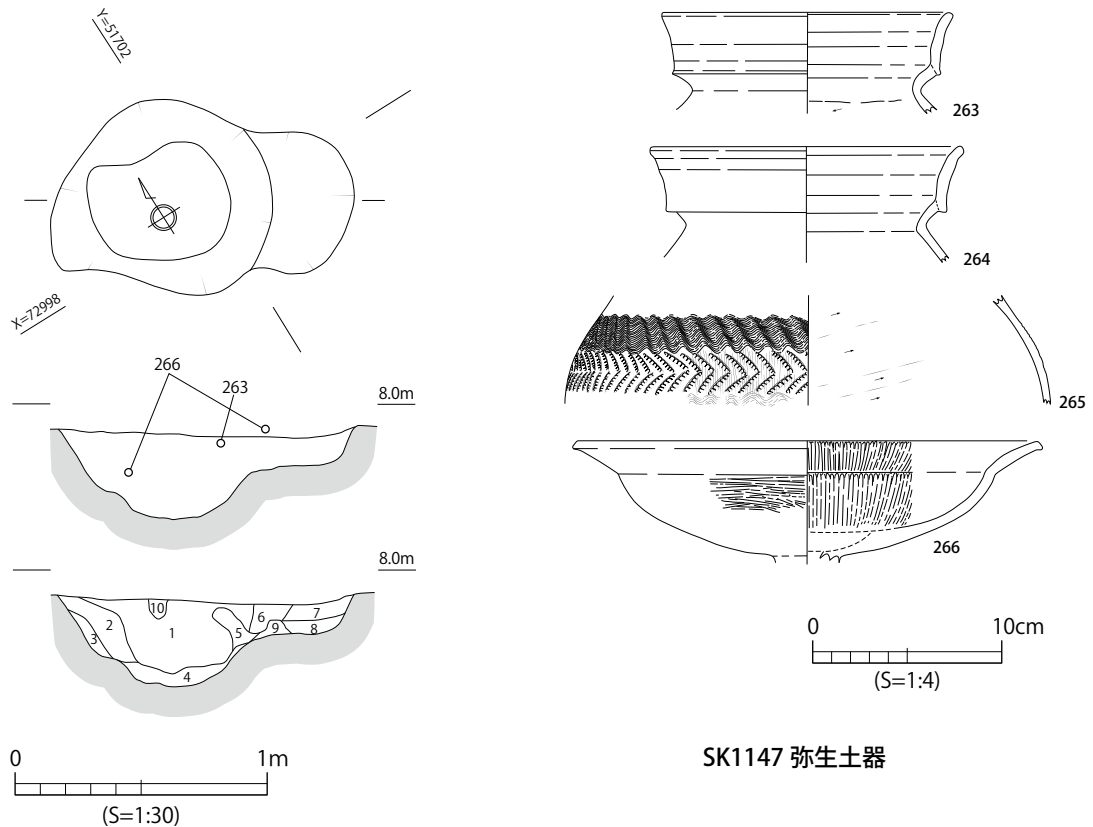
Pit1234

1. 黒褐色土 (2.5Y3/2)
2. オリーブ黒色土 (5Y2/1)
3. 灰オリーブ色土 (5Y4/2) 灰色シルト粒状に多く含む
4. 灰オリーブ色土 (5Y4/2) シルト含まない
5. 灰オリーブ色土 (5Y4/2) シルトブロック状に含む
6. 暗灰黄色土 (2.5Y4/2)
7. 4層と同じ
8. オリーブ黒色土 (5Y3/1)
9. 灰色地山シルト

Pit1235

1. 黒褐色土 (10YR3/2) 均一性欠く
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性性强く粒子細かくしめる。シルト混じる
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性性强く粒子細かくしめる
4. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 均一性欠く。粘性性弱い
5. 黄色シルトの二次的な層
6. 褐灰色土 (10YR4/1) シルト質。きめ細かい
7. 4層と同じ
8. 5層と同じ

第50図 SB109 実測図



SK1147 弥生土器

- SK1147  
 1. 黒色粘質土 (SY2/1) 灰白色シルトブロック (SY7/2) 若干混じる  
 2. オリーブ黒色粘質土 (SY3/2) 灰白色シルトブロック (SY7/2) 若干混じる  
 3. オリーブ黒色粘質土 (SY3/2) 灰白色シルト (SY7/2) 混交層  
 4. 灰白色シルト層 (SY7/2) オリーブ黒色粘質土 (SY8/2) 多く混じる  
 5. オリーブ黒色粘質土 (SY3/2) 灰白色シルト (SY7/2) 非常に多く混じる  
 6. 灰オリーブ色砂質土 (SY5/2) 灰白色シルト (SY7/2) 多く混じる  
 7. 灰色粘質土 (SY4/1) 灰白色シルト (SY7/2) 少し混じる  
 8. 灰白色シルト層 (SY7/2) 灰色粘質土 (SY4/1) 少し混じる  
 9. 灰白色シルト層 (SY7/2) 灰色粘質土 (SY4/1) 若干混じる  
 10. 灰オリーブ色粘質土ブロック (SY4/2) しまり弱い

第 51 図 SK1147 実測図

SB108 掘立柱建物跡と SE103 井戸跡は、後述する SB110 と棟軸方位が直角関係にある。時期差があるかもしれないが関連がうかがえる。

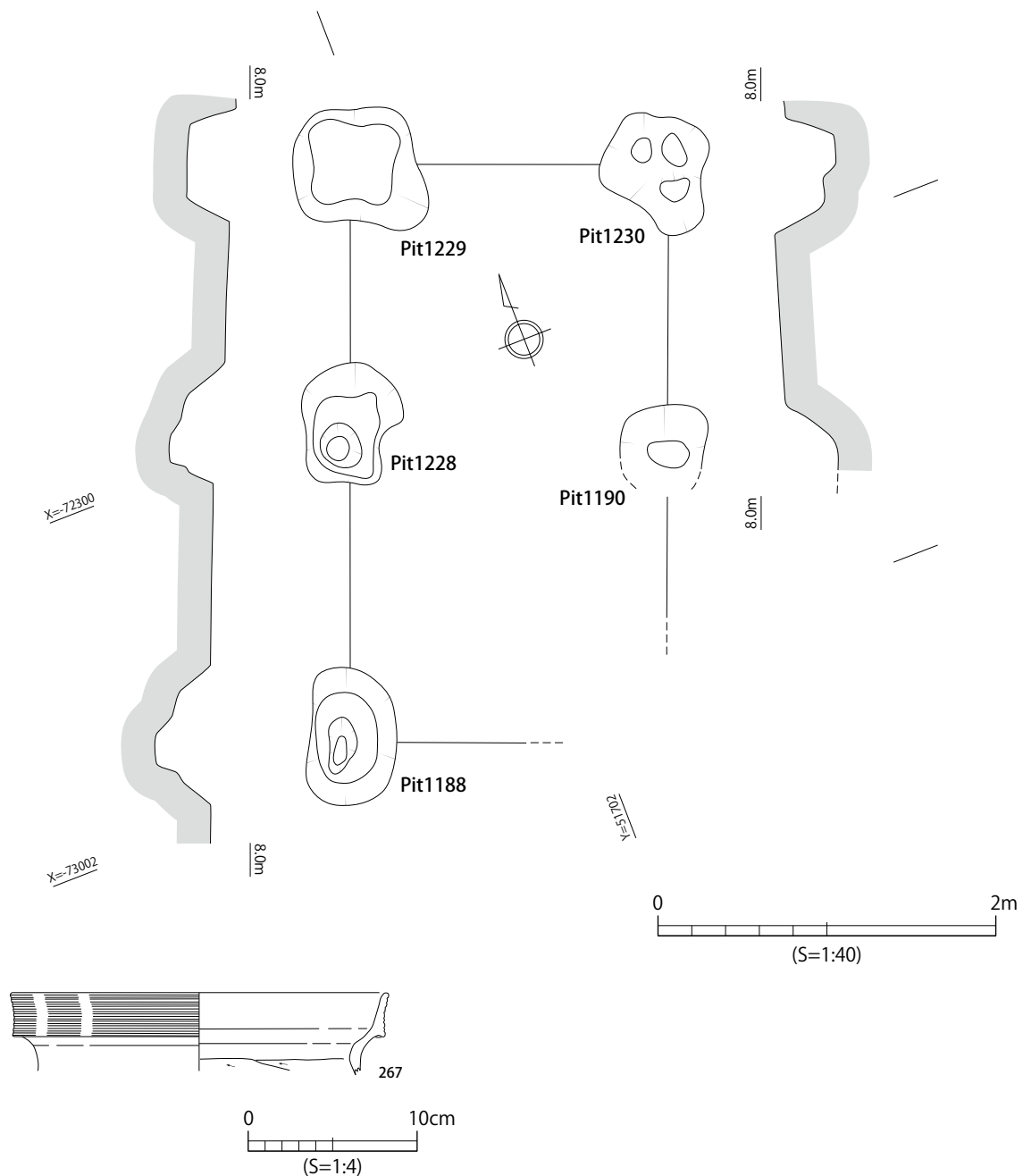
#### SB109・SE104 (第 50 図)

SB109 掘立柱建物跡は 1 間×2 間の構造で、2.2m×3.4m の規模である。SB109 及び SE104 は SD141 に接して北側で検出された。南東隅の柱穴が SD141 の 2 層を切っており (第 21 図中央畦畔南北土層図)、SD141 が埋まり切ってから建てられたものである。また、SE104 井戸跡をも切っており、井戸廃絶後その端を切って建てている。よって、SE104 と SD141 の共存の可能性はあると考えられる。出土土器は 261 甕口縁の破片と、262 甕壺類底部の破片である。261 は南西隅の柱穴から出土したもので草田 3 期の土器である。

SE104 井戸跡の平面形はほぼ円形、断面は二段掘りの逆凸状を呈する。直径 1.3m、深さは 75cm を測る。土層断面に一对の立ち上がりの土層が表れており、SE101 及び SE102 と同様に丸太刳抜きの井戸枠を備えていたと思われる。調査区内に限ってみれば、この SE104 廃絶以後中世にいたるまで、井戸が掘られた形跡はない。SB109 がこの位置に配置された意味については不明と言わざるを得ない。

#### SK1147 (第 51 図)

SK1147 は調査区の東側 SB110 掘立柱建物跡の北西隅の柱穴とほとんど接するように検出された土坑である。両者は、ほとんど接しているにもかかわらず、切り合い関係がない。互いの存在を



SB110 弥生土器

第 52 図 SB110 実測図

意識しない偶然の配置の可能性はある。

SK1147 の堆積土は黒色土で、第 51 図に挙げたような、煤が多量に付着した土器の破片が混ざっていた。平面形は柄鏡形、断面形は縦にはマンドリン状、横には砲弾状を呈する。規模は、幅 75cm、長さ 1.2m、深さ 40cm を測る。土器は、263 と 264 は草田 4 期の甕口縁破片、265 波長の短い波状文と無軸の羽状文を巡らす甕肩部の破片、266 は高坏の坏部の破片でいずれも草田 4 期の土器である。墓の可能性も考えられる。

**SB110** (第 52 図)

調査区の東側中央付近で SB110 を検出した。1 間×2 間の構造で、規模は 1.9m × 3.5m とやや細長いプランである。267 は、口縁に擬凹線文を施す草田 3 期の甕口縁の破片である。北側中

位の柱穴から出土しており、SB110の時期を示すものと考えられる。

## 1区-2 中世の遺構と遺物

### 墓坑

中世の墓坑としては、SK146、SK142、SK154の土坑墓が検出された。SK146は鎌倉時代13世紀後半～14世紀代、SK154は16世紀末～17世紀初頭の時期の遺構である。

#### SK146 (第53図)

SK146は、弥生時代後期後半～終末期の直行溝SD141以南の遺構が集中し、錯綜する区域で検出された。現代の井戸跡に切られ、自身はSB103布掘建物跡の東溝跡の南端を切っている。(第16図)

平面形は不整形な卵形で、断面は歪な逆台形である。規模は、幅2.05m、長さ2.2m、深さ80cmを測る。

上層で中世土師器の破片が多量に出土しているが、図化できるものは第53図に挙げた4点程度であった。4点ともいずれも坏で、268は高台が着くタイプ、269～271は無高台で体部が丸みを帯びて立ち上がるタイプのものである。これらの中世土師器は、古志本郷遺跡の分類に従えば、坏A類でI期(13世紀～14世紀前半)に相当するものと思われる。高台を持つタイプが含まれることも、中世の古い段階の特徴を示すものと考えられる。

#### SK142 (第54図)

SK142は調査区西端中央付近で、後述するSX103同様に弥生時代後期後半～終末期の直行溝SD141の北辺を切っている状況が検出された。土坑墓である。

平面形はやや突出部分があるが不整形な隅丸方形で、断面は逆台形を呈する。規模は、幅1.45m、長さ1.7m、深さ45cmを測る。ちょうどSK146の墓坑をひとまわり小さくしたような規模と形状である。

図示できなかったものの、堆積土中から土師器の破片が出土していることと、構造、規模や土層堆積の状況が似ていること、出土位置も近いことなどからSK146と同様の時期の墓坑と考えられる。

#### SK154 (第54図)

SK154は、弥生時代後期後半～終末期の直行溝SD141の東端部北辺が、調査区南壁に突入するそのすぐ北側で検出された土坑墓である(第16図)。

平面形は北東隅がやや突出するがほぼ隅丸の正方形である。断面形も、ほぼ、正方形に近い長方形である。規模は、幅1.2m、長さ1.25m、深さは60cmを測る。

墓坑最底部床面の北西隅に逆さまに伏せて置かれた272土師器皿が出土した。この土師器坏は、古志本郷遺跡の分類に従えば皿A類に分類され、VI期(16世紀末～17世紀初頭)に相当するものと思われる。墓坑の時期を示していると考えられる。このSK154土坑墓と同時期の墓と思われる1区-3SK106木棺墓は漆容器(塗膜のみ残存)、土師器の日用食器に加え、金属製の毛抜き、煙管などの日用雑貨が副葬されていた。墓坑自体はSK154の方が丁寧な作りと思われるが、副葬品の格差がお互いの被葬者の社会的状況を反映しているものと思われる。ただし、これらの墓と直接関係のある集落遺構は今次の調査では判明していない。

## 中世の井戸跡について

1区-2では、中世の井戸跡はSE105～110まで6基検出された。時期は鎌倉時代～室町時代13世紀～16世紀に及ぶ。いずれも素掘りで井戸内の構造物の痕跡は検出されていない。

### SE105（第55図）

SE105は、調査区西端南寄り、弥生時代後期後半～終末期のSB104掘立柱建物跡とSD142中世溝跡に挟まれる位置で検出された（第16図）。

平面形は、楕円形もしくは卵形断面形は円筒形二段掘りの逆凸状を呈する。規模は、幅2m、長さ2.4m、深さは90cmを測る。井戸内の構造にかかわる遺物は出土しておらず、土層にも表れていない。素掘りの井戸である。

遺物は、龍泉窯系青磁椀破片、中世土師器坏破片、木製杭などが出土している。274は龍泉窯系青磁椀Ⅲ類（太宰府F期13世紀後半～14世紀前葉<sup>(1)</sup>）と思われる。275は中世土師器坏で古志本郷遺跡土師質土器分類坏C類に分類され、Ⅲ期（15世紀代）に相当すると思われる。273は木製の杭である。

### SE110（第55図）

SE110は調査区東端近くの南壁に食い込む形で検出された（第16図）。調査区と側溝、民家を保護するため一部しか発掘できなかった。

平面形は楕円形で、断面円筒形を呈する。規模は、幅1.9m、長さ1.4m以上、深さ1.15m以上を測る。井戸内の構造にかかわる遺物は出土しておらず、素掘りの井戸である。

遺物は、青銅製の和鏡破片、中世土師器坏皿類破片、土錘、木製杭などが出土している。282は青銅製の和鏡である。推定径10.9cmとみられ、厚さは遺存状況によって厚薄があるが、2～9mmである。外周は何かを挟み込むように折り返している。鏡背の一部に菊花文らしい文様が観察できる。277は古志本郷遺跡土師質土器分類皿D類Ⅳ期（15世紀～16世紀前半）、同様に、278は坏C類Ⅲ期（15世紀代）、281は坏A類Ⅰ期（13世紀後半～14世紀代）である。279及び280は中世土師器坏の高台の付くものである。古相を示しており、古志本郷遺跡土師質土器分類Ⅰ期の中でとらえられるものと思われる。これらの土器は遺構の存続期間を示している可能性があると思われる。283及び284は土錘である。

### SE108（第56図）

SE108は、調査区東側の北寄りでSE107と南北に隣り合うように検出された（第16図）。

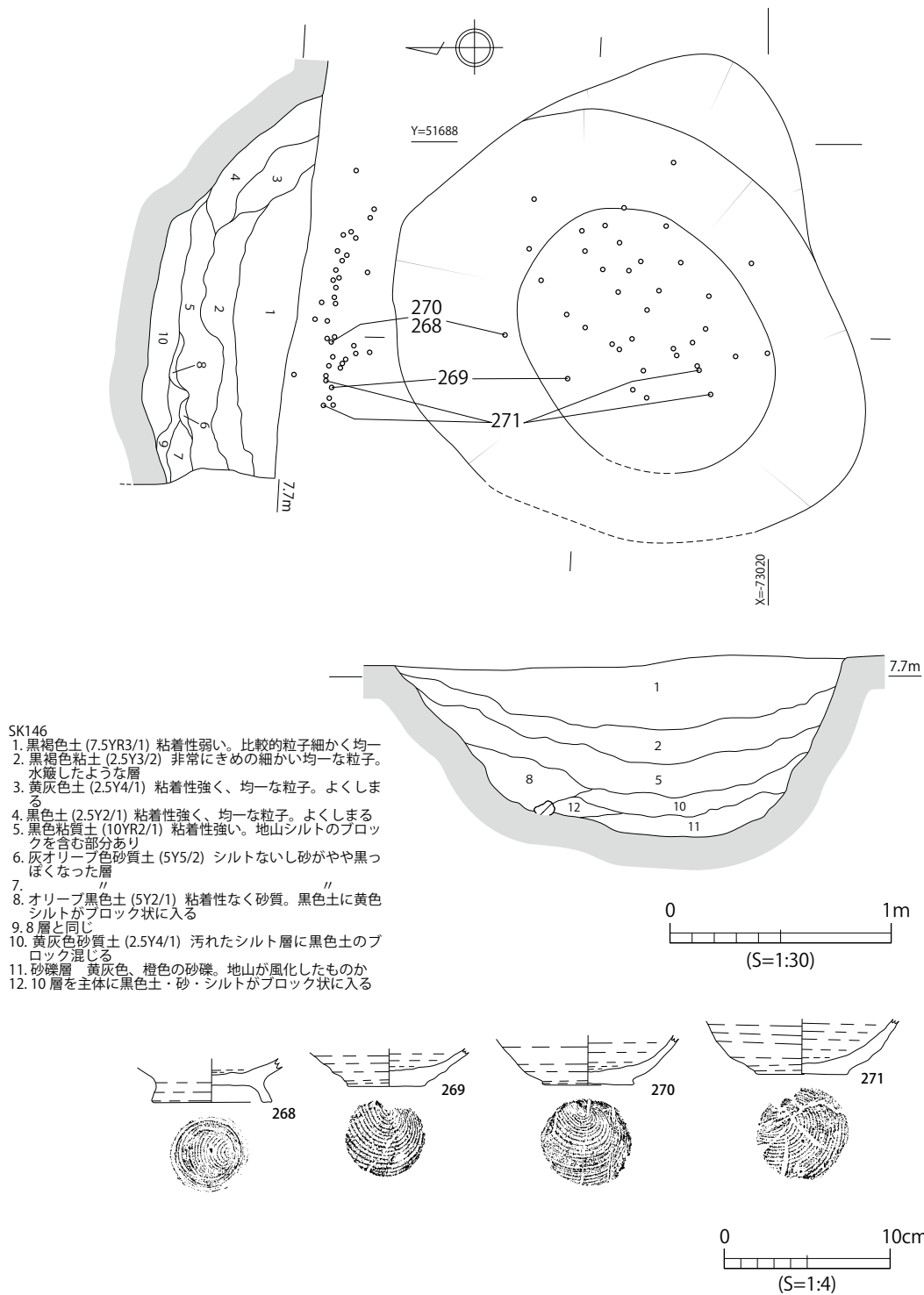
平面形は、一部やや突出する不整な円形で、断面形は、ほぼ円筒形であるが、若干上部が広がっている。規模は、幅1.4m、長さ1.2m、深さは70cmを測る。井戸内の構造にかかわる遺物は出土しておらず、素掘りの井戸である。

遺物は、286は備前焼播鉢の破片で、備前Ⅳ-A期（15世紀中葉）のものである。287は青磁の破片である。

両者の位置と形状が似ていることなどから、SE108とSE107は同時に共存して機能していたことも考えられる。

### SE109（第56図）

SE109は調査区の東側、ほぼ中央で、弥生時代後期後半～終末期のSB110掘立柱建物跡を半分



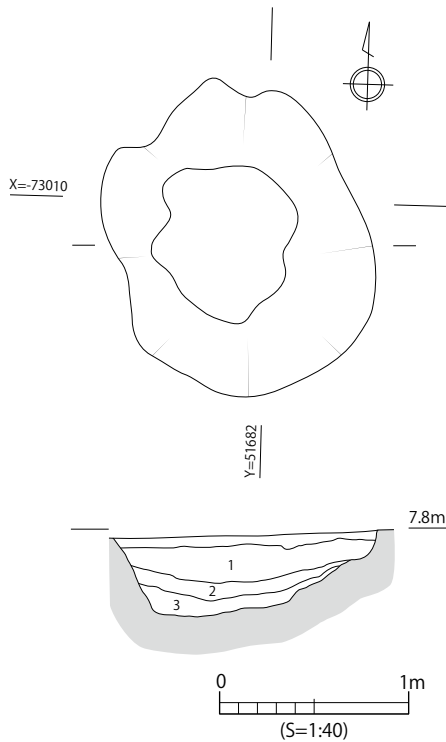
SK146 中世土師器

第 53 図 SK146 実測図

切るようにして検出された (第 16 図)。

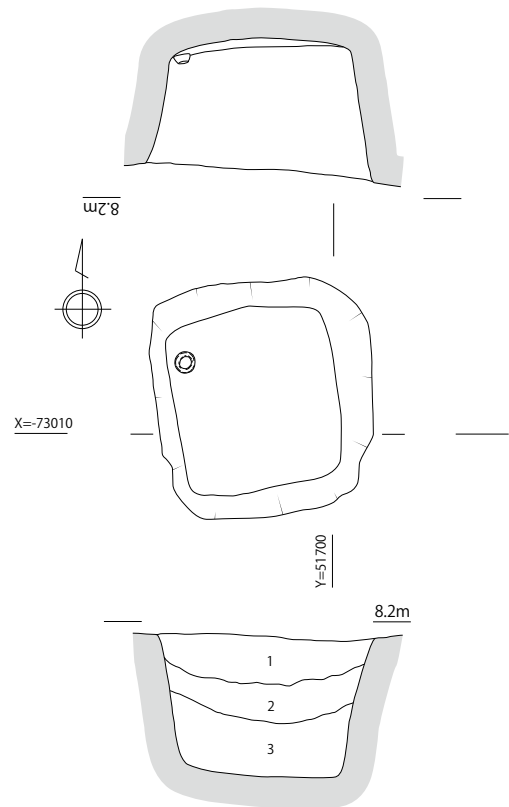
平面形は不整形な瓢箪形で、断面形は若干段が付くがほぼ四角形を呈する。規模は、幅 2.2m、長さ 2.6m、深さは 90cm を測る。井戸内の構造にかかわる遺物は出土しておらず、素掘りの井戸である。

遺物は、285 の瀬戸美濃系平碗の底部破片が出土している。内面にオリーブ黄色に発色する釉

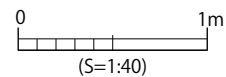


SK142  
 1. 褐灰色土 (10YR4/1) 粘着性あるが砂礫を含み、均一性欠く  
 2. 黒褐色粘質土 (10YR2/2) 砂礫を含まない粘質土  
 3. 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 砂粒を含まない粘質土。よくしまる

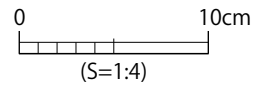
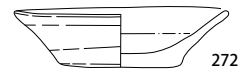
SK142 実測図



SK154  
 1. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘着性、しまりあまりない  
 2. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘着性、しまりあまりない。地山シルト 1~2mm のフロック含む  
 3. 黒色土 (10YR2/1) 粘着性強い。しまりあまりない



SK154 実測図



SK154 中世土師器

第 54 図 SK142・154 実測図

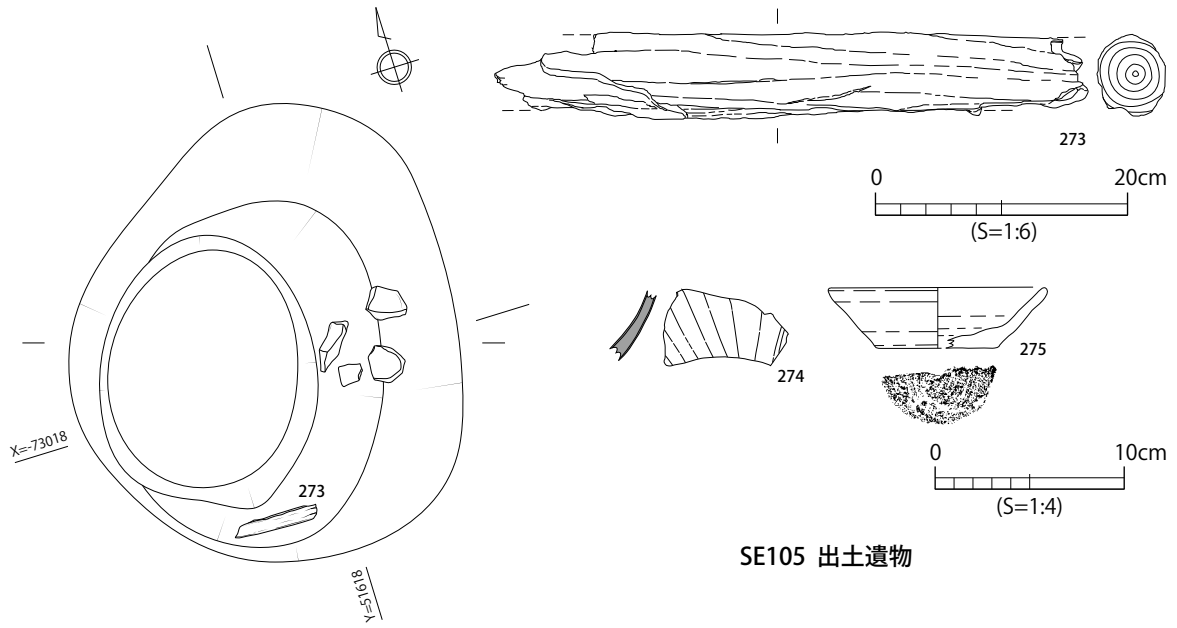
葉がかけられている。大窯後期<sup>(3)</sup> (16 世紀中～後葉) のものである。遺構の時期を示しているものと思われる。

**SE106・SE107 (第 57 図)**

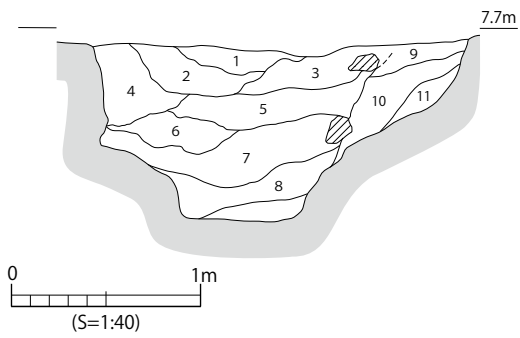
SE106 は調査区中央寄りの北辺で検出された (第 16 図)。平面形は柄鏡形で、断面形は扁平な円筒形を呈する。規模は、全長 2.2m、後円部の径 1.5m、前方部の長さ 70cm、幅 60cm、深さは 40cm を測る。井戸内の構造にかかわる遺物は得られていないので素掘りの井戸である。

中世土師器の破片が出土しているが時期を特定できるような資料は得られていない。

SE107 は、前項で記載した SE108 の北側にあつて隣り合うように検出された (第 16 図)。平面形は何か所か突出があるがほぼ楕円形で、断面形は円筒形である。規模は、幅 1.3m、長さ 1.65m で、

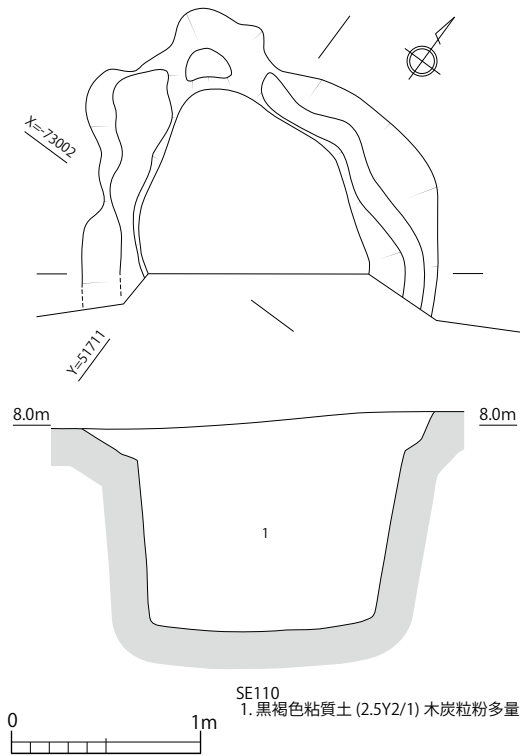


SE105 出土遺物



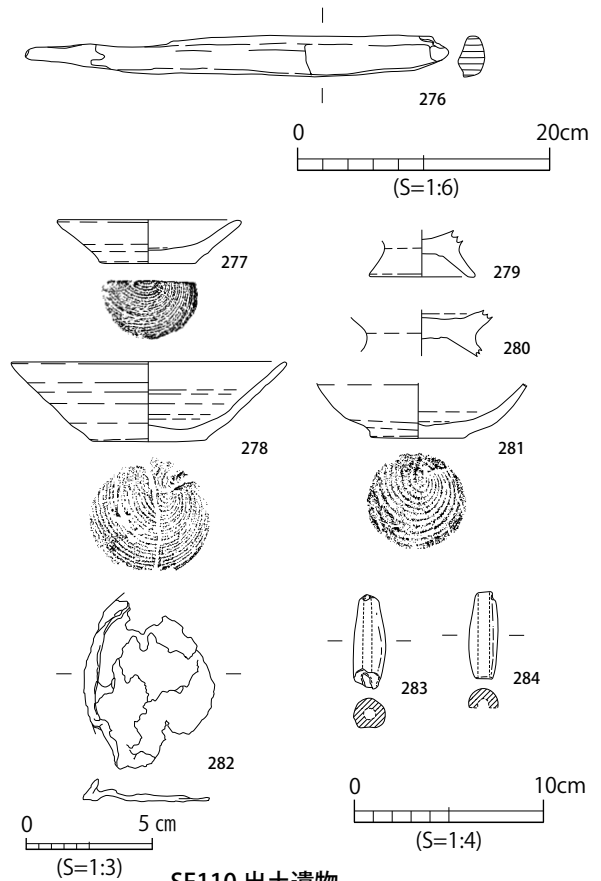
SE105 実測図

- SE105  
 1. 灰白色土 (5Y4/1) シルト混じり  
 2. 黄灰色土 (2.5Y4/1) シルト混じらない  
 3. オリーブ黒色土 (5Y3/1) シルトブロック含む  
 4. オリーブ黒色土 (5Y3/1) シルト・砂ブロック含む  
 5. 黒褐色土 (2.5Y3/1) 砂混じる  
 6. 黒色土 (5Y2/1) シルト、砂ブロック含む  
 7. " " " "  
 8. オリーブ褐色土 (2.5Y4/3) 砂・褐色土混じる  
 9. 黄灰色土 (2.5Y4/1)  
 10. " " " "  
 11. 黒色土 (2.5Y2/1)



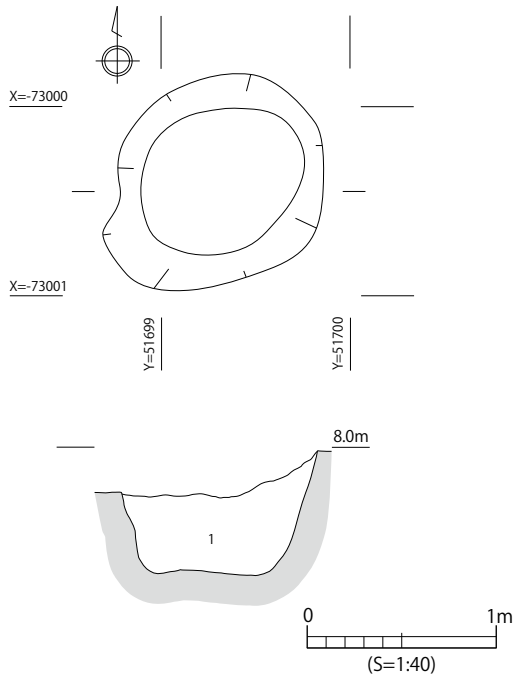
SE110 実測図

- SE110  
 1. 黒褐色粘質土 (2.5Y2/1) 木炭粒粉多量に含む



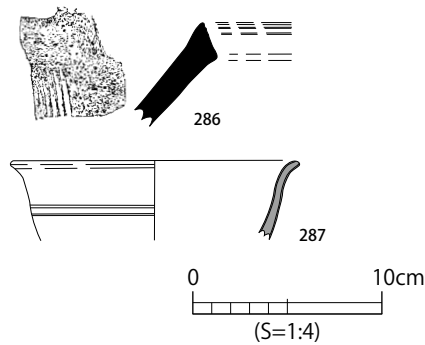
SE110 出土遺物



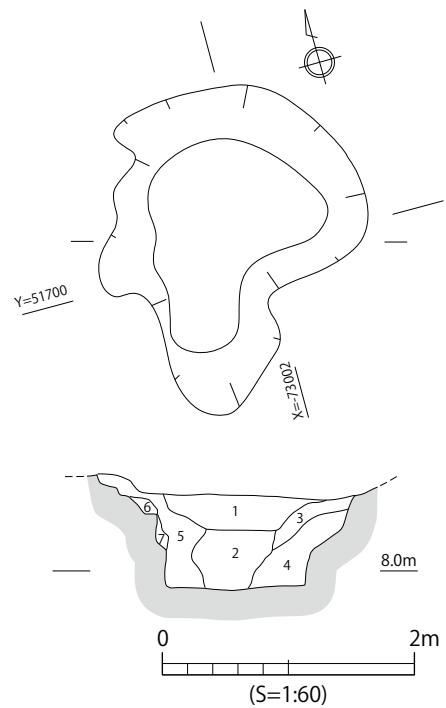


SE108  
1. 黒褐色土 (10YR3/1) 砂・シルト・粘土がブロック状に不規則に混じる

SE108 実測図

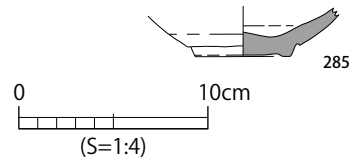


SE108 陶磁器



SE109  
1. 灰オリーブ色粘質砂層 (5Y4/2) 3mm以下砂礫若干含む  
2. 黒色粘質土 (5Y2/1) 3mm砂礫若干含む  
3. 灰色粘質砂層 (5Y5/1)・灰色砂層 (5Y5/1) 混交層  
4. 灰色粘質砂層 (5Y5/1) 灰白色シルトブロック (5Y7/2) を多く含む  
5. 黒色粘質砂層 (5Y5/1) 灰白色シルトブロック (5Y7/2) を非常に多く含む  
6. 黒色粘質砂層 (5Y2/1) シルトブロック若干含む  
7. 黒色粘質砂層 (5Y2/1)

SE109 実測図



SE109 陶器

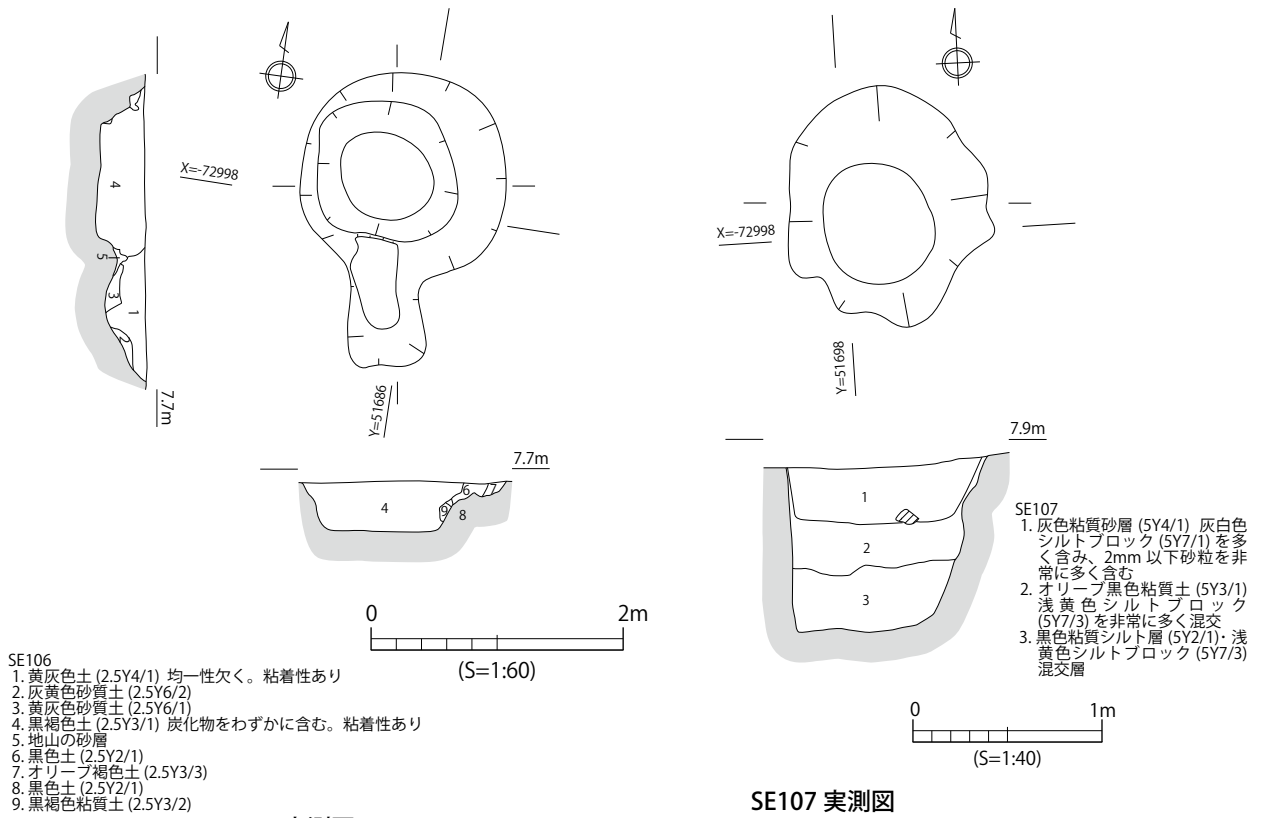
第 56 図 SE108・109 実測図

深さは 90cm を測る。SE108 よりも若干規模が大きいのが、隣り合う位置などからみて同時に共存して機能していた可能性が考えられる。

湧水土坑 (第 57 ~ 58 図)

調査区の西端から南西隅で SX103 ~ 105 の湧水土坑を検出した (第 16 図)。後述するように、これらの遺構は、溝跡ともつながらず、周囲に建物遺構もなく、何かの手工業につながるような遺物も出土していない。単独に機能していたようである。これも後述するが、3基とも若干平面形状が異なるが、ほぼ同規模の遺構である。湧水機能を生かした畑作など農業に関連する遺構の可能性が考えられる。今日でも神戸川の良質の伏流水が豊富に得られる当地の特性に由来する遺構である可能性も考えられる。

また、この3基の土坑から出土した遺物の中には、図化できるような大きさの破片はなかった



SE106 実測図

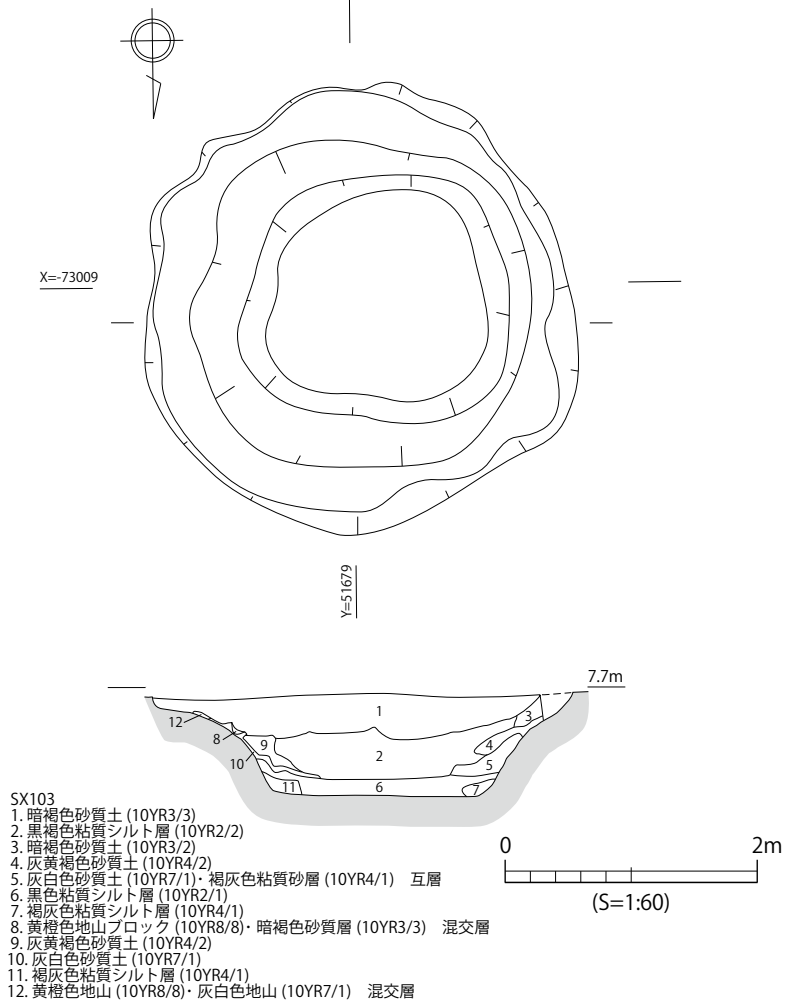
SE107 実測図

が、須恵器甕の破片と中世土師器の破片が共通して存在し、いずれも高台付きの坏が混ざっていた。高台坏は、古志本郷遺跡土師質土器分類Ⅰ期の中でとらえられる古相を示すものと思われる、これが出土遺物の組成の中での下限を示すものとも考えられた。よって、位置関係からSX104とSX105の共存の可能性は少ないものの、可能性としては、SX103を含めた3基が共存して機能していたことも考えられる。

SX103は、平面形は円形に近い隅丸方形である。断面形は扁平な逆台形を呈する。規模は、幅、長さとも3.5m、深さは80cmを測る。

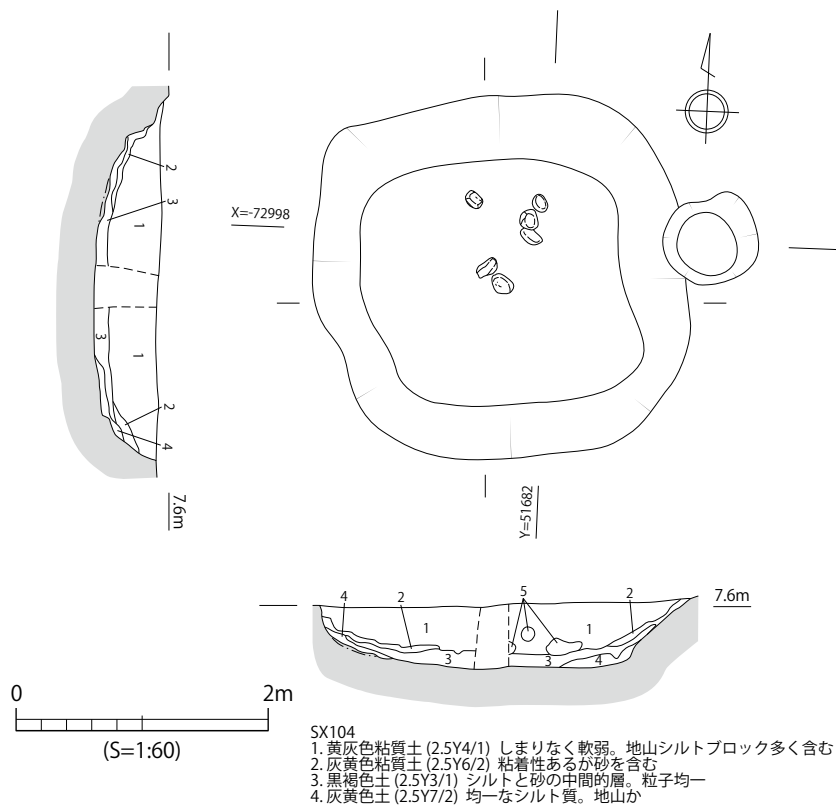
SX104の平面形は均整のとれた隅丸方形で、断面形は扁平な逆台形を呈する。規模は、幅2.9m、長さ3m、深さは50cmを測る。

SX105は、南西隅に食い込んでおり、調査区を保護するために検出しきれ

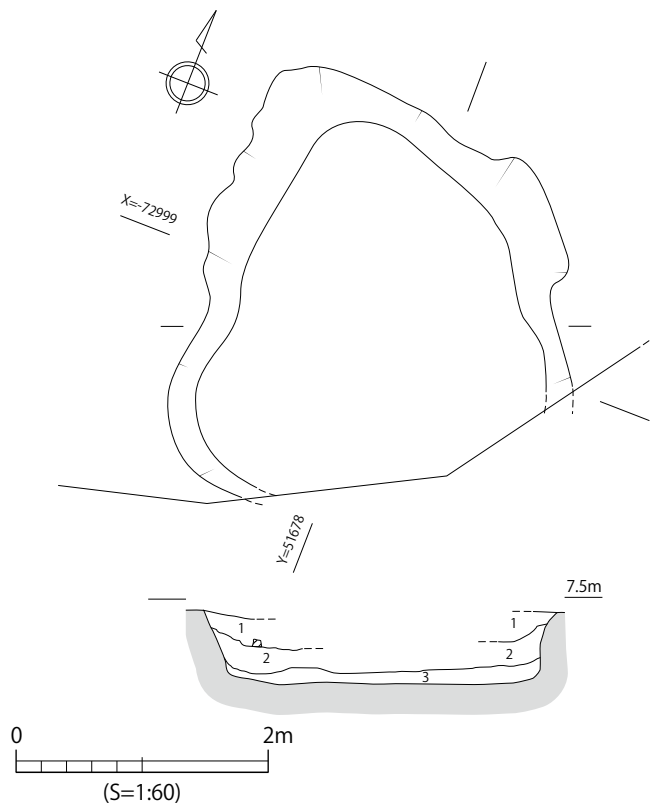


SX103 実測図

第57図 SE106・107・SX103 実測図



SX104 実測図



SX105 実測図

第 58 図 SX104・105 実測図

なかった。平面形は三角形もしくは菱形を呈すると思われる。断面形は扁平な逆台形を呈する。規模は、幅 3.3m、長さ 3.4m 以上、深さは 70cm を測る。

### 土器埋納坑

#### Pit1170 (第 59～60 図)

Pit1170 は調査区の中央やや北寄りで検出された(第 16 図)。17 個体の完形品の中世土師器がまとめて折り重なるようにして出土した土器埋納坑である。

Pit1170 の穴の平面形は一部が突出した不整形な楕円形で、

中世土師器を取り上げて掘り上げた断面形は砲弾を下に向けて二つ並べた形である。穴の規模は、幅 50cm、長さ 55cm、深さは 35cm を測る。

底部は南東から北西に向かって稜線を持つ。坑内は北東側と南西側の二室に分かれる形となり、南西側の部屋が北東側の部屋よりもやや大きい。壊皿はほぼ均等に割り振られている。中世土師器壊皿の埋納状況は、それぞれの部屋の底部に沿って 4～5 個体ずつを正位で並べ、残る 4～5 個体をその上に逆さまにかぶせて、灰白色の細かいシルトブロックが多く混じる黒褐色土を充填している。

この Pit1170 に埋納されていた中世土師器の壊皿は法量が 3 種類に分かれる。288～292 は大形で、口径 14.4～15.2cm、底径 5.8～6.4cm、器高 3.7～4.6cm を測る。口径と底径の差が大きく、体部が斜め上方に立ち上がり、口縁まで直線的に伸びて大きく開くタイプである。古志本郷遺跡土師質

土器分類環D-2類Ⅳ期（15世紀～16世紀前半）の土器である。293～302は中形で口径11.0～11.4cm、底径4.6～5.4cm、器高3.2～4.7cmを測る。口径と底径のバランスがよく、体部が斜め上方に屈折して立ち上がり、口縁まで直線的に伸びるタイプである。古志本郷遺跡土師質土器分類環D-1類Ⅳ期（15世紀～16世紀前半）の土器である。303及び304は皿である。口径は7.6～8.0cm、底径は3.4～3.6cm、器高は2.7～3.0cmを測る。体部は丸みを帯びており、古志本郷遺跡土師質土器分類皿c類Ⅲ期（15世紀代）の土器である。これらの坏皿には、301～303を除いてすべて内外いずれかにタール様付着物の痕跡があり、灯明皿として使用したことがうかがえる。

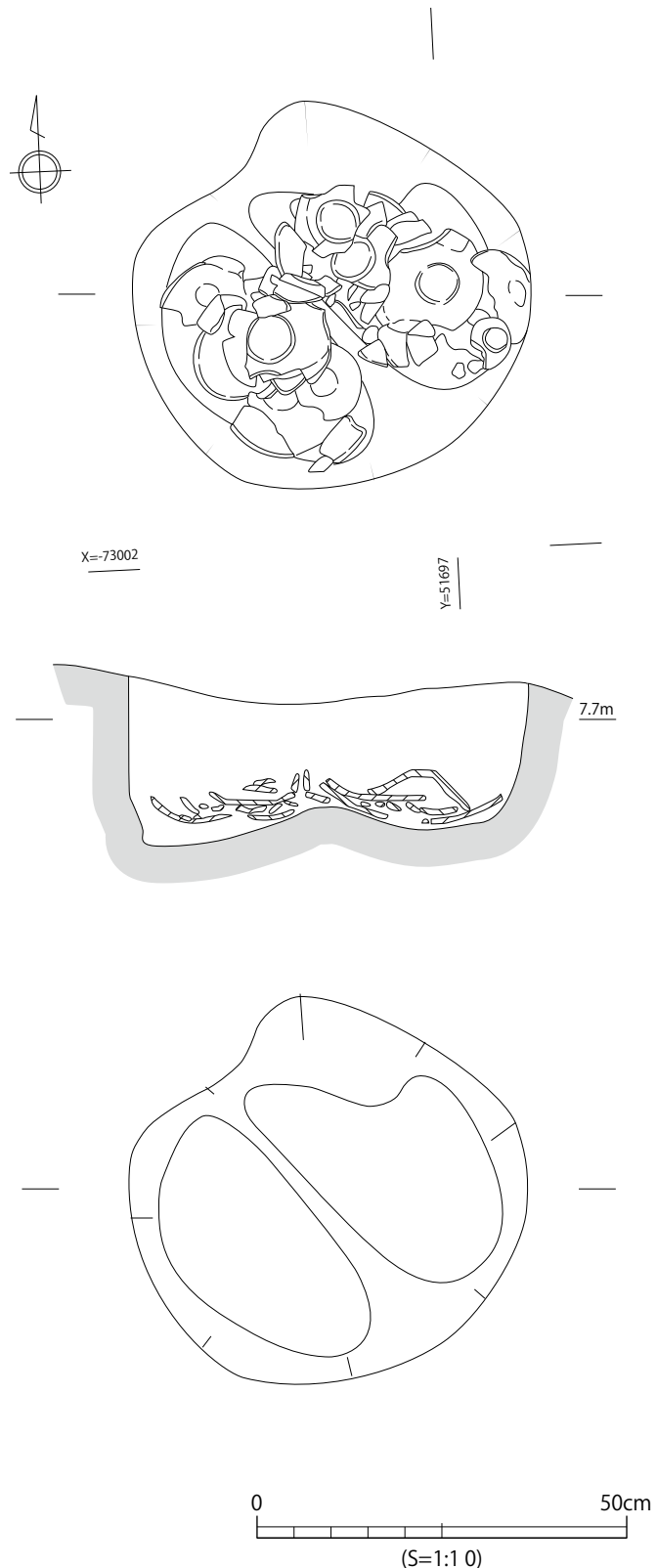
### その他の遺構

このほかに1区-2では、柱穴や溝跡等の遺構が検出されている。

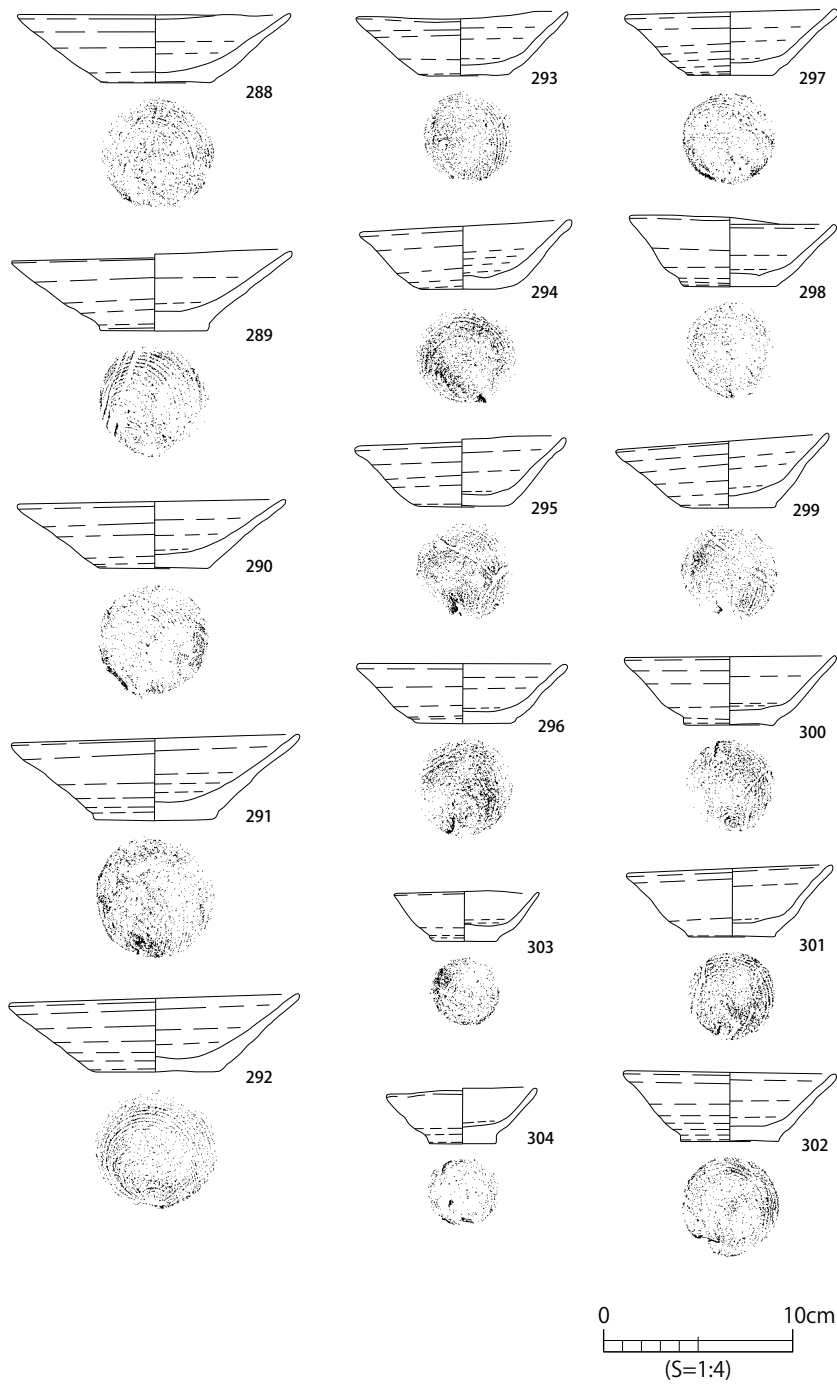
弥生時代後期後半～終末期のSD141直行溝の東端付近で、その覆土を切っている、柱穴Pit1159・Pit1161が検出された（第16図）。この2穴は、第61図に挙げたように、柱根を残している。

2基ともに、図化できるものではなかったが、中世土師器坏皿の破片が出土していることから、中世の柱穴である。

SK150は調査区東端付近、SB107の北東隅の柱穴の北側で検出された柱穴である。（第16図）。最底部床面には垂円礫が残っており、柱の根石の可能性はある。図示できる大きさのものではなかったが、出土遺物の中には須恵器甕破片、土師器土師器甕破片、中世土師器坏皿の破片があり、そ



第59図 Pit1170遺構・遺物出土状況実測図



第 60 図 Pit1170 出土遺物実測図

の組成は 1 区 -2 湧水土坑の遺物群と似ているので、13 世紀後半～14 世紀の同時期の遺構の可能性はある。

SD142 は調査区の西端にあって南北に延びている。幅 90cm 以上、調査区内での長さ 26m、深さは 40cm を測る。出土遺物に中世土師器破片を含むことから中世の遺構と思われる。市 1 次調査 B 区 SD38 に接続すると思われる。

### 平成 21 年度調査区について

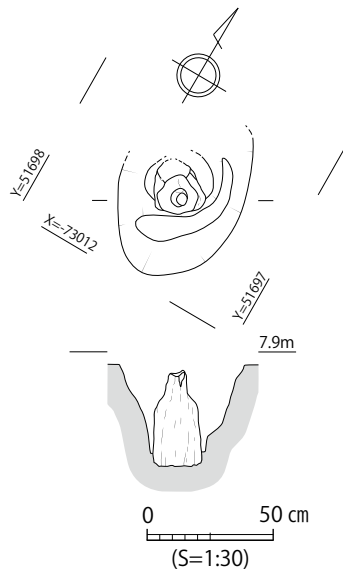
平成 21 年度調査区は、1 区 -2 に並行して隣接している。県道工事の工程上の制約が非常に狭小な調査区を設定することとなったが、溝跡とピットが検出されている。地山は 1 区 -2 と共通であるが、遺構検出面のレベルが 1 区 -2 に比べて軒並み高い。そのためか、隣接しているにもかかわらず、1 区 -2 の遺構と接続あるいは関連していると推測される遺構

がほとんどない。わずかに、1 区 -2SE110 中世井戸跡と平成 21 年度調査区 SD07 の関連が推測されるのみである。

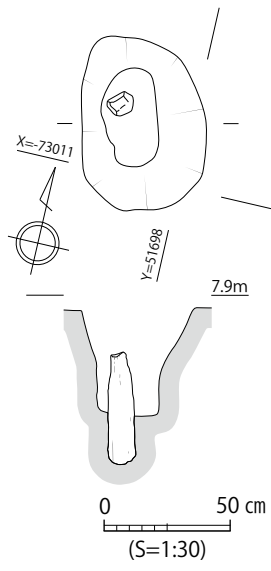
## 小結

### SD141 直行溝について

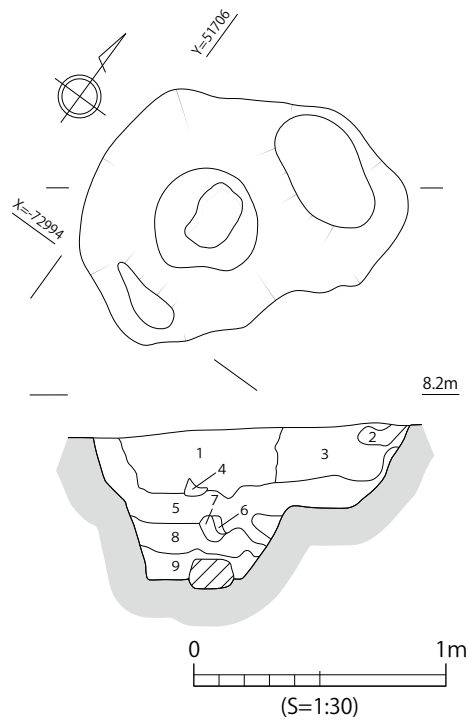
1 区 -2 で検出された溝 SD141 は、最大幅 2.7m、最大深さ 90cm、調査区内で確認された長さ 24m (1 区 -4 まで合わせると 40m) を測り、断面逆台形であった。調査区内では、湾曲も屈曲も



Pit1159 実測図

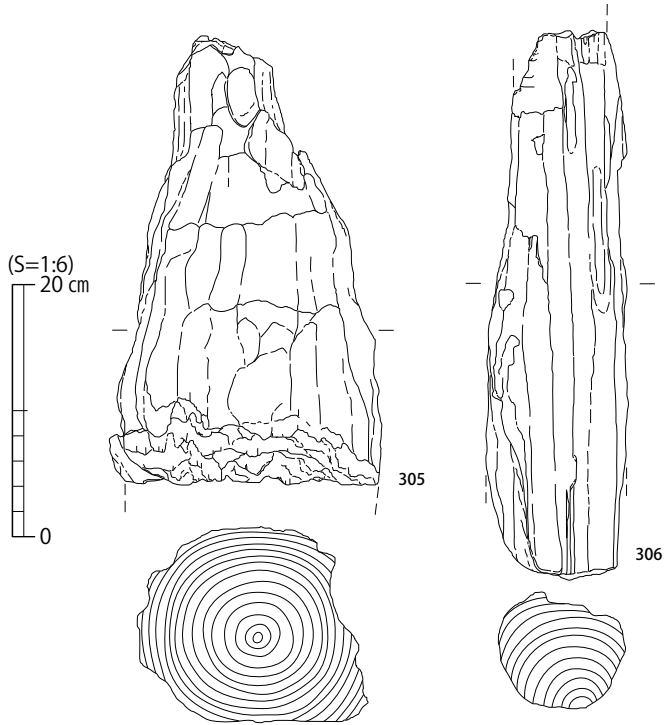


Pit1161 実測図



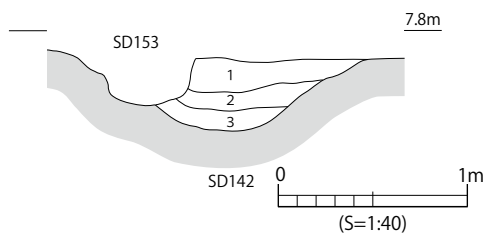
- SK150
1. 黒色粘質土 (2.5Y2/1) 3mm以下砂粒若干混じる
  2. 灰黄褐色砂層 (2.5Y6/2)
  3. 黒褐色粘質土 (2.5Y3/1) 1mm以下砂粒・木炭片若干混じる
  4. 灰白色砂ブロック層 (2.5Y8/2)
  5. 黒褐色砂質土 (7.5YR2/2) 5mm以下軽石片・砂粒若干含む
  6. 灰黄褐色砂ブロック層 (2.5Y6/2)
  7. 黒褐色砂質土ブロック層 (2.5Y3/1)
  8. 暗オリーブ色砂層 (5Y4/4) オリーブ砂 (5Y6/6)・灰白色砂 (2.5Y8/2) 混じる
  9. 黒色粘質砂層 (5Y2/1) 灰白色砂ブロック混じる

SK150 実測図

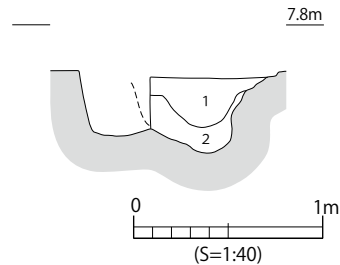


Pit1159 遺物実測図

Pit1161 遺物実測図



- SD142 (南)
1. 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 粘着性あり。しまりやや弱い
  2. オリーブ黒色粘質土 (5Y3/2) 粘着性強く、よくしまる
  3. 灰色粘質土 (5Y4/1) よくしまり、均一な粘土層



- SD142 (北)
1. 黄灰色土 (2.5Y4/1) 砂礫若干含む。粘着性弱い
  2. 黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘土〜シルト質。粘着性あり

SD142 土層断面実測図

せず直線的に伸びており、特徴的である。この溝跡は、最初に深く掘られているが、最終的に廃棄される時期の掘り返しは浅く、弥生時代後期～終末期の土器や炭化物が多く溜まっていた。場所によって深浅があり、4層堆積後一定の方向に向かって流れる様子はなく、排水路とは考えにくい。また、この溝跡の南北両側には、弥生時代後期後半～弥生時代終末期の掘立柱建物跡や布掘建物跡が併存している様相もあるが、比較的大規模で直線的な溝跡であることから、遺跡内を区画するための溝と考えられる。

出土遺物は、平面分布的には、東端（遺構内 N8 グリッド東）と西端（1区-4）により多く分布し、層的には2-2層底部からの出土が多い。

### **建物遺構について**

1区-2では、布掘建物跡2棟、掘立柱建物跡6棟が検出された。

布掘建物跡 SB103 は、直行溝 SD141 の南に位置する遺構群の中にある。布掘の溝跡の間隔は4.3m と非常に広く、一方、布掘の溝跡の長さは4.4m で平面形はほぼ正方形である。そこで、棟持柱として Pit1090 と Pit1039 が布掘建物跡 SB103 には必要であった可能性が高い。この棟方位は、東西軸にほぼ合致する SD141 の流れに対してほぼ直交しており、SD141 によって区画された土地利用に沿う建築物であったことがうかがえる。このことは、1区-2 調査区内にある SD141 以南の弥生時代後期後半～弥生時代終末期の遺構群 SB104、SB105 ほかの遺構にもあてはまる。また、SE102 を南正面に配置し、建物跡と井戸跡のセット関係がうかがえる。

布掘建物跡 SB106 は直行溝 SD141 の北東に位置する。こちらは、棟方位から見る限り、SD141 との関係は薄いようである。市1次調査との比較でいえば、若干本報告の2棟の布掘建物跡の方が後出であるが、本報告の SB106 は、市1次調査 B 区の布掘建物跡（SB05、SB06）とほぼ同規模と思われる。このことから、SB103 布掘建物跡の正方形に近い平面プランの特殊性が浮かび上がる。

SB108 の掘立柱建物跡は、1区-2 で検出した掘立柱建物跡の中で最も狭小なものだが、棟持柱を持つ構造と思われる。

掘立柱建物跡について、軸方位や位置関係遺物の共有などからいくつかのグループ分けが考えられる。大きくは SD141 の北にあるか南にあるかである。布掘建物跡の項でも述べたように SD141 以南の弥生時代後期後半～終末期の遺構は、SD141 の東西の伸長に対して棟軸が平行（SB105）か、あるいは直交（SB103 及び SB104）するように建てられている。一方 SD141 の北側に展開する建物跡は SD141 の伸長とは一見関係がない。ただ、SD141 の横断土層に表れているように、SB109 の掘立柱建物跡は、少なくとも SD141 が2層まで埋まった後に建てられたものである。

また、SB106 布掘建物跡と SB107 掘立柱建物跡は出土遺物が接合することや、双方の造営位置から考えて、何かの共存関係があった可能性が高い。また、この時期の建物遺構としては最古である可能性が高い SB110 と、SB108 及び周辺遺構群は、双方の造営位置と棟方位が直交関係にあることから、関連が考えられる。

### **弥生時代後期後半～終末期にかけての建物遺構と井戸跡のセット関係と遺構の先後関係について**

SB103 布掘建物跡と SE102 井戸跡、SB105 掘立柱建物跡と SE101 井戸跡、SB108 掘立柱建物跡と SE103 は、その位置関係から、それぞれセット関係にあると考えられる。SB103 には南正面に SE102 が、SB105 には西正面に SE101 が、SB108 南側の棟線上に SE103 がそれぞれ配置され

ている。出土遺物の様相も各配置で合致していると考えられる。

特にSD141 南側に配置されたこれら遺構群は建物遺構と井戸跡や各時代の遺構が錯綜しており、ある程度整理しておく以下のようなものであると思われる。

遺物出土状況からみると、まず、同時代の他の遺構群に先駆けてSD141 の掘り込みがなされていると考えられる。次に、SB103 布掘建物跡とSB104 掘立柱建物跡の関係である。両者は互いに重複しているので共存はあり得ない。しかし直接の出土遺物の状況からは先後関係は明確ではない。両者とも平面形は正方形に近く同種の建物であった可能性もある。拡張したのか縮小したのかということに集約される。後述するように漸次東へシフトする傾向が見られるのと、布掘を埋め立てて縮小建て替えることがその逆よりも不自然に思われるので、SB104 → SB103 への変遷を考えておきたい。次にSB103 布掘建物跡とSE102 のセットとSB105 掘立柱建物跡とSE102 のセットの先後関係である。SE101 の出土遺物は草田4期の中でも新相を示すものが多い。遺構が全く重複するSB103からは草田3～4期の土器が出土していることから、SE101 が後出と考えられる。このことから、SB103 とSE102 → SB105 とSE101 への変遷が想定できる。

よって、SD141 以南の遺構群の変遷については、弥生時代後期前半の溝跡SD156 → 弥生時代後期後半SD141 → SB104 → SB103・SE102 → SB105・SE101 弥生時代終末期までという変遷過程が想定できる。

SD141 以北の弥生時代後期後半～終末期にかけての遺構群の変遷については、以下のように考えられる。まず、遺物出土状況からみると、SB110 が最古と考えられる。SK1147 は遺構の切り合いはないが遺物から見てSK1147 が後出である。次いでSB108 とSE103 のセットへの変遷が考えられる。さらに、その後、出土土器が接合関係にあるSB106 布掘建物跡とSB107 掘立柱建物跡が続く。よってSB110 → SK1147 → SB108 及びその周辺遺構とSE103 のセット → SB106 布掘建物跡とSB107 掘立柱建物跡のセット → SD159 蛇行溝の変遷が考えられる。

### 井戸跡について

本報告で掲載した弥生時代後期後半から終末期にかけての井戸跡4基、中世の井戸跡8基計12例を含めて、古志遺跡群の井戸跡の類例は159基に達した。

本報告で弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての井戸跡として報告した井戸跡4基の中には、SE101 のように丸太刳抜の井戸枠そのものを残すものがあった。その井戸底は深く、土層断面から2m以上の深さがあったことがわかる。井戸底には、注口土器1個体分の破片を敷きつめており、祭祀というよりも、地下水脈からの強い噴出を防ぐとか、砂の舞い上がりを防ぐとか、浄水など何か実質的な効果を狙っていることも考えられる。下古志遺跡の弥生時代の井戸跡の例は、市1次調査B区のSK10、SK25などで井戸廃棄時に祭祀が行われて井戸内に土器が詰まっている例がある。

また、SE103 の井戸内には、内輪の円周に沿うようにスロープ構造があった。井戸の外から中に入っていけるようになっていたとも考えられる。市1次調査B区のSK10では階段状のステップ構造を持つ例があり、対比される。

中世の井戸跡としては1区-2SE105～SE110の6基が検出されている。SE105とSE110は鎌倉時代までさかのぼると思われる。SE110からは和鏡が出土するなど多様な様相があるが、弥生時代の井戸跡群のように建物跡とセットで検出されることはなく、調査区内において、井戸跡と同



時期の建物跡は検出されなかった。

### 墓坑について

1区-2SK169は弥生時代中期中葉の土器（高坏、第19図22）が出土しており、1区の調査区内で最古の遺構である。高坏は受部と脚部の接合部を焼成後に打ち抜いたものであり、何かの祭祀的な行為と考えられる。高坏と石は被葬者の枕とされた可能性もある。

### 祭祀遺構について

1区-2で検出したSK1147は、1区-1SK102土器埋納土坑に比べて土器の量が少ない。灰もしくは焼土と思われるキメの細かい黒色土（第1層）が多量に詰まっているのも特徴的であり、1区-1SK102土器埋納土坑との違いが際立つ。SK1147の遺物の時期は草田4期であり、同時期のものばかりで構成されている。また、破片が多く完形品はない。土器が破壊されて分割廃棄されている可能性が考えられる。また、墓である可能性も考えられる。

1区-2では、中世の祭祀と考えられるPit1170土器埋納坑が検出された。15世紀～16世紀前半の坏皿類が大中小17個体、完形品のまま折り重ねて埋納されている状態で出土した。法量には大中小3種類あり、一括遺物として貴重である。タール様の付着物が熔着しているものがあり、灯明皿としての使用が考えられる。

### 注)

- (1) 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- (2) 島根県教育委員会 1999『古志本郷遺跡Ⅰ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ
- (3) 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2001『瀬戸大窯とその時代』  
瀬戸市史編纂委員会編 1993『瀬戸市史 陶磁史編 四』愛知県瀬戸市

## 第4節 1区-3の調査

### 1区-3調査の概要

1区-3は県道1車線分と歩道部分の拡張のための用地であり、狭小な調査区となった。現況は店舗の駐車場となっており、発注者（島根県土木部）の負担で造成土の除去まで実施したのち発掘調査に着手した。

調査の結果、弥生時代中期後葉及び中世から近世、近代に至る遺構が検出された。主要遺構としては、中世の遺構が多く検出された。

弥生時代中期後葉の遺構としては、集石遺構1基（集石4）及び土坑1基（SK130）が検出された。

1区-3調査区内では古墳時代から奈良・平安時代の遺物は非常に少なく、遺構も全く検出されなかった。また、弥生時代中期中葉以前の遺構も検出されなかった。

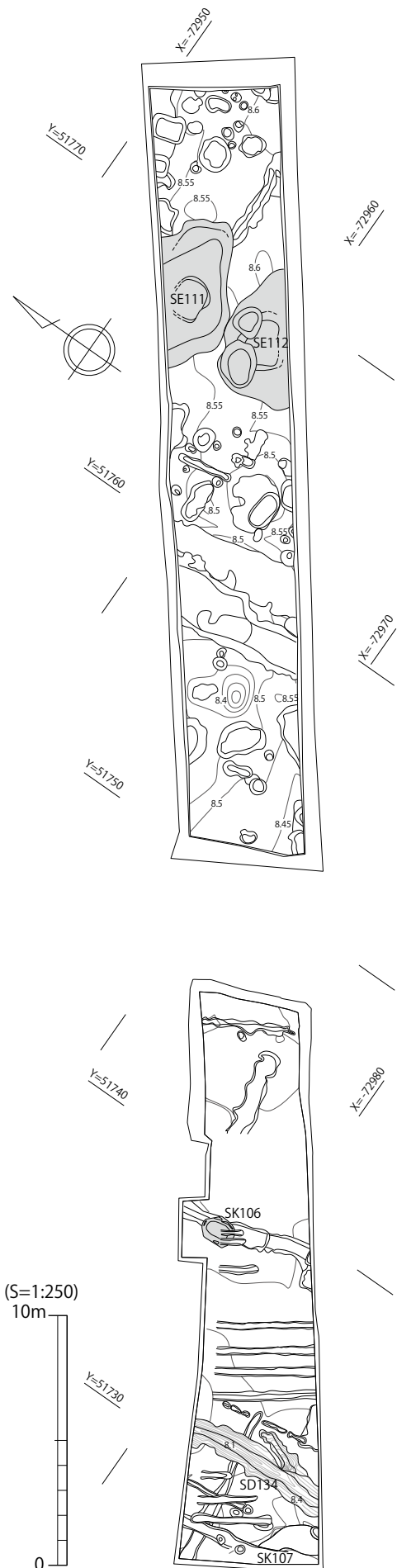
中世の遺構としては、井戸2基（SE111、及びSK112）、湧水土坑1基（SK107）が検出された。また、顕著な溝跡としてはSD134、SD136などが挙げられる。

さらに、16世紀末～17世紀初頭と思われる角形組合式木棺墓（1区-3）が検出された。

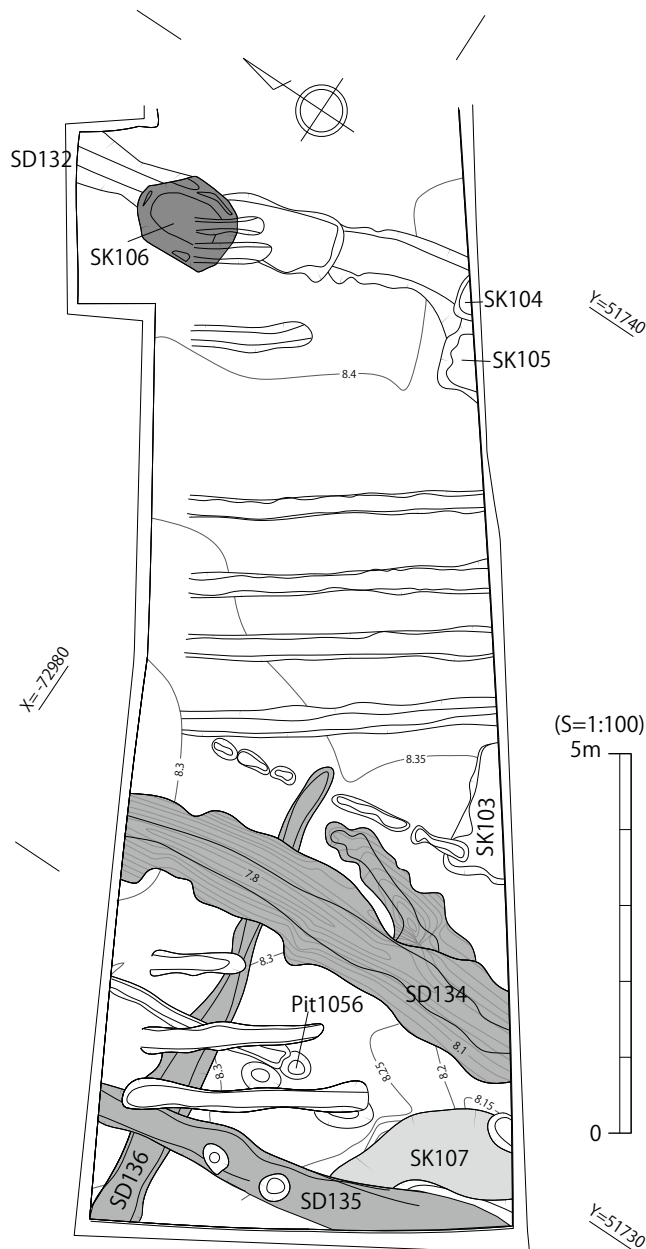
このほか、遺構検出面上層では、畑作に伴うものと思われる畝間溝や牛馬耕痕跡、浅い溝状遺構等が検出されたが近世以降のものと思われる。

1区-3で検出した中世の井戸SE111とSE112は、遺構の切り合いからSE111が優先するが、いずれも井戸底に木枠を残しており、SE111には、木枠の上に石組みが残っていた。一方SE112には井戸底の木枠しか残っておらず、両者の出土遺物に顕著な差異がないことから、SE111はSE112に先行するものと考えられ、何かの事情でSE111の井戸を廃絶埋め戻すことになって解体した後、SE112に石組みを移築したことが考えられる。

なお、下古志遺跡出雲市1次調査では、本報告1区-2に隣接平行してB区が、また、1区-3に隣接平行してC区の調査区が設定され調査されている。この市1次調査と本報告の調査では、



第62図 1区-3遺構配置図



第 63 図 1 区 -3 西側遺構配置図

長駆する溝跡の対応関係、あるいは接続関係がみられた。遺構種別一覧に示したように、1 区 -2SD142 は市 1 次調査 B 区 SD38、1 区 -3SD132 は市 1 次調査 C 区 SD16、同様に 1 区 -3SD135 は C 区 SD05、1 区 -3SD140 は C 区 SD26、1 区 -3SD138 は C 区 SD21 にそれぞれ接続するものと考えられる。

### 1 区 -3 層序 (第 65 図)

1～2 層は近世以降の耕土であり、これを除去すると遺構検出面が現われる。地山でもあるこの層は脆弱な砂層である。1 区 -1 及び 2 でもそうであったように近世以降の耕土を除去すると、シルトか砂かの違いはあるが、中世の遺構と弥生時代の後期の遺構がほとんど高低差なく検出されるようになり、古墳時代前期から、奈良・平安時代の遺構はほとんど検出されていない。

1 区 -3 西調査区で見られる南北に平行して伸びる溝跡は近代の畑作にかかわる畝間溝と思われる。

### 1 区 -3 弥生時代の遺構と遺物 集石遺構及び土坑

#### 集石 5・SK130 (第 66 図)

東側調査区の中央付近で集石 5 及び SK130 土坑を検出した (第 64 図)。両者の位置関係は集石 5 を完掘した状態で SK130 が検出されたもので、両者が重層的に検出された形である。

集石 5 は拳大～乳児の頭大の垂円礫とそれが集中する浅い土坑からなっている。平面形は不整形なハート形で、断面皿状を呈する。規模は、幅 1.5m、長さ 1.9m、深さ 20cm を測る。石の間には、周囲の目の粗い地山の砂層とは明らかに異なる、灰のような黒い細かい砂が溜まっていた。検出した上面では比較的大きな石が東側に偏って分布している。下面では比較的小さな石が上面に比べてまばらに分布している。これらの石は他の集石遺構と異なり表面がごつごつした石が非常に多く用いられており、入手先の違いが反映されているものと考えられる。

集石 5 からは、307 の弥生時代中期の甕の破片が出土している。この甕は、口縁が「く」の字に屈折して端部は上下に拡張され、外面に凹線文 2 条を巡らす。器壁は内外ともハケメ調整が施されている。弥生時代中期出雲・隠岐 IV -2 様式の土器である。このほかの遺物は出土していない

ので、集石5の時期を示すものと考えられる。また、後述するSK130はさらに古い時期の遺構となり、1区-3最古の遺構となる。

### SK130 (第66図)

SK130は集石5を完屈した状態で検出された(第64図)。平面形は整な楕円形もしくは小判形で、断面は皿状を呈する。

規模は、幅95cm、長さ1.6m深さ18cmを測る浅い土坑である。遺物は出土していないが、上層の遺構である集石5から弥生時代中期後葉の土器が出土しているのでそれ以前の遺構と考えられる。

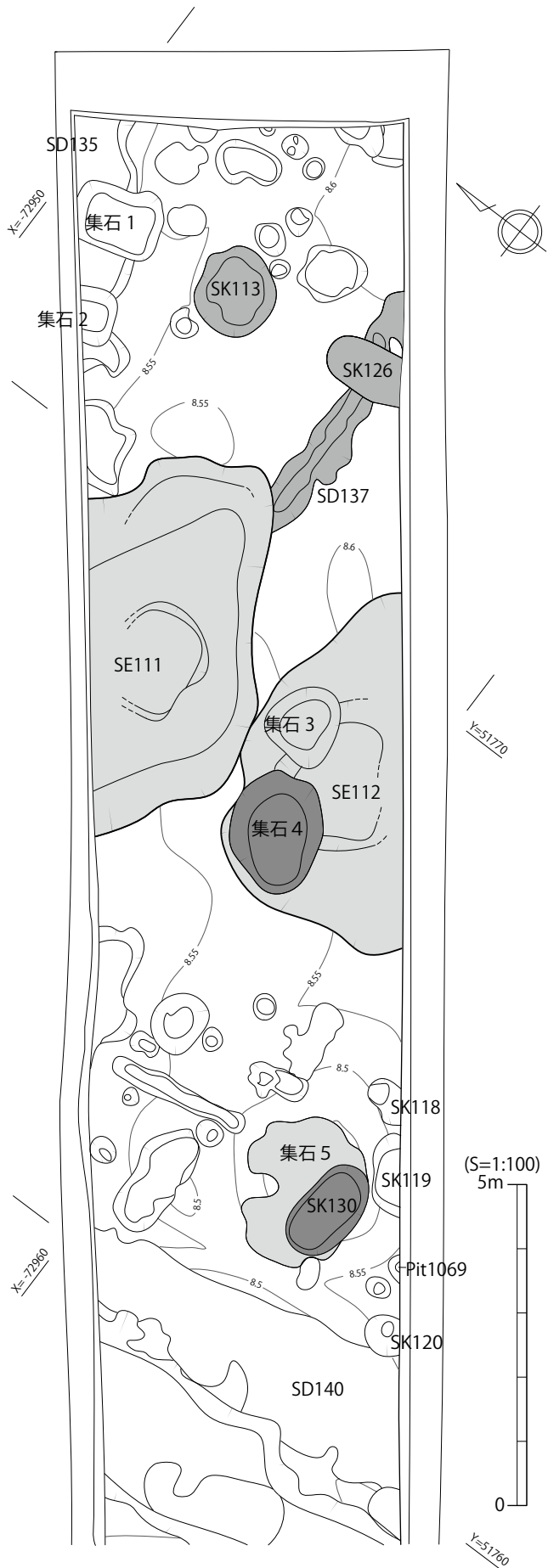
遺構の性格については不明であるが、集石5とSK130で一体で墓である可能性も考えられる。南から北に向かって石積みが崩された状況が考えられるかもしれない。

1区-3東側調査区では第79図で一例を図示したように集石遺構がいくつか検出されている。この中で弥生時代中期の土器が出土した集石5は例外的な存在と言える。多くは集石1～4及びSK113のように楕円形か長方形の平面形で、表面の比較的滑らかな円礫を隙間なく充填している例が多い(写真図版39-1)。また、集石1及び集石2のように1m近い深さを持つ遺構もあった。集石5を除くこれらの集石遺構すべてから、近世以降の陶磁器が出土している。何かの手工業に関わる遺構の可能性もある。

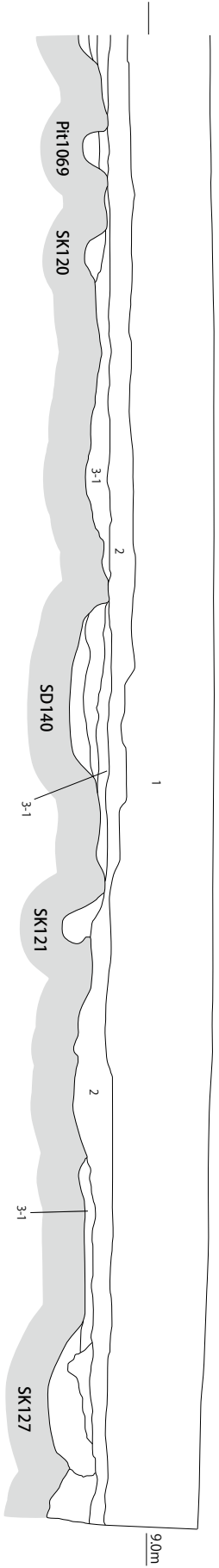
## 1区-3 中世の遺構と遺物

### 井戸

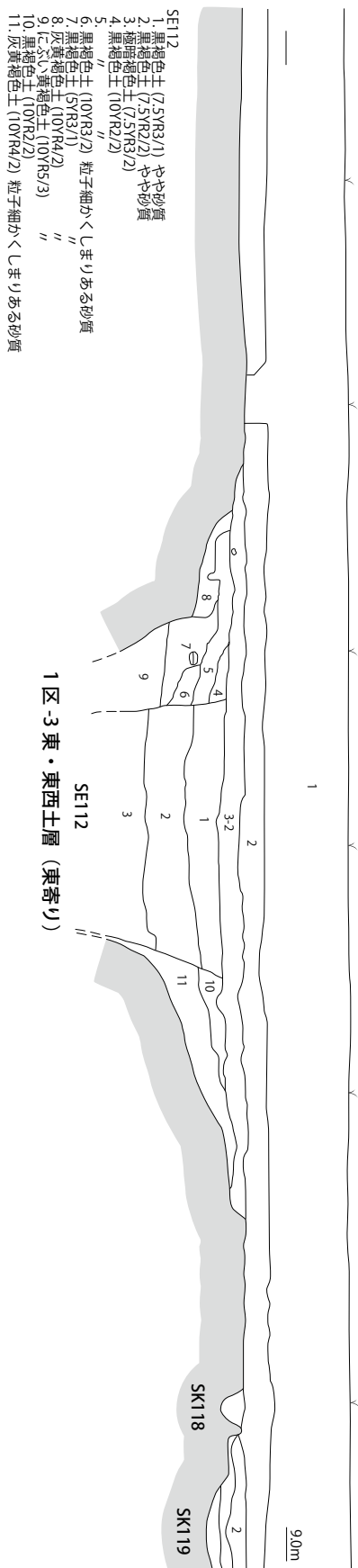
### SE112 (第67～68図)



第64図 1区-3東側遺構配置図

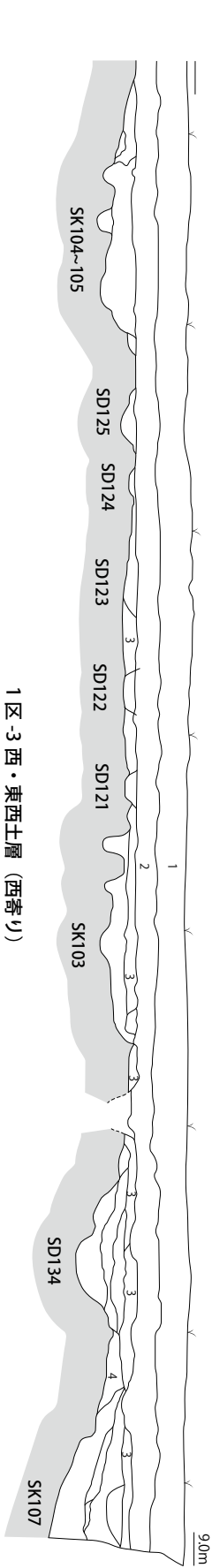


1区-3東・東西土層図(西寄り)



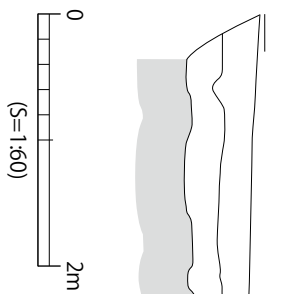
1区-3東・東西土層(東寄り)

- SE112
- 1. 黒褐色土 (7.5YR3/1) やや砂質
- 2. 黒褐色土 (7.5YR2/2) やや砂質
- 3. 暗褐色土 (7.5YR3/2)
- 4. 黒褐色土 (10YR2/2)
- 5. " "
- 6. 黒褐色土 (10YR3/2) 粒子細かくしまりある砂質
- 7. 黒褐色土 (5YR3/1)
- 8. 灰褐色土 (10YR4/2)
- 9. にごい黒褐色土 (10YR5/3) "
- 10. 黒褐色土 (10YR2/2)
- 11. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粒子細かくしまりある砂質



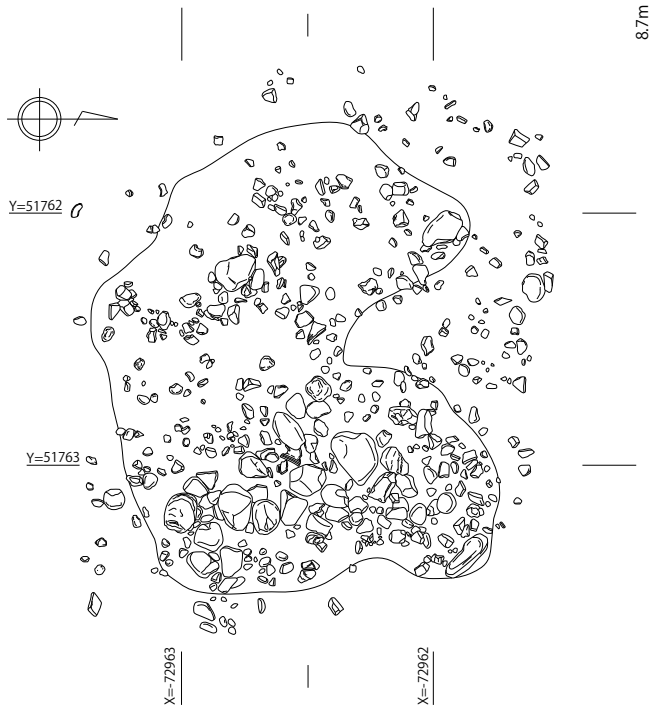
1区-3西・東西土層(西寄り)

- 1区-3東 東西土層
- 1. 造成土
- 2. 黄灰色土 (2.5Y4/1) 団粒土、1cm以下の塊多く含む
- 3-1. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 非常によくしまり、硬質。中世包含層
- 3-2. 黒褐色土 (7.5YR2/2)
- 1区-3西 東西土層
- 1. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘土
- 2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘土、1cm以下の砂塊多く含む
- 3. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 5mm以下の褐色の粒多く含む
- 4. 黒褐色砂質土 (10YR2/3)
- 5. 畝間層 黒褐色土 (10YR3/2)

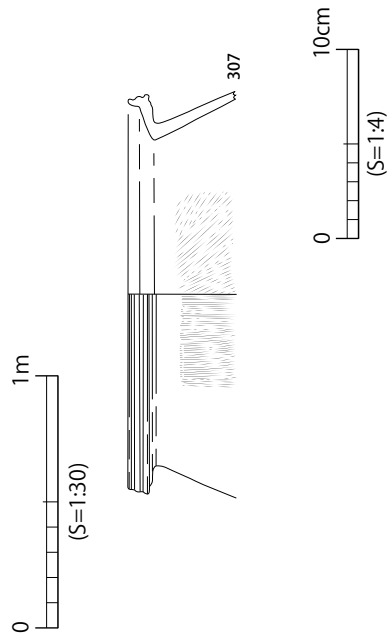


1区-3西・東西土層(東寄り)

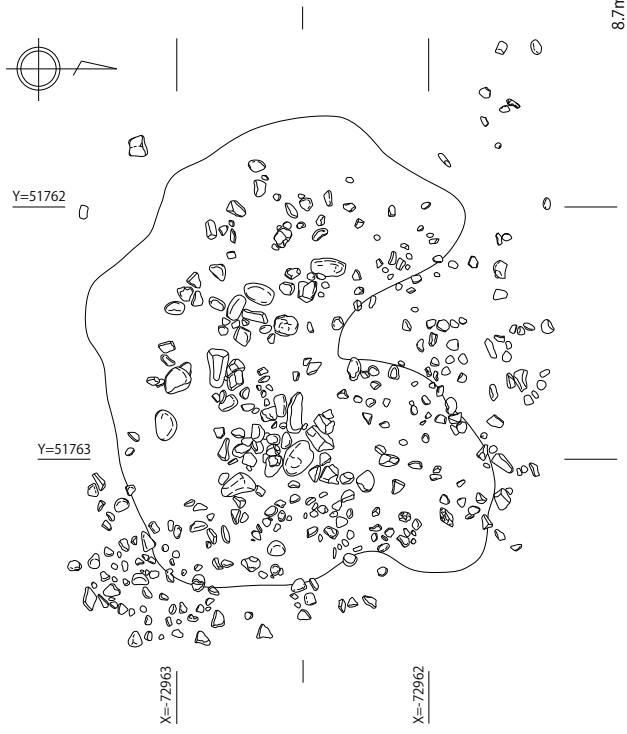
第65図 1区-3調査区土層図



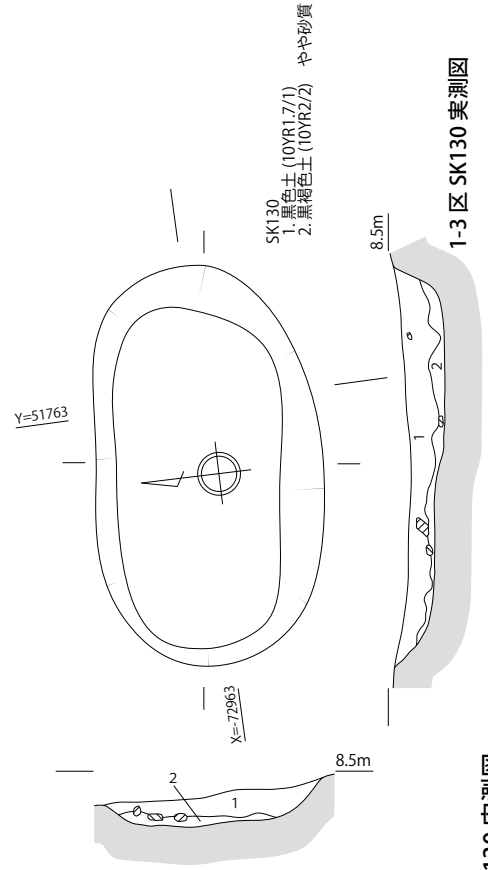
1-3 区集石 5 実測図 (上面)



集石 5 遺物実測図

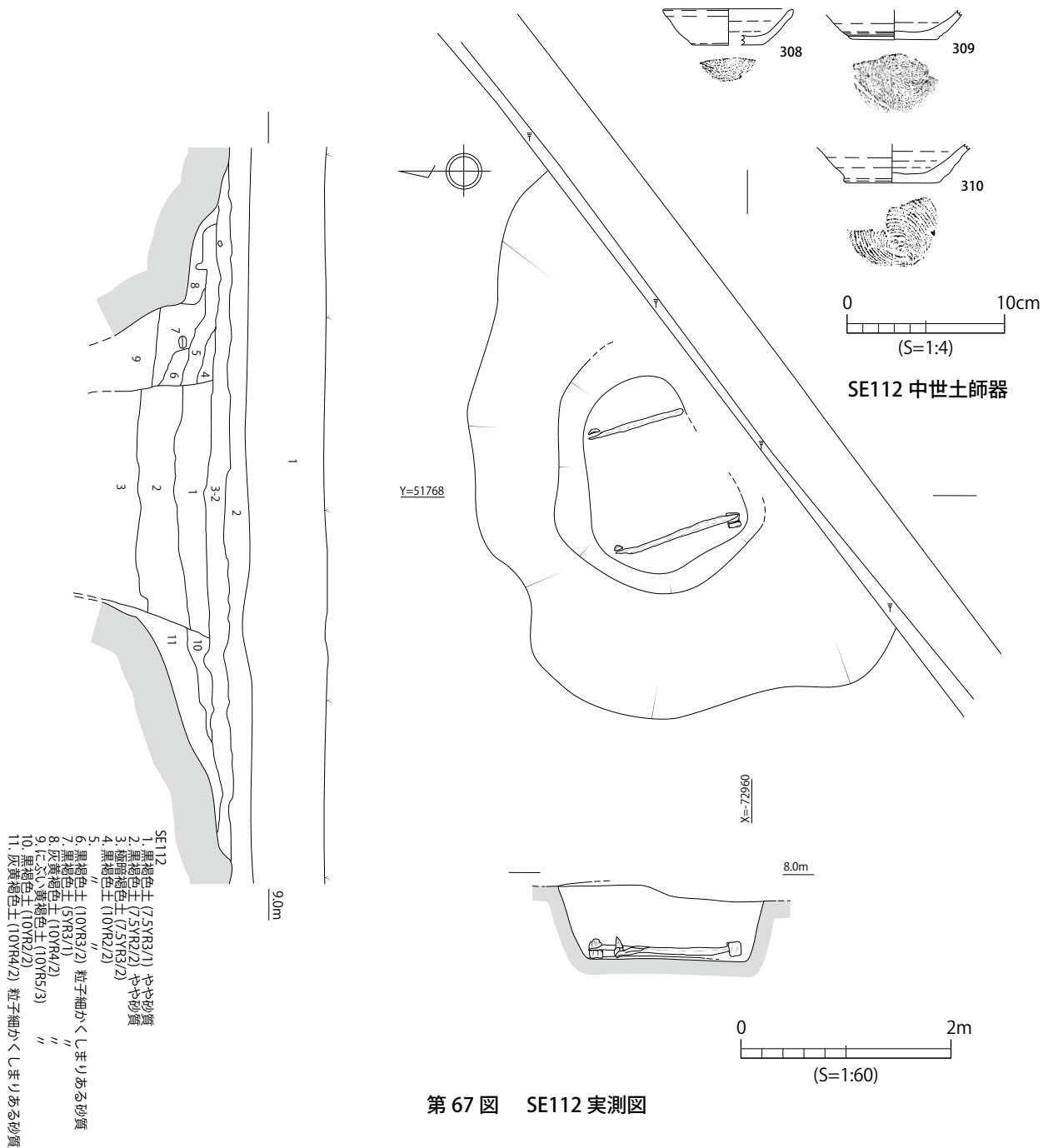


1-3 区集石 5 実測図 (下面)



1-3 区 SK130 実測図

第 66 図 集石 5 及び SK130 実測図



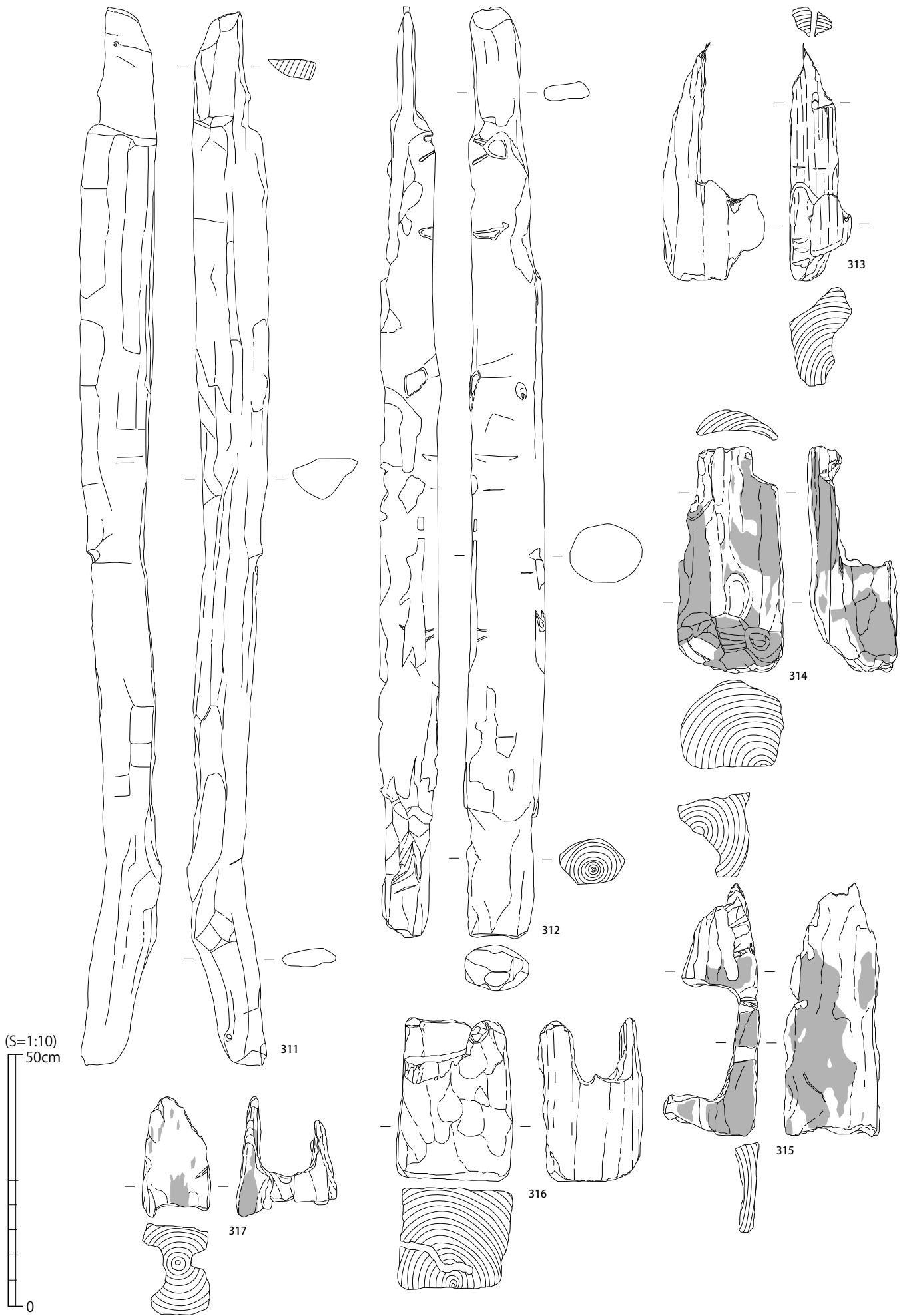
第 67 図 SE112 実測図

SE112 は東側調査区東端近くの調査区南壁に食い込む形で検出された、鎌倉時代の井戸跡である。調査区と調査区に隣接する一般の店舗を保護するため検出しきれなかった (第 67 図)。

SE112 は集石 3 と集石 4 に切られ、さらに SE111 にも切られている。よって、SE111 よりも古い遺構である。

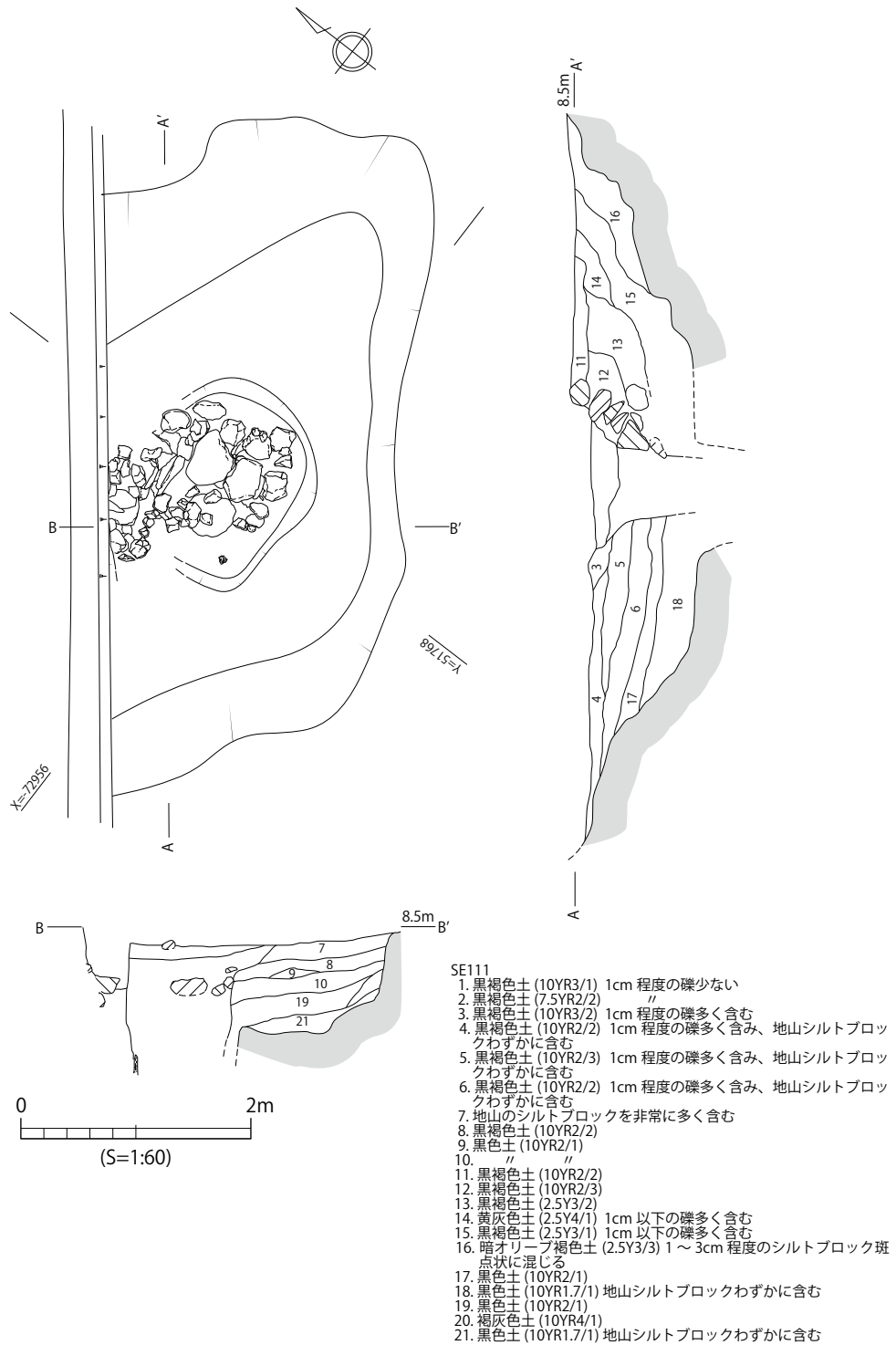
平面形は現状では三角にしか残っていないが、SE111 と同様隅丸長方形の掘り方があるものと推定される。掘り方の断面は、土層によれば、下がすばまる漏斗状とみられる。掘り方の規模は、幅 4m、長さ 5m、1.4m を測る。井戸側も支持の痕跡もほとんどないが井戸底には第 68 図に挙げた水溜最底部の部材が四角に組まれた状態で残っていた (第 67 図)。この部材の出土状況と土層から、井戸の内法は 2m 四方と推定される。SE111 と違って石材がほとんど出土していない。後述するが、SE111 への移設のためにすべて再利用された可能性が考えられる。





第 68 图 SE112 出土遺物実測図



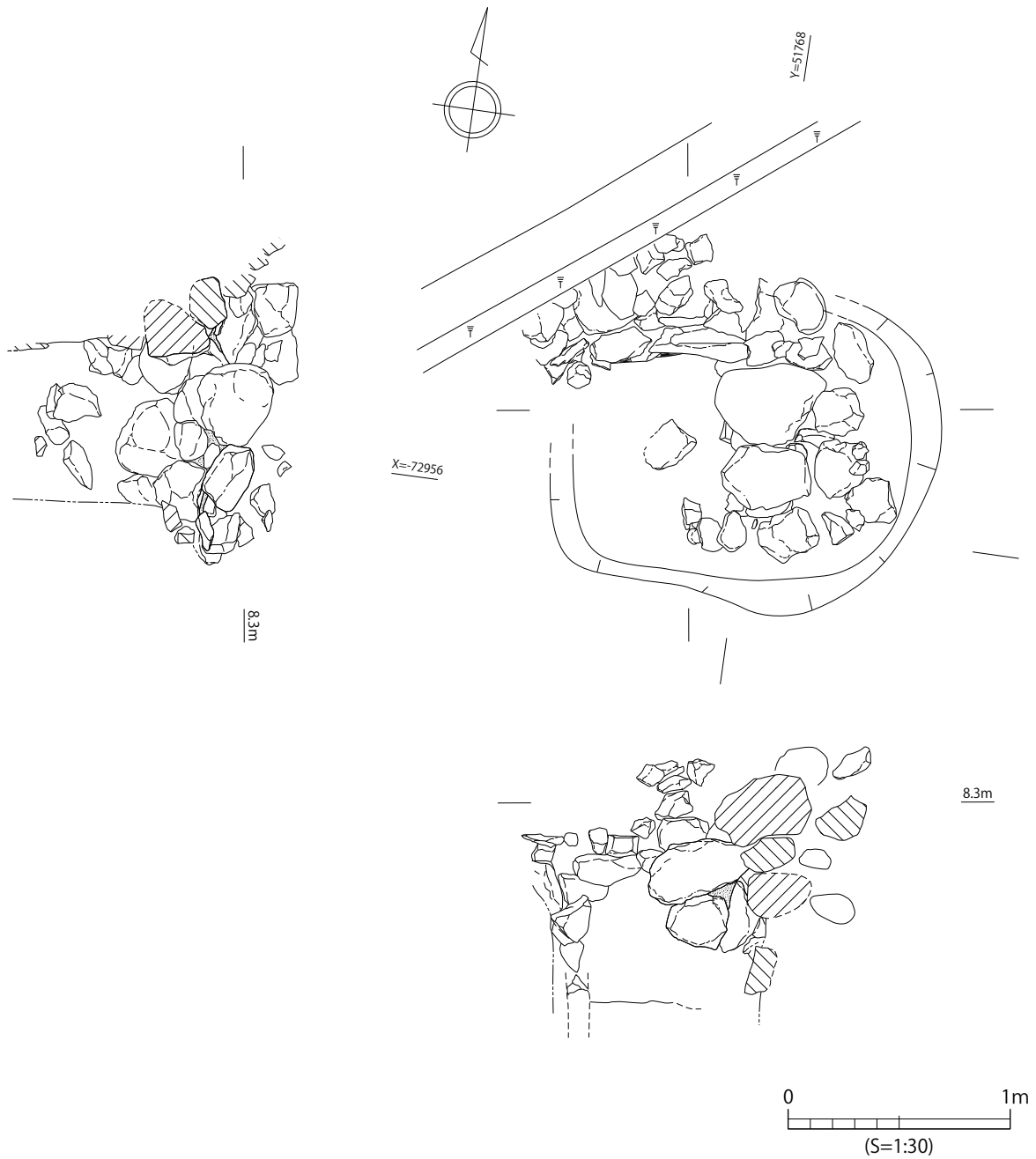


第 69 図 SE111 実測図 1

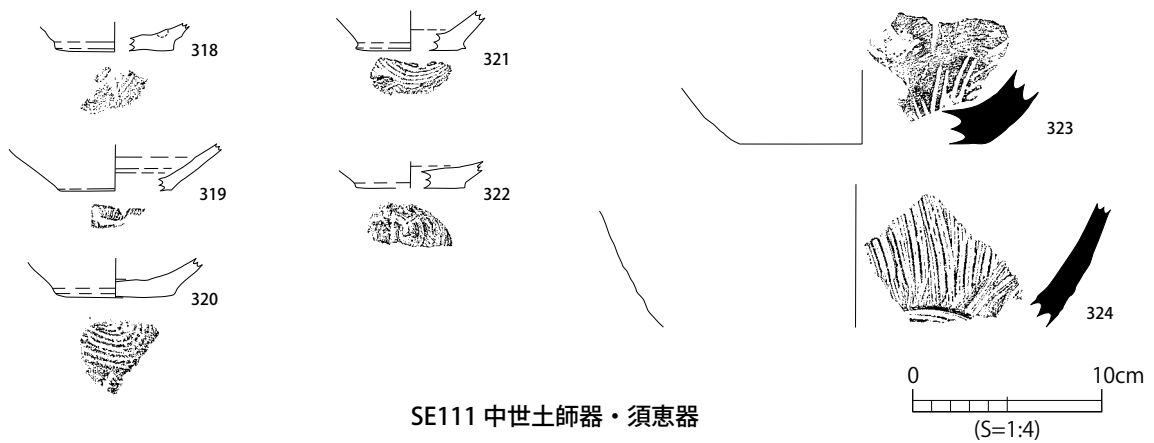
SE112 からは、第 67 図に挙げた中世土師器坏皿が出土している。308 は皿で、古志本郷遺跡土師質土器分類皿 c 類 3 期（15 世紀代）、309 及び 310 はともに同分類坏 A 類（13 世紀後半～14 世紀代）の土器である。第 68 図の木製品は井戸支持の部材である。311 及び 312 は横木その他は支柱の残骸と思われる。SE112 井戸底で組んだ状態で出土した。

**SE111**（第 69～73 図）

SE111 は SE112 の掘り方を若干切る形でその北側で検出された（第 64 図）。調査区及び公共の

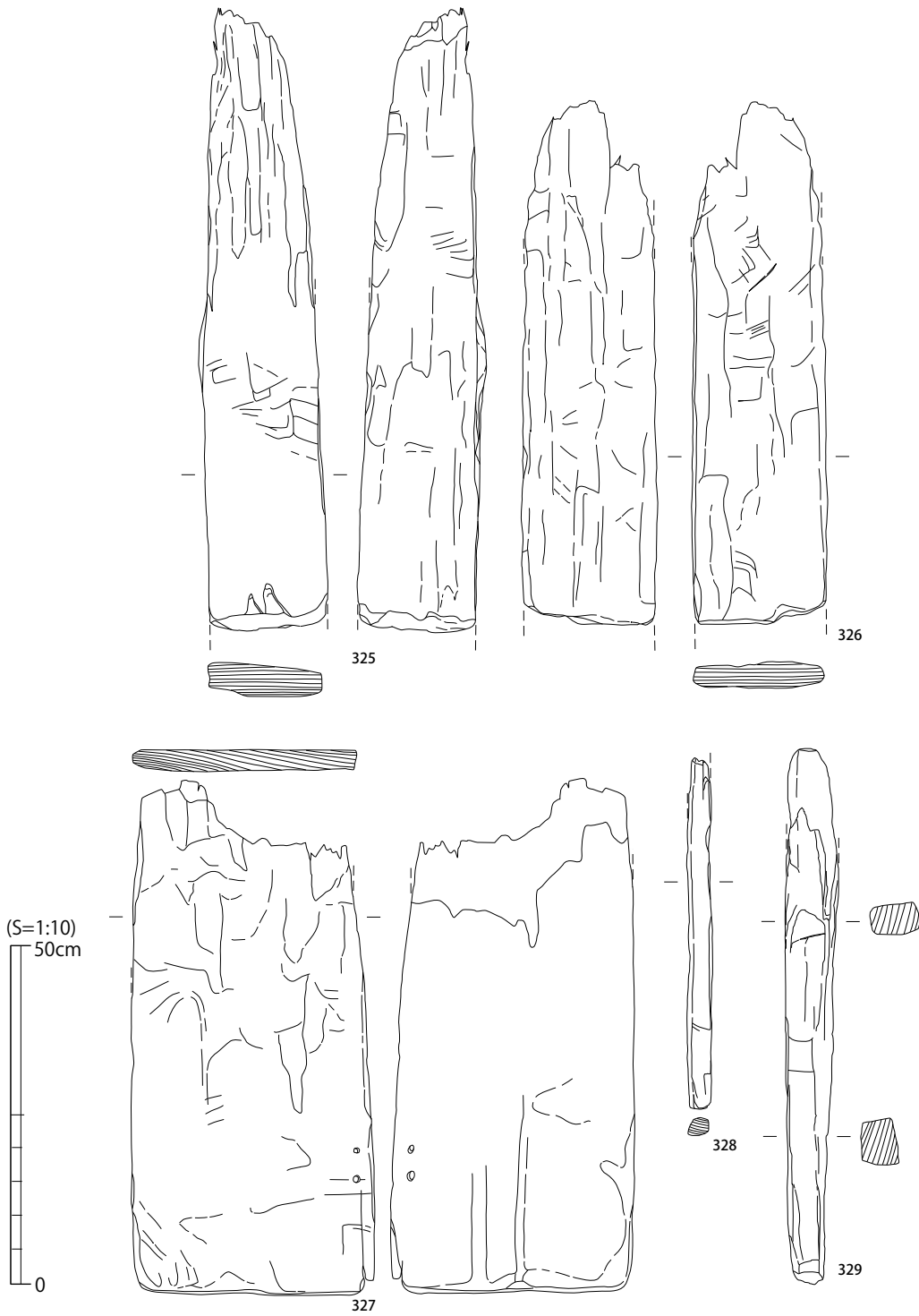


SE111 井戸内部実測図



SE111 中世土師器・須恵器

第 70 図 SE111 遺構実測図 2・出土遺物実測図 1



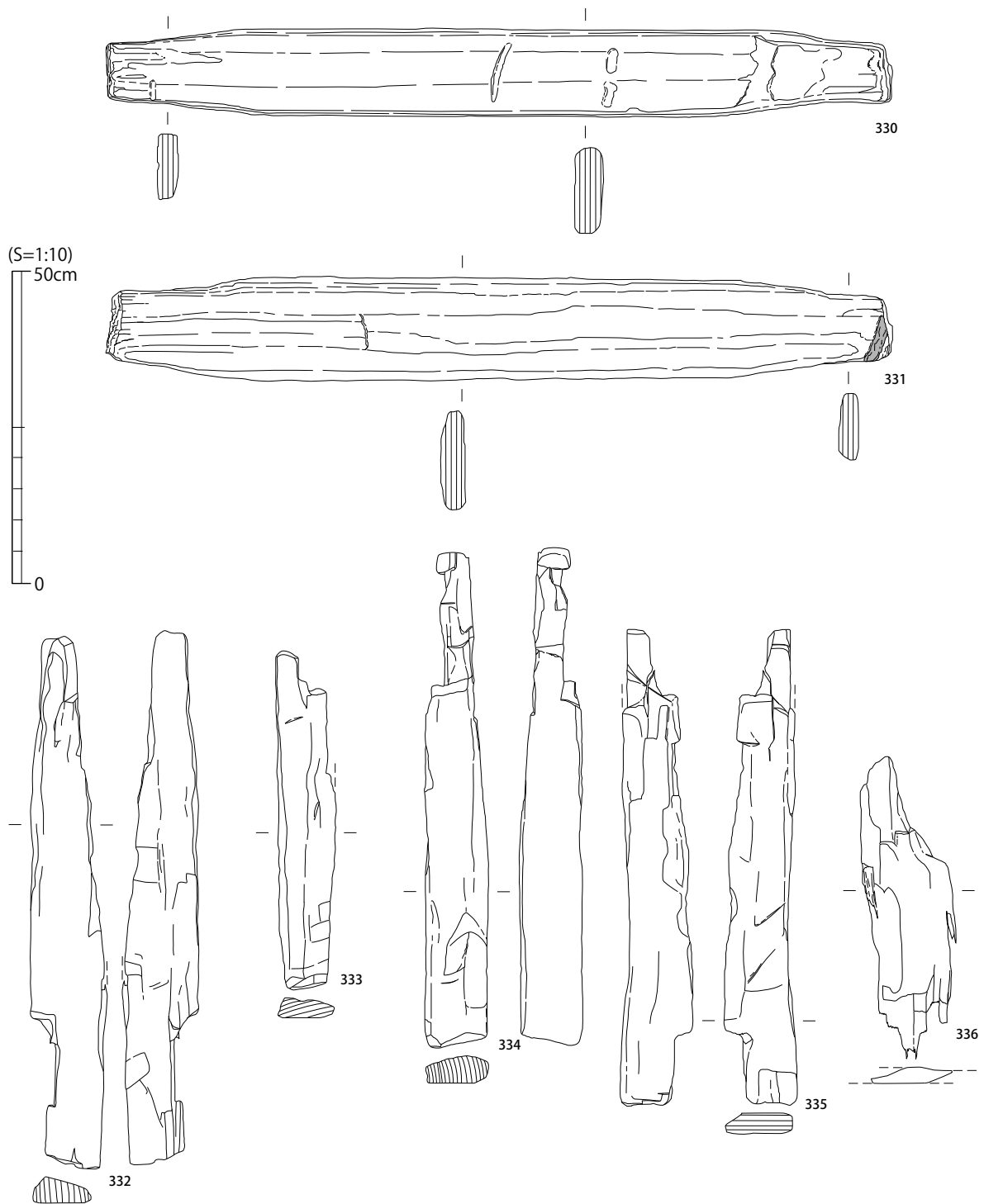
第71図 SE111 出土遺物実測図2

歩道と側溝を保護するため検出しきれなかった。

SE111の掘り方の平面形は隅丸の平行四辺形と推定される。断面形は二段掘りの逆凸状と推定される。規模は、掘り方の幅は4mと推定される。長さは5.5mを測る。深さは1.4m以上と推定される。井戸の水溜の内法は、幅1.5m、長さ2.0mを測る。

井戸側は石組、支持は縦板組横棧止めである。

石組は東側がよく残り、元位置を保つものが多かった。石組の下の木材の支持構造が残っており、取り上げて図示したものが第71～73図に挙げた部材である。325～327及び330～336まで

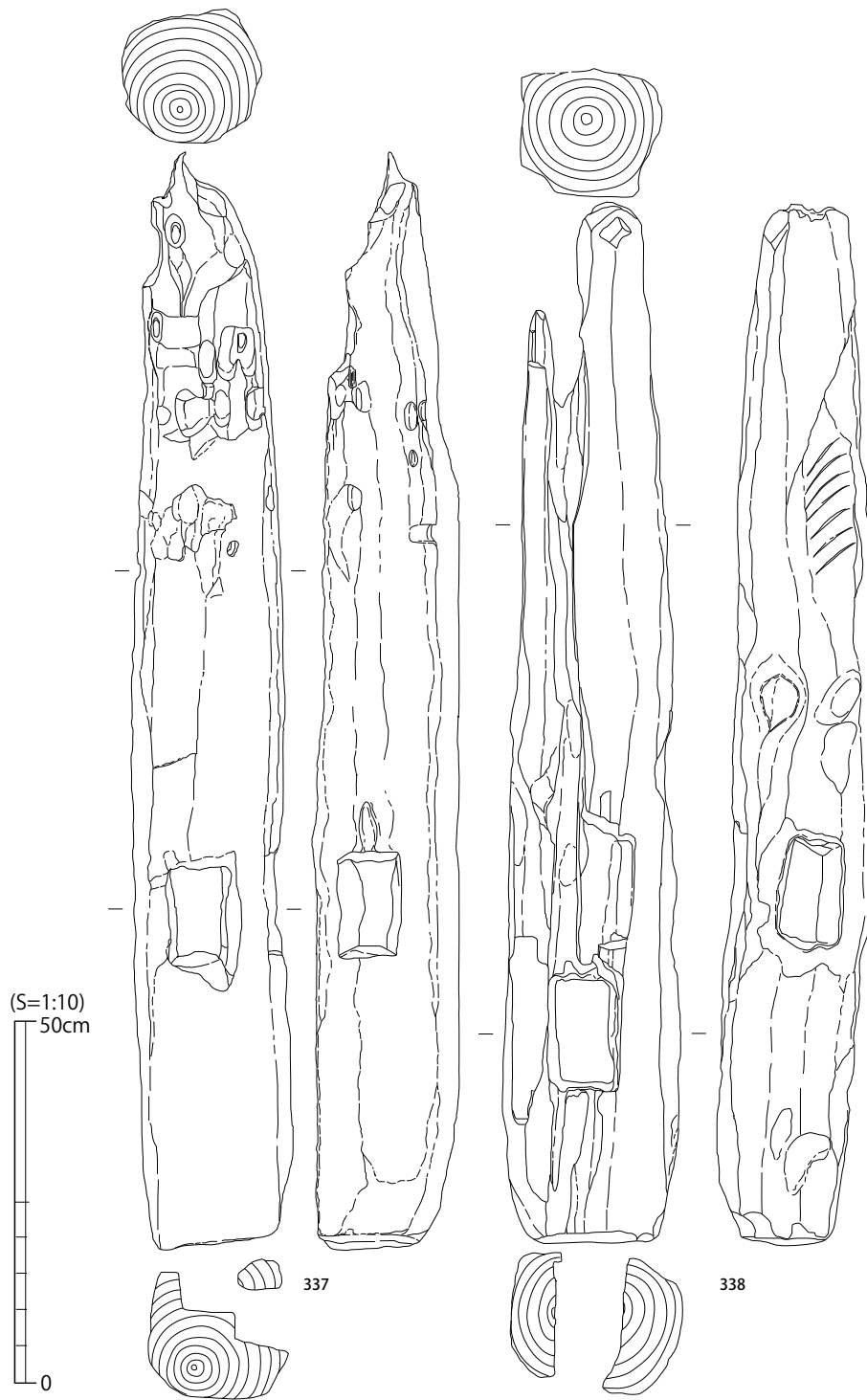


第 72 図 SE111 出土遺物実測図 3

は板材である。330 と 331 は横木、その他は縦使いであったと思われる。337 と 338 の部材は四隅の支柱で直交する面にほぞ穴がある。

SE111 からは第 70 図に挙げた中世土師器坏皿と、在地形と東播系須恵器の鉢が 1 点ずつ出土している。318 と 322 は古志本郷遺跡土師質土器分類皿 c 類Ⅲ期（15 世紀代）、同様に 319 は坏 D-1 類Ⅳ期（15 世紀代～ 16 世紀前半）、320 は坏 B 類Ⅱ期（14 世紀代）、321 は坏 A 類Ⅰ期（13 世紀後半～ 14 世紀代）である。SE112 に比べて、新しい様相がうかがえる。

SE111 と SE112 は、いずれも井戸底に木枠を残しており、SE111 には、木枠の上に石組が



第73図 SE111 出土遺物実測図4

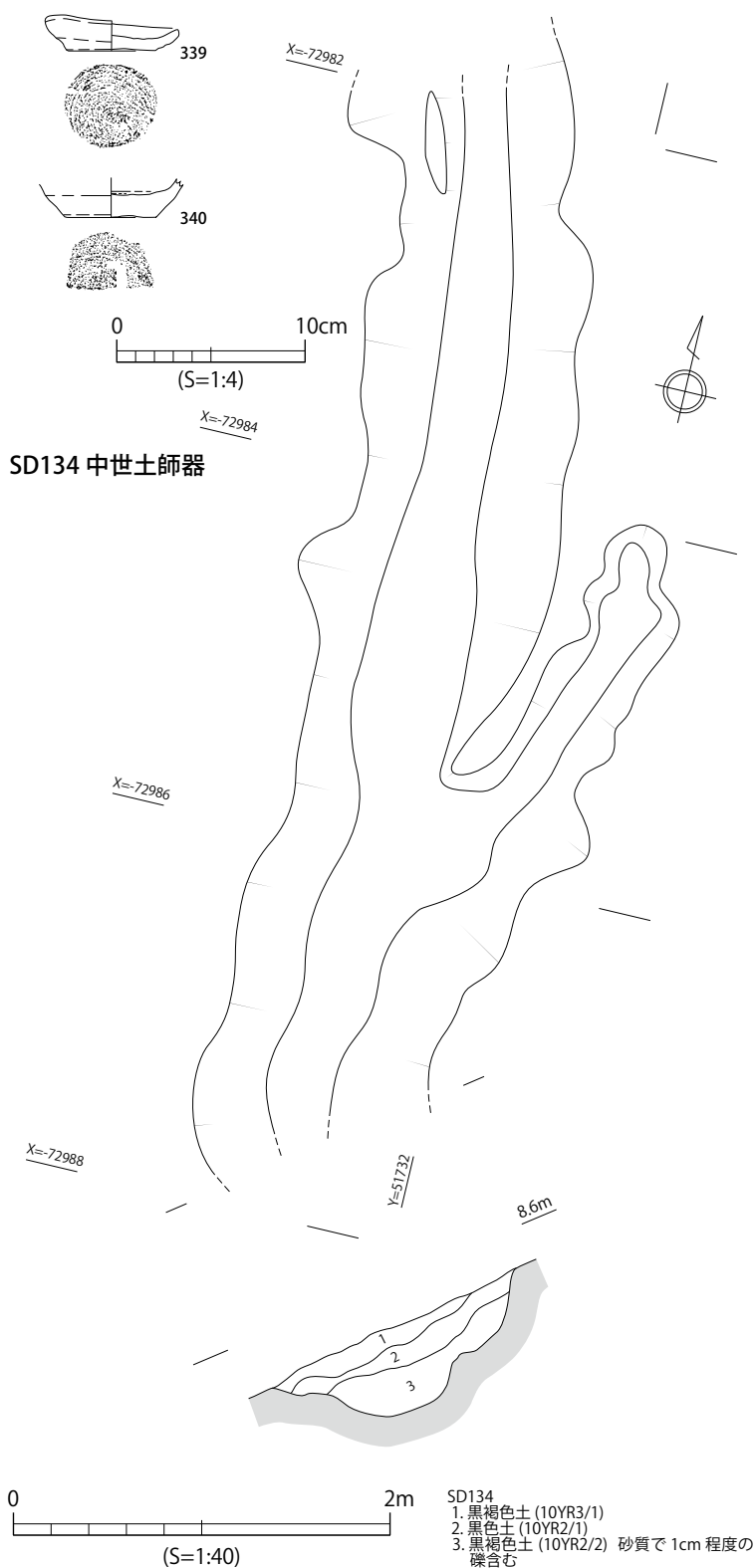
残っていた。SE112には井戸底の木枠しか残っていなかった。両者の掘り方の重複はわずかだが、SE111がSE112を切っており、優先している。また、両方とも、出土遺物は13世紀後半以降のもので顕著な差異は認められない。しかし、ほぼ同規模の掘り方であるのに、SE111には石組が残っており、SE112には石組はおろか石はほとんど出土していない。このことから、SE112はSE111に先行するものと考えられ、何かの事情でSE112の井戸を廃絶し、埋め戻すことになって解体した後、SE112に石組みを移築したことが考えられる。よってSE111はもとより、SE112も井戸側は石組で形状支持は縦板組横棧止めであったと考えられる。

## 溝跡

### SD134 (第74図)

SD134は西側調査区の西端を南北に延びる比較的大きな中世の溝跡である(第63図)。幅1～1.5m、深さ45cm調査区内は5.5mの長さである。市1次調査C区のSD38と接続すると思われる。339及び340の中世土師器坏皿が出土している。339は古志本郷遺跡土師質土器分類皿b類Ⅱ期(14世紀代)で、340は同分類坏C類Ⅲ期(15世紀代)の土器である。溝の存続時期を反映している可能性がある。

なお、出雲市1次調査では本報告1区-2に隣接平行してB区が、また、1区-3に隣接平行してC区の調査が設定され調査されている。この市1次調査と本報告の調査では長駆する溝跡の対応関係、あるいは接続関係がみられた。遺構種別一覧に示したように、1区-2SD142は市1次調査B区SD38、1区-3SD132は市1次調査C区SD16、同様に1区-3SD135はC区SD05、1区-3SD140はC区SD26、1区-3SD138はC区SD21にそれぞれ接続するものと考えられる。

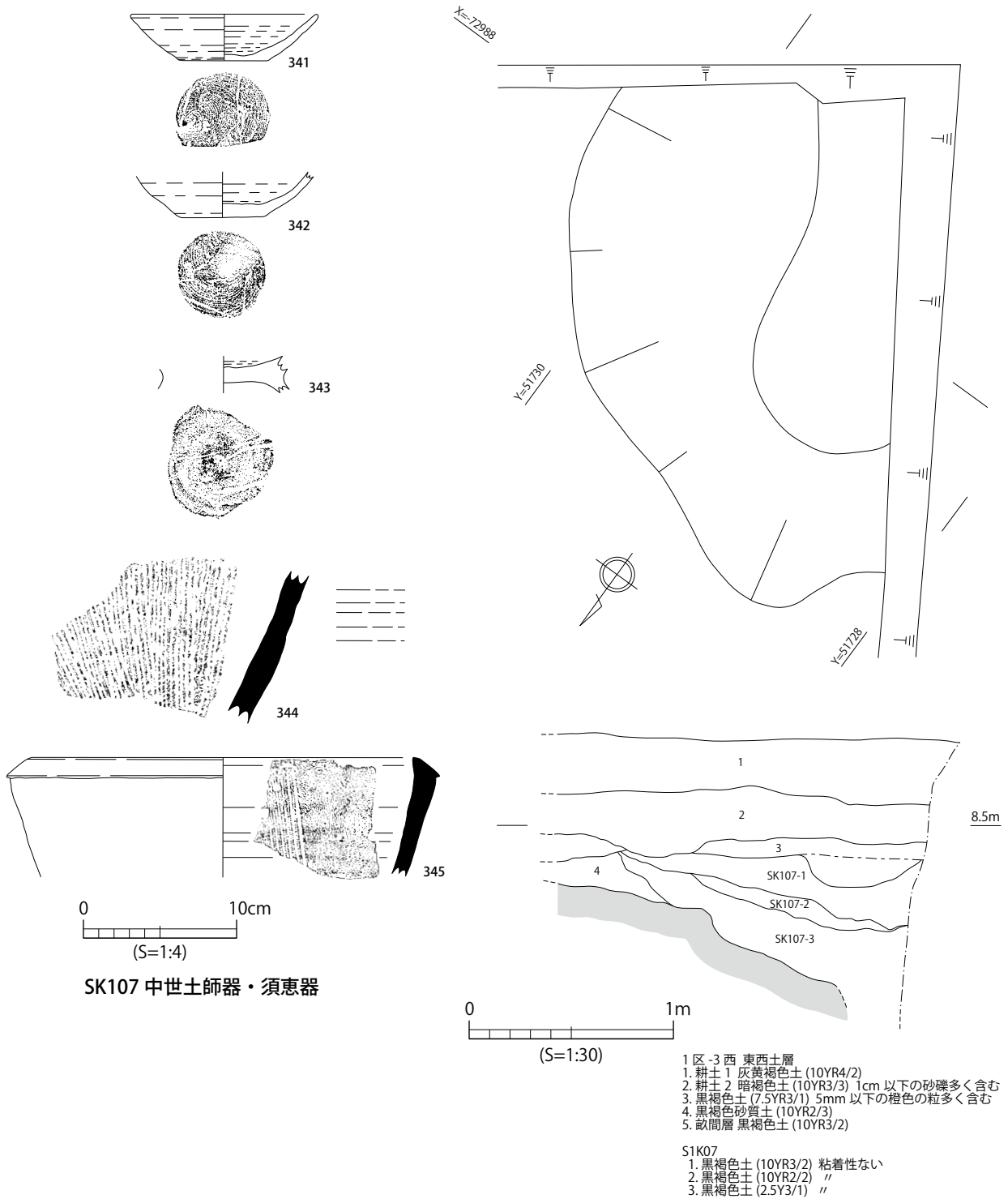


第74図 SD134実測図

## 湧水土坑

### SK107 (第75図)

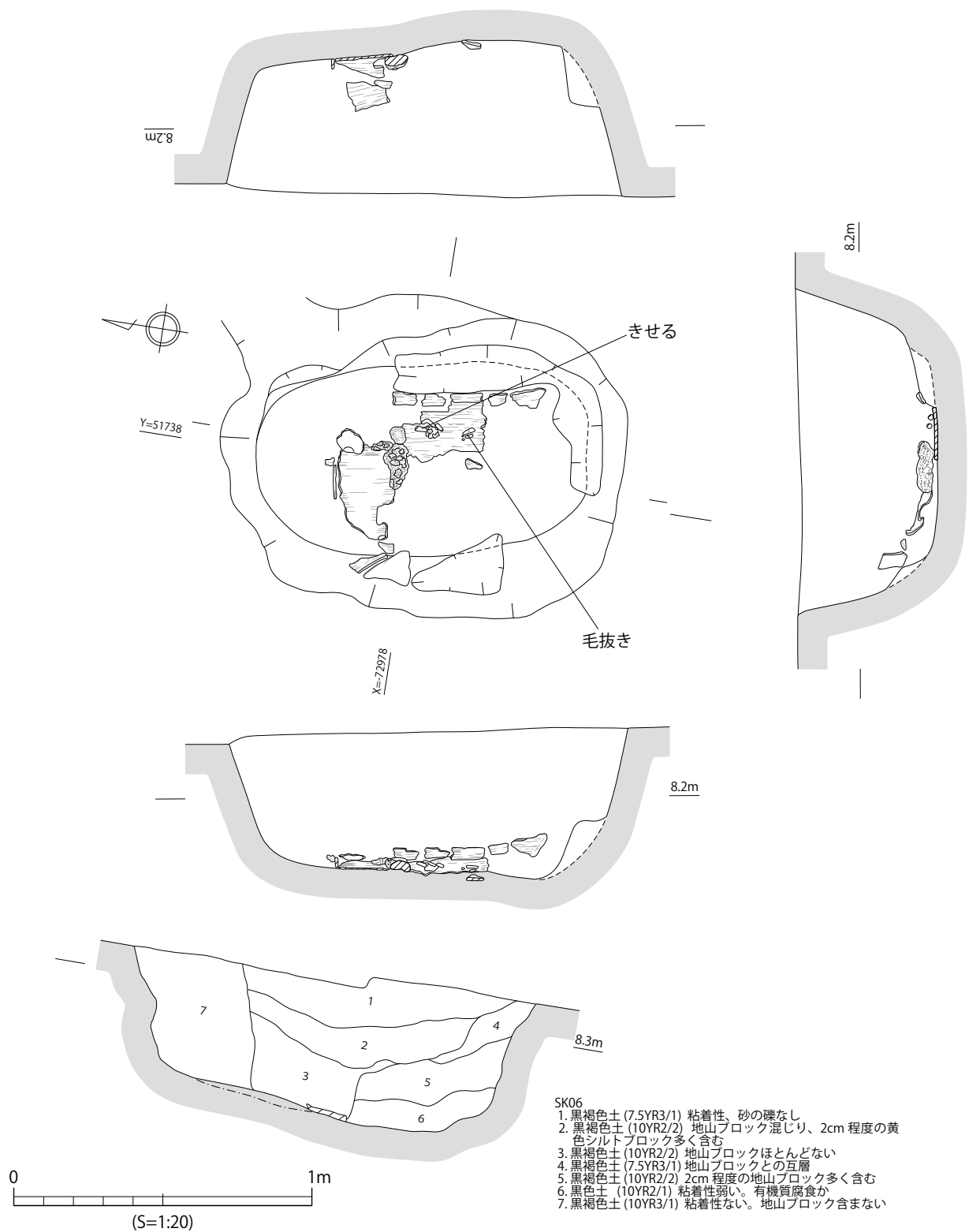
SK107は西側調査区南西端の角に食い込む形で検出された(第63図)。公共の排水路と民地の畑を保護するため検出しきれなかった。平面形は楕円形と推定される。断面形は逆台形と推定される。規模は、幅1.5m以上、長さ2.5m以上深さは60cmを測る。SK107からは中世土師器坏皿と、播鉢、こね鉢などの調理具の破片が出土している。341は古志本郷遺跡土師質土器分類坏D-1類



第75図 SK107 実測図

IV期（15世紀代～16世紀前半）、342は同様に坏A類I期（13世紀後半～14世紀代）、343は高台の付く大形の坏でI期の中でとらえられるものと考えられる。この高台坏の裏には一文字のヘラ記号がある。344は内側一面に深い溝のカキ目を持つ東播系須恵器のこね鉢、345は備前焼の播鉢で、備前IV-A期（14世紀後半～15世紀前半）である。これらの遺物は遺構の存続時期を反映している可能性がある。ただ、土層の状況をみる限り、SK107湧水土坑はSD134溝跡を切っている。

1区-2で検出した湧水土坑と規模も同じようなので、同等の機能があった可能性が考えられる。



第 76 図 SK106 実測図

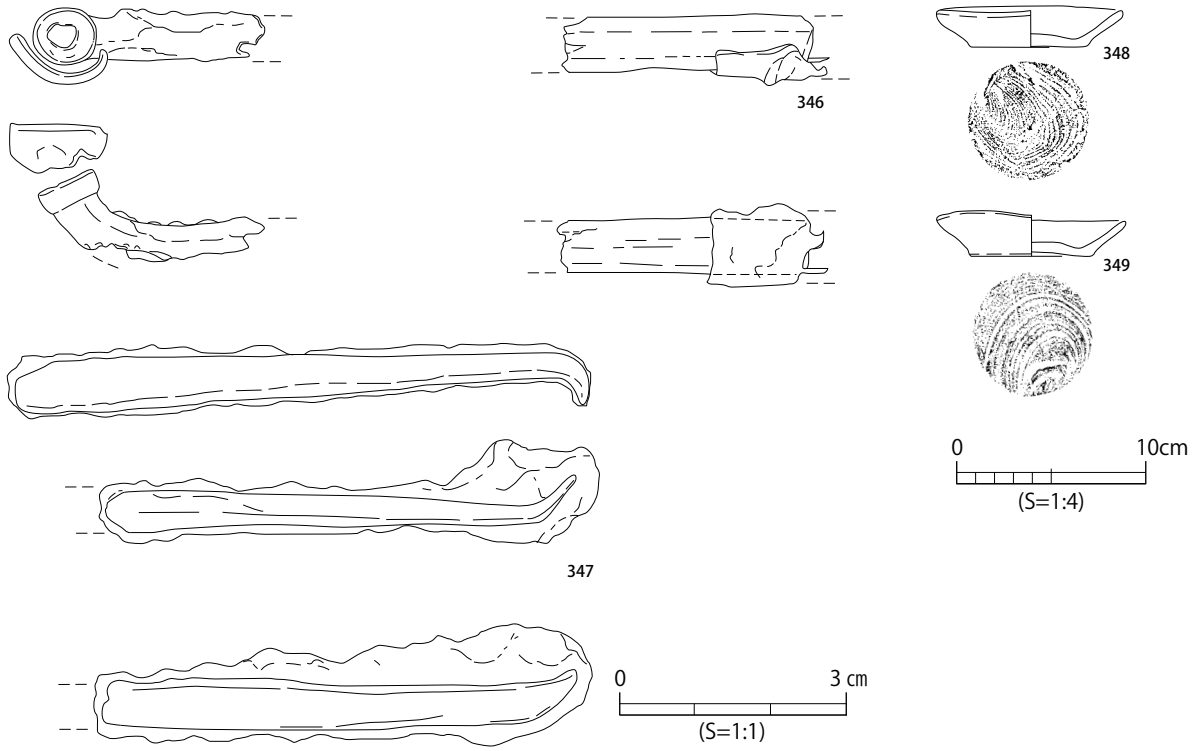
## 墓坑

### SK106 (第 76 ~ 77 図)

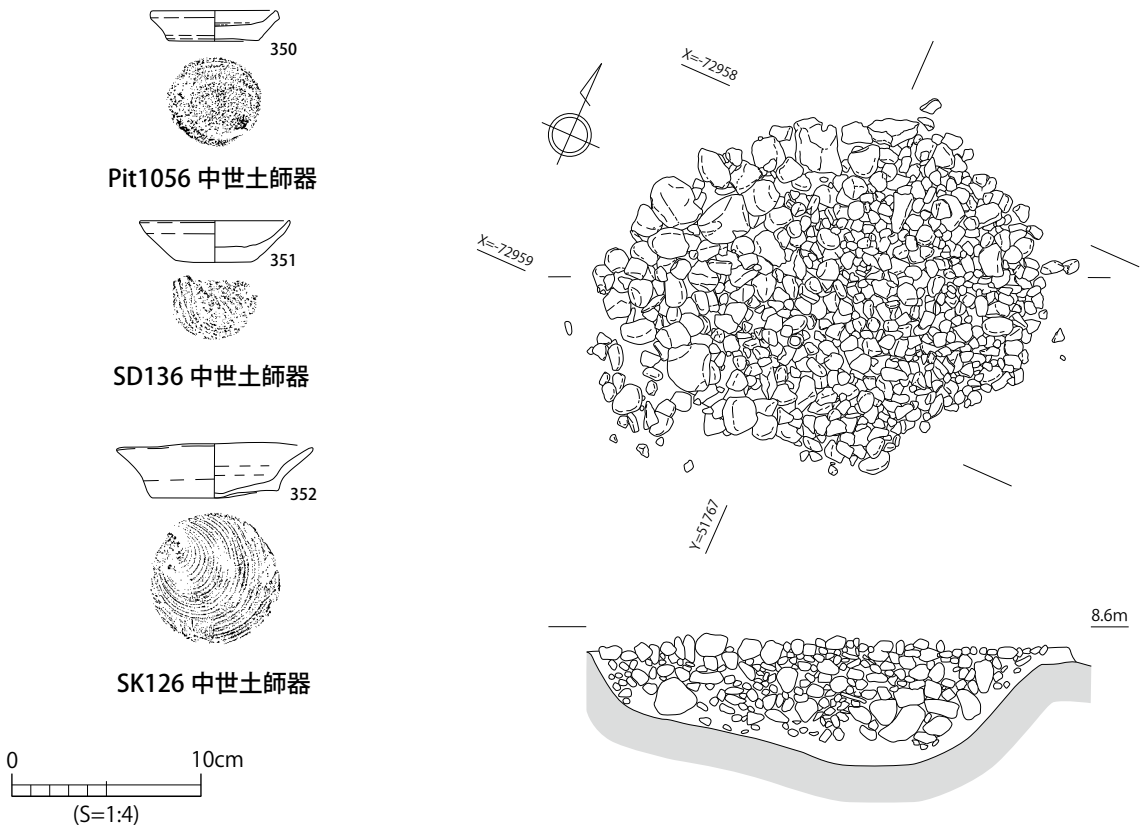
SK106 は西側調査区の東寄り北壁に若干食い込む形で検出された (第 63 図)。中世末から近世初頭にかけての組合せ式角形木棺墓である。

平面形は隅丸長方形断面形は隅丸であるが円筒状を呈する。規模は幅 1.1m、長さ 1.4m、深さ





第 77 図 SK106 出土遺物実測図 煙管、毛抜き原寸大、土師器 S=1/4



第 78 図 1 区 -3 各遺構出土遺物実測図

第 79 図 集石 4 実測図

は 55cm を測る。木棺の幅は 50cm、長さ 70cm、深さは残存 20cm を測る。

出土した副葬品は、漆椀（塗膜のみ）、中世土師器皿 2 点、金属製の毛抜き、煙管である。第 77 図に挙げた。漆椀（塗膜のみ）に関しては図示していない。348 及び 349 は古志本郷遺跡土師質土器分類皿 A 類Ⅳ期（16 世紀末～17 世紀初頭）で、墓の時期を示しているものと考えられる。

SK106 の被葬者は豊富な副葬品を持ち注目される。漆椀（漆塗膜のみ残存）、土師器皿などの供膳具、毛抜きなどの金属製日用品、煙管などの嗜好品があった。中でも煙管は、煙管による喫煙風習が日本列島に伝わって間もない時期のものであることも考えられ、貴重な資料と思われる。

Pit1056（第 63 図）から出土した 350 土師器皿は、底部外面に静止糸切り痕があり、古志本郷遺跡土師質土器分類皿 B 類Ⅵ期（17 世紀中葉以降）の土器である。遺構の時期を示すものと考えられる。

SD136（第 63 図）から出土した 351 中世土師器皿は、古志本郷遺跡土師質土器分類皿 c 類（15 世紀代）の土器である。遺構の時期を示すものと考えられる。SD136 は SK107 に切られている。

SK126（第 64 図）から出土した 352 中世土師器皿は、古志本郷遺跡土師質土器分類皿 A 類（16 世紀末～17 世紀初頭）の土器であり、遺構の時期を示すものと考えられる。

## 小結

1 区-3 で検出された主な遺構としては、弥生時代中期後葉の集石遺構 1 基（集石 5）、また、この集石 5 の下部から土坑 1 基（SK130）、鎌倉時代の石組井戸 2 基（SE112 及び SE111）、中世末から近世初頭にかけての角形組合式木棺墓 1 基（SK106）などが挙げられる。

SE111 と SE112 は、いずれも井戸底に木枠を残しており、SE111 には、木枠の上に石組が残っていた。SE112 には井戸底の木枠しか残っていなかった。両者の掘り方の重複はわずかであったが、SK111 が優先している状況がろうじて把握できた。しかし、両方とも出土遺物は 13 世紀後半以降のもので顕著な差異は認められない。また、ほぼ同規模の掘り方であるのに、SE111 には石組が残っており、SE112 には石組はおろか石はほとんど出土していない。このことから、SE112 は SE111 に先行するものと考えられ、何かの事情で SE112 の井戸を廃絶埋め戻すことになって解体した後、SE112 に石組みを移築したことが考えられる。よって SE111 はもとより、SE112 も井戸側は石組で、形状支持は縦板組横棧止めであったと推測される。

1 区-3 で検出された SK106 墓坑は、中世末～近世初頭の組合式角形木棺墓で、豊富な副葬品を持ち注目される。副葬品には、漆椀（漆塗膜のみ残存）、土師器皿などの供膳具、毛抜きなどの金属製日用品、煙管などの嗜好品があった。中でも煙管については、17 世紀初頭（慶長年間）に、ようやく日本列島に広がり始めた煙管による喫煙<sup>(1)</sup>習俗の当地における様相を知る上で、具体的事例を示す重要な資料と思われる。

## 注)

(1) 宇賀田為吉 1973 『タバコの歴史』 岩波新書及び上野賢實 1998 『タバコの歴史』 大修館書店

第1表 1区土器・陶磁器・土製品観察表

1区-1														
遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の 寸法	残存率 (%)	形態・文様の特徴	色調	備考
1	9	46	弥生土器	甕	SK102	1層	18.9	24.2	20.0 ~ 21.0	底径 2.0 ~ 2.5	90		浅黄橙 10YR8/4	草田 4
2	9	46	弥生土器	甕	SK102	1層	17.2	25.3	20.5	底径 2.8	90		外:浅黄橙 10YR8/3 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 4、煤付着
3	9	46	弥生土器	甕	SK102	1層	20.5	31.3	24.2	底径 3.5	90		淡黄 2.5Y8/3	草田 4
4	9	46	弥生土器	甕	SK102	1層	(16.0)				35	波状文、平行線 文	外:灰白 10YR8/2 内:浅黄橙 7.5YR8/4	草田 4
5	9	46	弥生土器	注口土器	SK102	1層			16.5	底径 2.3 ~ 2.8	90	刺突文(貝)、平 行線文	外:灰白 10YR8/1 内:浅黄橙 7.5YR8/4	草田 4 II類
6	9	46	弥生土器	甕	SK102	1層	13.3	16.8	14.8	底径 1.6	完存		灰白 10YR8/2	草田 3~4
7	9	46	弥生土器	甕	SK102	1層	14.7	15.7	15.7	底径 1.7	完存	小型羽状文、平 行線文	淡黄 2.5Y8/4	草田 4
8	9	46	弥生土器	壺	SK102	1層			24.0		40	波状文、平行線 文	外:浅黄橙 10YR8/3 内:黄橙 10YR7/2	草田 4
9	9	46	弥生土器	鼓形器台	SK102	1層	19.5	8.0		底径 17.0	完存		灰白 2.5Y8/2	草田 4
10	9	46	弥生土器	鼓形器台	SK102	1層	22.6	15.1		19.4	90		外:灰白 2.5Y8/2 内:灰白 2.5Y8/1	草田 4
11	9	46	弥生土器	鼓形器台	SK102	1層	21.3	7.9		底径 19.5	90		灰白 2.5Y8/2	草田 4
12	10	47	弥生土器	甕	SB101	3層	(24.0)				小片	擬凹線文 13条	外:黄橙 10YR7/3 内:灰白 2.5Y8/2	
13	10	47	弥生土器	低脚坏	SB101	3層					小片		灰白 10YR8/2	
15	12	47	弥生土器	甕	Pit1012	1層	17.8				完存	波状文、平行線 文 煤付着	黄橙 10YR7/3	草田 4
16	14	47	弥生土器	甕	SD102	2層	(14.4)				小片	擬凹線文 12条	外:明黄褐 10YR7/6 内:浅黄 2.5Y7/3	草田 3
17	14	47	弥生土器	甕	SD107	—					小片	擬凹線文 8条	外:浅黄橙 10YR8/3 内:灰白 2.5Y8/2	草田 3
18	14	47	弥生土器	甕	Pit1046	2層	(19.0)				小片	平行線文、波状 文	外:灰白 2.5Y8/2 内:黄橙 10YR7/2	草田 4
19	14	47	弥生土器	甕	Pit1046	2層	(18.0)				小片		灰白 10YR7/2	草田 4
20	14	47	弥生土器	甕	Pit1046	2層	(16.8)				15		灰白 10YR7/2	草田 4
21	15	47	陶器	碗	SK101	—				底径 (4.6)	小片	底部以外軸かか る	外:浅黄橙 10YR8/3 内:黄橙 10YR7/4	
1区-2														
遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の 寸法	残存率 (%)	形態・文様の特徴	色調	備考
22	19	47	弥生土器	高坏	SK169	3層				底径 (10.2)	95	脚部 6条・脚台 部 3条・脚端部 3条凹線文 脚台部刻目文	外:橙 7.5YR7/4 内:浅黄橙 7.5YR8/6	素堀土坑墓 III -1
23	19	47	弥生土器	広口壺	SD156	1層	(16.0)				小片	凹線文 3条	オリープ灰 10YR8/2	IV -2
24	19	47	弥生土器	広口壺	SD156	1層					小片	凹線文 4条 煤付着	浅黄橙 10YR8/3	IV -2
25	19	47	弥生土器	高坏	SD156	1層					小片	凹線文	黄橙 10YR7/4	IV -2
26	25	55	弥生土器	甕	SD141 M8 西	4層	(18.8)				小片	擬凹線文 12条	浅黄橙 10YR8/3	草田 3
27	25	55	弥生土器	鼓形器台	SD141 L8	3層					小片	羽状文(貝)	外:橙 7.5YR7/6 内:浅黄橙 7.5YR8/4	草田 3
28	25	55	弥生土器	甕	SD141 L8	3層	(21.7)				25	平行線文	外:黄橙 10YR7/3 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 4
29	25	55	弥生土器	鼓形器台	SD141 L8	3層					40	擬凹線文 9条~	浅黄橙 10YR8/4	草田 4
30	25	55	弥生土器	甕	SD141 M8 西	3層	(32.8)				40		外:黄橙 7.5Y8/3 内:淡黄 2.5Y8/3	草田 3
31	25	—	弥生土器	甕	SD141 M8 西	3層	(37.2)				小片	擬凹線文 12条	外:浅黄橙 7.5YR8/6 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 3
32	25	55	弥生土器	甕	SD141 M8 西	3層	(15.6)				小片		浅黄橙 10YR8/4	草田 3
33	25	55	弥生土器	甕	SD141 M8 東	3層	(32.6)				40	擬凹線文 12条、 刺突文(貝)	灰白 10YR8/2	草田 3
34	25	55	弥生土器	甕	SD141 M8 東	3層	(19.2)				30	波状文、平行線 文	外:黄橙 7.5YR7/8 内:橙 7.5YR7/4	草田 4
35	25	—	弥生土器	高坏	SD141 N8	3層					小片		外:橙 7.5YR7/6 内:橙 10YR7/4	
36	25	—	弥生土器	高坏	SD141 N8	3層				底径 (17.4)	小片		外:浅黄橙 10YR8/4 内:浅黄橙 7.5YR8/4	
37	25	—	弥生土器	低脚坏	SD141 N8	3層				底径 (6.0)	30		橙 7.5YR7/6	草田 3
38	25	—	弥生土器	鉢	SD141 N8	3層	(11.4)				小片		外:黄橙 10YR7/3 内:橙 7.5YR7/4	草田 3
39	25	—	弥生土器	甕・壺 (底部)	SD141 N8	3層				底径 (3.0)	完存		黄橙 10YR7/3	煤付着
40	25	55	弥生土器	甕	SD141 N8 西	3層	(18.6)				完存	擬凹線文 12条	浅黄橙 10YR8/3	草田 3

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の 寸法	残存率 (%)	形態・文様の特徵	色調	備考
41	25	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	3層	(15.4)				小片	擬凹線文 6条	外: 橙 7.5YR7/4 内: 灰白 10YR8/2	草田 3
42	25	55	弥生土器	甕	SD141 N8 西	3層	(19.4)				小片		浅黄橙 10YR8/3	草田 3
43	26	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	3層	(13.0)				45	波状文	橙 7.5YR7/6	草田 3
44	26	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	3層	(16.8)				小片		外: 黄橙 10YR7/2 内: 黄橙 10YR7/3	草田 4
45	26	55	弥生土器	甕	SD141 N8 東	3層	(20.4)				40		外: 橙 5YR7/4 内: 灰白 10YR8/2	草田 4
46	26	55	弥生土器	甕	SD141 N8 東	3層	(20.6)				小片	擬凹線文 5条	外: 浅黄橙 10YR8/6 内: 明黄褐色 10YR7/6	草田 3
47	26	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	3層	(18.6)				40		黄橙 10YR7/4	草田 3
48	26	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	3層	(16.4)				25		外: 浅黄橙 10YR8/3 内: 浅黄橙 10YR8/4	草田 4
49	26	55	弥生土器	甕	SD141 N8 東	3層	(20.0)				40		浅黄橙 10YR8/3	草田 4
50	26	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	3層	(27.0)				小片		外: 黄橙 10YR8/6 内: 浅黄橙 10YR8/4	草田 3
51	26	55	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 東	3層					小片	擬凹線文 7条~	外: 橙 7.5YR7/6 内: 明黄褐 10YR7/6	草田 3
52	27	—	弥生土器	高坏	SD141 L8	2-2層	(26.4)				小片		浅黄橙 10YR8/3	草田 4
53	27	—	弥生土器	甕・壺 (底部)	SD141 L8	2-2層				底径 (6.4)	45		黄橙 10YR7/3	
54	27	55	弥生土器	甕	SD141 L8	2-2層	(17.6)				40		灰白 10YR8/2	草田 4
55	27	55	弥生土器	甕	SD141 L8	2-2層	(15.8)				小片		黄橙 10YR7/4	草田 4
56	27	55	弥生土器	甕	SD141 M8	2-2層	(19.0)				15		灰白 10YR8/2	草田 4
57	27	—	弥生土器	甕	SD141 M8	2-2層					小片		外: 橙 7.5YR7/6 内: 浅黄橙 10YR8/3	草田 4
58	27	55	弥生土器	甕	SD141 M8	2-2層	(19.4)				完存	擬凹線文 9~10 条 羽状文 煤付着	橙 7.5YR7/4	草田 3
59	27	—	弥生土器	甕	SD141 M8	2-2層	(17.6)				小片	擬凹線文 12条	黄橙 10YR5/4	草田 3
60	27	—	弥生土器	甕	SD141 M8	2-2層	(17.0)				30		外: 橙 7.5YR7/6 内: 黄橙 10YR7/4	草田 3
61	27	55	弥生土器	甕	SD141 M8	2-2層	(19.0)				40		外: 橙 7.5YR7/4 内: 浅黄橙 10YR8/4	草田 4
62	27	55	弥生土器	高坏	SD141 M8	2-2層					40	赤彩、充填部裏 刺突痕 2あり	橙 7.5YR7/3	草田 4
63	27	—	弥生土器	高坏	SD141 M8	2-2層				底径 (20.8)	小片		外: 浅黄橙 10YR8/3 内: 黄橙 10YR7/4	
64	27	55	弥生土器	台付壺	SD141 M8	2-2層	6.8	14.5	15.4	底径 8.6	完存	円形孔 2×2	外: 浅黄橙 10YR8/4 内: 橙 7.5YR7/6	草田 5
65	27	55	弥生土器	小型壺	SD141 N8	2-2層	(10.0)		9.0		15		外: 橙 7.5YR7/3 内: 黄橙 10YR7/4	草田 3、煤付着
66	27	55	弥生土器	甕	SD141 N8	2-2層	(17.2)				小片		外: 浅黄橙 10YR8/3 内: 黄橙 10YR8/6	草田 4、煤付着
67	27	56	弥生土器	甕	SD141 N8	2-2層	(21.8)		26.4		60	波状文、平行線 文	外: 浅黄橙 10YR8/4 内: 橙 7.5YR7/6	草田 4
68	27	56	弥生土器	壺	SD141 N8	2-2層	(21.8)				20	羽状文、沈線文	外: 浅黄橙 10YR8/3 内: 灰白 10YR8/2	草田 4
69	28	56	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-2層	16.1	16.9	18.3	底径 2.8	完存	刺突文(貝)、沈 線文を交互に配 置	外: 浅黄橙 10YR8/3 内: 浅黄橙 10YR8/4	草田 3
70	28	55	弥生土器	蓋	SD141 N8 西	2-2層	(8.5)	3.7			25		浅黄橙 10YR8/4	草田 4
71	28	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-2層	(15.6)				小片	擬凹線文 6条	灰白 10YR8/2	草田 3
72	28	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-2層	(20.3)				45		外: 灰白 10YR8/2 内: 灰白 7.5YR8/2	草田 4
73	28	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-2層	(20.0)				小片		外: 浅黄橙 10YR8/3 内: 灰白 10YR8/2	草田 4
74	28	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-2層	(14.2)				小片		浅黄橙 7.5YR8/3	草田 4
75	28	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-2層	(15.6)				30		橙 7.5YR7/4	草田 4
76	28	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-2層	(22.3)				小片		浅黄橙 10YR8/3	草田 4
77	28	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-2層	(15.6)				30		黄橙 10YR7/2	草田 4
78	28	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-2層	(15.8)				小片		外: 黄橙 10YR7/2 内: 浅黄橙 10YR8/3	草田 4
79	28	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-2層	(16.8)				小片		外: 浅黄橙 7.5YR8/3 内: 浅黄橙 10YR8/3	草田 4
80	28	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-2層	(17.2)				小片		外: 灰白 10YR8/2 内: 浅黄橙 10YR8/3	草田 4、煤付着

遺物番号	插图番号	写真図版	種別	器種	出土地点/遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の寸法	残存率(%)	形態・文様の特徴	色調	備考
81	28	56	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-2層	(21.0)				30	平行線文、刺突文(貝)	外:浅黄橙 10YR8/3 内:浅黄橙 7.5YR8/4	草田 4
82	28	—	弥生土器	高坏	SD141 N8 西	2-2層				底径(21.0)	小片	赤彩	浅黄橙 10YR8/4	
83	28	—	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 西	2-2層				底径(18.7)	小片		橙 7.5YR7/6	草田 4
84	28	56	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 西	2-2層				底径(18.6)	80	擬凹線文約 6 条	黄橙 10YR7/3	草田 3
85	29	56	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	16.2	21.1	18.2	底径 1.6	90	擬凹線文 13 条、波状文	外:黄橙 10YR7/3 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 3
86	29	56	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	17.8	32.9	25.7		90	羽状文(貝)、波状文、平行線文煤付着	浅黄橙 7.5YR8/6	草田 4
87	29	56	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	32.8		40.0		完存	刺突文	浅黄橙 10YR8/4	草田 4
88	29	56	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層				底径 5.0	完存		浅黄橙 10YR8/4	草田 4
89	29	—	弥生土器	甕・壺(底部)	SD141 N8 東	2-2層				底径(3.0)	50	穿孔	外:橙 7.5YR8/6 内:灰褐 7.5YR6/6	草田 3、煤付着
90	30	56	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(14.0)				小片	擬凹線文 11 条～、羽状文(貝)	外:灰白 10YR8/2 内:浅黄橙 7.5YR8/4	草田 3
91	30	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(20.2)				小片	擬凹線文 12 条	外:橙 7.5YR7/6 内:黄橙 10YR7/2	草田 3
92	30	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(21.4)				小片	擬凹線文 5 条～煤付着	外:黄橙 10YR7/3 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 3
93	30	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(22.0)				小片	擬凹線文 14 条	浅黄橙 10YR8/4	草田 3
94	30	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(16.0)				小片	擬凹線文 8 条	浅黄橙 7.5YR8/4	草田 3、煤付着
95	30	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(22.0)				小片	擬凹線文 14 条	灰白 10YR8/2	草田 3、煤付着
96	30	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(26.0)				小片	擬凹線文 15 条、平行線文	浅黄橙 10YR8/4	草田 3
97	30	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(16.4)				小片	刺突文(貝)	外:浅黄橙 7.5YR8/3 内:浅黄橙 7.5YR8/6	草田 3
98	30	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(13.0)				小片		黄橙 10YR7/4	草田 3、煤付着
99	30	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(15.0)				小片		外:黄橙 10YR7/2 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 3、煤付着
100	30	56	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(16.4)				45		外:浅黄橙 7.5YR8/4 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 3、煤付着
101	30	56	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(15.6)				45	刺突文(貝)、平行線文	黄橙 10YR8/6	草田 3
102	30	56	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(16.4)				45	波状文	外:橙 7.5YR7/4 内:黄橙 10YR7/4	
103	30	56	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	17.9				完存	波状文	浅黄橙 10YR8/3	
104	30	57	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(17.0)				45	波状文、平行線文	黄橙 10YR8/6	煤付着
105	30	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(15.0)				小片		黄橙 10YR7/3	草田 3、煤付着
106	30	56	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(15.2)				50		浅黄橙 10YR8/3	煤付着
107	30	57	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(15.4)				小片		外:浅黄橙 10YR8/3 内:灰白 10YR8/3	
108	30	57	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(15.6)				小片	波状文、平行線文	外:淡黄 2.5YR8/4 内:灰白 2.5YR8/2	草田 4
109	30	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(20.8)				小片		外:橙 7.5YR7/3 内:浅黄橙 7.5YR8/3	草田 3、煤付着
110	30	57	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-2層	(20.4)				30		浅黄橙 7.5YR8/4	草田 3
111	30	—	弥生土器	甕か	SD141 N8 東	2-2層	(15.0)				小片		外:黄橙 10YR7/2 内:淡黄橙 10YR8/4	草田 4
112	30	—	弥生土器	甕か	SD141 N8 東	2-2層	(17.0)				小片		外:浅黄橙 10YR8/3 内:浅黄 10YR8/4	草田 3
113	31	57	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 東	2-2層	19.6	12.3		底径 18.0	80		灰白 2.5Y8/2	草田 4
114	31	57	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 東	2-2層	23.1				50		浅黄橙 10YR8/3	草田 4
115	31	57	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 東	2-2層	(23.0)				60		橙 7.5YR7/6	草田 3
116	31	—	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 東	2-2層	(21.0)				30		浅黄橙 10YR8/4	草田 4
117	31	—	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 東	2-2層	(22.0)				45		外:浅黄橙 10YR8/3 内:橙 7.5YR7/3	草田 4
118	31	—	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 東	2-2層	(23.4)				小片		外:浅黄橙 7.5YR8/4 内:浅黄橙 7.5YR8/3	草田 4、煤付着
119	31	—	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 東	2-2層				底径(16.4)	30	平行線文	黄橙 7.5YR8/6	草田 4

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の 寸法	残存率 (%)	形態・文様の 特徴	色調	備考
120	31	57	弥生土器	高坏	SD141 N8 東	2-2層	(24.6)				30		外:黄橙 7.5YR8/4 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 4
121	31	—	弥生土器	高坏 (脚柱部)	SD141 N8 東	2-2層					小片		浅黄橙 10YR8/3	脚柱
122	31	57	弥生土器	小型壺	SD141 N8 東	2-2層			10.0	底径 (3.6)	20		浅黄橙 2.5YR8/3	煤付着
123	32	57	弥生土器	甕	SD141 M8	2-1層	(14.0)				40		橙 7.5YR7/6	草田 4
124	32	—	弥生土器	甕	SD141 M8	2-1層	(15.6)				小片	擬凹線文 7 条、 刺突文(貝)	浅黄橙 10YR8/3	草田 2
125	32	—	弥生土器	甕	SD141 M8	2-1層	(17.8)				小片	擬凹線文 14 条	黄橙 10YR7/2	草田 3
126	32	—	弥生土器	甕	SD141 M8	2-1層	(16.4)				小片	擬凹線文 10 条、 平行線文	外:黄橙 10YR6/4 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 3、煤付着
127	32	—	弥生土器	甕	SD141 M8	2-1層	(17.0)				小片	擬凹線文のちナ ア	浅黄橙 2.5Y7/3	草田 3
128	32	57	弥生土器	甕	SD141 M8	2-1層	(17.6)				完存	波状文、平行線 文	橙 7.5YR7/4	草田 4
129	32	—	弥生土器	甕	SD141 M8	2-1層	(17.8)				小片	擬凹線文 8 条~	黄橙 10YR7/2	草田 3
130	32	57	弥生土器	甕	SD141 M8	2-1層	(17.4)				45	平行線文	浅黄 2.5YR8/3	草田 3
131	32	—	弥生土器	甕	SD141 M8	2-1層	(16.0)				小片		浅黄橙 10YR8/4	草田 3
132	32	—	弥生土器	甕・壺 (底部)	SD141 M8	2-1層				底径 (3.6)	80		外:灰黄褐 10YR6/2 内:黄橙 10YR7/3	
133	32	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-1層	(28.4)				小片	凹線文 4 条	外:浅黄橙 7.5YR8/6 内:浅黄橙 10YR8/3	V -1
134	32	57	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-1層	(23.0)				45	擬凹線文 8 条~、 刺突文	浅黄橙 10YR8/3	草田 2
135	32	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-1層	(20.0)				30	擬凹線文 8 条	外:灰白 10YR8/2 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 3
136	32	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-1層	(17.2)				25		外:黄橙 10YR7/4 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 5
137	32	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-1層	(19.4)				小片	平行線文	浅黄橙 10YR8/4	草田 4
138	32	57	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-1層	(19.6)				小片		浅黄橙 7.5YR8/3	草田 5
139	32	57	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-1層	(19.0)				30		浅黄橙 10YR8/3	草田 5
140	32	—	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-1層	(18.0)				小片		外:浅黄橙 10YR8/3 内:灰白 10YR8/2	草田 5
141	32	57	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-1層	(18.6)				30		外:黄橙 10YR7/2 内:黒褐色 10YR3/1	草田 5
142	32	57	弥生土器	甕	SD141 N8 西	2-1層	(15.8)				50	平行線文 6 条、 刺突文(貝)	浅黄橙 10YR8/4	草田 5
143	32	—	弥生土器	甕・壺 (底部)	SD141 N8 西	2-1層				底径 (12.0)			外:灰黄褐 10YR6/2 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 5、煤付着
144	32	57	弥生土器	低脚坏	SD141 N8 西	2-1層				底径 5.8	完存	円形孔 1	外:浅黄橙 7.5YR7/6 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 3
145	32	—	弥生土器	高坏 (脚台部)	SD141 N8 西	2-1層				底径 (15.0)	小片		外:黄橙 10YR7/3 内:黄橙 10YR7/2	
146	33	58	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-1層	(16.0)				30	波状文、平行線 文	黄橙 10YR7/3	草田 4、煤付着
147	33	58	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-1層	(15.6)				45		外:黄橙 10YR8/6 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 4
148	33	58	弥生土器	甕	SD141 N8 東	2-1層	(32.4)				30		浅黄橙 10YR8/4	草田 4
149	33	58	弥生土器	甕	SD141 L8	1層	(16.4)				70	刺突文、平行線 文	浅黄橙 10YR8/3	草田 5
150	33	—	弥生土器	甕	SD141 L8	1層	(18.0)				小片	擬凹線文 10 条	黄橙 10YR7/3	草田 3
151	33	—	弥生土器	甕	SD141 L8	1層	(22.6)				小片		浅黄橙 10YR8/3	草田 3
152	33	—	弥生土器	甕	SD141 M8 西	1層	(15.4)				30		浅黄橙 10YR8/3	草田 3
153	33	—	弥生土器	甕	SD141 M8 西	1層	(14.0)				小片		外:黄橙 10YR7/2 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 4
154	33	—	弥生土器	甕	SD141 M8 西	1層	(14.0)				30		外:黄橙 10YR7/2 内:灰黄 2.5Y7/2	草田 4
155	33	58	弥生土器	甕	SD141 M8 西	1層	(18.6)				45	波状文、平行線 文	外:黄橙 10YR7/4 内:橙 7.5YR7/4	草田 4
156	33	58	弥生土器	甕	SD141 M8 西	1層	(15.2)				45	波状文	浅黄橙 10YR8/3	草田 4
157	33	58	弥生土器	甕	SD141 M8 西	1層	(16.0)				75		浅黄橙 10YR8/3	草田 4
158	33	—	弥生土器	甕	SD141 M8 西	1層	(17.0)				30		浅黄橙 10YR8/3	草田 4
159	33	—	弥生土器	甕	SD141 M8 西	1層	(18.0)				小片		灰白 10YR8/2	草田 4
160	33	—	弥生土器	甕	SD141 M8 西	1層	(24.0)				30		外:黄橙 10YR7/2 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 4
161	33	—	弥生土器	甕・壺 (底部)	SD141 M8 西	1層				底径 (3.0)	45		外:黄橙 10YR7/2 内:浅黄橙 10YR8/3	煤付着
162	33	—	弥生土器	甕・壺 (底部)	SD141 M8 西	1層				底径 (4.4)	75		外:灰黄 2.5Y6/1 内:灰白 2.5Y7/1	

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の寸法	残存率(%)	形態・文様の特徴	色調	備考
163	33	—	弥生土器	鼓形器台	SD141 M8 西	1層				底径 (18.0)	小片	擬凹線文 16条～	浅黄橙 10YR8/3	草田 3
164	34	58	弥生土器	甗	SD141 N8 西	1層	(35.4)				30		外:黄橙 10YR6/4 内:褐灰 10YR5/1	草田 2
165	34	—	弥生土器	壺	SD141 N8 西	1層	(19.0)				30		淡黄 2.5Y8/3	草田 4
166	34	58	弥生土器	甗	SD141 N8 西	1層	(16.6)				50	波状文、平行線文	浅黄橙 10YR8/3	草田 4、煤付着
167	34	58	弥生土器	甗	SD141 N8 西	1層	(16.6)				小片	刺突文(貝)、平行線文	外:浅黄橙 7.5YR8/3 内:浅黄橙 7.5YR8/4	草田 3
168	34	—	弥生土器	甗	SD141 N8 西	1層	(18.6)				小片		外:灰白 7.5YR8/2 内:浅黄橙 7.5YR8/4	
169	34	58	弥生土器	甗	SD141 N8 西	1層	(16.6)				40		浅黄橙 10YR8/3	草田 4
170	34	—	弥生土器	甗・壺(底部)	SD141 N8 西	1層				底径 (3.4)	60		外:淡赤橙 2.5YR7/4 内:褐 7.5YR3/4	煤付着
171	34	—	弥生土器	高坏	SD141 N8 西	1層	(21.2)				小片		浅黄橙 10YR8/3	草田 4、煤付着
172	34	58	弥生土器	高坏	SD141 N8 西	1層	(23.6)				50		浅黄橙 10YR8/4	草田 4
173	34	—	弥生土器	高坏	SD141 N8 西	1層				底径 (20.4)	45		外:浅黄橙 7.5YR8/6 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 4
174	34	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(26.0)				30		外:浅黄橙 10YR8/3 内:黄橙 10YR7/3	草田 3
175	34	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(16.0)				小片	擬凹線文 13条、刺突文(貝)	明黄褐 10YR6/6	草田 2
176	34	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(16.6)				45		浅黄橙 10YR8/4	草田 3
177	34	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(18.0)				小片		外:黄橙 10YR7/3 内:浅黄橙 7.5YR8/4	
178	34	58	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(19.6)				ほぼ完存	波状文、平行線文	浅黄橙 10YR8/3	
179	34	—	弥生土器	高坏	SD141 N8 東	1層	(25.0)				小片		浅黄橙 10YR8/3	草田 5
180	34	58	弥生土器	低脚坏	SD141 N8 東	1層	21.0				80		橙 5YR7/8	草田 5
181	34	58	弥生土器	高坏	SD141 N8 東	1層					30	円形透孔 3、赤彩	浅黄橙 10YR8/4	草田 4
182	35	59	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(15.0)				80	波状文、刺突文、平行線文	外:淡黄 2.5Y8/4 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 3
183	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(13.8)				小片	擬凹線文 6条	外:明灰褐 7.5YR7/2 内:浅黄橙 7.5YR7/3	煤付着
184	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(18.4)				小片	擬凹線文 7条	外:黄橙 10YR7/3 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 3
185	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(16.0)				45	擬凹線文 4条～	外:黄橙 10YR6/4 内:橙 7.5YR7/4	草田 3、煤付着
186	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(21.0)				小片	擬凹線文 8条	灰白 10YR8/2	草田 3
187	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(20.8)				小片		外:浅黄橙 10YR8/3 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 3、煤付着
188	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(22.0)				小片		外:灰白 10YR8/2 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 3
189	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(20.8)				小片		外:灰 7.5YR8/2 内:浅黄橙 7.5YR8/3	草田 3、煤付着
190	35	58	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(17.0)				45		外:灰白 10YR8/2 内:黄橙 10YR7/2	草田 3、煤付着
191	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(14.4)				30		黄橙 10YR7/3	草田 3
192	35	58	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(15.0)				75	刺突文(貝)	外:浅黄橙 10YR8/4 内:橙 7.5YR7/4	草田 3、煤付着
193	35	58	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(16.0)				45	刺突文	外:浅黄橙 10YR8/3 内:黄橙 10YR8/6	草田 3、煤付着
194	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(15.8)				小片	擬凹線文 7条～	外:浅黄橙 10YR8/3 内:灰白 10YR8/2	草田 3
195	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(19.8)				小片	擬凹線文のちナテ	外:浅黄橙 10YR8/3 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 3
196	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(20.4)				小片		外:灰白 10YR8/2 内:黄橙 10YR7/4	草田 3
197	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(14.0)				小片	沈線文	外:浅黄橙 10YR8/4 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 3
198	35	—	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(14.0)				小片		浅黄橙 10YR8/3	草田 3
199	35	59	弥生土器	甗	SD141 N8 東	1層	(16.0)				45	刺突文(貝)、平行線文	浅黄橙 10YR8/3	草田 3

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の寸法	残存率(%)	形態・文様の特徴	色調	備考
200	35	59	弥生土器	甕	SD141 N8 東	1層	(16.0)				30	羽状文	外: 浅黄橙 10YR8/3 内: 浅黄橙 7.5YR8/3	草田 3
201	35	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	1層	(18.4)				小片		黄橙 10YR8/4	草田 3、煤付着
202	35	59	弥生土器	甕	SD141 N8 東	1層	(18.6)				70		浅黄橙 10YR8/4	草田 3
203	35	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	1層	(16.4)				小片		外: 黄橙 10YR7/2 内: 褐灰 10YR8/2	草田 3
204	35	—	弥生土器	壺	SD141 N8 東	1層	(19.8)				30		灰白 10YR8/2	草田 3
205	35	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	1層				底径 2.4	完存		外: 橙 5YR7/3 内: 黄橙 10YR7/2	
206	35	—	弥生土器	甕	SD141 N8 東	1層				底径 5.2	完存		外: 灰色 5Y5/1 内: 黒褐 7.5YR3/1	
207	35	—	弥生土器	甕・壺 (底部)	SD141 N8 東	1層				底径 4.2	完存		外: 灰褐 7.5YR6/2 内: 褐灰 7.5YR4/1	煤付着
208	35	—	弥生土器	甕・壺 (底部)	SD141 N8 東	1層				底径 3.4	完存		外: 浅黄橙 10YR8/3 内: 黄橙 10YR7/4	煤付着
209	35	—	弥生土器	甕・壺 (底部)	SD141 N8 東	1層				底径 (6.0)	70		外: 灰黄褐 10YR8/2 内: 灰白 10YR8/2	煤付着
210	35	—	弥生土器	甕・壺 (底部)	SD141 N8 東	1層				底径 (6.4)	50		外: 黒 10YR1.7/1 内: 浅黄橙 10YR8/4	煤付着
211	35	59	弥生土器	高坏	SD141 N8 東	1層	(26.4)				45	内面赤彩	外: 黄橙 10YR8/6 内: 浅黄橙 10YR8/3	草田 4
212	35	59	弥生土器	高坏	SD141 N8 東	1層	(21.2)				15		外: 浅黄橙 10YR8/4 内: 浅黄橙 7.5YR8/4	草田 3
213	35	59	弥生土器	高坏	SD141 N8 東	1層				底径 18.2	完存		外: 橙 5YR7/6 内: 浅黄橙 5YR7/6	草田 5
214	35	—	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 東	1層				底径 (16.0)	30		外: 浅黄橙 7.5YR8/4 内: 橙 7.5YR7/6	草田 4
215	35	—	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 東	1層				底径 (19.6)	小片		外: 浅黄橙 7.5YR8/3 内: 黄橙 10YR8/6	草田 4
216	36	59	弥生土器	甕	SD141 N8 東	1層	(24.8)				40	波状文、平行線文	外: 浅黄橙 7.5YR8/4 内: 浅黄橙 10YR8/4	
217	36	59	弥生土器	甕	SD141 N8 東	1層	14.6	16.4			完存		外: 浅黄橙 10YR8/3 内: 浅黄橙 7.5YR8/4	
218	36	59	弥生土器	鼓形器台	SD141 N8 東	1層					30	赤彩	外: 浅黄橙 10YR8/6 内: 浅黄橙 10YR8/4	煤付着
219	36	59	弥生土器	高坏 (脚柱部)	SD141 中央畦畔	—					小片	円形透孔 3	橙 7.5YR7/4	
220	36	—	弥生土器	甕	SD141 中央畦畔	—	(26.0)				小片		外: 浅黄橙 7.5YR8/3 内: 浅黄橙 7.5YR8/6	煤付着
221	36	59	弥生土器	短頸壺	SD141 中央畦畔	1層	(11.4)				小片	沈線文、円形透孔 2	外: 浅黄橙 7.5YR8/3 内: 浅黄橙 10YR8/4	
222	36	—	弥生土器	甕	SD141 東畦畔	包含層 2層	(16.2)				小片		外: 黄橙 10YR7/3 内: 浅黄橙 10YR8/3	草田 4、煤付着
223	36	—	弥生土器	甕	SD141 東畦畔	包含層 2層	(15.8)				15	刺突文(貝)	外: 橙 7.5YR7/4 内: 橙 5YR7/6	草田 4
224	36	—	弥生土器	甕	SD141 東畦畔	包含層 1層	(30.0)				小片		外: 橙 7.5YR7/6 内: 黄橙 10YR7/2	煤付着
225	36	—	弥生土器	高坏	SD141 東畦畔	包含層 1層					小片		外: 黄橙 10YR8/3 内: 明黄橙 7.5YR7/2	
226	36	59	弥生土器	高坏	SD141 東畦畔	包含層 1層					小片	沈線文、円形透孔 3	黄橙 10YR7/4	
227	36	—	弥生土器	低脚坏	SD141 東畦畔	包含層 1層					小片		外: 灰白 10YR8/2 内: 浅黄橙 10YR8/3	
228	38	47	弥生土器	甕	SB103	—	(17.6)				30	擬凹線文 10 条、沈線文	橙 5YR6/8	草田 3
229	38	47	弥生土器	甕	SB103	—	(12.4)				小片		浅黄橙 10YR8/3	草田 4
230	38	47	弥生土器	甕	SB103	1層	(13.4)				小片		黄橙 10YR7/3	
231	38	47	弥生土器	甕	SB103	—	(17.0)				小片	平行線文	外: 浅黄橙 10YR8/4 内: 浅黄橙 10YR8/3	草田 4
232	38	47	弥生土器	甕	SB103	—					小片	擬凹線文 6 条~	外: 黄橙 10YR7/2 内: 橙 10YR7/3	草田 3、煤付着
233	39	47	弥生土器	甕	SE102	—					小片		外: 黄橙 10YR6/3 内: 橙 7.5YR7/4	
234	39	47	弥生土器	甕	SE102	—	(15.6)				小片		外: 橙 7.5YR7/6 内: 黄橙 10YR7/4	草田 4
235	40	47	弥生土器	鼓形器台	SB104	1層					小片		灰白 10YR8/2	草田 4
236	41	47	弥生土器	甕	SB105	—					小片	擬凹線文 3 条~	橙 7.5YR6/6	草田 3
237	41	47	弥生土器	甕	SB105	—					小片	擬凹線文 4 条~	黄橙 10YR7/4	草田 3



遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の 寸法	残存率 (%)	形態・文様の特徴	色調	備考
238	43	47	弥生土器	甕	SE101	井戸 最下層	18.0				小片		灰白 5YR8/1	草田 4
239	43	48	弥生土器	甕	SE101	井戸 最下層	18.4				小片	平行線文	外:浅黄橙 10YR8/3 内:黄橙 10YR7/4	草田 4
240	43	47	弥生土器	甕	SE101	井戸 最下層					小片		外:浅黄橙 10YR8/4 内:浅黄 2.5Y 7/3	
241	43	48	弥生土器	甕	SE101	井戸 最下層	14.5	20.5	18.2		60	刺突文、平行線文	外:浅黄橙 10YR8/4 内:灰白 2.5Y8/2	草田 4
242	43	48	弥生土器	甕	SE101	井戸 最下層	15.7				小片	刺突文(貝)、沈線文	灰白 10YR8/2	煤付着
243	43	47	弥生土器	壺	SE101	井戸 最下層	(26.6)				小片		橙 7.5YR6/4	煤付着
244	43	47	弥生土器	壺	SE101	井戸 最下層					小片		浅黄橙 10YR8/3	
245	43	48	弥生土器	注口土器	SE101	井戸 最下層	15.0	20.1	17.8		90	刺突文、沈線文	淡黄 2.5Y8/4	草田 4 II類
246	43	—	弥生土器	甕・壺 (底部)	SE101	井戸 最下層				底径 3.2	小片		外:灰白 5YR8/1 内:不明	煤付着
247	43	48	弥生土器	鼓形器台	SE101	井戸 最下層					15		浅黄橙 10YR8/3	草田 4
248	43	48	弥生土器	鼓形器台	SE101	井戸 最下層					小片		外:灰白 10YR8/2 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 4
253	46	49	弥生土器	高坏	SB106 SB107	遺構 最下層	(25.6)				30	凹線文 3 条	外:橙 5YR7/6 内:橙 7.5YR7/6	搬入系
254	46	49	弥生土器	甕	SB106	—	(11.0)				30		外:黄橙 10YR7/3 内:浅黄橙 10YR8/3	煤付着
255	46	49	弥生土器	甕	SB106	—	(15.8)				小片	擬凹線文 8 条	橙 7.5YR7/6	草田 3
256	46	49	弥生土器	甕	SB106	20 層	(14.0)				80	刺突文、平行線文	外:橙 7.5YR7/3 内:橙 7.5YR7/4	草田 5
257	46	49	弥生土器	鼓形器台	SB106	—					小片		浅黄橙 10YR8/4	煤付着
258	46	49	弥生土器	甕	Pit187	1 層	14.8				完存	波状文、平行線文	浅黄橙 10YR8/3	草田 4
259	49	49	弥生土器	鼓形器台	Pit1204	床面直上				底径 (18.4)	30		外:浅黄橙 10YR8/3 内:黄褐 10YR5/3	草田 4、煤付着
260	49	49	弥生土器	鼓形器台	SE103	7 層				底径 (20.0)	30	外面暗文	外:橙 5YR7/6 内:浅黄橙 10YR8/4	草田 4
261	50	49	弥生土器	甕	SB109	—	(17.0)				小片	擬凹線文 3 条~	外:黄橙 10YR6/3 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 4
262	50	49	弥生土器	甕・壺 (底部)	SB109	—				底径 (7.4)	80	内面赤彩	外:黒褐 10YR2/2 内:橙 7.5YR7/4	
263	51	50	弥生土器	甕	SK1147	1 層	(15.6)				小片		外:橙 7.5YR7/3 内:橙 7.5YR7/4	草田 4、煤付着
264	51	50	弥生土器	甕	SK1147	1 層	(16.6)				小片		外:黄橙 10YR7/4 内:浅黄橙 10YR8/3	草田 4、煤付着
265	51	50	弥生土器	甕	SK1147	1 層			25.6		45	波状文、羽状文 (貝)	橙 7.5YR7/4	草田 4、煤付着
266	51	50	弥生土器	高坏	SK1147	1 層	(24.8)				45		浅黄橙 10YR8/4	草田 4
267	52	50	弥生土器	甕	SB110	—	(22.4)				小片	擬凹線文 8 条	浅黄橙 10YR8/4	草田 3、煤付着
268	53	50	中世土師器	高台付坏	SK146	耕土				底径 7.2	90	回転系切り痕	外:明褐 7.5YR5/6 内:橙 7.5YR6/4	
269	53	50	中世土師器	坏	SK146	耕土				底径 4.7	90	回転系切り痕 煤付着	外:灰褐 10YR4/2 内:黒褐 10YR2/2	坏 A (13~14C)
270	53	50	中世土師器	坏	SK146	耕土				底径 5.4	完存	回転系切り痕 煤付着	外:明褐 10YR6/6 内:橙 7.5YR7/6	坏 A (13~14C)
271	53	50	中世土師器	坏	SK146	耕土				底径 5.6	完存	回転系切り痕	橙 7.5YR7/6	坏 A (13~14C)
272	54	50	中世土師器	皿	SK154	3 層	11.3	3.2		底径 6.4	完存	内面ターニル様付 着物 回転系切り痕	浅黄橙 7.5YR8/6	皿 A (16C 末~ 17C 初頭)
274	55	50	青磁	碗	SE105	—					小片	鑄蓮弁	オリーブ灰 10YR5/2	龍泉窯系青磁碗 III類大宰府 F 期
275	55	50	中世土師器	坏	SE105	—	(11.8)			底径 (6.6)	80		黄橙 10YR7/4	坏 C 類 (15c 代)
277	55	50	中世土師器	皿	SE110	—	(9.8)	2.3		底径 (5.0)	70	回転系切り痕	外:黄橙 10YR7/4 内:橙 7.5YR7/6	皿 D (15c ~ 16c 前)
278	55	50	中世土師器	坏	SE110	—	(14.8)	4.3		底径 6.2	完存	回転系切り痕	外:浅黄橙 10YR8/4 内:浅黄橙 7.5YR8/3	坏 C (15 世紀代)
279	55	50	中世土師器	高台付坏	SE110	—				底径 5.6	完存		橙 7.5YR7/6	
280	55	50	中世土師器	高台付坏	SE110	—					小片		橙 7.5YR7/4	
281	55	50	中世土師器	坏	SE110	—				底径 5.1	完存	回転系切り痕	橙 7.5YR7/4	坏 A (13~14C)
283	55	50	土製品	土錘	SE110	—	長 5.0	幅 1.7	厚 1.6		80		黄褐 10YR5/3	
284	55	50	土製品	土錘	SE110	—	長 4.7	幅 1.6			50		黄褐 10YR5/3	
285	56	50	陶器	平碗	SE109	1 層				底径 (5.0)	80	内面に釉がかか る	オリーブ黄 7.5Y6/3	瀬戸美濃大窯後 期(16c 中~後葉)
286	56	50	陶器	すり鉢	SE108	1 層					小片	沈線文	外:灰褐 7.5YR5/2 内:灰褐 7.5YR4/2	備前 IV -A 期(14C 後~15C 前)
287	56	50	青磁	碗	SE108	1 層	(15.2)				小片	沈線文	オリーブ灰 10YR6/2	
288	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	14.7	3.7		底径 6.0	ほぼ 完存	内面ターニル様付 着物 回転系切り痕	外:浅黄橙 10YR8/4 内:黄褐 10YR8/6	坏 D-2 (15~ 16C 前半)

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の 寸法	残存率 (%)	形態・文様の 特徴	色調	備考
289	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	14.8	4.3		底径 5.8	ほぼ 完存	外面ターナル様付 着物 回転系切り痕	外:黄橙 10YR8/6 内:浅黄橙 10YR8/4	坏 D-2 (15 ~ 16C 前半)
290	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	14.4	3.7		底径 6.0	完存	内面ターナル様付 着物 回転系切り痕	浅黄橙 10YR8/4	坏 D-2 (15 ~ 16C 前半)
291	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	15.2	4.6		底径 6.4	ほぼ 完存	内面ターナル様付 着物 回転系切り痕	黄橙 10YR8/6	坏 D-2 (15 ~ 16C 前半)
292	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	15.2	4.1		底径 6.4	ほぼ 完存	内面ターナル様付 着物 回転系切り痕	浅黄橙 10YR8/6	坏 D-2 (15 ~ 16C 前半)
293	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	11.2	3.4		底径 5.0	ほぼ 完存	外面ターナル様付 着物 回転系切り痕	浅黄橙 7.5YR8/6	坏 D-1 (15 ~ 16C 前半)
294	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	11.4	3.7		底径 5.4	ほぼ 完存	回転系切り痕	黄橙 10YR8/6	坏 D-1 (15 ~ 16C 前半)
295	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	11.2	3.7		底径 5.2	ほぼ 完存	外面ターナル様付 着物 回転系切り痕	浅黄橙 7.5YR8/6	坏 D-1 (15 ~ 16C 前半)
296	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	11.0	3.2		底径 5.2	ほぼ 完存	内面ターナル様付 着物 回転系切り痕	外:黄橙 10YR8/6 内:浅黄橙 7.5YR8/6	坏 D-1 (15 ~ 16C 前半)
297	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	11.2	3.5		底径 4.6	ほぼ 完存	回転系切り痕	浅黄橙 10YR8/6	坏 D-1 (15 ~ 16C 前半)
298	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	11.0	3.8		底径 5.0	ほぼ 完存	内面ターナル様付 着物 回転系切り痕	黄橙 10YR8/6	坏 D-1 (15 ~ 16C 前半)
299	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	11.2	4.0		底径 5.0	ほぼ 完存	回転系切り痕	黄橙 10YR8/6	坏 D-1 (15 ~ 16C 前半)
300	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	11.2	3.7		底径 4.8	ほぼ 完存	外面ターナル様付 着物 回転系切り痕	黄橙 10YR8/6	坏 D-1 (15 ~ 16C 前半)
301	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	11.0	3.8		底径 4.6	ほぼ 完存	回転系切り痕	浅黄橙 7.5YR8/6	坏 D-1 (15 ~ 16C 前半)
302	60	51	中世土師器	坏	Pit1170	床面直上	11.2	4.7		底径 5.2	ほぼ 完存	回転系切り痕	黄橙 10YR8/6	坏 D-1 (15 ~ 16C 前半)
303	60	51	中世土師器	皿	Pit1170	床面直上	(7.6)	2.7		底径 3.4	底部 完存	静止系切り痕	浅黄橙 10YR8/4	皿 c (15 世紀代)
304	60	51	中世土師器	皿	Pit1170	床面直上	8.0	3.0		底径 3.6	ほぼ 完存	外面ターナル様付 着物 回転系切り痕	浅黄橙 10YR8/4	皿 c (15 世紀代)

### 1区-3

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の 寸法	残存率 (%)	形態・文様の 特徴	色調	備考
307	66	51	弥生土器	甕	集石 5	1層	(20.6)				小片	凹線文 2 条	浅黄橙 10YR8/3	弥生中期 IV -2
308	67	51	中世土師器	皿	SE112	—	(8.2)			底径 (4.4)	30	回転系切り痕	浅黄橙 10YR8/4	皿 c (15 世紀代)
309	67	51	中世土師器	坏	SE112	—				底径 (5.6)	75	回転系切り痕	橙 7.5YR7/4	坏 A (13 ~ 14C)
310	67	51	中世土師器	坏	SE112	—				底径 (6.2)	75	回転系切り痕	浅黄橙 7.5YR8/4	坏 A (13 ~ 14C)
318	70	52	中世土師器	皿	SE111	—				底径 (6.4)	25	回転系切り痕	浅黄橙 10YR8/3	皿 c (15 世紀代)
319	70	52	中世土師器	坏	SE111	—				底径 (6.0)	小片	回転系切り痕	浅黄橙 10YR8/3	坏 D-1 (15 ~ 16C 前半)
320	70	52	中世土師器	皿	SE111	—				底径 (6.3)	25	回転系切り痕	浅黄橙 7.5YR8/4	坏 B (14 世紀代)
321	70	52	中世土師器	皿	SE111	—				底径 (5.8)	25	被熱の可能性 回転系切り痕	外:橙 7.5YR6/4 内:橙 5YR6/4	坏 A (13 ~ 14C)
322	70	52	中世土師器	皿	SE111	—				底径 (6.0)	小片	回転系切り痕	橙 7.5YR7/3	皿 c (15 世紀代)
323	70	52	須恵器	すり鉢	SE111	—				底径 (13.0)	30		外:浅黄橙 10YR8/4 内:浅黄橙 7.5YR8/3	在地系
324	70	52	須恵器	こね鉢	SE111	4層					25		外:灰 7.5Y7/1 内:灰 N4/	東播系鉢 Z 類
339	74	54	中世土師器	皿	SD134	1層	7.0	1.9		底径 4.8	完存	回転系切り痕	黄橙 7.5Y7/8	皿 b
340	74	54	中世土師器	坏	SD134	1層				底径 (5.0)	30	回転系切り痕	外:浅黄橙 10YR8/4 内:黄橙 7.5YR7/8	坏 C (15 世紀代)
341	75	54	中世土師器	坏	SK107	—	(12.0)			底径 (5.8)	底部 75	回転系切り痕	外:明黄褐 10YR7/6 内:黄橙 7.5YR7/6	坏 D-1 (15 ~ 16C 前半)
342	75	54	中世土師器	坏	SK107	—				底径 (5.6)	75	回転系切り痕	外:橙 7.5YR7/6 内:黄橙 7.5YR8/8	坏 B (14 世紀代)
343	75	54	中世土師器	高台坏	SK107	3層				底径 6.5	完存	回転系切り痕 底部外面一文字へ フ記号	浅黄橙 10YR8/3	13c 後半 ~ 14 世 紀代
344	75	54	陶器	こね鉢	SK107	1層					小片		灰 N4/	東播系
345	75	54	陶器	すり鉢	SK107	—	(25.0)				小片		外:褐 7.5YR3/3 ~ 黒褐 10YR3/2 内:黄褐 10YR5/3	備前 IV -A 期 (14C 後 ~ 15C 前)
348	77	54	中世土師器	皿	SK106	—	9.9	2.2		底径 6.3	ほぼ 完存	回転系切り痕	橙 7.5YR7/6	皿 A (16C 末 ~ 17C 初頭)
349	77	54	中世土師器	皿	SK106	—	10.0	2.4		底径 6.4	ほぼ 完存	回転系切り痕	浅黄橙 10YR8/3	皿 A (16C 末 ~ 17C 初頭)
350	78	54	中世土師器	皿	Pit1056	1層	(6.6)			底径 4.6	底部 完存	黒色付着物 静止系切り痕	橙 7.5YR7/6	皿 B (17C 中 ~)
351	78	54	中世土師器	皿	SD136	1層	(7.8)	2.2		底径 (4.2)	30	回転系切り痕	浅黄橙 7.5YR8/6	皿 c (15 世紀代)
352	78	54	中世土師器	皿	SK126	1層	10.4	2.9		底径 6.7	完存	回転系切り痕	黄橙 10YR7/4	皿 A (16C 末 ~ 17C 初頭)

第2表 1区木製品観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	品目	出土地点 / 遺構	層位	長さ	幅 / 径	厚さ	その他の寸法	木取り	樹種	備考
14	10	48	柱根	S B 1 0 1 (Pit1016)	遺構底部	(24.5cm)	(11.0cm)	(6.7cm)		板目	スギ	添え木か? 角柱状
249	43	49	割物容器	SE101	14層	(39.9cm)	(21.2cm)	3.1cm		柱目	スギ	
250	44	48	井戸枠	SE101	井戸最下層	(63.4cm)		2.5cm ~ 5.0cm	外周; 80.0cm	丸太割抜き	スダジイ	半円状
251	44	49	井戸枠	SE101	井戸最下層	(55.6cm)		2.5cm ~ 4.5cm	外周; 35.0cm	丸太割抜き	スダジイ	円弧状
252	44	49	井戸枠	SE101	井戸最下層	(53.2cm)		2.5cm ~ 5.0cm	外周; 38.0cm	丸太割抜き	スダジイ	円弧状
273	55	50	杭	SE105	井戸最下層	(47.6cm)	5.5cm ~ 7.0cm			丸太材	サカキ	断面不整形
276	55	50	杭	SE110	遺構底辺部	(33.5cm)	(3.3cm)	2.1cm		柱目	スギ	断面不整形
305	61	51	柱根	Pit1159	遺構底辺部	(35.6cm)	20.5cm	15.5cm		丸太材	スダジイ	底部小口切り
306	61	51	柱根	Pit1161	遺構底辺部	(43.5cm)	9.7cm ~ 11.3cm			丸太材	クリ	杭状に切り出しあり
311	68	52	横木 (構造材)	SE112	井戸最下層	125.2cm	8.8cm	4.8cm		柱目	クリまたはスダジイ近似	丸太半裁整形ほぞに接ぐための削り出しあり
312	68	52	横木 (構造材)	SE112	井戸最下層	(110.7cm)	8.6cm	7.0cm		丸太材	ツバキ属	ほぞに接ぐための削り出しあり
313	68	52	支柱	SE112	井戸最下層	(28.6cm)	(12.1cm)	(7.2cm)		芯持削出し	スダジイ	井戸枠建材 削り込みあり
314	68	52	支柱	SE112	井戸最下層	(27.0cm)	12.7cm	(10.5cm)		芯持削出し	ツバキ属	井戸枠建材 削り込みあり 焼痕
315	68	52	支柱	SE112	井戸最下層	(30.1cm)	11.3cm	(11.0cm)		芯持削出し	ツバキ属	井戸枠建材 削り込みあり 焼痕
316	68	52	支柱	SE112	井戸最下層	(19.5cm)	13.7cm	12.2cm		芯持削出し	ツバキ属	井戸枠建材 削り込みあり 焼痕
317	68	52	支柱	SE112	井戸最下層	(14.5cm)	(11.7cm)	(8.2cm)		芯持削出し	ツバキ属	杭状に切り出しあり 焼痕
325	71	53	板状製品	SE111	井戸最下層	(55.2cm)	10.6cm	2.7cm		板目	スギ	井戸枠建材 (側板) 両端に削り出しあり
326	71	53	板状製品	SE111	井戸最下層	(46.1cm)	12.0cm	2.4cm		板目	スギ	井戸枠建材 (側板)
327	71	53	板状製品	SE111	井戸最下層	(45.5cm)	21.7cm	1.9cm		板目	スギ	井戸枠建材 (側板) 2孔
328	71	53	杭 (構造材)	SE111	井戸最下層	(31.1cm)	2.2cm	1.6cm		板目	スギ	側板を止める縦杭の可能性高い 棒状
329	71	53	杭 (構造材)	SE111	井戸最下層	(47.4cm)	(4.4cm)	4.0cm		柱目	スダジイ	側板を止める縦杭の可能性高い 角柱状
330	72	53	板状製品	SE111	井戸最下層	75.3cm	8.4cm	2.7cm (最大)		板目	スギ	井戸枠建材 (側板) 両端にほぞを差し込むための削り出しあり
331	72	53	板状製品	SE111	井戸最下層	74.9cm	9.8cm	2.3cm (最大)		板目	スギ	井戸枠建材 (側板) 両端にほぞを差し込むための削り出しあり 焼痕
332	72	53	板状製品	SE111	井戸最下層	(51.0cm)	(7.3cm)	2.5cm		柱目	スダジイ	井戸枠建材 削り込みあり
333	72	53	板状製品	SE111	井戸最下層	(32.5cm)	5.4cm	1.9cm		板目	スダジイ	井戸枠建材 削り込みあり
334	72	53	板状製品	SE111	井戸最下層	(47.5cm)	6.0cm	2.5cm		柱目	スダジイ	井戸枠建材 削り込みあり
335	72	53	板状製品	SE111	井戸最下層	(45.5cm)	(7.0cm)	2.0cm		板目	スダジイ	井戸枠建材 削り込みあり
336	72	53	板状製品	SE111	井戸最下層	(29.0cm)	(9.0cm)	(1.5cm)		不明	ヒノキ	井戸枠建材 取上げ時破損
337	73	53	支柱	SE111	井戸最下層	90.8cm	12.6cm	12.2cm	ほぞ孔; 5.0cm x 8.5cm	芯持削出し	ヤマハゼ	井戸枠建材 長方形ほぞ孔
338	73	53	支柱	SE111	井戸最下層	(76.0cm)	13.3cm	11.7cm	ほぞ孔; 5.0cm x 8.5cm	芯持削出し	ヤマハゼ	井戸枠建材 長方形ほぞ孔

第3表 1区金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	出土地点 / 遺構	層位	長さ	幅	厚さ	その他の寸法・法量	備考
282	55	50	青銅鏡	SE110	1層	径; 10.9cm		0.2cm ~ 0.9cm	重量; 22.79g	和鏡 鏡面凹凸あり 鏡背に一部菊花文みられる
346	77	54	煙管	SK106	3層	雁首; (3.0cm) 羅宇; (3.2cm) 吸口; (1.4cm)	雁首; (0.6cm) 吸口; (1.0cm)		火皿; 径 1.2cm	
347	77	54	毛抜き	SK106	3層	7.7cm	0.7cm	0.2 ~ 0.5cm		

第4表 1区遺構種別一覧表

1区-1				
遺構名	種別	構造・形状	規模	棟・長軸方位・時期・その他
SB101	掘立柱建物跡	1×2	桁行 6.6m、柱間 3.3m、深さ 50cm	N-84° -W 弥生後期草田 3～4
Pit1012	ビット	平面不整形な平行四辺形、断面二段逆凸状	幅 30cm、長さ 40cm、深さ 30cm	弥生後期草田 4
SB102	掘立柱建物跡	1×2	桁行 6.6m、柱間 3.3m、深さ 55cm	N-85° -W 弥生後期草田 3～4
SK102	土器埋納土坑	平面長楕円、断面砲弾もしくは半円状	幅 0.9m 長さ 1.1m 深さ 45cm	弥生後期草田 3～4 甕 6、壺 1、注口土器 1、鼓形器台 3
SK101	土坑	平面断面四角形	幅 1.45m 長さ 1.85m 深さ 50cm	近世以後
柱六列	柱六列	9個	調査区内 14.5m	N-76° -W 近世以後
1区-2				
遺構名	種別	構造・形状	規模	棟・長軸方位・時期・その他
SB104	掘立柱建物跡	1×2	桁行 2.2m 梁間 2m 柱間 1.2m と 1m 深さ 30cm	N-85° -W 弥生後期草田 3～4
SB103	布掘建物跡	溝跡 2条	幅 4.3m 長さ 4.4m 深さ 35cm	N-84° -W 弥生後期草田 3～4
Pit1095	棟持柱	棟持柱	長さ 80cm、幅 60cm、深さ 40cm	弥生後期草田 3～4
SB105	掘立柱建物跡	1×2	桁行 3.5m 梁間 2m 柱間 1.75m 深さ 35cm	N-90° -N 弥生後期草田 3
SB110	掘立柱建物跡	1×2	桁行 3.5m 梁間 1.9m 柱間 1.5 深さ 35cm	N-69° -E 弥生後期草田 3
SB108	掘立柱建物跡	1×2	桁行 3.3m 梁間 1.75m 棟持柱間 4.5m 深さ 40cm	N-65° -E 弥生後期草田 4
SB109	掘立柱建物跡	1×2	桁行 3.4m 梁間 2.2m 柱間 1.7 深さ 40cm	N-83° -E 弥生後期草田 3
SB106	布掘建物跡	溝跡 2条	幅 2.3m 長さ 5.1m 深さ 65cm	N-84° -W 弥生後期草田 3～5
Pit1187	土坑	平面楕円形断面皿状	幅 75cm、長さ 1.1m、深さ 20cm	弥生後期草田 4
SB107	掘立柱建物跡	1×2	桁行 3.5m 梁間 2.3m 柱間 1.75 深さ 55cm	N-71° -W 弥生後期草田 4～5
SE102	井戸跡	円筒形二段掘丸太割抜き	幅 1.2m × 長さ 1.55m 深さ 95cm	弥生後期草田 4
SE101	井戸跡	円筒形二段掘丸太割抜き	幅 1.8m × 長さ 2.2m 深さ 1.6m	弥生後期草田 4
SE103	井戸跡	円筒形二段掘	直径 1.4m 深さ 85cm	弥生後期草田 4
SE104	井戸跡	円筒形二段掘丸太割抜き	直径 1.3m 深さ 75cm	SB109 以前
SE105	井戸跡	円筒形二段掘り、素掘り	幅 2m 長さ 2.4m 深さ 90cm	鎌倉時代 龍泉窯系青磁碗 III 類 13c 後～14 前葉 古志本郷中世土師器環 C 類 (15c 代)
SE110	井戸跡	円筒形素掘り	幅 1.9m × 長さ 1.4m 以上 深さ 1.15m	鎌倉時代 古志本郷中世土師器環 A 類 13～14c 前半、皿 D 類 (15c～16c 前半)
SE108	井戸跡	円筒形素掘り	幅 1.4m × 長さ 1.2m 深さ 70cm	室町時代 備前 IV -A15c 中葉
SE109	井戸跡	平面瓢箪形 断面四角形	幅 2.2m × 長さ 2.6m 深さ 90cm	室町時代 瀬戸美濃大窯後期 16c 中～後葉
SE107	井戸跡	円筒形素掘り	幅 1.3m × 長さ 1.65m 深さ 90cm	中世
SE106	井戸跡	平面柄鏡形 断面円筒形	直径 1.7 (後円部) 幅 0.6m 長さ 0.7m (前方部) 深さ 40cm	中世
SK169	墓坑	土坑墓 平面隅丸五角形 断面方形	幅 1.1m × 長さ 1.25m 深さ 40cm	弥生時代中期中葉 III -1
SK146	墓坑	土坑墓 平面卵形 断面逆台形	幅 2.2m (推定) × 長さ 2.3m 深さ 80cm	鎌倉時代古志本郷中世土師器環 A 類 13～14c 前半
SK142	墓坑	土坑墓 平面隅丸方形 断面逆台形	幅 1.45m × 長さ 1.7m 深さ 45cm	鎌倉時代
SK154	墓坑	土坑墓 平面正方形 断面方形	幅 1.3m × 長さ 1.3m 深さ 80cm	室町時代～江戸時代 古志本郷中世土師器皿 A 類 16c 末～17c 初
SK156	墓坑	土坑墓 平面方形+溝 断面皿状	幅 0.85m × 長さ 1.3m 深さ 25cm	中世
SK1147	祭祀土坑又は墓坑	平面柄鏡形 断面砲弾状土坑	幅 0.75m 長さ 1.2m 深さ 35cm	弥生後期草田 4
Pit1170	土器埋納坑	平面不整形楕円 双子砲弾状土坑	幅 0.55m 長さ 0.5m 深さ 35cm	室町時代 古志本郷 D-1 類、D-2 類、皿 c 類 (15c～16c 前半)
SX103	湧水土坑	平面ほぼ円形 断面逆台形	直径 3.5m 深さ 80cm	鎌倉時代
SX104	湧水土坑	平面隅丸方形 断面逆台形	幅 2.9m × 長さ 3m 深さ 50cm	鎌倉時代
SX105	湧水土坑	平面隅丸方形 断面逆台形	幅 3.3m × 長さ 3.4m 深さ 70cm	鎌倉時代
SD156	溝跡	蛇行溝 断面逆台形	幅 1.1m (最大) × 長さ 13.4m 深さ 25cm	弥生時代中期後葉 IV -2
SD141	溝跡	直行溝 断面逆台形	幅 2.8m (最大) × 長さ 24.0m 深さ 90cm	弥生時代後期後半草田 3～4 (若干 5 あり)
SD159	溝跡	蛇行溝 断面長逆台形	幅 0.4m × 長さ 13.5m 深さ 30cm	弥生時代後期後半
SD142	溝跡	蛇行溝 断面長逆台形	幅 0.9m × 長さ 26m 以上 深さ 90cm	中世 市 1 次調査 B 区 SD38 に接続
1区-3				
遺構名	種別	構造・形状	規模	棟・長軸方位・時期・その他
SE111	井戸	石組井戸 縦板組横棧どめ	掘方 幅 4m (推定) × 5.5m 井戸内法幅 1.5m × 長さ 2.0m 深さ 1.4m	鎌倉時代古志本郷中世土師器環 A 類 13～14c 前半
SE112	井戸	(石組井戸) 縦板組横棧どめ	掘方 幅 4m × 5m 井戸内法 2m 四方 深さ 1.4m	鎌倉時代古志本郷中世土師器環 A 類 13～14c 前半
SK106	墓坑	角形木棺墓 平面隅丸方形断面砲弾状	幅 1.1m × 長さ 1.4m 深さ 55cm	室町時代～江戸時代 古志本郷中世土師器皿 A 類 16c 末～17c 初
集石 5	集石遺構	平面不整形なハート形 断面皿状	幅 1.5m、長さ 1.9m、深さ 20cm	弥生時代中期後葉 IV -2
SK130	土坑	平面小判形 断面皿状	幅 95cm、長さ 1.6m、深さ 18cm	集石遺構 5 の下部で検出
SK107	湧水土坑	平面楕円断面逆台形	1.5m 以上 × 2.5m 以上 深さ 60cm	室町時代備前 IV -A15c 中葉
SD134	溝跡	直行溝断面逆台形深い溝跡 (支流あり)	1～1.5m 幅調査区内延長 5.5m 深さ 45cm	室町時代古志本郷中世土師器環 C 類 15c 出雲市第 1 次調査 C 区 SD08 に接続
SD132	溝跡	断面長方形	幅 0.8m、長さ 1.8m 深さ 15cm	中世 (SK106 に切られる) 市 1 次調査 C 区 SD16 に接続
SD135	溝跡	溝 断面長逆台形	幅 0.6m、長さ 5.6m	中世 市 1 次調査 C 区 SD05 に接続
SD140	溝跡	溝 断面長逆台形	幅 1.7m、長さ 5m、深さ 40cm	中世 市 1 次調査 C 区 SD26 に接続
SD138	溝跡	溝 断面長逆台形	幅 0.6m、長さ 2.1m、	中世 市 1 次調査 C 区 SD21 に接続

第5表 1区井戸一覧表

調査区	時期	遺構名	井戸側	形状・支持	水溜	備考
1-2区	弥生時代終末期	SE101	丸太割抜き	円筒形二段掘り	丸太割抜き	弥生土器(草田4期)、注口土器破片敷き、割物容器、井戸粹残存
	弥生時代後期後半～終末期	SE102	丸太割抜き	円筒形二段掘り	丸太割抜き	弥生土器(草田3～4期)
	弥生時代後期後半～終末期	SE103	素掘り	円筒形二段掘り	丸太割抜き	弥生土器(草田3～4期)
	弥生時代後期後半～終末期	SE104	丸太割抜き	円筒形二段掘り	丸太割抜き	弥生土器(草田3～4期)
	中世	SE105	素掘り	すり鉢形	素掘り	龍泉窯系青磁椀Ⅲ類、中世土師器、杭 13c後～15c
	中世	SE106	素掘り	円筒形	素掘り	中世土師器
	中世	SE107	素掘り	円筒形	素掘り	中世土師器
	中世	SE108	素掘り	円筒形	素掘り	青磁、すり鉢(備前Ⅳ-A期) 14c後～15c前
	中世	SE109	素掘り	円筒形	素掘り	陶器(瀬戸美濃大窯後期) 16c中～後
	中世	SE110	素掘り	円筒形	素掘り	青銅鏡(和鏡)、土錘、青磁、杭、中世土師器 13c～16c前
1-3区	中世	SE111	石組	縦板組横棧どめ	縦板組	中世土師器、すり鉢、支柱、構造材、板状製品 他 13c～14c前
	中世	SE112	(石組)	縦板組横棧どめ	縦板組	中世土師器、支柱、構造材 他 13c～14c前

第6表 1区主要遺構の各時代ごとの様相

時代区分・画期	1区-1	1区-2	1区-3
弥生時代中期中葉		SK169 土坑墓	
弥生時代中期後葉		SD156	集石遺構 5
弥生時代後期後半～末葉	SK102 土器埋納土坑	SD141 直行溝	
	SB101 掘立柱建物跡	● SD141 以南の遺構	
	SB102 掘立柱建物跡	SB104 掘立柱建物跡	
	SD004	SB103 の布堀建物跡	
	SD008	SE102 井戸	
	SD010	SB105 掘立柱建物跡	
	SD013	SE101 井戸	
		● SD141 以北の遺構	
		SB110 掘立柱建物跡	
		SK1147 土器廃棄土坑	
		SB108 掘立柱建物跡	
		SB108 周辺ビット	
		SE103 井戸	
		SB106 布堀建物跡	
		Pit1187 伏葬土坑	
		SB107 掘立柱建物跡	
		SD159	
		SE104 井戸	
		SB109 掘立柱建物跡	
鎌倉時代 13世紀～14世紀中葉		SE105 井戸	SE112 (石組) 井戸
		SE110 井戸	SE111 石組井戸
		SX103 湧水土坑	SD136 直行溝
		SX104 湧水土坑	SD134 直行溝
		SX105 湧水土坑	
		SK146 土坑墓	
室町時代～安土桃山時代 14世紀中葉～16世紀		SD142 溝跡	
		Pit1170 土器埋納土坑	SK107 湧水土坑
		SK108 井戸	SK106 角形組合式木棺墓
		SK109 井戸	
		SK154 土坑墓	

## 第5節 1区-4の調査

下古志遺跡1区-4の調査は、1区-2で検出した溝SD141の延長部分の状態を確認するために、調査の途中で設定した調査区である。調査地点は砂利敷きの仮設道路であったため、調査区の幅を広く設定することが難しく、SD141が延長すると考えられる部分を想定して調査区を設定した。

発掘調査は平成22年12月7日に盛土を機械で掘削し、12月8日から人力での掘削を開始した。地表から1m以上も盛土が堆積しており、1区-2に比べると削平されている部分が多い。調査では想定した部分にSD141の延長部分を確認し、上面から土器が出土した。出土土器や土層の記録を取り、12月14日に完掘写真を撮影して調査を終了した。調査面積は150m<sup>2</sup>である。

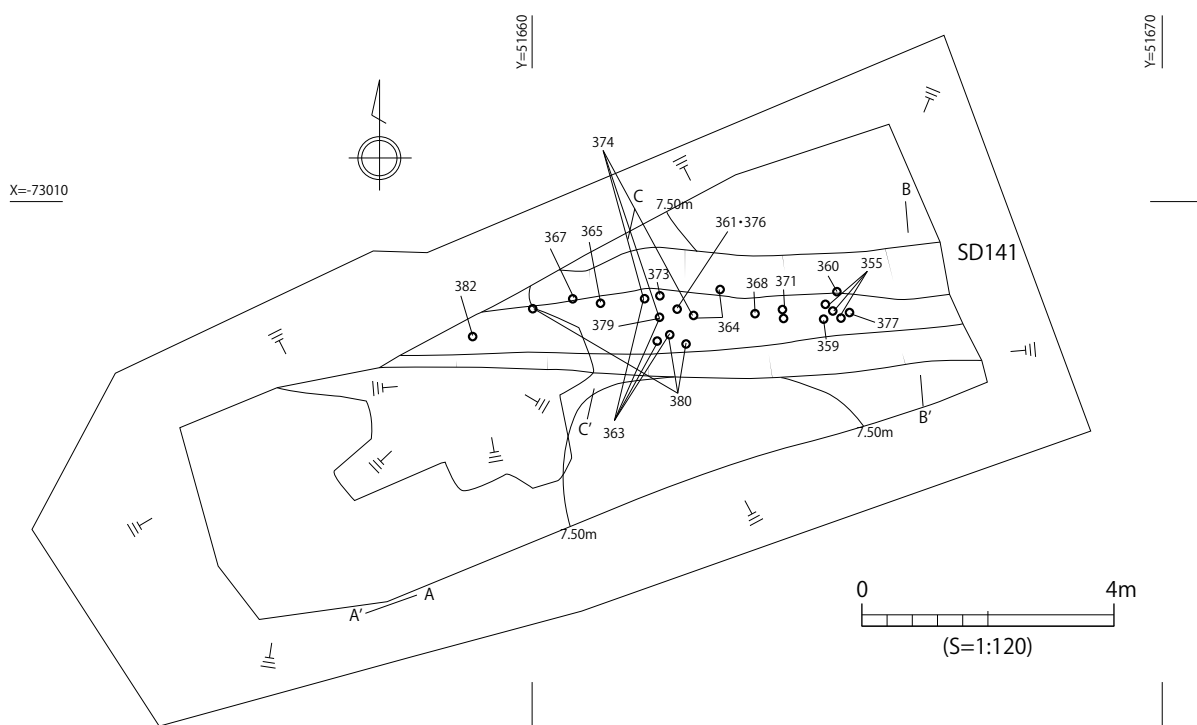
地表部分の標高は8.9～9.0mであった。人頭大の礫や真砂土による盛土・攪乱土が1m以上も堆積していた。7.8m付近で包含層である暗オリーブ褐色土を確認した。包含層は最大で約20cmの厚さがあった。地山は黄橙色土であり、きめの細かい砂質の土であった。

### SD141

調査区の中央やや北寄り、標高約7.6m付近で検出した。遺構内からわずかに湧水があった。調査区内の長さは約9m、幅約2m、深さ約40cmである。調査区の西壁付近に攪乱部分があったため、遺構のラインがやや乱れているが、ほぼ東西に直線的に伸び、1区-2とあわせて約40m以上になる。断面は浅いU字形をしている。土層は2箇所で図化した。

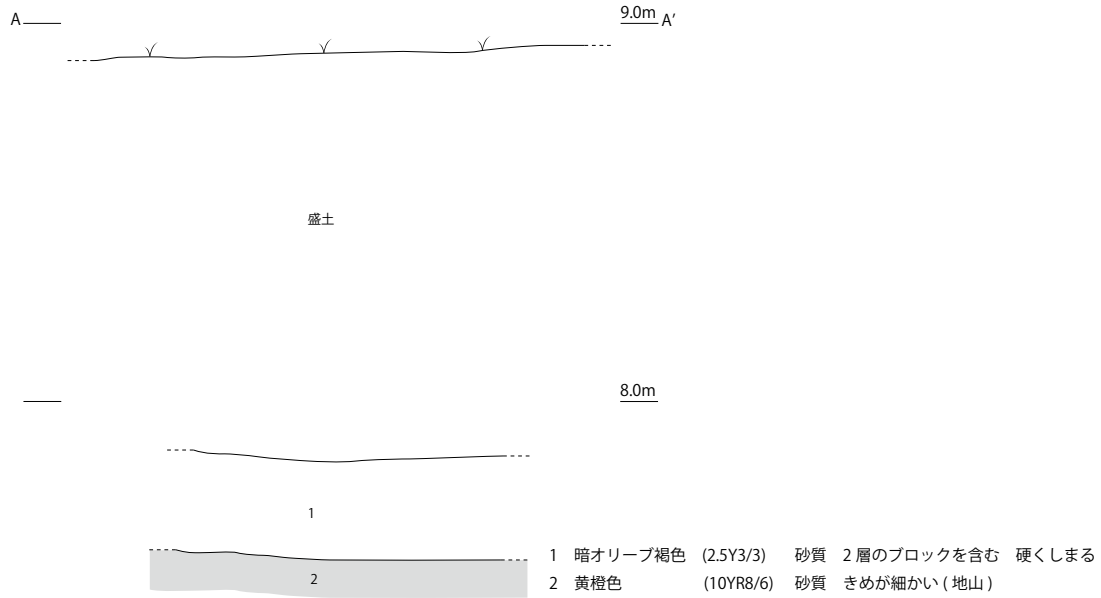
第1層 暗褐色土は泥質で、粘性が高い。多くの遺物を含む。

第2層 暗オリーブ褐色土は西側でのみ確認された。遺物は出土しなかった。

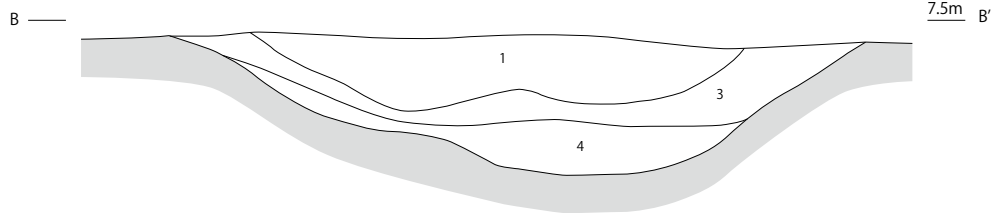


第80図 下古志遺跡1区-4調査区全体図

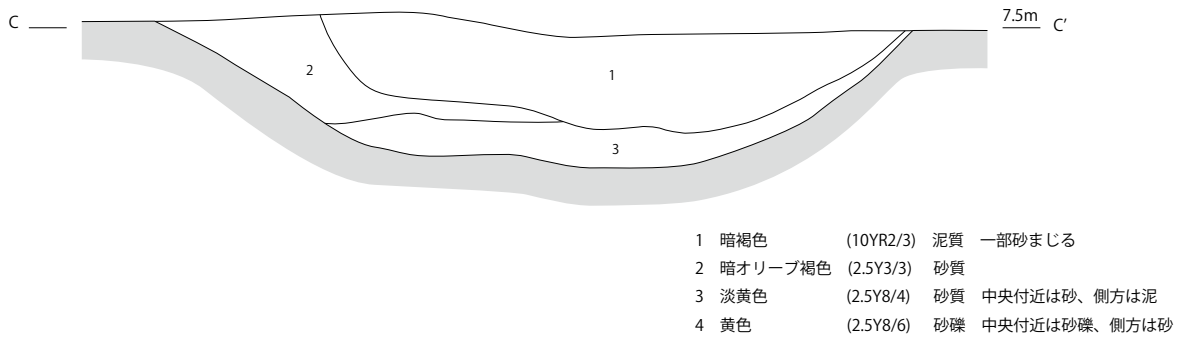
調査区南壁土層図



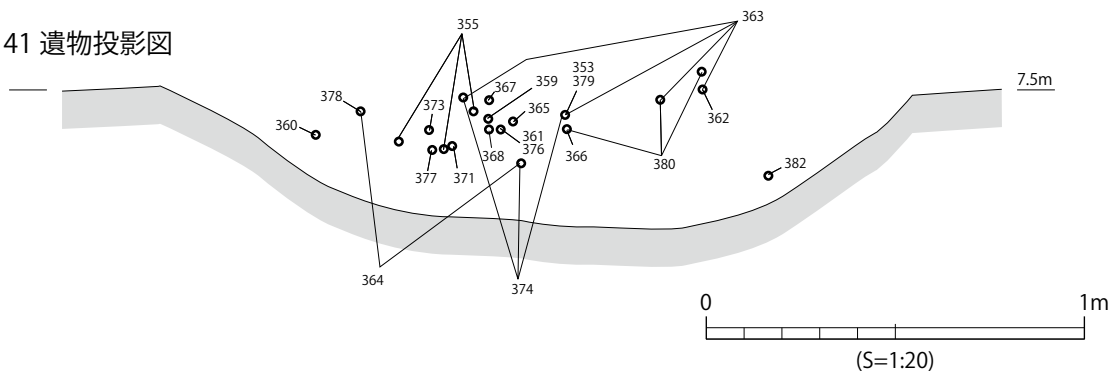
SD141 東側土層図



SD141 西側土層図



SD141 遺物投影図



第 81 図 下古志遺跡 1 区 -4・SD141 実測図

第3層 淡黄色土は溝の中央部分は砂で側方に行くに従って泥質になることから、水性堆積であったと考えられる。

第4層 黄色土は東側でのみ確認された。砂礫層であり、溝の中央部分は砂礫、側方は砂質になることから、水性堆積であったことが考えられ、3層よりも流速が早かったことがうかがえる。3、4層からは遺物がわずかに出土した(353、354、375)。

1区-2に比べると1区-4では1層の上部が削平されたことがうかがえる。

SD141は水が比較的早く流れるような状態であり、溝が埋まるのが早かったことが推測されるが、その後1層の段階では水の流れが確認できないような状態になったと考えられる。

遺物は1層の上位から、溝の中央部分から密集して出土した。検出時には三つほどの群に分かれていた。遺物は器形を復元できる個体が多いが、1層の様相から考えると、流されてきたのではなくほとんどその位置から動いていないと考えられる。

なお、SD141以外の遺構は確認できなかった。

#### SD141 出土遺物

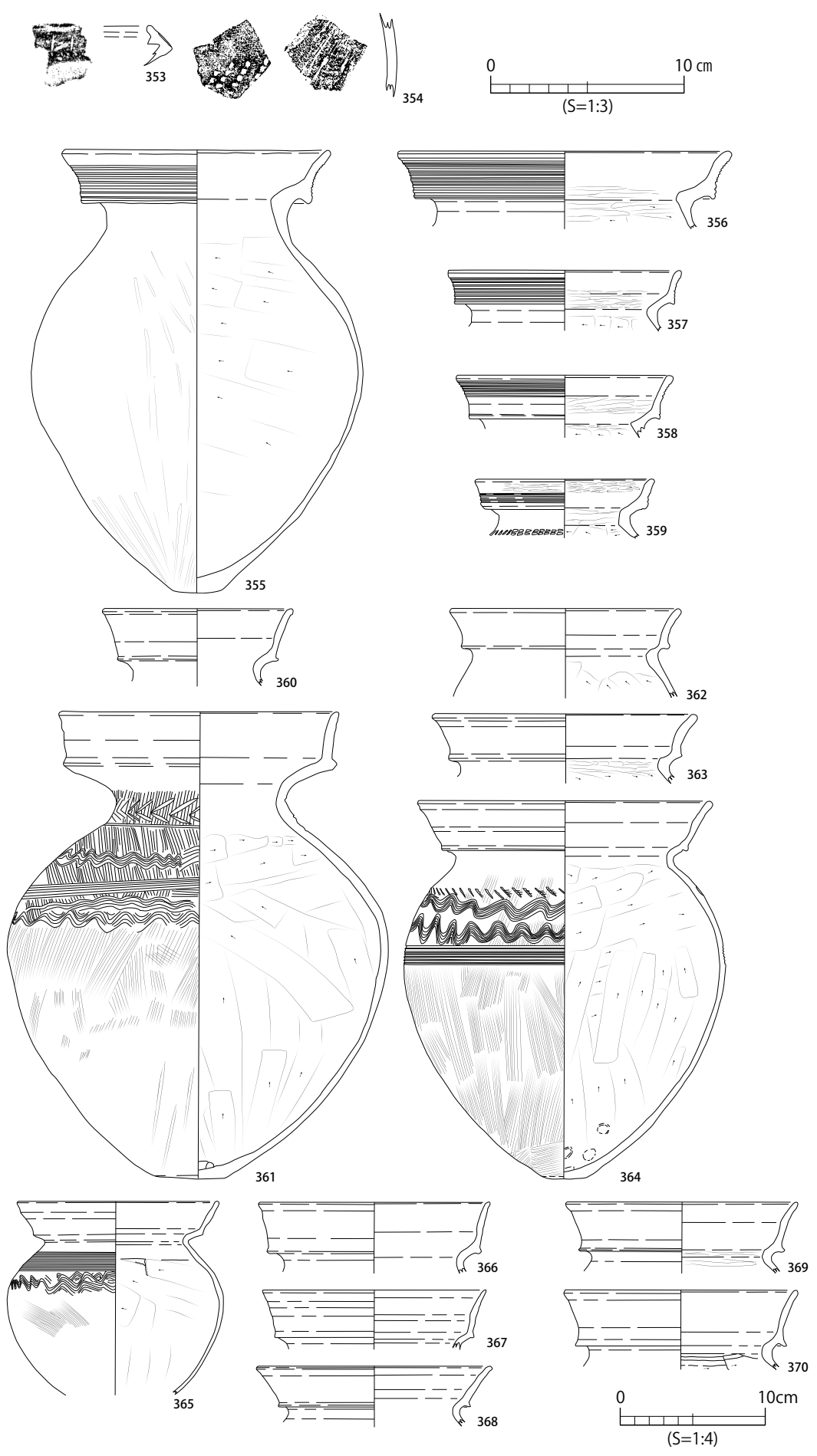
SD141 出土遺物は、弥生土器と土師器である。弥生土器7点、土師器22点を図示した。

弥生土器(353～359) 353は壺の口縁である。口縁端部に刻みがある。弥生時代中期後葉の壺と考えられる。354は胴部の破片である。ともにSD141の下層から出土したが、遺構の時期を示すものではなく、混入の可能性が強い。355は壺である。底部は尖り気味の平底で自立しない。口縁帯の文様は櫛描直線文であるが、やや不明瞭である。弥生土器で底部まで器形が残っているのはこれのみで、その他は口縁部のみの遺存である。356、357は甕である。口縁部が大きく外反し、口縁下端部の垂下はあまり行わない。口縁帯に櫛描直線文を施し、口縁内面部はヘラミガキである。358も同様の特徴であるが、口縁帯下半をナデ消している。359は口径が小さく鉢と判断した。外面と口縁部内面は赤彩されている。全体にやや厚手で、口縁には3条の凹線文がある。弥生土器は355を除くと破片が多く、出土量も少ない。

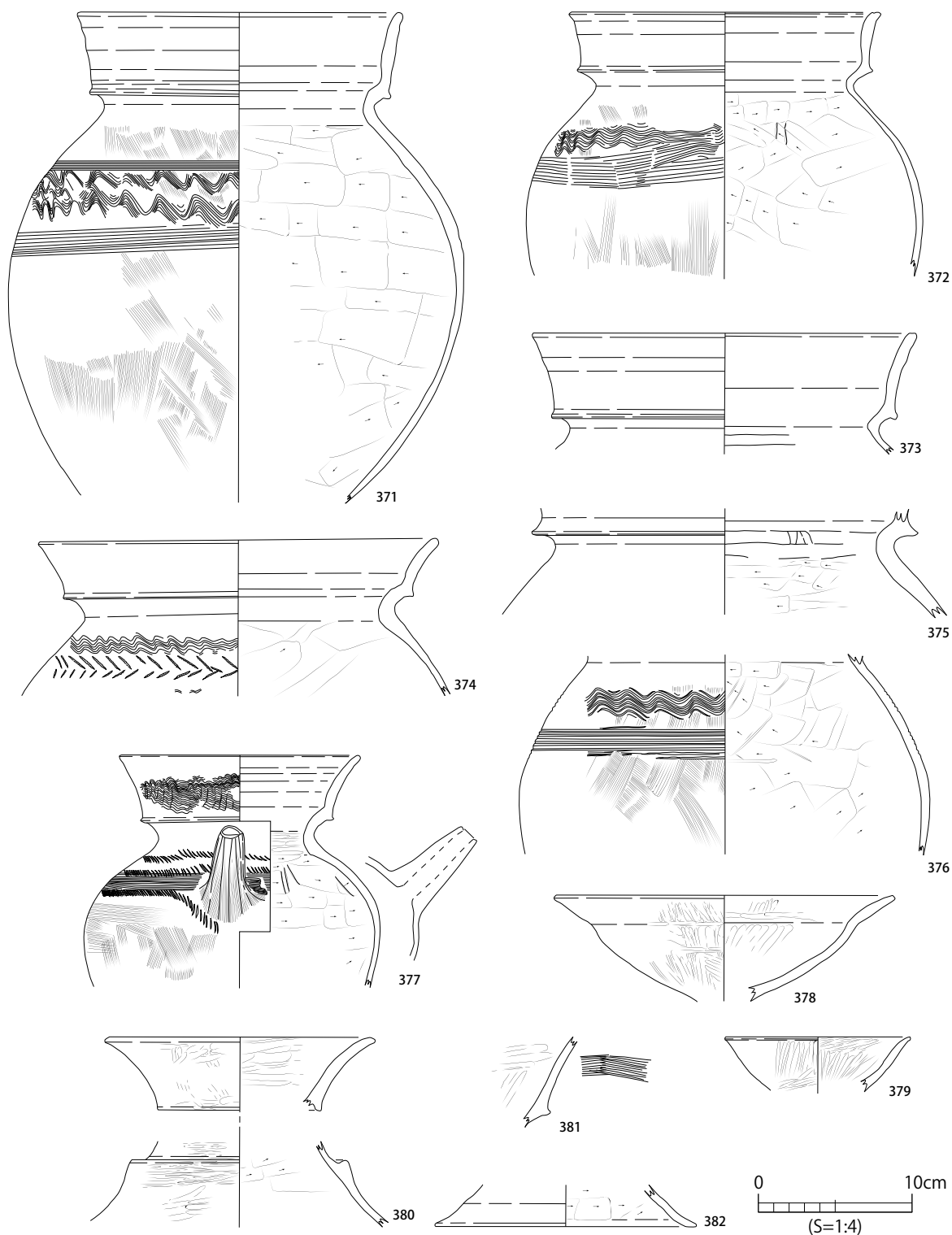
これらの時期はV-3様式、358はV-3の新しい段階に相当すると考えられる。

土師器(360～382) 360、361、376は壺である。361は完形である。口縁部は直立し、底部は自立する。頸部には無軸羽状文と沈線、肩部には櫛描直線文と波状文がある。肩部の櫛描文は最下部の波状文を施文した後に上の方へ引き続き直線文を、最後に再度波状文を、上から見て反時計回りに施文する。胴部最大径付近に稜があり、内外の調整も稜付近で異なる。360は壺の口縁部である。口縁部は大きく外反する。376は壺の肩部と判断した。櫛描波状文と直線文がある。362～375は甕である。362、363は全体に厚手で、口縁部下の稜はつまみだしたようにあまり突出しない。364はやや大形の甕で、底部まで器形の判る個体である。胴部最大径は胴の中程にあり、底部は平底であるが自立しない。口縁は直線的に伸び、口縁部下の稜は斜め下に突出する。底部内面の指頭圧痕はあまり顕著ではない。肩部には上から刺突文、櫛描波状文2列、櫛描直線文がある。365は小形の甕である。球形の胴部で、口縁部はやや外側にふくらみながら伸びる。外面には煤が付着しており、口縁部と胴部上半は熱を受けて器壁が剥落している。366、367、369、370は口縁部が長く、口縁部下の稜は斜め下方に突出する。口縁端部は先端へ向けて細くなり、わずかに外方へ折り曲げる。368は口縁部が直線的で端部を丸く収め、やや新しい特徴を持つ。371～





第 82 图 1 区 -4 SD141 出土土器实测图 1



第 83 图 SD141 出土土器实测图 2

374 は口径が 20cm を越える大形の甕である。371 は胴部最大径が 364 に比べやや下がった位置にある。口縁部は直線的で、外面にはヨコナデによる凹凸が顕著である。口縁部下の稜は鋭い。肩部には 2 列の櫛描直線文の間に波状文が 2 列位置する。櫛描文は下の直線文から描き始めており、一部 3 周している部分もある。372 の口縁部には厚みに違いがあり、口縁端部ではやや厚く、口縁部下の稜付近ではやや薄い。口縁端部の内側に平坦面があり、端部を斜め上方へつまみだす。374 は軟質で、色調もにぶい黄橙色で、他の土器に比べ異質である。器形や文様の特徴も特徴的である。摩滅しているため不明な部分もあるが、器形では、口縁部が大きく外反し、稜の突出も鈍い。口縁部の厚みもある。肩部には櫛描波状文と無軸羽状文があるが、他の土器に比べて頸部に近い部分に施文されている。375 は下層から出土した甕である。口縁部を欠くが、1 層の土器と時期の違いは見いだせない。壺・甕とも、「一筆書き」状の櫛描波状文と直線文の組み合わせが多い。377 は注口土器である。口縁部は外反し、外面にはピッチの小さく不規則な貝殻波状文を施す。波状文は一部ナデ消す部分がある。胴部には櫛描直線文の上下に小さな刺突文を施す。櫛描文は上から見て時計回りに施す。注口部は直線的で長く伸びる。377 はこれらの特徴から「注口土器Ⅱ類」（松山 2010 p.4）に相当すると考えられる。378 は高坏である。坏部のみ遺存していたが、外湾する坏部から屈曲し内湾して口縁部に至る。内外面は丁寧なタテヘラミガキで調整され、胎土も細かく精製したような胎土である。379 は低脚坏の可能性もある。380 は鼓形器台である。筒部を欠き、図上で復元した。筒部と台部の境の稜と口縁部との間が短く、外面にヘラミガキが残ったままである。

1 区 -4 から出土した土器の比率は、高坏や低脚坏、鼓形器台の点数が少なく、ほとんどを壺と甕でしめる。それぞれの土器の時期は、高坏、低脚坏、鼓形器台、甕のうち 362 や 363 は古い特徴を示しており草田 4 期、その他の土器は草田 5 期に相当すると考えられる。なお、壺 361 は口縁が直立する特徴、甕 368 は口縁部が直線的で端部を丸くおさめる特徴から、草田 6 期まで下る可能性がある。

SD141 の時期は、出土土器から弥生時代後期後葉（V-3 様式）～古墳時代前期初頭（草田 5 期）と考えられる。なお、SD141 の下層からも土器が出土しているが、混入の可能性が強いもの（353、354）や 1 層の土器と時期の違いを指摘できないもの（375）があることから、1 層の土器の時期を遺構の時期と判断した。

## 小結

1 区 -4 では、溝 SD141 を確認した。SD141 出土土器でもっとも古い土器は V-3 様式の特徴を持つものであることから、この時期に溝が掘削されたと考えられる。その後は量の多少はあるものの、草田 5 期まで継続して土器が出土している。1 層が堆積するまでは、やや浅くはなりながらも溝として機能していたと考えられるが、草田 5 期に上面から土器が出土するような形で溝が埋まったと考えられる。この様相は 1 区 -2 における SD141 の状況と時期が異なっており、溝の場所によって埋没時期が異なる状況であったことがうかがえる。出土した土器は壺と甕がほとんどで、高坏や低脚坏、鼓形器台の出土点数は少なく、く字形口縁の甕などの外来形土器も確認することはできなかった。

第7表 1区-4土器観察表

遺物番号	挿図番号	写真版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の 寸法	残存率	形態・文様の 特徴	色調	備考
353	82	65	弥生土器	壺	K8/SD141	上						刺突文	にぶい橙 7.5YR5/4	弥生中期後葉?
354	82	65	弥生土器	甕	K8/SD141	下						列点文	外:灰黄 2.5Y6/2、 内:浅黄 2.5Y7/3	弥生後期?
355	82	63	弥生土器	壺	K8/SD141	上	18.1	30.5	23.0	底径 3.6	70	櫛描直線文14 条、線は不明 瞭	淡黄 2.5Y8/3	V-3
356	82	65	弥生土器	甕	K8/SD141		(22.8)				15	櫛描直線文11 条	淡黄 2.5Y8/3	V-3
357	82	65	弥生土器	甕	J8/SD141	上	(16.0)				15	櫛描直線文8 条、煤付着	外:にぶい黄橙 10YR6/3、内:にぶ い黄橙 10YR7/3	V-3
358	82	65	弥生土器	甕	K8/SD141	上	(14.8)				15	櫛描直線文6 条、一部ナデ 消し	外:浅黄橙 10YR8/3、内:浅黄 2.5Y7/4	V-3
359	82	65	弥生土器	鉢	K8/SD141		(12.1)				15	内外赤彩、凹 線文3条	灰褐 7.5YR6/2	V-3
360	82	64	古式土師器	壺	K8/SD141		12.9				現存部 完存	磨滅	浅黄橙 10YR8/3	
361	82	63	古式土師器	壺	K8/SD141	上	18.9	32.4	26.2	底径 4.8	95	頸部に無軸羽 状文、肩部に 櫛描直線文と 波状文、煤付 着	外:淡黄 2.5Y8/3、 内:灰白 2.5Y8/2	草田6期
362	82	65	古式土師器	甕	K8/SD141		(13.6)				20	外面は磨滅、 煤薄く付着	外:浅黄橙 10YR8/2、内:灰白 2.5Y8/2	草田4期?
363	82	64	古式土師器	甕	K8/SD141	上	17.9				70	口縁部厚い、 煤付着	外:灰白 10YR8/2、 内:浅黄橙 10YR8/4	草田4期
364	82	63	古式土師器	甕	K8/SD141	上	(20.0)	26.1	(22.2)		20	櫛描直線文と 波状文、煤薄 く付着	外:浅黄橙 10YR8/3、内:灰白 2.5Y8/2	草田5期
365	82	64	古式土師器	甕	K8/SD141	上	13.7		15.0		80	櫛描直線文と 波状文、煤付 着、被熱して 器壁が剥離し ている部分あ り	外:灰黄褐 10YR5/2、内:にぶ い黄橙 10YR6/3	草田5期
366	82	65	古式土師器	甕	K8/SD141		(15.8)				30		淡黄 2.5Y8/3	草田5期
367	82	65	古式土師器	甕	K8/SD141		(15.4)				15		浅黄 2.5Y7/3	草田5期
368	82	65	古式土師器	甕	K8/SD141		(16.0)				10		外:にぶい橙 7.5YR6/4、内:浅 黄 2.5Y7/3	草田5期
369	82	65	古式土師器	甕	K8/SD141		(15.8)				10		淡黄 2.5Y8/4	草田5期
370	82	65	古式土師器	甕	K8/SD141		(16.0)				30	煤付着	外:にぶい黄橙 10YR7/3、内:にぶ い黄橙 10YR6/4	草田5期
371	83	63	古式土師器	甕	K8/SD141	上	20.6		(29.5)		肩部よ り上は 完存	櫛描直線文と 波状文	外:にぶい黄橙 10YR6/3、内:にぶ い黄橙 10YR7/3	草田5期
372	83	66	古式土師器	甕	K8/SD141		(20.0)		(25.8)		30	櫛描直線文と 波状文	外:にぶい橙 7.5YR7/4、内:に ぶい橙 7.5YR6/4	草田5期
373	83	66	古式土師器	甕	K8/SD141		(24.0)				30		外:浅黄橙 10YR8/3、内:淡黄 2.5Y8/4	草田5期
374	83	64	古式土師器	甕	K8/SD141	上	25.8				90	波状文と無軸 羽状文、軟質	にぶい黄橙 10YR7/4	草田5期
375	83	66	古式土師器	甕	K8/SD141	下					10	煤付着	外:オリーブ褐 2.5Y4/4、内:灰黄 2.5Y7/2	草田5期
376	83	66	古式土師器	壺?	K8/SD141	上			(26.8)		15	櫛描直線文と 波状文	外:にぶい橙 7.5YR7/4、内:に ぶい黄橙 10YR6/3	
377	83	64	古式土師器	注口 土器	K8/SD141	上	15.4		19.2		40	口縁部に波状 文、肩部に刺 突文3列と櫛 描直線文、煤 付着	外:にぶい黄橙 10YR7/4、内:にぶ い黄橙 10YR7/3	草田5期
378	83	66	古式土師器	高坏	K8/SD141	上	(22.0)				15	精製した胎土	外:にぶい橙 7.5YR6/4、内:に ぶい黄橙 10YR7/3	草田4~5 期
379	83	66	古式土師器	低脚 坏	K8/SD141	上	(11.9)				15		外:橙 7.5YR6/6、内: 橙 7.5YR6/8	

遺物 番号	挿 番 号	写 真 版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の 寸法	残存率	形態・文様の 特徴	色調	備考
380	83	66	古式土師器	鼓形 器台	K8/SD141	上	(17.0)				10	外面へラミガ キ	外：にぶい黄 2.5Y6/4、内：淡黄 2.5Y7/3	草田4期
381	83	66	古式土師器	鼓形 器台	J8/SD141	上						外面に直線 文?	外：浅黄橙 10YR8/3、内：にぶ い黄橙 10YR7/4	
382	83	66	古式土師器	鼓形 器台	K8/SD141					底径 (17.0)	15	磨滅	外：にぶい黄橙 10YR7/3、内：浅黄 橙 10YR8/3	

【参考文献】

松山智弘 2010「最後の四隅突出型墳丘墓」『古代文化研究』第18号 島根県古代文化センター pp.1～

31

## 第4章 下古志遺跡2区

下古志遺跡2区は出雲市下古志町908ほかに所在する。遺跡が位置する部分は宅地や田畑であった。調査区は長さ約90m、幅約20mの長方形である。なお、先に工事を行う部分が調査対象地の西側部分にあり、この長さ約27m、幅2～3mの部分を「2区-1」として調査を行った。

### 第1節 調査の方法

発掘調査にあたっては、1次調査で検出した遺構の広がり、特に弥生時代の遺構の広がりを課題として調査に臨んだ。調査では平成19年度のトレンチ調査の結果を参考に、宅地の盛土を機械により掘削し、その後人力による掘削を行った。宅地として利用されていたため、削平や攪乱が著しい部分もあった。また、溝や土坑を掘り下げるときに水が湧くものがあったが、必要以上に地下水をくみ上げないように配慮した。調査に際しては第84図のように東西にA-F、南北に13-21の10×10mのグリッドを設定し、遺構に伴わない遺物は層位を確認してグリッド単位で取り上げた。出土遺物はコンテナ約50箱である。

以下、調査経過を記述する。

- 5月21日 下古志遺跡2区の調査を開始する。作業通路作りから始める。
- 5月22日 ベルトコンベアを設定し、調査区の南側から掘削を開始する。また、2区-1の掘削も開始する。
- 6月11日 2区-1の完掘写真を撮影する。
- 6月21日 2区-1の完了検査を受ける。
- 6月下旬 南側部分の遺構検出と掘削を行う。
- 7月6日 弥生土器が溝から出土したことで、弥生時代の溝であることがわかる。
- 7月16日 激しい夕立があり、梅雨明けを感じさせる。
- 7月下旬 弥生時代の溝が複数あることがわかり、掘削と土層図の作成を行う。
- 8月2日 溝の完掘写真を撮影する。
- 8月5日 気温37.1℃の猛暑日を記録する。その中で写真撮影に向けての遺跡全体の清掃を行う。
- 8月9日 南側部分の完掘写真を撮影する。
- 8月10日 南側部分の完了検査を受ける。
- 8月19日 ラジコンヘリによる航空写真撮影を行う。
- 8月23日 調査区の埋め戻し、北側部分の表土掘削を開始する。
- 8月30日 ベルトコンベアを設定し、掘削を開始する。
- 9月中 包含層の掘削を行う。
- 9月30日 精査を始め、溝や多くのピットを検出する。
- 10月上旬 多くのピットが見つかり、掘り上げと測量を行う。
- 10月14日 弥生時代の溝SD220、SD221を検出する。
- 10月15日 SD220の深さを確認するために深掘りを行う。
- 10月20日 掘立柱建物SB202～05の写真を撮影する。

- 10月21日 弥生時代の溝 SD222 を検出する。以後、弥生時代の溝の掘削を行う。
- 11月1日 田中義昭氏による調査指導を受ける。
- 11月10日 古銭が土坑 SK203 から出土する。
- 11月13日 現地説明会を開催する。(参加者約 100 名)
- 11月16日 10日に古銭が出土した土坑の底部から、さらに古銭が出土。
- 11月19日 調査区を西側へ拡張する。
- 11月24日 SD220 の完掘写真を撮影する。
- 12月8日 ラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。
- 12月14日 完了検査を受ける
- 12月17日 全体の片付けを行い、下古志遺跡 2 区の調査を終了する。

整理作業は発掘調査と平行して調査事務所で行い、調査終了後は埋蔵文化財調査センターで引き続き整理作業を行った。

## 第 2 節 層序

下古志遺跡 2 区の表土の標高は約 9 m であったが、調査区の東側は盛土が厚く、9.6 m であった。調査区の西壁の土層 BB' (第 86 図) では、上から順に「1 層」(近世以降の遺物が多いが、若干の土師器・須恵器を含む)、「2 層」(土質が 1 層と異なり、近世以降の遺物に対する土師器や須恵器の量が増える)、「3 層」(遺物包含層)、「地山」(砂礫層で、三瓶山起源と考えられる軽石などの火山岩を多く含む) に大別して遺物を取り上げた。調査区の西側、B ラインより西側は包含層が薄く、特に B18、B19 では表土下 0.3 m 程度で地山を確認できたが、調査区の中央東側の土層 CC' (第 86 図) では、盛土の下に黒褐色土が厚く堆積していた。この黒褐色土は調査区の南東側、C18 から C20 より東側に分布しており、17 ラインより北では確認できなかった。この黒褐色土の下には暗褐色土があり、「3 層」として遺物を取り上げた。2 層下面や 3 層中では近世以降の遺構のみが確認でき、時期の異なる遺構であっても、地山である 4 層の上面で検出した。

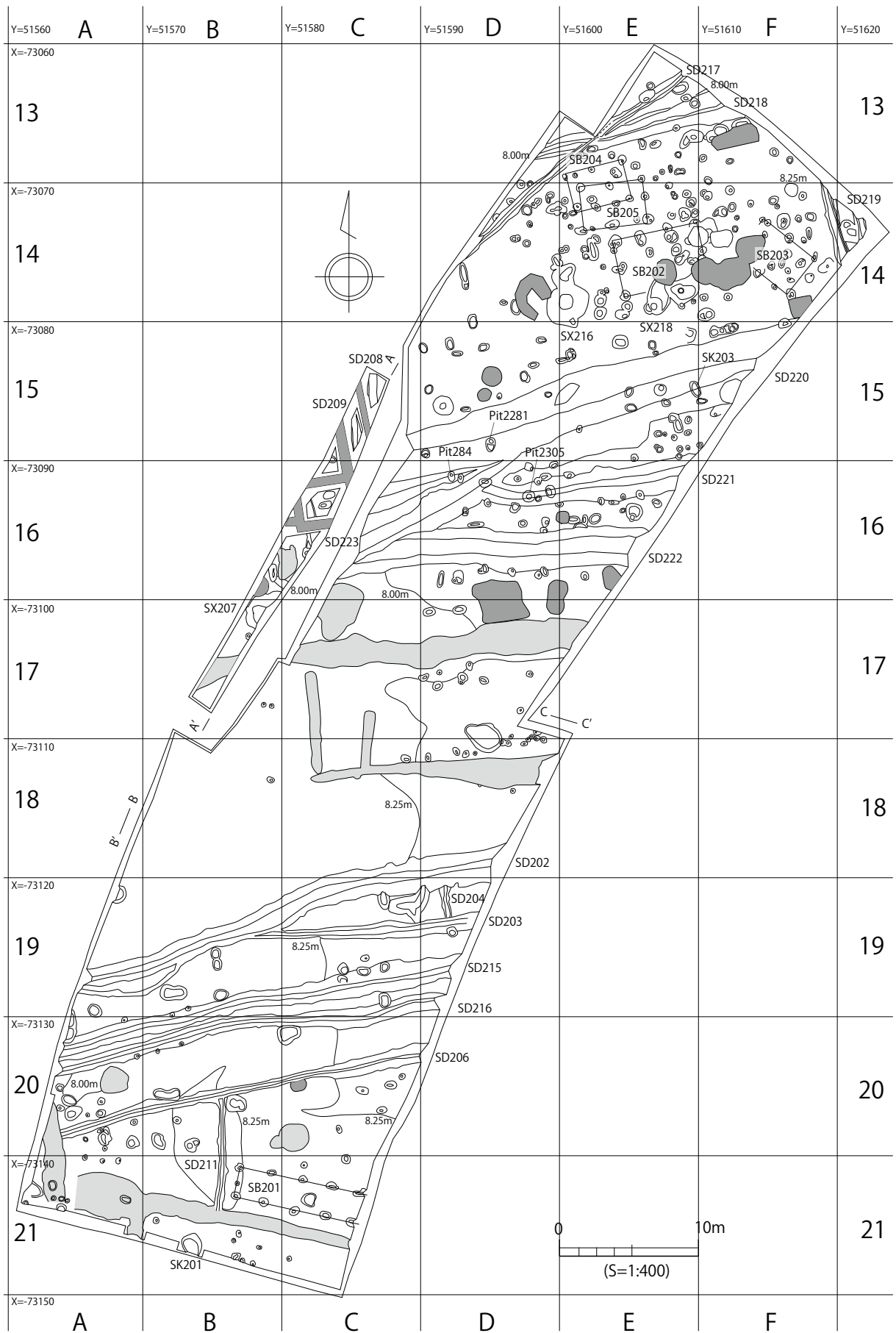
なお、土層図はすべて左を北に配置した。そのため、写真図版の土層とは左右が逆になっているものがある。

完掘後の標高は 8.0 ～ 8.25 m であり、西側が低く、東側ほど高い傾向がみられた。

2 区 -1 の土層 AA' では表土から約 60cm で地山まで達したが、南側は浅く、約 30cm で地山まで至った (第 85 図)。2 区 -1 では後述する弥生時代後期～古墳時代前期の溝 SD220 や SD222 を認識できず、地山と誤認してしまい、遺構を完掘できなかった部分を残した。

下古志遺跡 2 区では、弥生時代から室町時代までの遺構を確認した。遺構は掘立柱建物、溝、土坑などがある。

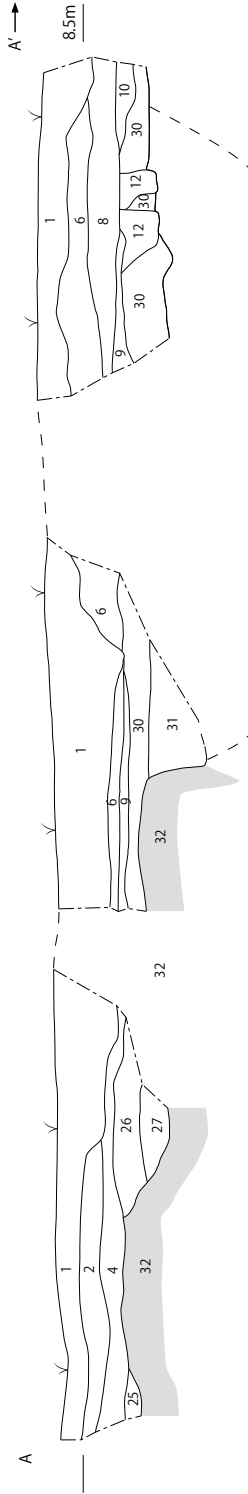
掘立柱建物は調査区の南端と北側で計 5 棟確認した。溝は計 16 本確認した。内訳は、弥生時代中期後葉の溝 4 本、弥生時代後期～古墳時代前期の溝 5 本、鎌倉時代～室町時代の溝 5 本、時期不明の溝 2 本である。



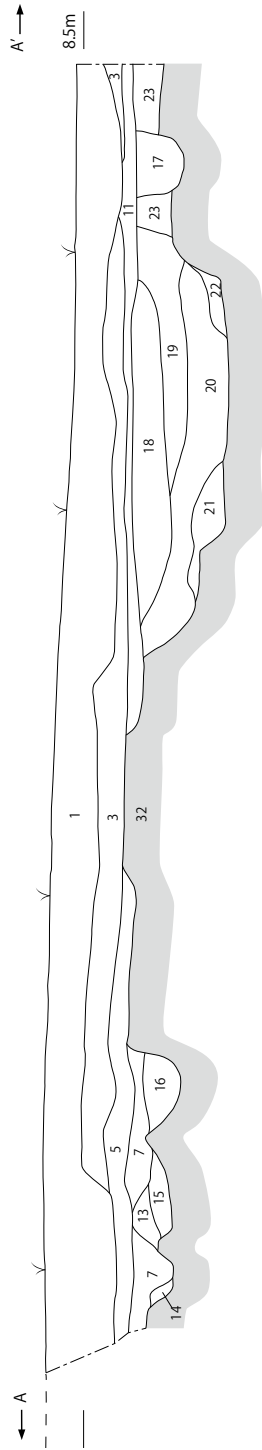
第 84 图 下古志遺跡 2 区遺構平面図



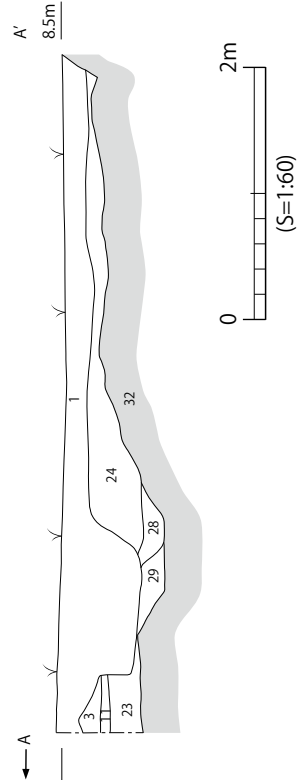
2区-1 AA'土層図



2区-1 AA'土層図-2



2区-1 AA'土層図-3

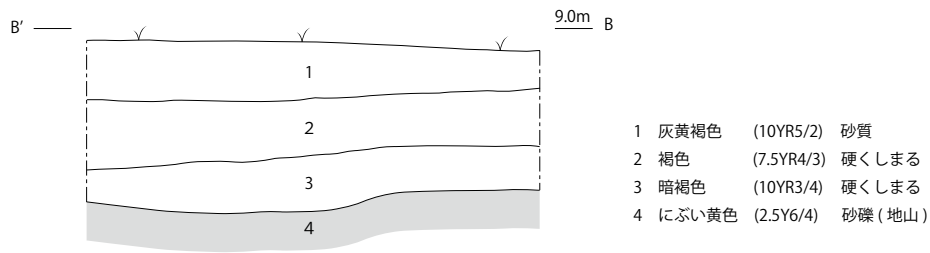


- 1 盛土 (10YR5/4)
- 2 暗褐色 (2.5Y5/2)
- 3 暗灰黄色 (7.5YR4/2)
- 4 灰褐色 (10YR3/2)
- 5 黒褐色 (10YR5/4)
- 6 黄褐色 (10YR5/4)
- 7 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)
- 8 にぶい黄褐色 (10YR6/4)
- 9 灰黄褐色 (10YR6/2)

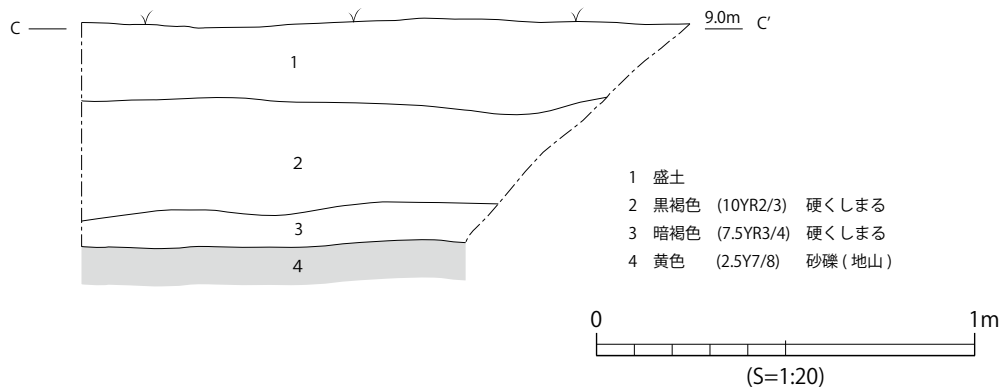
- 10 灰褐色 (7.5YR6/2)
- 11 オリーブ褐色 (2.5Y4/5)
- 12 褐灰色 (7.5YR6/1)
- 13 黒褐色 (10YR3/1)
- 14 黒褐色 (10YR2/3)
- 15 暗褐色 (10YR3/3)
- 16 極暗褐色 (7.5YR2/3)
- 17 黄灰色 (2.5Y4/1)
- 18 黒褐色 (7.5YR3/2)
- 19 黒褐色 (2.5Y3/2)
- 20 オリーブ黒色 (5Y3/1)
- 21 暗褐色 (10YR3/4)
- 22 褐色 (10YR4/6)
- 23 オリーブ黒色 (5Y3/1)
- 24 暗褐色 (10YR3/4)
- 25 黒褐色 (10YR2/3)
- 26 黒褐色 (10YR3/1)
- 27 黒褐色 (10YR3/2)
- 28 灰黄褐色 (10YR4/2)
- 29 暗灰黄色 (2.5Y4/2)
- 30 灰褐色 (7.5YR4/2)
- 31 褐灰色 (7.5YR4/1)
- 32 黄褐色・黄色・オリーブ褐色・褐色 (10YR7/8 - 2.5Y7/8・2.5Y4/6・7.5YR4/4)

第85図 下古志遺跡2区-1 土層図

西壁土層図



北壁土層図



第 86 図 調査区土層図

第 8 表 下古志遺跡 2 区主要遺構一覧表

遺構名	遺構の規模			挿図番号	写真図版番号	出土遺物	旧遺構名
	最大長	最大幅	深さ				
SD203	15	1.3	0.5	88	69.75	1	SD03
SD206	27	1.4	0.5	89.90	70.71	2.7	SD06
SD215	28	2.2	0.8	91.92	72.73	(8)	SD15
SD216	28	1.2	0.6	91.92	72.73	3..9.10.(8)	SD16
SD202	30	2.7	0.8	93.94	74.75	4 ~ 6.11 ~ 16	SD02
SD220	29	6.0	1.2	96.97	76 ~ 78	17 ~ 130	SD20
SD223	14	2.5	1.1	107.109	82.83	131 ~ 135.(150 ~ 154)	SD21 古
SD222	20	2.7	0.9	108.109	81.83	136 ~ 149.(150 ~ 154)	SD22
SD221	14	2.5	0.8	110	80.83	154 ~ 156	SD21 新
SK201	1.6	1.3	0.3	115	84	179	SK01
SX207	3.2	1.3	0.4	116	85	180 ~ 183	SX07
SB201	8.8 以上	2.1		123			SB01
SB202	6.3	4.2		124	86.87	233	SB02
SB203	4.8	3.3		124	86/87	234	SB03
SB204	4.3	2.7		125	86		SB04
SB205	5.0	3.0		125	86.87		SB05
SD218	15	2.4	0.4	126	88	235.236	SD18-3
SD219	6.6	2.4	0.6	127	89	237.238	SD19
SD209	一部	一部	0.4	128		240	SD09
SD208	一部	一部	0.3	128		241	SD08
SD211	7.5	0.7	0.2	129	90	245	SD11
SX216	3.1	2.7	0.5	130	91	239.242.243	SX16
SX218	1.1	1.1	0.6	131	91	244	SX18
SK203	1.2	0.7	0.4	132	92.93	231.232	Pit307
SD217	21	0.7	0.4	141	96		SD18-1
SD204	2.2	0.8	0.3	142	95		SD04

### 第3節 弥生時代・古墳時代の遺構と遺物

#### a) 弥生時代中期後葉の溝

調査区の南側から南端で確認した。東西方向や北東－南西方向に伸びる。いずれの溝も、土層の観察からは水の流れた痕を確認できなかった。

SD203（第88図） 調査区の南側、B19～D19に位置する。ほぼ東西方向に直線的に伸びる。SD202に先行し、西側でSD202に切られる。現状で長さ約15m、幅約1.3mであるが、SD202に切られる西側ほど幅が狭くなっており、0.4～0.5m程度である。深さは0.4～0.5mで、底面はほぼ平坦である。断面は浅いU字形・半円形である。土層は地山礫を含む黒褐色の土が中心（1.2層）で、底部付近に遺構掘削後に堆積したと考えられる土が堆積している（3層）。第94図により、SD203をSD202が切ることがわかる。遺物は弥生時代中期後葉の土器がわずかに出土した。1は甕の胴部下位の破片である。内外の調整はヘラミガキである。遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

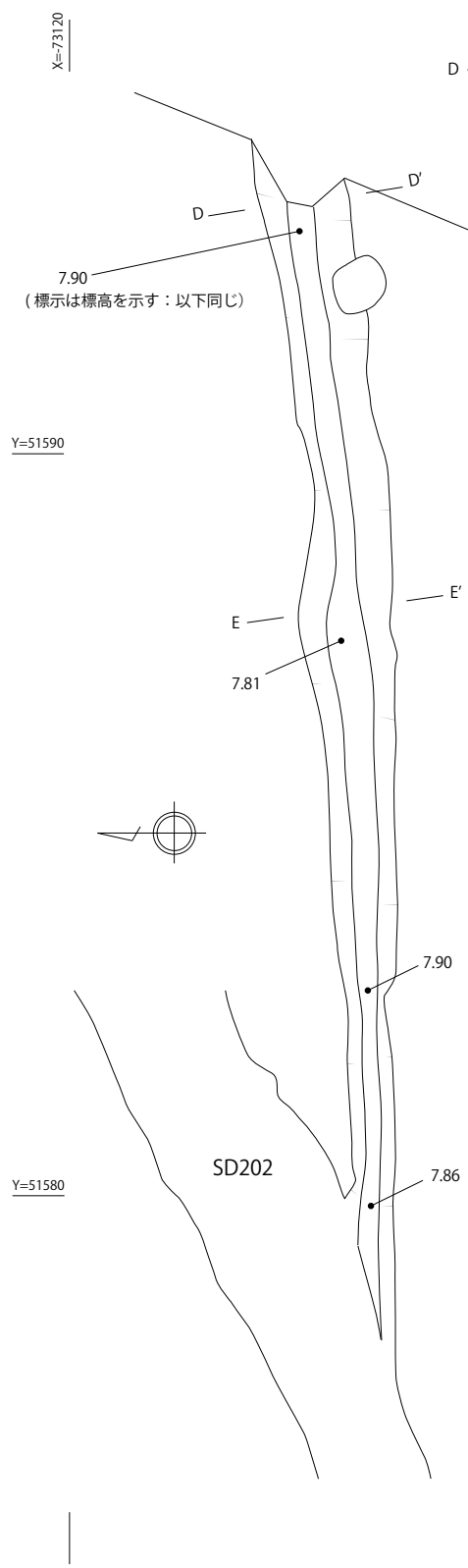
SD206（第89.90図） 調査区の南端、A20～D20に位置する。北東－南西方向に直線的に伸びる。後述するSD211を切る。現状で長さ27m、幅約0.5～1.4m、深さ0.5mである。幅は東側が広く、西側はやや狭い。底面は東側が高く、西側に向かって低くなっている。断面は逆台形で底面に平坦な部分が認められる。土層は暗褐色や黒褐色と行った黒色系の土である。遺物は弥生時代中期後葉の土器がわずかに出土した。2は広口壺の肩部である。刺突文とヘラ描の斜線文がある。7は甕である。これらの土器から、遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

SD215（第93.94図） 調査区の南側、B19～D19、A20、B20に位置する。北東－南西方向に伸びる。検出当初は平行するSD216とあわせて一つの溝と判断していた。わずかに屈曲して伸びる。現状で長さ約28m、幅約1.5～2.2m、深さ0.5～0.8mである。幅は東側が広く、西側はやや狭い。底面はほぼ平坦である。東壁IIの8層がSD216にもあること（第92図）から、SD215はSD216に先行する可能性がある。断面は浅いU字形・半円形である。土層は黒褐色であるが、中央の土層JJ1層（第92図）から、一度溝が埋まった後に再掘削が行われた可能性がある。遺物は弥生時代中期後葉の土器がわずかに出土した。8はSD216との間で出土した甕の肩部である。遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

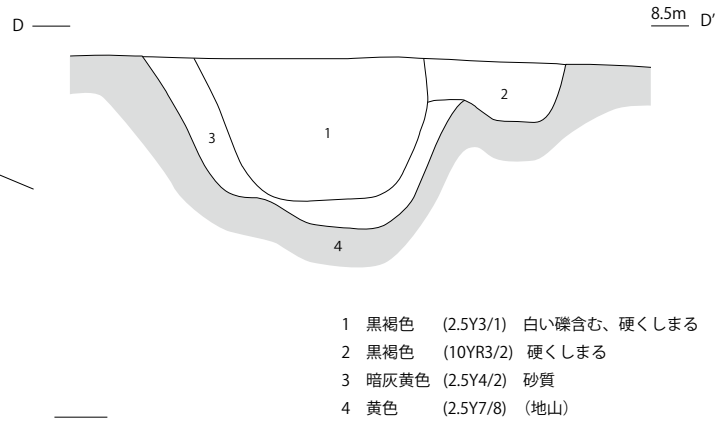
SD216（第91.92図） 調査区の南側、B19～D19、A20～D20に位置する。北東－南西方向に伸びる。SD215と平行し、0.2～1.2m離れた南側に位置する。わずかに屈曲して伸びる。現状で長さ約28m、幅約0.9～1.2m、深さ0.4～0.6mである。SD215より幅・深さがわずかに小さく、幅の広い部分と狭い部分の差も小さい。底面はほぼ平坦である。断面は浅いU字形・半円形である。土層は他の弥生中期後葉の溝とは異なり、上位に黄褐色、中・下位に暗褐色や黄褐色の土が堆積している。中央土層JJの4層（第92図）から、一度溝が埋まった後に再掘削が行われた可能性がある。遺物は弥生時代中期後葉の土器がわずかに出土した。3は広口壺の肩部である。櫛描直線文の間にヘラ描斜線文がある。9は壺の底部である。内面はヘラケズリであり、弥生後期まで下る可能性が



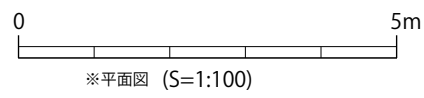
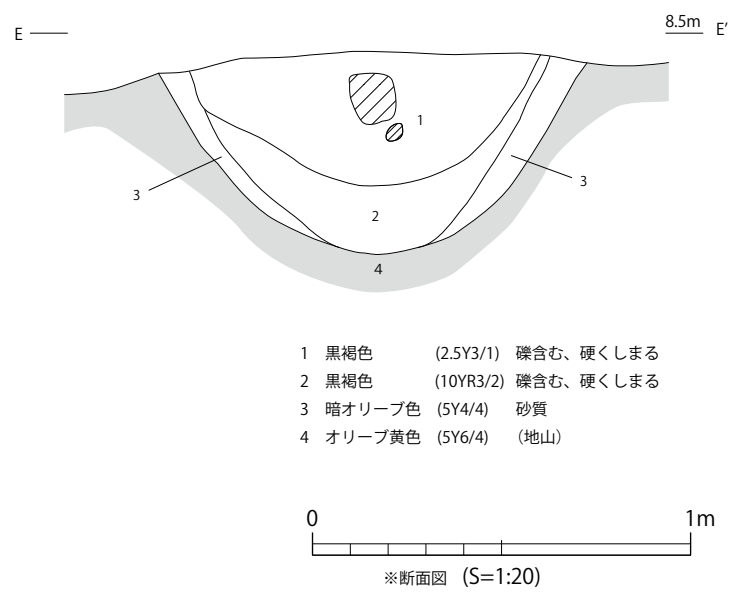
第 87 図 弥生・古墳時代の遺構



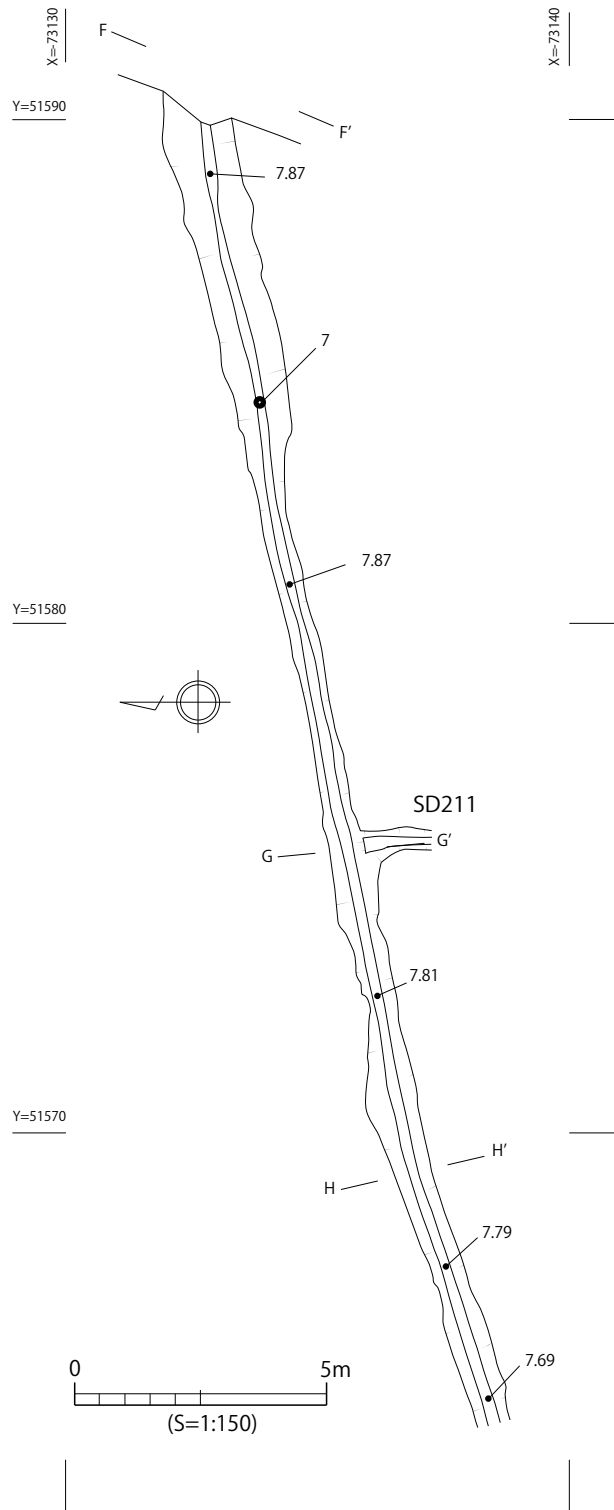
### 東側土層図



### 中央土層図

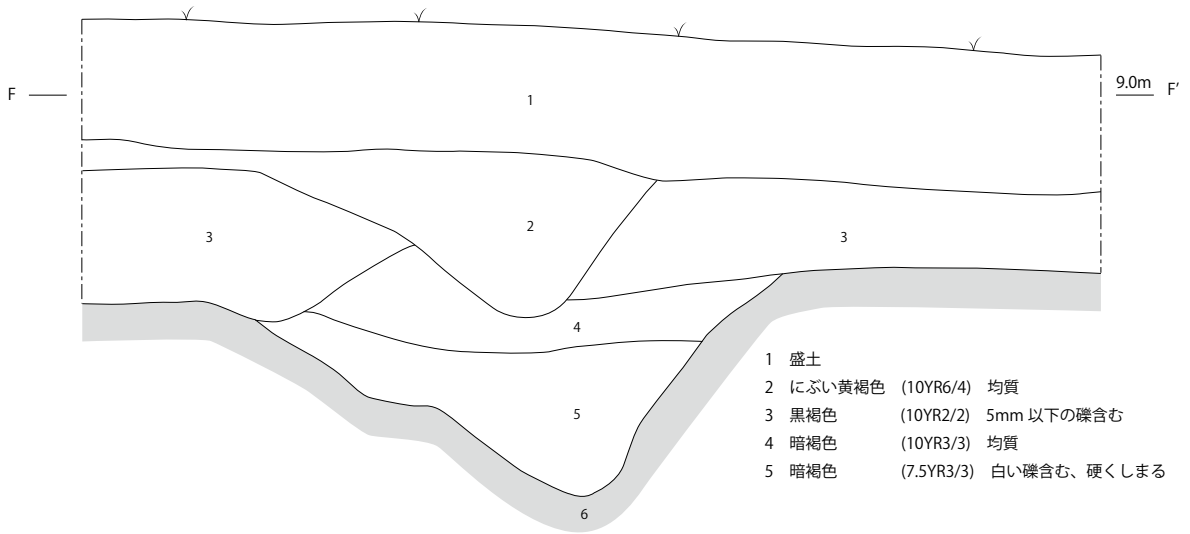


第 88 図 SD203 実測図

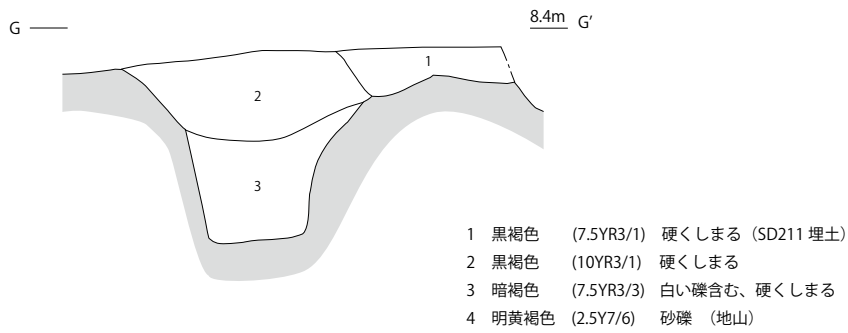


第 89 图 SD206 实测图 1

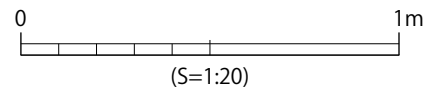
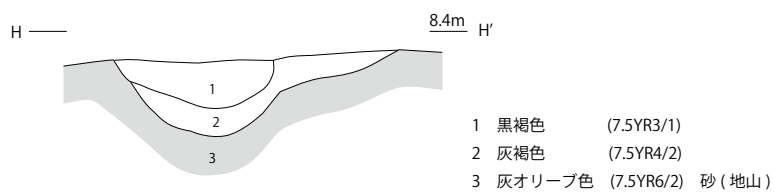
東壁



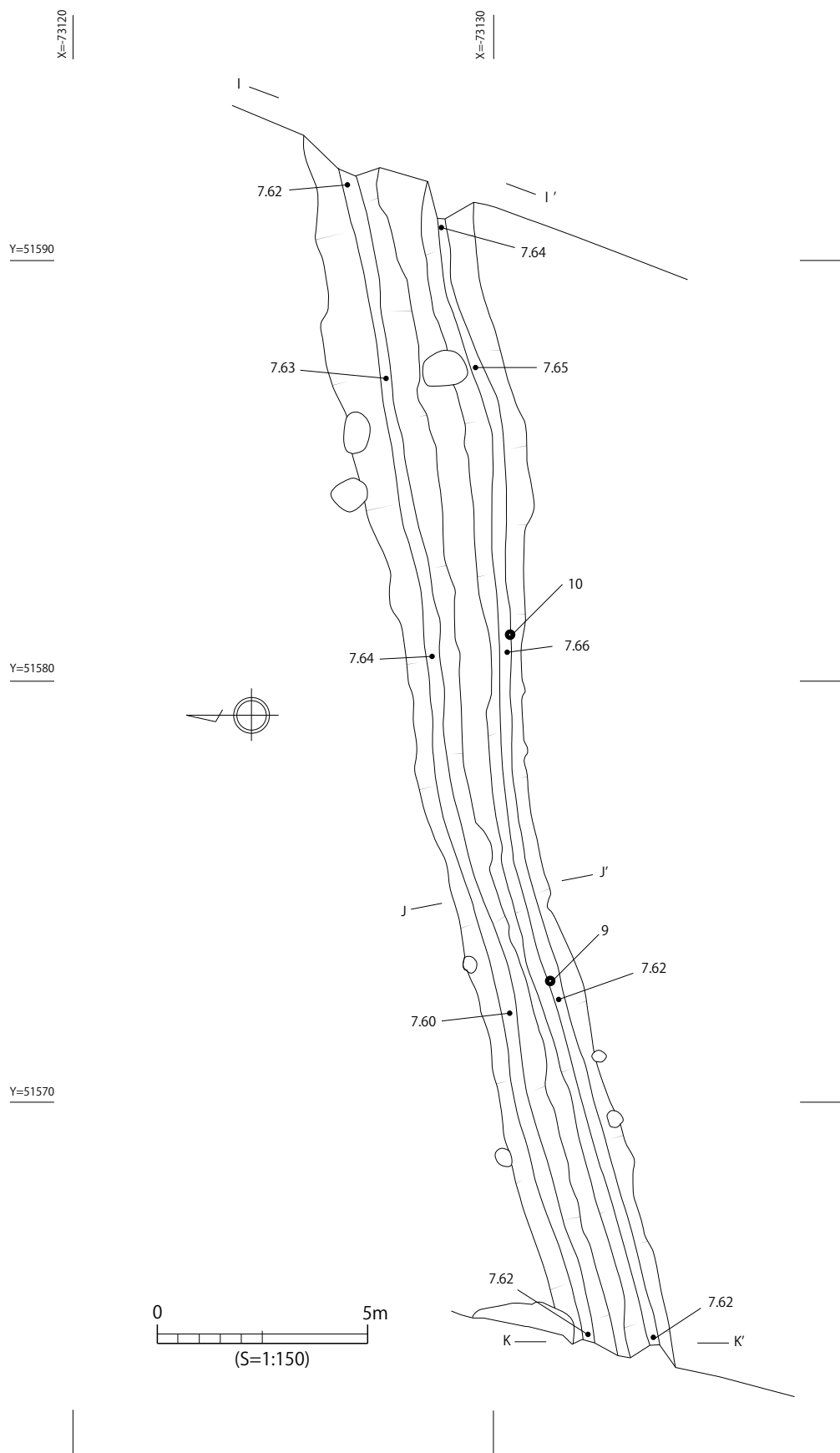
中央



南側



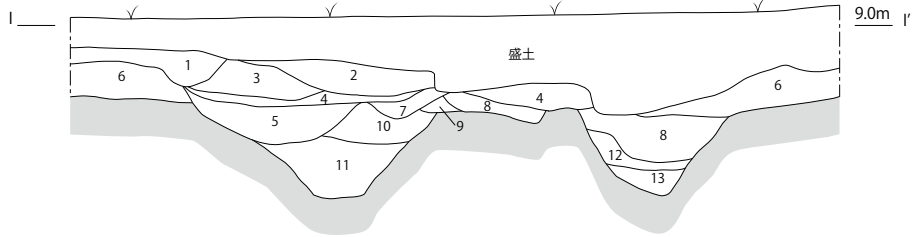
第 90 図 SD206 実測図 2



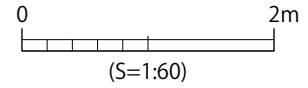
第91图 SD215·216 实测图1



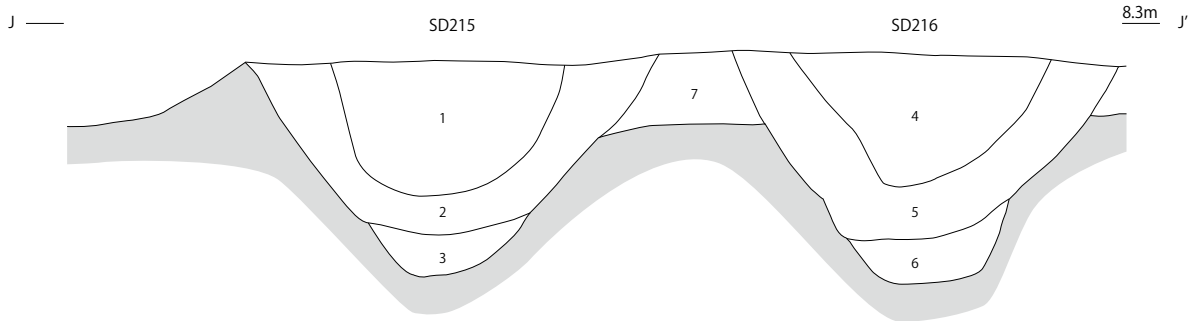
東壁



- |                           |                          |
|---------------------------|--------------------------|
| 1 オリーブ褐色 (2.5YR4/4) 硬くしまる | 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 硬くしまる |
| 2 褐色 (10YR4/4) 硬くしまる      | 9 褐色 (7.5YR4/3) 硬くしまる    |
| 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 硬くしまる    | 10 褐色 (10YR4/4) 硬くしまる    |
| 4 黒褐色 (10YR3/2) 硬くしまる     | 11 褐色 (7.5YR4/4) 硬くしまる   |
| 5 黒褐色 (10YR3/1) 硬くしまる     | 12 暗褐色 (7.5YR3/4) 硬くしまる  |
| 6 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘土含む   | 13 黄褐色 (10YR5/6)         |
| 7 黒褐色 (2.5Y3/1) 硬くしまる     |                          |

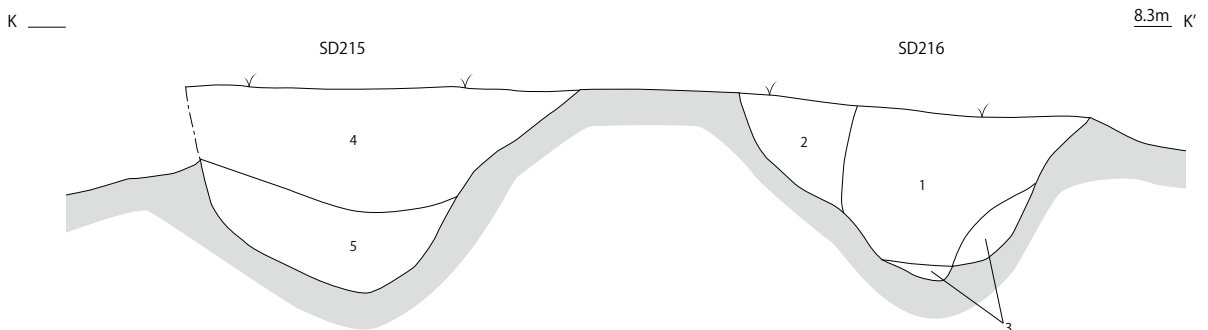


中央

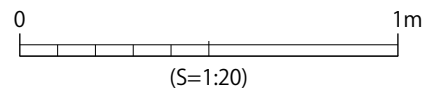


- |                             |
|-----------------------------|
| 1 にぶい褐色 (7.5YR5/4)          |
| 2 黒褐色 (2.5Y3/1) 白い礫含む、硬くしまる |
| 3 黒褐色 (10YR3/2) 白い礫含む、硬くしまる |
| 4 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質         |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 硬くしまる    |
| 6 暗褐色 (10YR3/4) 硬くしまる       |
| 7 褐色 (10YR4/6) 粘質           |

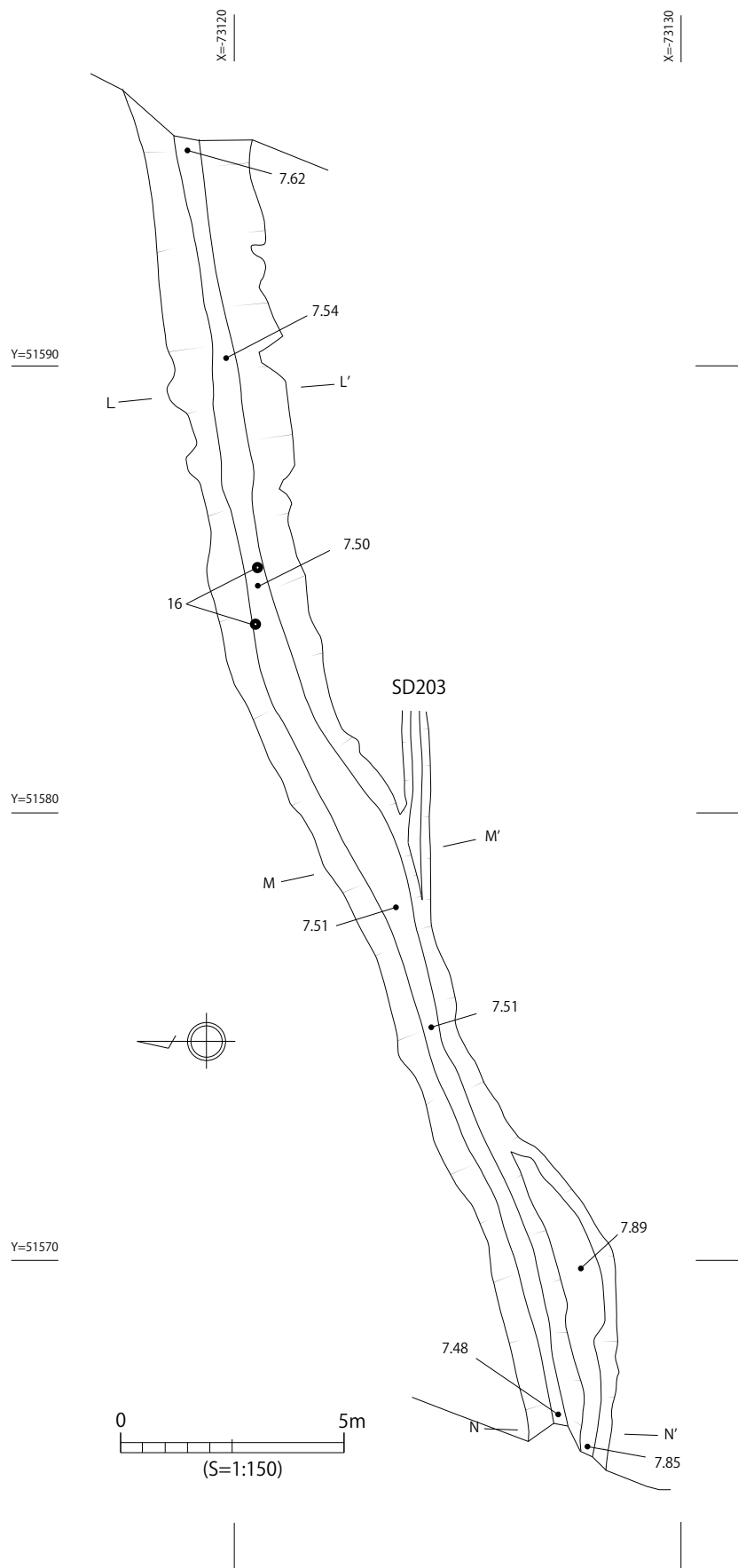
西壁



- |                          |
|--------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 硬くしまる |
| 2 暗褐色 (10YR3/4) 硬くしまる    |
| 3 暗褐色 (7.5YR3/4) 硬くしまる   |
| 4 黒褐色 (2.5Y3/1) 硬くしまる    |
| 5 黒褐色 (10YR3/2) 硬くしまる    |

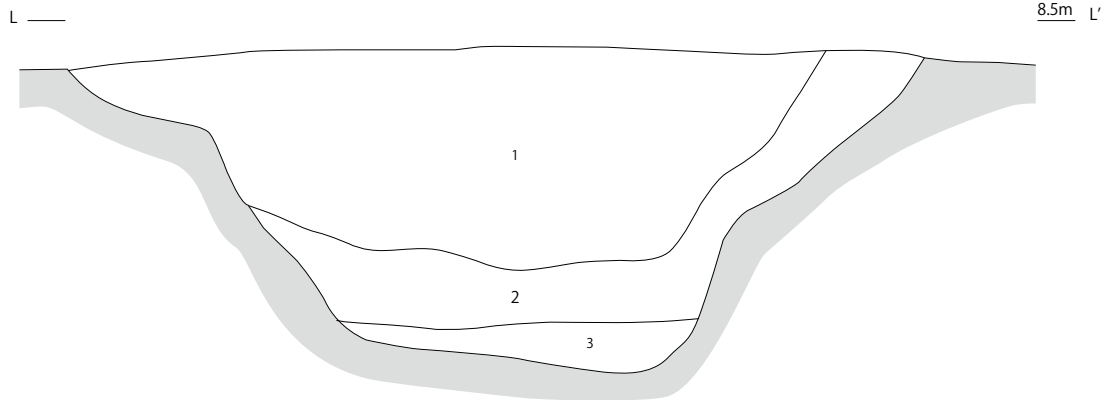


第 92 図 SD215・SD216 実測図 2



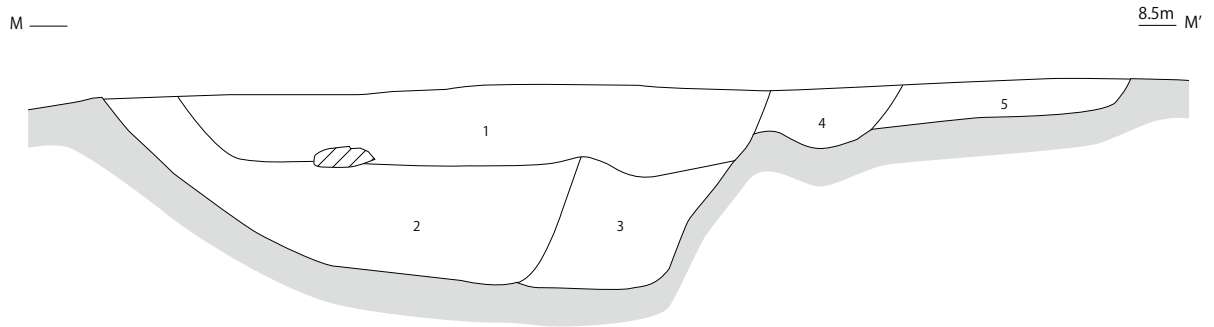
第 93 图 SD202 实测图 1

東側



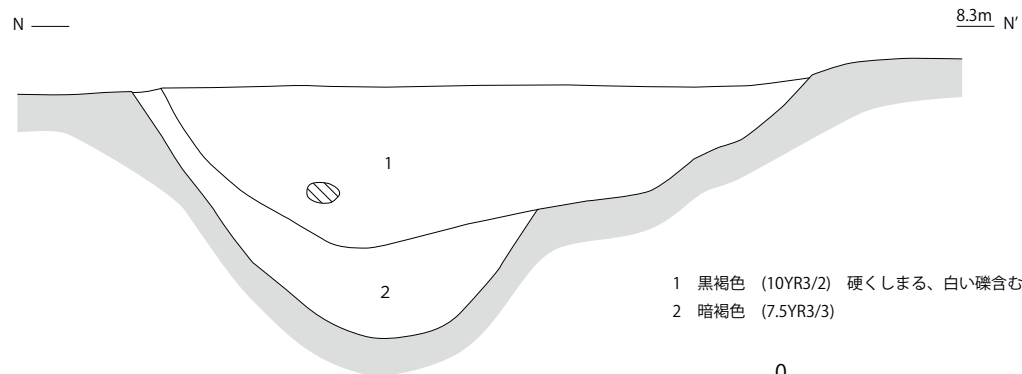
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 硬くしまる、白い礫含む
- 2 暗褐色 (7.5YR3/3)
- 3 暗褐色 (7.5YR3/4) とても硬くしまる

中央

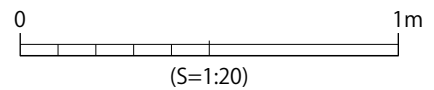


- 1 黒褐色 (10YR 3/2) 硬くしまる、白い礫含む
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 硬くしまる
- 3 褐色 (10YR4/4) 砂礫含む、水の流れた痕跡あり
- 4 灰褐色 (7.5YR4/2) 硬くしまる、白い礫含む (SD203 埋土)
- 5 暗褐色 (7.5YR3/4) (遺物包含層)

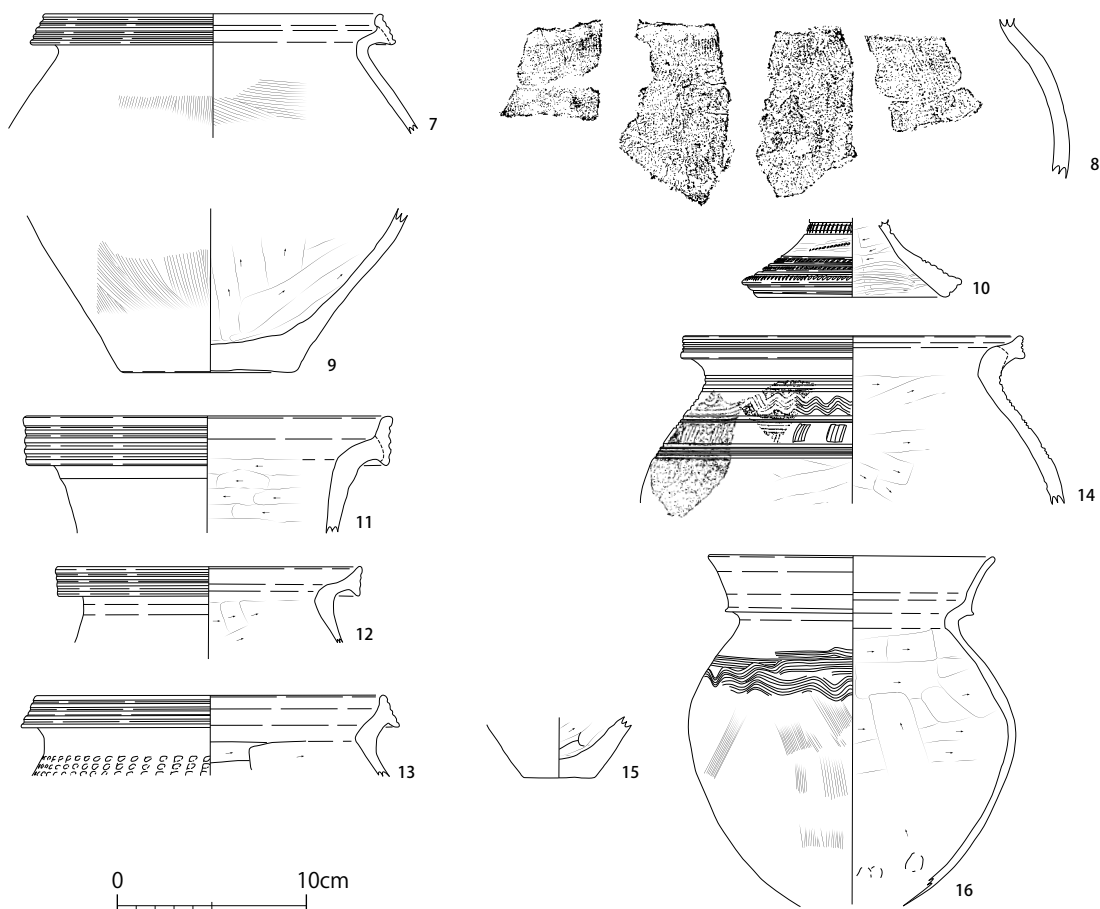
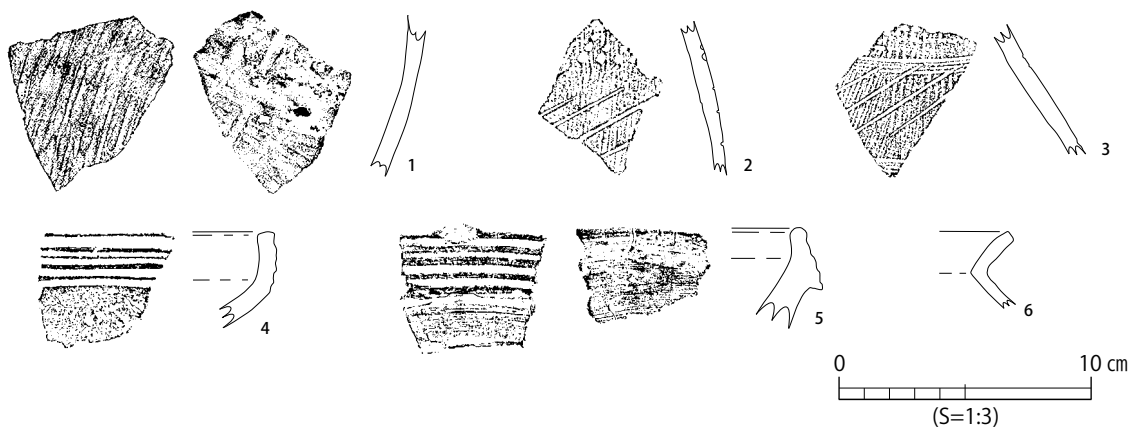
西側



- 1 黒褐色 (10YR3/2) 硬くしまる、白い礫含む
- 2 暗褐色 (7.5YR3/3)



第 94 図 SD202 実測図 2



第 95 图 SD203 · 206 · 215 · 216 · 202 出土土器实测图

第9表 SD203・206・215・216・202 出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/遺構	層位	口径	その他の寸法	残存率	形態・文様の特徴	色調	備考
1	95	100	弥生土器	甕	SD203					内外ヘラミガキ	外：浅黄 2.5Y7/4、内：浅黄 2.5Y7/3	IV 様式?
2	95	100	弥生土器	広口壺	SD206					列点文、ヘラ描斜線文、内面ナデ	外：オリーブ黒 10Y3/1、内：灰白 10YR8/2	IV 様式
3	95	100	弥生土器	広口壺	SD216					列点文、櫛描直線文、ヘラ描斜線文、内面ナデ	外：にぶい黄橙 10YR6/3、内：にぶい黄橙 10YR7/4	IV 様式
4	95	100	弥生土器	高坏	D18/SD202					凹線文 5 条	外：にぶい橙 7.5YR6/4、内：にぶい黄橙 10YR7/4	IV-2 ~ V-1
5	95	100	弥生土器	甕	D18/SD202					凹線文 4 条	外：にぶい黄橙 10YR7/4、内：にぶい橙 10YR7/3	V-1 ~ 2、内傾 3
6	95	100	弥生土器?	甕	D18/SD202					頸部く字	浅黄橙 10YR8/4	土師器の可能性
7	95	100	弥生土器	甕	C19/SD206		(17.8)		10	凹線文 4 条	外：にぶい黄橙 10YR7/4、内：灰黄褐 10YR5/2	IV-2
8	95	100	弥生土器	甕	SD215.216						外：淡黄 2.5Y8/3、内：暗青灰 5B4/1	IV 様式
9	95	101	弥生土器	壺	B20/SD216	上		底径 9.2	現存部完存		黄褐 2.5Y5/3	弥生後期
10	95	101	弥生土器	高坏	C20/SD216			底径 10.1	現存部完存	凹線文、刻み目、丁寧なヘラミガキ	にぶい黄橙 10YR7/3	IV-2
11	95	100	弥生土器	壺	D18/SD202		(19.6)		25	凹線文 4 条	浅黄橙 7.5YR8/4	V-2
12	95	100	弥生土器	甕	C18/SD202		(16.0)		10	凹線文 3 条	外：黒褐 10YR3/1、内：にぶい黄褐 10YR5/3	V-1、直立 3
13	95	100	弥生土器	甕	SD202		(18.6)		15	凹線文 4 条、刺突文	橙 5YR7/6	V-1、内傾 4
14	95	100	弥生土器	甕	D18/SD202		(18.0)		10	櫛描文 4 条、胴部に櫛描直線文と波状文	外：にぶい黄橙 10YR7/3、内：浅黄橙 10YR8/4 ~ 灰黄褐 10YR4/2	V-2、直立その他
15	95	100	弥生土器	甕	D18/SD202			底径 (3.8)	75	底部付近は被熱	にぶい黄橙 10YR7/3	弥生後期
16	95	101	古式土師器	甕	C18.C19/SD202		14.9	胴径 (17.3)	口縁部完存	直線文と波状文、煤付着	外：黒褐 10YR3/2、内：にぶい黄橙 10YR6/4	草田 5 期

ある。10 は高坏の脚部である。凹線の間刻み目を入れている。以上の土器から、遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

b) 弥生時代後期～古墳時代前期の溝

調査区の南側で確認した。東西方向や北東—南西方向に伸びる。土層の観察から、水の流れた痕を確認できるものがあった。なお、以下の文章では、弥生土器を『弥生土器の様式と編年』に従って V-1 ~ V-3 様式と記述するとともに、その時期以降は草田編年を用いて草田 4 ~ 7 期と記述することにする。また、庄内式土器を土師器とする年代観を採用することから、庄内式土器に併行する草田 5 期から土師器として、草田 5 ~ 7 期の土師器をその時期以降の古墳時代の土師器や奈良・平安時代の土師器と区別して「古式土師器」と呼称する。

SD202 (第 93.94 図) 調査区の南側、C18、D18、A19 ~ D19 に位置する。北東—南西方向に伸びる。SD203 に後出し、SD203 を切る。長さ約 30 m、幅 2.3 ~ 2.7 m、深さ約 0.5 ~ 0.8 m である。ゆるい S 字形に屈曲している。溝の西側は幅が広がっており、ステップ状の部分がある。底面は東側が高く、西側が低い。断面は逆台形である。土層は黒褐色や暗褐色の土で、水平に堆積

している部分があることから、徐々に堆積したと考えられる。後述する溝とは異なり、水の流れた痕を確認することはできなかった。

遺物は弥生時代後期の土器や古墳時代前期初頭の古式土師器が出土した。4は高環の坏部である。外面に5条の凹線文を施す。中期後葉まで遡る可能性がある。11は壺である。やや外開きの頸部から口縁部で大きく屈曲する。12と13は頸部がやや厚めになり、その下からヘラケズリをしている。14は肩部に櫛描直線文を施し、その間に波状文や縦位の直線文を施す。口縁部の施文も櫛描文であり、やや特異な印象を受ける。5はやや内傾する口縁部に4条の凹線文を施す。6はく字形の口縁部であり、口縁部端部には面を持つ。弥生中期の甕と考えたが、古式土師器の甕の可能性もある。16は古式土師器の甕である。胴部最大径は胴部の中程にあり、口縁部は大きく外反する。肩部外面には直線文の後に波状文を施しており、胴部を3周している部分もある。口縁部下の稜は斜め下方に鋭く突出し、口縁端部は丸く収める。4はIV-2～V-1様式、12、13はV-1様式、5、11、14はV-2様式、16は草田5期の特徴を持つ。以上の土器から、遺構の時期は弥生時代後期初頭に掘削され、古墳時代前期初頭まで溝としての機能があったと考えられる。

SD220(第96.97図) 調査区の北側、C15～F15、C16、D16に位置する。北東—南西方向に伸びる。長さ約29m、幅3.8～6.0m、深さ1.2mであり、他の溝に比べて幅・深さ共に大きい。ほぼ直線的に伸びる。東西の端に比べて中央部分の幅が広い。底面はほぼ平坦である。底面からは湧水があり、常時ポンプで排水をしなければ作業ができないほどであった。断面は逆台形である。土層は検出・掘削時に上中下に大別した(128頁)。上層は暗褐色や黒褐色のやや粘質の土で、弥生土器や古式土師器に加えて奈良・平安時代の土師器・須恵器を含む。中層は褐色や黄褐色を基調とした土で、地山礫を多く含む。溝の両側から土が流入していたことを示すが、埋め戻しが行われたような痕を見いだすことはできなかった。土層の堆積は特に西側土層QQ'(第97図)で顕著であるが、数度の再掘削を行っている。一方東側のOO'やPP'では、レンズ状の堆積を示している部分が多く、自然堆積のような状況であり再掘削を行っていないようである。中層から最も多くの土器が出土した。下層は黄灰色や褐灰色の砂質の土層で、水性堆積であることを確認した。湧水または流水のある環境で堆積したことがうかがえる。土器は上位・中位に比べて少なかった。

土層から想定すると、SD220が掘削された当初は湧水または流水のある状態であったのが、周辺からの土砂の流入で次第に埋まっていき、部分的に数度の再掘削を行い、幅を狭めながら溝としての機能を維持していたのが、古墳時代前期には溝の機能が失われ、奈良・平安時代まで窪地になっていた状況であったと考えられる。

SD220から出土した土器の量は多く、2区出土弥生土器の約7割、古式土師器の約9割をしめる。

弥生土器を第100～102図に示した。17は口縁部の下に2条の凹線文がある。広口壺の口縁部と考えられる。18は口縁部の下に6条の凹線文があり、頸部は大きく屈曲すると考えられる。この2点の時期は弥生中期後葉である。SD220から出土した中期後葉の土器はこの2点であり、他は後期である。

20～29は壺である。20は口縁部を斜め方向の上下に拡張する。21は大形の壺であり、口縁部と頸部に凹線文がある。22は肩部のみの破片であるが、貝殻直線文の間に貝殻刺突文を施す。直線文は2～3回施文して7～8条にしている。胎土は他に比べ粗い。23も同様に口縁部と頸部

Y=51620

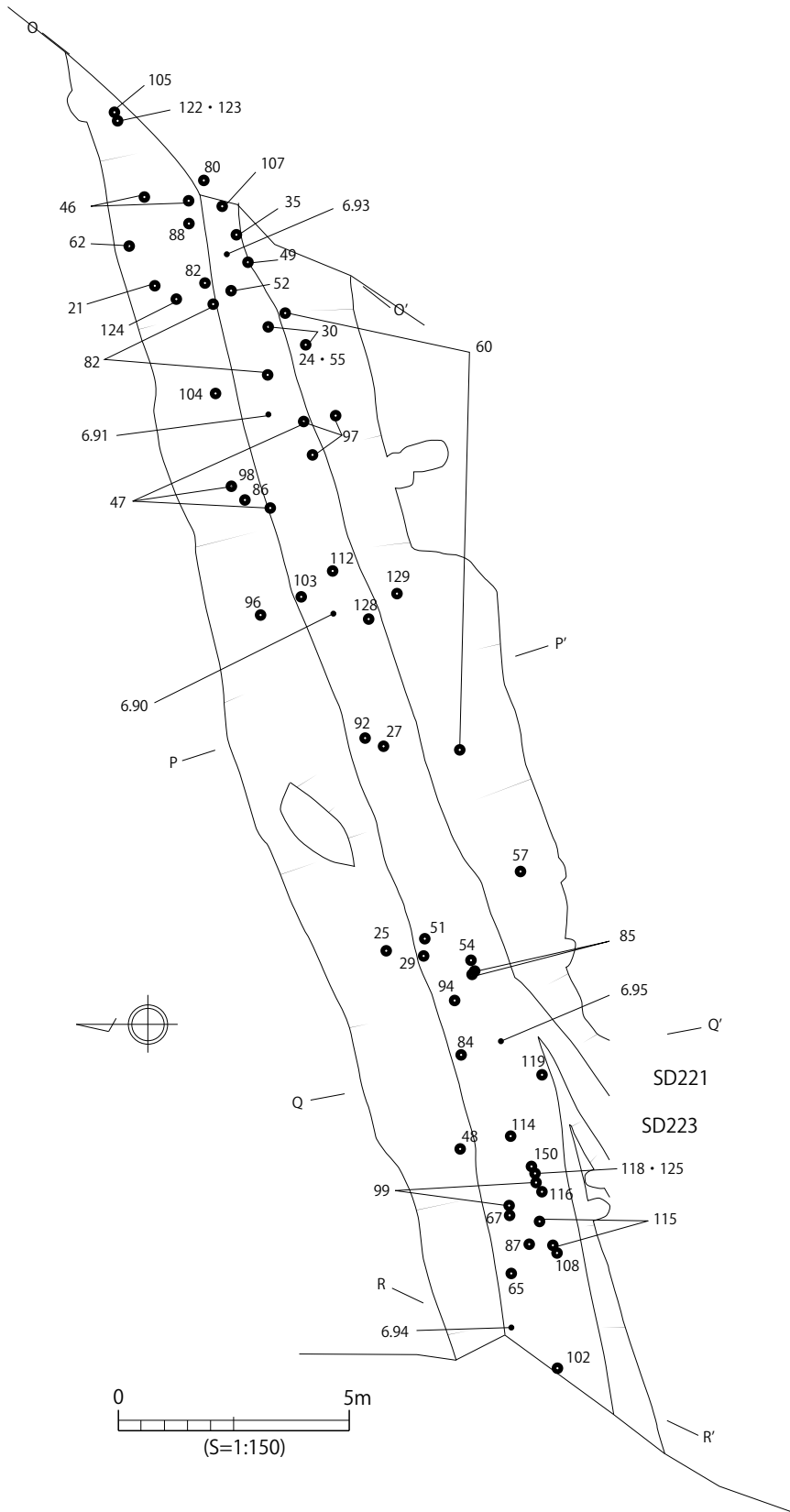
X=73080

X=73090

Y=51610

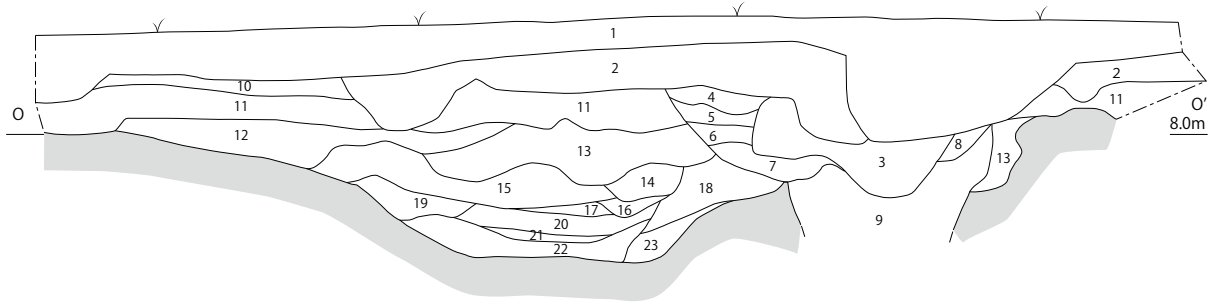
Y=51600

Y=51590

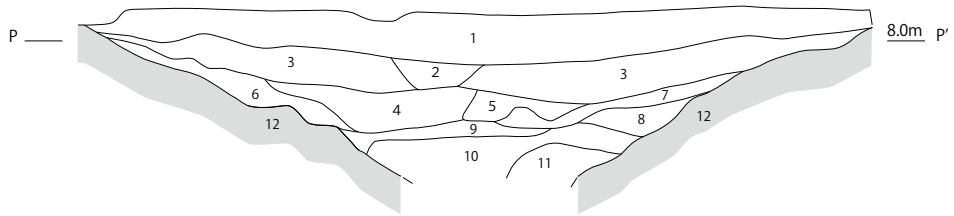


第 96 图 SD220 实测图 1

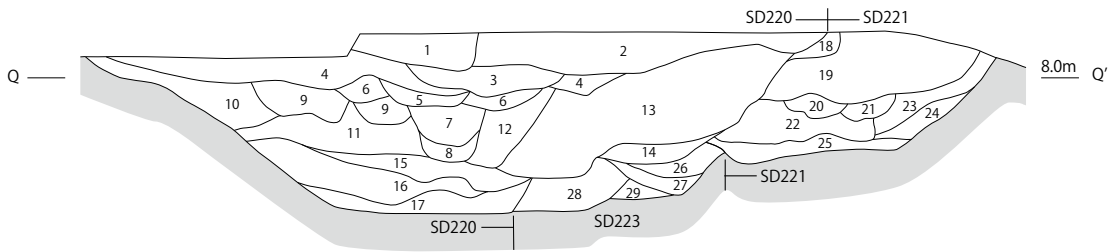
東壁



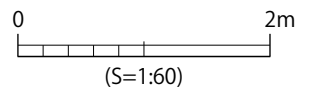
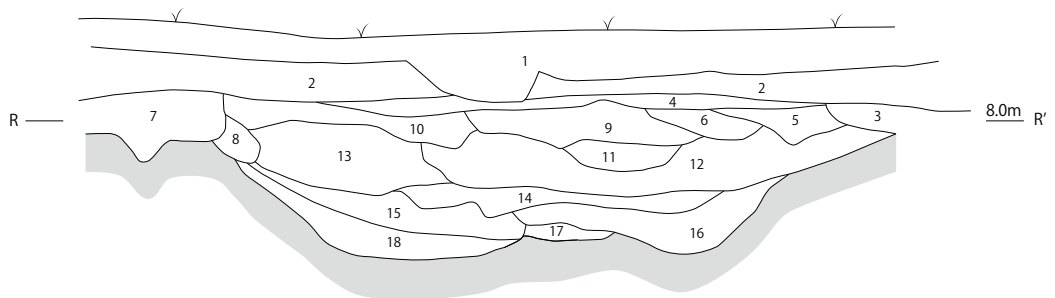
東側



西側



西壁



第 97 図 SD220 実測図 2



## OO' SD220 東壁土層

土層番号	色調		備考	
1	盛土			
2	暗褐色	10YR3/4	濁った感じ	第2層
3	褐灰色	7.5YR4/1		遺構
4	褐色	7.5YR4/3	地山礫含む	遺構
5	灰褐色	7.5YR4/2	砂質、地山礫含む	遺構
6	暗褐色	7.5YR3/3	砂質、地山礫含む	遺構
7	褐灰色	5YR4/1	砂質	遺構
8	黒褐色	5YR3/2	砂質	遺構
9	暗赤褐色	5YR3/3	砂質	遺構
10	黒褐色	7.5YR3/1		第3層
11	黒褐色	10YR3/1		第3層
12	暗褐色	7.5YR3/3	砂質、地山礫多く含む	上層
13	黒褐色	7.5YR3/2	砂質、地山礫多く含む	上層
14	暗赤褐色	5YR3/3	砂質、地山礫多く含む	中層
15	にぶい赤褐色	5YR4/3	砂質、地山礫多く含む	中層
16	にぶい褐色	7.5YR5/3	砂質、地山礫多く含む	中層
17	オリーブ褐色	2.5Y4/4	砂質、地山礫多く含む	中層
18	極暗褐色	7.5YR2/3	砂質、地山礫多く含む	下層
19	黄褐色	2.5Y5/4	砂質、地山礫多く含む	下層
20	明褐色	7.5YR5/6	地山礫多く含む、水性堆積	下層
21	にぶい橙色	7.5YR6/4	地山礫多く含む、水性堆積	下層
22	にぶい褐色	7.5YR5/4	地山礫含む、水性堆積	下層
23	暗褐色	7.5YR3/4	地山礫含む	下層

## QQ' SD220 西側土層

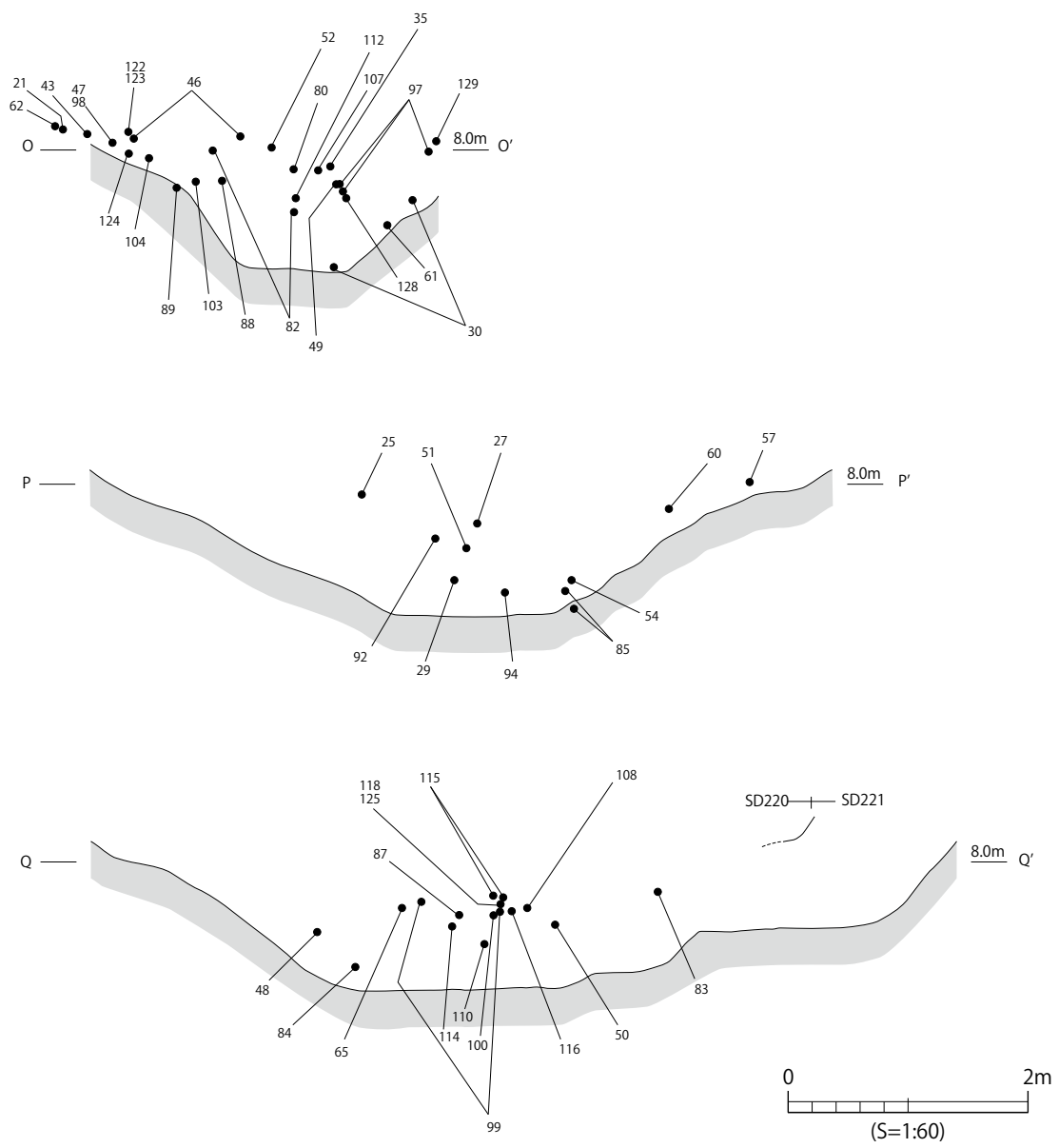
土層番号	色調		備考	
1	暗灰黄色	2.5Y4/2	粘質	第3層
2	オリーブ黒色	5Y3/2	地山礫含む	第3層
3	オリーブ黒色	5Y3/1	地山礫含む	上層
4	黄灰色	2.5Y4/1		上層
5	オリーブ黒色	5Y2/2		上層
6	灰褐色	5YR4/2	地山礫含む	上層
7	褐色	7.5YR4/4	地山礫含む、大きい礫あり	中層
8	にぶい黄色	2.5Y6/3	粘質	中層
9	黄褐色	2.5Y6/3	砂質	中層
10	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質	中層
11	褐色	10YR4/6	砂質	中層
12	褐色	10YR4/4	砂質	中層
13	黄褐色	2.5Y5/4	砂質、地山礫含む	中層
14	暗オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂質、地山礫含む	下層
15	明黄褐色	10YR6/8	砂質、水性堆積	下層
16	黄褐色	10YR5/6	砂質、水性堆積	下層
17	褐灰色	10YR5/1	砂質、水性堆積	下層
18	オリーブ褐色	2.5Y4/4	地山礫含む	SD221
19	黒褐色	2.5Y4/2	地山礫含む	SD221
20	オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂質	SD221
21	明黄褐色	2.5Y6/6	砂質、地山礫含む	SD221
22	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	砂質、地山礫含む	SD221
23	黒褐色	10YR3/2	砂質、地山礫含む	SD221
24	暗褐色	10YR3/4	砂質	SD221
25	褐灰色	10YR4/1	砂質、地山礫含む	SD221
26	オリーブ黒色	5Y3/2	砂質	SD223
27	暗灰黄色	2.5Y5/2	砂質、水性堆積	SD223
28	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質	SD223
29	褐色	7.5Y4/4	砂質、水性堆積	SD223

## PP' SD220 東側土層

土層番号	色調		備考	
1	黒褐色	10YR2/2	やや粘質	上層
2	黒褐色	10YR2/3	砂質、地山礫含む、大きな礫あり	中層
3	黄褐色	2.5Y5/4	砂質、地山礫含む	中層
4	灰黄褐色	10YR4/2	砂質、地山礫含む	中層
5	にぶい黄橙色	10YR6/3	砂質	中層
6	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質、水性堆積	中層
7	灰黄褐色	10YR5/2	砂質	中層
8	橙色	7.5YR6/8	砂質	中層
9	にぶい黄橙色	10YR6/4	砂質、水性堆積	下層
10	灰黄褐色	10YR6/2	砂質、水性堆積	下層
11	褐灰色	10YR5/1	砂質、水性堆積	下層
12	黄色	2.5Y8/6	砂質	地山

## RR' SD220 西壁土層

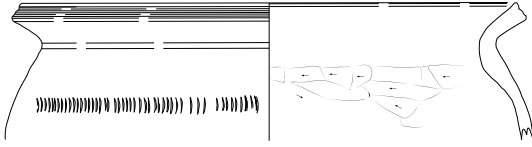
土層番号	色調		備考	
1	盛土			
2	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	粘質	
3	暗褐色	7.5YR3/4	硬くしまる	遺構
4	暗褐色	10YR3/4	硬くしまる	第3層
5	暗褐色	10YR3/3	硬くしまる	遺構
6	にぶい黄褐色	10YR4/3	硬くしまる	遺構
7	褐色	10YR4/4	硬くしまる	遺構
8	暗褐色	7.5YR3/4	硬くしまる、地山礫含む、砂質	遺構
9	黒褐色	2.5Y3/1	硬くしまる、地山礫含む	上層
10	オリーブ褐色	2.5Y4/4	硬くしまる、地山礫含む、砂質	上層
11	褐色	10YR4/6	硬くしまる、地山礫含む、砂質	中層
12	黄褐色	10YR5/6	硬くしまる、地山礫含む、砂質	中層
13	にぶい黄褐色	10YR5/3	硬くしまる、地山礫含む、砂質	中層
14	明黄褐色	10YR6/8	水性堆積、砂質	下層
15	黄褐色	2.5Y5/6	水性堆積、砂質	下層
16	黄灰色	2.5Y5/1	水性堆積、砂質	下層
17	暗灰黄色	2.5Y5/2	水性堆積、砂質	下層
18	褐灰色	10YR5/1	水性堆積、砂質	下層



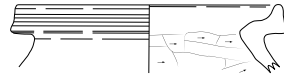
第 98 図 SD220 遺物出土状況図

## 内傾

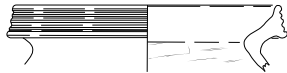
内傾 1 類：口縁帯の厚さが頸部の幅と同程度で、上下または上方に短く拡張するもの。



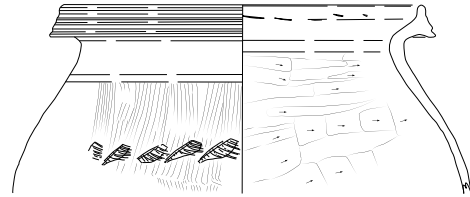
内傾 2 類：口縁帯が上方のみに拡張するもの。



内傾 3 類：口縁帯が上方に拡張し、下方へもわずかに拡張するもの。

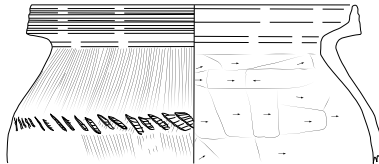


内傾 4 類：口縁帯が上下に拡張し、断面が T 字をしめすもの。

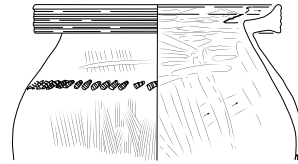


## 直立

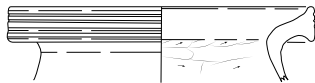
直立 1 類：口縁帯が上方のみ拡張するもの。



直立 2 類：口縁帯が上方に拡張し、下方へもわずかに拡張するもの。



直立 3 類：口縁帯が上下に拡張するもの。



## 外反

外反 1 類：口縁部が外反するもの。



外反 2 類：口縁部が大きく外反するもの。



第 99 図 甕口縁 分類図

に凹線文があるが、口縁部の形が異なる。24 は頸部が短く、屈曲して口縁部へ至る。25 は口縁部に貝殻直線文、肩部に貝殻波状文がある。27 も同様の特徴があるが、口縁部の貝殻直線文は、口縁部の中程にヨコナデの部分がある。肩部には貝殻直線文と波状文があるが、波状文は幅が狭く、途中でピッチが変わる。26 の頸部には波状文があるが、貝殻や櫛描原体ではなく指で浅く施したような跡がある。28 は口縁部下の稜の部分に直線文が残っている。29 は壺の底部である。薄く煤が付着しているが、外面を丁寧にヘラミガキしているので壺と判断した。壺の時期は、20～22 が V-1 様式、29 は V-1～2 様式、23、24 は V-2 様式、25 は V-3 様式、28 は草田 4 期と考えられる。26、27 は V-3 様式から草田 4 期まで下る可能性がある、

19、30～56 は甕である。ここで、弥生土器の甕の分類を行い、その指標を提示する。分類は甕の各部位の特徴や文様の変遷に着目すべきであるが、肩部より上位しか遺存していない資料が多いため、口縁部の特徴で分類を行う。

甕の口縁部に着目し、口縁帯が内傾するもの、直立するもの、外反するものに三大別する。次に口縁帯の幅や拡張する方向によって細別する（第 99 図）。

内傾 1 類 口縁帯の厚さが頸部の幅と同程度で、上下または上方に短く拡張するもの

内傾 2 類 口縁帯が上方のみに拡張するもの

内傾 3 類 口縁帯が上方に拡張し、下方へもわずかに拡張するもの

内傾 4 類 口縁帯が上下に拡張し、断面が T 字形をしめすもの

直立 1 類 口縁帯が上方にのみ拡張するもの

直立 2 類 口縁帯が上方に拡張し、下方へもわずかに拡張するもの

直立 3 類 口縁帯が上下に拡張するもの

外反 1 類 口縁部が外反するもの

外反 2 類 口縁部が大きく外反するもの

これまでの研究によって、口縁部は内傾→直立→外反へと変遷することが判っている（松本 1992）。口縁帯への施文との関係は、内傾 1～4 類、直立 1～3 類は凹線文がほとんどであるのに対し、外反 1、2 類は凹線文よりも櫛描／貝殻直線文が多く、外反 2 類ではほとんどが櫛描／貝殻直線文である。また、外反 2 類には直線文を施した後にナデ消すものがあり、時期的な特徴を示すと考えられる。

19 は内傾 1 類である。内傾 1 類の甕は口径の復元できないような破片が中心である。30 は内傾 4 類である。内傾 4 類はやや肩が張り、頸部が曲線的で頸部のやや下からケズリ調整をするものがあり、頸部をやや厚く残すものが多い。31～33 も口縁部のみの破片であるが同様の特徴を持つ。34 は内傾 2 類である。頸部を厚く残すが、頸部の屈曲が強くなることにあわせて内面の稜が顕著になる。35 や 36 は、口縁部の形態は異なるが頸部内面に明確な稜をもち、その下をケズリ調整する特徴は同じである。37 は直立 2 類である。38、39 は直立 1 類で、口縁部が先細りに上方へ伸びる。41 の凹線文は上から一本目が深く、三本目が浅い。42～45 は口縁部が直立する。45 は凹線文を一部ナデ消している。46～54 は口縁部が外反するものであり、ほとんどが外反 2 類である。46 は口縁部に貝殻直線文がある。原体幅は約 1.5cm で凹凸の明瞭な直線文である。47

1 口縁部の文様は「擬凹線文」と記述されることが多かったが、文様の原体には貝殻と考えられるものがあるので、原体が貝殻のものは「貝殻直線文」、貝殻以外と考えられるものは「櫛描直線文」と記述した。

は外反が弱く外反1類に分類したが、貝殻直線文は5～6条が一単位であり、直線は若干上下する。48～50は大形の甕であり、口縁部に多条の直線文がある。51は頸部に貝殻直線文と押引文があるが、直線文は二単位あり、貝殻を強く器壁へ当てている。押引文は上下する。磨滅しているが、口縁部はナデ消しの可能性がある。52、53は口縁部の上側、54は口縁部の下側をそれぞれナデ消している。55、56は甕の底部である。55の外面の調整がヘラミガキである。56の外面の調整は丁寧なナデとハケである。ハケの原体は幅が狭い。

甕の時期は30～39がV-1様式、55、56がV-1～2様式、40～45がV-2様式、46～50がV-3様式、51～54はナデ消しがあることからV-3様式から草田4期まで下る可能性がある。

57～60は高環である。57と58はやや外湾する坏部から屈曲して口縁部へ短く伸びる。口縁部には3条の凹線文がある。口縁部と坏部の境は稜がある。内外面の調整はヘラミガキであり、器壁は平滑である。58の坏部の内面は円盤充填であるが、内面には脚部の方から棒状工具で刺突をした痕が脚柱部の形に沿って円形に付いている。59は坏部に屈曲があり、さらに口縁部で大きく屈曲し、外面に3条の凹線文がある。被熱しており外面の調整は不明である。60は57や58の脚部になると考えられる。脚柱部は厚手で、稜の下をつまんで脚端部を作り出している。57、58、60はV-1様式、59はV-2様式と考えられる。

61、62、70、71は鼓形器台である。61の文様は凹線文である。受部内面はナデ調整である。62、70、71はいずれも櫛描直線文が10条以上ある。61はV-2様式、62、70、71はV-3様式と考えられる。壺や甕の出土量に対して、高環や鼓形器台の出土量は非常に少なく、図示しているものが大部分である。

63は胴の張らない体部で、頸部が厚い。口縁部は短く上方へ伸びるが無文である。頸部内面の調整はハケではなく貝殻の可能性がある。鉢と考えられる。67～69は鉢の破片である。67は口縁部を拡張しない。胴部外面の調整はタテハケである。68は外面に貝殻による3条の沈線と曲線文を施す。69は刺突による羽状文を施す。68、69は胴部片のみであるが、装飾壺の可能性がある。64、65は台部である。65は内面の調整はケズリであるが厚手である。66は口縁部のみの破片であるが、3条の凹線文の上に波状の沈線がある。壺の口縁部の可能性がある。72は3点とも同一の文様である。土器の向きは内面のケズリの方向を横にして合わせた。外面は細いヘラ状の工具で斜格子状の文様を描いている。72aと72b、72cでは斜格子状文様の間隔が異なるが、3点とも同一個体の可能性が強い。内面がケズリ調整であることから後期と考えられるが、器種・器形共に不明である。

73～76は赤彩のある土器である。73は口縁部の破片である。外面と口縁部内面に赤彩がある。壺の口縁部と考えられる。74は口縁部が肥厚する。外面を赤彩する。75は胴部片で、内外を赤彩する。76は底部である。外面と底部を赤彩する。粗い胎土であるにもかかわらず赤彩している点が注目される。77、78は小形の土器である。77は口縁部で屈曲して外反する。78の口縁部は屈曲しない。これらの小形の土器は、器形の類似から漆採集容器の可能性がある。79は口縁部の破片である。端部で厚くなり、内面をヘラケズリする。甑形土器の可能性がある。

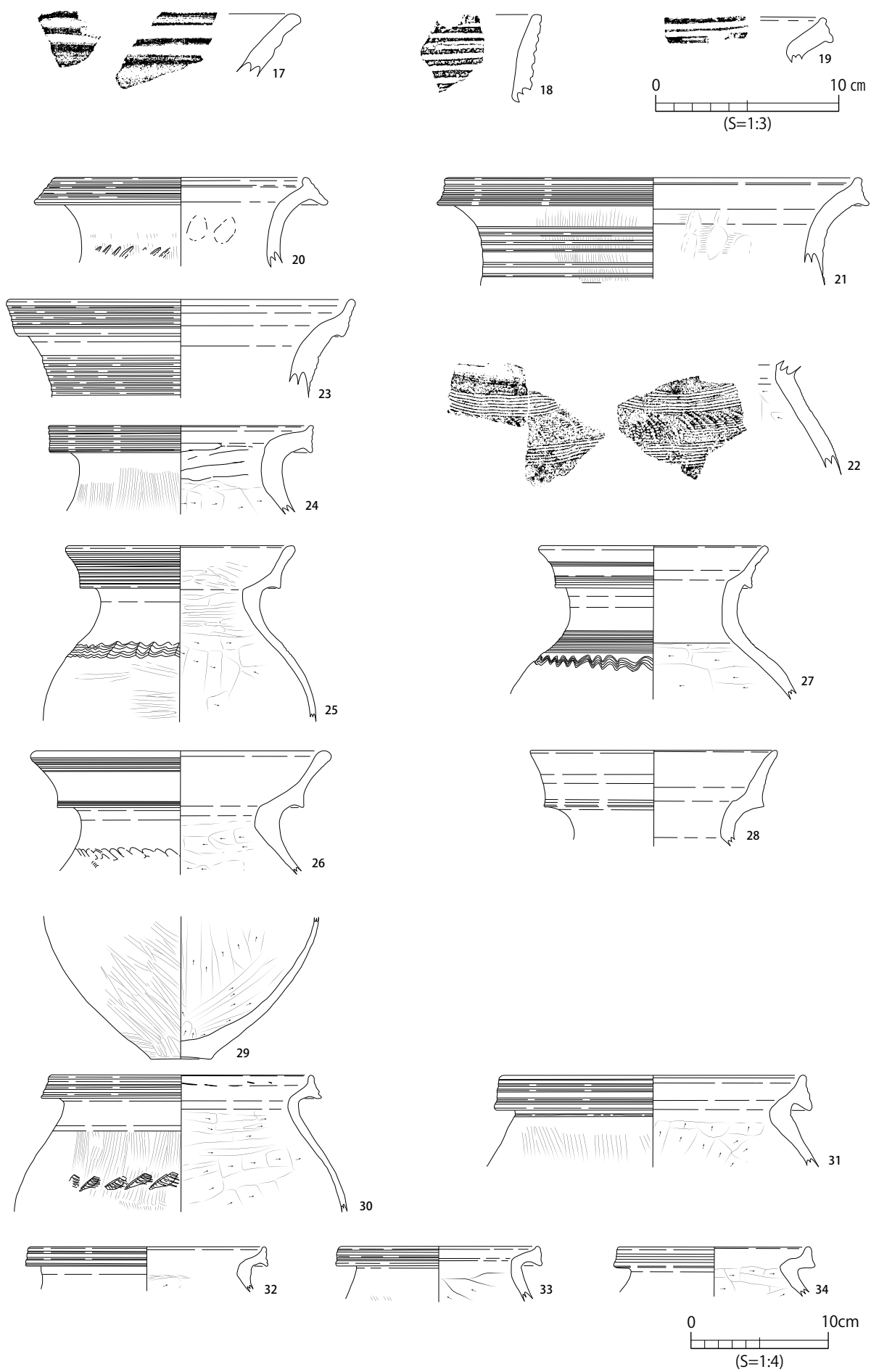
第103～105図は古式土師器である。80～82は壺である。80は口縁部下の稜が斜め下方に伸び、厚く作る。頸部には綾杉文がある。81はゆるやかに口縁部が外反し、端部は上方へつまみあげる。82は器高のわかる個体である。胴部最大径は中位にあり、底部は平底である。口縁部は内側に開き、

端部は外方へ折り曲げるように丸く収める。肩部には櫛描波状文がある。器壁の厚さは部位による差はみられない。外面の調整はハケ、内面の調整はヘラケズリであり、底部内面には指頭圧痕がある。80は口縁部が内側へ開く特徴から草田5～6期、82は草田6期と考えられる。

83～93は甕である。83は図上で合成して完形に復元した。口縁に比べてあまり胴の張らない器形で、口縁部は曲線的にゆるく外反する。底部は平底で、肩部はタテハケでヨコハケは見られない。底部にはヘラミガキ調整の部分がある。84の口縁部もゆるく外反し、肩部には沈線を施す。沈線の上は強いヨコナデ、沈線の下は縦や斜め方向のハケ調整である。口縁部の形態や肩部のヨコハケが顕著ではないことから、草田4～5期と考えられる。85は口縁部外面にヨコナデの痕が顕著に残る。口縁部は直線的に伸び、端部にアクセントがある。肩部には櫛描直線文と波状文があり、上から見て反時計回りに施文している。口縁部にはふきこぼれの痕が付いている。86も口縁部は直線的である。肩部には櫛描直線文と波状文の間に刺突文がある。波状文は胴部の調整のナメハケに消されている部分がある。87は口縁部の先端へ向けて先細りになっている。口縁部下の稜は鋭くはないが大きく突出する。88は軟質で不鮮明な部分があるが、肩部の刺突文はハケ原体で施文しているようである。89の口縁部は直線的で、端部は丸くおさめる。90の口縁部はやや外反し、端部にわずかな面がある。稜の突出は弱い。91はやや大形で、口縁部は厚く、端部へ向けて細くなる。以上の甕は口縁部が直線的であること、口縁部下の稜は斜め下方に突出するものが多いこと、端部はアクセントやわずかな面があり、肥厚するものはないことなどから、草田5期を中心とする時期と考えられる。92は胴の張る器形となりそうであり、口縁端部は面がありわずかに肥厚する。口縁部下の稜は水平方向に突出する。93は口縁部が他の甕に比べ厚く短い。94は大きな平底で甕というよりも「鉢」または「鍋」と呼びたくなる器形である。口縁部は厚く直線的に伸びる。肩部は櫛描直線文が2～3列ある。胴部外面の最大径付近から底部にかけてと同部内面下半にかけて煤が付着する。92～94は口縁端部や器形の特徴から草田5～6期の可能性があり、前述した草田5期中心の甕よりも後出する特徴がある。

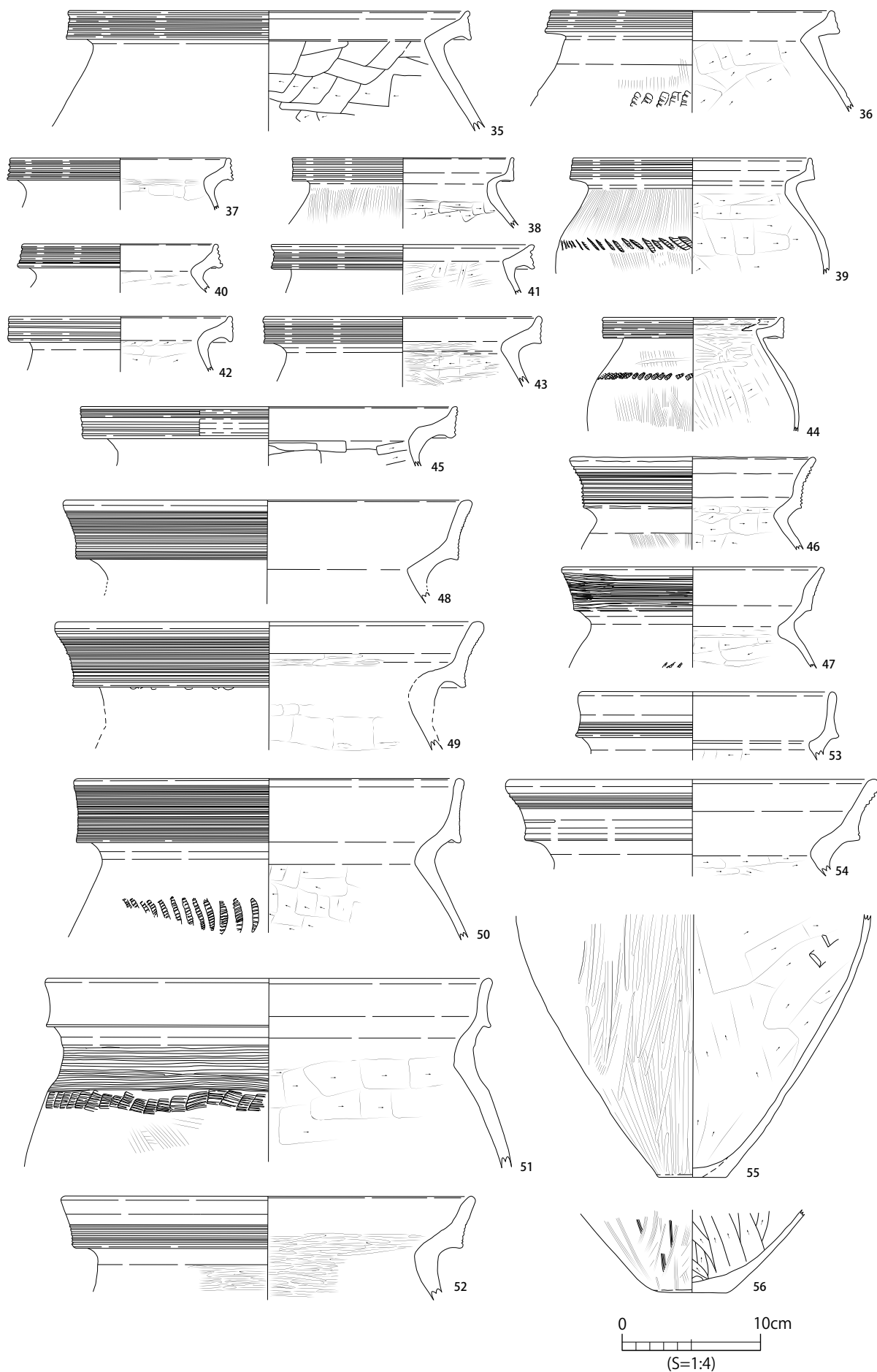
95は口縁部が厚く、口縁端部にははっきりとした面がある。口縁部下の稜は頸部からのナデにより水平方向に突出する。96も口縁部が厚く、口縁端部にははっきりとした面がある。口縁部下の稜は低い。95、96は草田7期またはそれ以降の時期の特徴がある。これらの甕はSD220の中層から出土しており、遺構廃棄後の混入とは考えにくい。前述した草田5～6期の土器と出土量が異なるため、遺構機能時の流入ではない可能性もある。

97～101は口径25～30cmの大形の甕である。97は図上で完形に合成した。胴部最大径は胴部の中位より上にあり、底部は突出気味の平底であり、不安定であるが自立する。底部内面に指頭圧痕はみられない。肩部には櫛描直線文と列点文がある。列点文の間隔は粗であり、水平ではなく上下する。98は肩部に櫛描直線文と波状文、刺突文がある。直線文の後に波状文を施文している。列点文の間隔は密である。99は肩部に櫛描直線文と刺突文がある。刺突文の原体は直線文やハケ調整の原体とは異なり、間隔は粗である。内面のケズリ調整はケズリとケズリの境の部分にていねいなナデ調整をする。100は肩部に櫛描直線文とヘラ状工具による刺突文がある。101は肩部にある2条の櫛描直線文の間にヘラ状工具による刺突文を施すが、施文の途中で刺突の向きが変わる。これらの大形の甕は口縁部が直線的に伸び、端部は肥厚して面をもつ。口縁部下の稜は突出するものが多い。これら大形の甕は時期の特徴を指摘することは難しい部分があるが、刺突文の間隔の粗



第 100 图

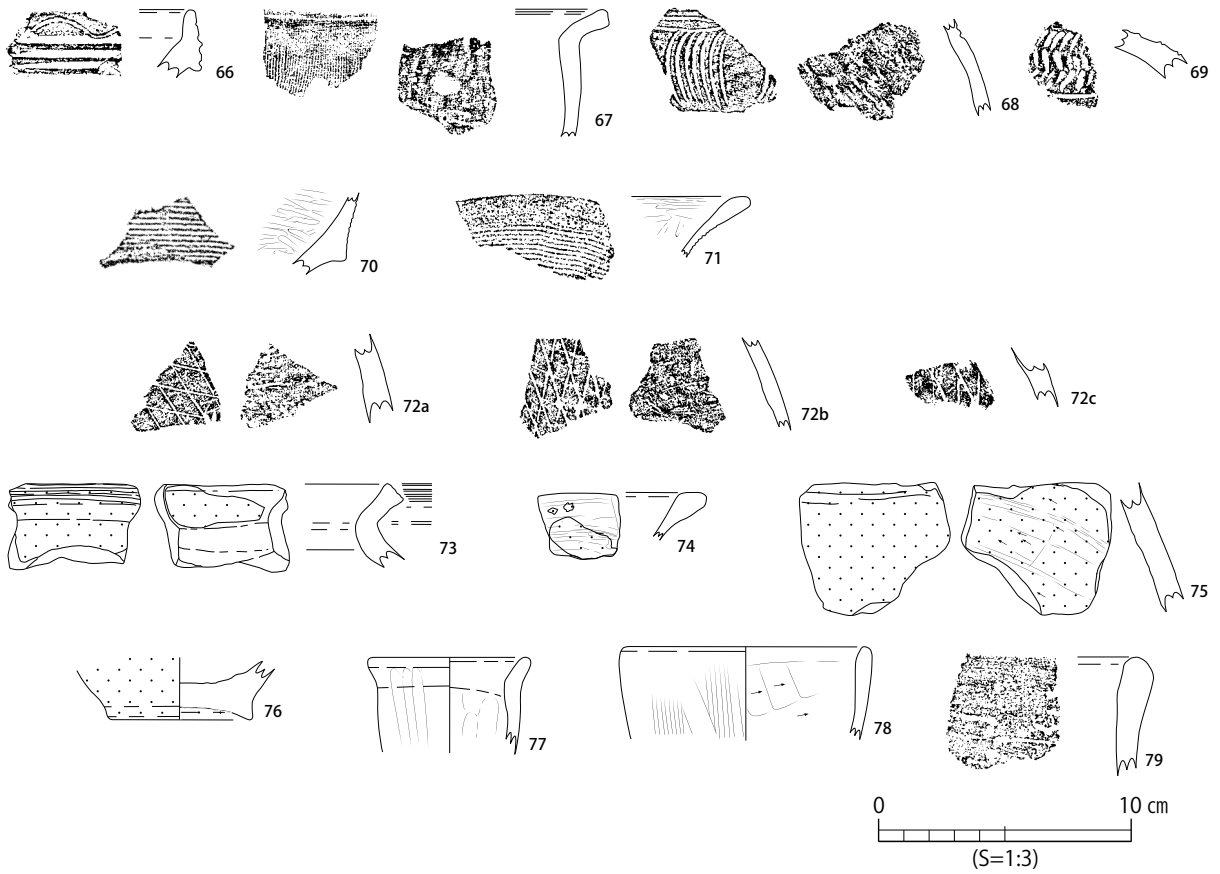
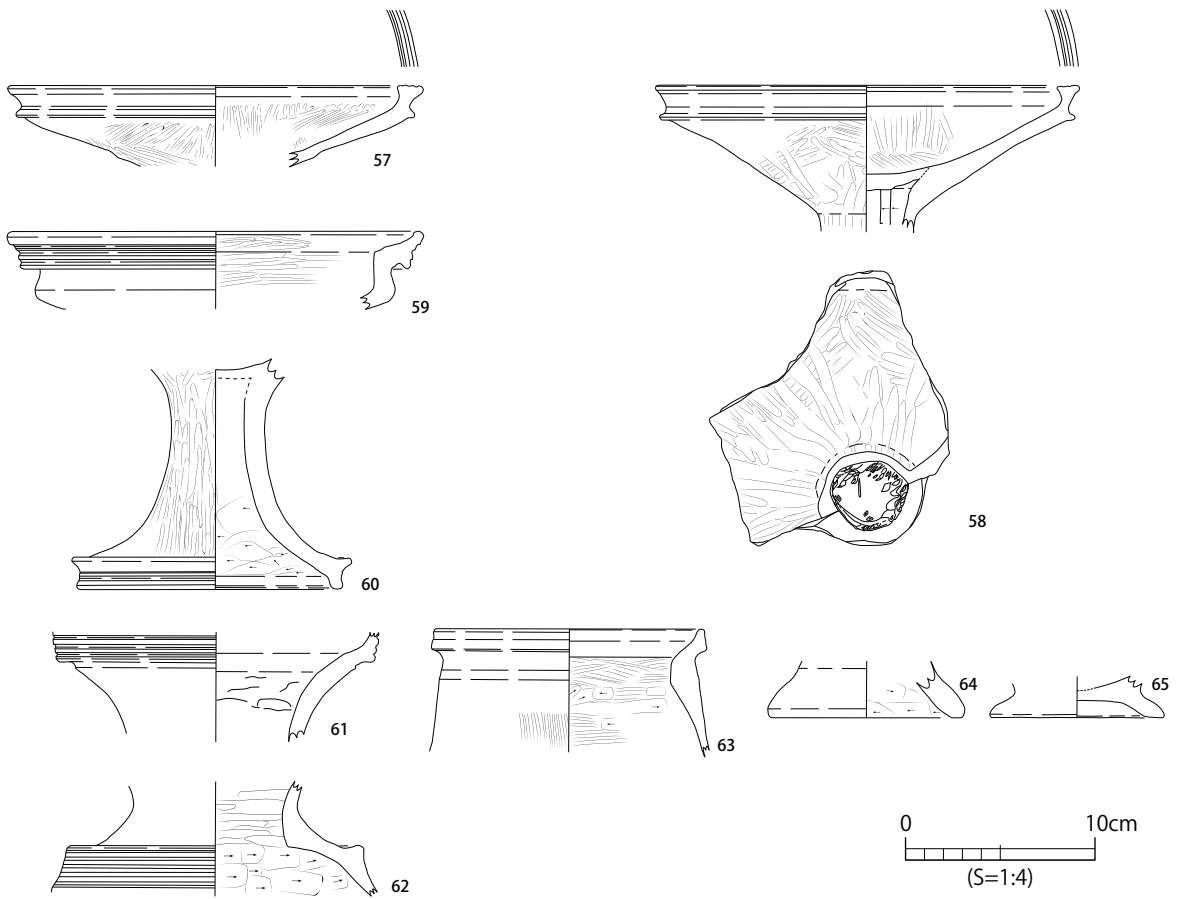
SD220 出土土器実測图 1



第 101 图

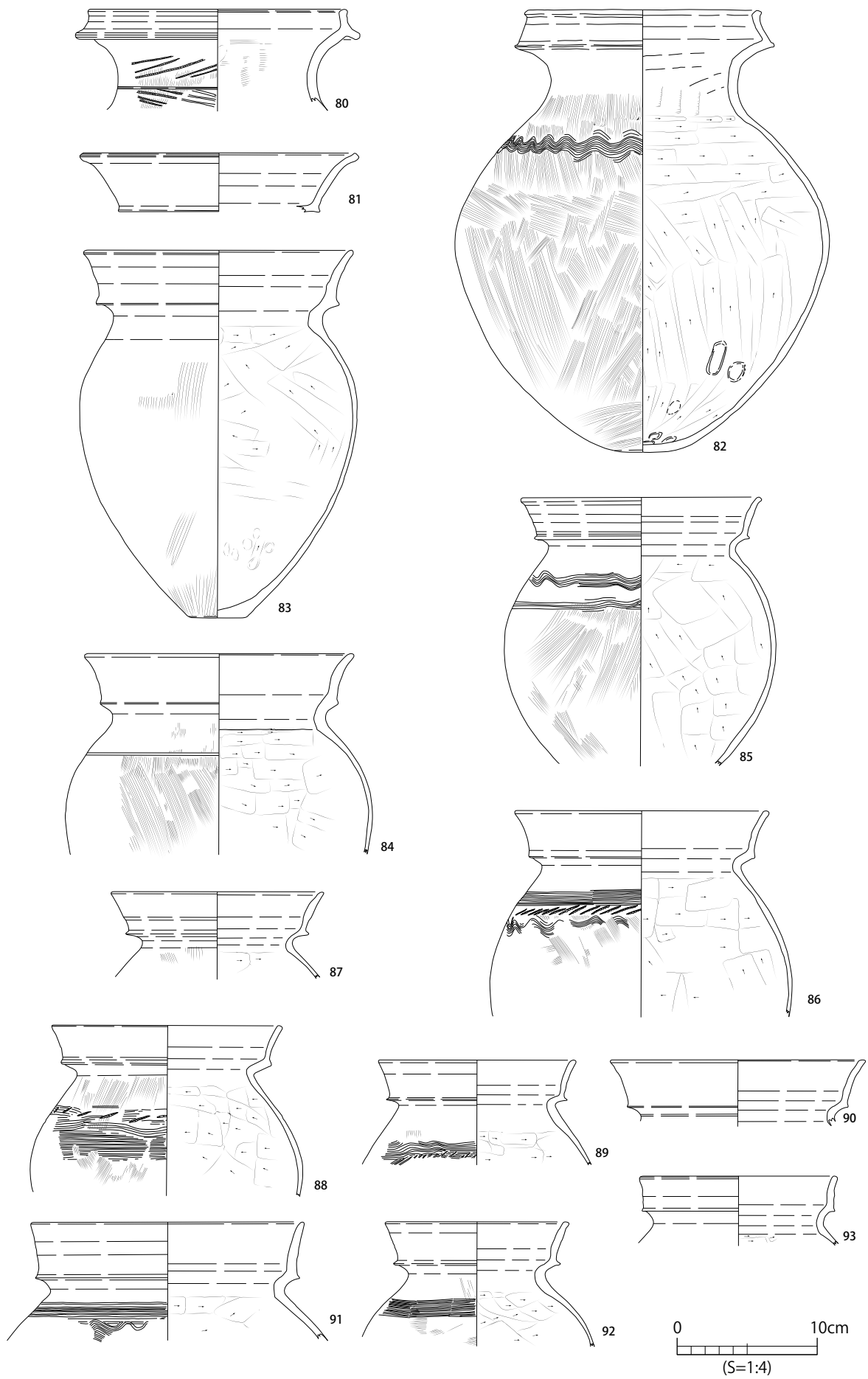
SD220 出土土器実測图 2





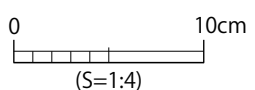
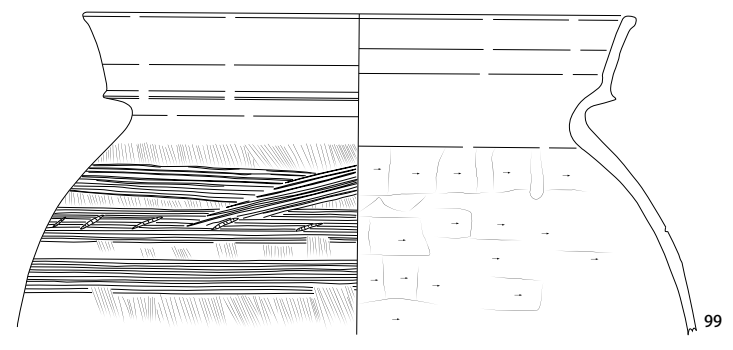
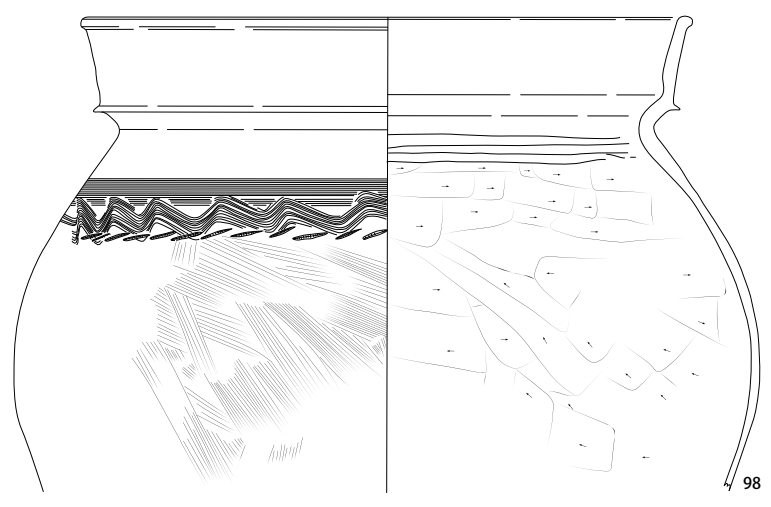
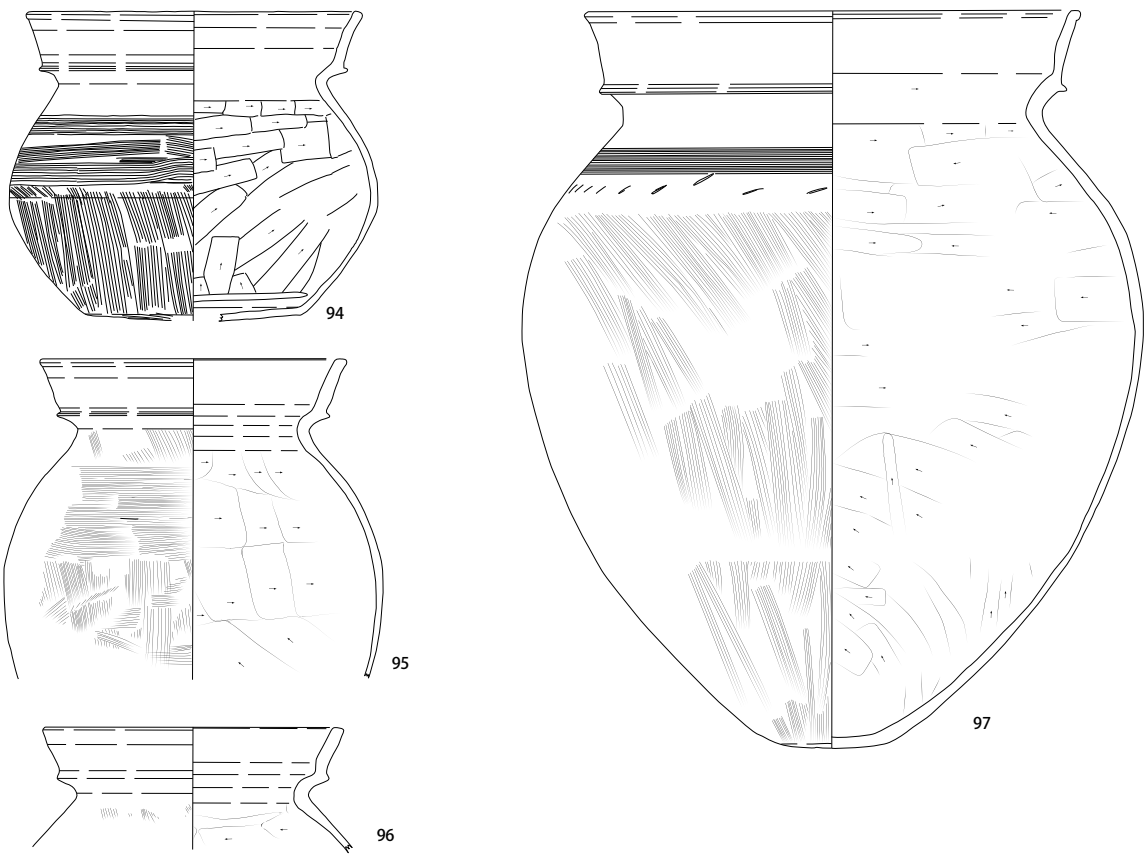
第 102 图

SD220 出土土器実測图 3

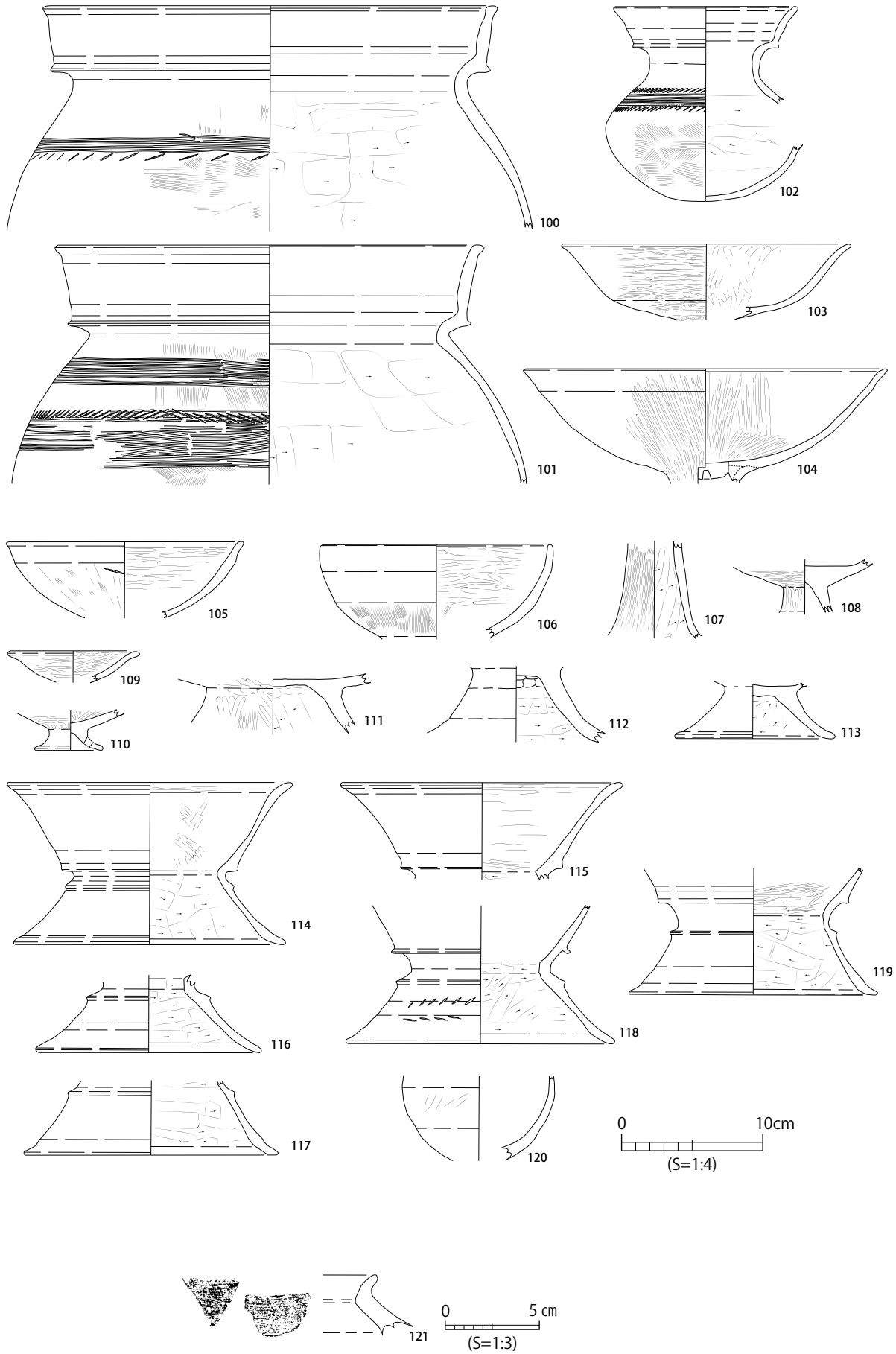


第 103 图

SD220 出土土器实测图 4

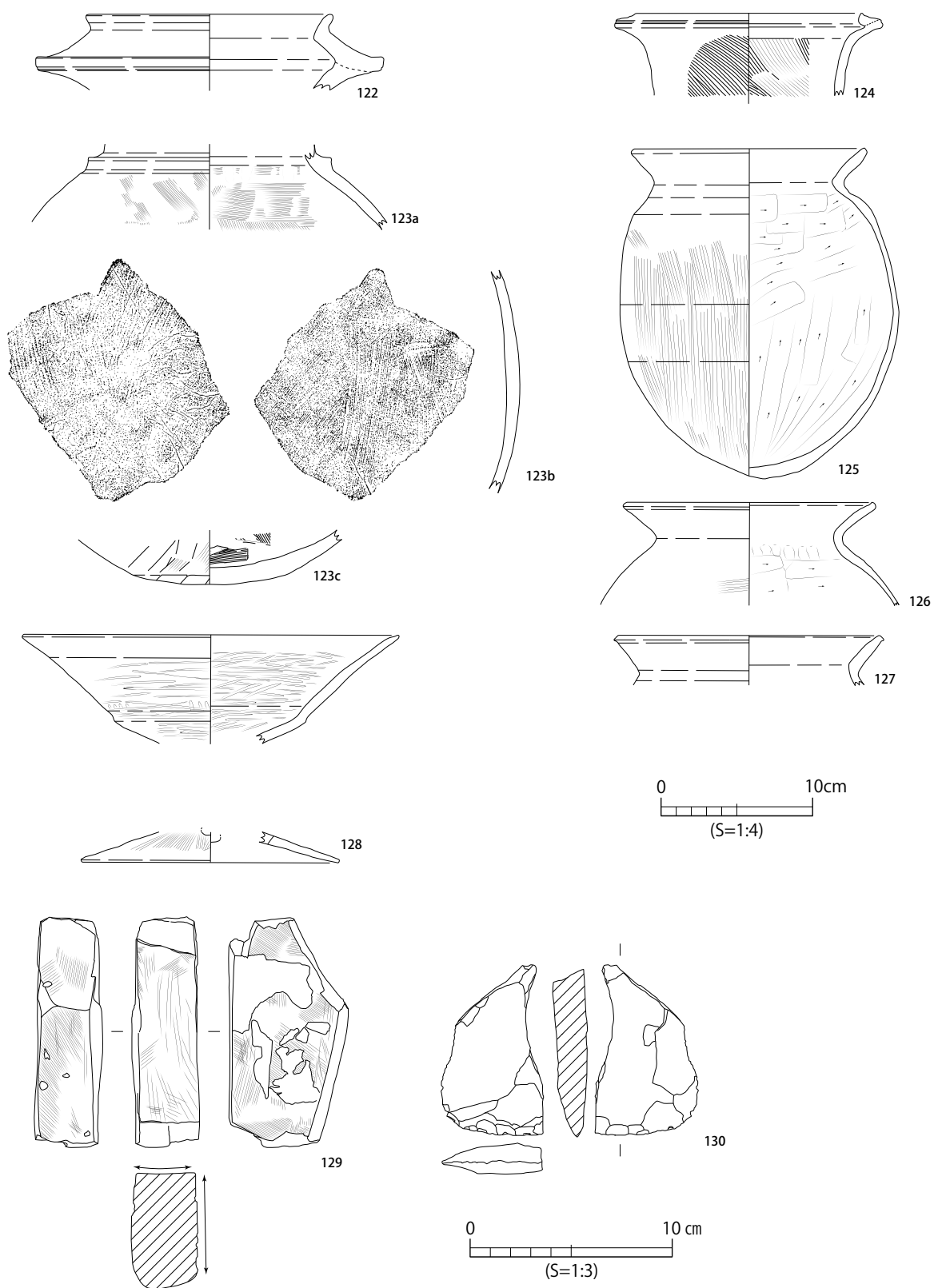


第 104 图 (S=1:4) SD220 出土土器实测图 5



第 105 图

SD220 出土土器实测图 6



第 106 图

SD220 出土土器实测图 7 · 石器实测图

第10表 SD220 出土土器観察表1

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	その他の 寸法	残存率	形態・文様の特徴	色調	備考
17	100	102	弥生土器	壺	F 1 5 / SD220	上				凹線文2条	外:にぶい黄橙 10YR6/3、内:明黄 褐 10YR6/6	広口壺、IV 様式
18	100	102	弥生土器	壺	E 1 5 / SD220	中				凹線文6条、胎土 粗い	外:浅黄橙 7.5YR8/6、 内:黒褐 2.5Y3/1	IV 様式
19	100	102	弥生土器	甕	E 1 5 / SD220	下				凹線文2条	外:にぶい黄橙 10YR6/4、内:明黄 褐 10YR6/6	V-1、内傾 1
20	100	101	弥生土器	壺	D 1 5 / D16.F15/ SD220	中・下	(18.0)		25	凹線文4条、頸部 に刺突文	外:橙 7.5YR7/6、内: 橙 7.5YR6/6	V-1
21	100	102	弥生土器	壺	F 1 5 / SD220	上	(29.8)		10	口縁に凹線文4 条、頸部に凹線文 6条以上	外:にぶい黄橙 7.5YR6/4、内:明黄 褐 10YR6/6	V-1
22	100	102	弥生土器	壺	E 1 5 / SD220	上・中				貝殻直線文の間に 刺突文、胎土粗い	外:褐灰 7.5YR4/1、 内:橙 7.5YR7/6	V-1
23	100	102	弥生土器	壺	F 1 5 / SD220	中	(25.0)		10	口縁に凹線文5 条、頸部に凹線文 7条以上	外:にぶい黄橙 10YR7/4、内:にぶ い黄橙 10YR7/3	V-2
24	100	102	弥生土器	壺	F 1 5 / SD220	中	(19.0)		25	凹線文5条	にぶい黄橙 10YR6/4	V-2
25	100	101	弥生土器	壺	D 1 5 / SD220	中	(16.4)		20	貝殻直線文12条、 肩部に貝殻波状文	外:浅黄 2.5Y7/3、内: 暗灰黄 2.5Y4/2	V-3
26	100	102	弥生土器	壺	C 1 5 / SD220	中	(20.2)		15	貝殻直線文、波状 文、口縁部は一部 ナデ消し、頸部に 薄い波状文	外:明黄褐 10YR6/6、 内:にぶい黄橙 10YR7/4	V-3
27	100	101	弥生土器	壺	E 1 5 / SD220	中	(16.2)		頸部完 存	貝殻直線文、波状 文、口縁部は一部 ナデ消し、外面磨 滅	にぶい黄橙 10YR7/4	V-3
28	100	102	弥生土器	壺	C 1 5 / SD220	中	(18.8)		15	口縁部ヨコナデ	外:黄橙 10YR7/8、 内:浅黄橙 10YR8/3	草田4期
29	100	102	弥生土器	壺	D 1 5 / SD220	下		底径4.4	底部完 存	薄く煤付着	外:浅黄橙 10YR8/4、 内:灰オリーブ 7.5Y5/2	後期前半
30	100	103	弥生土器	甕	F 1 5 / SD220	中・下	(19.0)		40	凹線文3条、刺突 文、煤付着	にぶい黄橙 10YR6/4	V-1、内傾 4
31	100	103	弥生土器	甕	F 1 5 / SD220	上	(22.0)		15	凹線文5条	にぶい黄橙 10YR6/3	V-1、内傾 4
32	100	103	弥生土器	甕	E 1 5 / SD220	上	(17.0)		10	凹線文3条、外面 煤付着	外:にぶい黄橙 10YR7/4、内:淡黄 2.5Y8/4	V-1、内傾 4
33	100	103	弥生土器	甕	E 1 5 / SD220	下	(14.4)		15	凹線文3条	黄灰 2.5Y4/1	V-1、内傾 4
34	100	103	弥生土器	甕	D 1 5 / SD220	中	(13.8)		15	凹線文2条だが1 条のようにみえる	黄橙 7.5YR7/8	V-1、内傾 2
35	101	103	弥生土器	甕	F 1 5 / SD220	中	(28.8)		20	凹線文5条、外面 は磨滅	にぶい黄橙 10YR6/4	V-1、直立 3
36	101	103	弥生土器	甕	E 1 5 / SD220	中	(20.2)		25	凹線文3条、貝殻 刺突文、外面煤付 着	外:明黄褐 10YR6/6、 内:にぶい黄橙 10YR6/4	V-1、内傾 2
37	101	104	弥生土器	甕	F 1 5 / SD220	中・下	(15.7)		20	凹線文4条、外面 煤付着	外:にぶい黄橙 10YR7/4、内:淡黄 2.5Y8/4	V-1、直立 2
38	101	104	弥生土器	甕	E 1 5 / SD220	中	(16.0)		20	凹線文3条	外:暗灰黄 2.5Y4/2、 内:にぶい黄褐 10YR5/3	V-1、直立 1
39	101	103	弥生土器	甕	E 1 5 / SD220	中	(17.2)		25	凹線文3条、貝殻 刺突文	外:黒褐 10YR3/1、 内:にぶい黄褐 10YR4/3	V-1、直立 1
40	101	103	弥生土器	甕	D15.D16/ SD220	中	(14.0)		30	凹線文4条、外面 煤付着	にぶい黄橙 10YR7/4	V-2、内傾 3
41	101	103	弥生土器	甕	D 1 6 / SD220	中	(18.8)		15	凹線文4条、外面 煤付着	外:にぶい黄橙 10YR7/4、内:黄橙 10YR7/8	V-2、直立 3
42	101	104	弥生土器	甕	F 1 4 / SD220	中	(16.0)		15	凹線文4条	外:浅黄橙 7.5YR8/6、 内:黄橙 10YR8/6	V-2、直立 3
43	101	104	弥生土器	甕	D 1 5 / SD220	中	(20.0)		20	凹線文4条、外面 煤付着、胴部内面 ヘラミガキ	にぶい黄褐 10YR5/4	V-2、直立 1
44	101	104	弥生土器	甕	F 1 5 / SD220	上	(13.0)		35	凹線文4条、刺突 文	外:にぶい黄橙 10YR6/4、内:明褐 7.5YR5/6	V-2、直立 2

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/遺構	層位	口径	その他の寸法	残存率	形態・文様の特徴	色調	備考
45	101	104	弥生土器	甕	E 1 5 / SD220	中	(27.0)		15	凹線文 6 条、一部ナデ消す	黄橙 7.5YR6/8	V-2、直立 3
46	101	105	弥生土器	甕	F14.F15/SD220	上・中・下	(17.4)		60	貝殻直線文 12 条、凹凸が明瞭、外面煤付着	外：橙 7.5YR7/6、内：橙 5YR6/8	V-3、外反 2
47	101	105	弥生土器	甕	E 1 5 / SD220	上・下	(18.6)		30	貝殻直線文 11 条、貝殻刺突文、外面煤付着	外：褐 灰 10YR4/1、内：にぶい黄橙 10YR7/3	V-3、外反 1
48	101	104	弥生土器	甕	D 1 5 / SD220	中	(29.2)		10	櫛描直線文 16 条、外面煤付着	外：浅黄橙 10YR8/4	V-3、外反 2
49	101	104	弥生土器	甕	F 1 5 / SD220	中・下	(30.6)		25	貝殻直線文 16 条、外面煤付着、磨滅	外：灰黄褐 10YR4/2、内：にぶい黄橙 10YR7/4	V-3、外反 2
50	101	104	弥生土器	甕	D 1 6 / SD220	下	(27.6)		20	貝殻直線文 21 条、貝殻刺突文、外面煤付着	外：灰黄 2.5Y7/2、内：灰白 2.5Y8/2	V-3、外反 2
51	101	106	弥生土器	甕	D 1 5 / E15.E16/SD220	上・中・下	(32.0)		15	頸部に貝殻直線文、貝殻押引文、磨滅	外：明黄褐 10YR6/6、内：にぶい黄橙 10YR7/3	V-3、外反 2
52	101	106	弥生土器	甕	F 1 5 / SD220	上	(29.4)		15	櫛描直線文をナデ消し、6 条残る	にぶい黄橙 10YR6/4	V-3、外反 2
53	101	106	弥生土器	甕	E 1 5 / SD220	下	(18.0)		10	櫛描直線文をナデ消し、4 条残る、外面煤付着	外：黒 褐 10YR3/1、内：にぶい黄橙 10YR7/4	V-3、外反 2
54	101	106	弥生土器	甕	D 1 5 / SD220	下	(26.6)		15	櫛描直線文をナデ消し、5 条残る	外：にぶい黄橙 10YR6/4、内：浅黄橙 10YR8/4	V-3、外反 2
55	101	106	弥生土器	甕	E15.F15/SD220	中		底径 5.0	50	外面煤付着	外：褐 10YR4/4、内：黄褐 10YR5/6	後期前半
56	101	106	弥生土器	甕	D 1 5 / SD220	中		底径 5.0	底部完存	底は自立する、外面煤付着	外：にぶい黄褐 10YR5/3、内：明黄褐 10YR6/6	後期前半
57	102	107	弥生土器	高坏	D15.E15/SD220	中	(21.8)		35	凹線文 3 条、赤彩？	外：にぶい黄橙 10YR7/4、内：にぶい黄橙 10YR6/4	V-1
58	102	107	弥生土器	高坏	F 1 5 / SD220	中	(22.6)		40	凹線文 3 条	外：にぶい黄橙、内：明黄褐 10YR6/6	V-1
59	102	107	弥生土器	高坏	F 1 4 / SD220	中	(21.5)		10	凹線文 3 条、被熱、赤彩？	外：にぶい赤褐 5YR5/4、内：明赤褐 2.5YR5/8	V-2
60	102	105	弥生土器	高坏	E15.F15/SD220	中		底径 13.0	75	凹線文 2 条、赤彩	外：にぶい黄橙 10YR5/4、内：にぶい黄橙 10YR6/4	後期前半
61	102	107	弥生土器	鼓形器台	D 1 6 / SD220	中			20	凹線文 3 条以上	外：浅黄橙 10YR8/4、内：淡黄 2.5Y8/4	V-2
62	102	107	弥生土器	鼓形器台	F 1 5 / SD220	上			25	櫛描直線文 10 条以上	外：明黄褐 10YR7/6、内：浅黄橙 10Y8/3	V-3
63	102	107	弥生土器	鉢？	E 1 5 / SD220	中・下	(13.9)		35	頸部厚い	外：浅黄橙 10YR8/4～明黄褐 10YR7/6、内：浅黄橙 10YR8/3	V-1 ?
64	102	107	弥生土器	台部	F 1 5 / SD220	下		底径 (10.0)	15		外：灰黄褐 10YR5/2、内：にぶい黄橙 10YR5/3	
65	102	107	弥生土器	台部	D 1 5 / SD220	中		底径 9.0	現存部完存		橙 7.5YR7/6	
66	102	107	弥生土器	壺？	E 1 5 / SD220	下				波状の沈線と凹線文 3 条	外：浅黄橙 10YR8/4、内：灰白 10YR8/2	後期前半
67	102	107	弥生土器	鉢？	D 1 5 / SD220						外：にぶい黄褐 10YR5/3、内：明黄褐 10YR6/ 6	
68	102	107	弥生土器	鉢	D 1 5 / SD220	上				沈線の間に曲線文	外：浅黄橙 7.5YR8/6、内：明黄褐 10YR7/6	V-3
69	102	107	弥生土器	鉢	D 1 5 / SD220	下				刺突による羽状文、沈線	外：浅黄橙 10YR8/4、内：オリーブ黒 7.5Y3/1	
70	102	107	弥生土器	鼓形器台	E 1 5 / SD220	中				櫛描直線文 11 条以上、外面赤彩	にぶい黄橙 10YR7/4	V-3
71	102	107	弥生土器	鼓形器台	F 1 5 / SD220					櫛描直線文 10 条以上	外：暗灰黄 10YR 5 / 2、内：にぶい黄橙 10YR 7/4	V-3
72a	102	108	弥生土器	不明	F 1 5 / SD220	上				ヘラによる斜格子状の文様	外：にぶい黄橙 10YR7/4、内：にぶい黄橙 10YR6/4	

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の寸法	残存率	形態・文様の特徴	色調	備考
72b	102	108	弥生土器	不明	F 1 5 / SD220	下						ヘラによる斜格子状の文様	外: にぶい黄橙 10YR7/3、内: にぶい黄橙 10YR7/4	
72c	102	108	弥生土器	不明	F 1 5 / SD220	上						ヘラによる斜格子状の文様	にぶい黄橙 10YR7/4	
73	102	108	弥生土器	壺?	D 1 5 / SD220	中						凹線文3条、内外赤彩	外: 赤褐 5YR4/8、内: にぶい黄橙 10YR 7/3	V-1
74	102	108	弥生土器	鉢	E 1 5 / SD220	中						外面赤彩	外: にぶい黄褐 10YR5/3 赤彩部分は赤褐 5YR4/8、内: にぶい黄褐 10YR5/4	
75	102	108	弥生土器	壺?	C 1 6 / SD220	上						内外赤彩	外: 明赤褐 5YR5/6、内: 浅黄橙 7.5YR8/6	
76	102	108	弥生土器	壺か甕底部	E 1 5 / SD220	中				底径 5.5	65	外面赤彩、胎土粗い	外: 浅黄 2.5YR7/4、内: 明黄褐 10YR 6/6	
77	102	108	弥生土器	鉢?	E 1 5 / SD220	中					15		にぶい黄橙 10YR7/4	漆採集可能性
78	102	108	弥生土器	鉢?	D 1 5 / SD220	中	(8.0)				10		外: にぶい黄橙 10YR6/4、内: 浅黄 2.5Y7/4	漆採集可能性
79	102	108	弥生土器	不明	E 1 5 / SD220	中							浅黄橙 10YR8/4	

第 11 表 SD220 出土土器観察表 2

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の寸法	残存率	形態・文様の特徴	色調	備考
80	103	108	古式土師器	壺	E15.F15 / SD220	上・中	(18.2)				15	櫛状工具による綾杉文	にぶい黄橙 10YR7/4	草田 5 ~ 6 期
81	103	108	古式土師器	壺	C16/SD220	中	(20.0)				20		にぶい黄橙 10YR7/4	
82	103	105	古式土師器	壺	F15/SD220	上・中	16.4	31.5	(26.8)		60	肩部に櫛描波状文、胴部外面に薄く煤付着	外: 淡黄 2.5Y8/3、内: 浅黄橙 10YR8/4	草田 6 期
83	103	105	古式土師器	甕	D16/SD220	中	19.0	26.2	(19.8)	底径 4.0	口縁部・底部完存	図上で合成、平底、煤付着	外: 暗褐 10YR3/3、内: にぶい黄橙 10YR7/4 ~ 褐 10YR4/4	草田 4 ~ 5 期
84	103	111	古式土師器	甕	D15/SD220	下	(19.0)		(22.0)		35	肩部に沈線、煤付着	にぶい黄橙 10YR7/3	草田 4 ~ 5 期
85	103	109	古式土師器	甕	D15.E15 / SD220	下	16.9		(19.4)		口縁部ほぼ完存	櫛描直線文と波状文、煤付着	外: 灰黄褐 10YR6/2、内: にぶい黄橙 10YR7/4	草田 5 期
86	103	111	古式土師器	甕	E15/SD220	中	(17.8)		(21.6)		25	櫛描直線文、波状文、刺突文、煤付着	外: 浅黄橙 10YR8/3、内: 淡黄 2.5Y8/3	草田 5 期
87	103	108	古式土師器	甕	D15/SD220	中	(15.0)				15	口縁先細り	外: 浅黄橙 10YR8/3、内: 浅黄橙 10YR8/3	草田 5 期
88	103	109	古式土師器	甕	F14/SD220	中	16.2		(19.5)		口縁部完存	刺突文、軟質	浅黄 10YR8/4	草田 5 期
89	103	109	古式土師器	甕	F14.F15 / SD220	中・下	(14.0)				25	櫛描波状文と刺突文	外: 黒褐 10YR3/2、内: 浅黄橙 10YR8/3	草田 5 期
90	103	108	古式土師器	甕	E15/SD220	下	(18.0)				10	煤付着	外: 黒 10YR2/1、内: 灰白 10YR8/2	草田 5 期
91	103	108	古式土師器	甕	E15/SD220	下	(18.2)				10	櫛描直線文と波状文	外: 淡黄 2.5Y8/3、内: 灰白 2.5Y8/2	草田 5 ~ 6 期
92	103	109	古式土師器	甕	E15/SD220	中	(13.0)				35	煤付着、磨滅	外: 黒褐 10YR3/1、内: 浅黄橙 10YR8/4	草田 6 期
93	103	112	古式土師器	甕	E15.F15 / SD220	中	(14.0)				35	口縁が短く厚い	にぶい黄橙 10YR7/4	草田 5 ~ 6 期
94	104	109	古式土師器	甕	D15/SD220	下	17.1		19.4	底径 12.0	60	櫛描直線文2列、内外に煤付着、	外: 浅黄橙 10YR8/4、内: 浅黄 2.5Y8/4	草田 6 期
95	104	112	土師器	甕	E15/SD220	中	(16.0)		(20.0)		20	口縁部厚い、煤付着	外: 灰黄褐 10YR5/2、内: にぶい黄橙 10YR7/4	草田 7 期以降?
96	104	109	土師器	甕	E15.F15 / SD220	中	(15.6)				45	口縁部厚い、煤付着	外: にぶい黄橙 10YR6/4、内: にぶい黄橙 10YR7/4	草田 7 期以降?



遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の 寸法	残存率	形態・文様の 特徴	色調	備考	
97	104	110	古式土師器	大形の甕	E15/SD220	上・中	(26.2)	(40.4)	(34.0)		45	図上で合成、肩部に櫛描直線文14条、列点文、突出気味の平底	外：浅黄橙10YR8/3、内：明黄褐10YR7/6	草田5～6期	
98	104	111	古式土師器	大形の甕	E15/SD220	上・中	(31.4)		(39.2)		25	櫛描直線文、波状文、刺突文	外：黄褐2.5Y5/3、内：浅黄2.5Y7/4	草田5～6期	
99	104	110	古式土師器	大形の甕	D15.E15/SD220	上・中	(27.8)				80	櫛描直線文9条、刺突文	黄橙10YR8/6	草田5～6期	
100	105	109	古式土師器	大形の甕	D15/SD220	中	(31.6)				20	櫛描直線文と刺突文	外：浅黄橙10YR8/3、内：灰白10YR8/2	草田5～6期	
101	105	109	古式土師器	大形の甕	E15.F15/SD220	上・中・下	(30.0)				60	櫛描直線文と刺突文、煤付着、口縁部磨滅	外：にぶい黄橙10YR6/4、内：にぶい黄橙10YR7/4	草田5～6期	
102	105	113	古式土師器	注口土器	C16/SD220	下	(13.0)	13.8				頸部以下現存部完存	櫛描直線文10条の上下に密な刺突文、煤付着	外：浅黄橙7.5YR8/6、内：浅黄橙10YR8/3	草田5～6期
103	105	113	古式土師器	高坏	E15/SD220	上・中	20.4				50	外面ヨコヘラミガキ	外：明黄褐10YR6/6、内：にぶい黄橙10YR7/4	草田5～6期	
104	105	112	古式土師器	高坏	E15/SD220	中	(25.4)				15	外面タテヘラミガキ	外：にぶい黄橙10YR7/4、内：明黄褐10YR7/6	草田5～6期	
105	105	113	古式土師器	高坏	E15.F15/SD220	上・中	(16.7)				40	口縁の下はヨコナデで凹む	黄橙10YR8/6		
106	105	112	古式土師器	高坏	E15/SD220	下	(16.0)				10		外：灰白10YR8/2、内：明黄褐10YR6/6		
107	105	113	古式土師器	高坏	F15/SD220	中						現存部完存	外面細かなタテハケ	浅黄橙10YR8/3	
108	105	115	古式土師器	高坏	D16/SD220	中						現存部完存	外面細かなヨコヘラミガキ	外：橙7.5YR4/6、内：褐7.5YR6/6	
109	105	112	古式土師器	低脚坏	F15/SD220	上	(9.0)				25		にぶい黄橙10YR6/4		
110	105	112	古式土師器	低脚坏	E15/SD220	中				底径4.8	脚柱部完存	円形二方透かし	外：浅黄橙10YR8/4、内：黄橙10YR8/6		
111	105	113	古式土師器	台部	E15/SD220	中						脚柱部完存	淡黄2.5Y8/3		
112	105	113	古式土師器	台部	E15/SD220	中						脚柱部完存	外：浅黄橙10YR8/4、内：黄橙10YR8/6		
113	105	115	古式土師器	台部	F15/SD220	上・中				底径(11.3)	25		外：にぶい黄橙10YR6/4、内：にぶい黄橙10YR7/4		
114	105	113	古式土師器	鼓形器台	D15/SD220	中	(20.0)	11.5		底径(19.0)	30	磨滅	浅黄橙10YR8/3		
115	105	112	古式土師器	鼓形器台	D15.D16/SD220	中	(19.6)				15		浅黄橙10YR8/4		
116	105	112	古式土師器	鼓形器台	D16/SD220	中				底径(15.6)	10		浅黄橙10YR8/3		
117	105	112	古式土師器	鼓形器台	E15.F15/SD220	上・中・下				底径(17.8)	20		外：にぶい黄橙10YR7/3、内：にぶい黄橙10YR5/4		
118	105	113	古式土師器	鼓形器台	D15/SD220	中				底径(18.8)	20	台部に列点文、受部磨滅	浅黄橙10YR8/3		
119	105	113	古式土師器	鼓形器台	E15/SD220	中				底径(17.3)	40		外：浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR6/4、内：灰白10YR8/2～にぶい黄橙10YR6/4		
120	105	112	土師器？	鉢	E15/SD220	中					25	内外ナデ	外：浅黄橙10YR8/3、内：黄橙10YR8/6		
121	105	112	古式土師器	鉢？	F15/SD220	下						内外ナデ	外：にぶい黄橙10YR6/2、内：にぶい黄橙10YR6/4		
122	106	114	弥生土器	壺	F14/SD220	上	(14.0)				10	口縁部は内側へ短く立ち上がる	黄橙10YR8/6	北部九州系	

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の寸法	残存率	形態・文様の 特徴	色調	備考
123a	106	114	弥生土器	壺	F14/SD220	上					10	頸部に突帯	外：にぶい黄橙 10YR6/4、内：橙 7.5YR6/6	北部九州系
123b	106	114	弥生土器	壺	F14/SD220	上						内外ハケ調整	外：暗灰黄 2.5YR4/2、内：橙 7.5YR6/6	北部九州系
123c	106	114	弥生土器	壺	F14/SD220	上				底径 (10.2)	40	わずかに突出する底部	外：にぶい黄橙 10YR7/4、内：黄橙 10YR8/8	北部九州系
124	106	114	弥生土器	壺	F15/SD220	中	(15.0)				15	口縁部は内側へ短く立ち上がる。胎土は他と異なる	橙 7.5YR6/8	非在地系土器
125	106	115	古式土師器	甕	D15.E15/SD220	中	(14.0)	20.2	17.1		口縁部25、胴部70	外面に接合痕残る、尖底、被熱	外：明黄褐 2.5Y7/6、 内：浅黄橙 10YR8/3	く字口縁
126	106	115	古式土師器	甕	D15/SD220	中	(16.2)				35	軟質	外：浅黄橙 10YR8/4、内：淡黄 2.5Y8/4	く字口縁
127	106	114	古式土師器	甕	F15/SD220	上	(19.2)				10	煤付着	外：明黄褐 10YR7/6、 内：浅黄橙 7.5YR8/4	く字口縁
128	106	114	古式土師器	高坏	E15/SD220	上・中	24.7			底径 (16.8)	口縁部50、脚部25	坏部内外へラミカキ、きめの細かい粘土を用いている	外：黄橙 7.5YR7/8、 内：黄橙 10YR7/8	非在地系土器

第12表 SD220 出土石器観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/遺構	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	形態の特徴
129	106	116	石器	砥石	E 1 5 / SD220	上	11.9	6.2	3.4	358	2面を使用
130	106	116	石器	石包丁様石器	F 1 5 / SD220	下	8.5	(5.1)	(1.5)	64	刃部は磨滅



写真3 調査指導風景 (11月1日)

密から草田 5～6 期の特徴を持つ。

102 は注口土器である。注口部を欠く。丸底で、肩部に櫛描直線文があり、その上下には密な刺突文がある。

103～108 は高坏である。103 は体部が緩やかに屈曲して口縁部へ至る。外面の調整は細かいヨコヘラミガキである。104 は口径が大きい。口縁端部にはつまみだしたような平坦面がある。内外面の調整はタテヘラミガキである。坏底部は円盤充填の後、側面を付加する。坏部底面裏側には棒状の刺突の痕がある。105、106 は椀状の口縁部である。105 は口縁部の下がヨコナデで凹む。106 は椀状のまま口縁部へ至る。107 は脚柱部である。断面を見ると円形ではなく多面体である。内面のヘラケズリは下から掻き取るような動きを示す。108 は坏部と脚部の接合部のみの破片である。坏部外面の調整は細かなヨコヘラミガキ、脚柱部外面の調整はタテヘラミガキである。

109、110 は低脚坏である。109 は「低脚坏 B」(中川 2006)として分類した、口径が小さく体部が曲線的な一群に属すると考えられる。内外面の調整はヘラミガキである。110 は脚部に二方向の透かしがある。SD220 はから出土した高坏や低脚坏は少なく、図示したもの以外は細片がほとんどである。この時期の土器組成を考えると奇妙な点である。

111～113 は、器種は不明であるが台部である。台部は内面をケズリ調整する。111 は台部の径が大きい。112 は台部の高さがある。113 は台部径や台部の高さがわかる個体である。

114～119 は鼓形器台である。114 は器高の判る個体である。115 の受部内面の調整はヘラケズリ後ていねいなヨコヘラミガキである。116 は小ぶりで筒部の径も小さい。117 は台部端部にヨコナデによる凹みがある。118 は台部外面に列点文を羽状文風に施文する。列点文は全体の一部分のみに施文されている。以上の鼓形器台の稜は鈍く低いものが多いが、119 の稜は鋭く突出する。

120 は内外面をナデ調整する鉢である。121 は破片であるが、口縁部が短く屈曲する個体である。これらは器種や器形が不明であるが、土師器として報告する。

第 106 図は非在地系の弥生土器・古式土師器を図示した。122 は口縁部下の稜が大きく横方向へ突出し、口縁部は内側へ向かって伸び、端部を折り曲げるように屈曲して短く伸びる。123 は同一個体と考え、頸部・胴部・底部の三つの部位を図示したが、互いに接合しない。これ以外にも破片が出土している。頸部には突帯がある。胴部は大きく張るようである。底部はわずかに突出する平底である。内外面の調整はハケで、胴部の調整は内外で異なる。色調は橙色が強く、胎土も在地の土器とは異なる印象を受ける。122、123 はともに SD220 の東端、F14 から F15 のグリッドで出土した。122 と 123 は同一個体の可能性がある。器形の特徴から西部瀬戸内から北部九州にかけての地域の壺との関連が考えられる。時期は弥生後期後半～末と考えられる。124 は外反する頸部から、口縁部が内側へ短く立ち上がる。口縁内面はわずかに下へ垂れる。口縁部外面は凹線文風に凹む。内外面の調整はハケである。色調は橙色で、胎土も在地の土器とは大きく異なるが、どこの地域の特徴を持つ土器なのかは不明である。時期について、口縁部が短く伸びる特徴から、後期前半代の可能性を指摘するにとどめたい。125～127 はく字口縁の甕である。125 はやや長胴の甕で、底部は尖底である。外面の調整はタテハケで、接合痕が残る。内面の調整はヘラケズリである。口縁部は直線的に短く伸び、端部は丸く収める。頸部の下は強くヨコナデ調整される。胎土は在地の土器と同じである。器形や調整の特徴から、西部瀬戸内との関連がある土器である。

126 は口縁部が直線的に伸び、口縁端部はわずかに上方へつまみあげる。端部に面はない。127 は口縁部のみの破片である。口縁部直下に稜が入り、端部には面がある。126、127 はこれまで下古志遺跡第一次調査や古志本郷遺跡で出土した中四国地方の「布留甕」(次山 1997) であることから、これらの時期は草田 6 期と考えられる。128 は高坏である。坏部と脚端部を図示した。坏部は直線的に大きく開き、口縁端部は先細りである。内外面の調整は幅の狭く長いヨコヘラミガキである。脚部には円形透かしがあるが、透かしの数は不明である。きめの細かい胎土を用いている。庄内式の高坏である。

129 は砥石である。断面は長方形である。短辺と側片の 2 面を使用している。130 は石包丁様石器の破片である。刃部は磨滅している。SD220 から出土した石器はこの 2 点である。

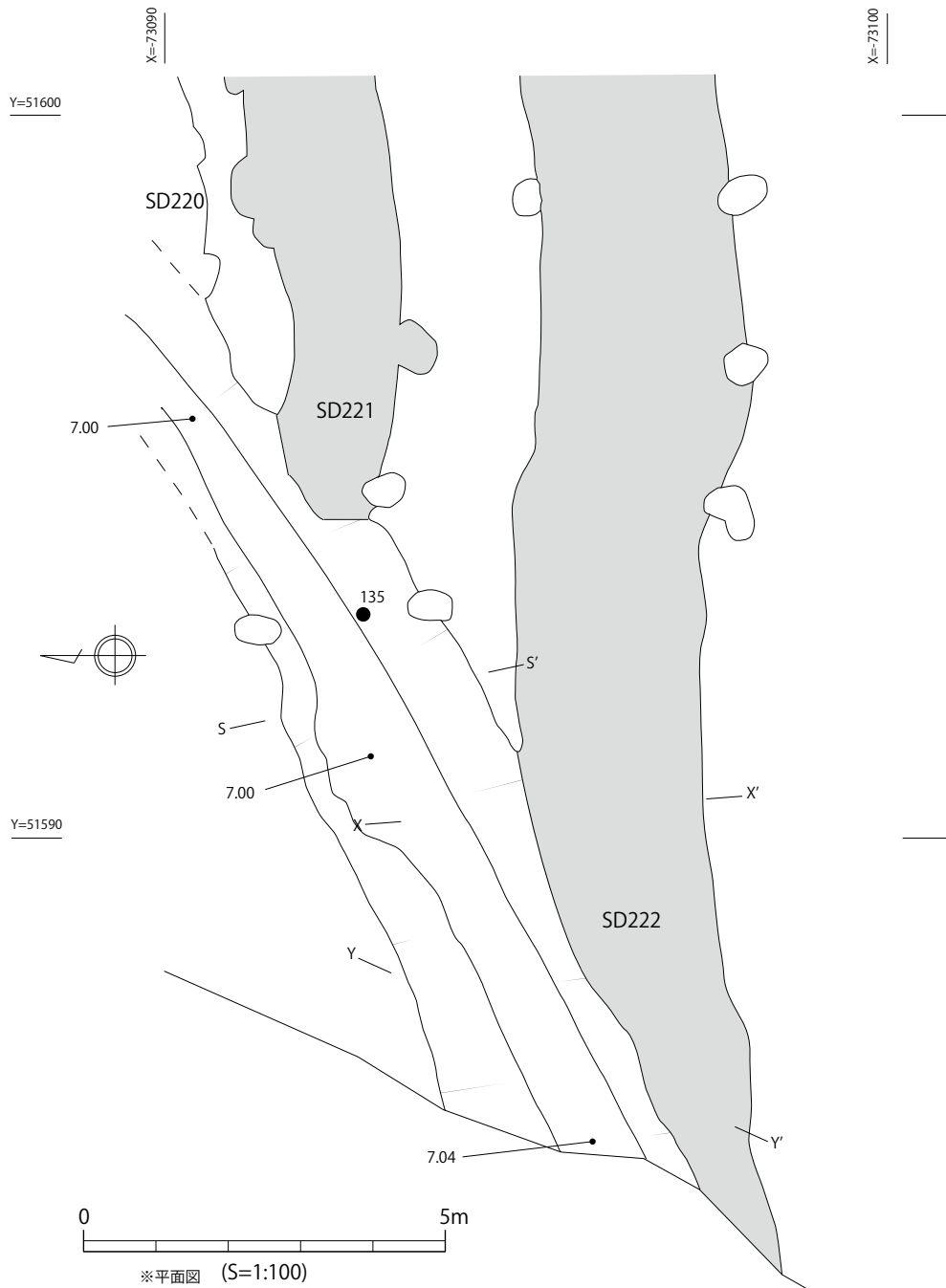
SD220 出土の土器は溝の全体から出土し、特定の位置や層位に集中して出土する傾向は示さなかった。出土位置は溝の中層から最も多く出土し、次に上層から出土した。下層からの出土量は少なかった。土器は破片が殆どであるが、中層から完形で出土したものもあった。土器の時期は、上層から次節で述べる奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土したが、弥生土器・古式土師器が多く出土し、層位による時期の違いを見いだすことはできなかった。遺構の時期は弥生時代後期初頭に掘削され、古墳時代前期初頭まで溝としての機能があったと考えられる。

なお、SD220 から出土した土器の比率と点数は、弥生土器の口縁部が合計 278 点である。壺が胴部片を含めて 20 点(7%)に対し、甕口縁は 226 点(81%)、高坏口縁 14 点(5%)、器台 11 点(4%)、鉢 7 点(3%)である。古式土師器口縁部は 191 点である。壺 10 点(5%)、甕口縁部 97 点(51%)、大型の甕 30 点(16%)、高坏 37 点(18%)、鼓形器台 12 点(6%)、低脚坏 8 点(4%)である。弥生土器の甕の比率が高いこと、古式土師器も甕の比率が高いが、弥生土器に比べて高坏の比率が上がるのが指摘できる。

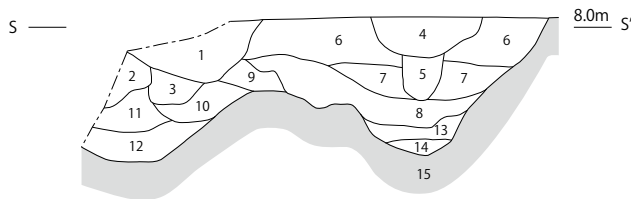
SD223 (第 107 図) 調査区の中央北側、C16、D16、SD220 の南西側に位置する。北東-南西方向に伸びる。SD220、SD221、SD222 に先行し、SD220 に切られている(第 97 図 QQ')。また、南西側は SD222 に切られている(第 109 図 XX',YY')。調査時では SD220 や SD222 との切り合いが判断できず、SD221 と同一の溝と判断して調査を行ったが、SD220 を完掘した後に別の溝が存在すること、SD221 とは軸が異なる溝があることがわかった。土層をみると、調査区北側に位置する溝の中で最初に掘削された溝である。現状で長さ 14 m、幅 2.5 m、深さ 1.1 m である。ほぼ直線的に伸びる。底面はほぼ平坦である。底面からは若干の湧水があった。断面は逆台形である。土層は上位に暗褐色の土が、中位は砂質の強い褐色系の土が堆積する。溝の南西端では、最下層に水性堆積であることを確認した(第 109 図 YY'21、22 層)。第 109 図の土層では、水平に堆積した層の上面から掘削の痕を確認することができることに加え、第 107 図土層 SS' でも上位からの掘削の痕を確認できることから、再掘削が行われたと考えられる。

遺物は弥生時代後期の土器が出土した。131 は壺の口縁部である。頸部に沈線があるが、凹線

1 226 点の内訳は、内傾 1 類 2 点、内傾 2 類 15 点、内傾 3 類 20 点、内傾 4 類 29 点、直立 1 類 27 点、直立 2 類 23 点、直立 3 類 16 点、外反 1 類 11 点、外反 2 類 26 点、その他 57 点である。遺跡全体では、内傾 4 類が最も多く、内傾 2、3 類、直立 1～3 類がそれに次ぐ点数である。

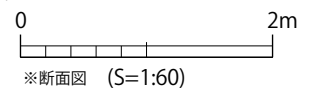


西側土層図

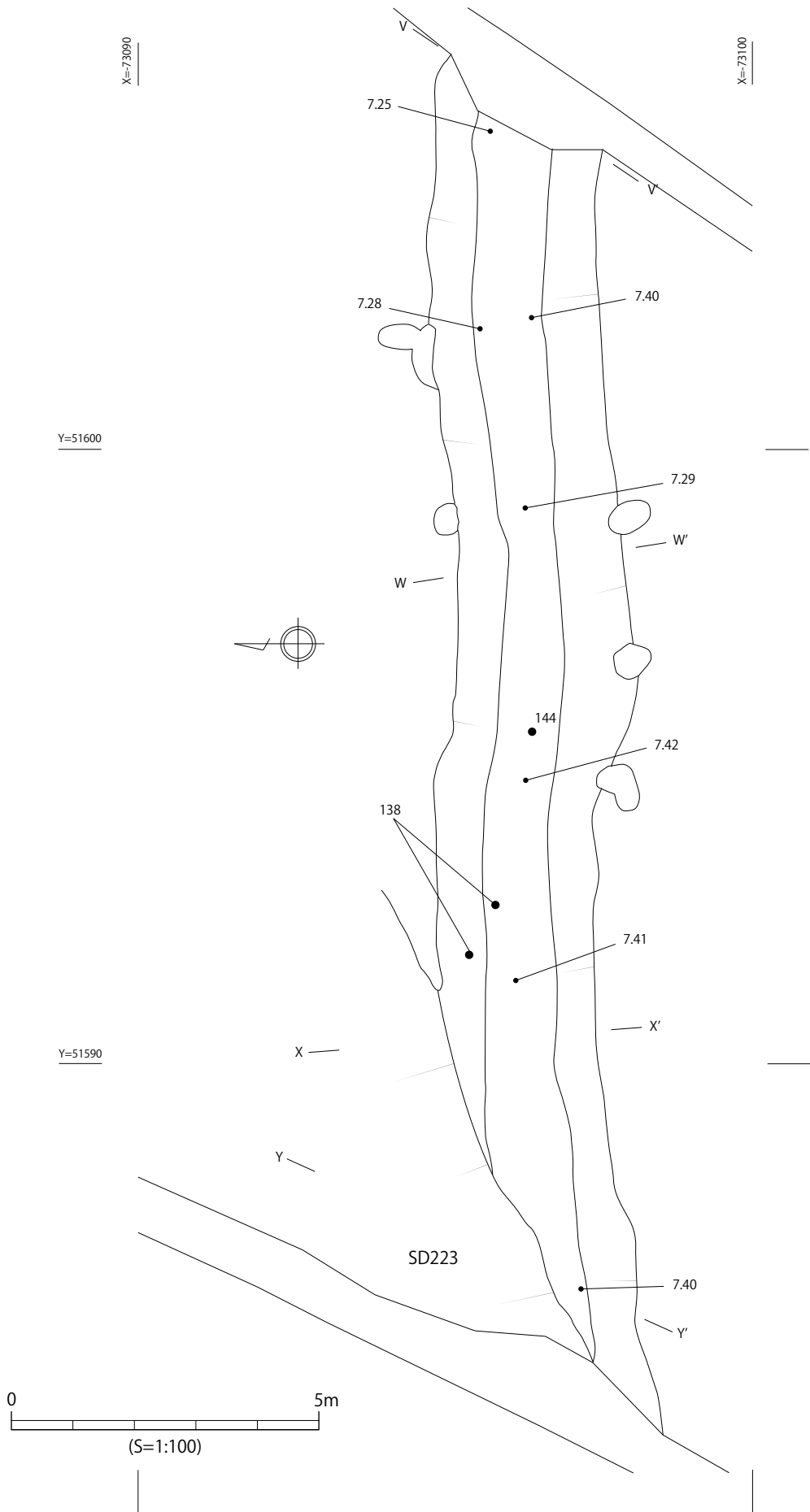


- |   |                  |          |
|---|------------------|----------|
| 1 | オリーブ褐色 (2.5Y4/4) | 砂質、地山礫含む |
| 2 | 褐色 (10YR4/6)     | 砂質       |
| 3 | 黄褐色 (2.5YR5/3)   | 砂質、地山礫含む |
| 4 | 褐色 (10YR4/4)     | 砂質、地山礫含む |

- |    |                  |                 |
|----|------------------|-----------------|
| 5  | にぶい褐色 (7.5YR5/4) | 砂質、地山礫含む、大きな礫含む |
| 6  | オリーブ褐色 (2.5Y4/3) | 砂質、地山礫含む        |
| 7  | 褐色 (7.5YR4/3)    | 砂質、地山礫含む        |
| 8  | 褐色 (7.5YR4/6)    | 砂質、地山礫含む、大きな礫含む |
| 9  | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂質              |
| 10 | 褐色 (7.5YR4/4)    | 砂質              |
| 11 | にぶい褐色 (7.5YR5/3) | 砂質              |
| 12 | 灰褐色 (7.5YR4/2)   | 砂質、水性堆積         |
| 13 | 暗褐色 (7.5YR3/3)   | 砂質              |
| 14 | 暗褐色 (10YR3/3)    | 砂質              |
| 15 | 明黄褐色 (2.5YR6/8)  | (地山)            |



第 107 図 SD223 実測図



第 108 图 SD222 実測図

## VV' SD222 東壁土層

土層番号	色調		備考
1	盛土		
2	黒褐色	10YR3/2	粘質、しまり良 (第3層)
3	黒褐色	10YR2/2	
4	暗褐色	10YR3/4	地山礫含む、しまり良
5	黒褐色	7.5YR3/2	地山礫含まない、しまり良
6	暗褐色	7.5YR3/3	地山礫含む、しまり良
7	暗赤褐色	5YR3/2	地山礫含む、しまり良、砂質

## WW' SD222 中央土層

土層番号	色調		備考
1	黒褐色	10YR2/2	砂質
2	灰褐色	5YR4/2	砂質
3	灰褐色	5YR5/2	砂質、地山礫含む
4	暗褐色	10YR3/4	砂質、地山礫含む
5	暗褐色	7.5YR3/3	砂質、地山礫含む
6	暗褐色	10YR3/3	砂質、地山礫含む
7	にぶい赤褐色	5YR4/3	砂質
8	明黄褐色	2.5Y6/8	砂質、しまり良い、地山礫含む、水性堆積
9	黄灰色	2.5Y5/1	砂質、しまり良い、地山礫含む、水性堆積
10	黒褐色	10YR3/2	砂質
11	黄色	2.5Y8/8	砂質、砂礫、地山

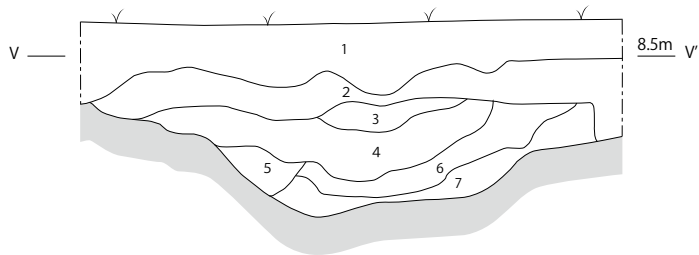
## XX' SD222・223 西側土層

土層番号	色調		備考
1	黒褐色	7.5YR3/1	遺構?
2	暗褐色	7.5YR3/3	砂質、地山礫含む SD223
3	暗褐色	10YR3/4	砂質、地山礫含む SD223
4	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	砂質 SD223
5	褐色	7.5YR4/4	砂質 SD223
6	褐色	10YR4/6	砂質、地山礫含む SD223
7	灰黄褐色	10YR4/2	砂質 SD223
8	黒褐色	10YR2/2	SD223
9	黒褐色	10YR3/2	SD222
10	褐色	7.5YR4/6	砂質、地山礫含む SD222
11	褐色	7.5YR4/3	砂質、地山礫含む SD222
12	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質、地山礫含む SD222
13	にぶい黄橙色	10YR6/3	砂質 SD222
14	褐色	7.5YR4/3	砂質 SD222
15	黄褐色	2.5Y5/3	砂質強い SD222
16	オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂質 SD223
17	灰黄褐色	10YR5/2	砂質、地山礫含む SD223

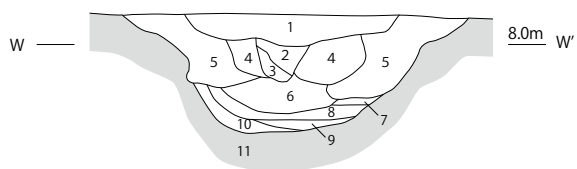
## YY' SD222・223 西壁土層

土層番号	色調		備考
1	盛土		
2	褐色	10YR4/4	粘質 第2層
3	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	砂質 第3層
4	暗褐色	7.5YR3/3	砂質 遺構
5	黒褐色	10YR2/2	遺構
6	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質 遺構
7	黒褐色	10YR3/2	砂質 遺構
8	暗褐色	7.5YR3/4	砂質、地山礫含む SD223
9	褐色	7.5YR4/4	砂質、地山礫含む SD223
10	暗赤褐色	5YR3/2	砂質、地山礫含む SD223
11	灰褐色	5YR4/2	砂質強い、地山礫含む SD222
12	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質強い、粗い大きな礫含む SD222
13	にぶい褐色	7.5YR6/3	砂質強い SD222
14	褐色	7.5YR4/3	砂質強い SD222
15	にぶい黄橙色	10YR7/4	砂質、地山礫含む SD222
16	にぶい赤褐色	5YR4/3	砂質強い SD223
17	褐色	10YR4/4	砂質強い SD223
18	暗褐色	7.5YR3/4	砂質強い SD223
19	オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂質強い SD223
20	暗褐色	10YR3/4	砂質強い SD223
21	明黄褐色	10YR6/6	砂質強い、水性堆積 SD223
22	にぶい黄橙色	10YR6/3	砂質強い、水性堆積 SD223
23	黄褐色	10YR5/8	砂質強い、地山 SD223

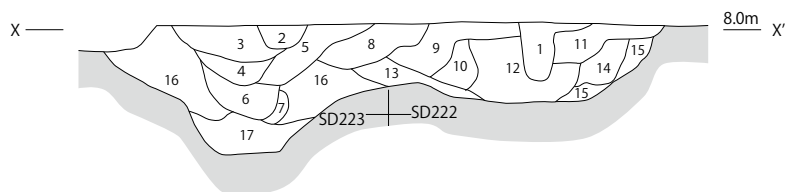
東壁



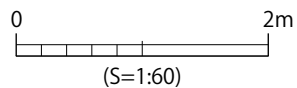
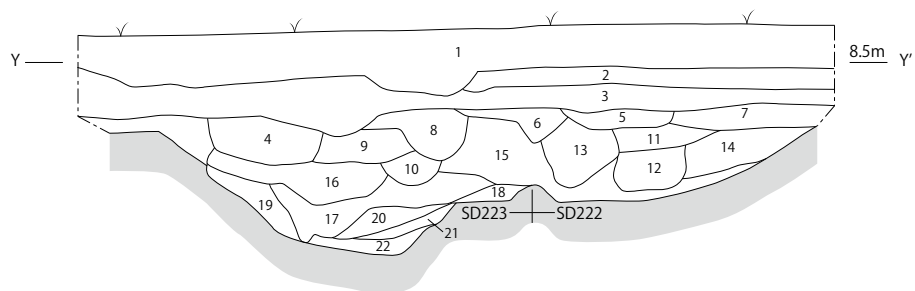
中央



西側



西壁



第 109 図 SD222・223 実測図



文とは異なりナデ調整が行われていない。132は大形の壺の底部である。133、134は甕である。口縁は直立し、5～6条の凹線文がある。135は口縁部と肩部に貝殻による文様があるが、胴部の調整もハケではなく貝殻で行っている。131はV-1様式、132はV-1～2様式、133、134はV-2様式、135はV-3様式と考えられる。

土器の量は少なく層の違いによる出土量の差や時期の違いを見いだすことはできなかった。遺構の時期は弥生時代後期初頭に掘削され、後期後葉まで溝としての機能があったと考えられる。

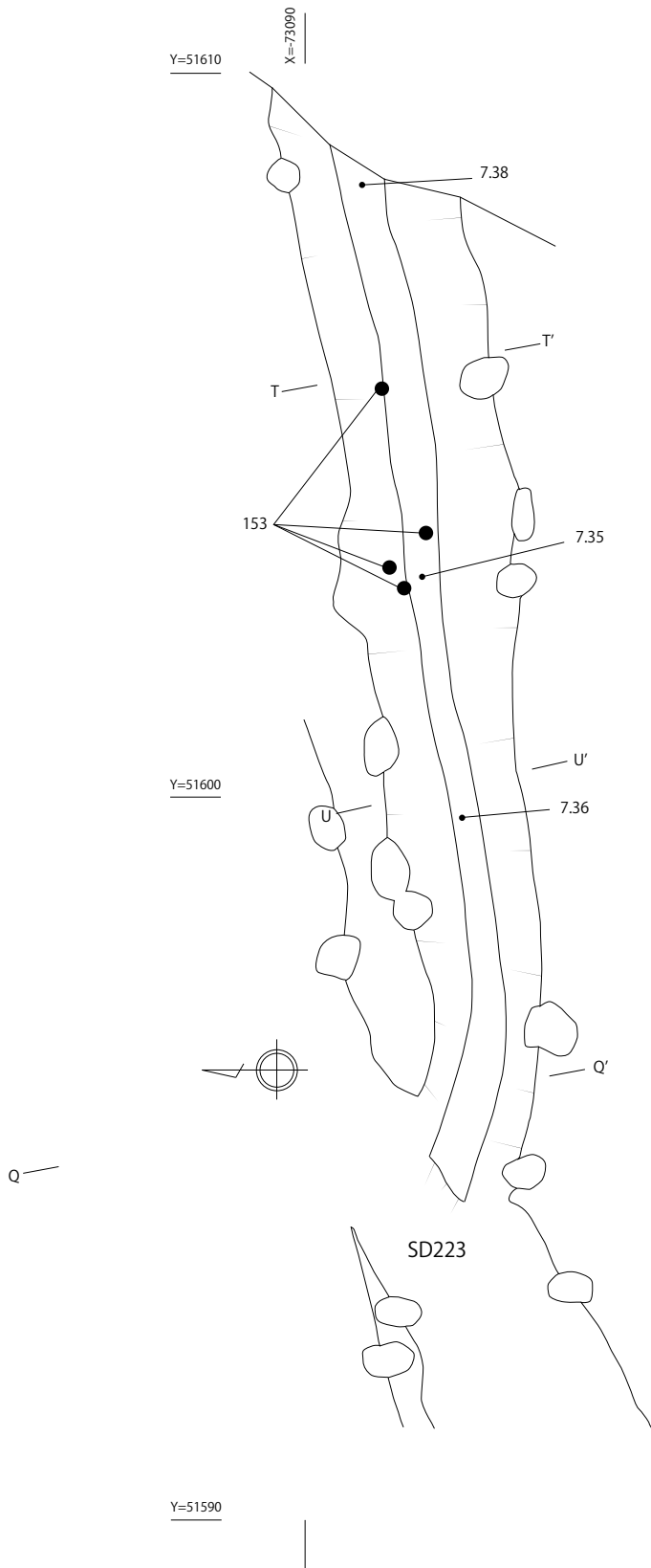
SD222（第108.109図） 調査区の中央北側、C16～E16に位置する。東西方向に伸びる。SD220やSD221の南側に位置する。SD223との先後関係は第109図で確認することができ、SD223に後出し、調査区の西端でSD223を切る。なお、SD223も再掘削を行っており、再掘削の段階でSD222を切っていることが第109図の土層XX'、YY'で確認することができる。現状で長さ20m、幅2.5～2.7m、深さ0.8～0.9mである。ほぼ直線的に伸びるが、西端でわずかに南へ屈曲するようである。底面はほぼ平坦である。断面は浅いU字形・半円形である。土層はSD221と同様に上位から中位まで黒褐色や暗褐色といった黒色系の土が堆積しているが、XX'やYY'ではこの黒色系の土は確認できなかった。SD222の中央から西側の土層XX'、YY'で顕著であるが、上位から掘削が認められるので、数度の再掘削が行われたと考えられる。調査時に湧水はなかったが、WW'では最下部の8、9層に水性堆積の痕が認められた。

遺物は弥生時代後期の土器や古墳時代前期初頭の土師器が出土した。136は壺である。頸が伸びて口縁部で屈曲する。137は肩部に直線文や波状文、刺突文など多くの装飾がある。138～141は甕である。口縁部の形態は多様であるが、口縁部に3～4条の凹線文がある点で共通する。149は口縁部が上方へ伸び、内外を赤彩する。胎土も他の土器とは異なり、外来系土器の可能性がある。142は中央に貫通する穴があることから蓋と判断した。137～140はV-1様式、136、141はV-2様式と考えられる。

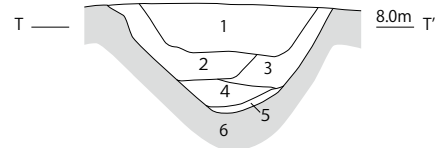
143は古式土師器の甕である。大形であることから、口縁部は厚く直線的に伸びる。144はほぼ完形の甕である。胴部最大径は中位にあり、口縁部が内傾して直線的に伸びる。口縁端部には面がある。肩部には櫛描直線文の後に波状文を施文する。上から見て時計回りに施文しており、部分的に2周している箇所もある。底部は平底で、内面は底部ではなく底よりも少し上の部分に指頭圧痕が多くついている。145はく字形口縁の甕である。図上で合成した。口縁端部は面があり、わずかに下方へつまみ出すような形になっている。肩部には櫛描直線文の後に波状文がある。底部は平底であるが、指頭圧痕は目立たない。胎土や色調に他の土器との違いを見だし難い。146は小形の壺である。147は小形の高坏の脚部と考えられる。148は鼓形器台である。稜は鋭く、斜め下方に突出する。143は口縁部が直線的であることから草田5期、144は口縁部が内傾すること、145は下古志遺跡一次調査B区SI04出土土器と類似することから草田6期と考えられる。

SD222から出土した土器の量は少ないが溝の上位から下位まで出土し、層の違いによる出土量の差を見いだすことはできなかった。また、下層から137、141、144が出土するなど、層位による時期の違いを見いだすことはできなかった。遺構の時期は弥生時代後期初頭に掘削され、古墳時代前期初頭まで溝としての機能があったと考えられる。

なお、SD223とSD222が合流する部分から土器が出土しているが、どちらの遺構に属するか不

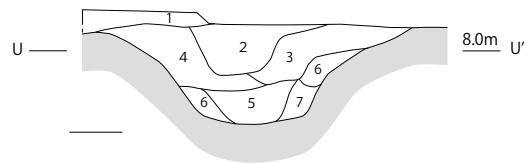


東側

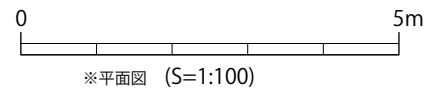
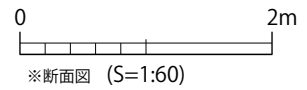


- 1 黒褐色 (10YR2/2) 砂質
- 2 黒褐色 (10YR2/3) 砂質、地山礫含む
- 3 黒褐色 (10YR3/2) 砂質、地山礫含む
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 砂質、地山礫含む
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質、水性堆積
- 6 明黄褐色 (10YR7/6) (地山)

西側



- 1 黒褐色 (10YR3/1) 粘質
- 2 黒褐色 (10YR2/2) 粘質、地山礫含まない
- 3 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質、地山礫含まない
- 4 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質、地山礫含む
- 5 暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質、地山礫多く含む
- 6 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質、地山礫含まない
- 7 褐色 (7.5YR4/3) 砂質、地山礫含まない



第 110 図

SD221 実測図

明であることから、便宜上この部分で述べる。図示したものはいずれも甕である。150 は口縁部が直立し、上方へ伸びる。胴部外面下半にはヘラミガキが顕著である。151 は頸部から口縁部へ伸びるが、わずかに口縁部を拡張するものである。肩部には刺突文を施す。152 は頸部内面に稜がある。これらの土器は V-1 様式と考えられる。

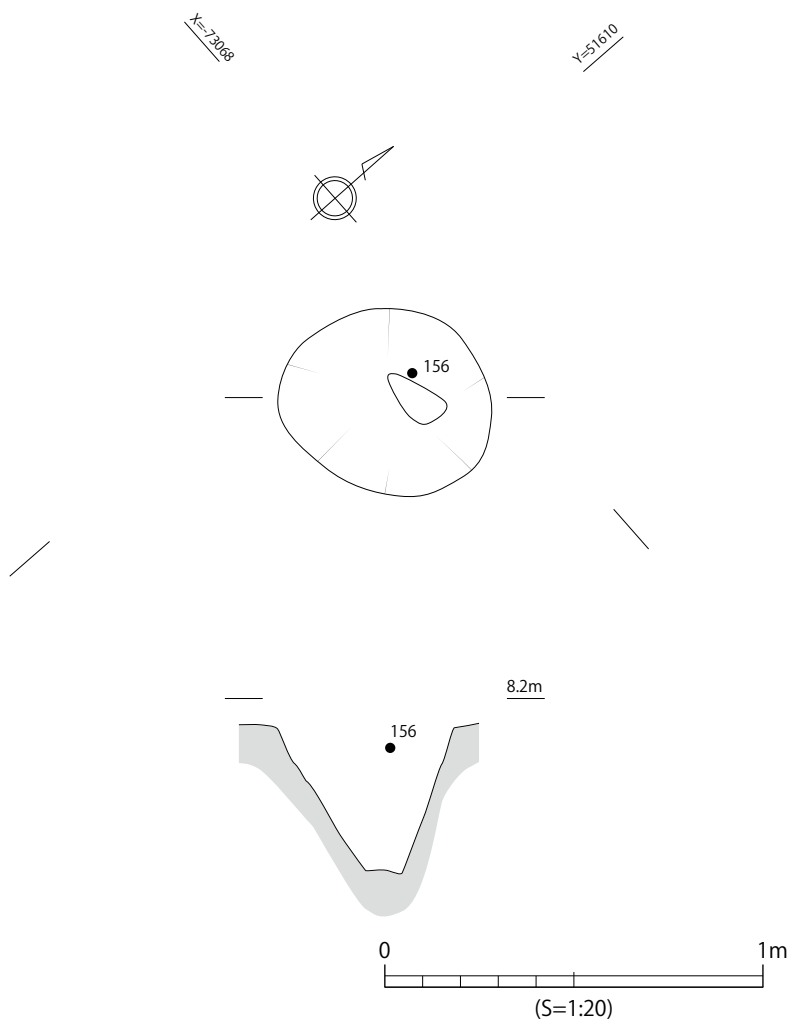
SD221 (第 110 図) 調査区の中央北側、E15、D16、E16 に位置する。ほぼ東西方向に伸びる。SD220 の南側に位置する。SD220、SD223 との先後関係は第 97 図や第 109 図の土層で確認することができ、SD220 に先行し、SD223 に後出する。現状で長さ 14 m、幅 1.3 ～ 2.5 m、深さ 0.8 m である。直線的であるが、SD220 に接するあたりで、SD220 の方である北西側へ屈曲する。SD223 との関係は、SD223 とレベル差があること、SD221 が SD223 へ続くには SD220 に接する部分で再度屈曲し、直線的に伸びることになることから、SD223 とは別の遺構と判断した。底面はほぼ平坦であり、SD220 よりも浅い。断面は東側では U 字形であるが、西側は逆台形に近い。土層は上位から中位までは暗褐色土が堆積している。暗褐色土の上位から掘削が認められるので、数度の再掘削が行われたと考えられる。下位にはやや明るい黄褐色や灰褐色の土が堆積している。調査時に湧水はなかったが、WW' では最下部に水性堆積の痕が認められた。

遺物は弥生時代後期の土器が出土した。153 は大形の壺である。頸部に太い凹線文が 5 条ある。154 は甕である。口縁部が上方に伸びる。共に V-1 様式である。図示したもの以外に壺や甕の破片があるが、V-1 ～ 2 様式におさまる。遺構の時期は弥生時代後期初頭に掘削され、後期中葉までは溝としての機能があったと考えられる。

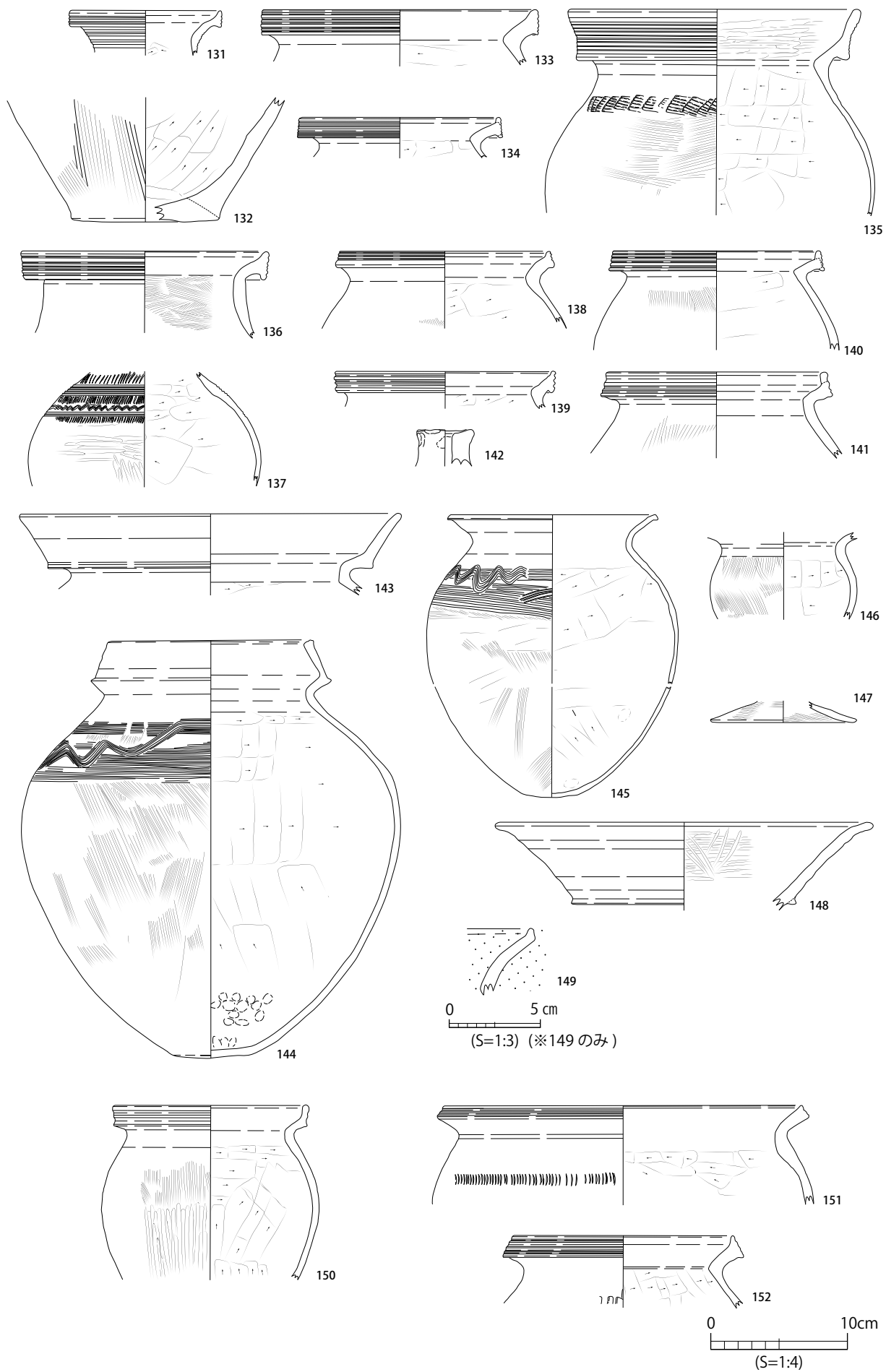
その他、156 は Pit2261 から出土した土師器である。口縁部はく字形であり、端部は水平方向に伸びる。胴部の調整はタテハケである。次節に述べる奈良・平安時代の土師器に比べると硬質なので、古墳時代の土師器と判断した。

#### 遺構外出土土器 (第 114 図)

157 は口縁部端部に接して突帯状のふくらみがあり、外面に V 字の刻み目がある。内外面はハケ調整である。弥生前期の突帯文系土器の可能性もある。158 は 2 条の刻み目のある突帯の間をヨコナデして凹線文に仕上げている。広口壺の頸部と考えられる。159、160 は口縁部の破片であり、外面に凹線文がある個体である。159 は口縁部端部に赤彩がある。159 は鉢の可能性、160 は高坏と考えられる。161 は小形の鉢である。162 は広口壺の口縁部である。163 は頸部に凹線文とヘラ描沈線があるが、ヘラ描沈線は凹線文に比べてやや雑な印象を受け、上下している。164、165 は甕である。口縁部が上方へ伸び、3 条または 4 条の凹線文がある。166 の口縁部側はヨコナデ、その下には 8 条の櫛描直線文がある。口縁部下の稜は突出しない。167 は口縁部をヨコナデしており、口縁部は厚い。胴部外面はタテハケ後丁寧なナデ調整である。172 は甕の底部である。熱を受けており、煤が付着している。168 ～ 171 は高坏である。168 は脚部中程に沈線があり、その上下には縦方向の沈線が 2 条一単位で七方向に施されている。外面は丁寧なヘラミガキである。169 は磨滅により判らない部分が多いが、脚部と坏部の接合は円板充填ではないようである。158 ～ 160 は IV 様式、162 ～ 165 は V-1 様式、168 ～ 171 の高坏は V-1 ～ 2 様式、166、167

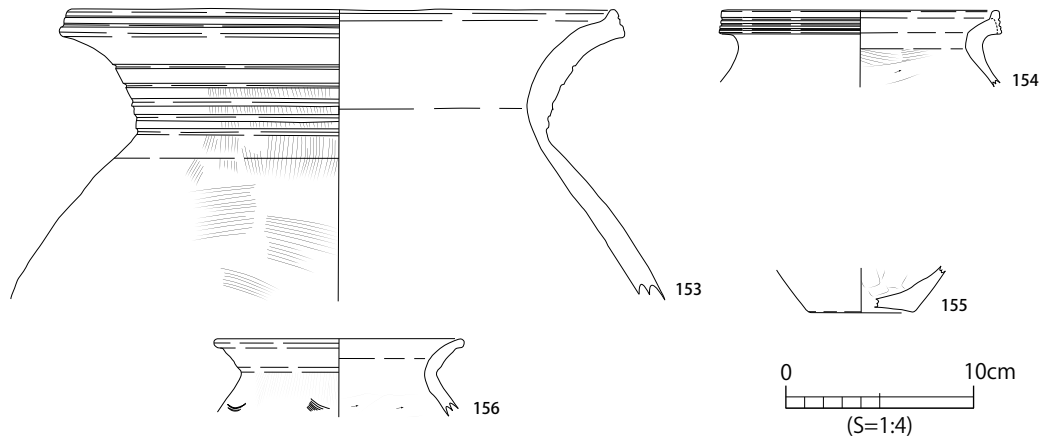


第 111 图 Pit2261 実測図



第 112 図

SD223・SD222 出土土器実測図

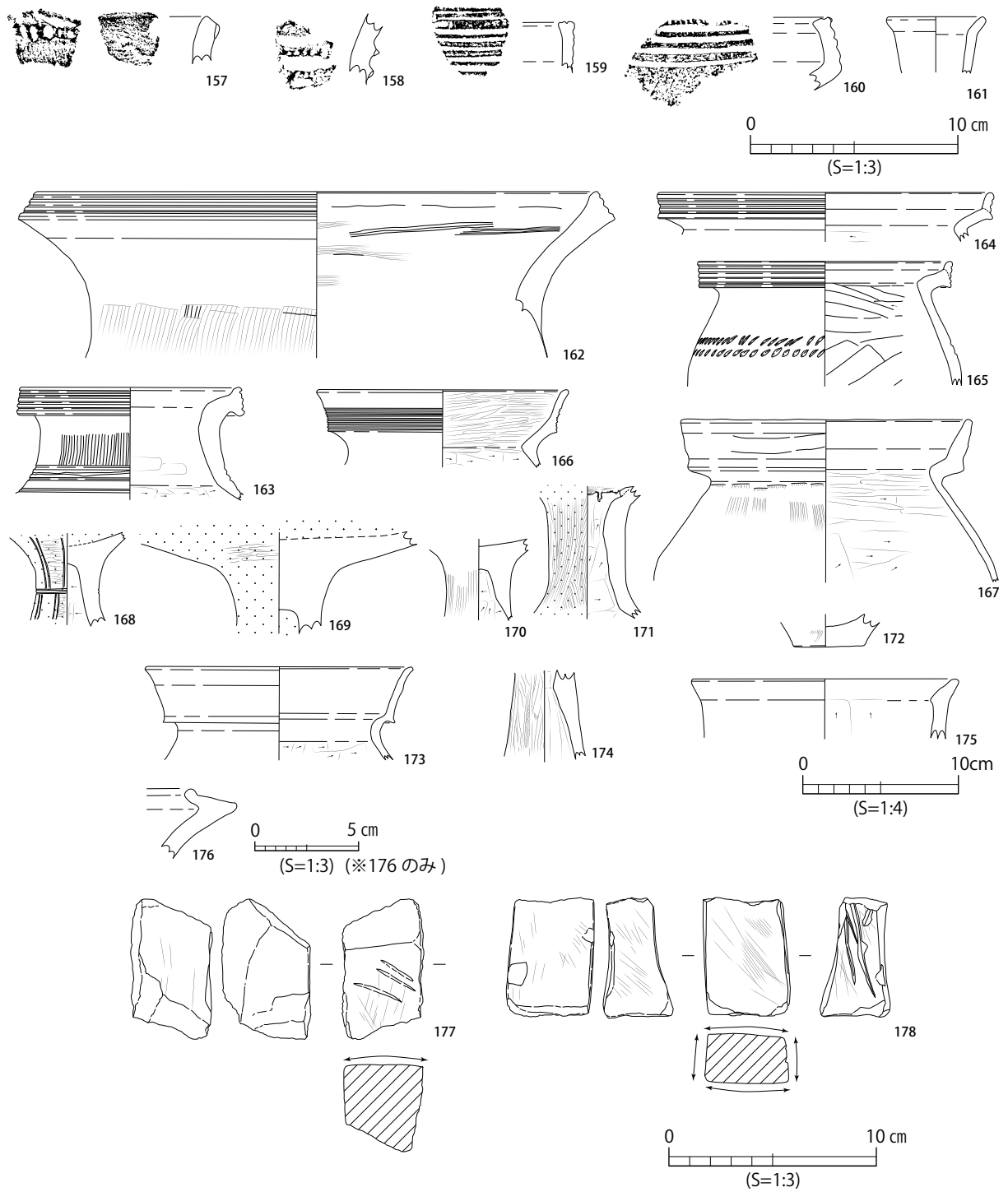


第 113 図 SD221・Pit2261 出土土器実測図

第 13 表 SD223・222・221・Pit2261 出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の 寸法	残存率	形態・文様の 特徴	色調	備考
131	112	116	弥生土器	壺	C 1 6 / SD223		(10.9)				15	凹線文 3 条、 頸部に沈線	浅黄橙 10YR8/3	V-1
132	112	116	弥生土器	壺	D 1 6 / SD223	下				底径 (9.2)	25		外：黄灰 2.5Y4/1、 内：暗黄灰 2.5Y5/2	
133	112	116	弥生土器	甕	C 1 6 / SD223		(20.2)				10	凹線文 5 条	外：にぶい 橙 7.5YR7/4、内：に ぶい黄橙 10YR7/4	V-2、直立 2
134	112	116	弥生土器	甕	C 1 6 / SD223		(14.6)				10	凹線文 6 条	橙 7.5YR7/6	V-2、直立 2
135	112	115	弥生土器	甕	D 1 6 / SD223		20.9		(24.0)		口縁ほ ぼ完存	貝殻直線文 9 条、肩部に貝 殻刺突文、煤 厚く付着、内 面に内容物付 着	外：黒 褐 10YR3/2、内：に ぶい黄橙 10YR7/4	V-3、外反 2
136	112	116	弥生土器	壺	D 1 6 / SD222		(17.8)				20	凹線文 5 条	外：にぶい黄橙 10YR7/4、内：オ リーブ黒 5Y3/1	V-2
137	112	116	弥生土器	壺	D 1 6 / SD222	下			(17.0)		25	繊維を束ねた 工具による刺 突文、直線文、 波状文、外面 に薄く煤付着	外：にぶい黄橙 10YR6/4、内：灰 5Y5/1	V-1
138	112	117	弥生土器	甕	D 1 6 / SD222	中	(15.4)				30	口縁の上半に 凹線文 3 条	浅黄橙 10YR8/3	V-1、内傾 2
139	112	117	弥生土器	甕	D 1 6 / SD222		(15.9)				15	凹線文 3 条	外：灰 白 10YR8/2、内：黄 橙 10YR8/8	V-1、直立 3
140	112	117	弥生土器	甕	E 1 6 / SD222	中	(15.0)				20	凹線文 4 条	にぶい黄橙 10YR7/4	V-1、内傾 4
141	112	117	弥生土器	甕	E 1 6 / SD222	下	(15.8)				10	凹線文 3 条	外：にぶい黄橙 10YR7/4、内：淡 黄 2.5Y8/3	V-2、内傾 2
142	112	117	弥生土器	蓋	E 1 6 / SD222	中					現存部 完存	孔は貫通	褐灰 10YR4/1	
143	112	117	古式土師器	甕	E 1 6 / SD222	中	(27.8)				10	磨滅	外：浅黄橙 10YR8/4、内：に ぶい黄橙 10YR7/4	草田 5 期
144	112	115	古式土師器	壺	D 1 6 / SD222	下	14.7	30.6	27.6	底径 5.7	ほぼ完 形	肩部に直線文 と波状文、平 底	明黄褐 10YR7/6	草田 6 期
145	112	115	古式土師器	甕	D 1 6 / SD222		15.0	(20.6)	(18.4)		55	肩部に直線文 と波状文、内 外煤付着	外：黄 橙 10YR7/8、内：浅 黄橙 10YR8/4	く字口縁
146	112	117	古式土師器	鉢?	E 1 6 / SD222	中					20		外：橙 7.5YR7/6、 内：にぶい黄橙 10YR7/4	
147	112	117	古式土師器	高坏	D 1 6 / SD222					脚径 (10.7)	15		外：橙 7.5YR7/6、 内：黒褐 2.5Y3/1	

遺物 番号	挿 番 号	写真 版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	胴径	その他の 寸法	残存率	形態・文様の 特徴	色調	備考
148	112	117	古式土師器	鼓形 器台	E 1 6 / SD222	上・ 中	(27.0)				15		浅黄橙 10YR8/4	
149	112	117	弥生土器	壺	E 1 6 / SD222	中						内外赤彩	明赤褐 5YR5/6	外来系?
150	112	118	弥生土器	甕	C 1 6 / SD222. SD223 合 流部		(13.9)				15	凹線文2条、 煤付着	外:橙 7.5YR7/6、 内:黄橙 10YR7/8	V-1、直立1
151	112	118	弥生土器	甕	C 1 6 / SD222. SD223 合 流部		(26.0)				15	凹線文2条、 刺突文、やや 軟質	外:橙 5YR6/8、内: 橙 5YR6/6	V-1、内傾1
152	112	118	弥生土器	甕	C 1 6 / SD222. SD223 合 流部		(16.0)				30	凹線文4条、 磨滅	外:褐 灰 10YR5/1、内:灰 白 10YR8/2	V-1、内傾4
153	113	118	弥生土器	壺	E15.E16/ SD221	上	28.7				口縁部 完存	凹線文2条、 頸部に太い凹 線文5条、磨 滅	黄褐 10YR8/6	V-1
154	113	118	弥生土器	甕	E 1 6 / SD221	上	(14.8)				15	凹線文3条	外:黒 褐 10YR3/1、内:灰 黄褐 10YR4/2	V-1、直立2
155	113	118	弥生土器	壺	E 1 6 / SD221	上				底 径 (5.6)	25		にぶい黄 橙 10YR7/4 ~ 黒 褐 10YR3/1	
156	113	118	土師器	甕	Pit2261		(13.4)				25		にぶい黄 橙 10YR7/4	く字口縁



第 114 図 遺構外出土遺物実測図 1



第 14 表 遺構外出土遺物観察表 1

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	その他の 寸法	残存率	形態・文様の特徴	色調	備考
157	114	119	弥生土器	甕	D 1 8 / SD202					V 字の刻み目	橙 5YR6/8	突帯文系土器か？
158	114	119	弥生土器	壺	D16	3				広口壺、突帯の間は凹線	浅黄橙 10YR8/3	IV 様式
159	114	119	弥生土器	鉢？	C20	2				口縁端部と外面に凹線文、一部赤彩	灰白 2.5Y8/2	IV 様式
160	114	119	弥生土器	高坏	F14	2				刺突文、凹線文	淡黄 2.5Y8/3	IV 様式
161	114	119	弥生土器	鉢	C16/2 区 -1	3	(6.0)		10		にぶい黄橙 10YR7/4	漆採集容器の可能性
162	114	120	弥生土器	壺	D18	3	(35.8)		20	凹線文 3 条	外：黄橙 10YR8/6、 内：明黄褐 10YR7/6 ~ 浅黄橙 10YR8/4	IV-2 ~ V-1
163	114	119	弥生土器	壺	E16	3	(13.9)		15	口縁と頸部に凹線文	外：黄褐 2.5Y5/3、 内：にぶい黄橙 10YR7/4	V-1
164	114	119	弥生土器	甕	B18	3	(21.4)		10	太い凹線文 3 条	にぶい黄橙 10YR7/4	V-1、直立 1
165	114	119	弥生土器	甕	E14	3	(16.4)		20	凹線文 4 条、刺突文 2 列	橙 5YR6/6 ~ 灰黄褐 10YR5/2	V-1、直立 1
166	114	119	弥生土器	甕	D16	3	(16.0)		15	櫛描直線文 8 条、口縁部一部ヨコナデ	外：灰黄褐 10YR4/3、内：淡黄 2.5Y8/3	V-3、外反 1
167	114	119	弥生土器	甕	F15	3	16.6		70	口縁部ヨコナデ、煤付着、軟質	橙 5YR6/8	V-3、外反 1
168	114	119	弥生土器	高坏	D15	3			現存部 完存	外面赤彩、七方向の縦の沈線	にぶい黄橙 10YR7/4	後期前半
169	114	120	弥生土器	高坏	E15	3			現存部 完存	内外赤彩、風化により調整不明	にぶい橙 7.5YR7/4	後期前半
170	114	119	弥生土器	高坏	D15	3			現存部 完存		にぶい黄褐 10YR4/3	
171	114	119	弥生土器	高坏	C16/2 区 -1	3			脚柱部 完存	外面赤彩	外：赤 10R4/6、内： にぶい橙 7.5YR7/4	後期前半
172	114	119	弥生土器	甕	E14	2		底径 4.5	現存部 完存	煤付着、被熱	外：にぶい黄橙 10YR6/3、内：にぶ い黄橙 10YR6/4	
173	114	120	古式土師器	甕	D18	3	(17.0)		20		外：橙 7.5YR6/6、内： 明黄褐 10YR6/6	草田 5 期
174	114	120	古式土師器	高坏	A19	3			45		外：褐灰 10YR6/1、 内：にぶい黄橙 10YR7/2	
175	114	119	弥生土器？	不明	C16/2 区 -1	3			10		灰黄褐 10YR4/2	
176	114	120	古式土師器	壺	A19	3				内傾した端面から上方へ立ち上がる	にぶい黄橙 10YR7/4	

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	形態の特徴
177	114	120	石器	砥石	C19	3	(6.8)	(3.9)	(4.2)	113.7	1 面を使用
178	114	120	石器	砥石	C17	3	(6.0)	4.4	3.6	136	4 面を使用

は V-3 様式と考えられる。

173 は甕である。口縁部が直線的に伸び、口縁端部は丸くおさめる。口縁部下の稜は斜め下方につまみ出すように突出する。草田 5 期の特徴を持つ。176 は壺である。口縁部が内傾して、斜め上方に立ち上がる。胎土は他の土器と似ている。175 は口縁部内面が斜めになる。弥生土器か土師器か判断ができなかった。

177、178 は石器の砥石である。177 は 1 面を使用しているが、使用痕は顕著ではない。178 は 4 面を使用しており、よく使い込まれている。

弥生中期後葉では、溝を 4 本確認したが、遺物量はきわめて少ない。下古志遺跡 1 次調査の D 区や E 区では溝から中期後葉の土器が多く出土していることと対照的である。この背景には、中期後葉の遺跡の中心は 1 次調査の D 区や E 区といった、古志本郷遺跡よりの位置にあり、今回調査した 2 区の南西側は遺跡の端に位置するので、浅い溝を複数掘削することによって遺跡の範囲を区画したと考えられる。

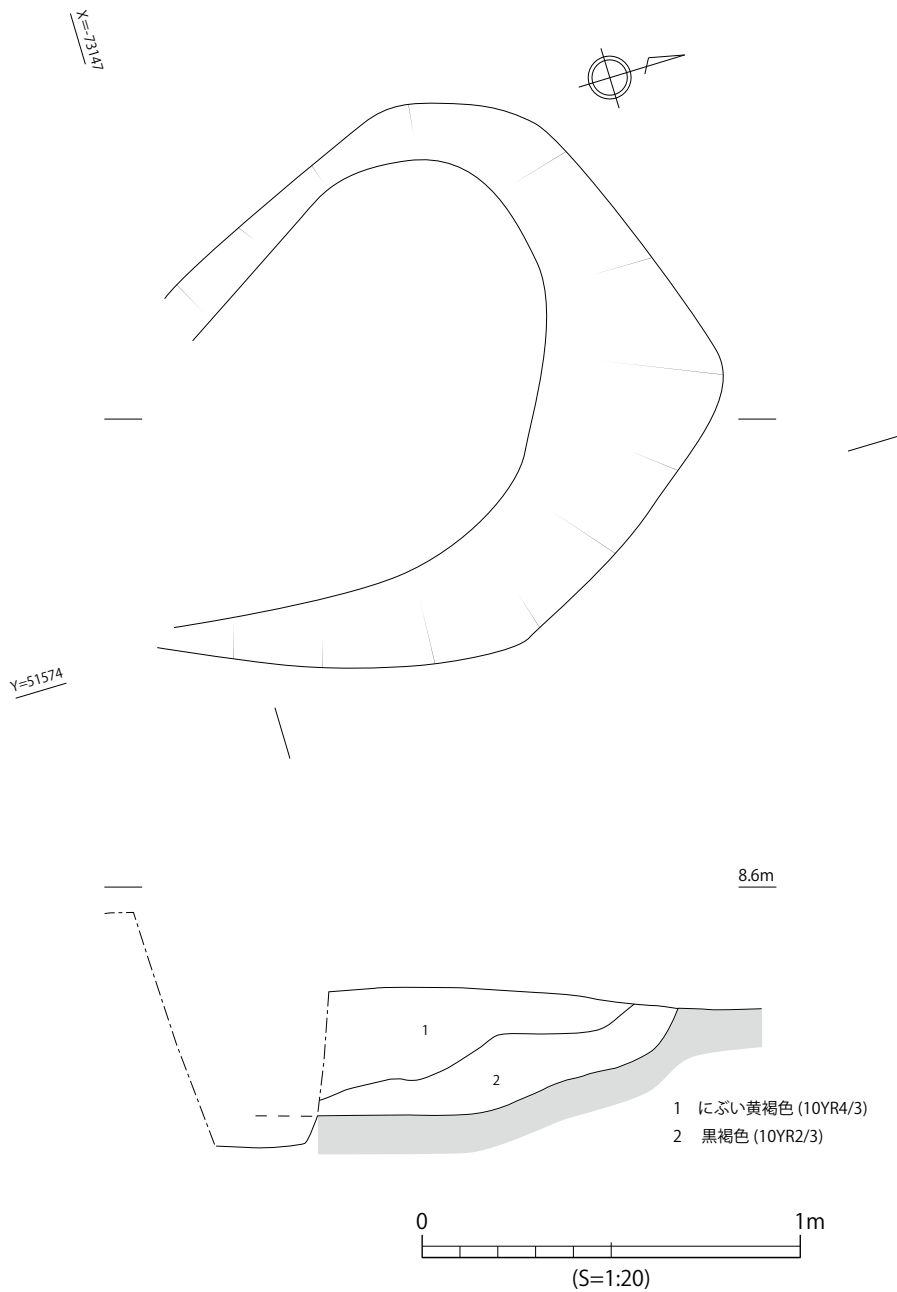
この様相は弥生後期に大きく変わる。5 本の溝を確認したが、いずれも中期後葉の溝に比べて規模が大きくなっており、出土する土器の量も多くなっている。このうち SD220 から出土した土器の量が最も多かった。これは SD220 が集落に最も近い場所に位置しており、土器が流れ込んだり廃棄される機会が多かったからではないかと考えられる。このことと SD220 の規模が最も大きく、再掘削が複数回行われていることとも関連すると考えられる。

遺構の切りあい関係から判断すると、V-1 様式の時期に SD223 が最初に築かれた。その後 SD223 を切る形で SD221 と SD222 が築かれる。これら 3 本の溝は幅 2.5 ～ 2.7 m、深さ約 1m の同じような規模であり、わずかに場所を変えつつ機能していたことを想定することができる。その後同じ V-1 の段階に大規模な SD220 が築かれ、この段階に至り下古志遺跡の「区画」としての要素が強調されたと考えられる。なお、同時期の溝には他に SD202 がある。SD221 と SD223 は後期中葉～後葉には埋まり、溝としての機能を失ったと考えられる。

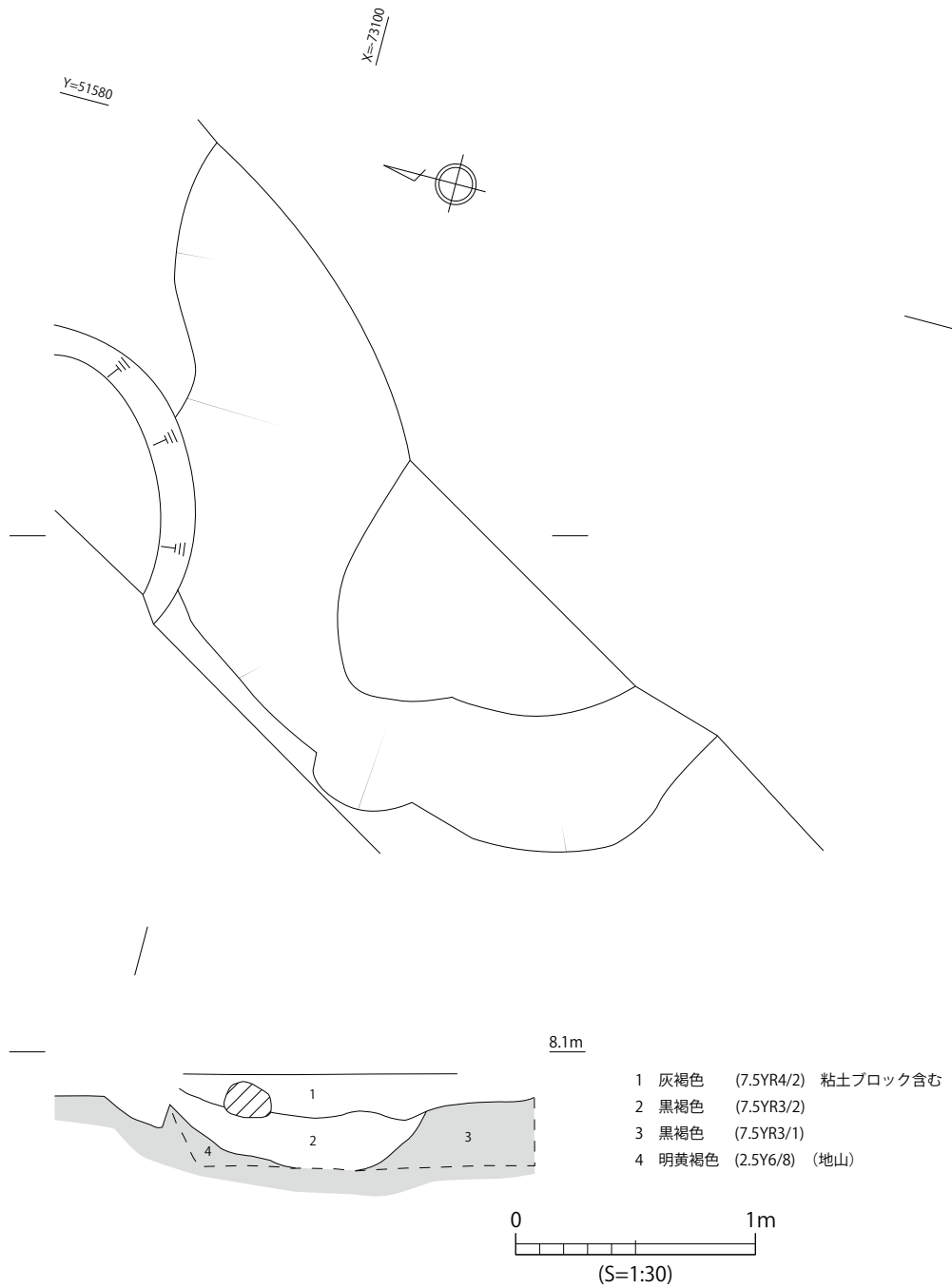
#### 第 4 節 奈良時代・平安時代の遺構と遺物

SK201 (第 115 図) 調査区の南端、B21 に位置する。現状で長さ 1.6 m、幅 1.3 m、深さ 0.3 m であり、さらに南へ続く。平面形は円形と考えられる、断面は半円形・浅い U 字形である。埋土は 2 層ある。遺物は須恵器の甕片を図示した (第 118 図 179) ほか、土師器片が出土した。出土土器の数が少ないが、遺構の時期は奈良・平安時代の可能性がある。

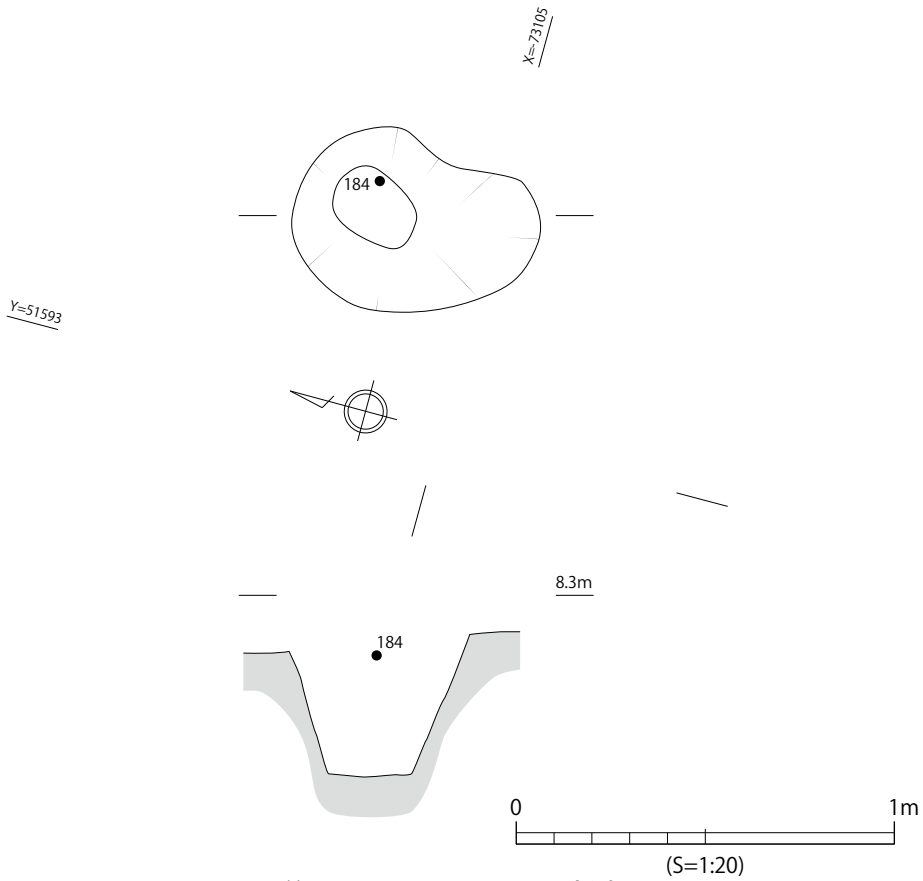
SX207 (第 116 図) 調査区の西側、B16、B17 に位置する。現状で長さ 3.2 m、幅 1.3 m、深さ 0.4 m であり、さらに東へ続く。平面形は円形と考えられる、底面から湧水があり、底面まで掘削を行うことができなかったが、断面は半円形の可能性がある。井戸の可能性はあるが、性格を限定することはできなかった。遺物は細片ではあるが奈良・平安時代の須恵器・土師器が出土し、赤彩土師器と須恵器を図示した (第 118 図 180 ～ 183)。出土土器が少ないが遺構の時期は、奈良・平安時代の可能性がある。



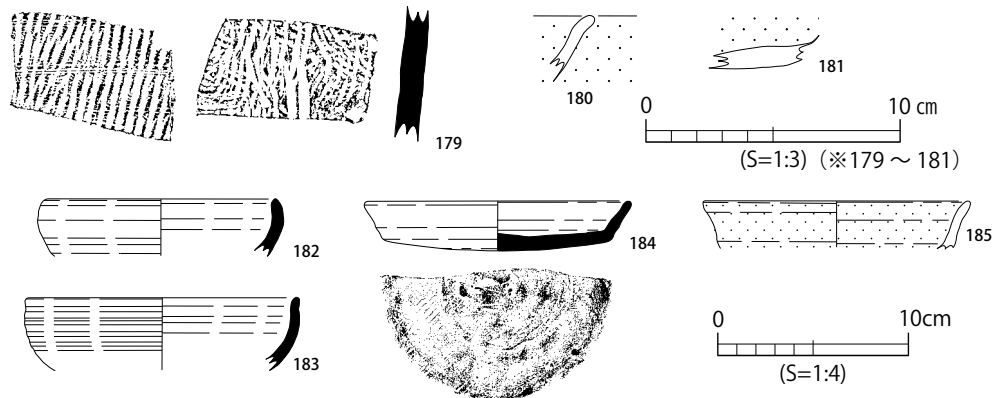
第 115 図 SK201 実測図



第 116 図 SX207 実測図



第 117 図 Pit2371 実測図



第 118 図 遺構出土土器実測図 1

第 15 表 遺構出土遺物観察表 1

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点 / 遺構	口径	器高	残存率	形態・文様の特徴	色調	備考
179	118	121	須恵器	大甕	B21/SK201					外：暗青灰 5PB4/1、 内：青灰 5B5/1	
180	118	121	赤彩土師器	坏	B17/SX207				内外赤彩	外：明赤褐 5YR5/8、 内：橙 5YR6/8	
181	118	121	赤彩土師器	坏	B17/SX207				内外赤彩、底部へ ラ切り	外：橙 7.5YR4/6、内： 明赤褐 5YR5/6	
182	118	121	須恵器	坏	B17/SX207	(12.0)		10		灰 10YR5/1	坏 I 類 A6
183	118	121	須恵器	坏	B17/SX207	(14.0)		10		灰 7.5YR5/1	坏 I 類 A2 ?
184	118	121	須恵器	皿	Pit2371	13.7	2.6	50	火だすき痕、底部 へラ切り後未調整	灰 7.5YR6/1 ~ 灰 N4	皿 I 類 C1
185	118	121	赤彩土師器	坏	Pit2247	(10.4)		10	内外赤彩	明赤褐 2.5YR5/8	

そのほか、184はD17に位置するPit2371の上面から出土した。184は須恵器の皿である。底部は突出し、底部の調整はヘラ切り後未調整である。185はF14に位置するPit2247から出土した土師器である。

#### 遺構外出土遺物（第120.121図）

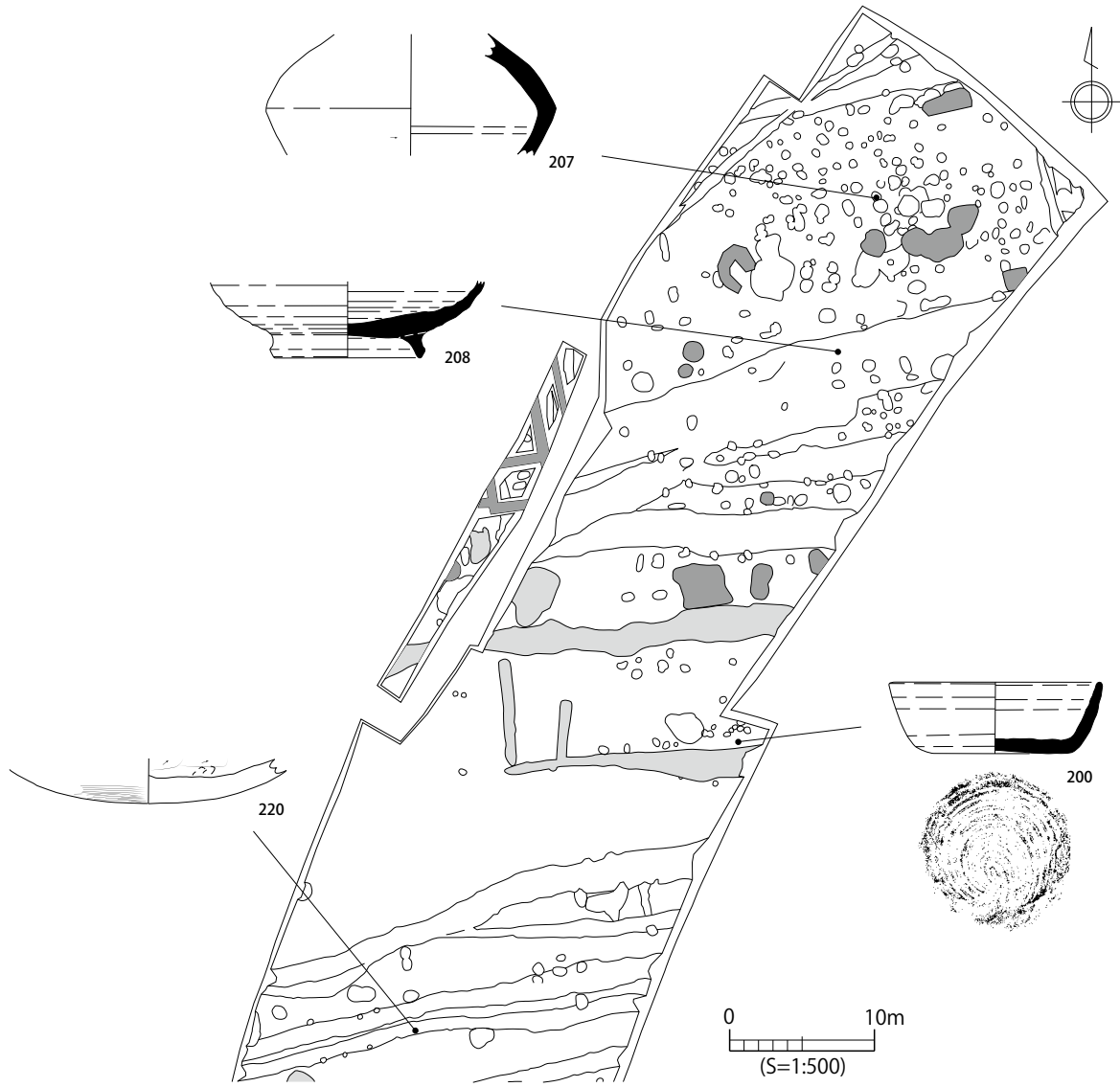
第120図は須恵器である。186～192は蓋である。186の天井部はケズリ調整である。大谷分類の蓋A8類と考えられる。187～189は輪状つまみの部分である。いずれも輪状の部分の径は大きい。187と189の輪状つまみの内面はなだらかであるが、188は段状でなる。190の端部は折り返して外面をナデ調整している。191は口縁部へ向かい屈曲して下方に伸びる。192は大形に復元できる蓋である。口縁部は下方に僅かに伸びる。193～203は坏である。193～195は高台付坏である。193は器高のわかるものである。体部は曲線的に口縁部へ至る。高台は高い。194は底部外面にヘラ描きで「×」印がある。高台は「ハ」字状である。195は底部の内側に高台が付き、高台が低いことから坏IIB類の可能性もある。196～203は高台をもたない坏である。底部は回転糸切りがほとんどである。196は体部が曲線的に口縁部へ至る。口縁部は丸くおさめる。坏I類A4型式と考えられる。199は底部が平坦で、体部は直線的である。200は完形である。底部から屈曲して直線的に口縁部へ至る。これらは196より後出し、B1～B2型式と考えられる。197は底部が突出し、体部は直線的である。B2形式と考えられる。202は静止糸切りの可能性がある。203は内面に平滑な部分があり、墨の痕が残る。204は高台をもつ皿である。焼成は軟質である。高台は低く、断面四角形であることから、新しい特徴を持つ。205～211は壺である。207は胴部に稜があることから長頸壺A5型式と考えられる。208は高台が短く「ハ」字状であることから、A4型式と考えられる。212～216は甕である。212は口縁部がゆるやかに外反する。214は口縁端部に段があり、その下に細かな波状文がある。215は口縁部外面に波状文と沈線をもつ。甕の胴部片の出土量が多いが、破片になっているものが多く、216のみを図示した。

第121図は土師器である。217～219は甕である。口径が30cm前後で口縁部は「く」字状である。217や219から復元するとあまり胴の張らない器形になるようである。口縁部は厚く作り、頸部内面にはヘラケズリによる稜を明確にもつ。220から判断すると、底部は平底気味になるようである。221～226は内外を赤彩した土師器である。破片が多く、6点を図示した。221、222は坏である。体部は直線的である。223～225は皿である。224は口縁部内に段がある。225は内外を磨き調整する。

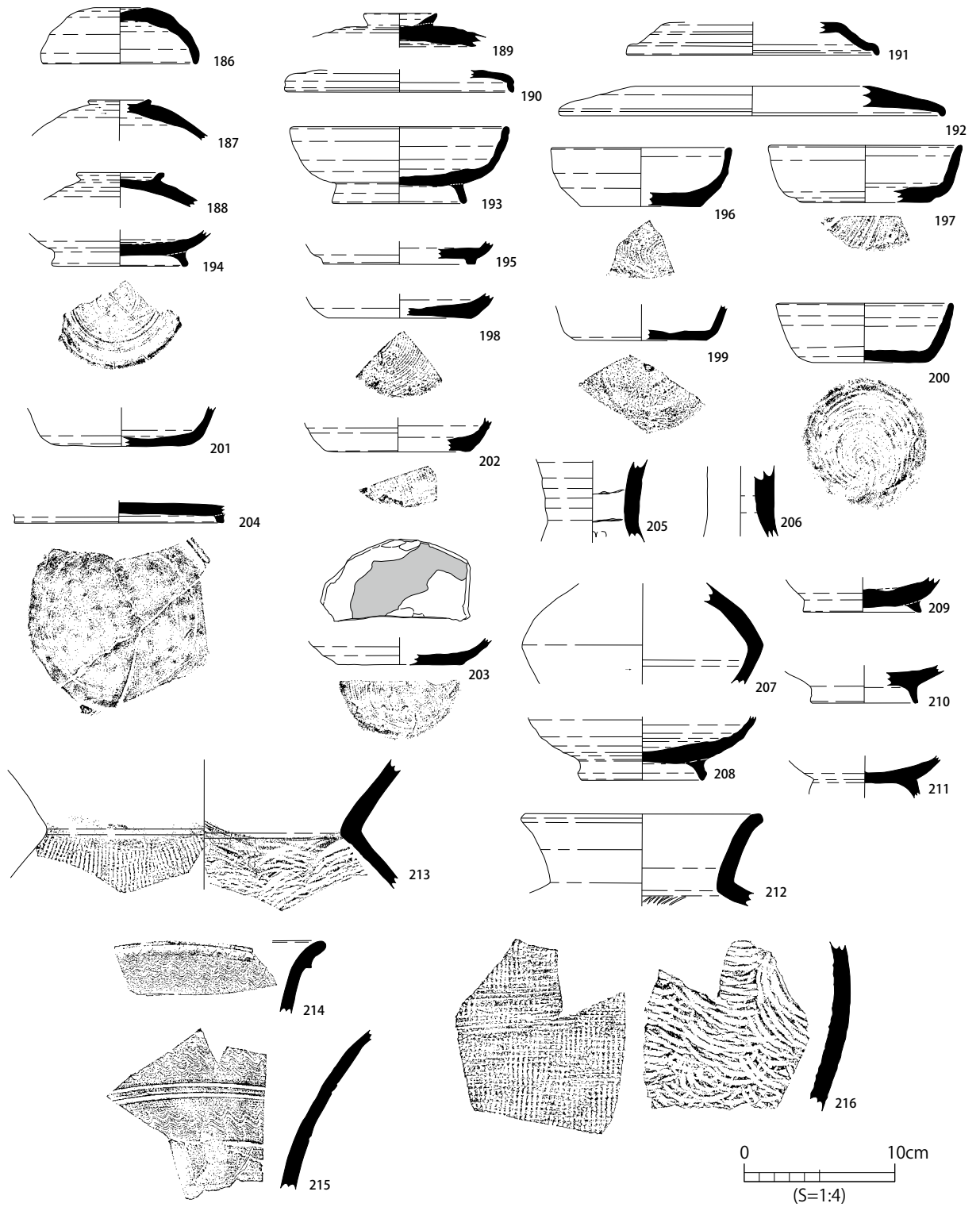
227～230は土製品である。227は土錘である。土錘はこの1点のみである。228は甑の取っ手の部分である。取っ手は楕円形である。229、230は製塩土器である。229の外面は被熱により剥離が著しい。内面はナデで調整している。230は口縁部が肥厚し、内面に布目痕がある。

#### 第5節 鎌倉時代・室町時代の遺構と遺物

SB201（第123図） 調査区の南端、B21、C21に位置する。東西方向に長軸のある、1間×4間以上の長棟の建物である。柱穴は円形や楕円形で素掘りである。柱間は2.1mである。柱穴から図

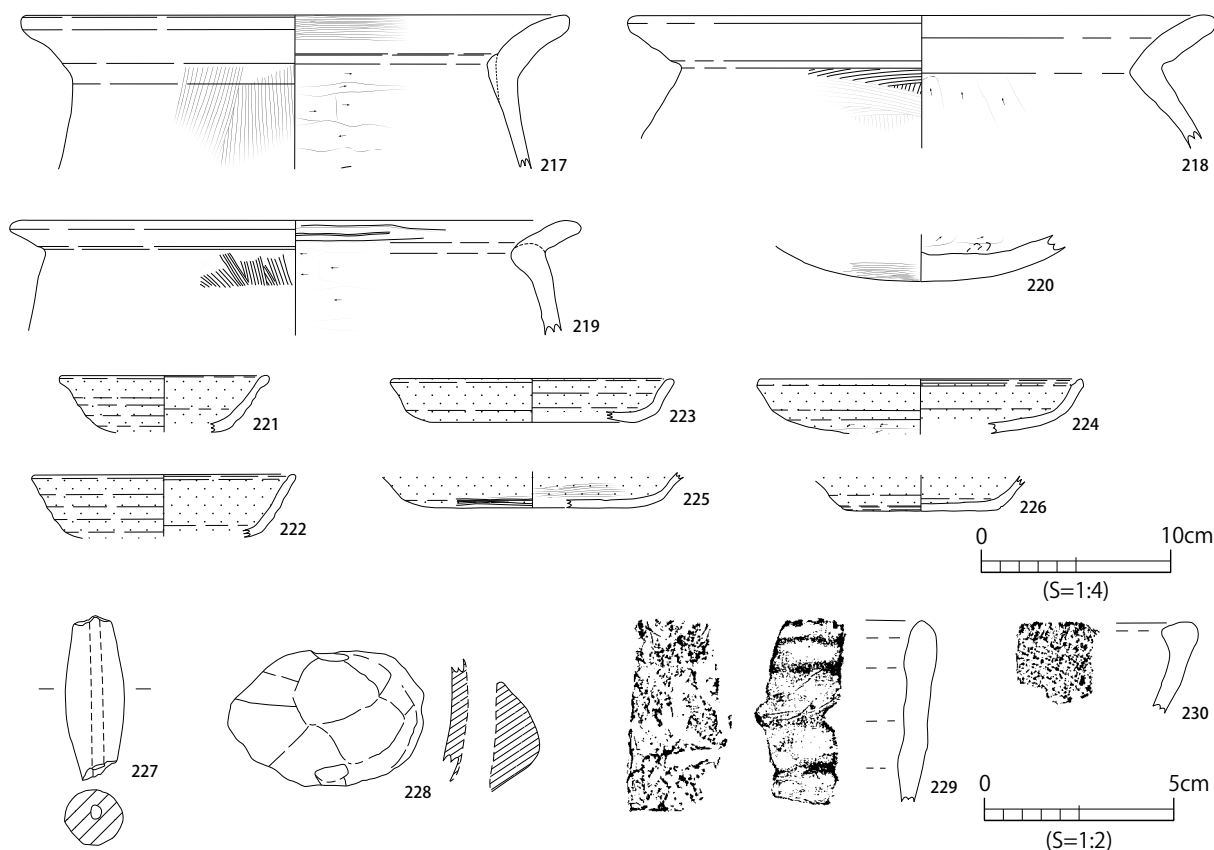


第 119 図 遺構外奈良時代・平安時代の土器出土状況図



第 120 図 遺構外出土遺物実測図 2



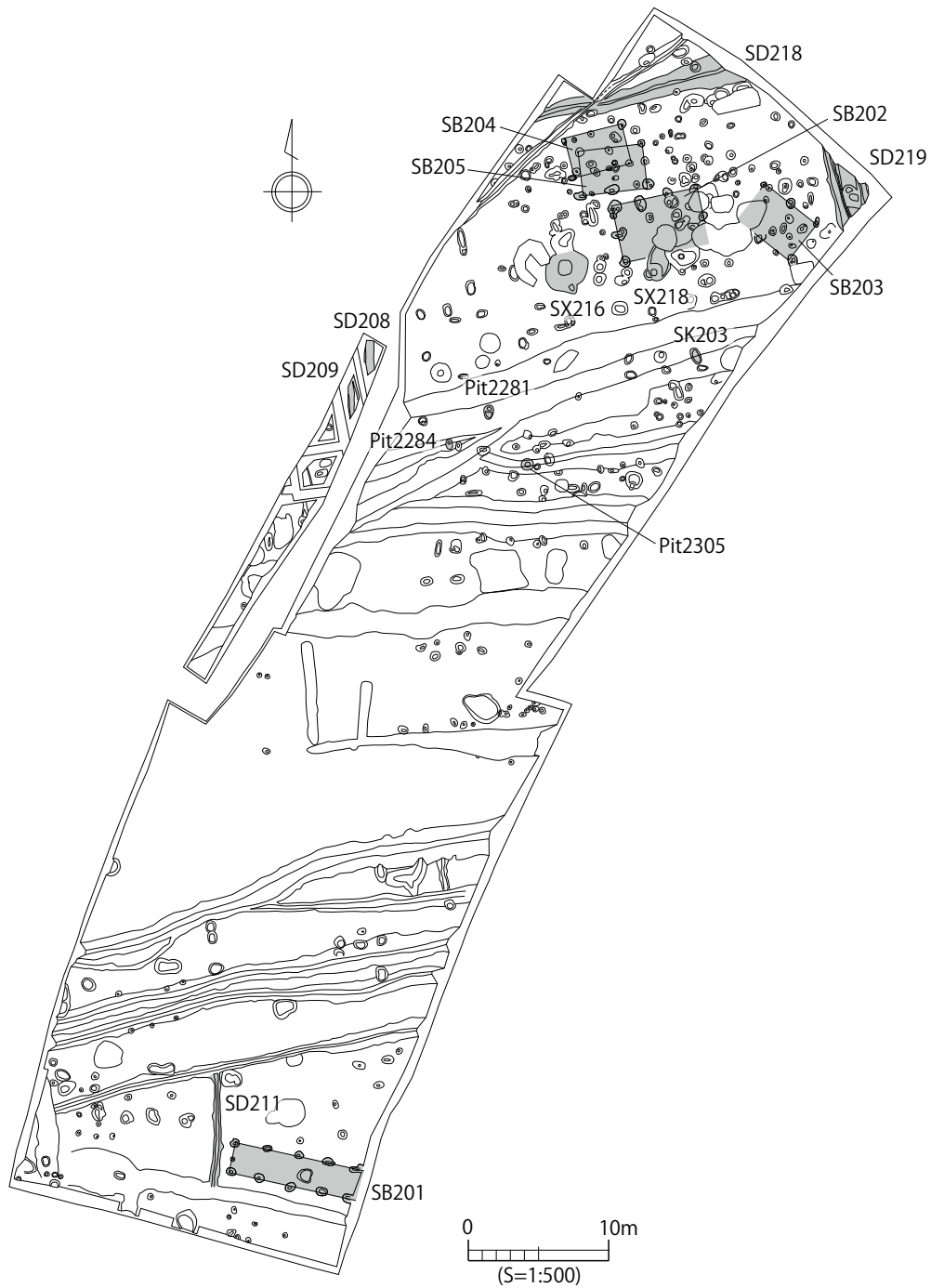


第 121 図 遺構外出土遺物実測図 3

第 16 表 遺構外出土遺物観察表 2

遺物番号	挿図番号	写真版	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	口径	器高	底径	その他の寸法	残存率	形態・文様の 特徴	色調	備考
186	120	121	須恵器	蓋	E16	2	(10.2)	3.7			15		黄灰 2.5Y6/1	蓋 A8
187	120	121	須恵器	蓋	F 1 4 / SD219						30	蓋の内面はなだらか	外: オリーブ灰 5GY5/1、内: 灰 10Y4/1	つまみ f2 β
188	120	121	須恵器	蓋	C16.C17	2					20	蓋の内面に段	灰 5Y5/1	つまみ f2 β
189	120	121	須恵器	蓋	C16	3					15		外: 灰 N5、内: 浅黄 5Y7/3 ~ 灰 N5	つまみ f2 γ
190	120	121	須恵器	蓋	F13	2	(15.0)				10		外: 灰 N4 ~ 灰白 7.5Y7/2、内: 灰 7.5Y5/1	端部 p1
191	120	121	須恵器	蓋	E14	2	(16.8)				10		灰 N6	蓋 II 類 C3
192	120	121	須恵器	蓋	E 1 3 / SD218		(25.7)				10		外: オリーブ黒 5Y3/1、内: 灰 N5	蓋 II 類 D ?
193	120	121	須恵器	高台付 高坏	C 1 6 / SD220	上	(14.4)	5.1	(8.9)		35		灰褐 7.5YR4/2	坏 IIA4b
194	120	122	須恵器	高台付 高坏	E15	3			(8.8)		30	底部にヘラ書き「X」	灰 7.5Y5/1	坏 IIA 類、 高台 t2
195	120	122	須恵器	高台付 高坏	D18	2			(10.0)		15		灰 10Y5/1	坏 II 類 B2、 高台 s2
196	120	122	須恵器	坏	D14	3	(11.8)	3.9	(8.0)		10	重ね焼きの痕	青灰 5BG6/1	坏 I 類 A4
197	120	122	須恵器	坏	E14	2	(13.2)	3.8	(8.6)		20		灰 7.5Y6/1	坏 I 類 B2
198	120	122	須恵器	坏	E14	2			(9.6)		15	やや軟質	外: 緑灰 7.5GY6/1 ~ にぶい黄橙 10YR7/4、内: 緑灰 7.5GY6/1	
199	120	122	須恵器	坏	E 1 5 / SD220	上			(8.6)		10		明緑灰 10G7/1	坏 IB1 ~ B2
200	120	121	須恵器	坏	D18	3	11.8	4.0	7.3		完形	やや軟質、重ね焼きの痕	外: 灰白 2.5Y7/1 ~ 黄灰 2.5Y5/1、内: 灰白 2.5Y7/1	坏 IB1 ~ B2
201	120	122	須恵器	坏	D15	3			(9.4)		20	軟質	灰黄 2.5Y7/2	
202	120	122	須恵器	坏	C20	3			(9.6)		20	底部は静止糸切り?	灰 7.5Y6/1	
203	120	122	須恵器	坏	E 1 5 / SD220	上			(8.3)		40	見込みに墨痕、一部平滑	灰 5Y5/1	

遺物番号	挿図番号	写真版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	底径	その他の 寸法	残存率	形態・文様の 特徴	色調	備考
204	120	122	須恵器	皿	D17	2.3			(13.9)		85	軟質	灰白 2.5Y8/2 ~ 黄 灰 2.5Y4/1	皿Ⅱ類
205	120	122	須恵器	長頸壺	D18	2					40		外：暗 灰 黄 2.5Y5/2、内：灰 5Y6/1	
206	120	122	須恵器	長頸壺	D15	2					40		外：灰 N5、内： 灰 N6	
207	120	122	須恵器	長頸壺	E14	3				胴 径 (16.0)	10	外面に自然釉	外：灰 白 5Y7/1、 内：灰白 2.5Y7/1	A5 か？
208	120	121	須恵器	長頸壺	E15	3		8.0			現存部 完存	高台は短くハ 字状	青灰 5B5/1	A4 か？
209	120	122	須恵器	壺	B19	3		7.8			現存部 完存		外：灰 N6、内： 灰白 2.5Y7/1	
210	120	122	須恵器	壺	D 1 5 / SD220	上			(6.8)		20		外：灰 10Y5/1、 内：オリブ 黒 10Y3/1	
211	120	122	須恵器	壺	C17	3					25		明青灰 10BG6/1	
212	120	122	須恵器	甕	E15	3	(15.6)				30	自然釉	外：オリブ 灰 2.5GY5/1、内：灰 10Y5/1	
213	120	121	須恵器	甕	E 1 5 / SD220	上					20		外：オリブ 黒 5Y3/1、内：灰 5Y4/1	
214	120	122	須恵器	甕	E 1 5 / SD220	上						波状文	外：オリブ 黒 5Y3/1、内：灰 5Y4/1	
215	120	122	須恵器	大甕	E15.F15/ SD220	上						沈線、波状文	外：青 黒 10BG2/1、内：青 灰 5B6/1	
216	120	122	須恵器	大甕	E15	3						カキメ	外：灰 7.5Y5/1、 内：灰 7.5Y6/1	
217	121	123	土師器	甕	F15	3	(29.0)				10		に ぶ い 黄 橙 10YR7/4	
218	121	123	土師器	甕	C 1 6 / SD223	上	(30.0)				10		に ぶ い 黄 橙 10YR7/3	
219	121	123	土師器	甕	E15	3	(29.0)				15		外：に ぶ い 黄 橙 10YR6/3、内：灰 黄褐 10YR5/2	
220	121	123	土師器	甕	B 2 0 / SD216	上					現存部 完存	煤付着、被熱	外：灰 黄 褐 10YR5/2、内：浅 黄橙 10YR8/4	
221	121	123	赤彩土 師器	坏	E 1 4 / SX216		(11.1)				15	内外赤彩	明赤褐 5YR5/6	
222	121	123	赤彩土 師器	坏	E 1 5 / SD220	上	(14.0)				10	内外赤彩	外：明 赤 褐 2.5YR5/8 ~ 5YR7/6、内：明 赤褐 2.5YR5/8	
223	121	123	赤彩土 師器	皿	E 1 5 / SD220	上	(15.0)	2.8			10	内外赤彩	に ぶ い 赤 褐 5YR4/4	
224	121	123	赤彩土 師器	皿	F14	3	(17.0)				10	内外赤彩、口 縁内面に段	明赤褐 5YR5/8	
225	121	123	赤彩土 師器	皿	A21	3			(10.2)		20	内外赤彩	明赤褐 2.5YR5/8	
226	121	123	赤彩土 師器	坏？	E15	3			(8.1)		30	内外赤彩	外：明 赤 褐 2.5YR5/8 ~ に ぶ い 橙 7.5YR7/4、 内：明 赤 褐 2.5YR5/8	
227	121	123	土製品	土錘	F14	2				直径 1.6		現状の重さ 8.86g	に ぶ い 黄 橙 10YR7/3	
228	121	123	土製品	取っ手	D17	3						円形の取っ 手、縦方向に 穿孔	灰白 10YR8/2	
229	121	123	土製品	製 塩 土 器	E14	3						外面は被熱に より剥離著し い	外：橙 2.5Y6/8、 内：明 赤 褐 2.5YR5/8	
230	121	123	土製品	製 塩 土 器	A21.B21	3						内面に布目痕	外：に ぶ い 黄 褐 10YR5/4、内：橙 7.5YR6/8	



第 122 図 鎌倉時代・室町時代の遺構

示できなかったが、中世土師器の細片が出土した。なお、SB201 のすぐ南には近世以降の溝が位置しており、この溝とほぼ平行して位置していることから、遺構の時期は近世まで降る可能性もある。

SB202 (第 124 図) 調査区の北側、E14、F14 に位置する。攪乱で柱穴の遺存状況が悪いが、2 間×3 間の建物に復元した。東西方向に長軸がある。柱穴には切り合いのあるものや二段に掘っているものがあり、建て替えがあったと考えられる。柱間は 2.1 m である。北西側の柱穴 P2165 から、建て替えがあったことが示唆される。柱穴からは弥生土器や土師器、須恵器が出土したが、柱穴から出土した中世土師器 (第 134 図 233) や SD218 と長軸が平行して位置することから、鎌倉時代～室町時代と考えられる。後述する SX218 と一部重複しているが、先後関係は不明である。

SB203 (第 124 図) 調査区の北側、F14 に位置する。1 間×2 間の建物であるが、西端の柱穴は攪乱により見つからなかった。柱穴は円形や楕円形で、素掘りであるが、南端の柱穴は二段に掘っている。柱間は桁行きが約 2.4 m、梁行きが 3.3 m である。柱穴から中世土師器が出土した (第 134 図 234)。鎌倉時代～室町時代の溝で区画されている部分に位置しており、遺構の時期は鎌倉時代～室町時代と考えられる。

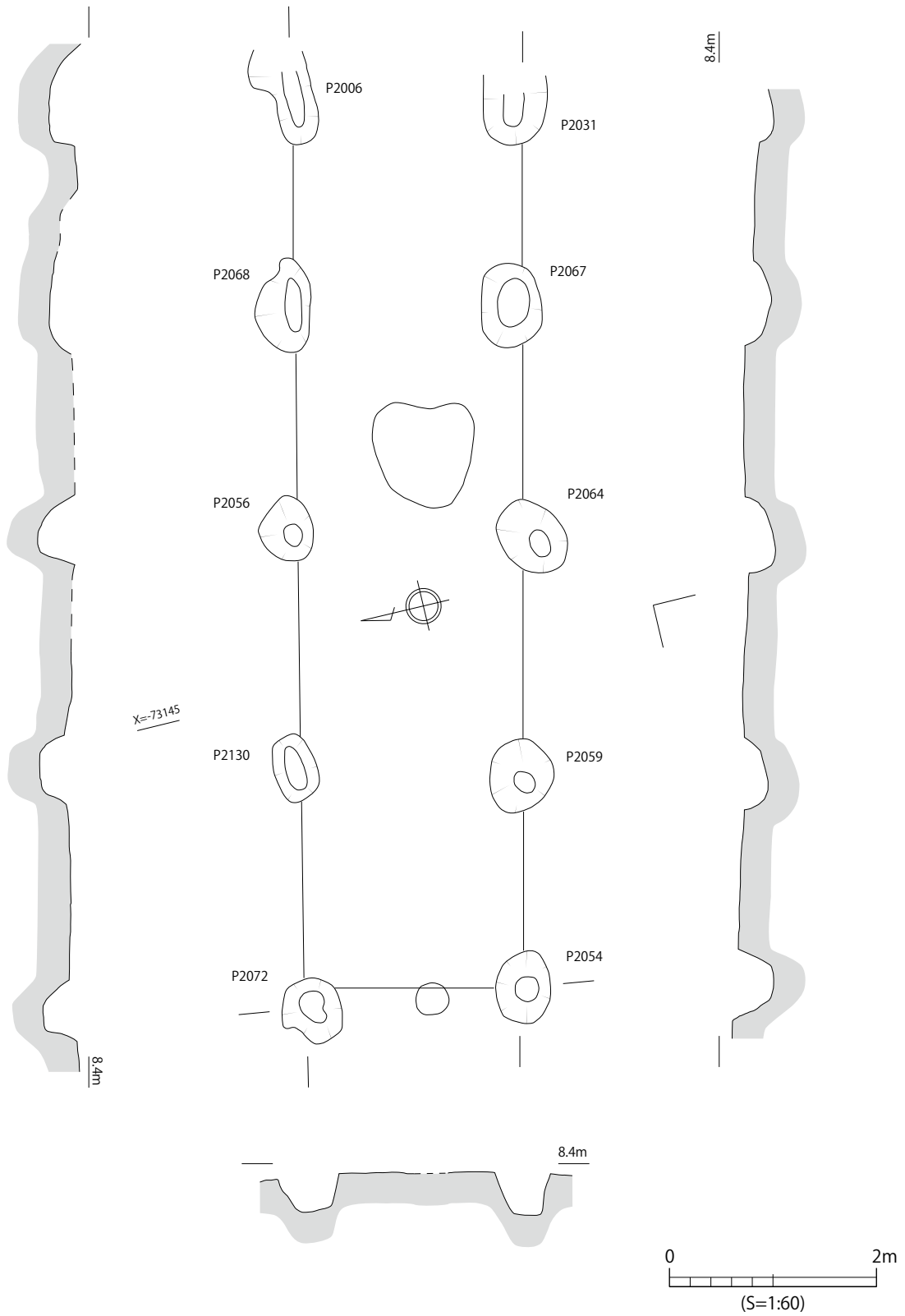
SB204 (第 125 図) 調査区の北端、E13、E14 に位置する。1 間×2 間の建物である。東西方向に長軸がある。柱穴は円形や楕円形で、素掘りである。柱間は桁行きが約 2.1 m、梁行きが 2.7 m である。梁間の柱位置は北と南で異なる。柱穴から遺物は出土しなかったが、SD218 と長軸がほぼ平行して位置することから、遺構の時期は鎌倉時代～室町時代と考えられる。

SB205 (第 125 図) 調査区の北端、E13、E14 に位置する。1 間×2 間の建物である。東西方向に長軸がある。柱穴は円形や楕円形で、素掘りである。柱間は桁行きが約 2.4 m、梁行きが 3.0 m である。柱穴から遺物は出土しなかったが、SD218 と長軸がほぼ平行して位置することから、遺構の時期は鎌倉時代～室町時代と考えられる。SB204 と SB205 は重複しているが、先後関係は不明である。建て替えの可能性はあるが、SB205 がやや大きい。

SD218 (第 126 図) 調査区の北端、D13～F13 に位置する。北東-南西方向に伸びる。SD217 との先後関係は BB' の第 1 層が SD218 の埋土であり、SD217 の埋土第 2 層を切っていることから、SD217 に後出する (第 126 図)。現状で長さ 15 m、幅 0.7～2.4 m、深さ 0.3～0.4 m である。ほぼ直線的に伸びる。幅は北東側が広く、南西側は狭い。底面は北東側がやや浅く、南西側が深い。断面は浅い U 字形・半円形である。土層は暗褐色土である。溝から中世土師器が出土した (第 134 図 235、236)。遺構の時期は鎌倉時代～室町時代と考えられる。次に述べる SD219 とはほぼ 90°の角度に位置していることから、一連の遺構と考えられる

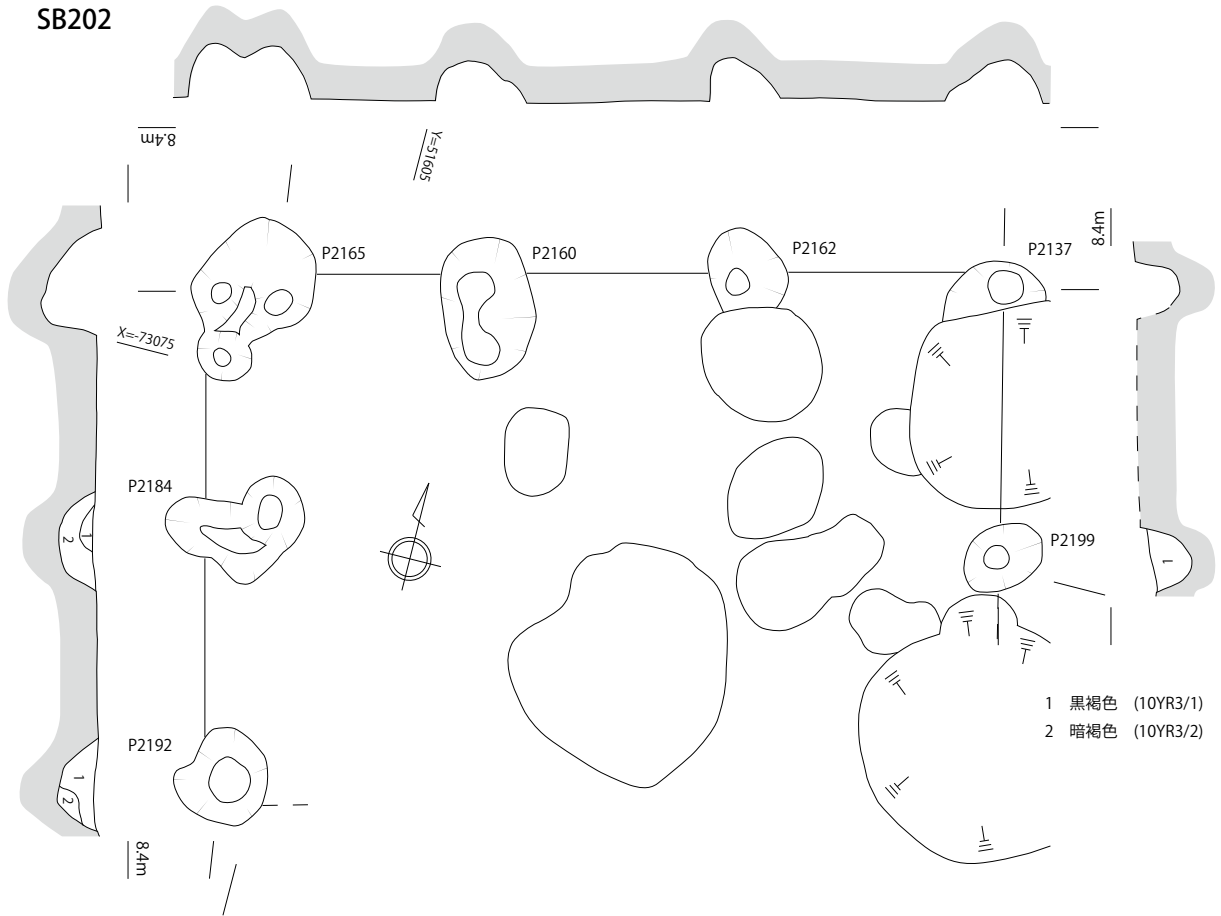
SD219 (第 127 図) 調査区の東端、F14 に位置する。複数の遺構が切りあっている可能性もあるが、溝と判断した。北西-南東方向に伸びる。現状で長さ 6.6 m、幅 2.4 m、深さ 0.6 m である。ほぼ

Y=51580

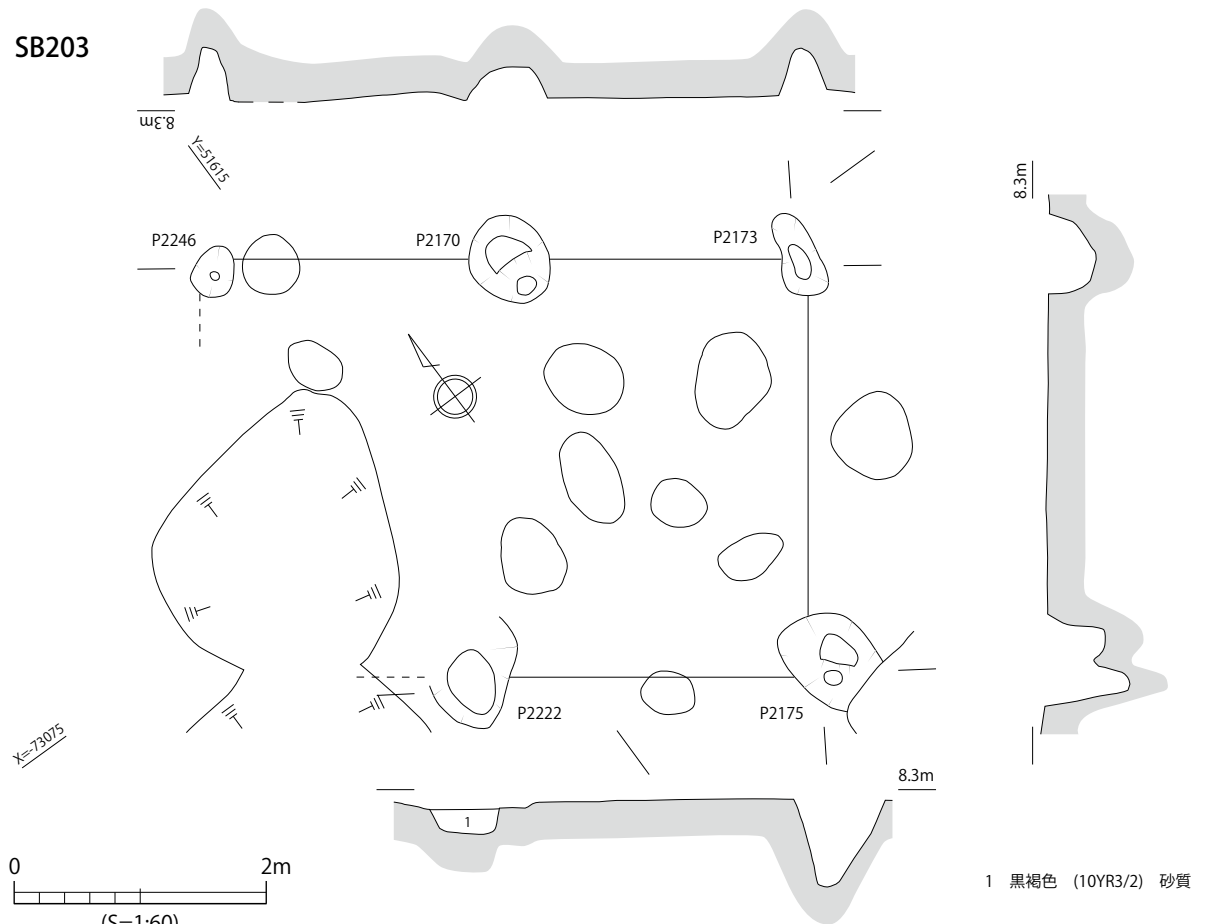


第 123 图 SB201 实测图

SB202



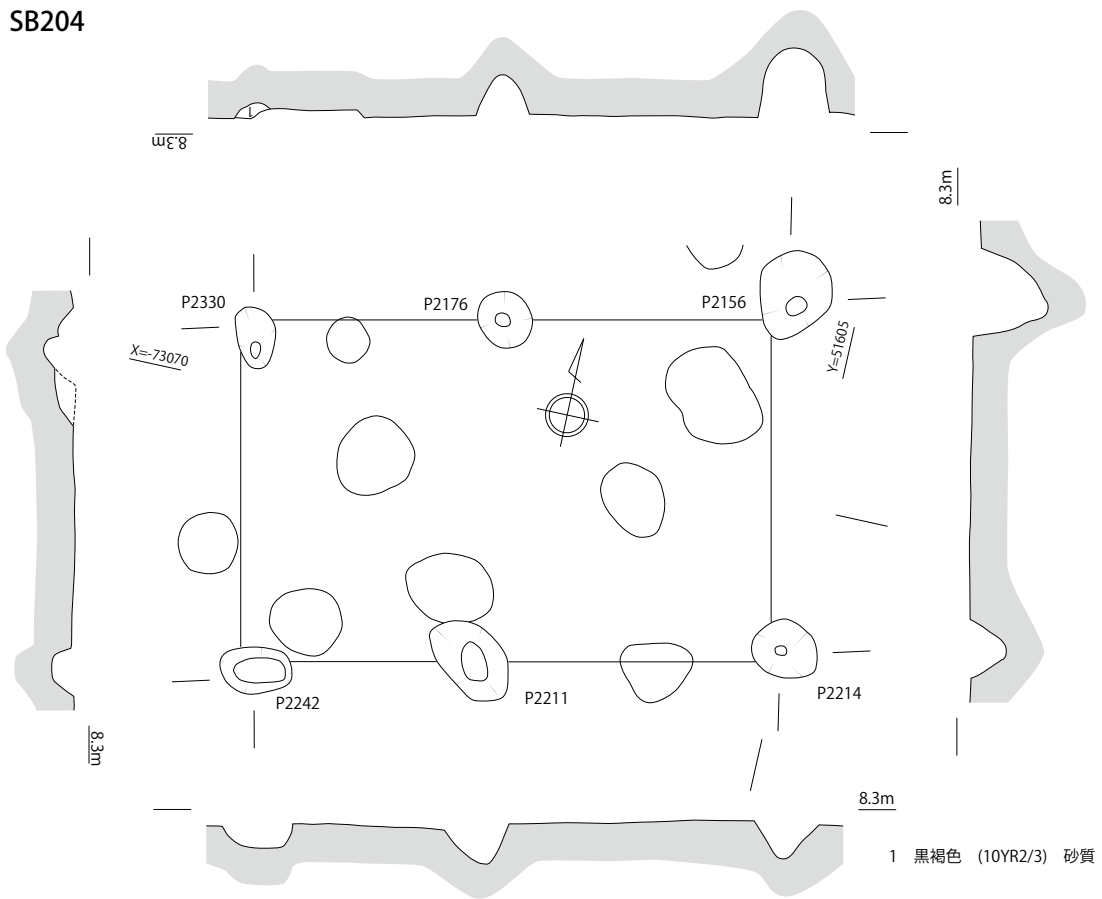
SB203



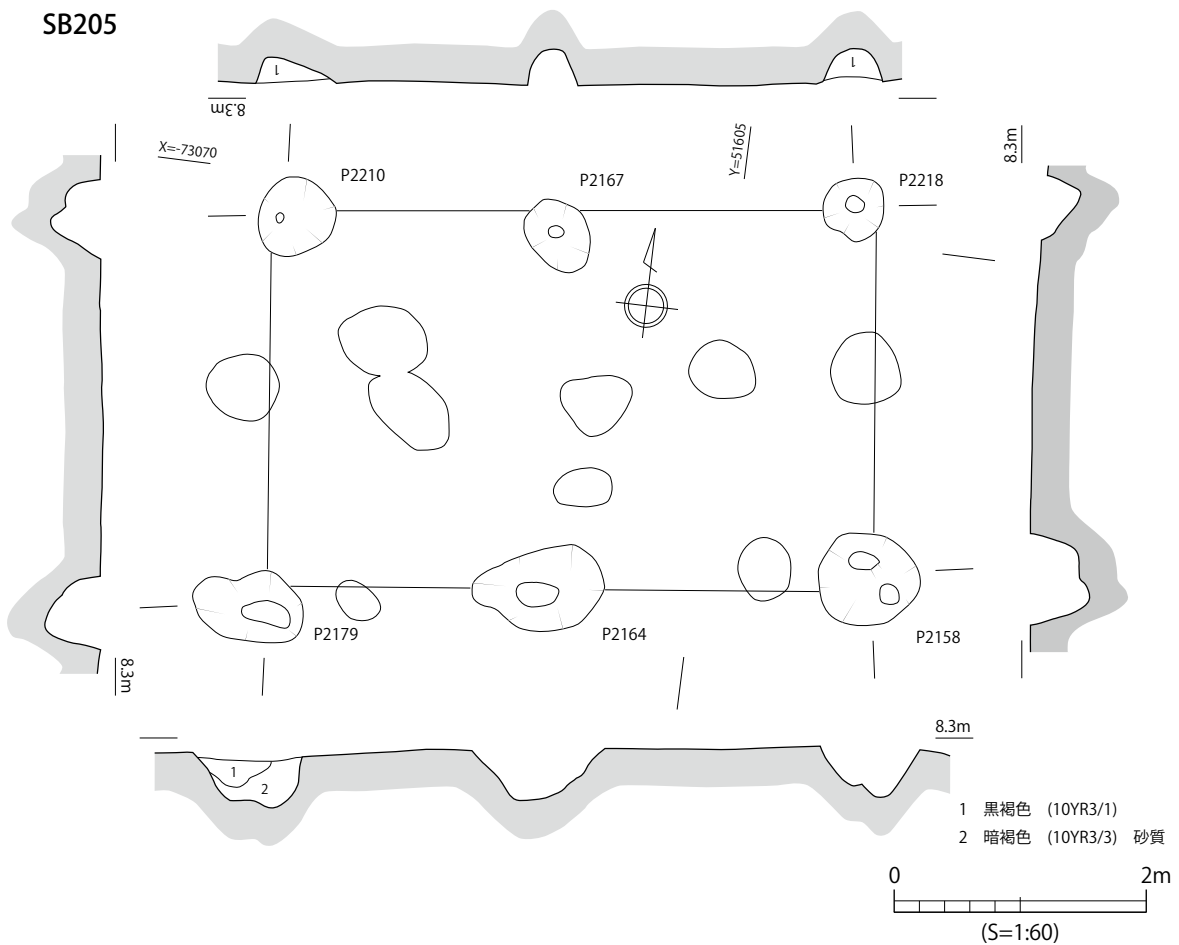
第 124 図

SB202・203 実測図

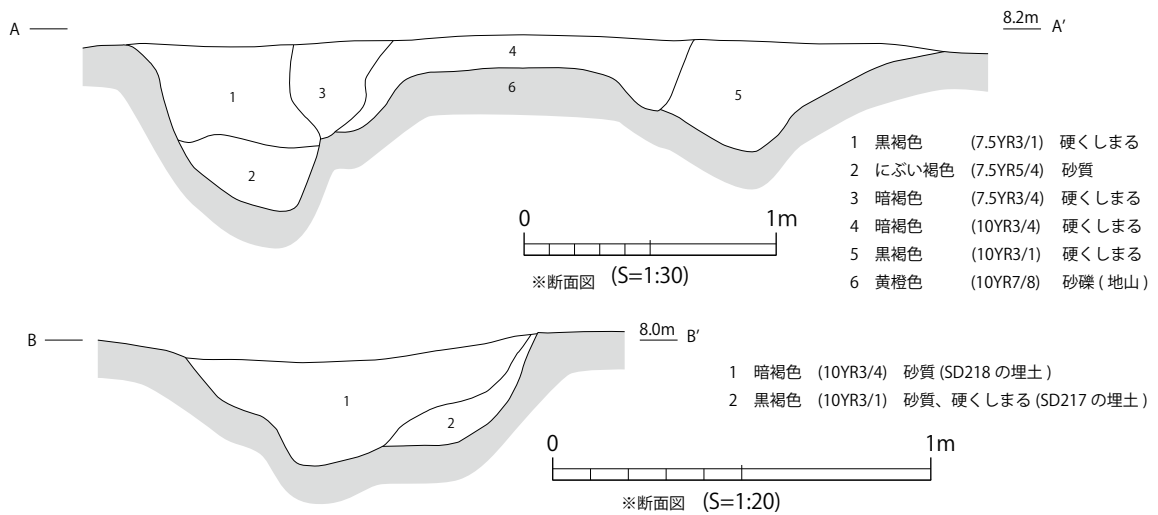
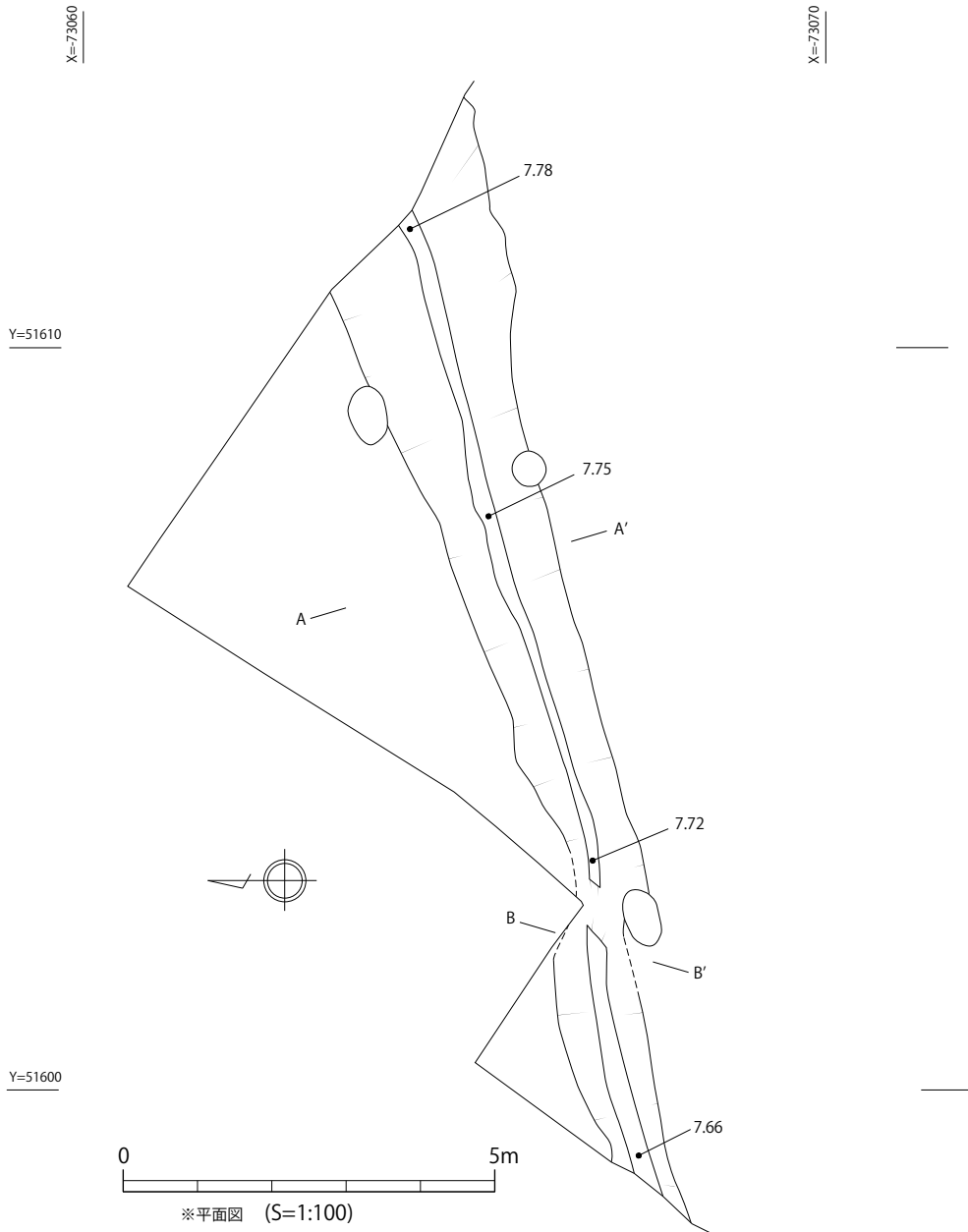
SB204



SB205

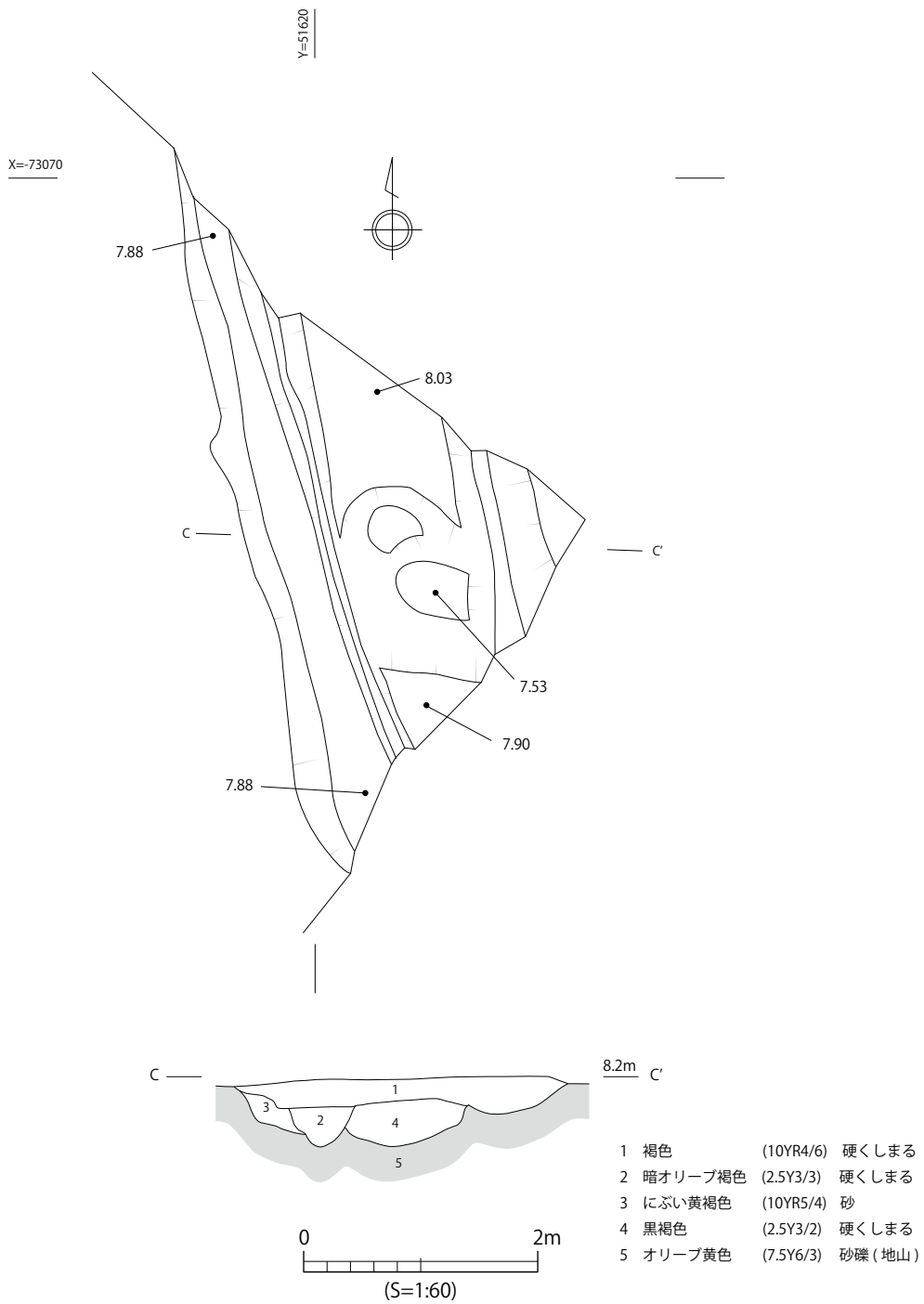


第 125 図 SB204・SB205 実測図

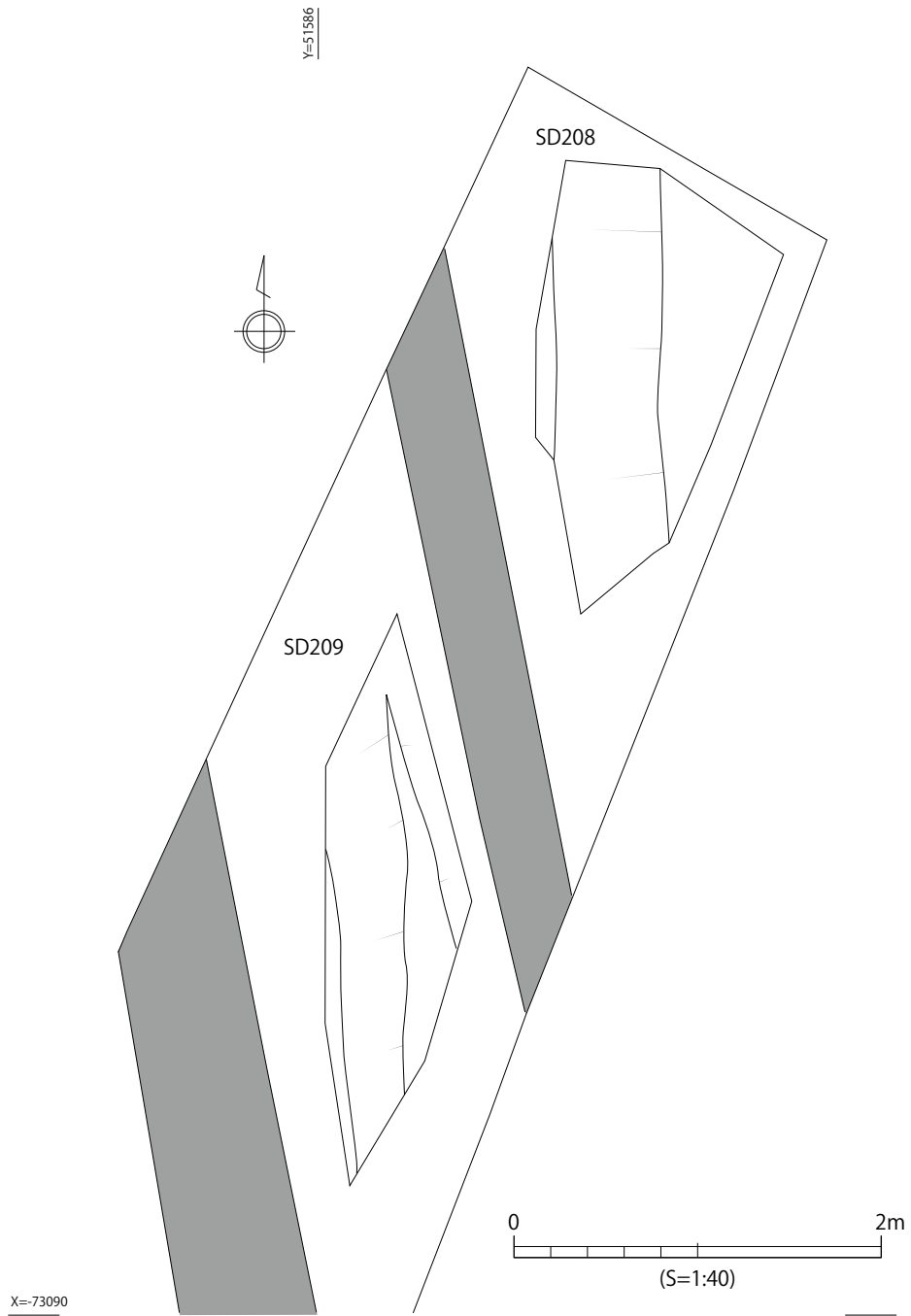


第126図 SD218実測図

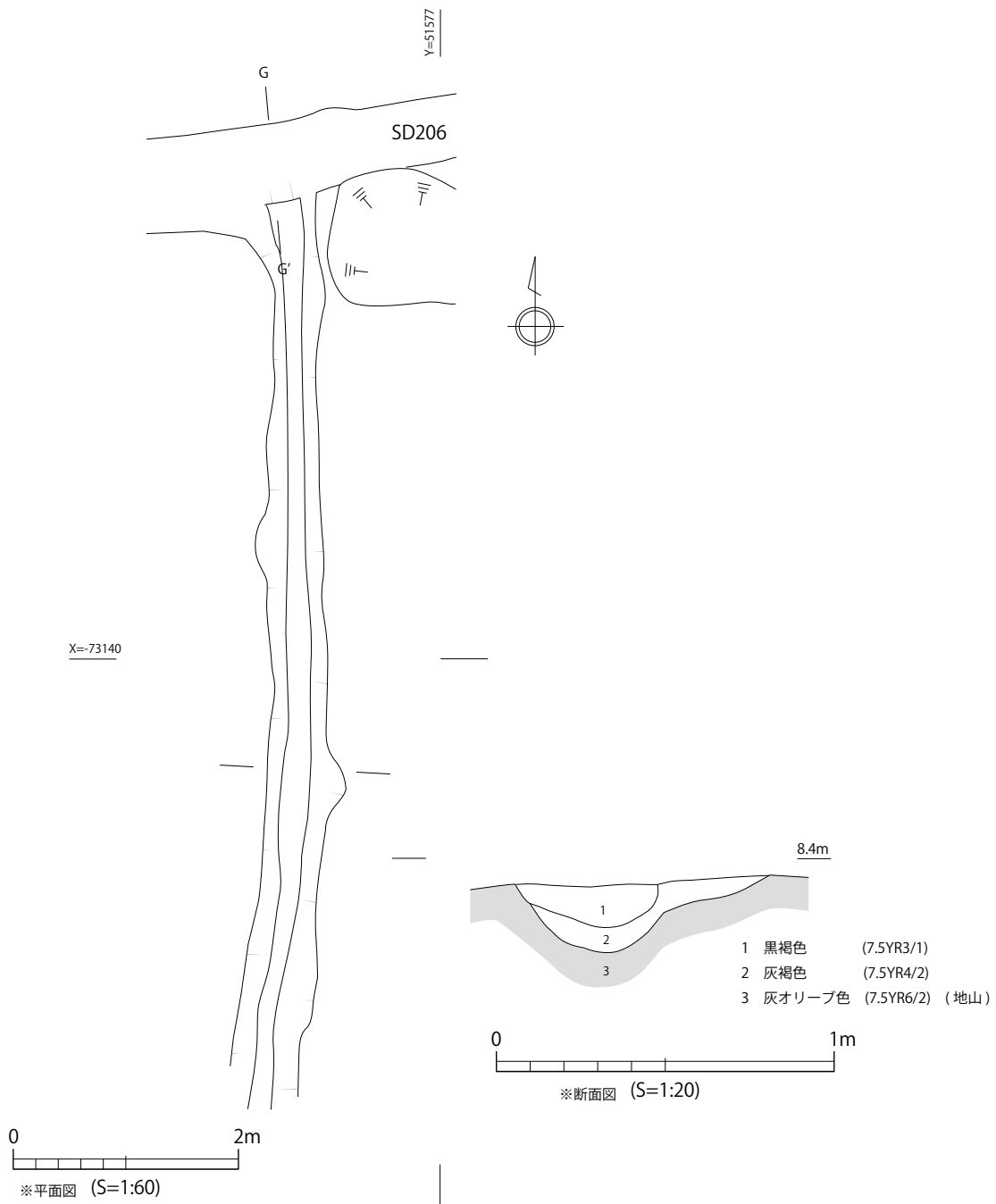




第 127 図 SD219 実測図

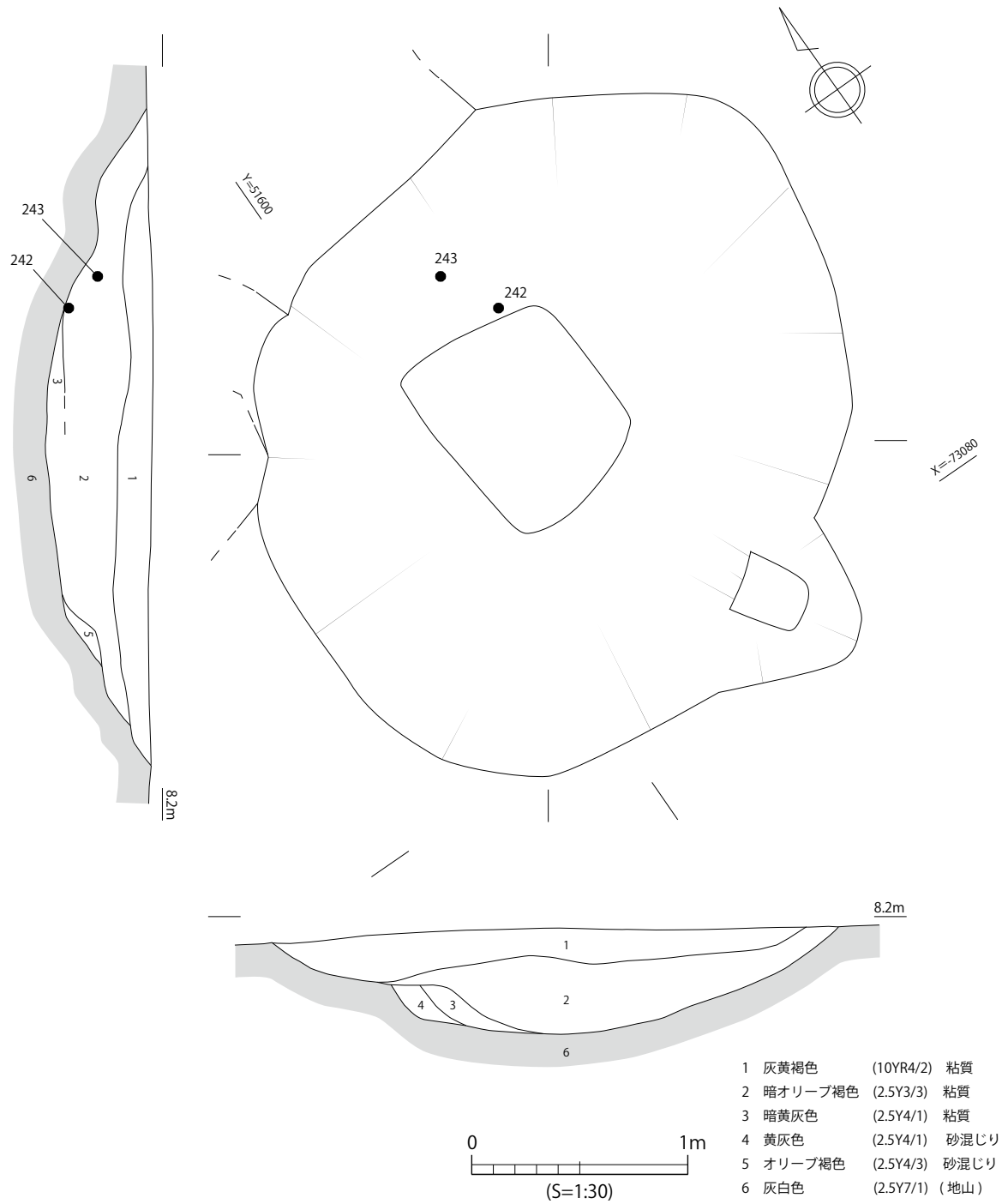


第 128 图 SD208・SD209 実測図

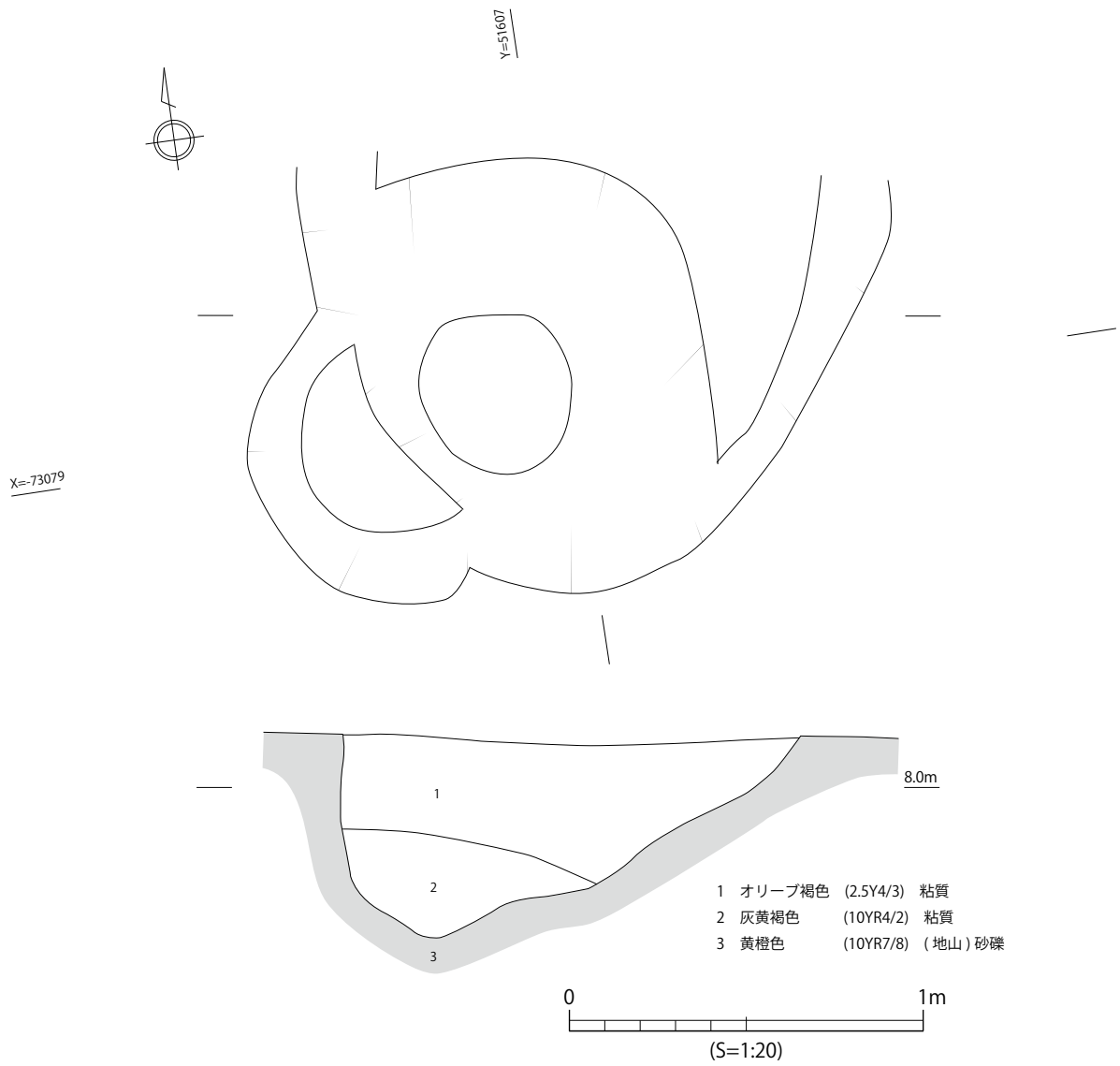


第 129 図

SD211 実測図



第 130 図 SX216 実測図



第 131 図 SX218 実測図

直線的に伸びる。底面は西側が浅く、東側ほど深くなっている。溝の中にピットのような掘り込みがあり、それを西側の細い溝状の遺構が切るようで、その上に褐色土が堆積している。断面は二段掘り状になり、最も深い部分ではU字形になる。SD219が位置している部分は地山の砂質が強い箇所であった。褐色土が最上位にあることから遺構の再掘削は行われなかったと考えられる。溝から中世土師器の細片（第134図237）や陶器の壺片が出土した（238）。遺構の時期は鎌倉時代～室町時代と考えられる。

SD208、SD209（第128図） 調査区の西端、C15に位置する。南北方向に伸びる。二つの溝とも幅の狭い調査区の部分に位置しており、コンクリートの基礎で十分に広さを取ることができなかったことから、溝の一部の確認にとどまった。断面は逆台形と考えられる。埋土は二つの溝とも黒褐色である。遺物は中世土師器の細片が出土した（第134図240、241）。遺構の時期は鎌倉時代～室町時代と考えられる。

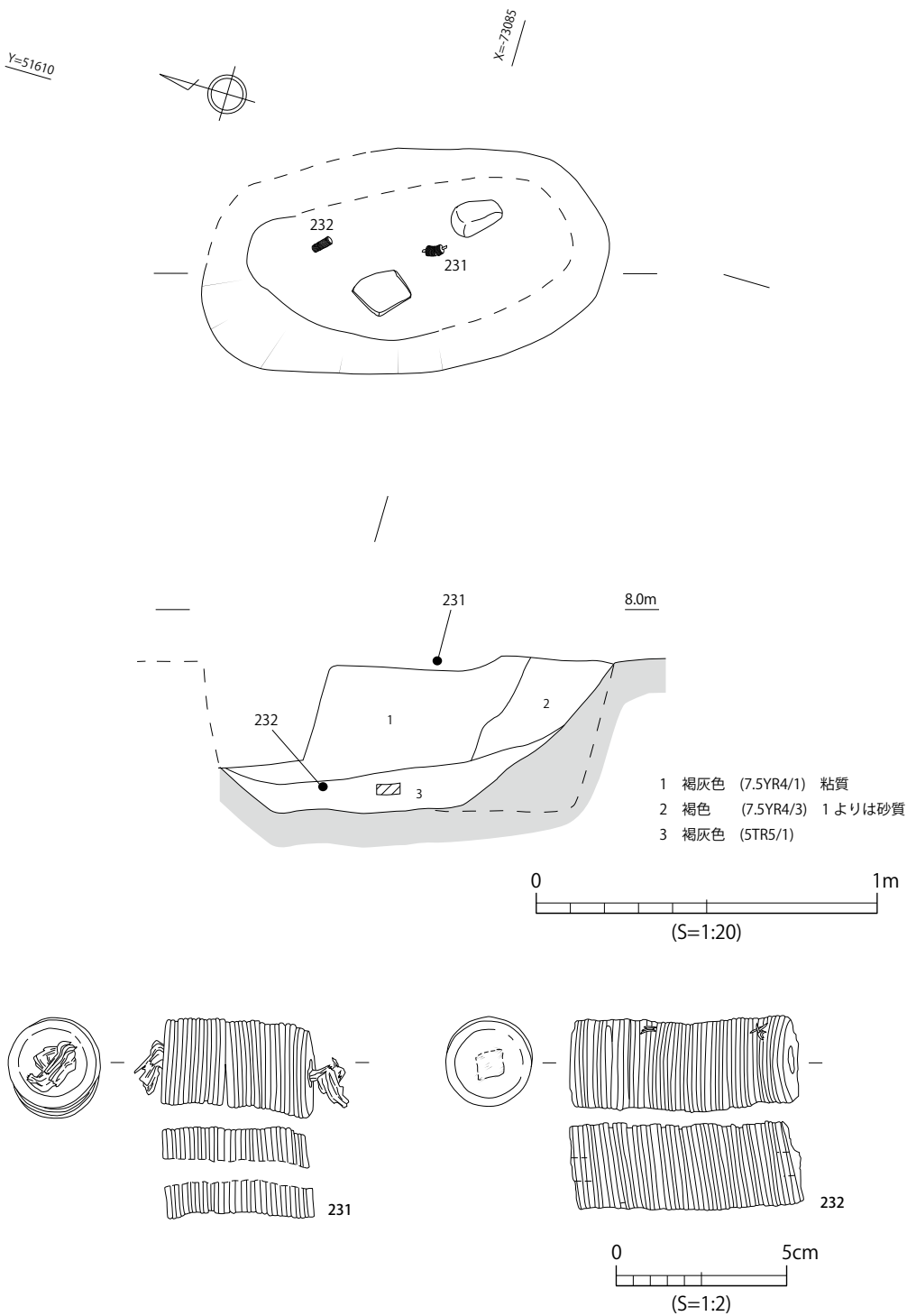
SD211（第129図） 調査区の南側、B20、B21に位置する。ほぼ南北方向に伸びる。SD206に後出し、SD206を切る（第90図GG'）。現状で長さ7.5m、幅0.4～0.7m、深さ0.2mである。ほぼ直線的に伸びる。底面は南側ほど低い。断面はU字形である。埋土は黒褐色や灰褐色であり、再掘削は認められない。遺物は中世土師器の細片が出土した（第134図245）。遺構の時期は鎌倉時代～室町時代と考えられる。

SX216（第130図） 調査区の北側、D14、E14に位置する。現状で長さ3.1m、幅2.7m、深さ0.5mである。平面形は円形である。断面は浅いU字形である。埋土は褐色系の土が堆積している。遺物は遺構北側の中位～下位から中世土師器の底部が出土した（第134図239、242、243）。底部のみの出土であり時期を決めることは難しいが、遺構の時期は鎌倉時代～室町時代と考えられる。

SX218（第131図） 調査区の北側、E14に位置する。遺構の北側は近世以降の攪乱で壊されている。SB202と重複する。現状で長さ、幅とも1.1m、深さ0.6mである。平面形は不整形である。断面は半円形・浅いU字形である。埋土は2層に分かれ、褐色系の土が堆積している。遺物は中世土師器の細片が出土した（第134図244）。遺構の時期は鎌倉時代～室町時代と考えられる。

SK203（第132図） 調査区の北側、E15、F15に位置する。SD220の上面から掘られている。SD220精査時に古銭が出土したので、周囲を清掃したところ、楕円形に復元できる遺構を確認した。0.4mほど掘り下げ、完掘したと思っていたところ、さらに古銭が出土した。この段階で一部遺構を破壊していることが判ったので、図面では復元した形で図示している。現状で長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.4mである。断面は浅いU字形に復元した。SD220に掘られているが、埋土は砂礫混じりの褐色系の土である。遺構の上面や底面に拳大の角礫があった。

古銭は遺構の長軸にあわせて出土した。遺構の上面で古銭約30枚（231）が二つの塊に分かれて出土した。また、遺構の底部付近では古銭約50枚が塊で出土した（232）。古銭が重なっていることから、縞としてあったと考えられる。報告書作成と平行して保存処理を行ったため、古銭の

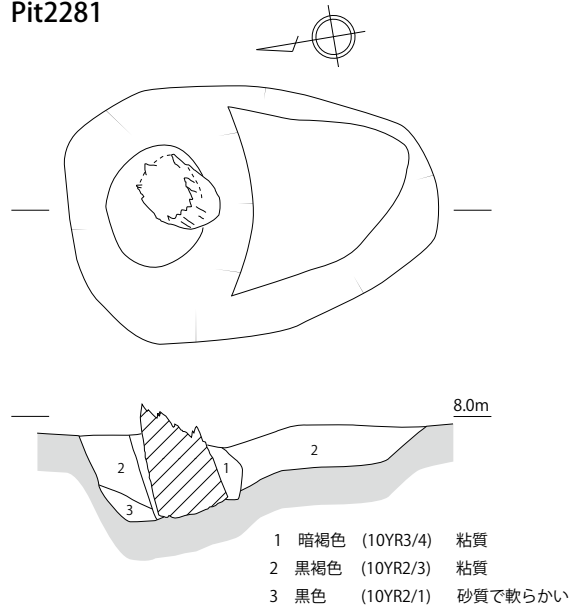


第 132 図 SK203 実測図・出土遺物実測図

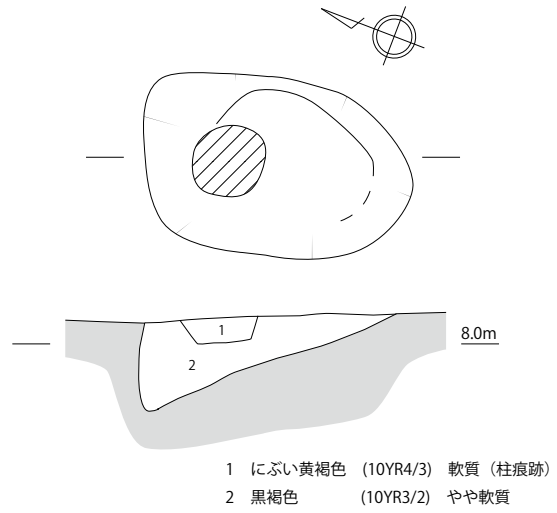
第 17 表 遺構出土遺物観察表 2

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	銭種	出土地点/遺構	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	形態の特徴	備考
231	132	130	古銭	不明	SK203	上	4.4	2.6	2.4	102.98	32 枚か、紐が残る	二つに分離
232	132	130	古銭	不明	SK203	下	6.7	2.6	2.6	169.95	46～49 枚か、外面に繊維状のものが付着	

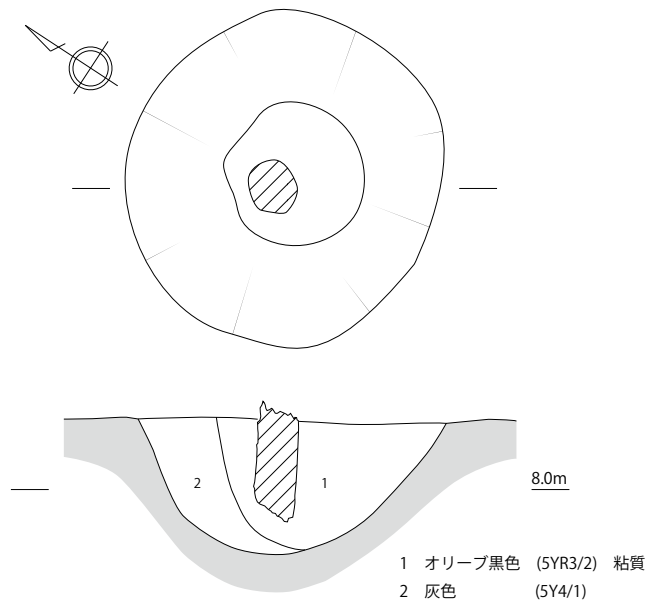
Pit2281



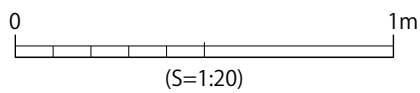
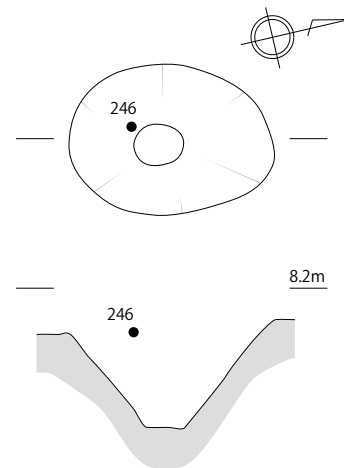
Pit2284



Pit2305



Pit2325



第 133 図

Pit2281・2284・2305・2325 実測図



種類は不明である。そのほか SD220 に伴うと考えられる弥生土器・古式土師器が出土したが、遺構に伴うと考えられる遺物はなかった。

遺構の上下二カ所から古銭が出土したことや合計枚数が 80 枚を越えることから、墓の可能性は低く、埋納遺構の可能性はあるが、遺構の性格の判断は保留しておきたい。

なお、この付近の包含層掘削時に「永楽通寶」などの古銭が数枚出土している。この遺構出土の古銭は原位置を保っていると考えられるが、包含層出土の古銭には、この遺構と関連する可能性がある。包含層出土の古銭には「永楽通寶」があり、遺構の時期は室町時代の可能性がある。

231 は二つに分かれて出土した。銭を束ねる紐が残る。外面には繊維状の物質が付着している。枚数は 32 ～ 33 枚である。232 も銭を束ねる紐が残り、外面には繊維状の物質が付着する。枚数は 49 枚あり、231 と異なり 4 ～ 5 枚に 1 枚小さな銭が混じっている。231、232 とも報告書作成中に保存処理を行ったため、錆や汚れで銭種は判らなかつた。

このほか、遺跡からは 300 余りのピットを確認した。柱根や柱痕のあるピットがあることから、SB201 ～ 05 以外に掘立柱建物が存在したことが想定できるが、復元することはできなかつた。

以下に述べるピットからは柱痕を確認した。

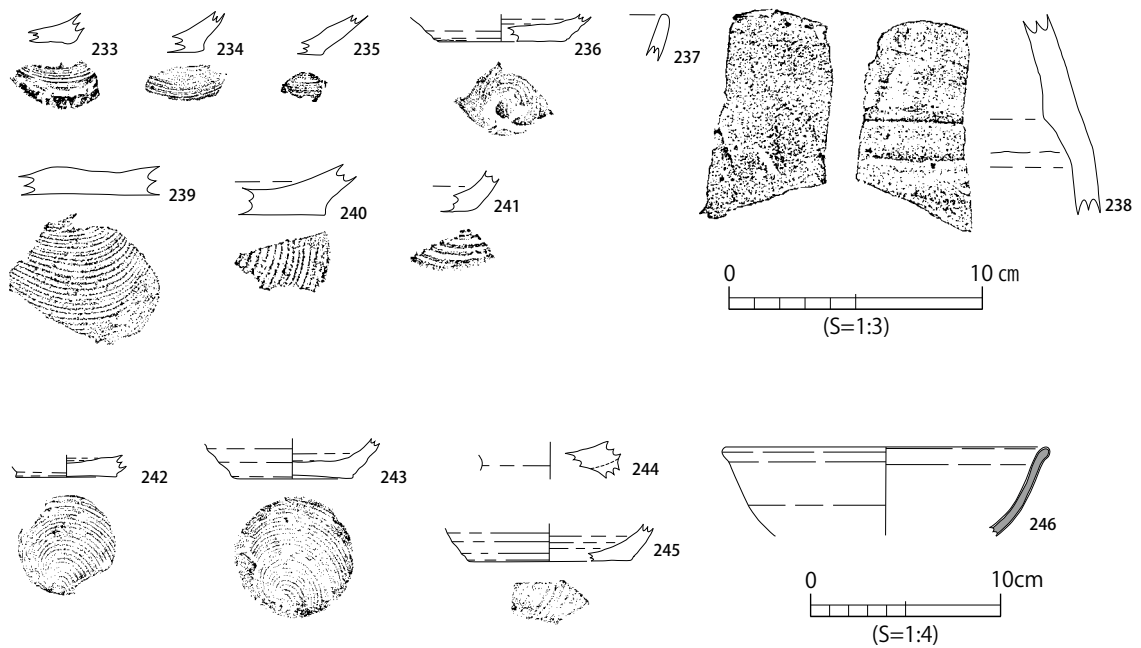
Pit2284 (第 133 図) 調査区の北側、D15 に位置する。溝 SD220 の上面から掘られている。現状で長さ 0.8 m、幅 0.5 m、深さ 0.3 m である。平面形は楕円形である。断面は北側が深くなっている。柱痕を確認した。柱痕は直径約 20cm とやや大きい。遺構内から遺物は出土しなかつた。

Pit2281 (第 133 図) 調査区の北側、D15 に位置する。後述する溝 SD220 の上面から掘られている。現状で長さ 1.0 m、幅 0.7 m、深さ 0.3 m である。平面形は南北に長い楕円形である。断面は浅い U 字であり、柱根の部分で二段に掘ってある。埋土は暗褐色や黒褐色の黒色系の土である。柱根に接する部分は軟質の土があった。柱根は直径約 20cm の芯持材である (第 135 図 248)。やや傾いて検出したが、これは土圧によると考えられる。遺構内から他の遺物は出土しなかつた。

Pit2305 (第 133 図) 調査区の北側、D16 に位置する。SD221 の上面から掘られている。現状で長さ、幅とも 0.9 m、深さ 0.4 m である。平面形は円形である。断面は U 字形である。柱根は直径約 10cm の芯持材である (第 135 図 247)。節や樹皮が残っている部分がある。遺構内から他の遺物は出土しなかつた。

#### 遺構外出土土器 (第 136.138 図)

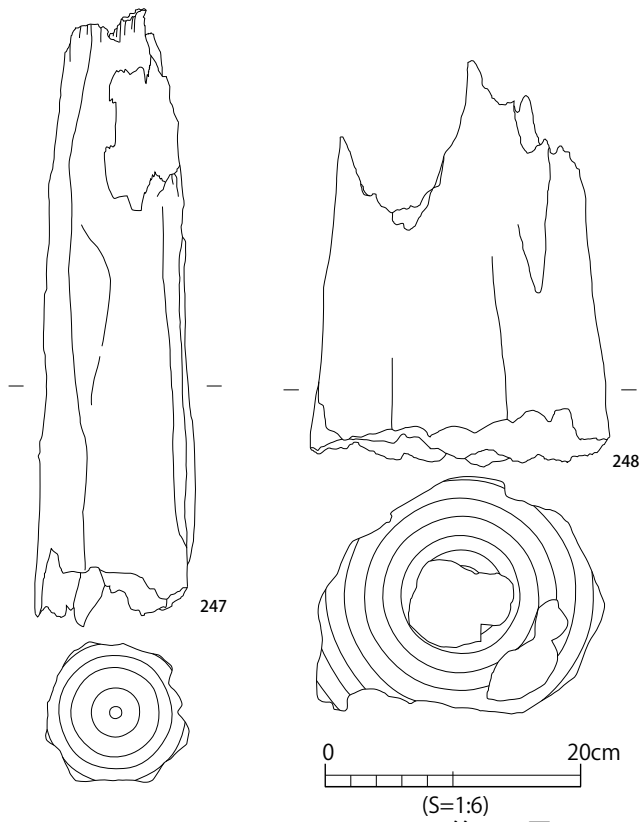
249 ～ 259 は土師器である。249 ～ 254 は高台付きの坏である。高台は 250 や 251 のように低いものと 253 や 254 のように高いものがある。255、257、258 は坏である。255 は体部がわずかに外湾して口縁部へ至る。256 は皿である。底部の周囲にヘラケズリを施す。259 は内外面とも火を受けており、器壁が剥落している。260、261 は青磁の碗である。共に見込みの部分に文様がある。高台部のみは遺存であるが、龍泉窯系碗 D 類と考えられる。265 は見込みの部分に播目が残る。底部は回転糸切りである。262、263 は肥前系の壺である。262 は内面の当て具痕をナデにより消している。263 も同様であるが、外面の色調が異なるので別個体と判断し



第 134 図 遺構出土土器実測図 2

第 18 表 遺構出土遺物観察表 3

遺物番号	挿図番号	写真版	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	口径	底径	残存率	形態・文様の特徴	色調	備考
233	134	123	中世土師器	坏	S B 2 0 2 / P2162						橙 7.5YR6/6	
234	134	123	中世土師器	坏	S B 2 0 3 / P2222						橙 7.5YR6/6	
235	134	123	中世土師器	坏	SD218						外：浅黄橙 10YR8/4、内：橙 7.5YR7/6	
236	134	123	中世土師器	皿	SD218			(5.0)	25		外：橙 5YR7/6、内：にぶい橙 7.5YR7/4	
237	134	123	中世土師器	坏	SD219						外：にぶい黄橙 10YR7/4、内：浅黄橙 10YR8/4	
238	134	123	陶器	甗	SD219					自然釉	外：暗赤褐 5YR3/3、内：備前烧褐 7.5YR4/4	備前烧
239	134	123	中世土師器	坏	SX216						外：にぶい黄橙 10YR6/4、内：にぶい黄褐 10YR4/3	
240	134	123	中世土師器	坏	SD209						にぶい黄橙 10YR7/4	
241	134	123	中世土師器	坏	SD208						外：にぶい黄橙 10YR7/3、内：灰黄褐 10YR5/2	
242	134	123	中世土師器	皿	SX216			5.3	現存部 完存		橙 5YR6/6	
243	134	123	中世土師器	坏	SX216			6.3	現存部 完存		橙 5YR6/6	
244	134	123	中世土師器	高台付 坏	SX218				25		橙 7.5YR7/6	
245	134	123	中世土師器	坏	SD211			(8.8)	10		外：浅黄橙 10YR8/4、内：灰黄褐 10YR6/2	
246	134	123	青磁	碗	Pit2325		(16.8)		30		オリーブ灰 10Y6/2	



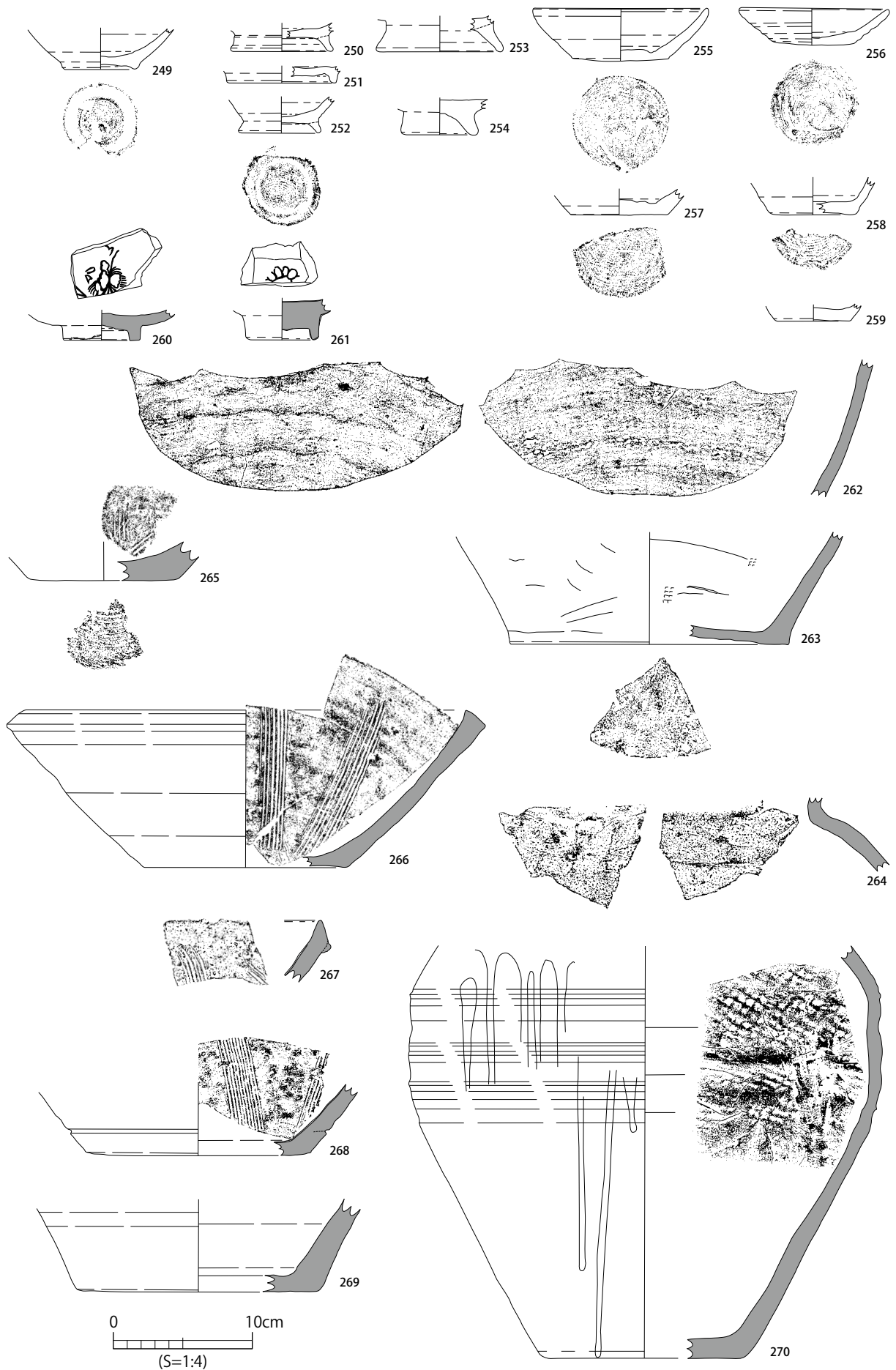
第 135 図 柱根実測図

第 19 表 柱根観察表

遺物 番号	挿 番号	写 版	種 別	器 種	出土地点/ 遺構	層 位	長 さ	幅	厚 さ	木 取 り	形 態・文 様の特 徴	樹 種
247	135	129	木質遺物	柱	Pit2305		(49.3)	12.7		芯持	節あり、樹皮残る	クリ
248	135	129	木質遺物	柱	Pit2281		(31.7)	(23.4)	(18.6)	芯持	内面に空洞	クリ

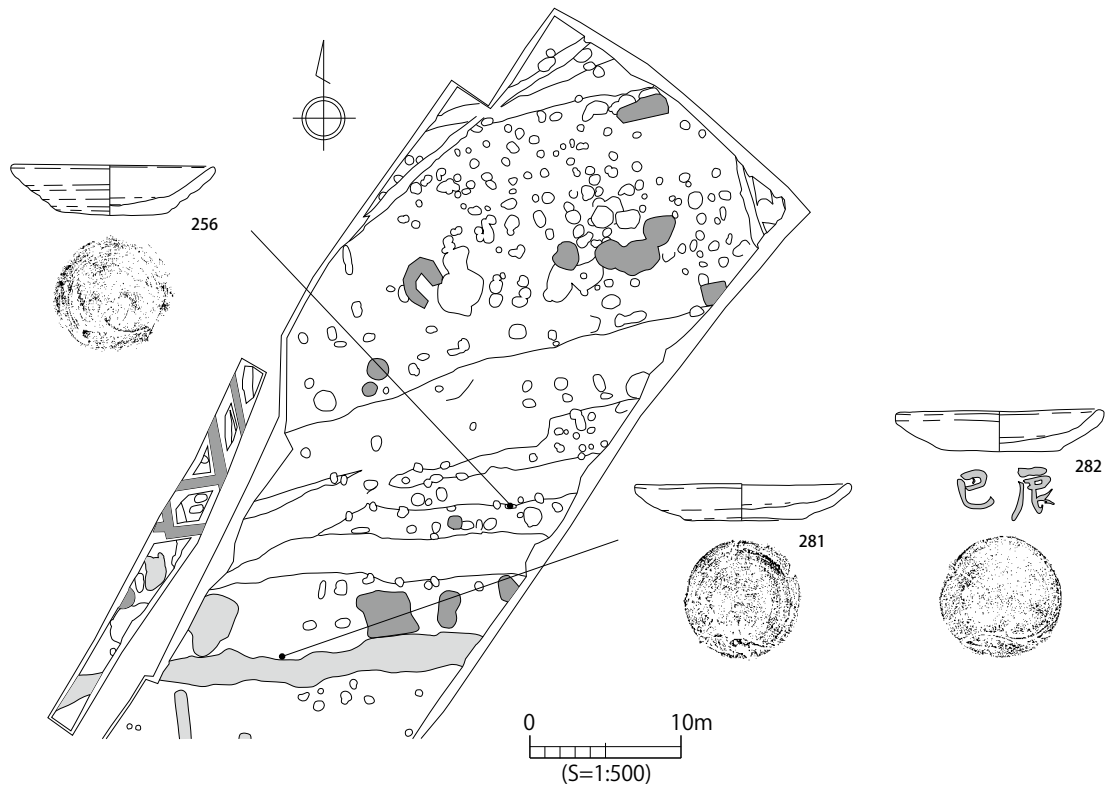


写真 4 10月7日に、出雲市神戸川小学校の児童が校外学習の一環として、下古志遺跡において写生会を行った。

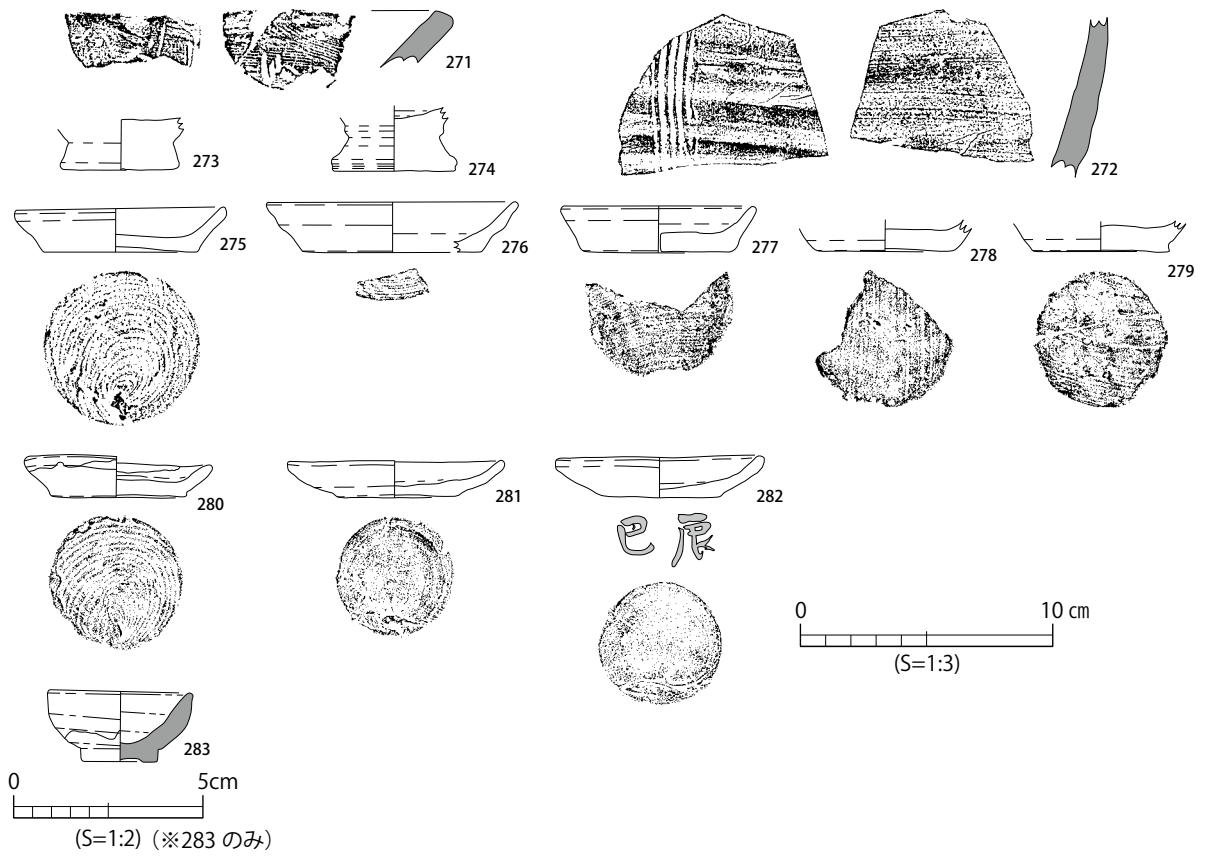


第 136 图

遺構外出土遺物実測図 4



第 137 図 遺構外鎌倉時代・室町時代の土器出土状況図



第 138 図 遺構外出土遺物実測図 5

第20表 遺構外出土遺物観察表3

遺物番号	挿図番号	写真版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	底径	残存率	形態・文様の 特徴	色調	備考
249	136	127	中世土師器	高台付 高坏	A20	2				85		外：明赤褐 5YR5/6、内：橙 7.5YR6/6	
250	136	127	中世土師器	高台付 高坏	E14	2			(7.0)	40		橙 5YR6/6	
251	136	127	中世土師器	高台付 高坏	D17.18	2			(7.8)	25	外面に炭化物付 着	外：黒褐 10YR2/2、 内：橙 5YR6/6	
252	136	127	中世土師器	高台付 高坏	D17	2				高台部 完存		浅黄橙 7.5YR8/4	
253	136	127	中世土師器	高台付 高坏	E16	2			(8.8)	20		にぶい橙 7.5YR7/4	
254	136	127	中世土師器	高台付 高坏	F14	2			5.1	高台部 完存		にぶい黄橙 10YR7/3	
255	136	126	中世土師器	坏	C17	2	(12.5)	3.8	6.9	底部完 存	磨滅	にぶい褐 7.5YR6/3	
256	136	126	中世土師器	皿	E16	3	(10.6)	2.7	6.0	ほぼ完 形		橙 7.5YR7/6	
257	136	127	中世土師器	坏	D17	1			(7.0)	25	磨滅	外：浅黄橙 10YR8/4、内：橙 7.5YR7/6	
258	136	127	中世土師器	坏	B20	3			(6.3)	45		外：にぶい橙 7.5YR7/4、内：橙 5YR6/6	
259	136	127	中世土師器	皿	B20	3			5.4	現存部 完存	内外被熱により 器壁剥落	黒褐 2.5Y3/1	
260	136	127	青磁	碗	E13	2			(5.6)	25	見込みに文様	外：灰オリーブ 7.5Y6/2～暗灰黄 2.5Y5/2、内：灰オ リーブ 7.5Y6/2	龍泉窯系碗 C3 または D
261	136	127	青磁	碗	D16	3			(4.7)	40	見込みに文様	外：明緑灰 7.5GY7/1～灰白 2.5Y8/2、内：明緑 灰 7.5GY7/1	龍泉窯系碗 C2 または D
262	136	124	陶器	甕	C 1 6 / SD220	上						外：10R3/4、内： 赤 10R5/6	肥前系
263	136	124	陶器	甕	B17	3			(20.0)	10		外：褐灰 7.5YR6/1、 内：赤 10R5/6	肥前系
264	136	124	陶器	甕	B19	3						暗赤褐 2.5YR3/3	備前焼
265	136	124	炆器	擂鉢	B17	1			(10.6)	15	回転系切り	橙 2.5YR6/6	
266	136	125	陶器	擂鉢	F15	3	(31.8)	11.4	(14.6)	15	重ね焼の痕	にぶい赤褐 2.5YR4/4～灰赤 2.5YR4/2	備前焼 IVA 期
267	136	125	陶器	擂鉢	D14	3						外：にぶい赤褐 2.YR4/3、内：灰褐 5YR4/2	備前焼 IVB 期
268	136	125	陶器	擂鉢	E16	3			(16.2)	10		外：灰赤 2.5YR4/2、 内：にぶい赤褐 5YR4/3	備前焼 IVB 期
269	136	124	陶器	甕	D13	3			(17.4)	15		外：褐 5YR5/1、内： 灰黄褐 10YR4/2	肥前系
270	136	126	陶器	甕	D17	2			(14.0)	15	外面に釉、胴径 (34.0)	外：暗赤褐 10R3/2、内：暗赤 7.5R3/4	唐津焼
271	138	127	陶器	鉢	D18	2					軟質	浅黄橙 10YR8/3	
272	138	127	陶器	甕	B18	3					縦方向の文様	外：にぶい黄 2.5Y6/3、内：灰黄 2.5Y6/2	
273	138	127	中世土師器	柱状高 台皿	D14	3			4.6	現存部 完存	軟質	黄橙 10YR8/6	
274	138	127	中世土師器	柱状高 台皿	E13	3			4.8	60	軟質	橙 7.5YR7/6	
275	138	127	中世土師器	皿	D15	2	8.3	1.7	6.0	底部完 存		にぶい橙 10YR7/4	
276	138	127	中世土師器	皿	C19.D19	2	(10.0)	2.0		10		浅黄橙 10YR8/4	
277	138	127	中世土師器	皿	F14	3	(7.7)	1.9	(6.0)	45	底部に焼成前の 穿孔、底部静止 糸切り	橙 2.5YR6/6	
278	138	127	中世土師器	皿	C19	3			(5.5)	25	底部静止糸切り	橙 2.5YR6/6	
279	138	127	中世土師器	皿	D17/2 区 -1	2			5.4	現存部 完存	底部静止糸切り	灰白 10YR8/2～黒 褐 10YR3/2	
280	138	126	中世土師器	皿	E13	3	7.5	1.7	4.9	完形	口縁に煤付着	にぶい橙 7.5YR7/4	燈明皿か

遺物番号	挿図番号	写真版	種別	器種	出土地点/ 遺構	層位	口径	器高	底径	残存率	形態・文様の 特徴	色調	備考
281	138	126	中世土師器	皿	C17	2	8.6	1.5	4.8	完形		橙 5YR7/6 ~ 浅黄 橙 10YR8/3	
282	138	126	中世土師器	皿	C17	2	8.3	1.7	4.8	完形	底部外面に「辰巳」(右から)の墨書	浅黄橙 10YR8/4 ~ 橙 7.5YR7/6	
283	138	126	陶器	椀	E15	3	3.8	1.9	2.0	ほぼ完形		外:黒褐 10YR3/1 ~ 灰白 2.5Y8/2、 内:黒褐 10YR3/1	ミニチュア

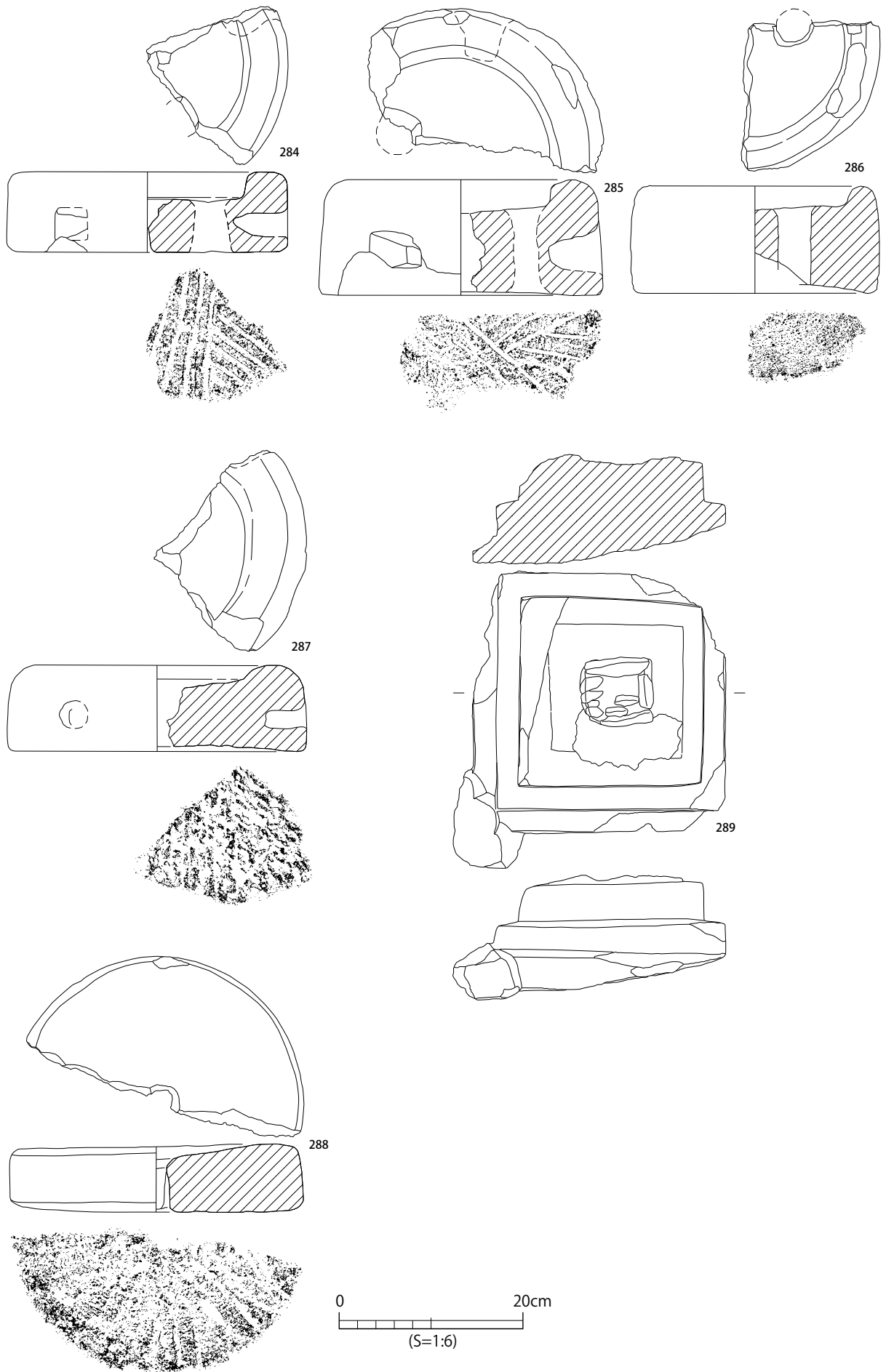
た。266～268は備前焼の播鉢である。266は器形が判る個体である。口縁端部はわずかに下に拡張すると共に、上方へも伸びる。内面の下半は平滑になっている。267は口縁部を上下に拡張する。266はIVA期、267はIVB期と考えられる。268は底部である。269は肥前系の甕底部と考えられる。270は唐津焼の甕である。口縁部を欠くが、胴部外面には釉がかかり、凹線状の文様を多数施す。内面は格子状の当て具痕をナデにより消している。17世紀代と考えられる。2717は軟質で内外をハケで調整する。272は外面にカキメ状の文様を縦方向に施す。273、274は土師器の柱状高台皿である。高台部のみ遺存している。275～282は土師器の皿である。275は口縁部がわずかに上方に伸びる。276の体部は直線的である。277～279の底部は静止糸切りである。277の底部中央には焼成前の穿孔がある。体部は直線的である。280は口縁端部に煤が付着しており、燈明皿として使用されたと考えられる。煤など他の物質が付着した土師器はこれ以外に見あたらなかった。281と282は一緒に出土した。器形もよく似ている。281の体部は曲線的である。282の底部外面には右から「辰巳」と読むことのできる墨書がある。283はミニチュアの椀である。土師器の皿のうち静止糸切りのものは、17世紀以降に下る可能性がある。

第139図は石製品である。284～288は石臼である。このうち284～287は上臼、288は下臼である。284～286は供給口の位置がわかる。また、284、285、287は上臼の挽手の部分が残る。284は播り目が残っているが区画は不明である。285は八区画の可能性がある。286、287は使い減りのため区画溝は不明である。288は下臼としては薄い、放射状の播り目が見られる。289は宝篋印塔の笠部である。隅飾突起とその上の段形部分が残っている。段形の傾斜はほぼ垂直で、頂部にほぞ穴があるので、段形は三段に復元できる。隅飾突起は四隅のうちの一カ所が残っているが、隅飾があることしか判らない。石材は凝灰岩で「白来待」と呼ばれている石材に類似する。なお、石臼285、286と宝篋印塔の289はC16.C17に位置していた江戸時代の井戸の埋土上層から出土した。

第140図290～294は古銭である。290の出土時は4枚重なっていたが、保管している間にばらばらになってしまった。種類の分かるものは洪武通寶である。291は開元通寶である。292～294は永樂通寶である。294は2枚重なっている。これらの永樂通寶はSK203のあるグリッドから出土したことから、SK203に伴っていた可能性がある。

## 第6節 その他の遺構

SD217(第141図) 調査区の北端、D13、E13、D14に位置する。北東一南西方向に伸びる。SD218に先行し、SD218に切られる(第128図BB')。現状で長さ21m、幅0.4～0.7m、深さ0.3～0.4mである。ゆるく湾曲して伸びる。底面は北東側が浅く、南西側が深い。底面の標高には約0.2



第 139 图 石製品実測図

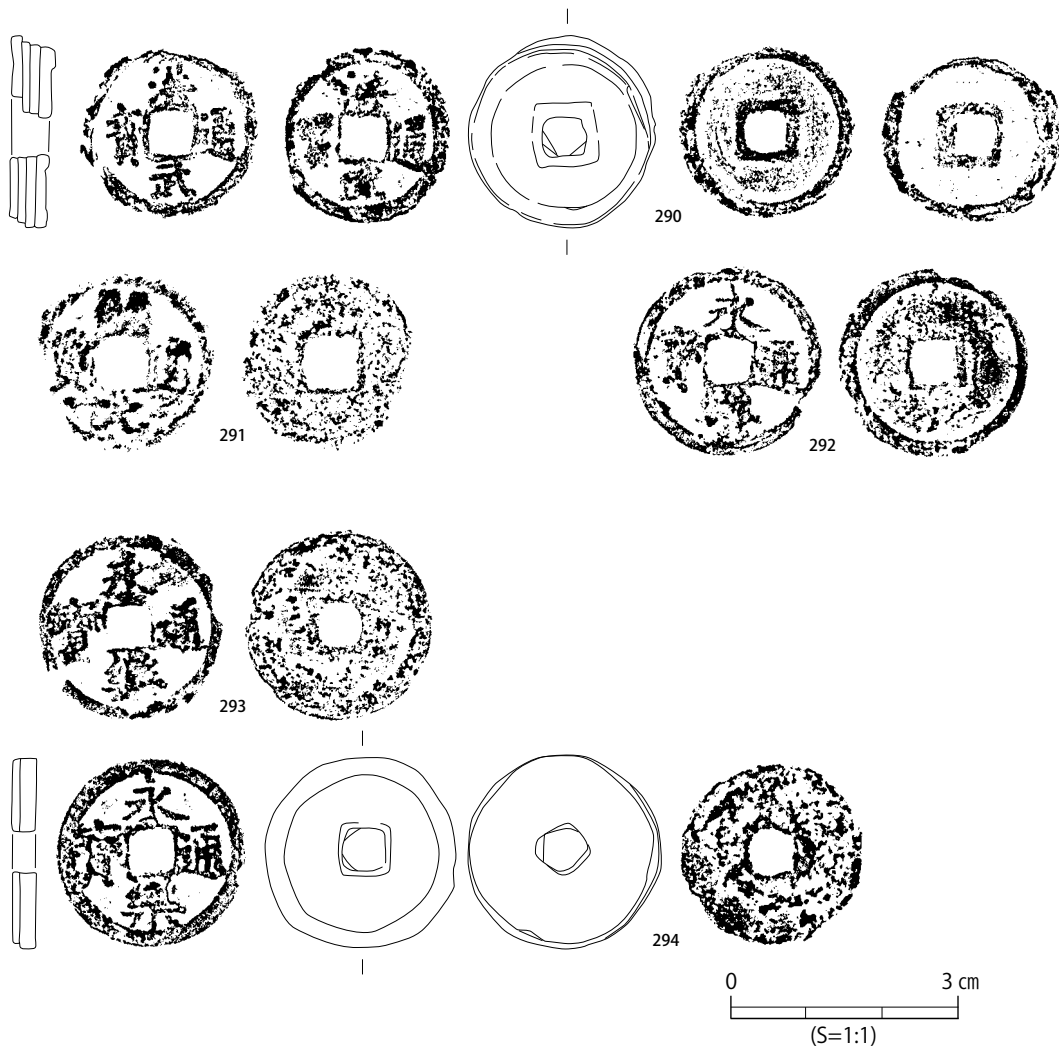


第 21 表 石製品観察表

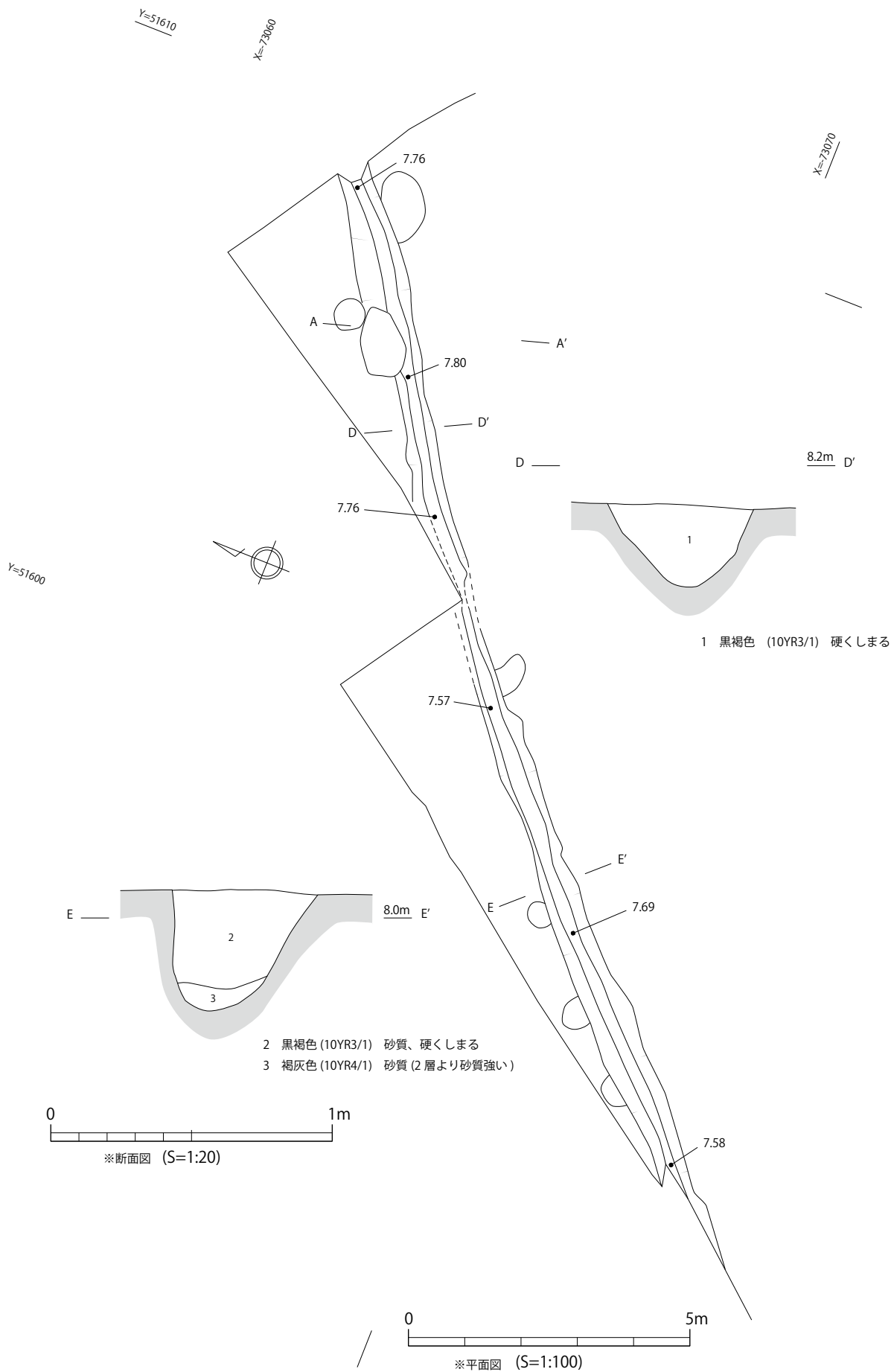
遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点/遺構	層位	直径	長さ	幅	高さ	重さ(kg)	形態の特徴	備考
284	139	128	石製品	石臼	F14	2	(30.4)			8.7	(2.2)	取っ手穴	上白
285	139	128	石製品	石臼	C16.C17		(30.8)			12.6	(6.05)	取っ手穴	上白
286	139	128	石製品	石臼	C16.C17		(27.0)			11.7	(2.95)		上白
287	139	129	石製品	石臼	D15	2	(32.4)			9.4	(2.75)	取っ手穴	上白
288	139	128	石製品	石臼	F14	2	(31.8)			7.4	(5.1)	放射状の播り目?	下白
289	139	129	石製品	宝篋印塔	C16.C17			(32.6)	(24.6)	(13.5)	(8.4)	割り込みは方形	白来待

第 22 表 古銭計測表

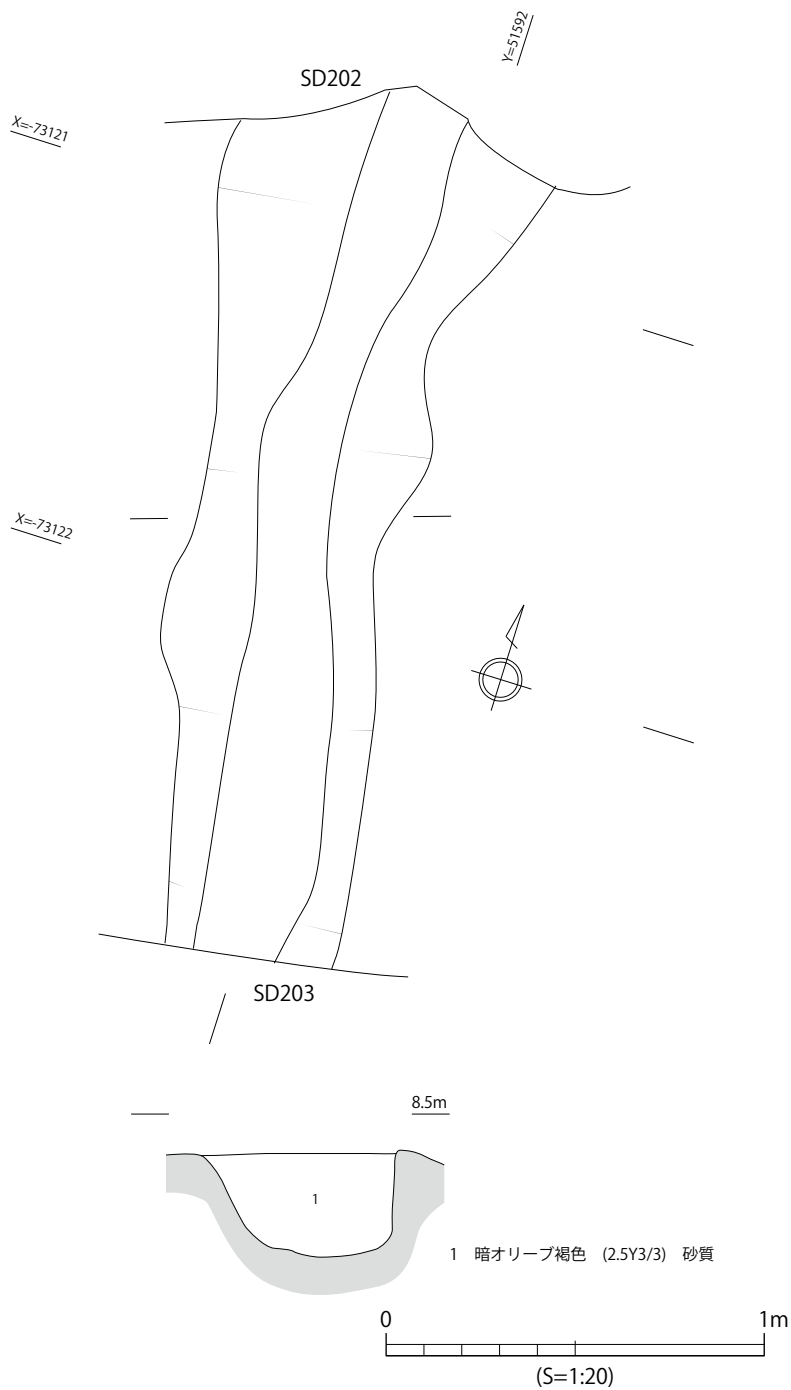
遺物番号	挿図番号	写真図版	名称	出土地点/遺構	層位	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	重量	備考
290	140	130	洪武通寶	E16	3	2.31	2.36	1.99	1.93	0.19	3.36	
290	140	130	洪武通寶	E16	3	2.35	2.23	1.90	1.84	0.17	2.41	
290	140	130	不明	E16	3	2.29	2.23	1.78	1.77	0.28	4.12	二枚重なっている
291	140	130	開元通寶	E15	3	2.44	2.39 以上	2.06	2.05 以上	1.60	2.73	
292	140	130	永樂通寶	E15	3	2.54	2.50	2.11	2.13	0.17	3.00	
293	140	130	永樂通寶	E15	3	2.53	2.53	2.13	2.14	0.17	2.78	
294	140	130	永樂通寶	E15	3	2.53	2.51	2.05	2.07	0.30	7.10	二枚重なっている
			不明	E15	3	2.49	2.46	2.03	2.06	0.31	7.37	二枚重なっている
			不明	E15	3	2.43	2.41	2.02	2.01	0.18	3.10	
			不明	E15	3	2.50	2.47	1.99	2.12	0.17	3.03	
			不明	E15	3	2.43	2.44	1.94	1.89	0.17	3.26	
			不明	F14	3	2.25	2.27	2.07	2.02	0.12	1.75	
			不明	排土中	2	2.35	2.31	1.95	1.91	0.17	2.23	
			□元□寶	F15	2	2.21 以上	1.14 以上			0.18	1.59 以上	細片
			□□□寶	F15	2	2.24 以上	1.25 以上			0.13	0.69 以上	細片
			不明	D16	2	2.53 以上	1.14 以上			0.21	2.39	



第 140 図 古銭



第 141 図 SD217 実測図



第 142 図 SD204 実測図

mの差がある。断面は半円形である。埋土は黒褐色である。鎌倉～室町時代の溝 SD218 に切られることから、鎌倉時代以前に属すると考えられるが、遺物が出土しなかったことから、時期は不明である。

SD204 (第 142 図) 調査区の南側、D19 に位置する。ほぼ南北方向に伸びる。現状で長さ 2.2 m、幅 0.4 ~ 0.8 m、深さ 0.3 m である。SD202 と SD203 の間に位置しているが、先後関係は判らなかった。埋土が暗オリーブ褐色であり、SD202 や 03 とは異なることから、これらの遺構に後出する可

能性が強い。直線的に伸びる。底面はほぼ平坦である。断面はU字形である。遺物は出土しなかった。

## 第7節 小結

下古志遺跡2区では溝や土坑、掘立柱建物を確認した。下古志遺跡第1次調査では、A区やB区において弥生時代・古墳時代の竪穴住居や布掘建物、溝などを確認しているが、本調査区では竪穴住居を確認することはできなかった。遺物の出土も溝SD220では多数の土器が出土したが、それ以外の溝では少ない。このことは本調査区が弥生時代・古墳時代の下古志遺跡の居住域の縁辺部に位置していたことを示すと考えられる。その中でもっとも居住域に近い位置にあったSD220に、多くの土器が流入したり投棄されたと考えられる。SD220は、最大幅が約6m、検出面からの深さが約1.2mあり、下古志遺跡第1次調査E区SD13に匹敵する、規模の大きな溝である。奈良・平安時代では、遺物の出土はあるものの、遺構は土坑を2つ確認したにとどまった。遺構の数が少ないことから、本調査区は居住域との距離がさらに広がった可能性がある。鎌倉・室町時代には、溝で区画された範囲に4棟の、調査区全体では5棟の掘立柱建物を確認した。遺物の量は少ないが、本調査区が居住域の一部になっていたことがうかがえる。

弥生中期後葉には小規模な4本の溝を確認したが、土器の量は数点と少なく、小さな破片ばかりであった。この段階の下古志遺跡は、第1次調査では溝から多くの土器が出土していることに加えて、C区からG区にかけて竪穴住居や土坑などの遺構も見つかっている。下古志遺跡の活動域が古志本郷遺跡よりの東側にあることが想定できることから、本調査区は下古志遺跡の末端に位置していたと考えられる。

弥生後期では、5本の溝を確認し、中でもSD220は幅約5mの大規模な溝である。土器の量も他の4本の溝に比べて多く、調査区全体で出土した弥生土器の約7割、古式土師器の約9割をしめる。下古志遺跡第1次調査のA区やB区で竪穴住居や溝、布掘建物が築かれていることから、下古志遺跡の居住域がやや西へ移動し、本調査区の近くなったことを示していると考えられる。時期による比率は図示したV-1様式からV-3様式まであまり変化がないようであるが、壺と甕以外の器種、特に鼓形器台や鉢の出土量がきわめて少なく、やや奇異な印象を受ける。

古墳前期には3本の溝が機能していたと考えられる。この時期もSD220から多くの土器が出土している。下古志遺跡B区では竪穴住居が見つかっていることから、弥生後期に引き続いて本調査区の近くに居住域があったことを示していると考えられる。弥生後期から古墳前期にかけて、溝以外の遺構が確認できなかったことは、遺跡を区画するSD220のすぐそばには遺構を築かないという遺跡内の空間利用を示しているのかもしれない。

本調査区から出土した弥生土器と古式土師器は出土土器全体のそれぞれ約3割をしめる。このことから、本調査区の主要な時期は弥生時代後期～古墳時代前期ということが出来る。

2区から出土した外来系土器は第106図122～128や第112図145、149がある。122、123は北部九州系の壺であり、下古志遺跡における北部九州との交流が弥生後期にも継続していたことを示すと考えられる。また、126、127、145はこの甕が出土する地域との交流の存在だけ

ではなく、遺跡内での製作も想定することのできる資料である。なお、128は精製品であり、搬入品の可能性がある。

なお、下古志遺跡の1次調査では、D区SD05から須玖式土器が、B区SI04からく字口縁の甕が出土している。

奈良・平安時代は、遺構は土坑などを2つ確認したにとどまったが、この時代の土師器・須恵器・赤彩土師器は包含層から出土している。出土量は土師器と須恵器がそれぞれ遺跡全体遺物の約1割をしめている。赤彩土師器は小さな破片が多く、重量比で1%、数量比3.8%である。土器の出土はE14、F14、D15、E15などの調査区北側のグリッドから多い。一方製塩土器は特定のグリッドから出土するという傾向はないようであり、調査区全体から出土している。須恵器の特徴を見ると、特定の時期の土器が集中するという傾向はあまり見られず、奈良時代から平安時代のなかで盛衰があるとは認めにくい。土器の出土が多いE14やF14ではピットを多数確認しており、ピットの中には奈良・平安時代に属するものがあるのかもしれないが、赤塗土師器が小さな破片として出土することと遺構が少ないことから考えると、遺構が攪乱や削平を受けたのかもしれない。

鎌倉・室町時代は、掘立柱建物5棟、溝5本、土坑3、柱痕の残るピットなどを確認した。調査区の北寄りの部分に多く遺構が位置するが、SB201やSD211のように南側にも位置するものがある。SD218とSD219に囲まれた部分には合計4棟の掘立柱建物を確認したが、重複して位置しているものがあり、同時期には2棟程度が位置していたと考えられる。掘立柱建物の南側には柱根や柱痕を残すピットがあることから、掘立柱建物の数はさらに多かったと考えられる。下古志遺跡1次調査ではB区SD02、SD03、SD04やC区SD03、SD08、SD21などの溝が確認されているが、これらの溝は直線的で、B区SD02とSD03、SD04、B区SD02とC区SD03は互いにほぼ90度の角度に位置している。また、B区SD02の東側延長線上にC区SD21が位置していることから、同一の溝の可能性もある。その中でC区SD08とSD21はSB01、SB02を囲むように位置しており、本調査区同様、溝で掘立柱建物を区画している。このことから、下古志遺跡では溝で掘立柱建物を区画する複数の遺構群があり、それらの遺構群には井戸や土坑が伴って機能していたと考えられる。

出土土器では、中世土師器の出土が比較的多く出土したが、完形のものは少なく破片が多く出土した。そのため第27表<sup>1</sup>のように出土点数比と出土重量比に大きな差がある。青磁は遺跡全体でわずかな点数しか出土せず、居館跡ではなく、集落遺跡であることを示していると考えられる。中世の陶磁器は、出土点数は少ないものの、大きな破片のものが多かったことから、数量比では1.1%であるが重量比では5.6%を示している。中世の土器は下古志遺跡全体の土器の約1割をしめると言うことができる。

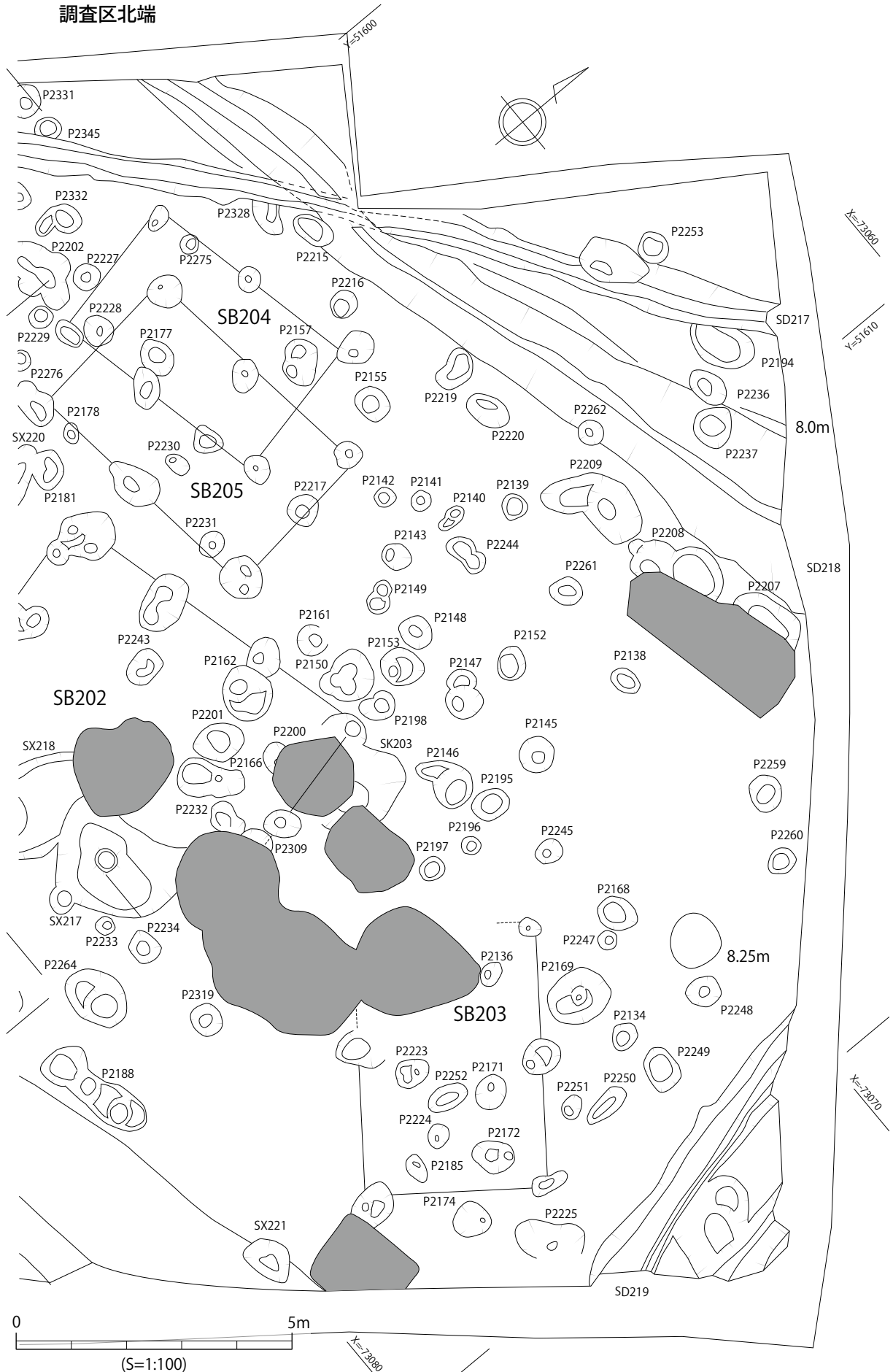
#### 【引用文献】

次山 淳 1997「初期布留式土器群の西方展開—中四国地方の事例から—」『古代』第103号 早稲田大学考古学会、pp.135～156

中川 寧 2006「山陰地域—出雲—」、(財)大阪府文化財センター編2006『古式土師器の年代学』、pp.243～256

1 出土点数と重量の表は土器の種別や器種ごとにグリッド別に計測したが、頁数の関係で第27表しか掲載することができなかった。

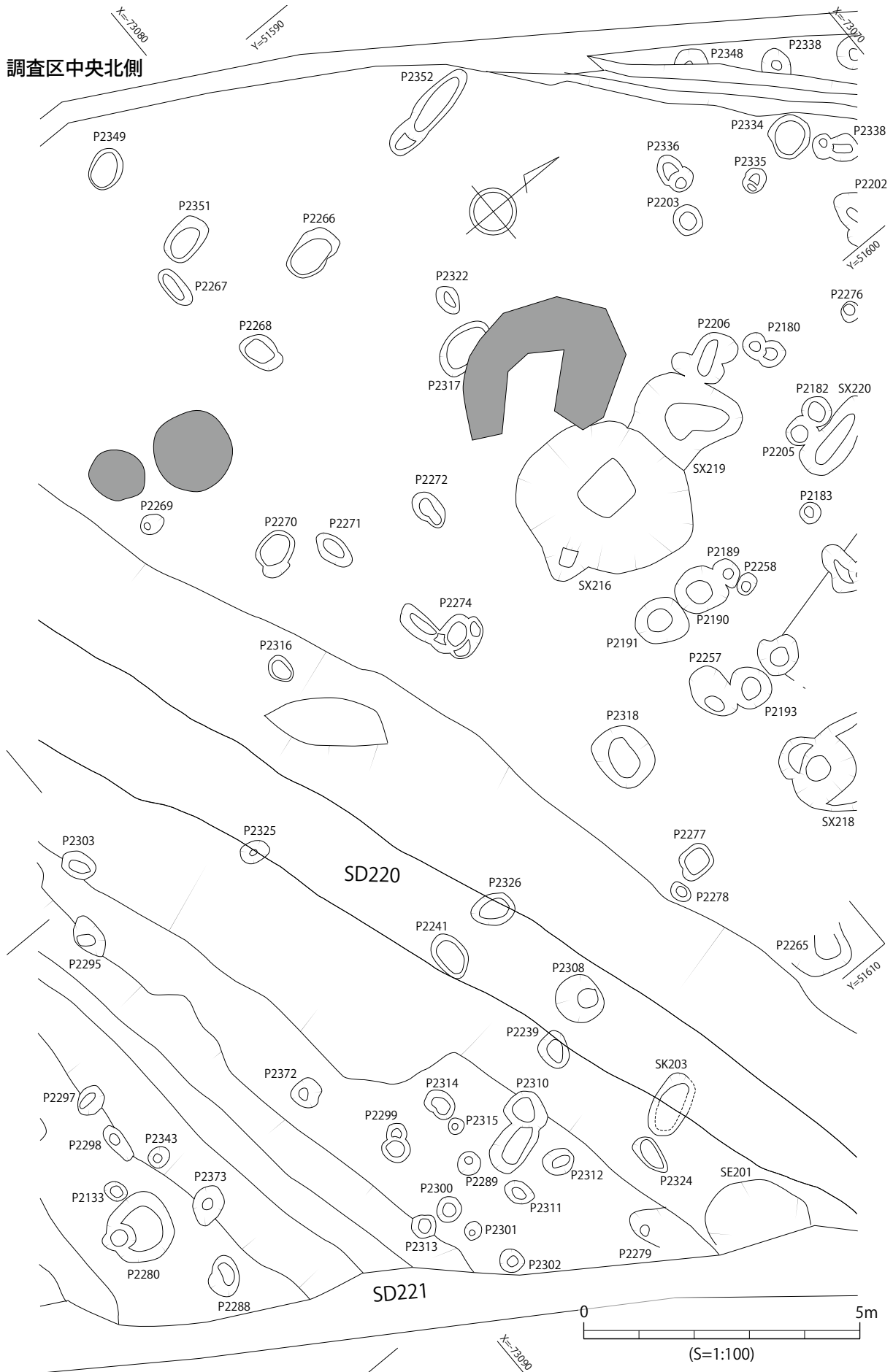
調査区北端



第 143 図

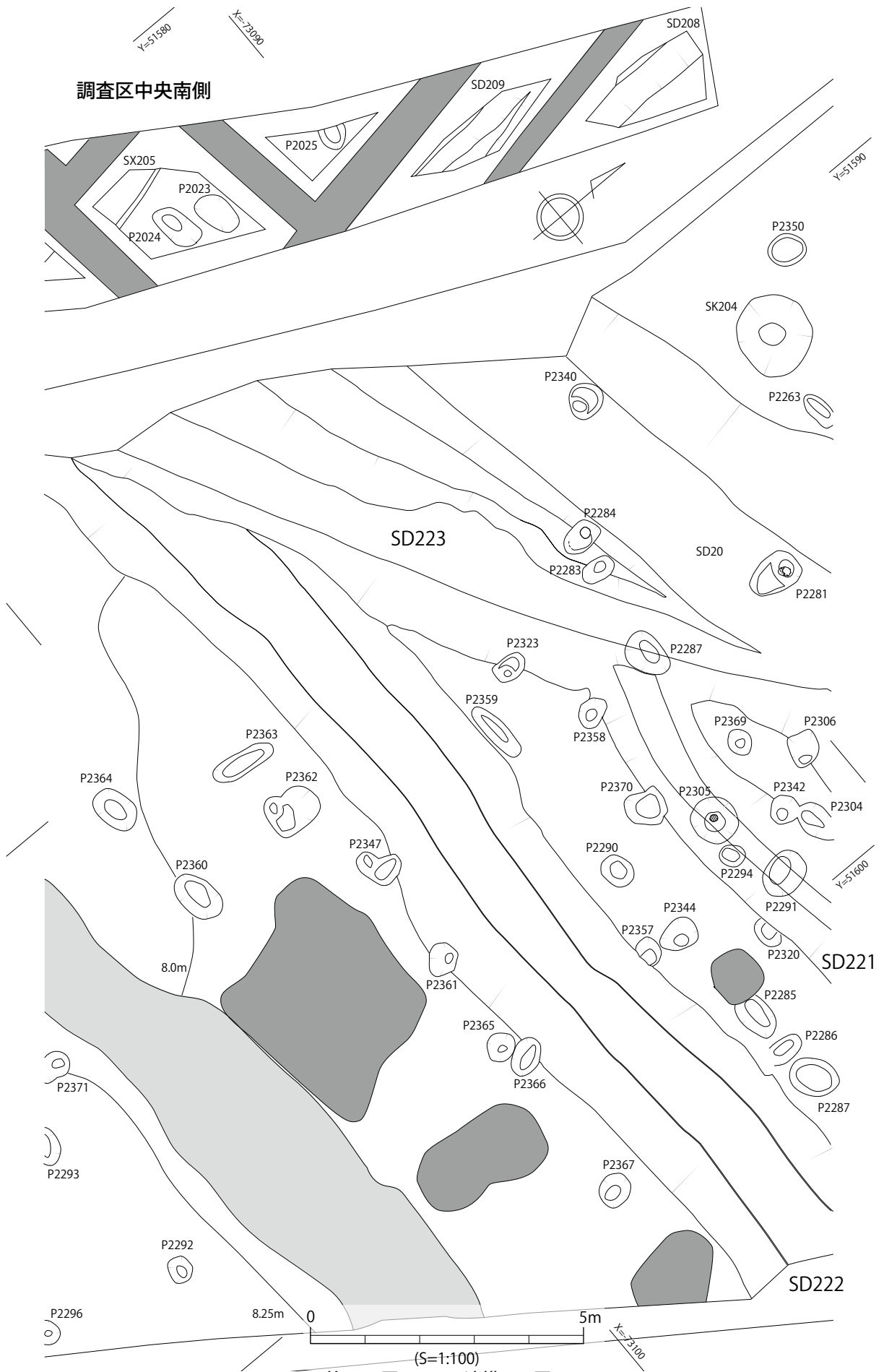
遺構平面図 1

調査区中央北側



第 144 図

遺構平面図 2



第 145 図 遺構平面図 3



第 23 表 溝計測表

遺構名	旧遺構名	平面図	土層図	グリッド	平面形状	断面形状	現長	最大幅	最大の深さ	底面の標高	方向	切り合い	再掘削	出土土器の時期	土器の量
SD202	SD02	93	94	C18.D18. A19.B19. C19.D19	屈曲	逆台形	30	2.7	0.8	7.48	N70° W ~78°	203→202	無	V-1~草田5	少
SD203	SD03	88	88	B19.C19. D19	直線	半円・浅いU字	15	1.3	0.5	7.86	N86° E	203→202	無	弥生中期	ごく少
SD206	SD06	89	90	A20.B20. C20.D20	直線	逆台形	27	1.4	0.5	7.79	N78° E	206→211	無	弥生中期後葉	ごく少
SD215	SD15	91	92	B19.C19. D19.A20. B20	屈曲	半円・浅いU字	28	2.2	0.8	7.60	N79° E	215→216?	有?	弥生中期	ごく少
SD216	SD16	91	92	B19.C19. D19.A20. B20.C20. D20	屈曲	半円・浅いU字	28	1.2	0.6	7.62	N74° E	無し	有?	弥生中期	ごく少
SD220	SD20	96	97	C15.D15. E15.F15. C16.D16	直線	逆台形	29	6.0	1.2	6.90	N74° E	221→220	有	V-1~草田6	多
SD221	SD21 新	110	110	E15.D16. E16	屈曲	U字・逆台形	14	2.5	0.8	7.35	N82° E	223→221	有	V-1~ V-2?	少
SD222	SD22	108	109	C16.D16. E16	直線	半円・浅いU字	20	2.7	0.9	7.29	N89° E	223→222	有	V-1~草田6	少
SD223	SD21 古	107	109	C16.D16	直線	逆台形	14	2.5	1.1	7.00	N70° E	223→221	有	V-1~V-3	少
SD218	SD18-3	126	126	D13.E13. F13	直線	半円・浅いU字	15	2.4	0.4	7.66	N76° E	217→218	無	鎌倉時代~ 室町時代	無
SD219	SD19	127	127	F14	直線	二段・U字	6.6	2.4	0.6	7.53	N17° W	無し	無	鎌倉時代~ 室町時代	ごく少
SD211	SD11	128	128	B20.B21	直線	浅いU字	7.5	0.7	0.2	7.89	N4° E	206→211	無	鎌倉時代~ 室町時代	ごく少
SD208	SD08	129		C15	直線?	逆台形	一部	一部	0.3	7.82	南北	217→218	無	鎌倉時代~ 室町時代	ごく少
SD209	SD09	129		C15	直線?	逆台形	一部	一部	0.4	7.56	南北	無し	無	鎌倉時代~ 室町時代	ごく少
SD217	SD18-1	141		D13.E13. D14	ゆるく湾曲	半円	21	0.7	0.4	7.57	N48° W ~56°	無し	無	鎌倉時代~ 室町時代以前	無
SD204	SD04	142		D19	直線	U字	2.2	0.8	0.3	8.10	N6° W	無し	無	弥生時代以降?	無

第 24 表 遺構計測表

遺構名	旧遺構名	遺構図	グリッド	平面形状	断面形状	現長	最大幅	最大の深さ	底面の標高	出土土器の時期	土器の量
SK201	SK01	115	B21	円形	半円・浅いU字	1.6	1.3	0.3	8.08	奈良・平安時代	無
SK203	Pit307	132	E15.F15	楕円形	U字	1.2	0.7	0.4	7.35	室町時代?	無
SX207	SX07	116	B16.B17	円形	半円形?	3.2	1.3	0.4	7.32	奈良・平安時代	少
SX216	SX16	130	D14.E14	円形	浅いU字	3.1	2.7	0.5	7.65	鎌倉時代~室町時代	少
SX218	SX18	131	E14	不整形	半円・浅いU字	1.1	1.1	0.6	7.55	鎌倉時代~室町時代	少

第 25 表 掘立柱建物一覧表

遺構名	旧遺構名	遺構図	グリッド	桁行き	梁行き	長軸	短軸	遺構の時期
SB201	SB01	123	B21.C21	1	4以上	8.8以上	2.1	鎌倉時代~室町時代?
SB202	SB02	124	E14.F14	2	3	6.3	4.2	鎌倉時代~室町時代
SB203	SB03	124	F14	1	2	4.8	3.3	鎌倉時代~室町時代?
SB204	SB04	125	E13.E14	1	2	4.3	2.7	鎌倉時代~室町時代
SB205	SB05	125	E13.E14	1	2	5.0	3.0	鎌倉時代~室町時代

第 26 表 掘立柱建物計測表

SB201

規模		梁行き			桁行き		
		1			4 以上		
主軸		N-77° -W					
柱穴	番号	P 2061	P 2068	P 2056	P 2130	P 2072	P 2054
	上面径 (m)	1.0 以上× 0.6	0.9 × 0.5	0.7 × 0.5	0.7 × 0.4	0.6 × 0.6	0.7 × 0.6
	底面の標高 (m)	7.88	7.82	7.82	7.93	7.93	7.92
柱穴	番号	P 2059	P 2064	P 2067	P 2031		
	上面径 (m)	0.7 × 0.6	0.8 × 0.6	0.8 × 0.6	0.6 以上× 0.6		
	底面の標高 (m)	7.92	7.80	7.86	7.82		
柱間距離		P 2061 - P 2068	P 2068 - P 2056	P 2056 - P 2130	P 2130 - P 2072	P 2072 - P 2054	P 2054 - P 2059
(m)		2.05	2.15	2.30	2.30	2.08	2.04
柱間距離		P 2059 - P 2064	P 2064 - P 2067	P 2067 - P 2031			
(m)		2.33	2.19	1.99			

SB202

規模		梁行き			桁行き		
		2			3		
主軸		N-78° -E					
柱穴	番号	P 2199	P 2137	P 2162	P 2160	P 2165	P 2184
	上面径 (m)	0.7 × 0.6	0.9 × 0.4 以上	0.7 以上× 0.6	1.2 × 0.7	1.4 × 1.0	1.1 × 0.8
	底面の標高 (m)	7.75	7.88	7.84	7.84	7.74	7.70
柱穴	番号	P 2192					
	上面径 (m)	0.8 × 0.8					
	底面の標高 (m)	7.83					
柱間距離		P 2199 - P 2137	P 2137 - P 2162	P 2162 - P 2160	P 2160 - P 2165	P 2165 - P 2184	P 2184 - P 2192
(m)		2.12	2.00	2.08	1.84	2.04	1.93

SB203

規模		梁行き			桁行き	
		1			2	
主軸		N-54° -W				
柱穴	番号	P 2246	P 2170	P 2173	P 2175	P 2222
	上面径 (m)	0.5 × 0.4	0.7 × 0.7	0.8 × 0.4	0.9 以上× 0.7	0.9 × 0.5 以上
	底面の標高 (m)	7.82	7.86	7.88	7.72	7.74
柱間距離		P 2246 - P 2170	P 2170 - P 2173	P 2173 - P 2175	P 2175 - P 2222	
(m)		2.33	2.30	3.20	2.91	

SB204

規模		梁行き			桁行き		
		1			2		
主軸		N-75° - E					
柱穴	番号	P 2156	P 2176	P 2330	P 2242	P 2211	P 2214
	上面径 (m)	0.7 × 0.6	0.5 × 0.5	0.5 × 0.4	0.6 × 0.4	0.8 × 0.5	0.6 × 0.5
	底面の標高 (m)	7.60	7.80	7.93	8.00	7.87	7.94
柱間距離		P 2156 - P 2176	P 2176 - P 2330	P 2330 - P 2242	P 2242 - P 2211	P 2211 - P 2214	P 2214 - P 2156
(m)		2.29	1.99	2.65	1.71	2.45	2.80

SB205

規模		梁行き			桁行き		
		1			2		
主軸		N-80° - E					
柱穴	番号	P 2218	P 2167	P 2210	P 2179	P 2164	P 2158
	上面径 (m)	0.6 × 0.6	0.6 × 0.5	0.7 × 0.6	0.9 × 0.6	1.1 × 0.7	0.9 × 0.8
	底面の標高 (m)	7.84	7.92	7.79	7.74	7.82	7.76
柱間距離		P 2218 - P 2167	P 2167 - P 2210	P 2210 - P 2179	P 2179 - P 2164	P 2164 - P 2158	P 2158 - P 2218
(m)		2.35	2.03	3.08	2.29	2.60	2.98

第 27 表 出土土器数量表

種別	D13		E13		F13		D14		E14		F14		C15		D15	
	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数
弥生土器			158.28	7	37.00	3	15.17	2	501.31	19	1539.89	33	681.73	12	8014.96	391
古式土師器	18.43	3	73.92	10	88.51	10	51.93	3	197.27	19	579.49	22	168.64	15	6396.52	326
土師器	48.88	6	253.06	33	148.10	27	423.28	26	1580.12	144	682.99	70	153.37	12	926.50	79
須恵器	92.72	9	331.13	28	235.17	12	389.46	25	1622.79	81	1073.59	58	258.29	4	863.59	51
赤彩土師器	4.23	2	43.38	11	4.86	1	25.08	8	298.25	67	140.02	26	59.51	6	103.38	20
製塩土器			5.64	1			8.77	2	32.81	4			22.07	2	13.14	3
中世土師器	12.90	1	121.64	12	140.17	15	247.32	33	667.93	112	426.32	56	219.78	37	648.15	100
中世陶磁器	310.99	1	365.55	7	174.07	2	69.40	1	12.77	1	527.24	4			2.24	1
総計	488.15	22	1352.60	109	827.88	70	1230.41	100	4913.25	447	4969.54	268	1563.39	88	16968.48	971

種別	E15		F15		C16		D16		E16		B17		C17		D17	
	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数
弥生土器	17272.31	692	8167.72	295	2589.82	87	3911.35	154	3674.89	120	0.00	0	67.47	5	198.24	11
古式土師器	20212.12	1096	7587.00	504	1805.41	99	1966.97	44	669.64	51	24.48	2	12.42	2	106.35	8
土師器	1892.13	139	952.03	51	474.51	18	883.46	87	553.88	58	31.99	2	38.48	2	417.02	26
須恵器	2451.25	86	633.58	35	824.30	29	857.11	47	785.32	28	216.85	14	480.98	23	1245.74	32
赤彩土師器	191.13	35	50.90	12	76.27	9	168.88	32	23.15	9	56.78	11	7.48	1	20.89	2
製塩土器	5.55	1			9.26	1	17.67	4							17.25	2
中世土師器	851.32	142	243.42	47	343.59	42	858.95	139	581.41	95	73.69	11	501.74	22	439.86	47
中世陶磁器	347.66	10	562.23	3	581.86	7	428.03	10	341.70	5	554.88	6	271.34	5	2626.05	7
総計	43223.47	2201	18196.88	946	6705.02	292	9092.42	515	6629.99	365	958.67	46	1379.91	60	5071.40	134

種別	E17		A18		B18		C18		A19		B19		C19		D19	
	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数
弥生土器	16.33	1			30.19	1	73.93	3	55.67	4	300.53	16	736.56	2		
古式土師器							250.87	1	410.84	10	76.86	5	289.52	3		
土師器					6.83	1	34.77	1	8.71	1	171.97	8	30.47	3	20.45	1
須恵器			18.25	1	132.77	8	108.98	2	126.89	7	602.27	20	150.99	5		
赤彩土師器					10.31	1					4.69	1			5.01	1
製塩土器											5.03	1			4.56	1
中世土師器	32.78	2	4.64	1	45.06	5	59.67	10	27.73	3	147.10	20	114.32	9	63.79	5
中世陶磁器					75.65	1					238.39	5				
総計	49.11	3	22.89	2	300.81	17	528.22	17	629.84	25	1546.84	76	1321.86	21	93.81	8

種別	A20		B20		C20		A21		B21		C21		その他		合計	
	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数
弥生土器	24.39	3	32.80	5	174.78	3							1614.08	79	51275.41	1993
古式土師器	40.04	5	6.40	1	14.76	1			24.99	5			275.60	30	41431.62	2277
土師器	34.02	4	210.55	12	35.48	5	20.09	3	54.57	5	25.33	3	421.73	39	10788.70	886
須恵器	417.80	27	291.04	15	164.41	13	225.05	19	181.89	14	122.61	9	1416.79	67	17094.34	792
赤彩土師器			8.92	1	11.53	2	60.87	6	7.25	2	3.70	1	57.53	10	1446.98	278
製塩土器			3.79	1	5.96	1	12.55	1.5	2.47	0.5			29.90	7	196.42	33
中世土師器	146.44	10	159.31	10	141.31	15	42.45	6	107.22	13	35.11	5	317.50	46	7852.88	1071
中世陶磁器	34.49	1	51.91	1			3.34	1			112.00	1	56.11	2	7771.71	83
総計	697.18	50	764.72	46	548.23	39	364.35	37	378.39	39	298.75	19	4189.24	280	137858.06	7413

	重量比	数量比
弥生土器	37.2%	26.9%
古式土師器	30.1%	30.7%
土師器	7.8%	12.0%
須恵器	12.4%	10.7%
赤彩土師器	1.0%	3.8%
製塩土器	0.1%	0.4%
中世土師器	5.7%	14.4%
中世陶磁器	5.6%	1.1%

※重量の単位はg、点数の単位は点

## 第5章 総括

今回の下古志遺跡の調査では、弥生時代から古墳時代にかけて、次いで鎌倉時代から戦国時代にかけての集落を確認した。この調査結果は、下古志遺跡1次調査の調査結果とも符合するものである。以下、時代ごとに遺構・遺物を確認し、総括としたい。

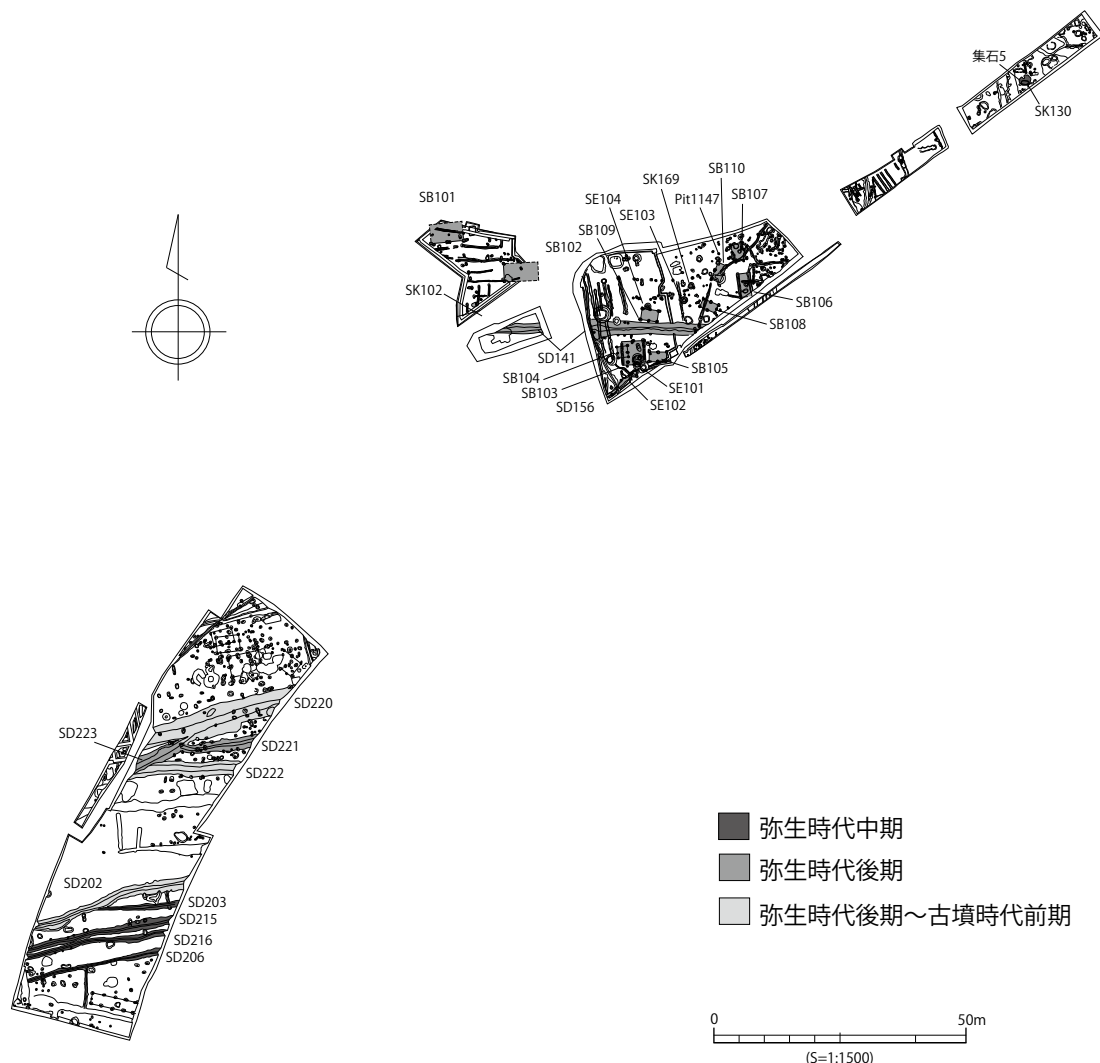
今回の調査でもっとも古い遺構は弥生中期である。1区では土坑(SK169)や集石遺構、溝、2区では中期後葉の溝を4本確認した。出土した土器はわずかな量である。この時期の下古志遺跡は、1次調査のC区やD区で竪穴住居や溝が確認されており、今回の調査区に近接する地点での遺構・遺物は少ない。このことは、弥生中期において居住域の中心は調査区からみて東側にあり、本調査区は遺跡の周辺部に位置していたことを示すと考えられる。なお、2区の溝は、小規模だが直線的に位置しており、4本の溝は一連の遺構として考えることができる。居住域を区画するための溝が中期後葉から存在していたことを示すと考えられ、下古志遺跡は「環濠集落」として中期後葉から存在していたことが明らかになった。

弥生後期には複数の溝が掘削される。溝は1区と2区では規模や形態に違いがあり、機能も異なる可能性が強い。1区の溝SD141は遺跡の中の区画、2区の溝は規模が大きいため遺跡の内外を区画するための溝と考えられる。また、1区の溝は後期後葉～後期末(草田3～4期)の土器が多いのに対して、2区の溝は、特にSD220は後期初頭(草田1期)から古墳時代初頭(草田6期)までの時期幅があり、機能していた時間幅が異なると考えられる。

1区では布掘建物や掘立柱建物、溝、井戸、土坑が築かれる。遺構の配置には掘立柱建物と井戸がセットとして機能していた可能性が強い。調査区内では掘立柱建物だけが確認され、竪穴住居を確認することはできなかったが、1次調査A区やB区の様相から、竪穴住居と掘立柱建物がやや間隔を置いて位置する状態を想定することができるので、近接する調査範囲外に竪穴住居が位置する可能性がある。1区の溝はほぼ東西方向に伸びているが、溝の両側に遺構が築かれている。溝の深さが均一ではないことも、排水より区画が目的であったことを示唆する。さらに、遺構が機能していた時間幅が草田3～4期と2区の溝に対して短いことから、A区やB区に後期前半に位置していた布掘建物を、SD141を掘削して布掘建物と井戸をその両側へ配置し、遺跡内を区画して遺構の再配置を目的にした可能性がある。また、2区の溝はA区やD区の大溝と一連の、居住域を区画するための溝と考えることができる(第147図)。溝の配置から長さが200～300mの居住域を復元することができ、古志本郷遺跡とあわせると神門川左岸に複数の「環濠集落」が位置していたことを想定することができる。

後期末から古墳前期初頭にかけては、2区の溝では少量ではあるが土器が出土し、溝が存続しているのに対して1区では土器の出土量が急減する。これは後期後半の居住域が後期末～古墳前期初頭には継続しない可能性が強く、第1次調査でも竪穴住居が少ないことも調和的である。

今回の調査で確認した溝を、これまで古志本郷遺跡や下古志遺跡で見つかった溝と比較すると、1区-2部分のSD141やSD220、SD223で見られた最上層の黒色土の堆積や再掘削の痕は、下古志遺跡E区SD04やSD07、SD13、古志本郷遺跡C区SD16～18(島根県教育委員会編



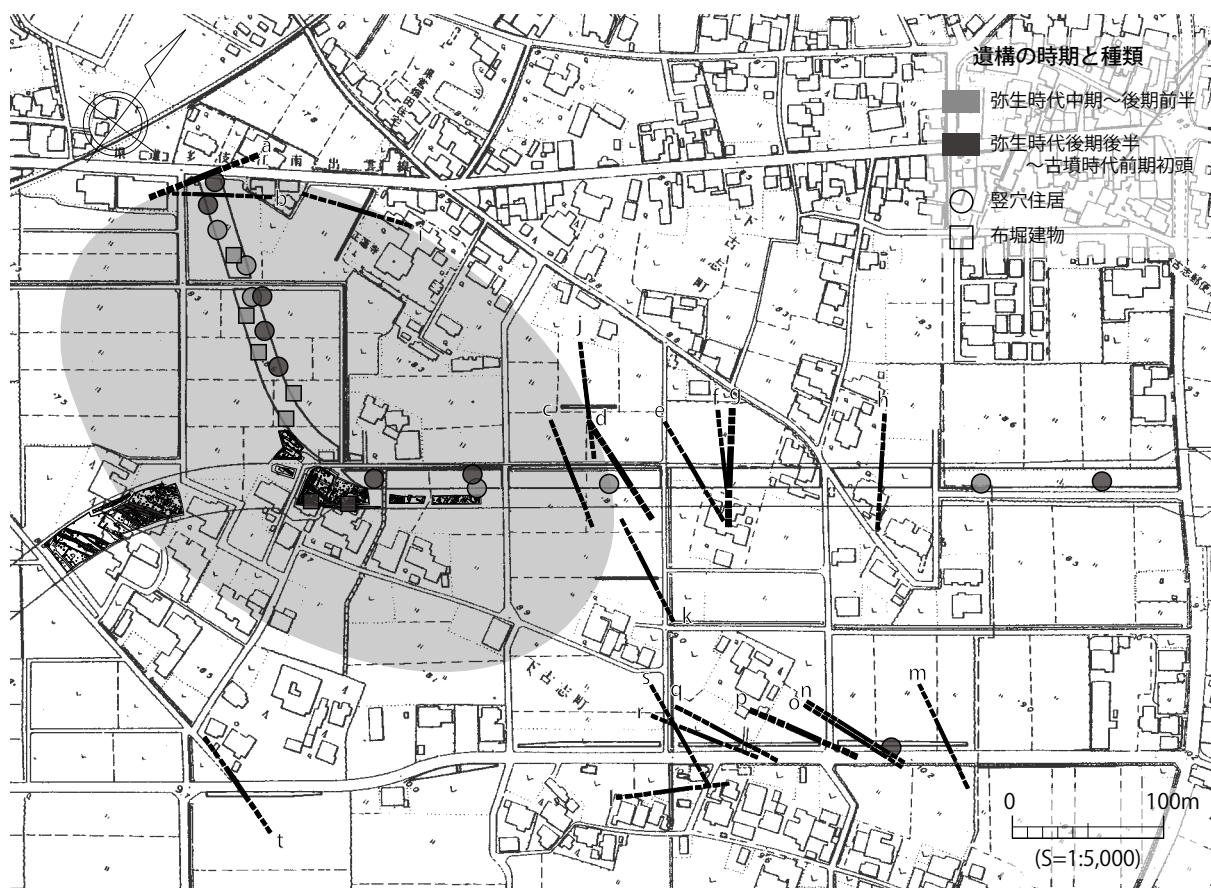
第 146 図 下古志遺跡 弥生・古墳時代の遺構配置図

1999) や K 区 SD06、SD07 (島根県教育委員会編 2003) など確認できる。一方、SD221 のような再掘削が見だしにくい溝も、下古志遺跡 A 区 SD28 や古志本郷遺跡 K 区 SD03 などがある。出土する土器の時期も似ているが、古志本郷遺跡 K 区のような、大量の完形土器が出土するような様相は見られず、その点は下古志遺跡 1 次調査の様相と似ている。なお、溝の最上層に黒色土が堆積する溝は、古志本郷遺跡の C 区や H 区、K 区といった遺跡の東側の部分で確認でき、今回の調査区に隣接する A 区や D 区では見られないことは興味深い。

遺物については、1 次調査でみられた外来系土器は少なく、2 区で北部九州系壺や「く」字口縁甕が少量出土したにとどまり、地元の土器が主体を占める。石器の出土も少ない。なお、古式土師器の肩部の施文に、波状文と直線文と刺突文の組み合わせが多く見られる。遺跡間の比較や流通を考える上での着目点になる。今後の検討課題である。

奈良・平安時代の遺構は、2 区で土坑を 2 基確認しただけである。一方土器は出土しており、製塩土器の出土もある。2 区の溝の最上層から須恵器や土師器が出土することから、この時期まで溝が凹みとしてあったことがうかがえる。

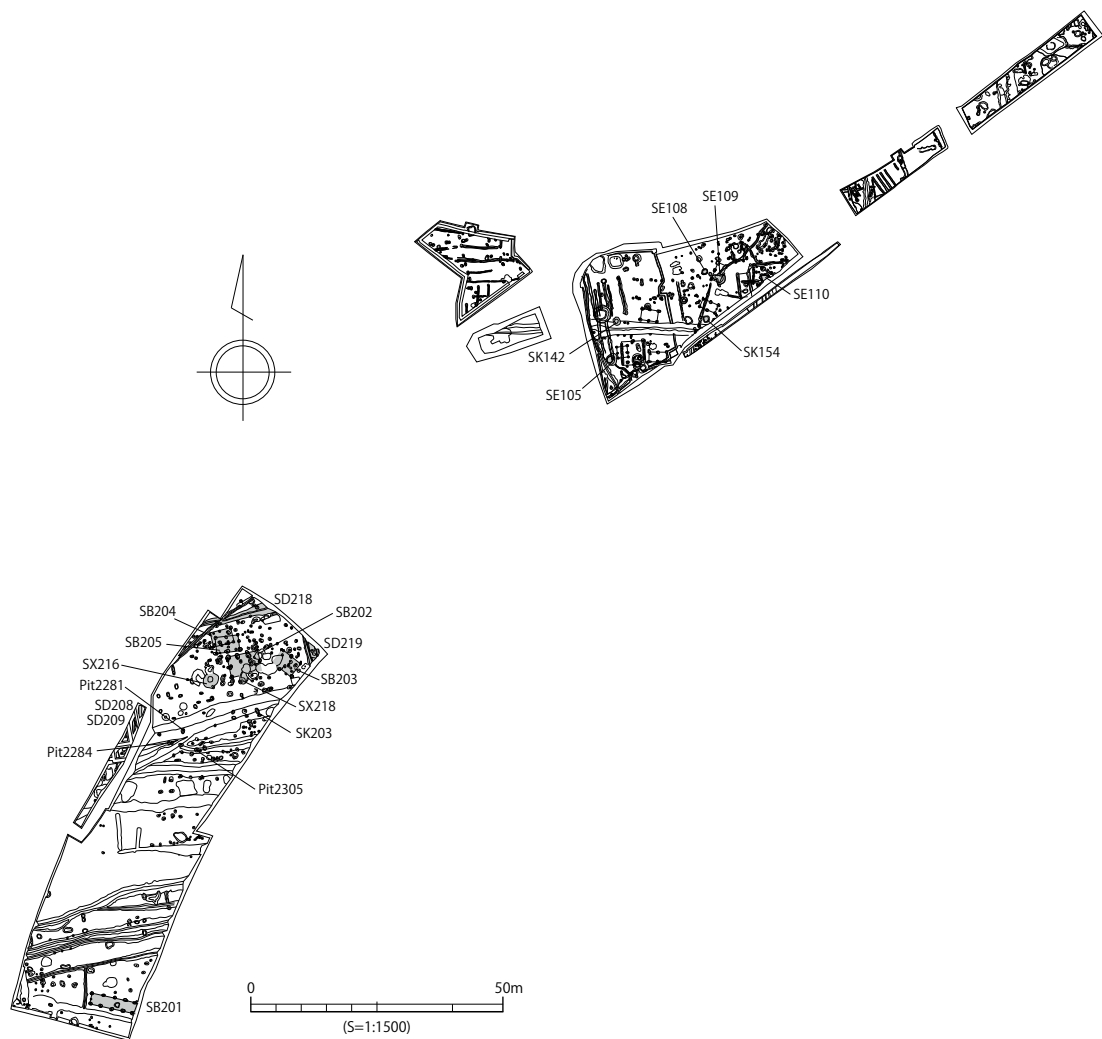
鎌倉・室町時代の遺構は、1 区では井戸、土坑、土器埋納遺構を、2 区では掘立柱建物、溝、土



第 147 図 下古志遺跡住居域推定図

坑をそれぞれ確認した（第 148 図）。1 区に隣接する 1 次調査の B 区や C 区では、掘立柱建物も確認されているものの規模の不明なものも多く、建物を配置するより井戸の掘削に適切な場所を選択していたことがうかがわれる。B 区 SD38 から続く SD142 は、東西方向から屈曲して南北方向へ伸び、SD134 は C 区 SD08 へと続くようである。また、2 区の SD218 や SD219 は、掘立柱建物 SB202～205 を区画する。これらの溝は、弥生時代の溝と規模が異なるが、掘立柱建物や土坑、井戸が溝の内側に位置することから、集落の中を区画するための用途があったと考えられる。また、SK106 は木棺墓であり、C 区 SD01 や SD21 に区画された中に位置している。なお、古銭が多く出土した土坑 SK203 は、掘立柱建物の南側に位置しており、溝による区画の中に位置していることになり、遺構の性格を推測する上で示唆に富む。また、1 区-2 の室町時代の Pit1170 からは中世土師器の坏皿類がまとまって出土した。灯明皿として使用されたことが想定でき、使用後の廃棄状況がうかがえる資料である。

遺物では、1 区も 2 区も輸入陶磁器の点数が少ないことが挙げられる。古志本郷遺跡 A 区では古瀬戸後期の香炉や天目茶碗が出土しているほか、築山遺跡や蔵小路西遺跡などの「居館」と想定される遺跡と比べて、輸入陶磁器の量は少ない。井戸や土坑を中心とする遺構の配置とあわせて、鎌倉時代～戦国時代の下古志遺跡は集落遺跡であったことがうかがわれる。旧山陰道である県道多伎江南出雲線に隣接した古志本郷遺跡 H 区の調査では、道路沿いに江戸時代の建物が並ぶ景観を復元しているが（島根県教育委員会編 2001、207.208 頁）、下古志遺跡 A 区で見つかった畝状遺構から推測すると、街道沿いから少し離れた散在する集落という景観が、江戸時代よりも遡った室町時代には成立していた可能性がある。



第 148 図 下古志遺跡 鎌倉・室町時代の遺構配置図

【参考文献】

- 島根県教育委員会編 1999 『古志本郷遺跡 I』 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 VI  
 島根県教育委員会編 2001 『古志本郷遺跡 II』 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 XI  
 島根県教育委員会編 2003 『古志本郷遺跡 VI』 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 XVII

第 147 図は、出雲市教育委員会編 2002 『下古志遺跡 - 考察編 -』 図 11 31 頁を改編して使用した。

# 写真図版





1. 下古志遺跡1区空中撮影(西上空から)



2. 1区-1 調査前(南から)



1. 1区-1 遺構検出状況全景(南から)



2. 下層遺構及びSK102 検出状況



1. SK102 土器出土状況



2. SK102 発掘状況



1. SK102 土器出土状况



2. SK102 土器出土状况



3. SK102 完掘状况





1. 調査区西部 SB101 調査状況



2. 調査区東下層遺構 SB102 完掘状況



1. SB101 Pit1016 柱根出土状况



2. SB101 Pit1012 埋甕出土状况



3. SB101 Pit1012 完掘状况



1. SK101 検出状況



2. SK101 土層断面 (北から)



3. SK101 完掘状況 (南東から)



1. 1区-2空中撮影





1. 1区-2,3 調査前



2. 調査区中央南北方向土層断面  
(西から)



3. 1区-2 調査区南側東西方向土  
層断面(北から)



1. SK169 弥生時代中期土坑墓検出状況(西から)



2. SK169 石及び高坏出土状況

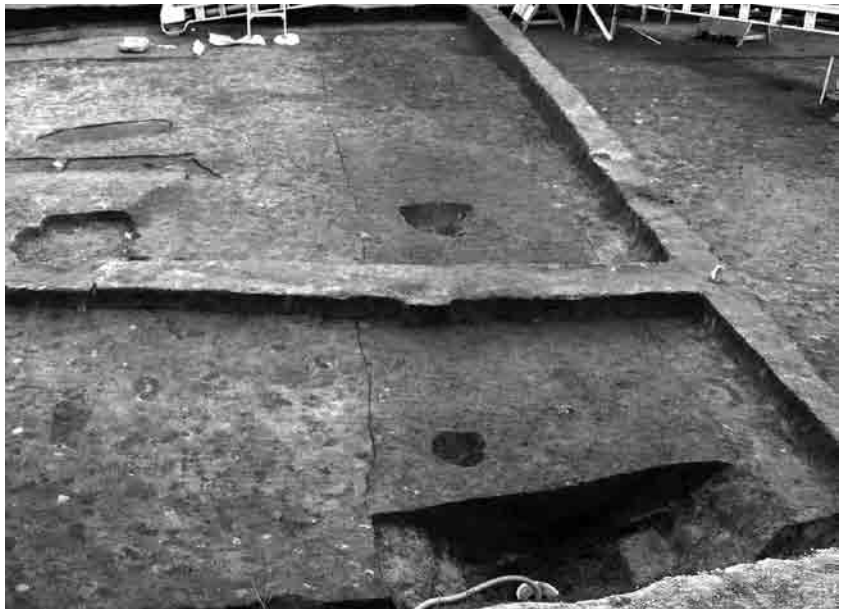


3. SK169 石及び高坏出土状況

1. SD156(東西方向の溝) 遺構出土状況(南から)



2. SD141 検出状況



3. SD141 2層除去後





1. SD141 土層堆積状況(西から)





1. SD141 東側 (N8グリッド内) 南北土層断面 (西から)



2. SD141N8グリッド 西 2-2 層土器出土状況



1. SD141 M8 グリッド 2-2 層土器出土状況



2. SD141 N8 グリッド 東 2,3 層土器出土状況



3. SD141 N8 グリッド 東 2,3 層土器出土状況

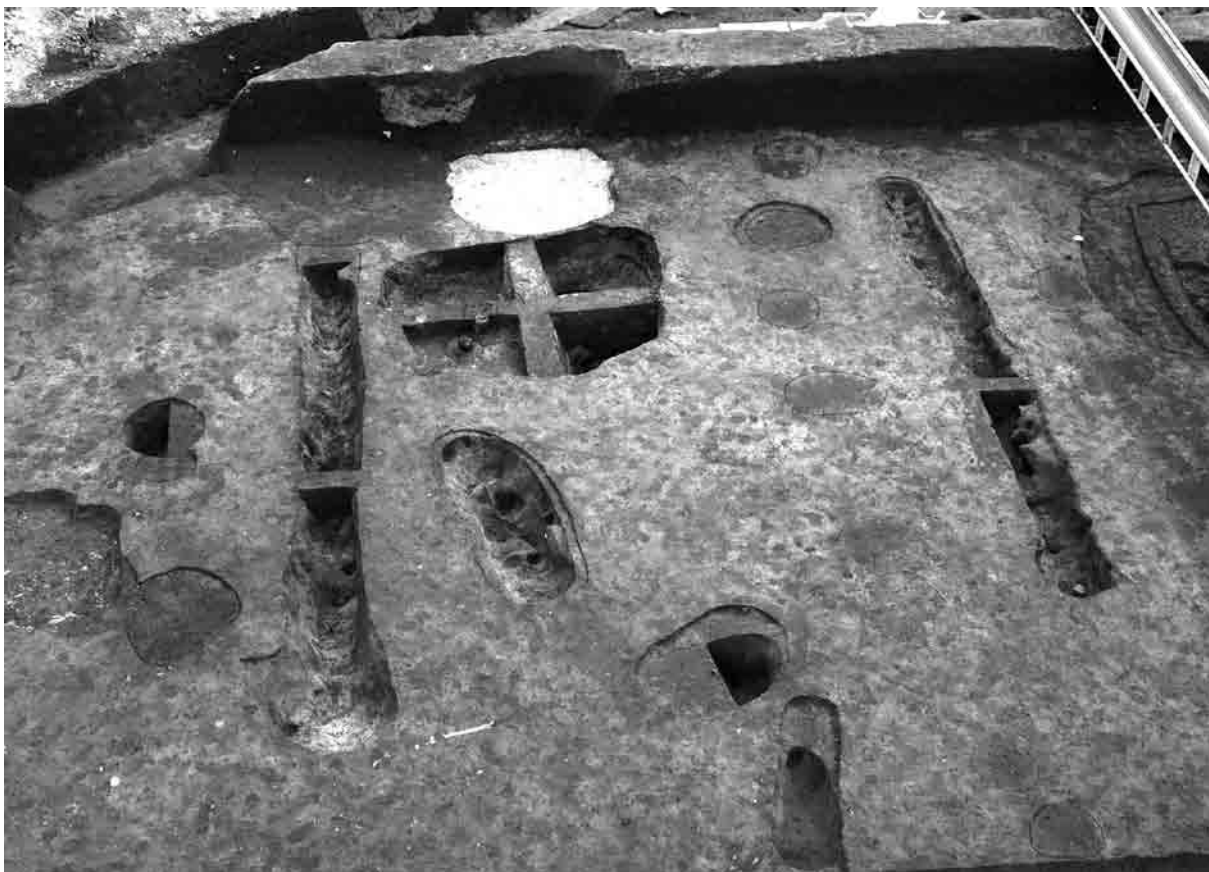


1. SD141 以南遺構群検出状況（東から）

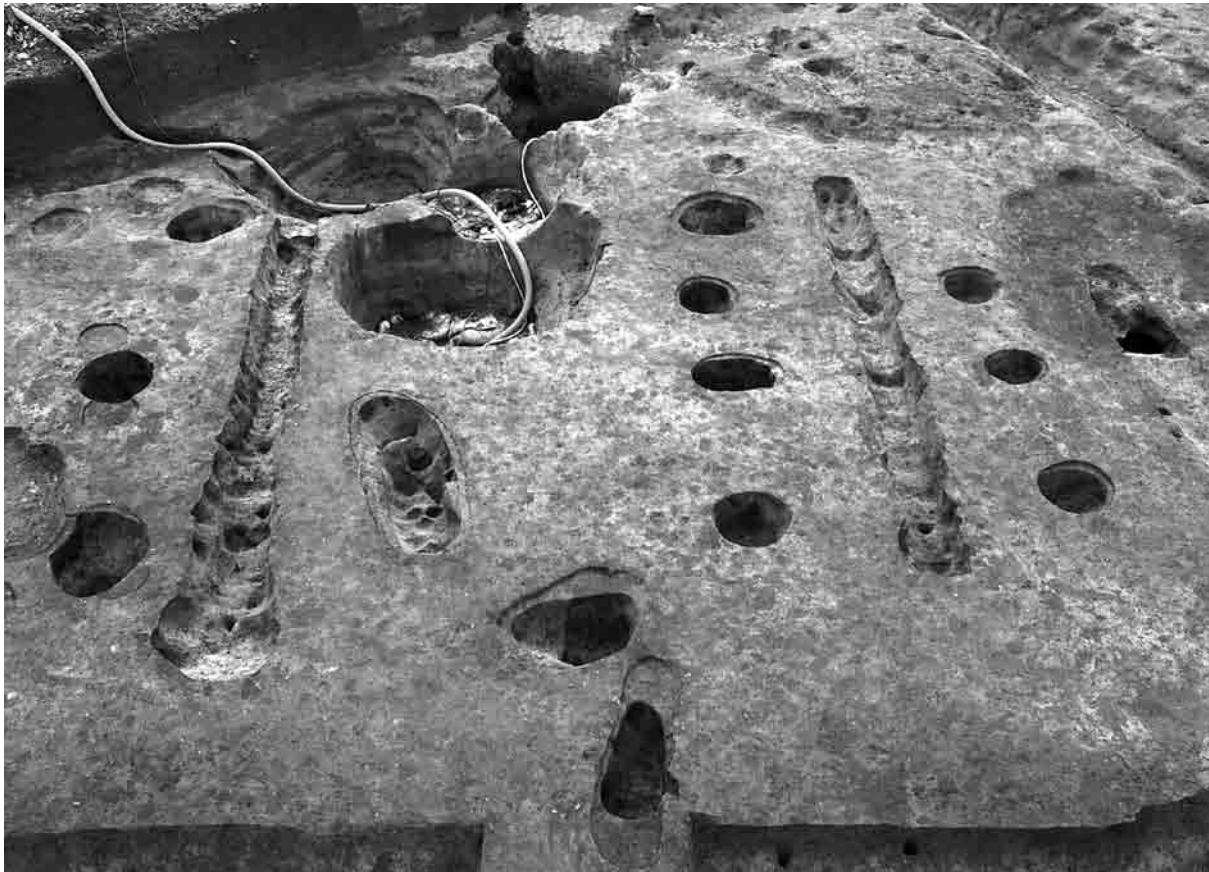


2. 布掘建物 SB103 検出状況





1. SB103 発掘状況 (北から)

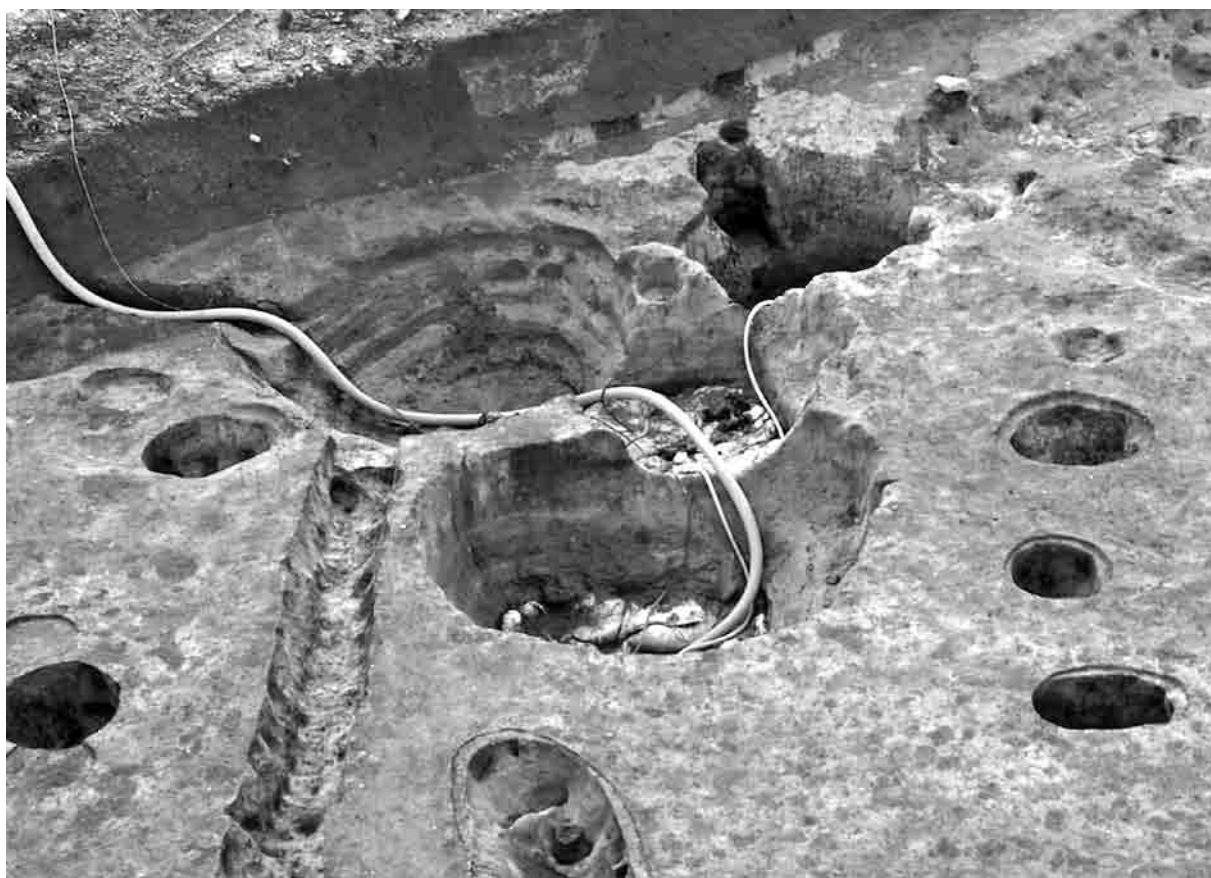


2. SB103,SE102 完掘





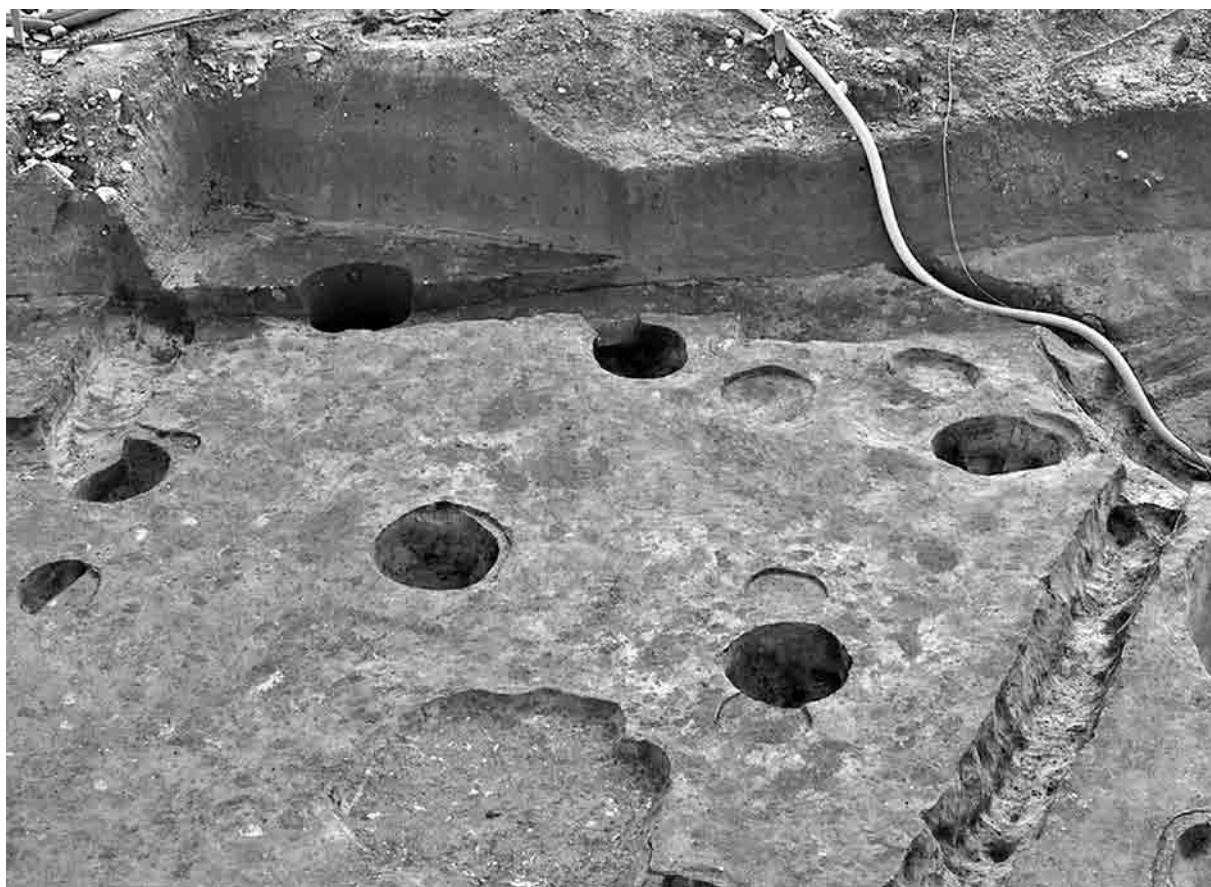
1. SE102 上部土層断面



2. SB103,104,SE101,102 完掘



1. SB105 完掘



2. SB105 完掘



1. SE101 井戸上部土層断面



2. SE101 井戸粹





1. 布掘建物 SB106 と Pit1187 検出状況



2. 布掘建物 SB106 完掘



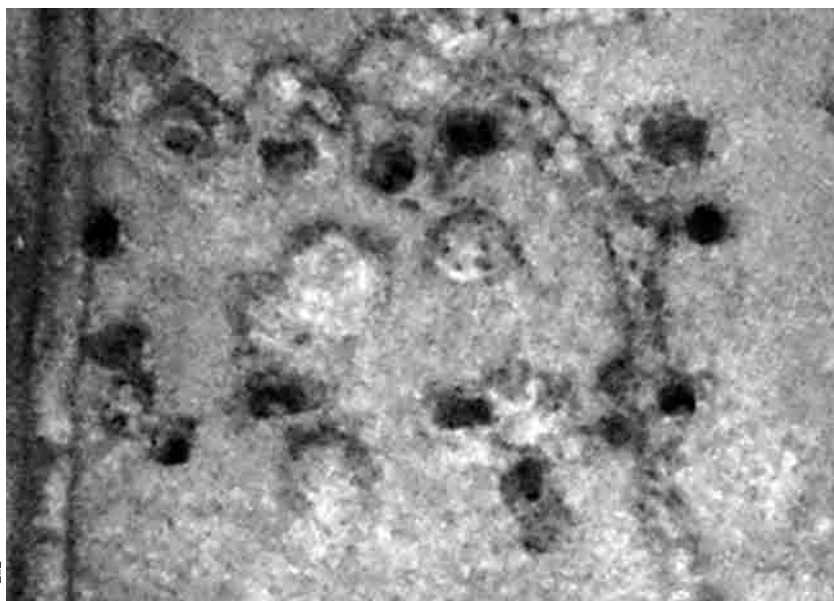
3. Pit1187 土層断面 (南から)



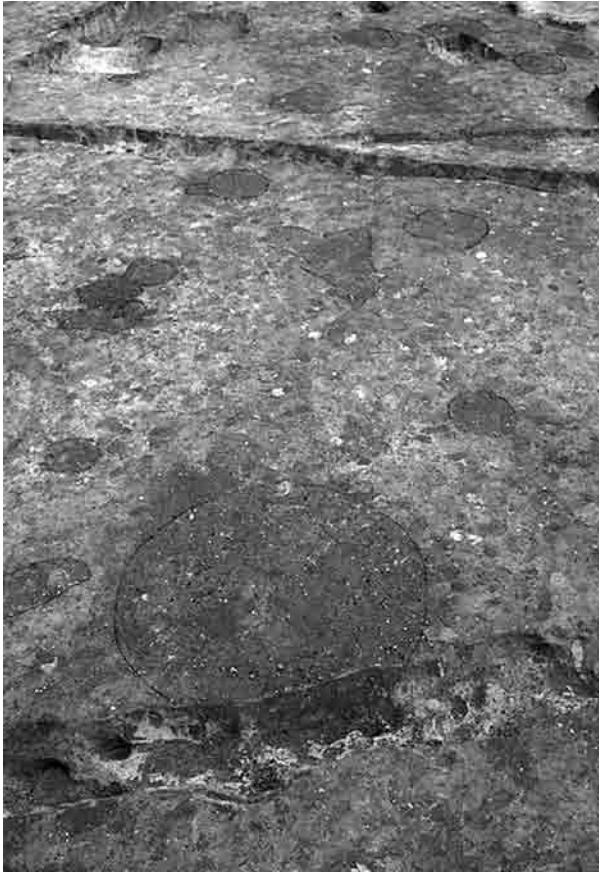
1. SB107 検出状況 (北から)



2. SB107 Pit1177 土器出土状況



3. SB107 完掘



1. SE103 及び SB108 検出状況 (西から)



2. Pit1204(SB108 祭祀土坑) 鼓形器台出土状況



3. Pit1204(SB108 祭祀土坑) 鼓形器台出土状況



4. SE103 螺旋構造検出状況





1. SE103 下段半裁土層断面 (南から)



2. SB108,SE103 完掘



1. SE109,SE104 検出状況



2. SB109 完掘





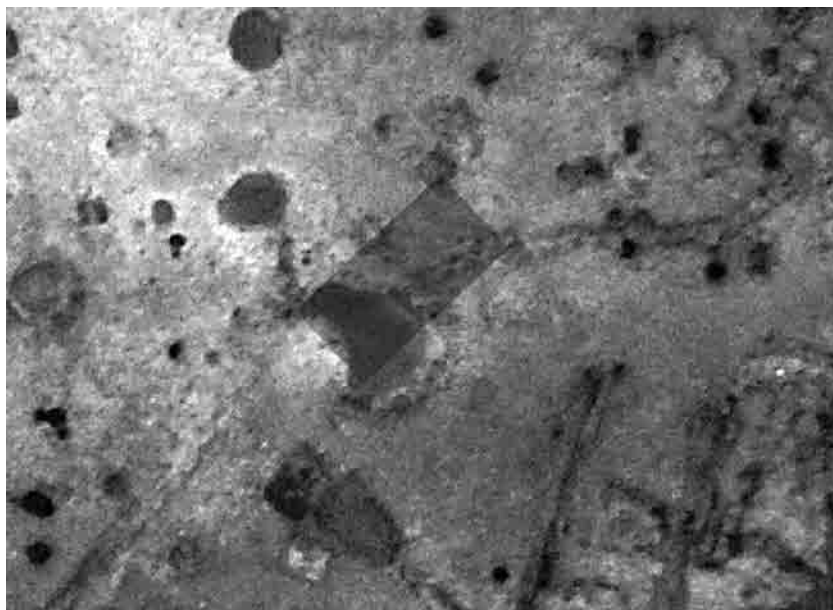
1. SK1147 検出状況 (北から)



2. SK1147 検出状況



3. SB110 完掘 (北から)



1. SB110 及び SK1147 完掘



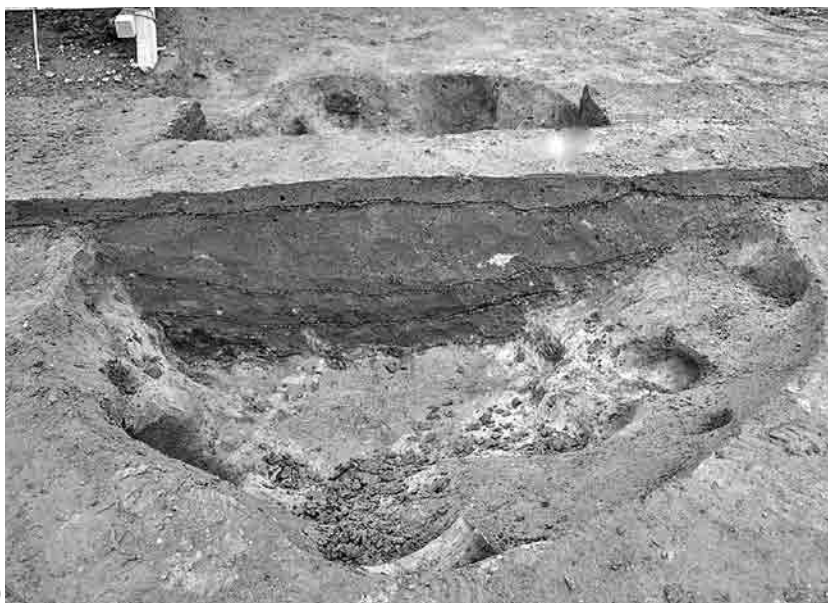
2. 1区-2 東詰弥生時代後期遺構群



3. 1区-2 調査区東端遺構群完掘



1. SK146 土器出土状況



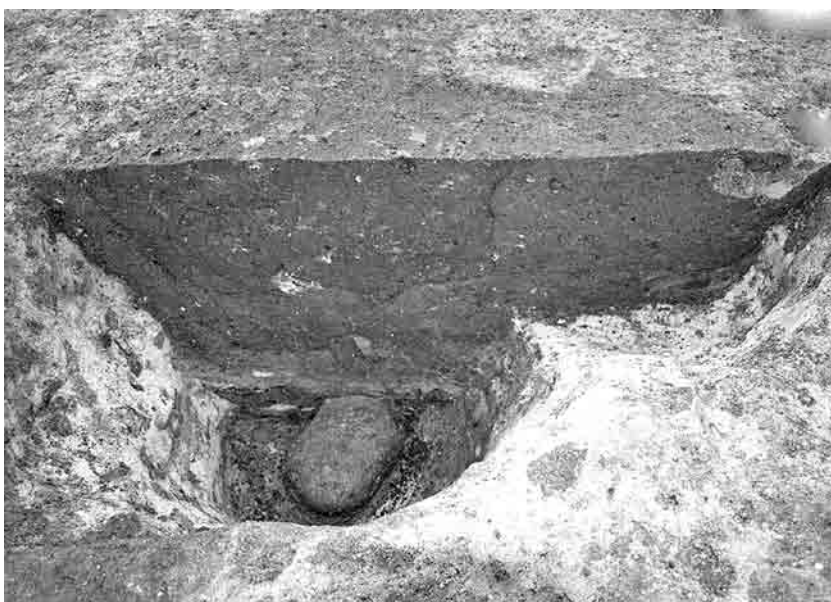
2. SK142 東西土層断面 (南から)



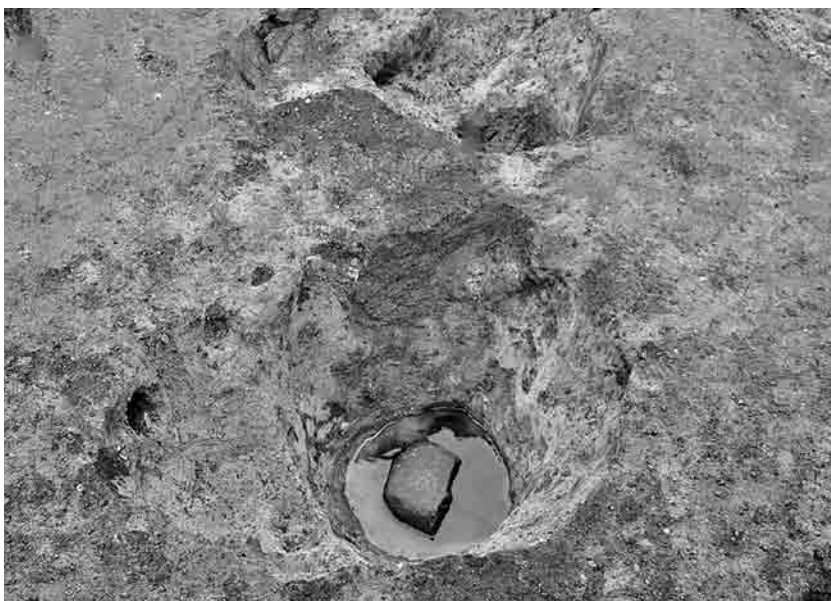
3. SK154 検出状況 (南から)



1. SK154 完掘 (南から)



2. SK155 半截土層断面石出土状況 (南から)



3. SK155 完掘





1. SE105 検出状況(北から)



2. SE105 東西土層断面(南から)



3. SE105 発掘状況(西から)



4. SE108 検出状況(西から)



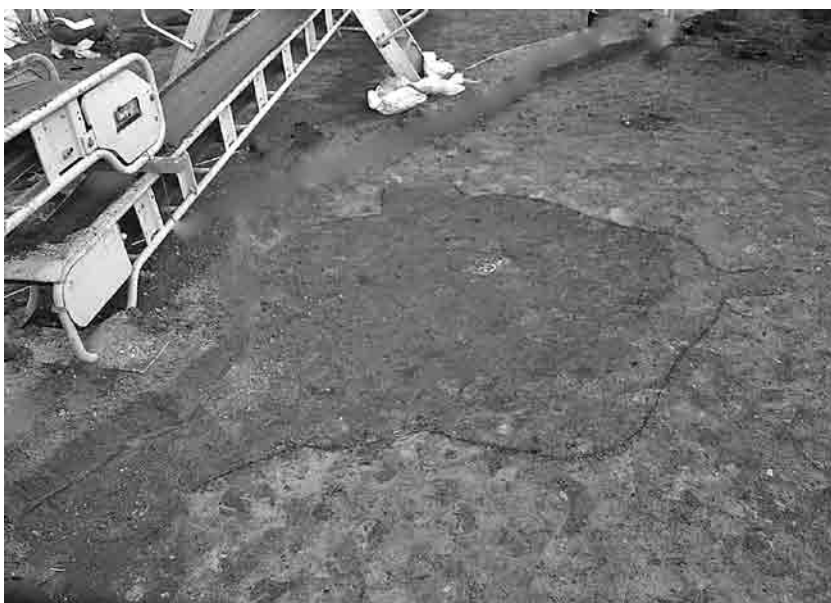
5. SE109,108 完掘(東から)



6. SE109,108,107(東から)



1. SE110 発掘状況 (東から)



2. SE109 検出状況 (南から)



3. SE109 完掘



1. Pit1170 祭祀土坑  
土師器坏皿出土状况



2. Pit1170 祭祀土坑  
土師器坏皿出土状况



3. Pit1170 祭祀土坑完掘



1. SX103 検出状況 (西から)



2. SX103 完掘 (北から)



3. SX104 検出状況 (北東から)





1. SX104 発掘状況 (北から)



2. SX105 検出状況 (北から)



3. SX105 完掘



1. SD142 中世溝発掘状況 (南から)



2. SD142 発掘状況 (北から)



3. 平成 21 年度 調査 SD07

1. 1区-3 西遺構検出状況(東から)



2. 1区-3 西遺構発掘状況(東から)



3. 1区-3 西 SK106 検出状況(北から)





1. 1区-3西 SK106 ほか完掘、  
牛馬耕痕跡(西から)



2. 1区-3西残部遺構検出状況(東  
から)



3. 1区-3残部 SD160 ほか完掘



1. 1区-3 東造成土除去後 (西から)

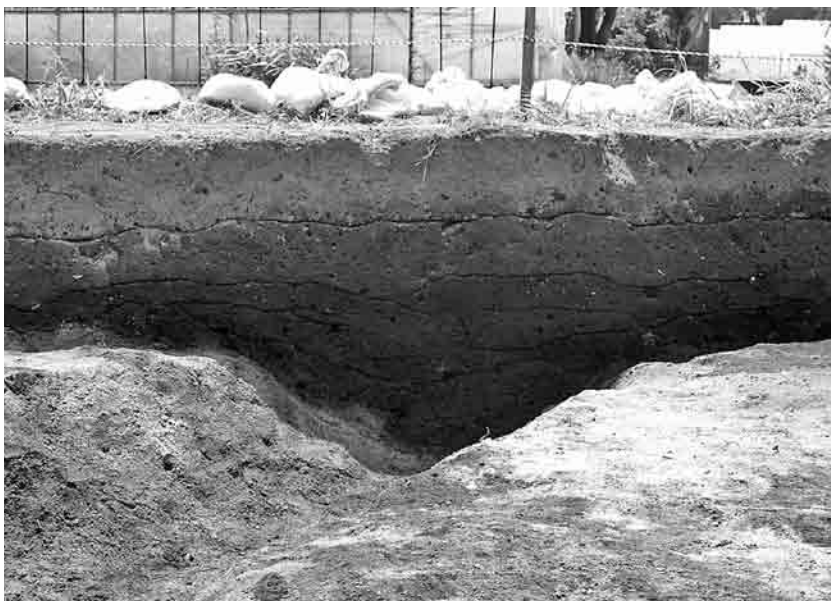


2. 1区-3 東 SE111 周辺遺構検出状況 (北西から)



3. 1区-3 東調査区中央部遺構検出状況 (北西から)





1. 1区-3 西南壁土層堆積状況



2. 1区-3 東集石5 発掘状況  
SK130 検出状況



3. 1区-3 東集石5 発掘状況



1. SE112 遺構検出状況



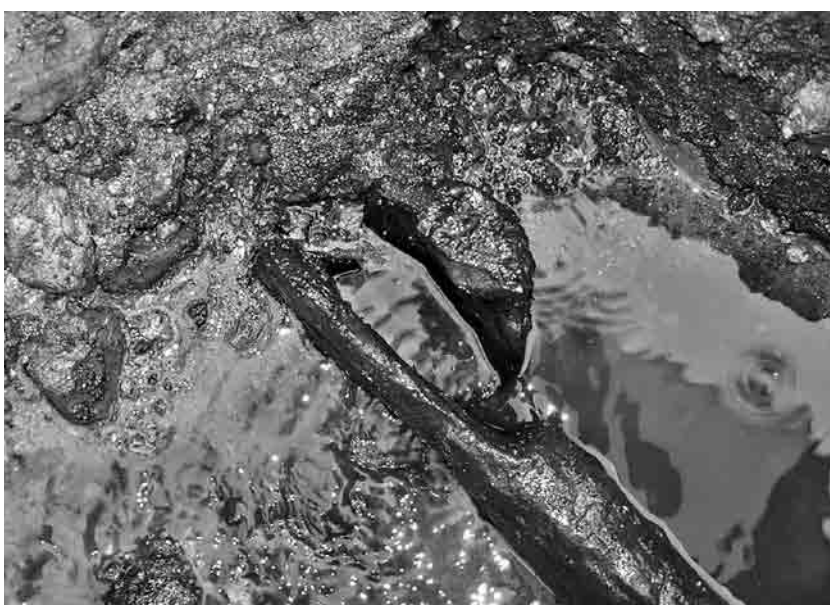
2. 1区-3東 SE112 井戸発掘状況



3. SE112 井戸発掘状況



1. SE112 井戸粹残骸出土状况



2. SE112 井戸粹残骸出土状况



3. SE112 井戸粹残骸出土状况





1. 東 SE111 検出状況



2. SE111 石組検出状況



3. SE111 井戸底部発掘状況



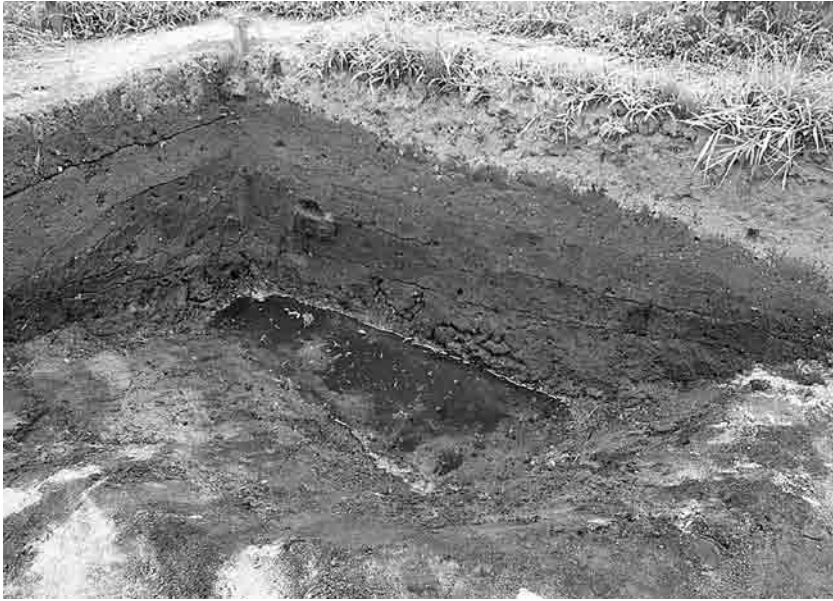
1. SE111 石組発掘状況



2. SE111 井戸底部検出状況



1. 1区-3 東発掘状況(東半部、西から)



1. SK107 発掘状況



2. SK106 検出状況 (北から)

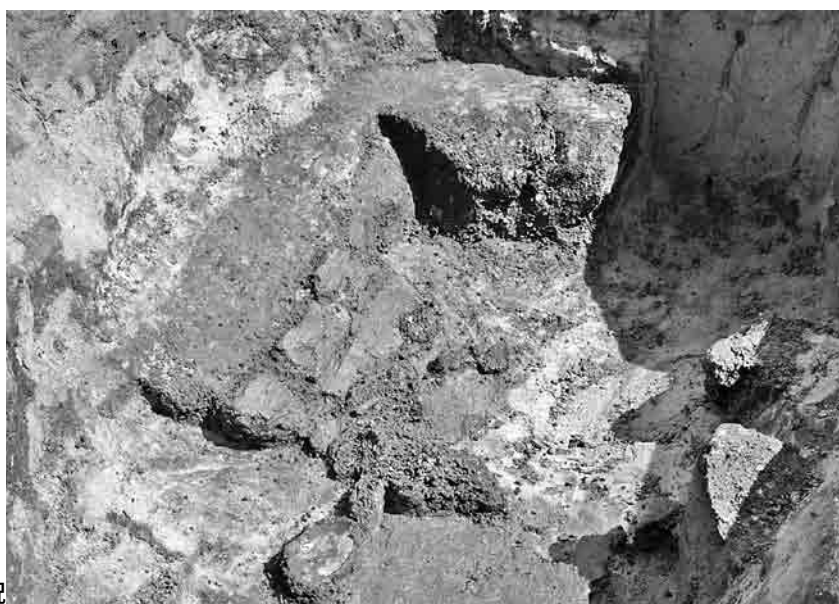


3. SK106 土層断面 (西から)





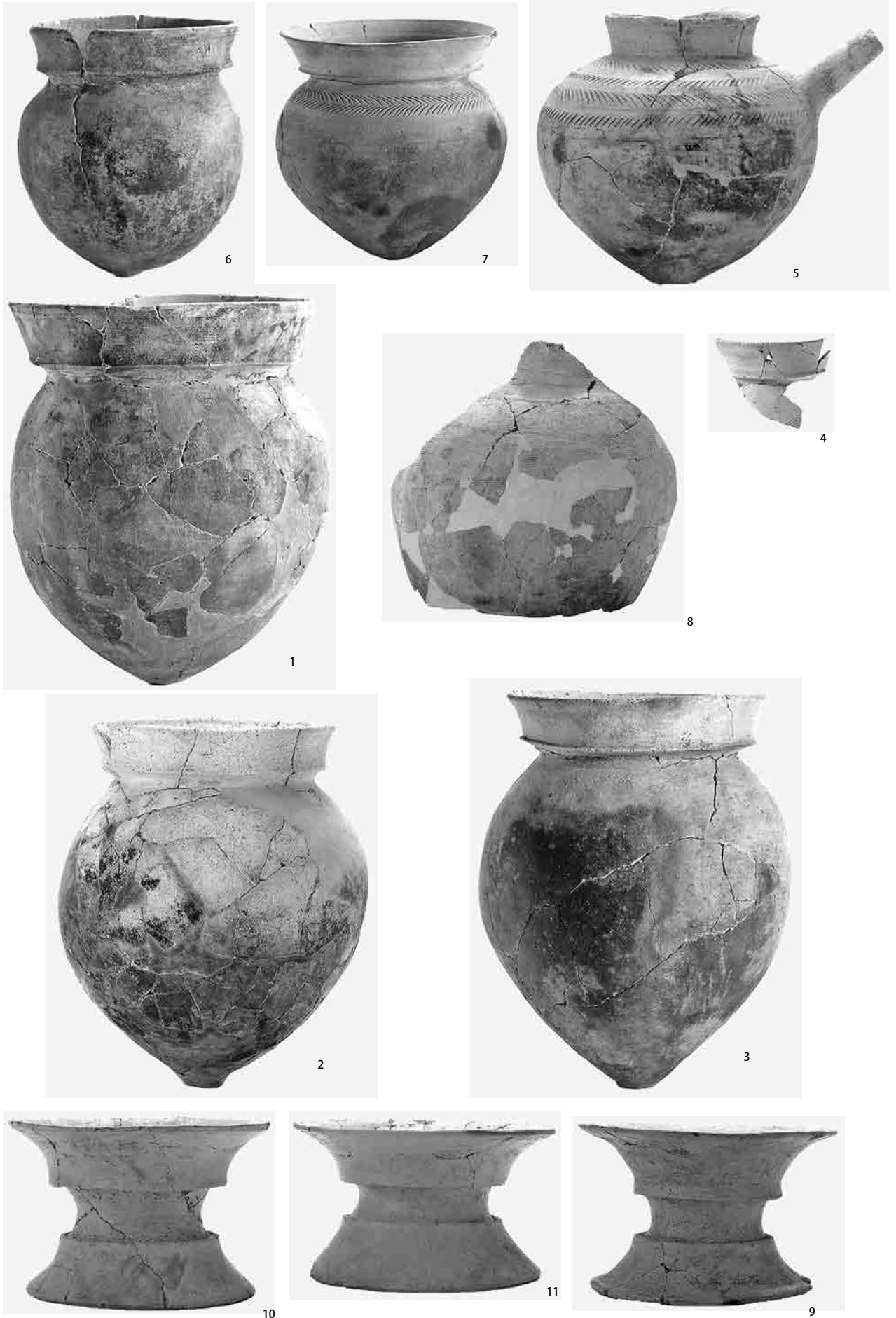
1. SK106 棺材、副葬品出土状況



2. SK106 棺材、副葬品出土状況



3. SK106 完掘 (北から)



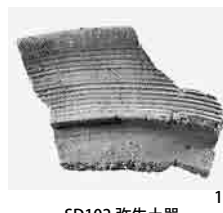
1区-1SK102 弥生土器



Pit1012 弥生土器



SB101 弥生土器



SD102 弥生土器



SD107 弥生土器



13



14

SB101Pit1016 柱根



18



20



19



SK101 陶器

21外

21内



SK169 弥生土器



23



24

SD156 弥生土器



25



228



229



230

SB103 弥生土器



231



232



233

SE102 弥生土器



234



235

SB104 弥生土器



236



237

SB105 弥生土器



238



240

SE101 弥生土器



243



244

图版 48



247



248



242



239



245



241

SE101 弥生土器



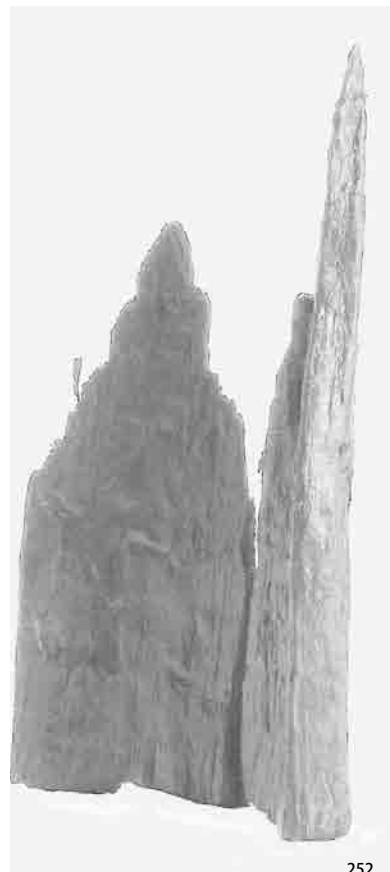
250

SE101 井戸枠部材





251



252

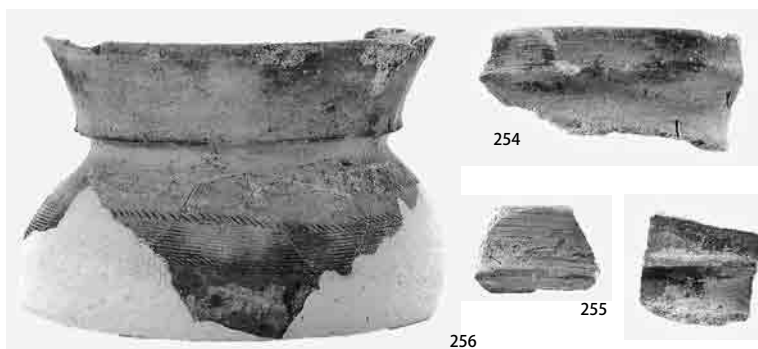


249

SE101 木製品 249, 井戸枠部材 251,252



258



256



254



255



257



253

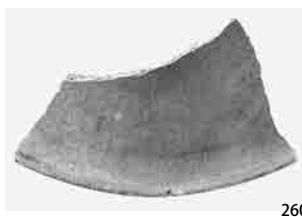
SB106 弥生土器

SB106, SB107 接合弥生土器



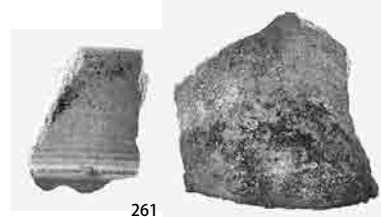
259

SB108, Pit1204 鼓形器台



260

SE1103 鼓形器台



262

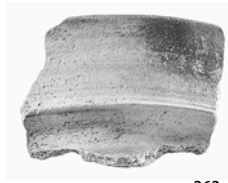
SB109 弥生土器

1区-2SE101 遺物及び1区-2 弥生土器

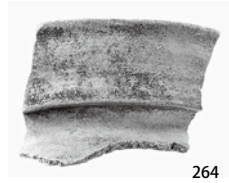
图版 50



266



263

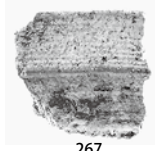


264



265

Pit1147 弥生土器



267

SB110 弥生土器



284

283



277



279



280



276



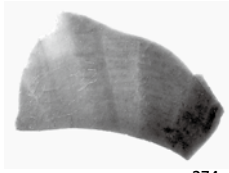
278



281



273



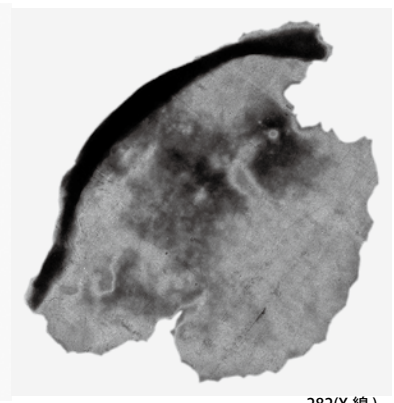
274



275



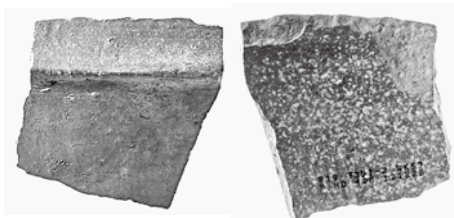
282



282(X線)

SE110 遺物

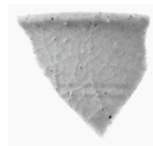
SE105 遺物



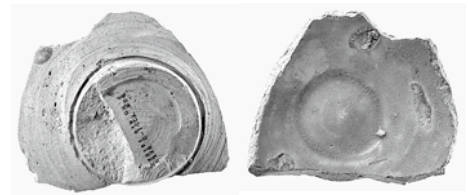
286外

286内

SE108 遺物



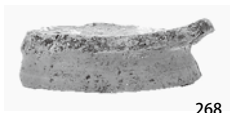
287



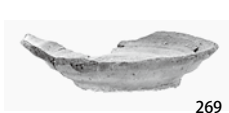
285外

285内

SE109 遺物



268



269



270

SK146 遺物



271



272

SK154 遺物

1区-2 遺物



288



293



297



289



294



298



290



295



299



291



296



300



291 内面



303



301



304



302



292



307

集石 5 弥生土器



308



309



310

SE112 中世土師器

Pit1170 中世土師器



306

Pit1161 柱根



305

Pit1159 柱根

1区-2及び3遺物



311



312



312



317



316



314



314



315

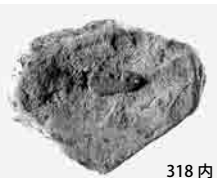


313

SE112 井戸梓部材



318 外



318 内



322 外



322 内



321 外



321 内



323 外



323 内



319 外



319 内



324 外

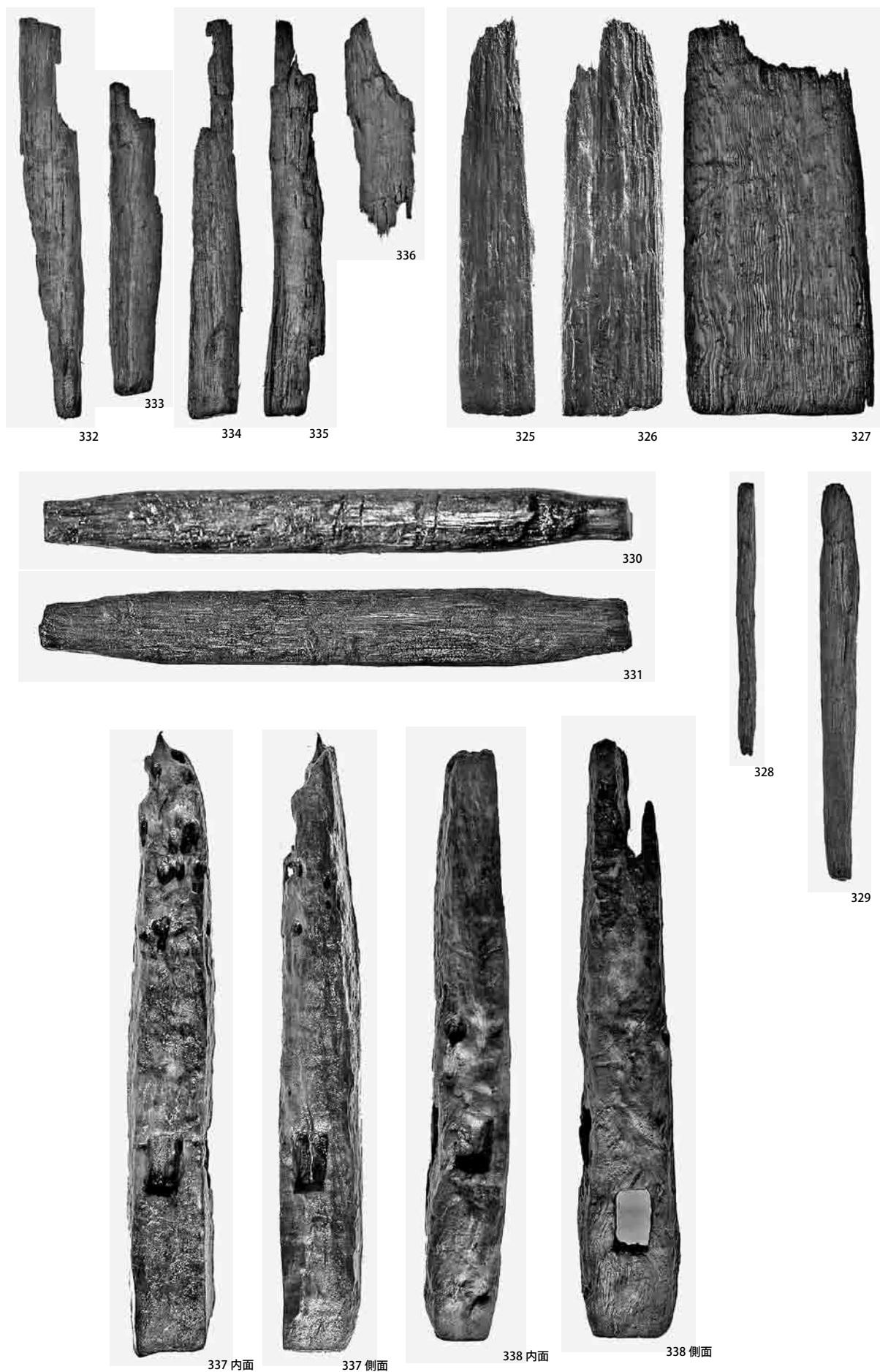


324 内



320

SE111 遺物



1区-3SE111 木製品、井戸枠部材

図版 54



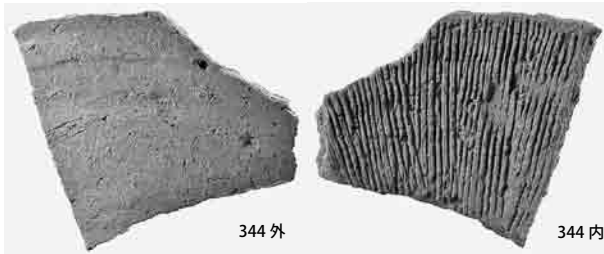
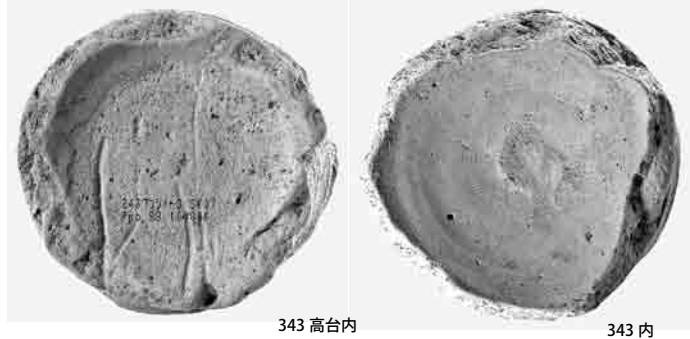
SD134 中世土師器



Pit1056 中世土師器



SD136 中世土師器



SK107 遺物



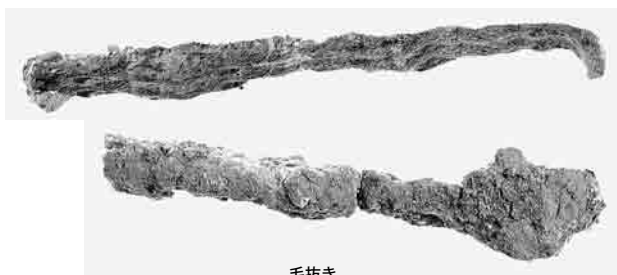
SK126 中世土師器



煙管 346

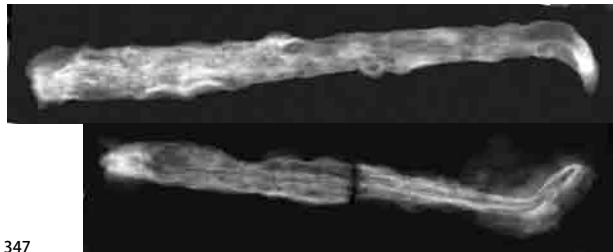


煙管 (X線)



毛抜き

SK106 遺物



毛抜き (X線)





26

4 层弥生土器



28



27

3 层 L8 弥生土器 27-29



29



30



33



34



32



40



45



46

3 层弥生土器 30-51



42



51



56



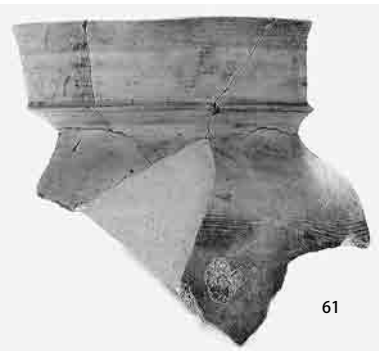
54



55



62



61



70

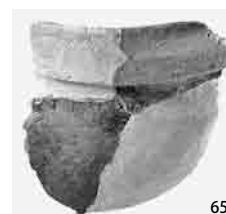


58



64

1 区 -2SD141 弥生土器 1

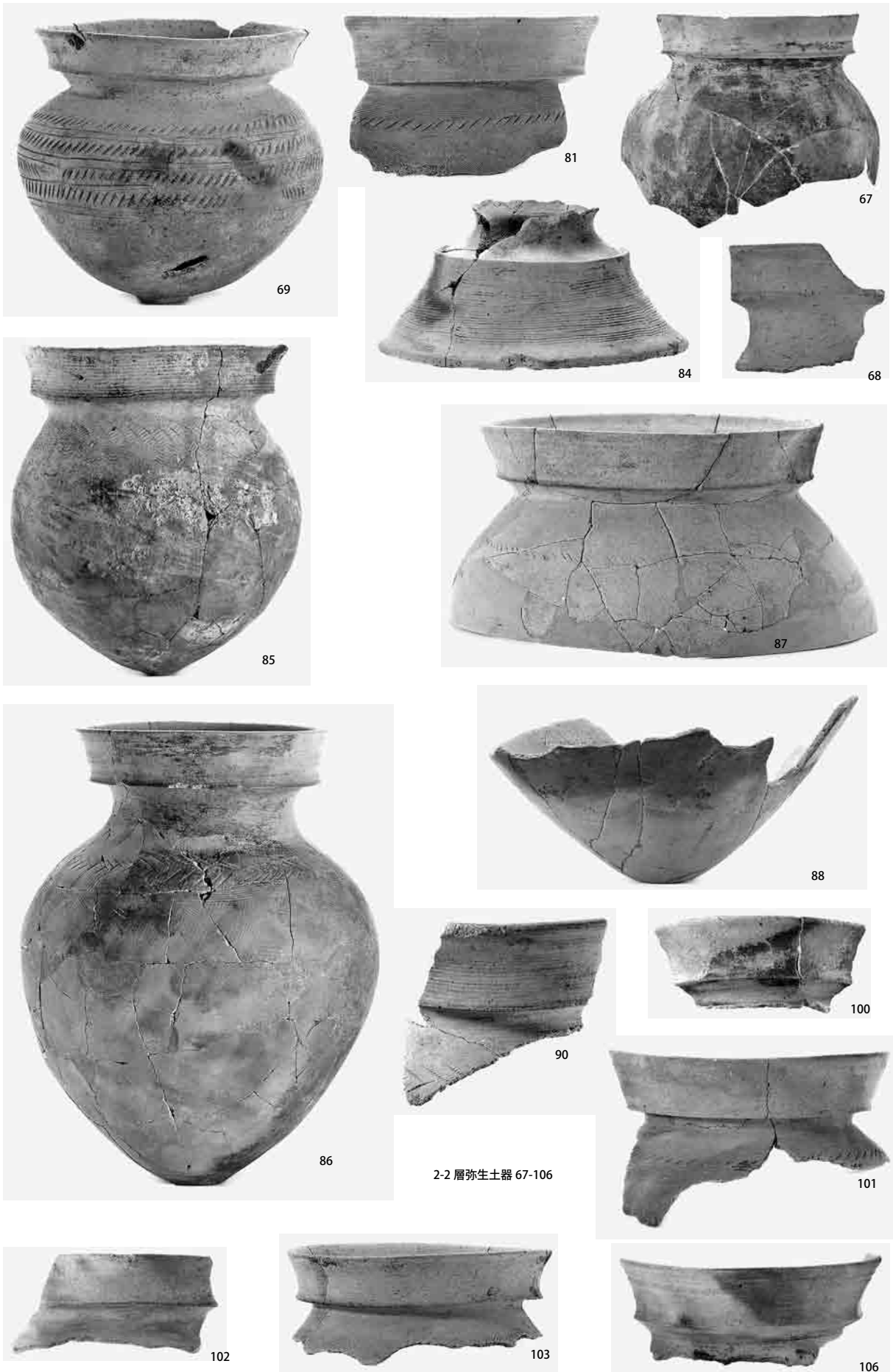


65



66

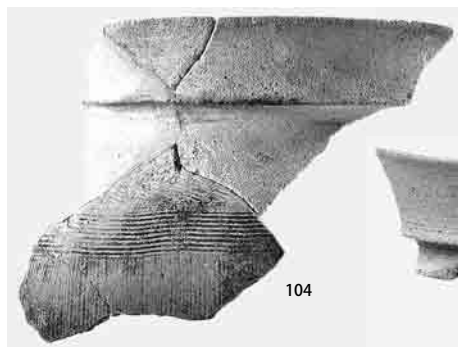
2-2 层弥生土器 54-70



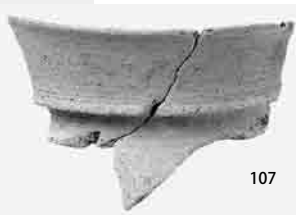
2-2 層弥生土器 67-106

1 区 -2SD141 弥生土器 2





104



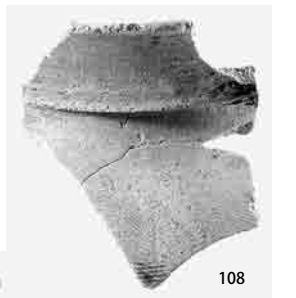
107



113



110



108



114

2-2 层弥生土器 104-110



123



130



122



115



128



144



139



120

2-2 层弥生土器 113-122



134



138



142

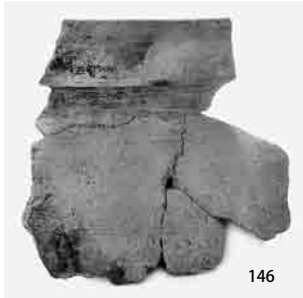


141

2-1 层弥生土器 123-142

1 区 -2SD141 弥生土器 3

图版 58



146

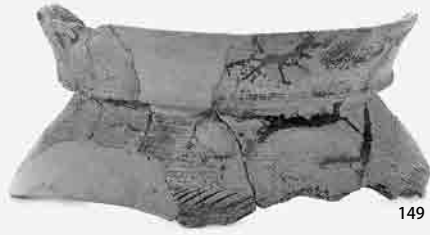


148



147

2-1 層弥生土器 146-148



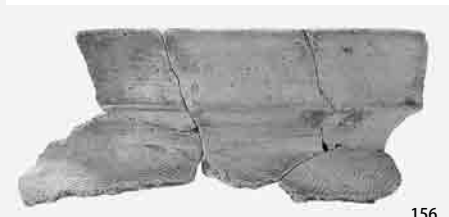
149



164



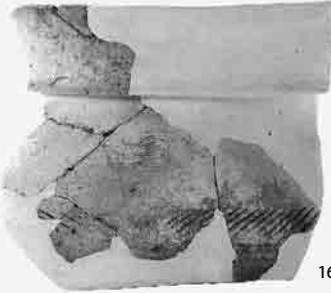
155



156



166



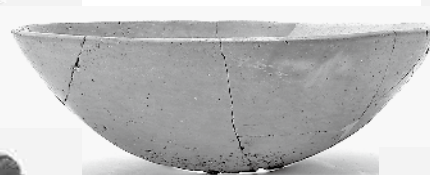
167



157



172



180



169



181

1 層弥生土器 149-193



178



190



193



192

1 区 -2SD141 弥生土器 4



182



199



211

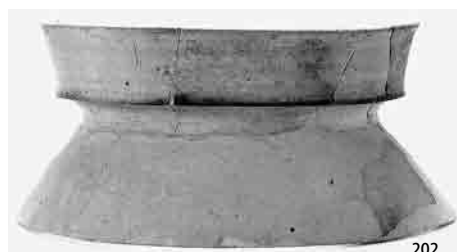


200



213

1 层弥生土器 182-212



202



212



218

1 层弥生土器 216-218



216



217



226

南哇畔 1 层弥生土器



219

中央哇畔 1 层弥生土器 219,221



221

1 区 -2SD141 弥生土器 5



1. 1区-4 SD141 検出



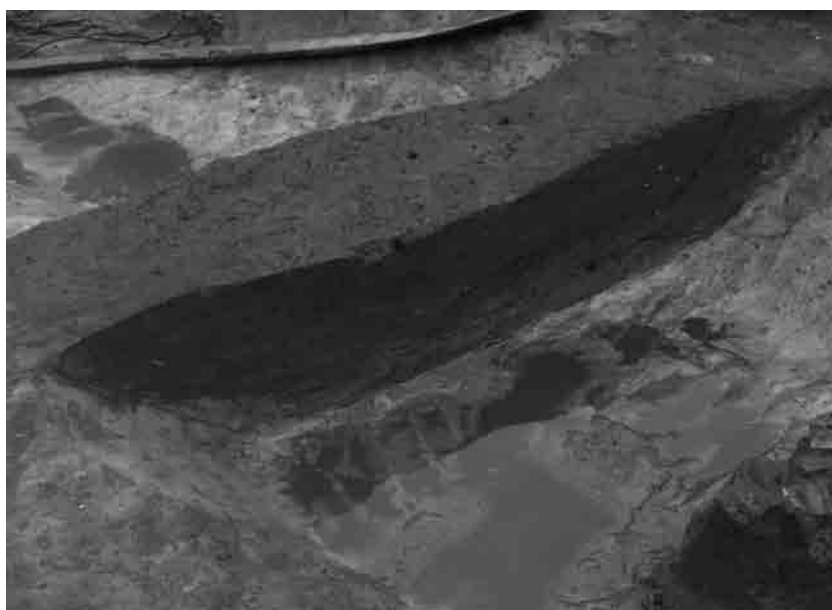
2. SD141 土器出土状況



1. 南壁土層



2. SD141 東側土層 (BB')



3. SD141 西側土層 (CC')





1. SD141 土器出土状況 2



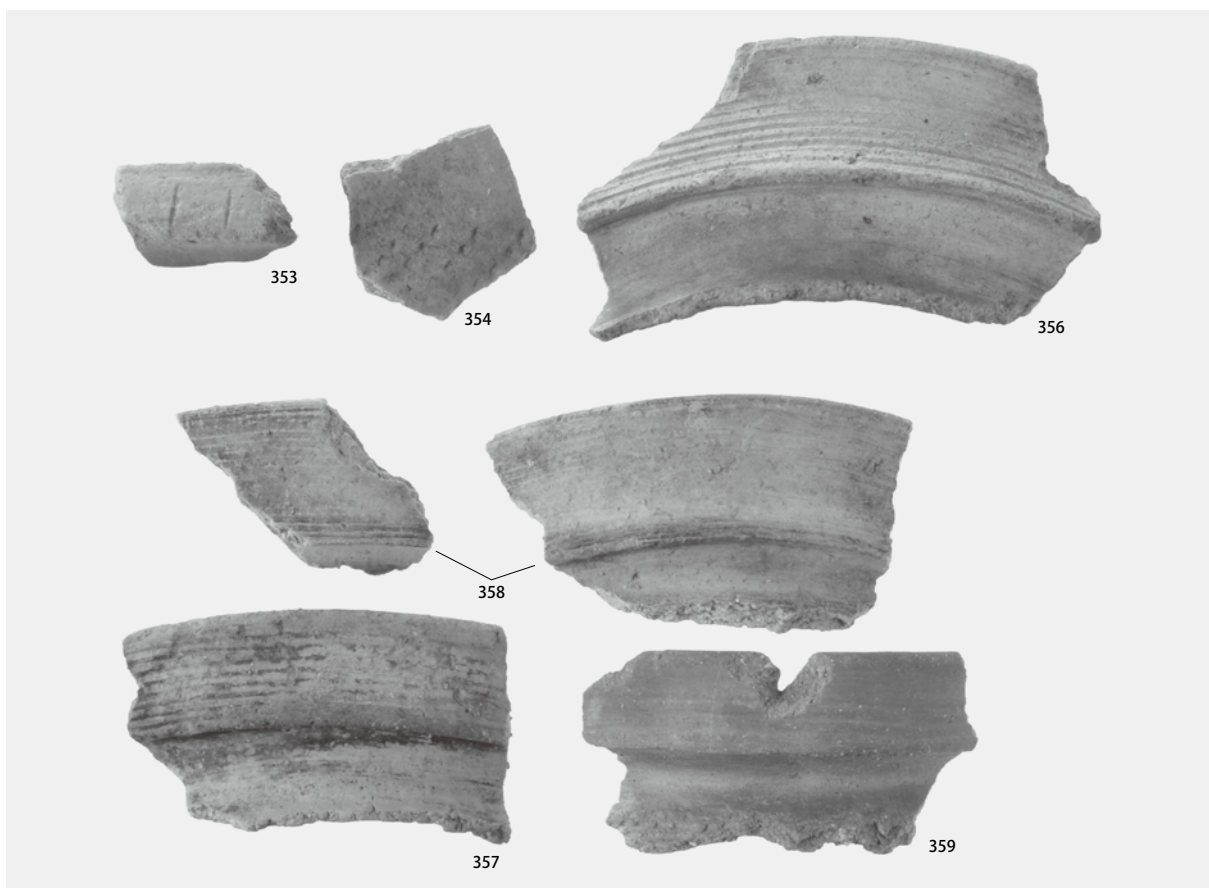
2. 1区-4 完掘



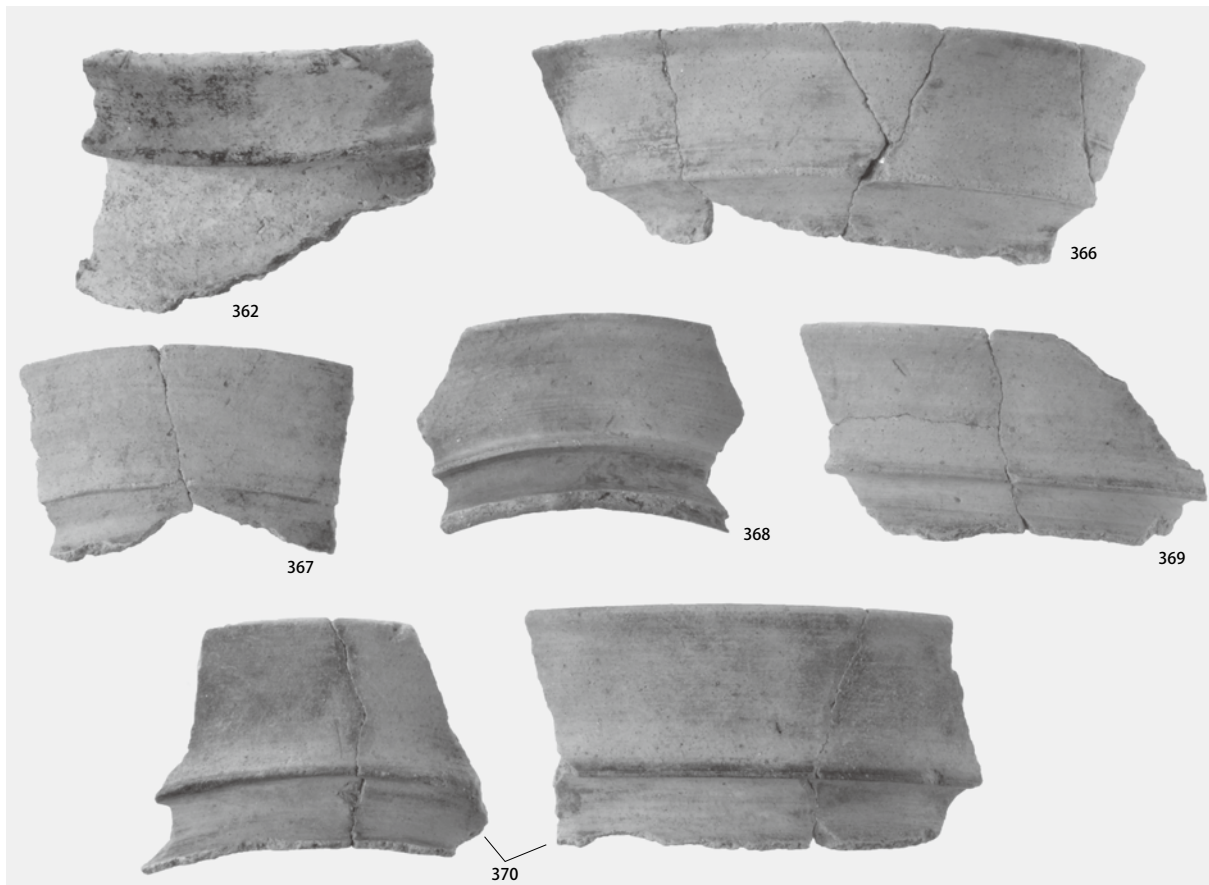
SD141 出土土器 1







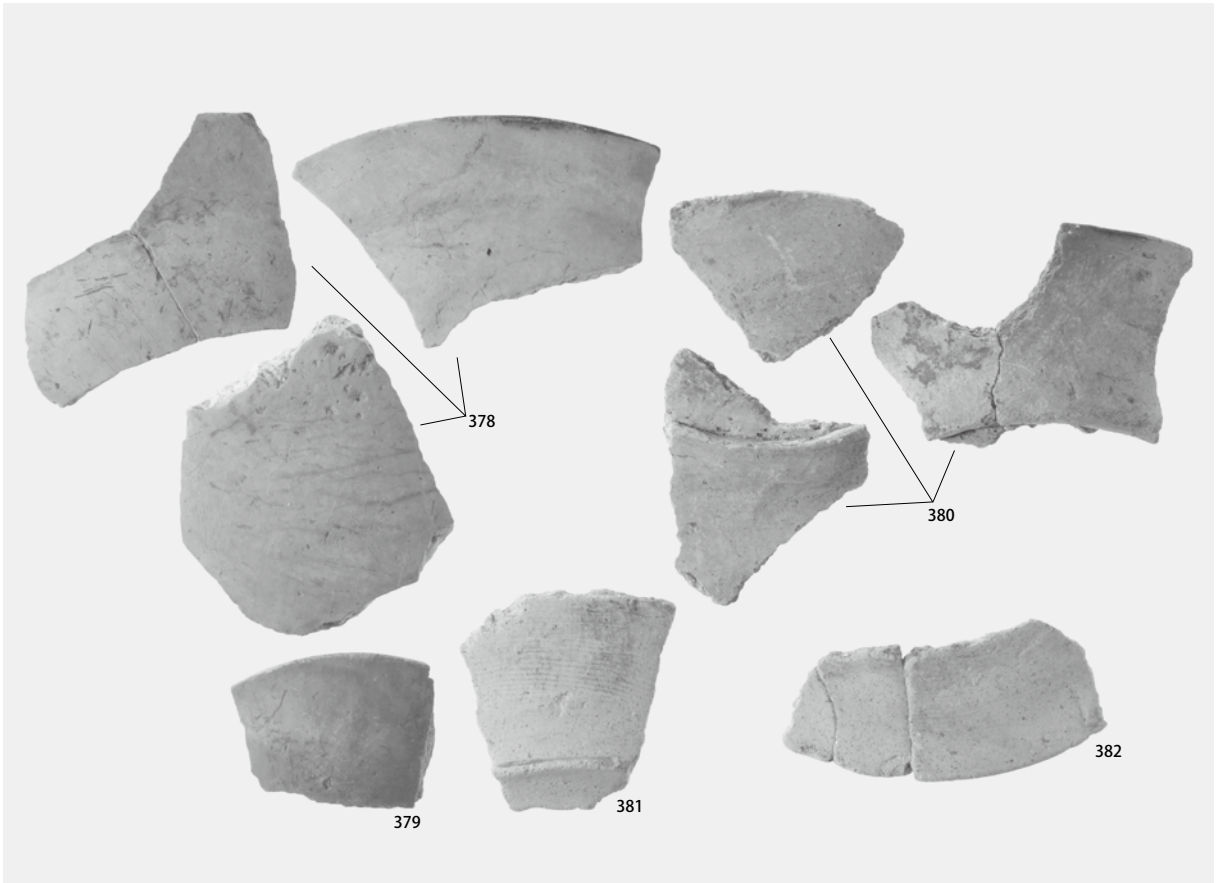
1. SD141 出土土器 3



2. SD141 出土土器 4



1. SD141 出土土器 5



2. SD141 出土土器 6



1. 調査区西側土層 (BB')



2. 調査区北東土層 (CC')



3. 2区調査前風景



4. 2区-1南側完掘



1. 2区-1 東側土層 1 (AA')



2. 2区-1 東側土層 2 (AA')

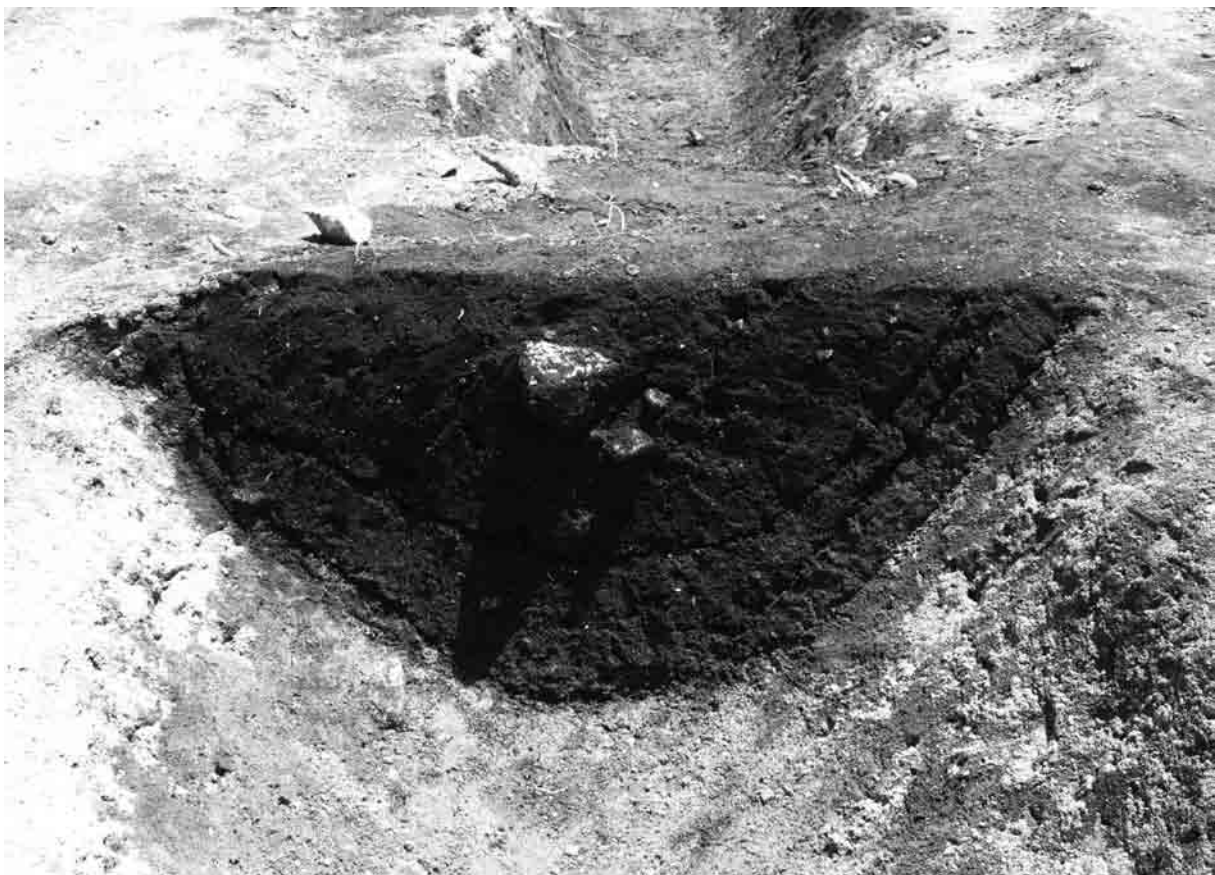


3. 2区-1 東側土層 3 (AA')





1. SD203 土層 1 (DD')



2. SD203 土層 2 (EE')



1. SD206 土層 1 (FF')



2. SD206 土層 2 (GG')

1. SD206 土層 3 (HH)



2. SD206 完掘





1. SD215・216 土層 1 (II')



2. SD215・216 土層 2 (JJ')





1. SD215・216 土層 (KK')



2. SD215・216 完掘



1. SD202 西側検出状況



2. SD202 土層 1 (LL')



3. SD202 土層 2  
(NN' ※土層図は反転)



1. SD202・203 土層 (MM')



2. SD202.203 完掘



3. SD202 完掘



1. SD220・221 検出



2. SD220 土層 (00')



1. SD220 分層前 (PP')



2. SD220 土層 (PP')





1. SD220 土層 (QQ)



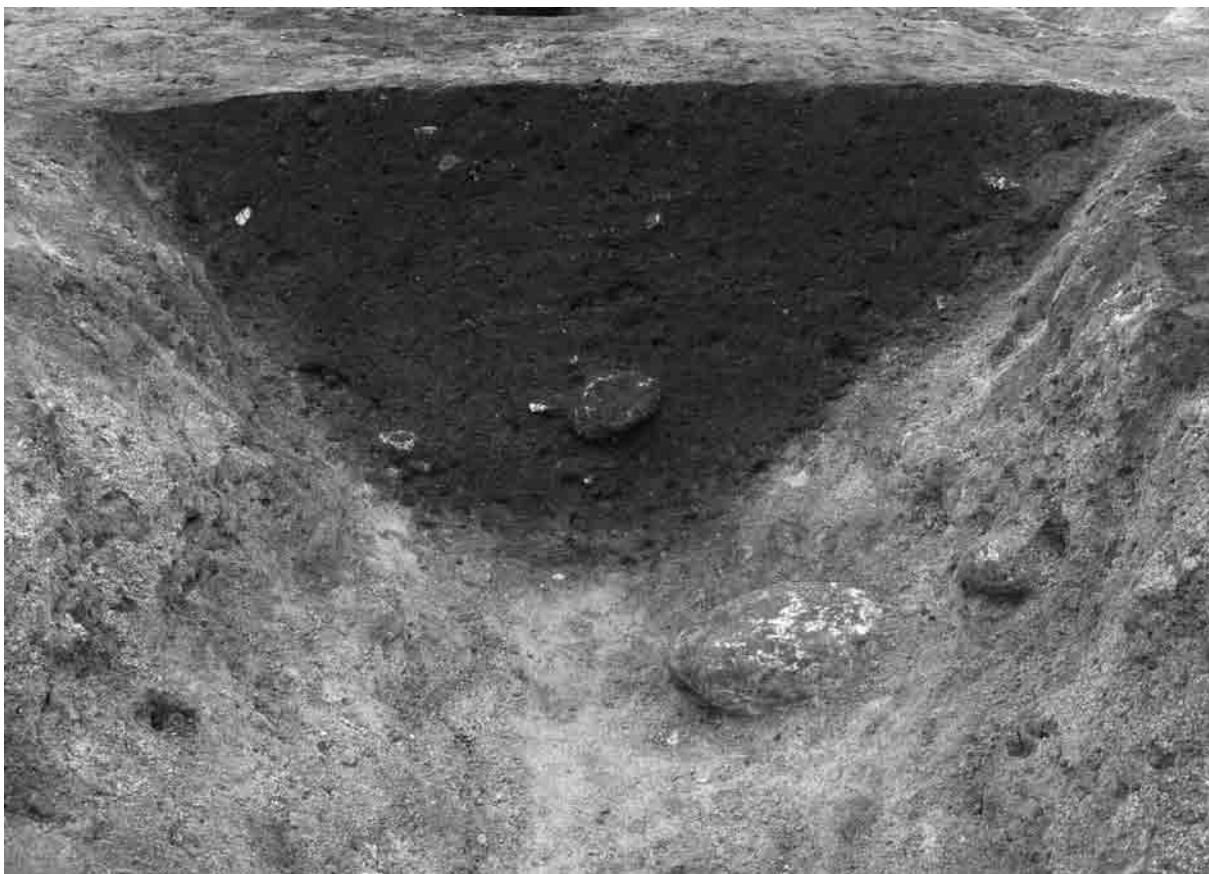
2. SD220 土層 (RR) ※土層図は反転



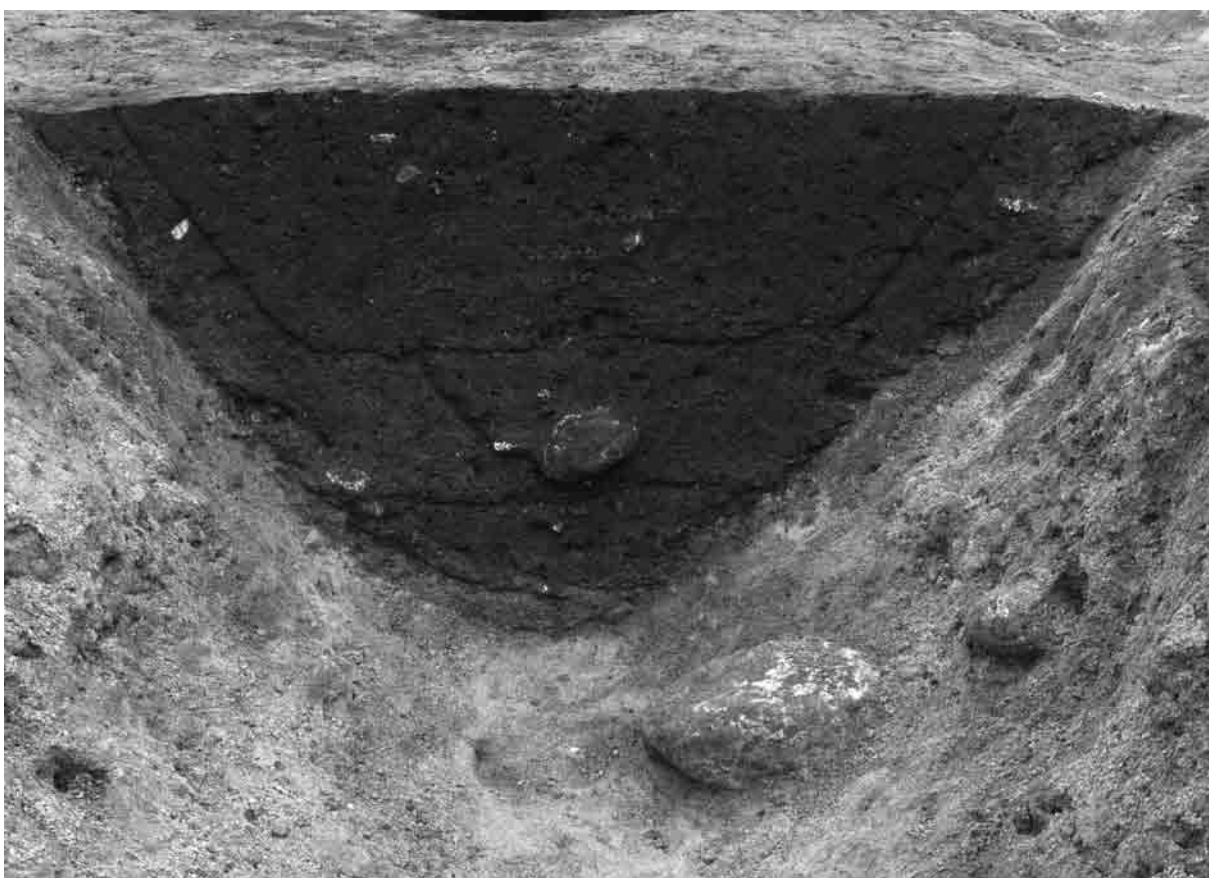
1. SD220・223 土層 (SS)



2. SD221 土層 (UU) ※土層図は反転



1. SD221 分層前 (TT')



2. SD221 土層 (TT') ※土層図は反転





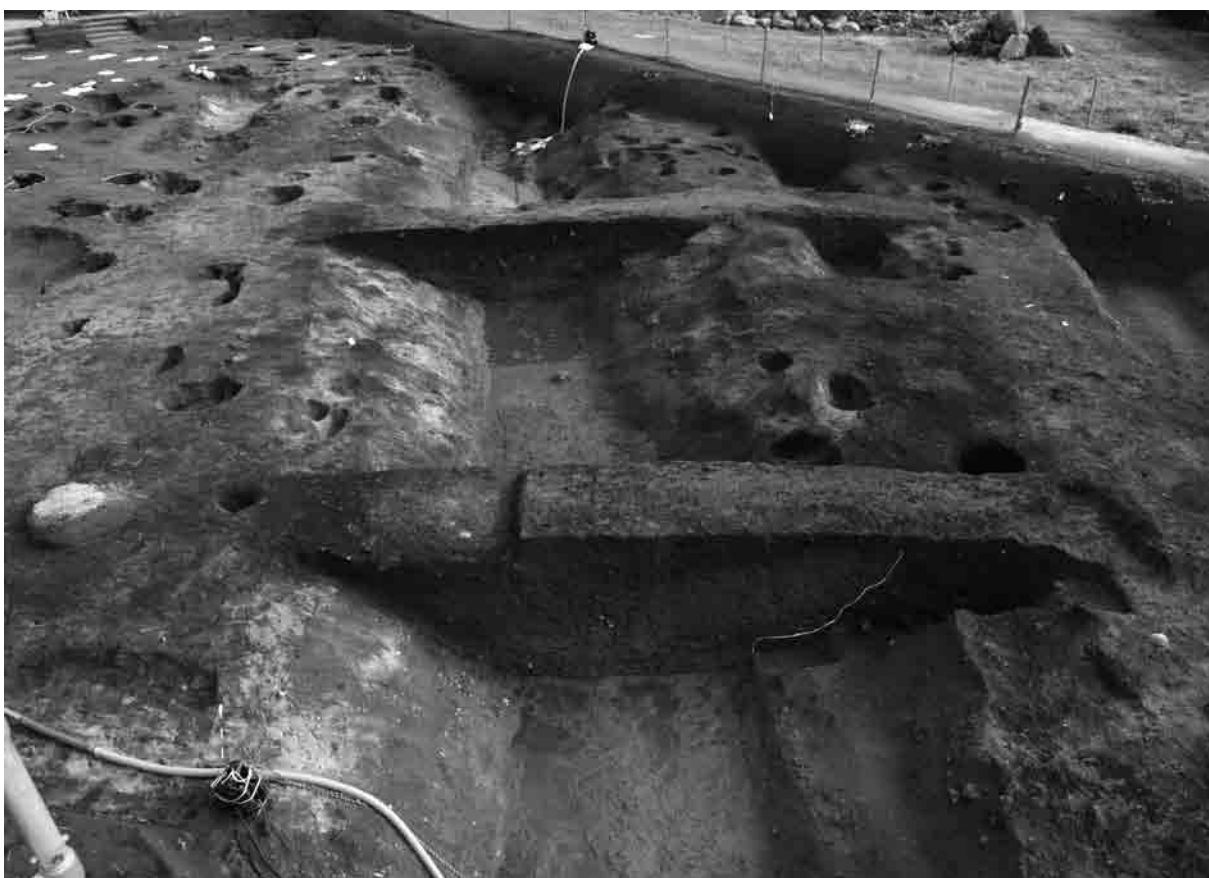
1. SD222 土層 (VV')



2. SD222 土層 (WW')



1. SD222・223 土層 (YY) ※土層図は反転



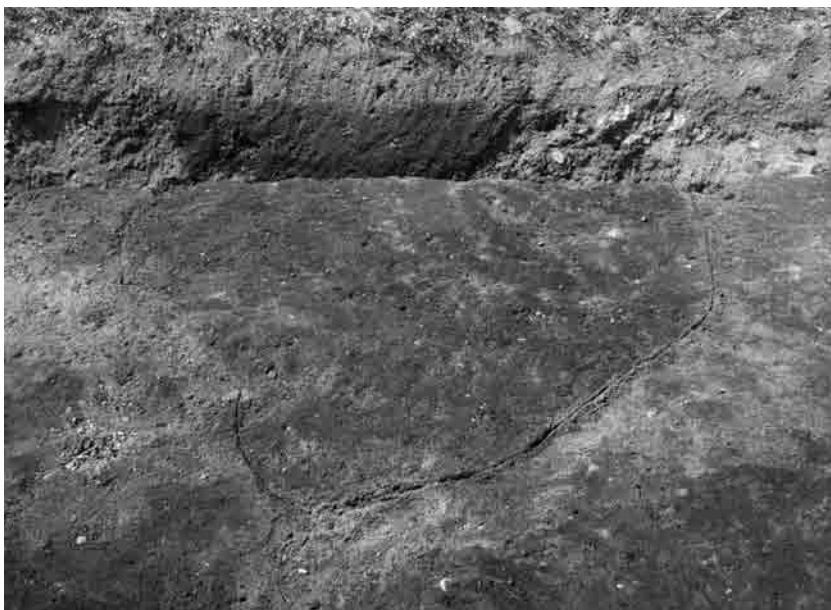
2. SD220 完掘



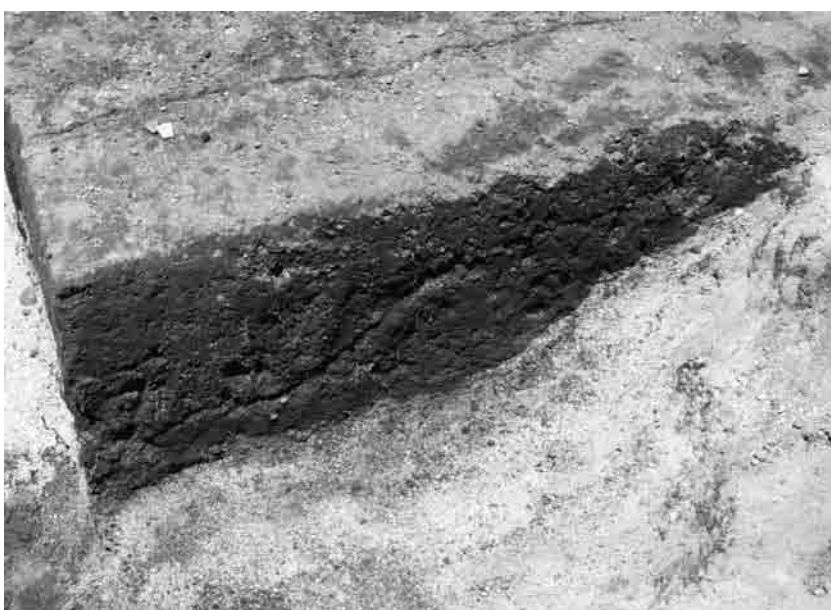
1. SD220 ~ 222 完堀



2. SD222・223 完堀



1. SK201 検出



2. SK201 土層



3. SK201 完掘



1. SX207 検出



2. SX207 完堀



3. Pit2371 須恵器 (184)  
出土状況





1. SB202 ~ 205 西から



2. SB203



1. SB202 Pit2165



2. SB202 Pit2184



3. SB202 Pit2192



4. SB202 Pit2199



5. SB203 Pit2222



6. SB205 Pit2218



7. SB205 Pit2158



1. SD218 検出



2. SD208 完掘



3. SD218 土層 (AA')



4. SD218 完掘



1. SD219 検出



2. SD219 土層 (CC)



3. SD219 完掘





1. SD211 完堀



2. SD211 土層

1. SX216 東西土層



2. SX216 完堀

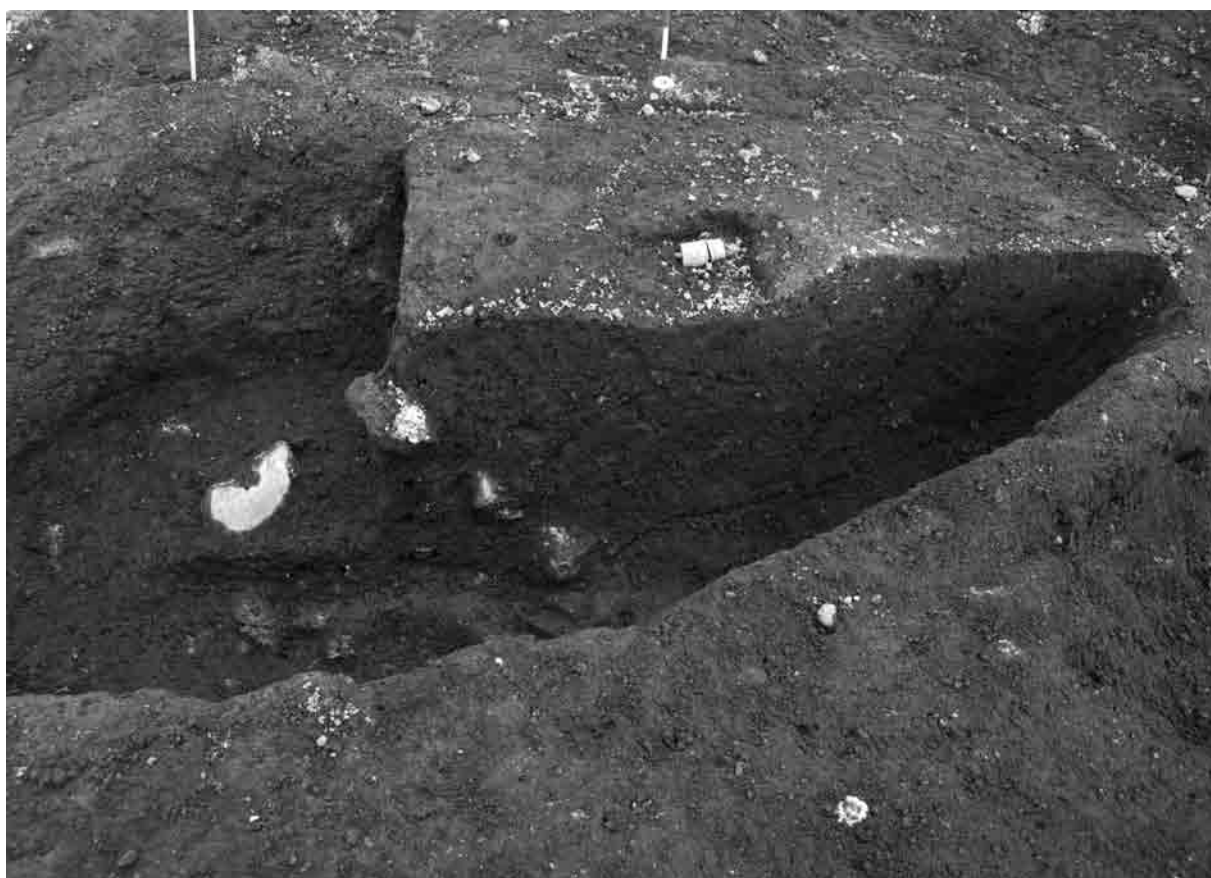


3. SX218 土層





1. SK203 完掘



2. SK203 土层





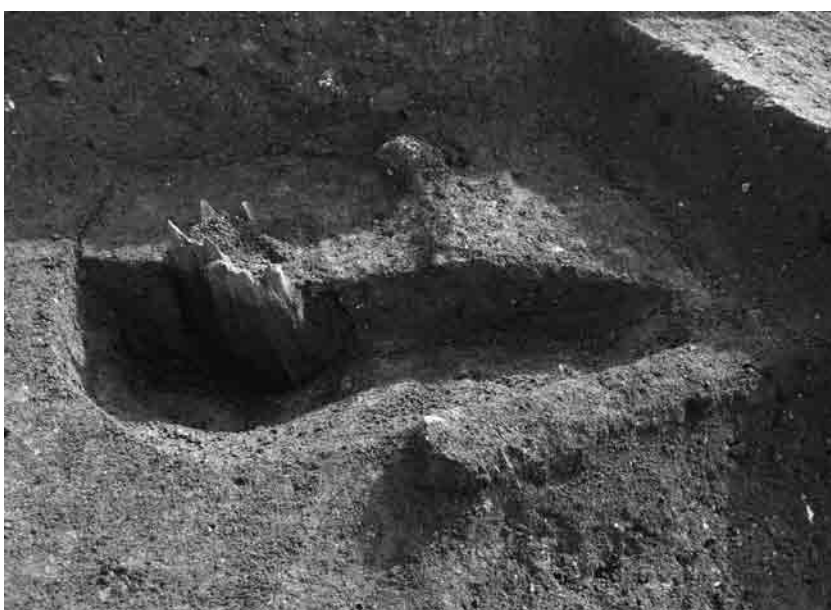
1. SK203 古銭出土 (231)



2. SK203 古銭出土 (232)



1. Pit2281 検出



2. Pit2281 土層



3. Pit2281 完掘



1. Pit2305 土層



2. Pit2284 土層



3. SD204 土層



1. SD217 土層 (EE')



2. SD217 · 218 土層 (BB')





1. 2区南側完掘



2. 2区北側完掘



1. 2区南側空撮



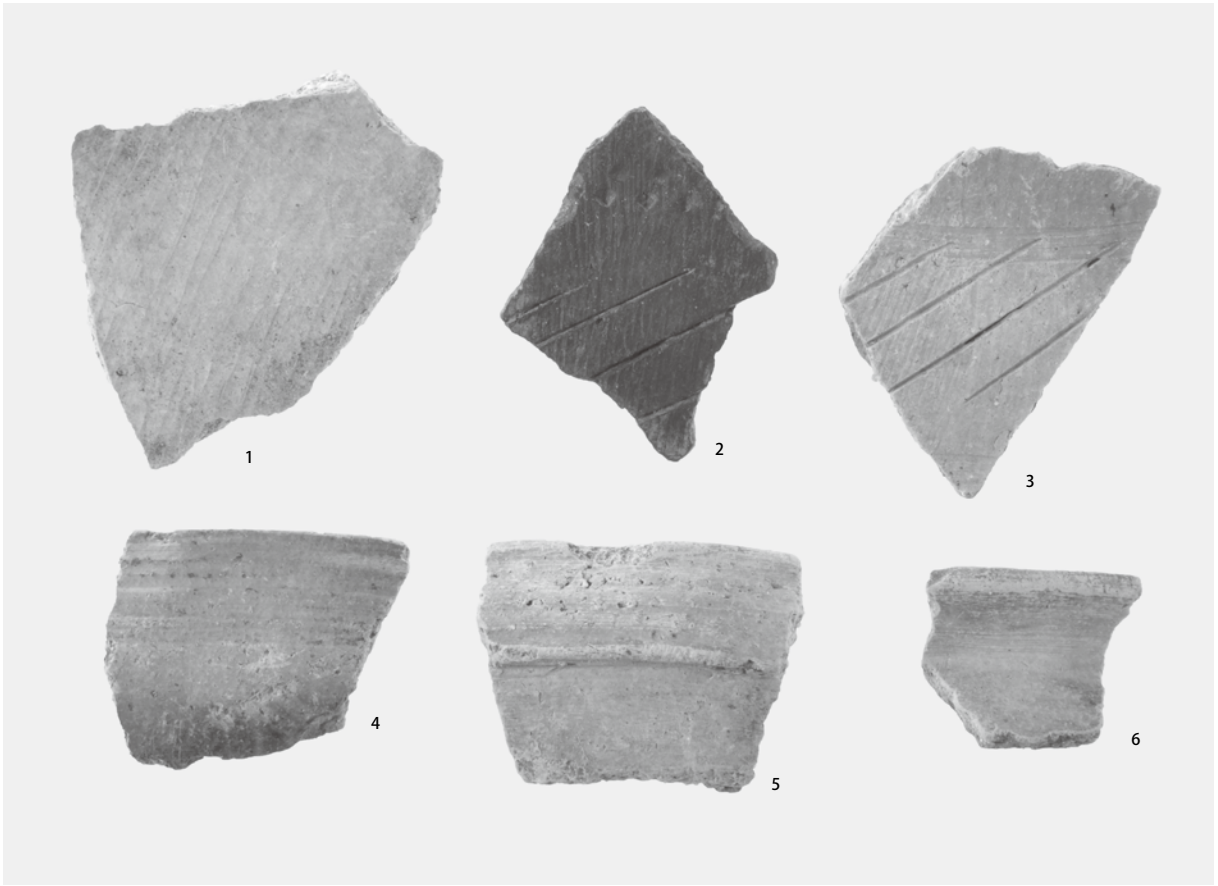
2. 2区空撮 (南西から)



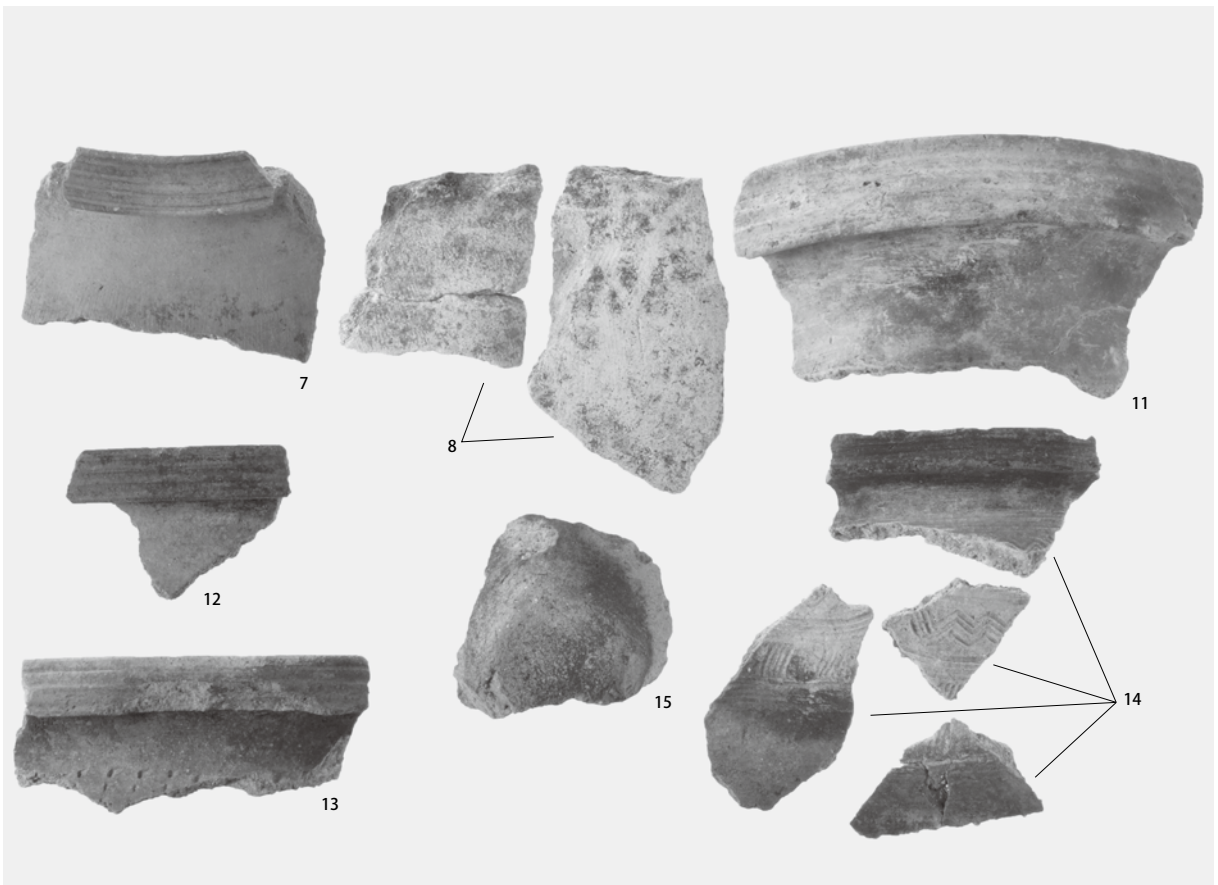
1. 2区北側空撮



2. 2区空撮（南から）

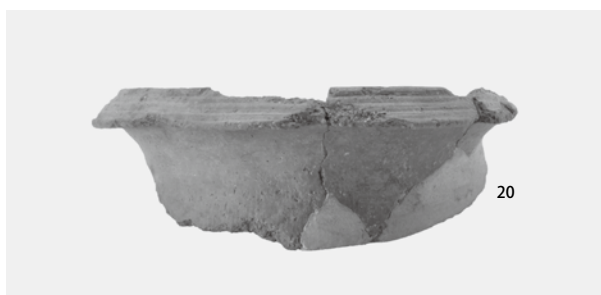
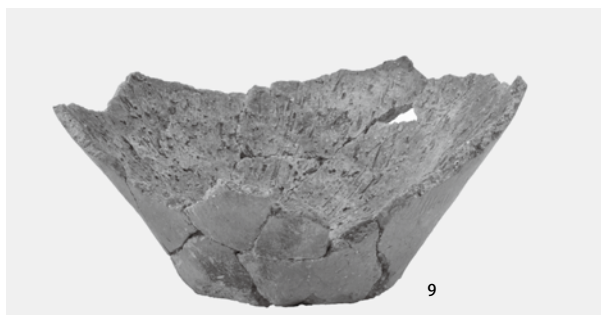


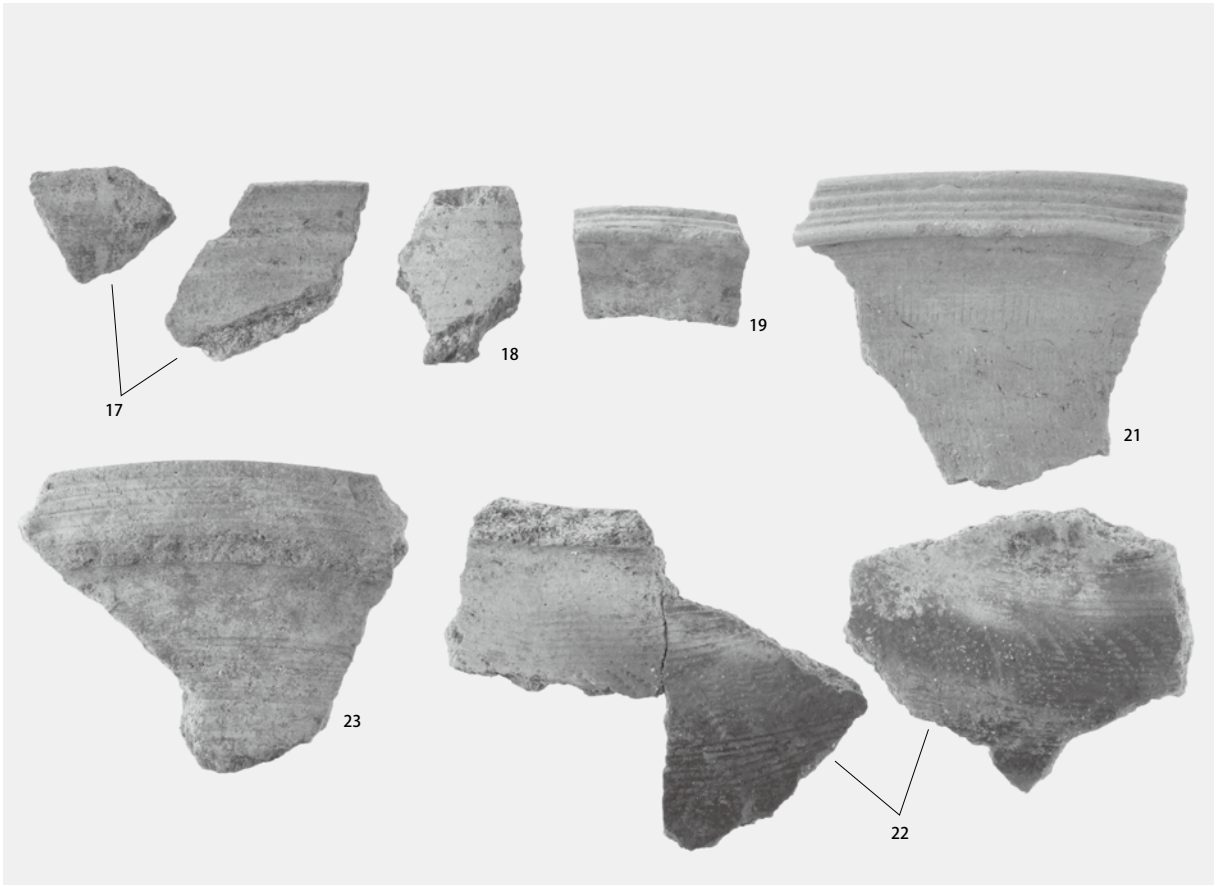
1. SD203·206·216·202 出土土器



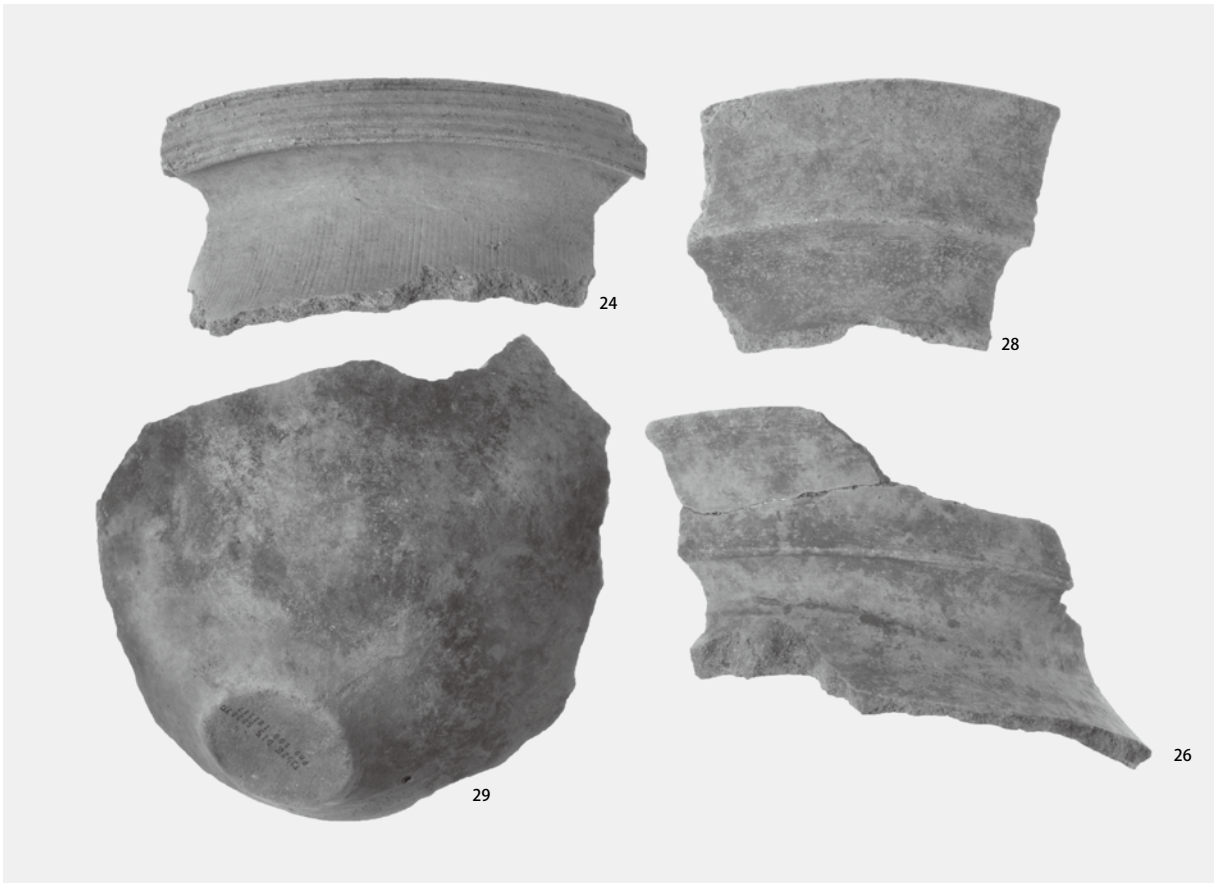
2. SD206·215·216·202 出土土器



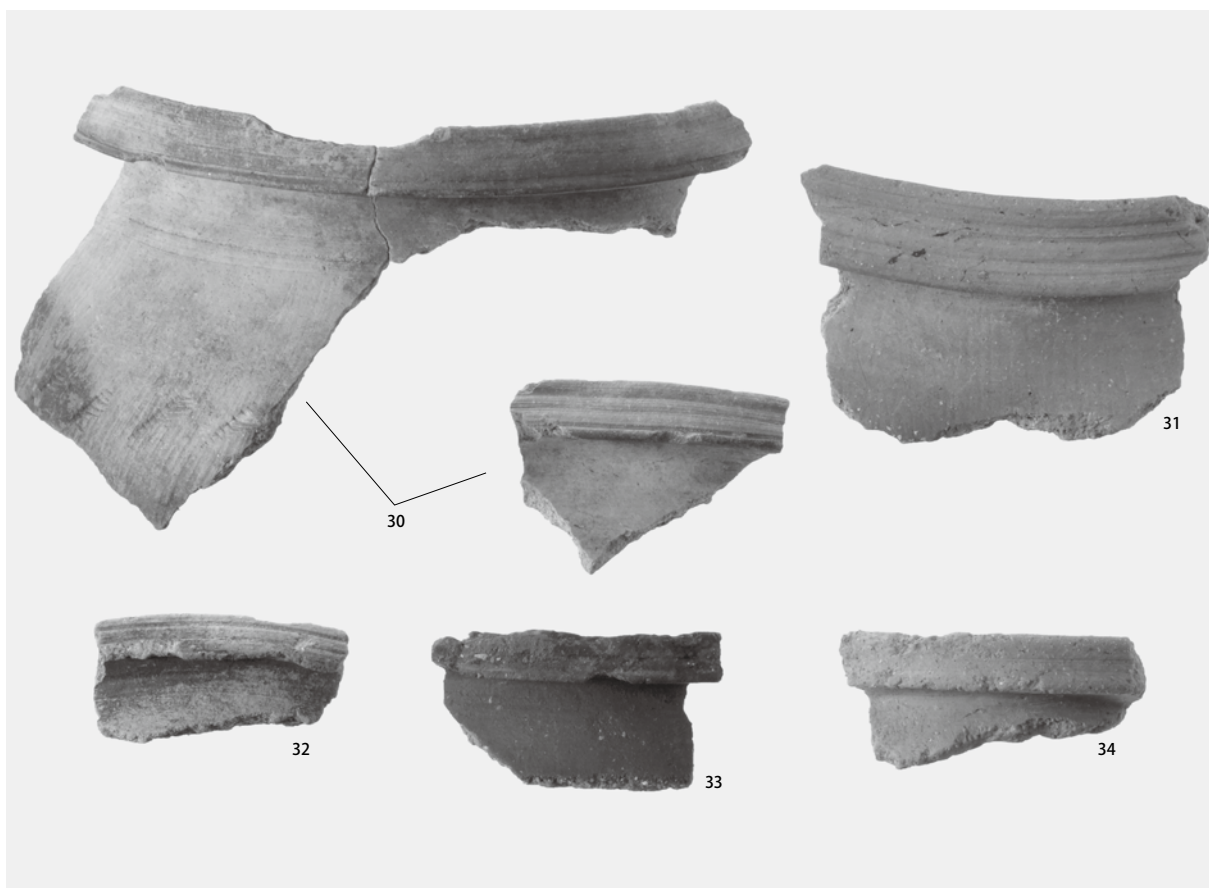




1. SD220 出土土器 1



2. SD220 出土土器 2



1. SD220 出土土器 3

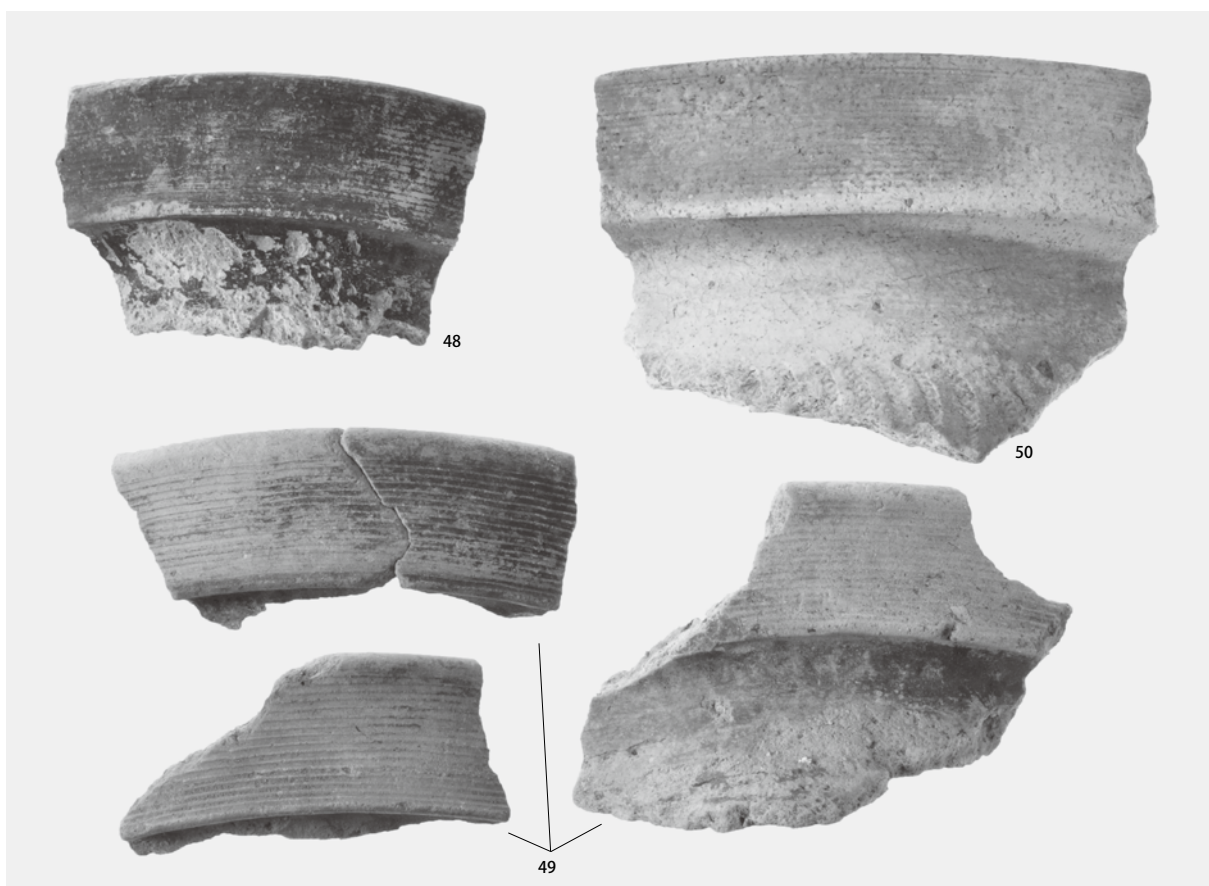


2. SD220 出土土器 4





1. SD220 出土土器 5



2. SD220 出土土器 6



SD220 出土土器 7

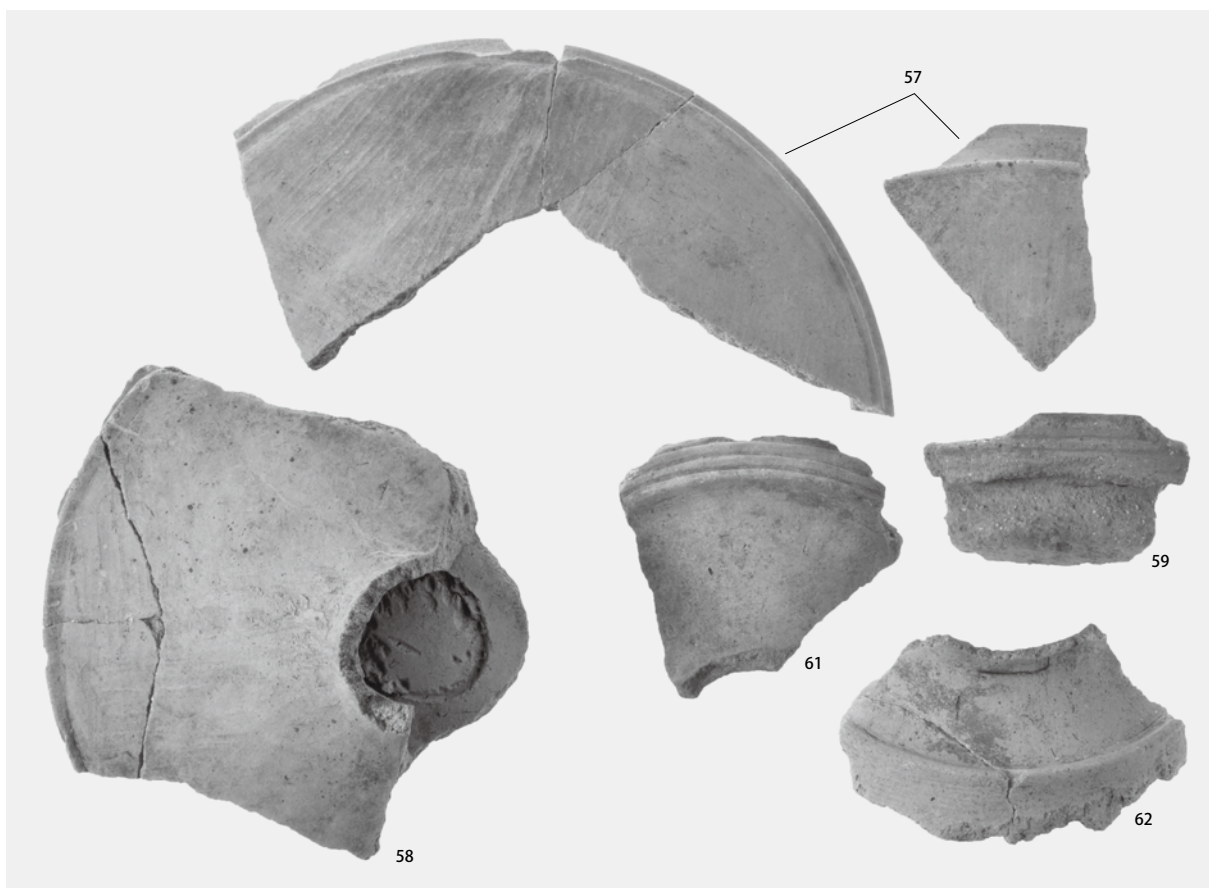


1. SD220 出土土器 8

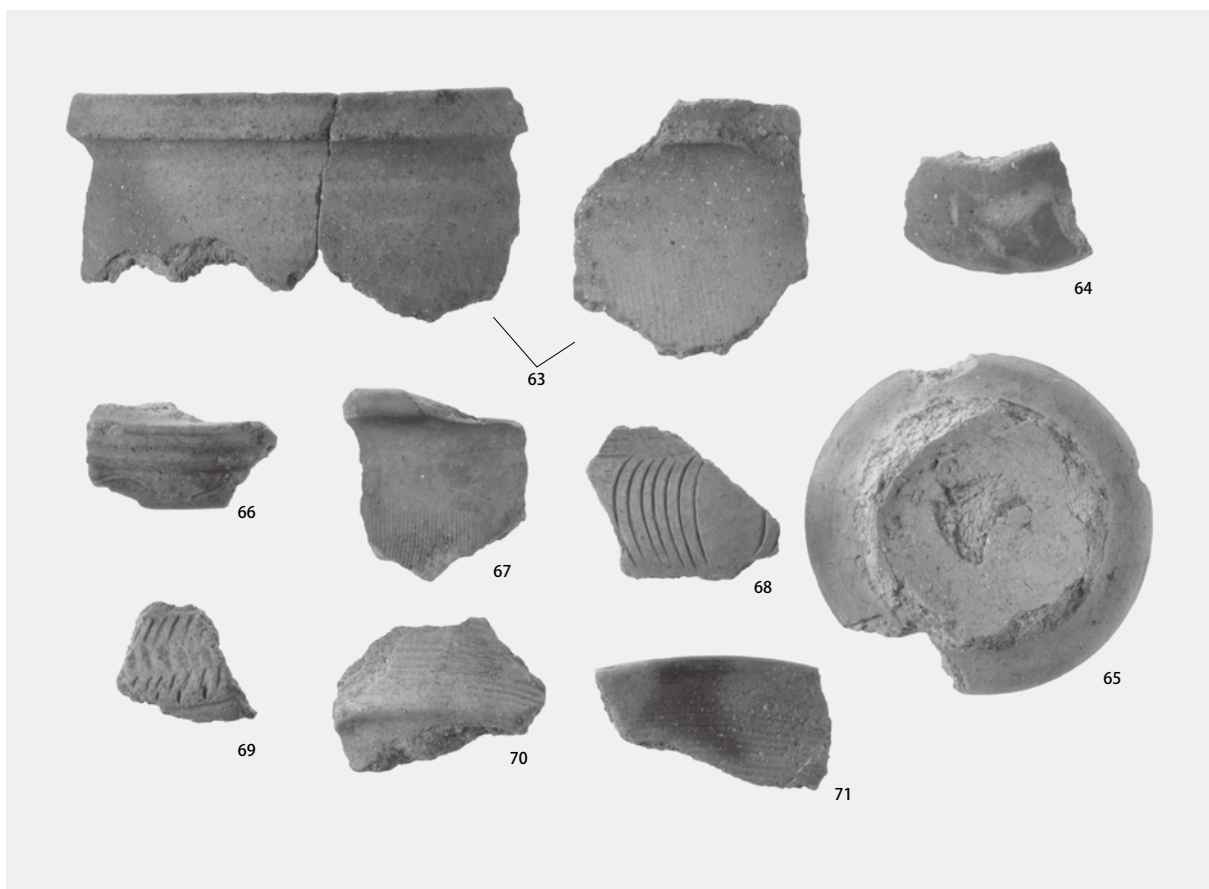


2. SD220 出土土器 9

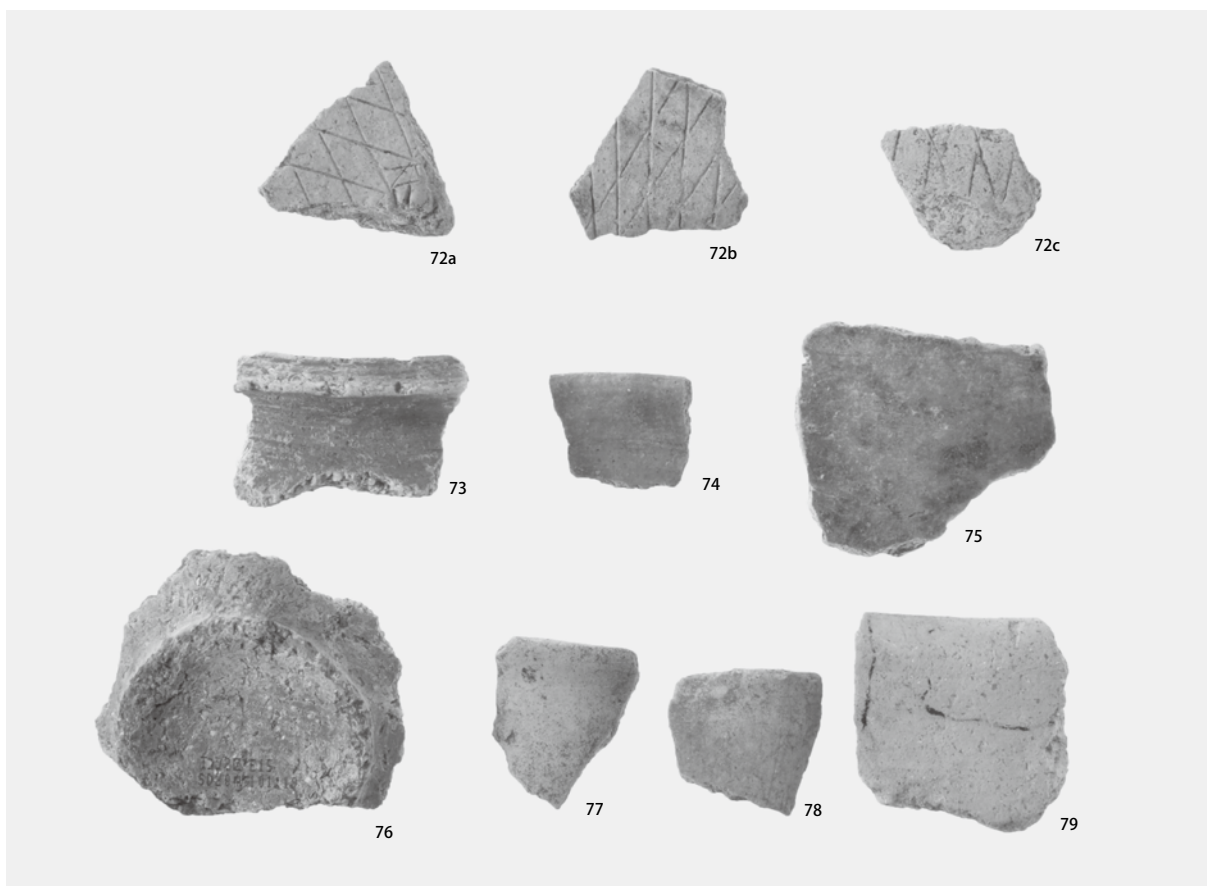




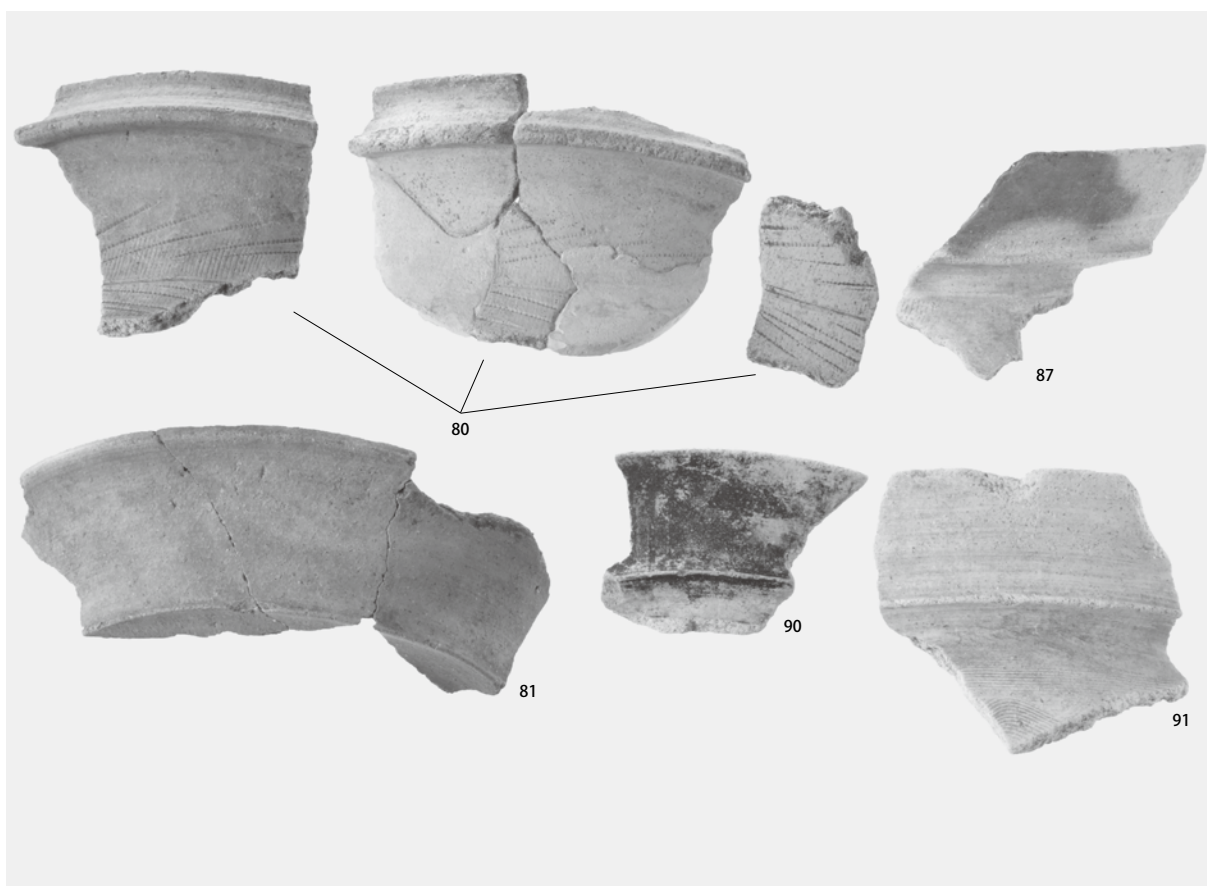
1. SD220 出土土器 10



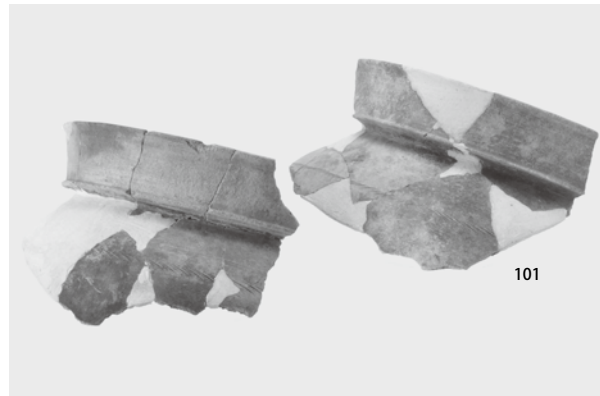
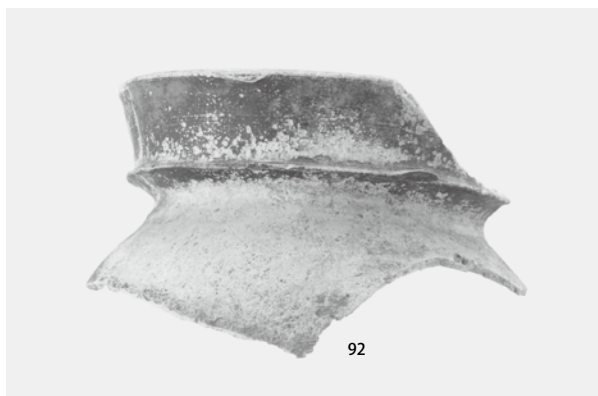
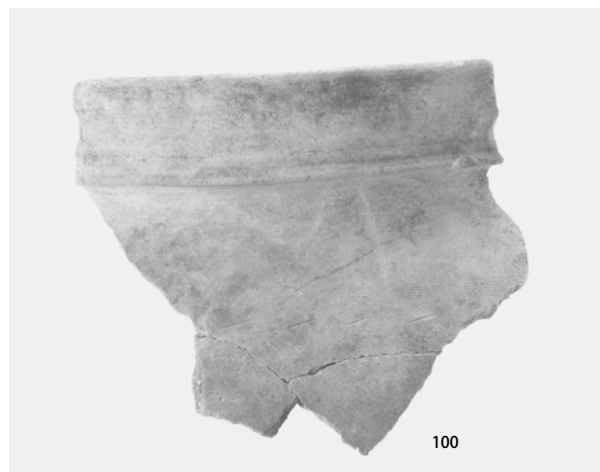
2. SD220 出土土器 11



1. SD220 出土土器 12

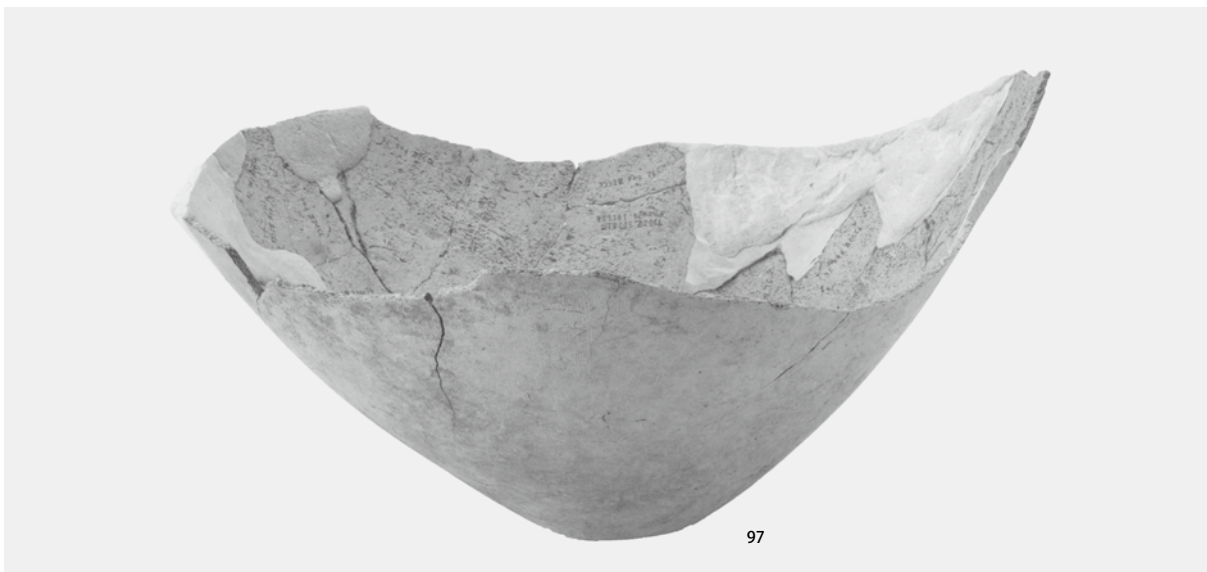


2. SD220 出土土器 13



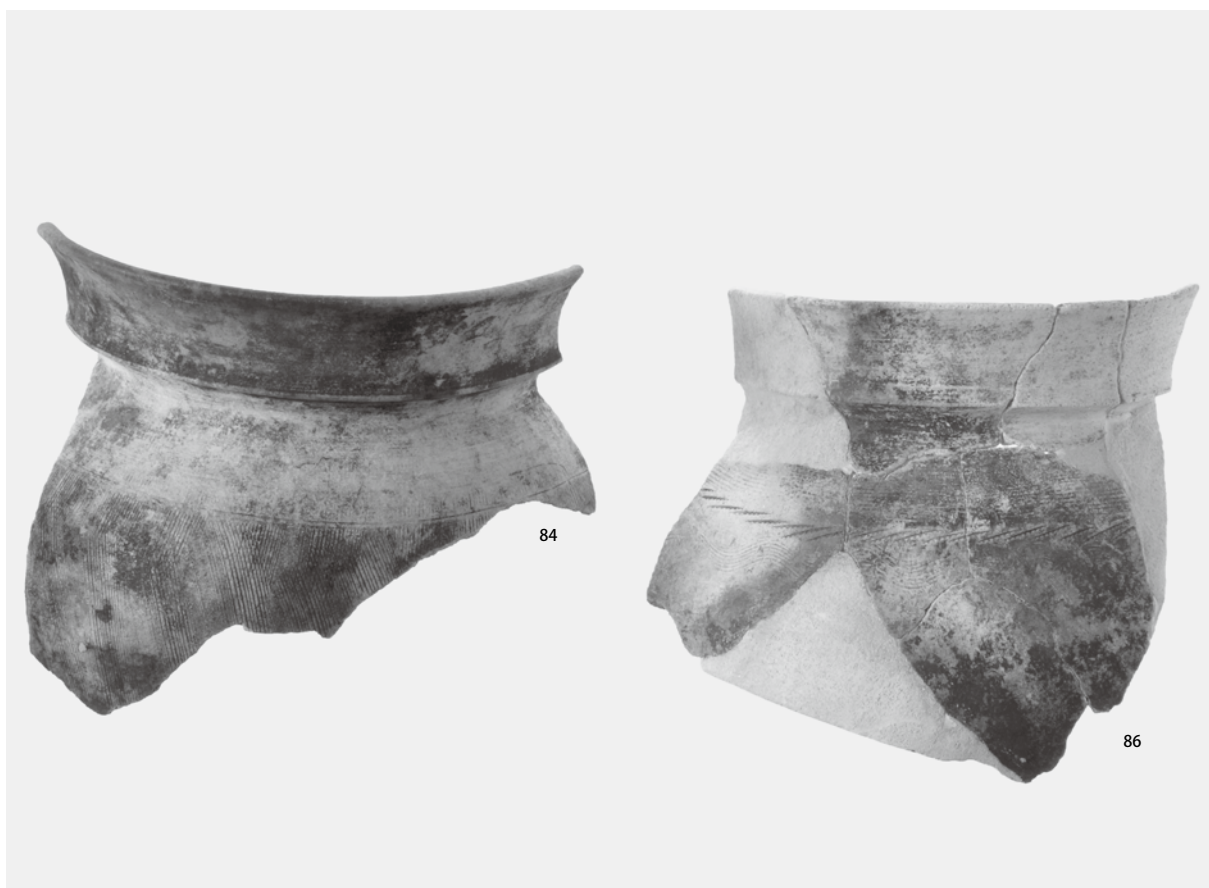
SD220 出土土器 14





SD220 出土土器 15





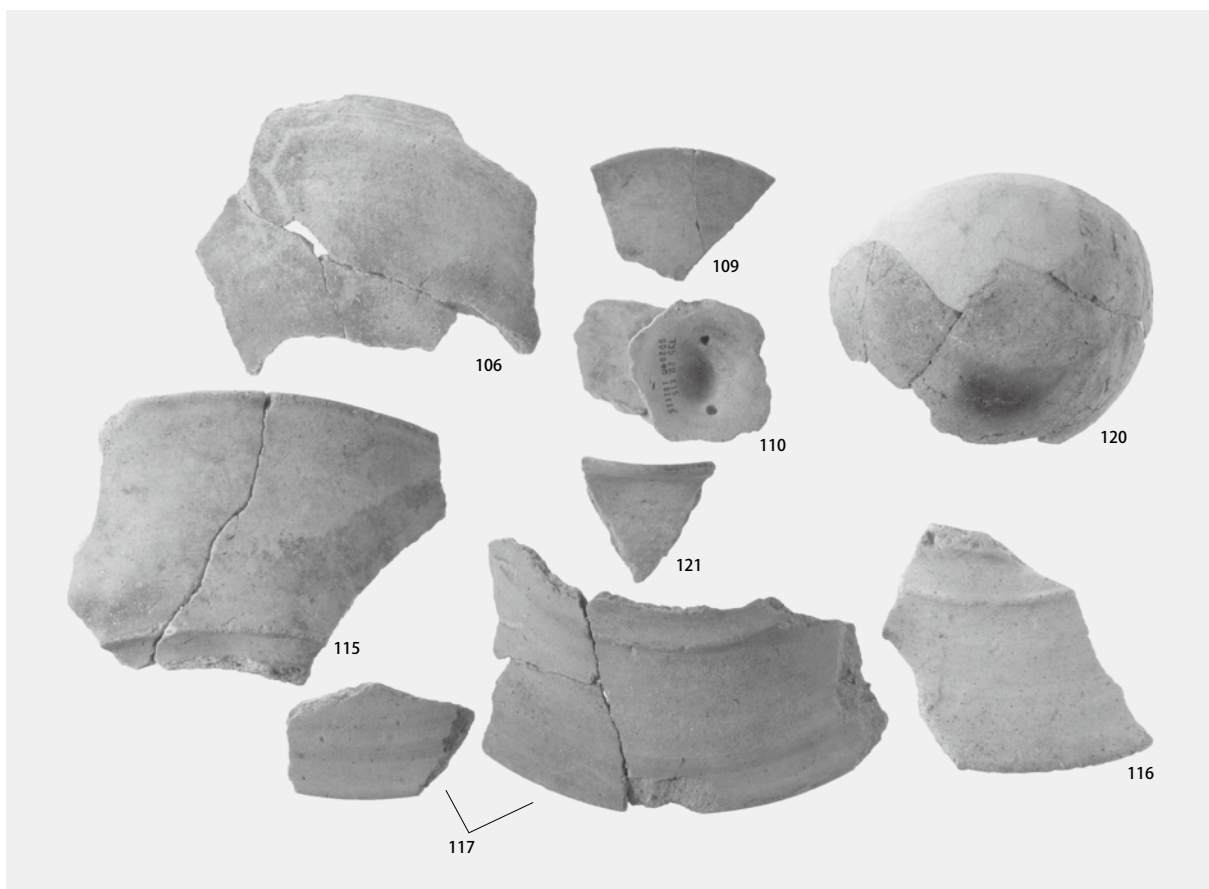
1. SD220 出土土器 16



2. SD220 出土土器 17

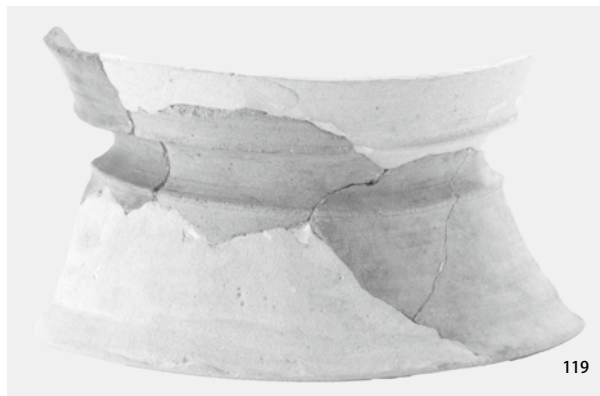
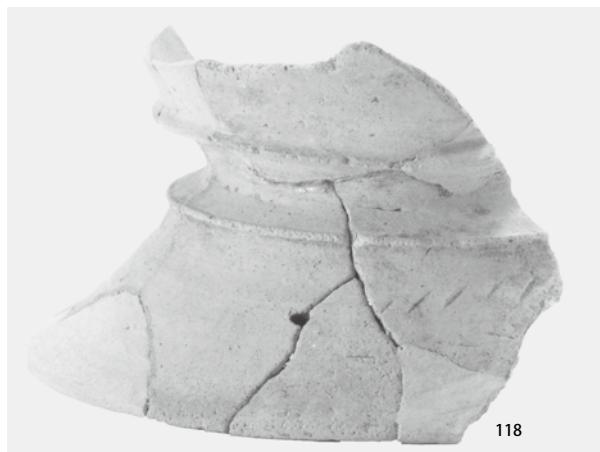
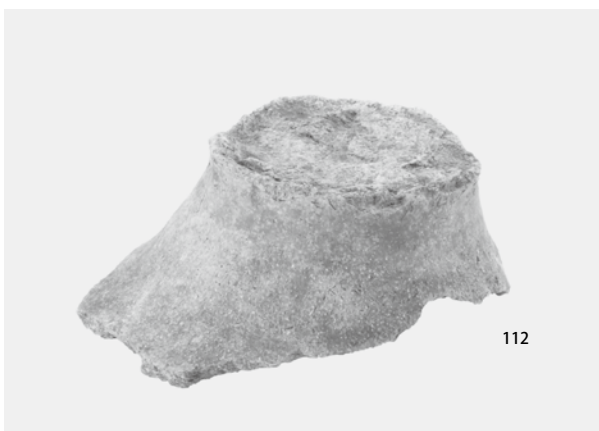
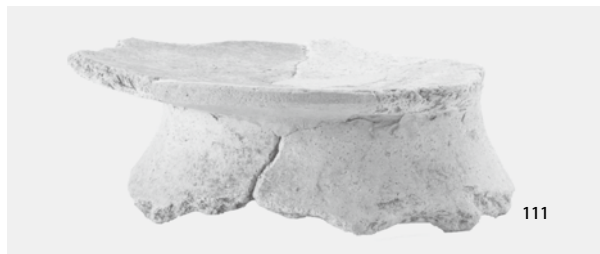
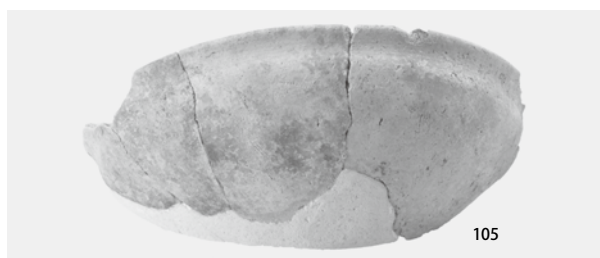


1. SD220 出土土器 18

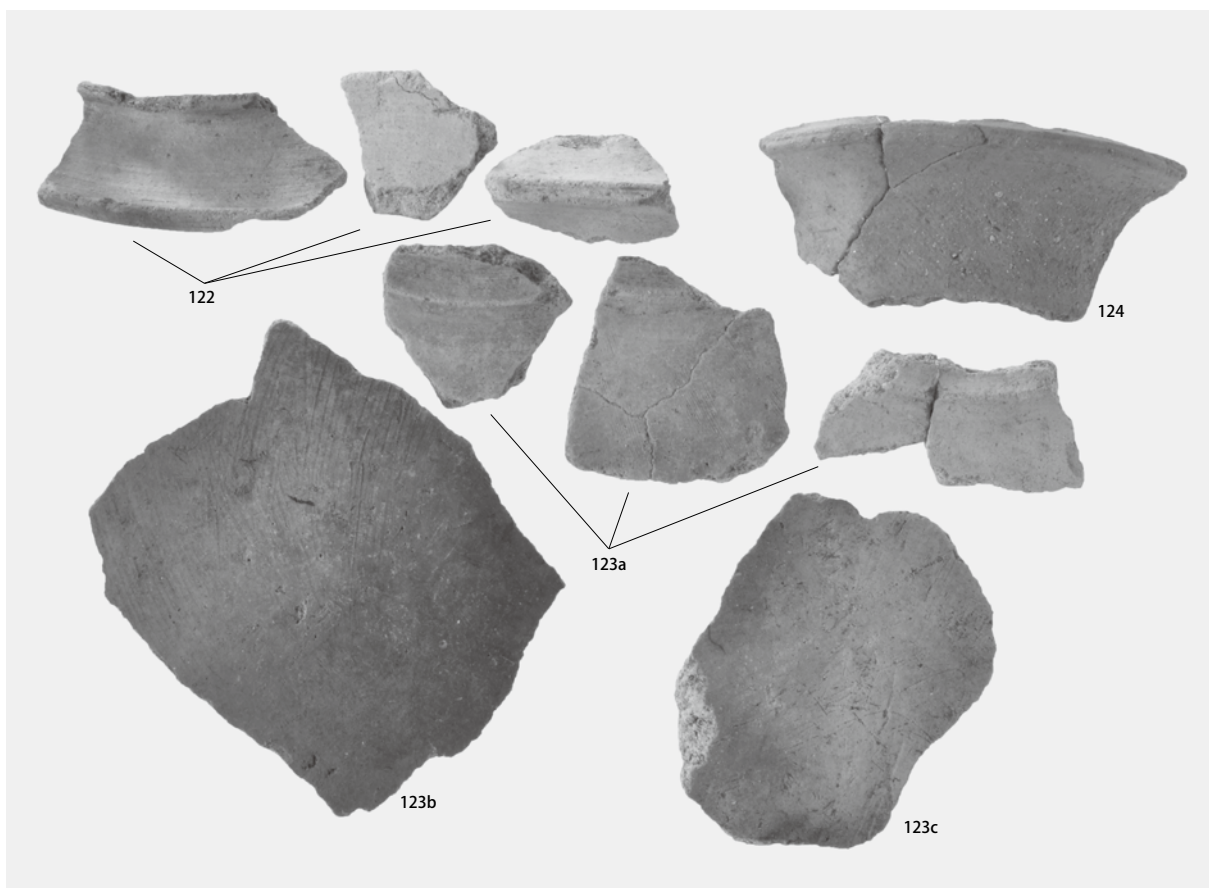


2. SD220 出土土器 19

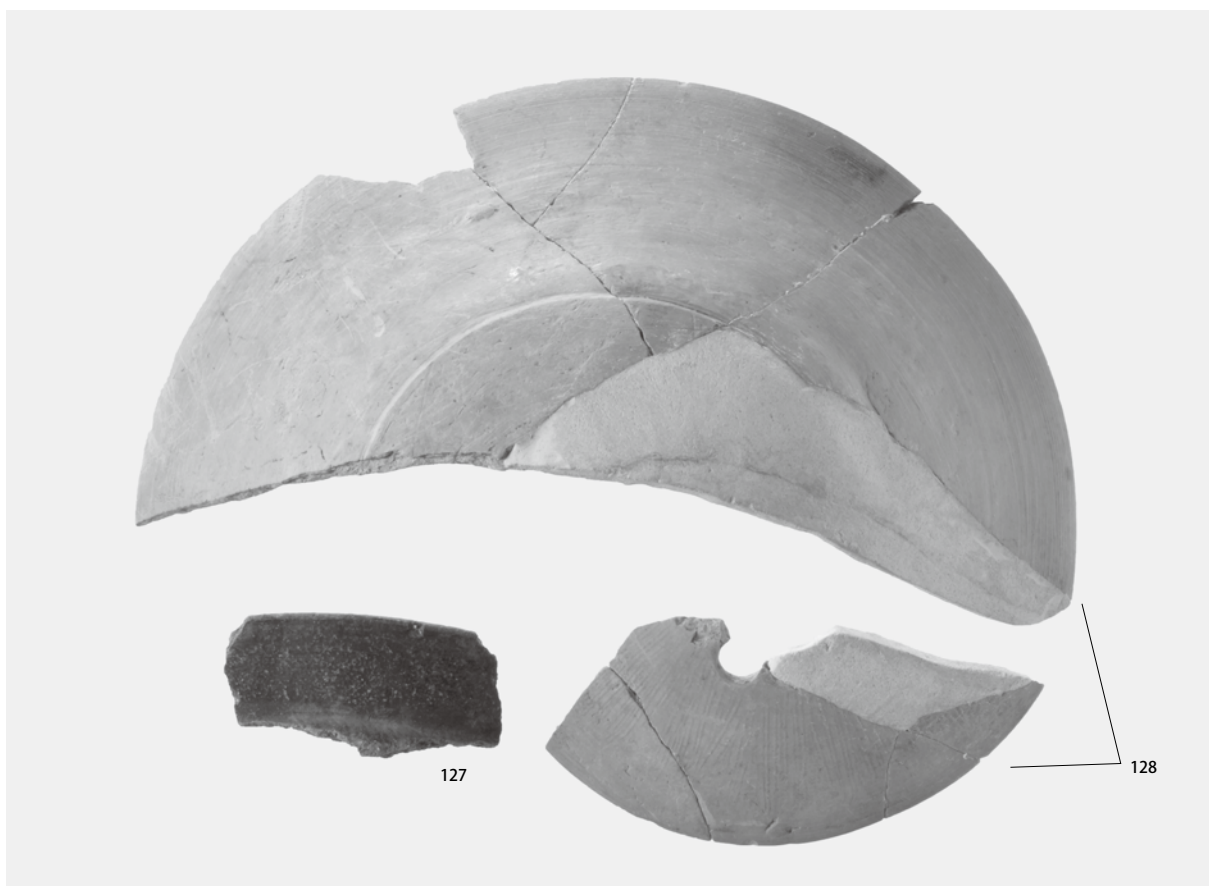




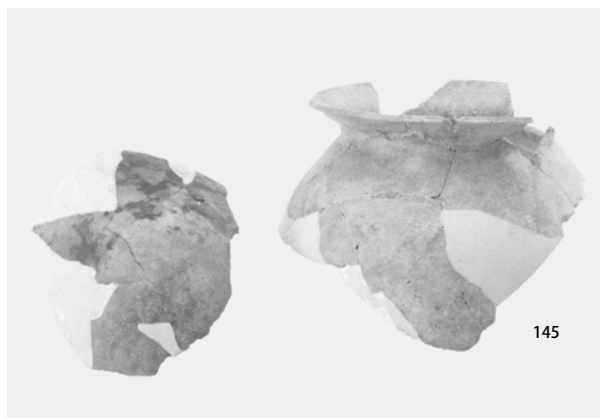
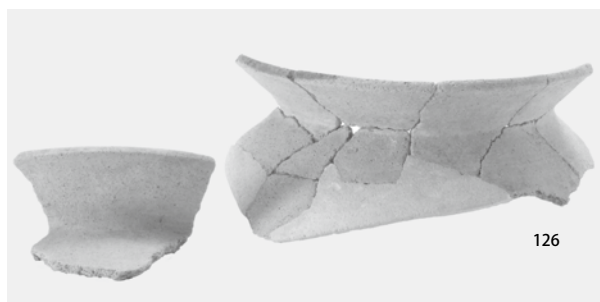
SD220 出土土器 20



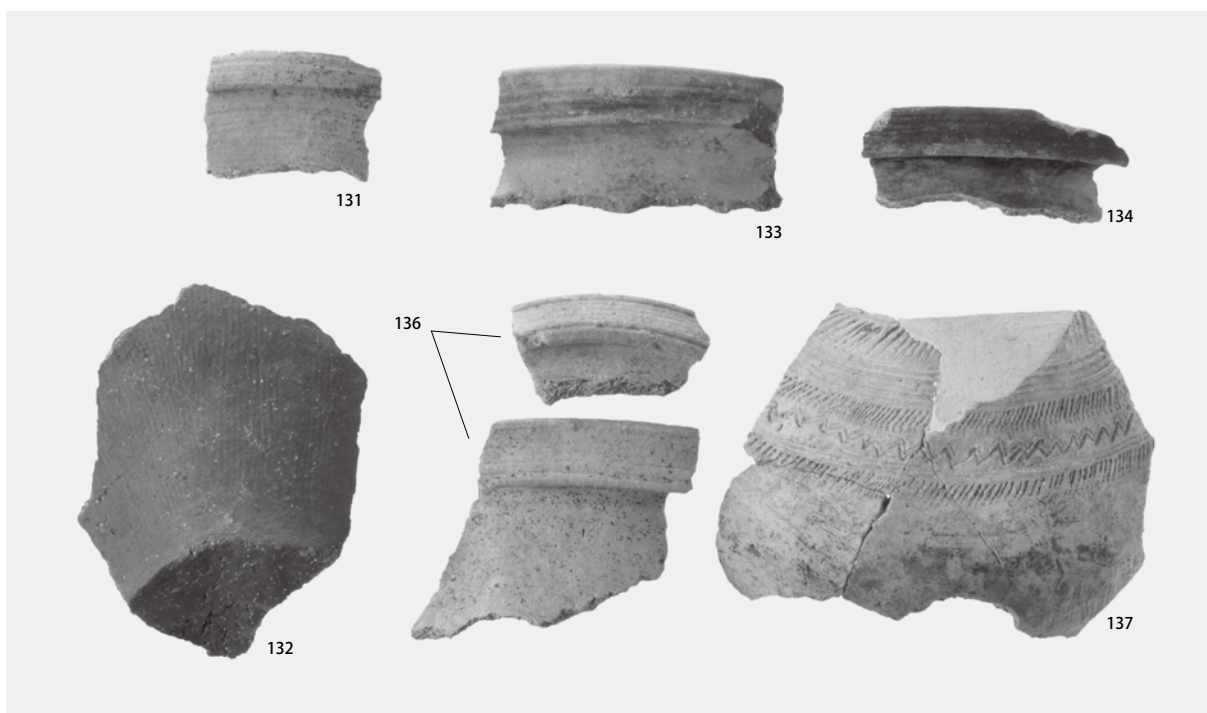
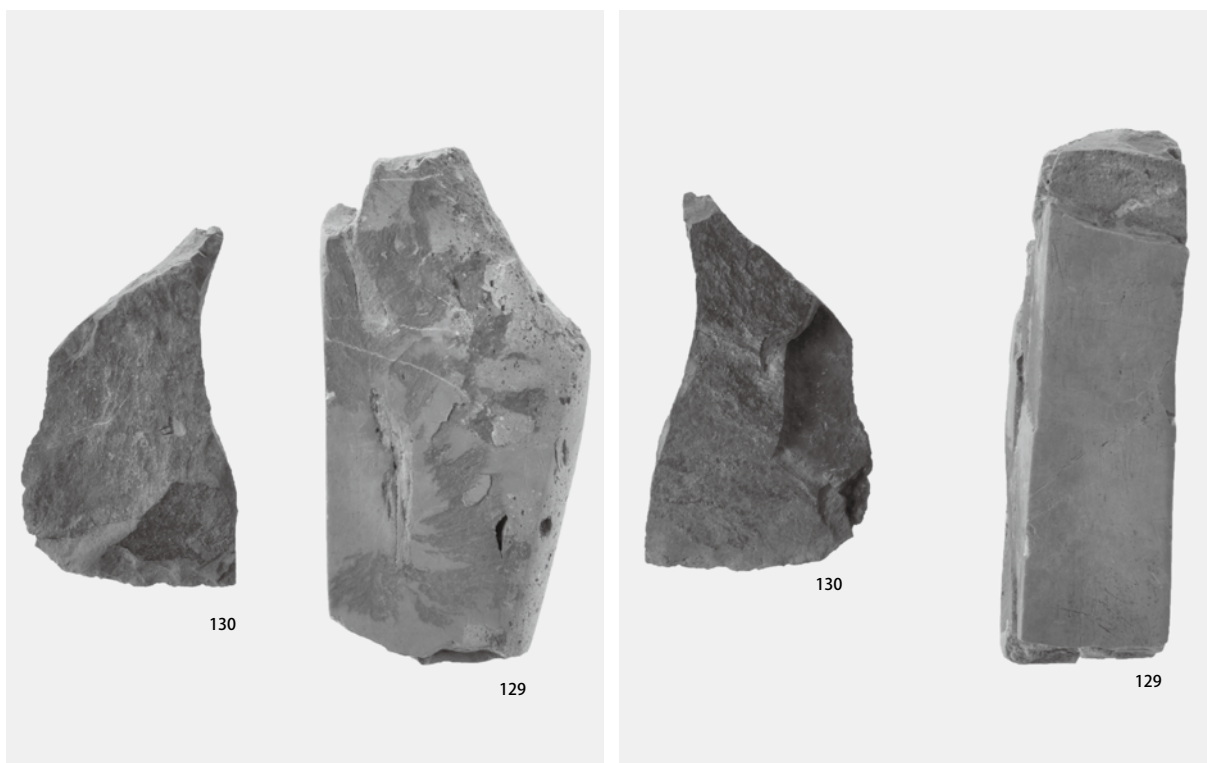
1. SD220 出土土器 21



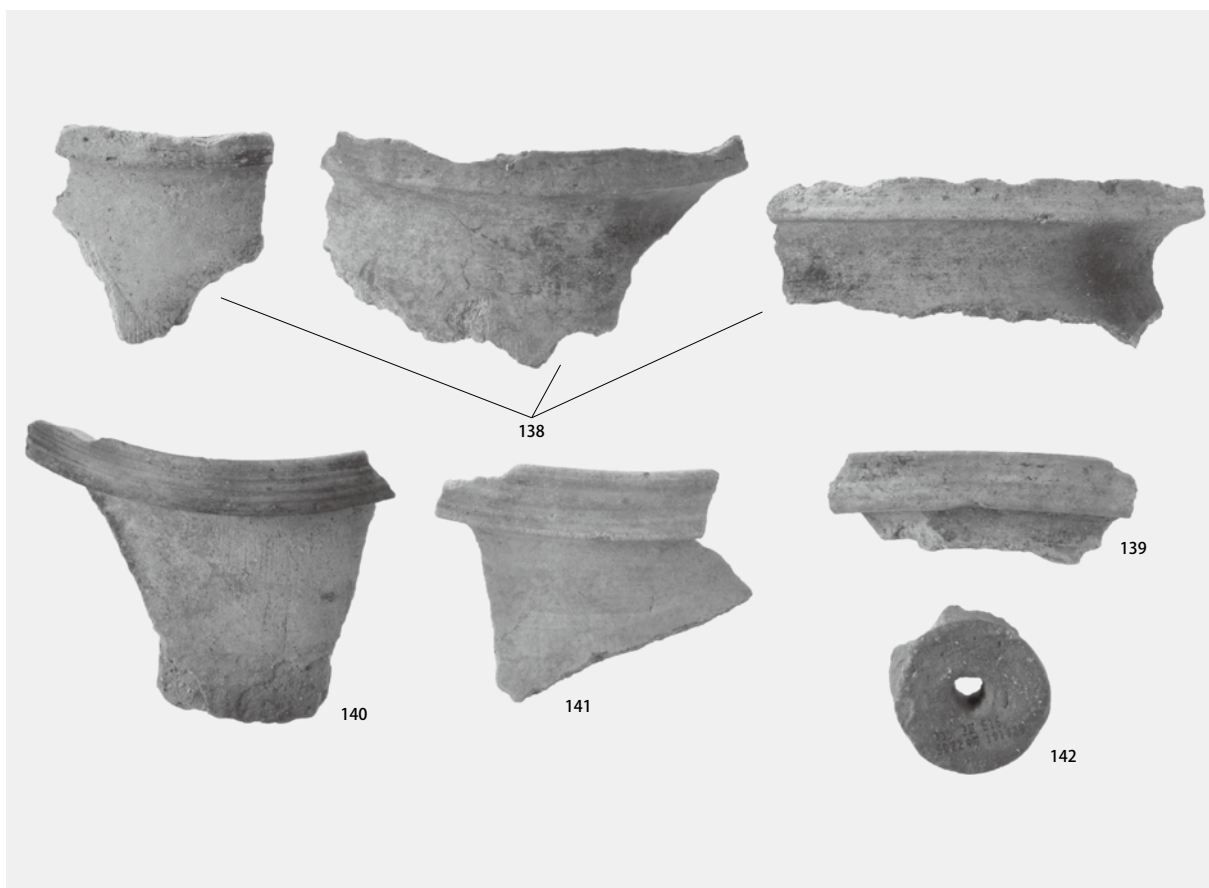
2. SD220 出土土器 22



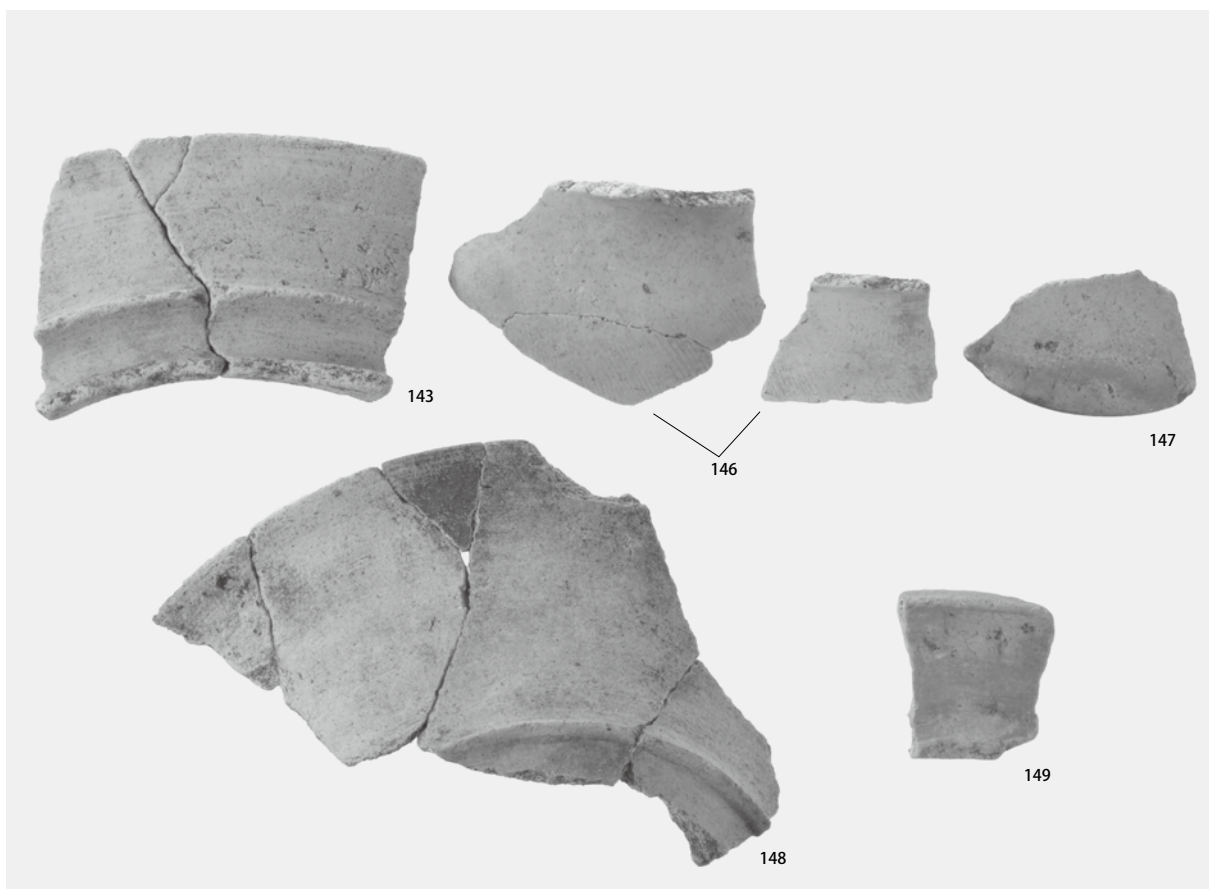




SD220 · 223 · 222 出土遺物

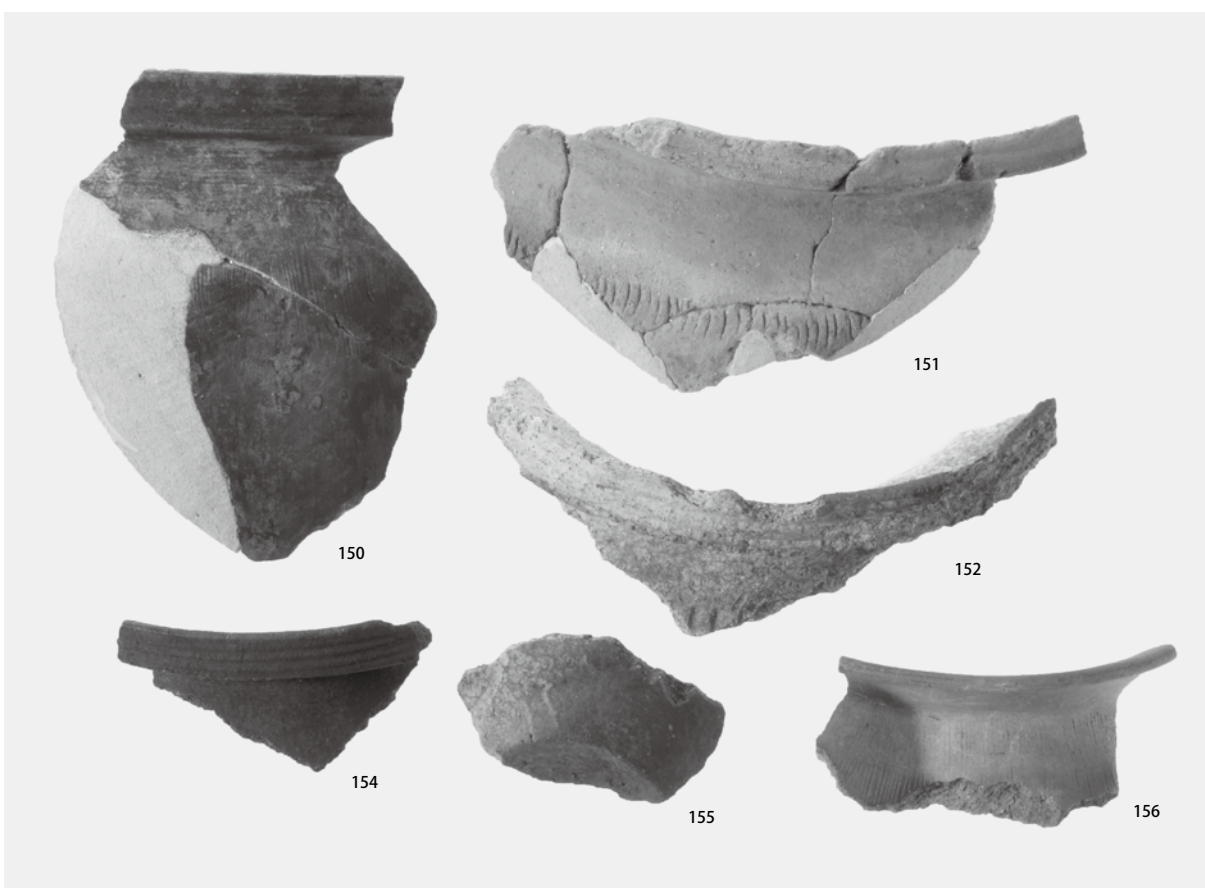


1. SD222 出土土器 1

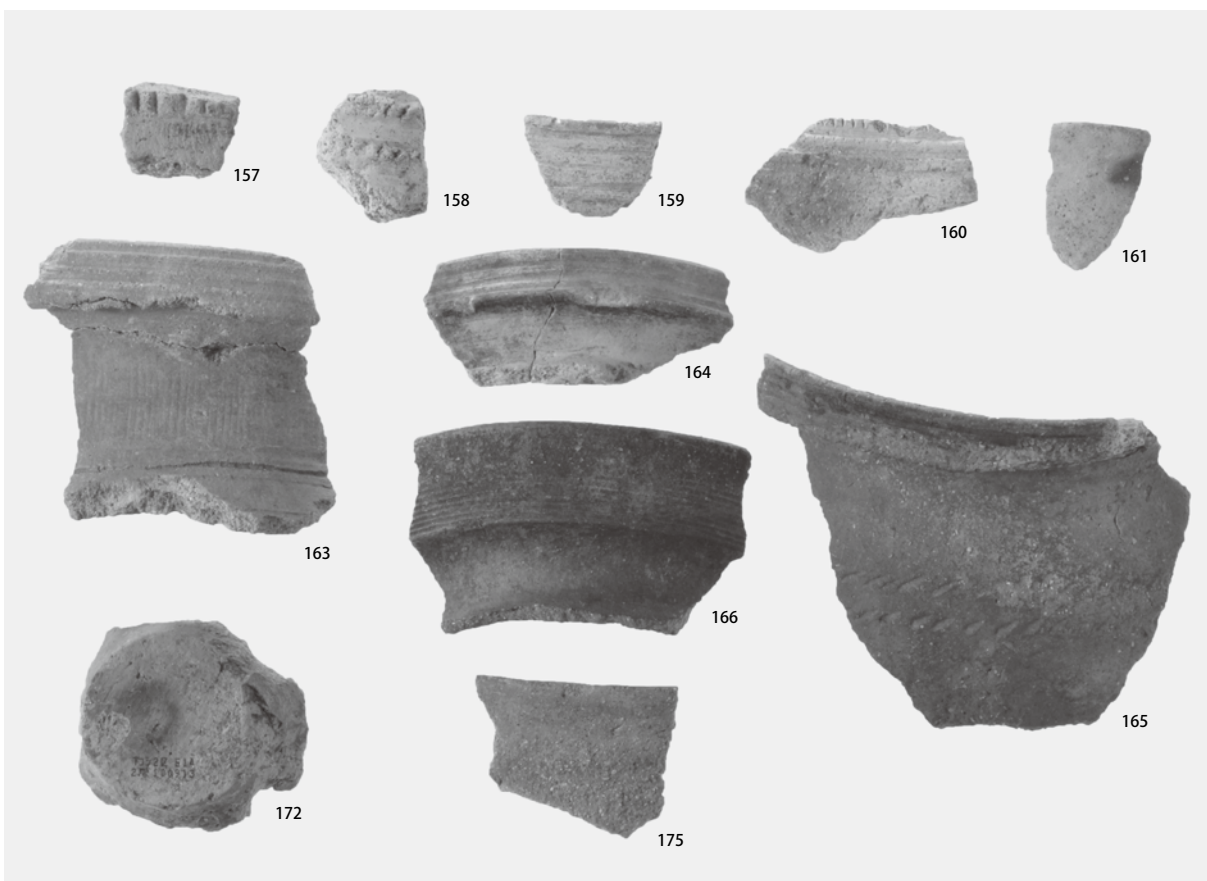


2. SD222 出土土器 2

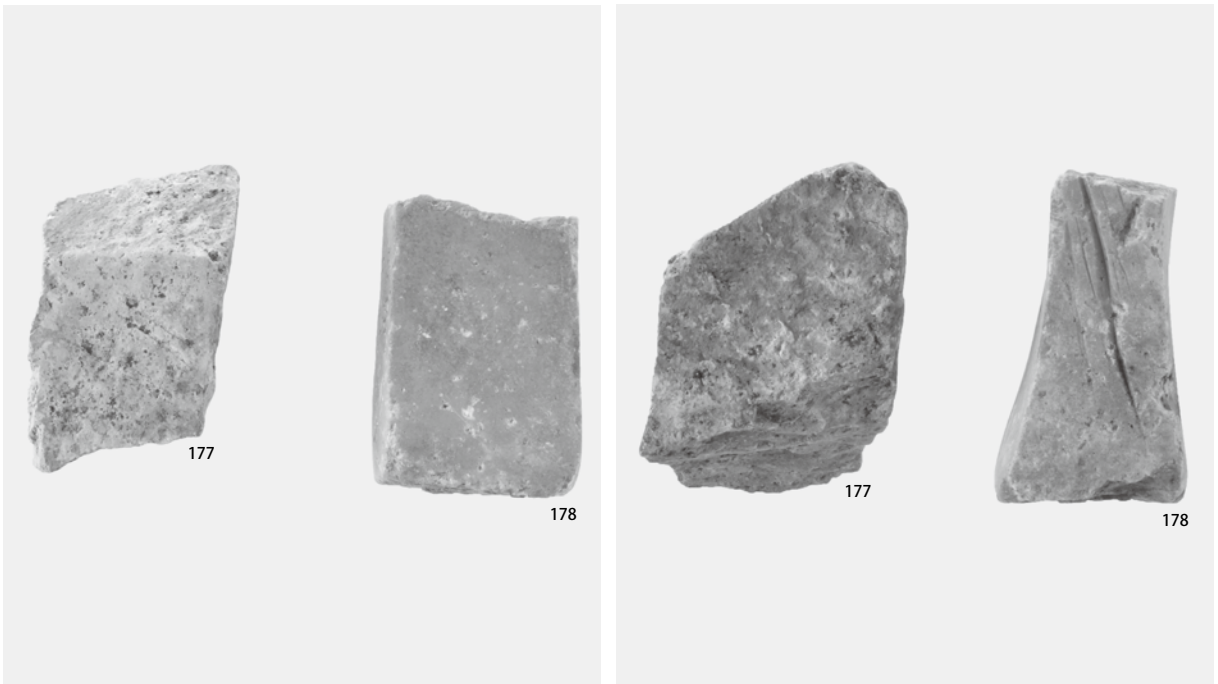
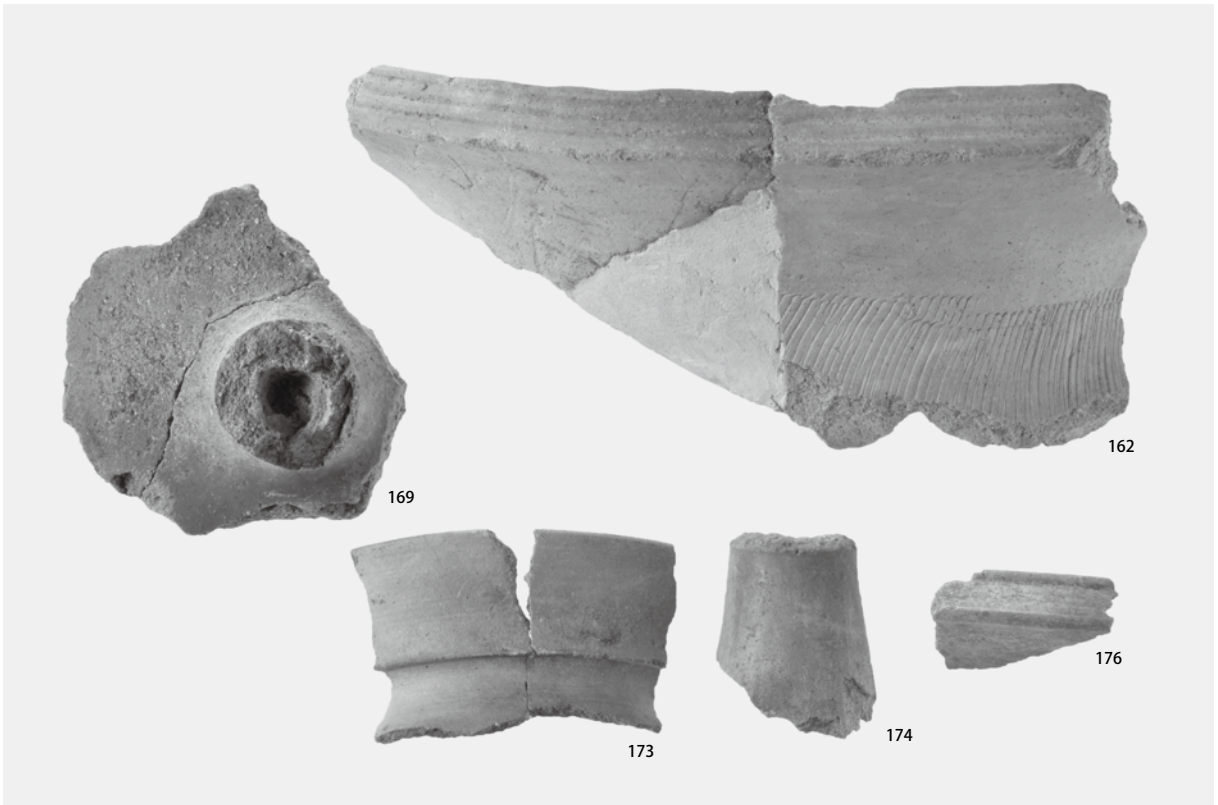




SD221・222・223 合流部・Pit2261 出土土器

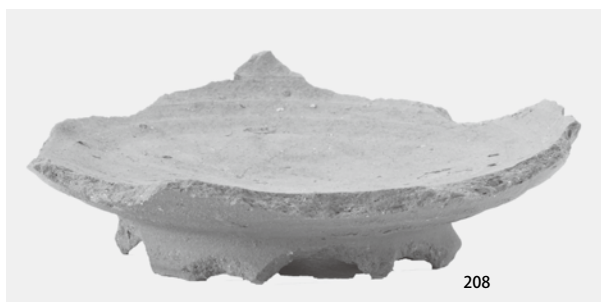
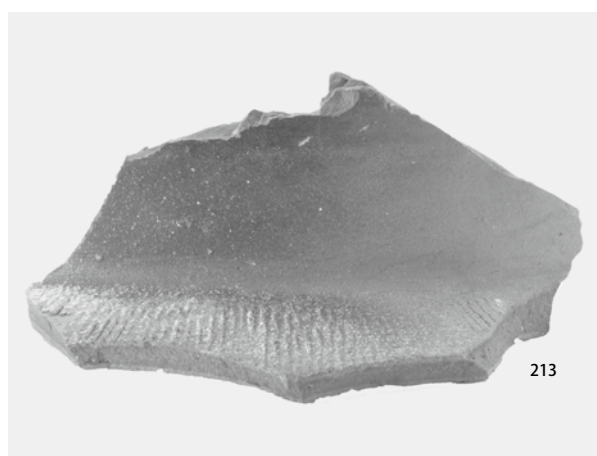
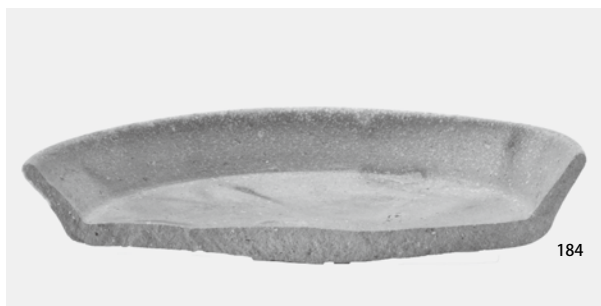
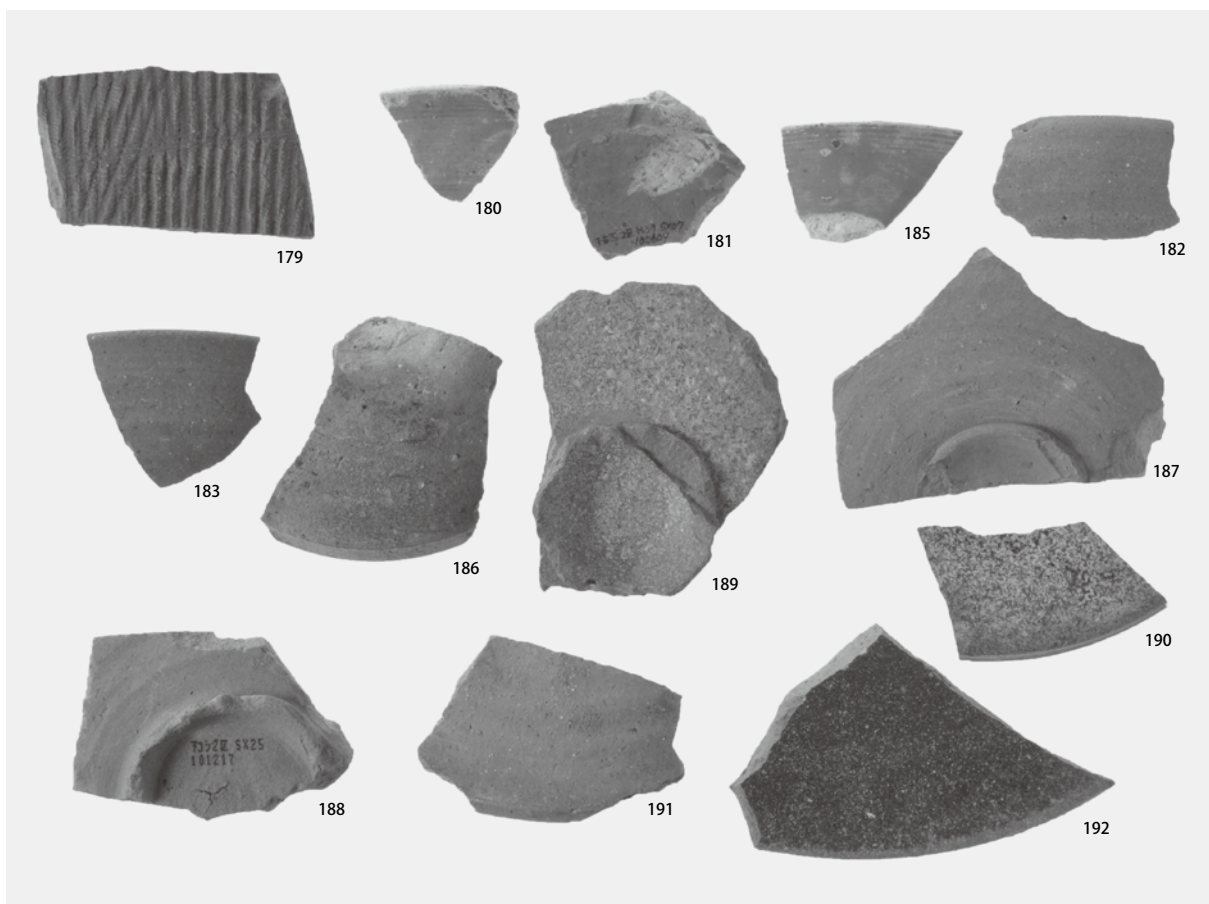


遺構外出土器 1

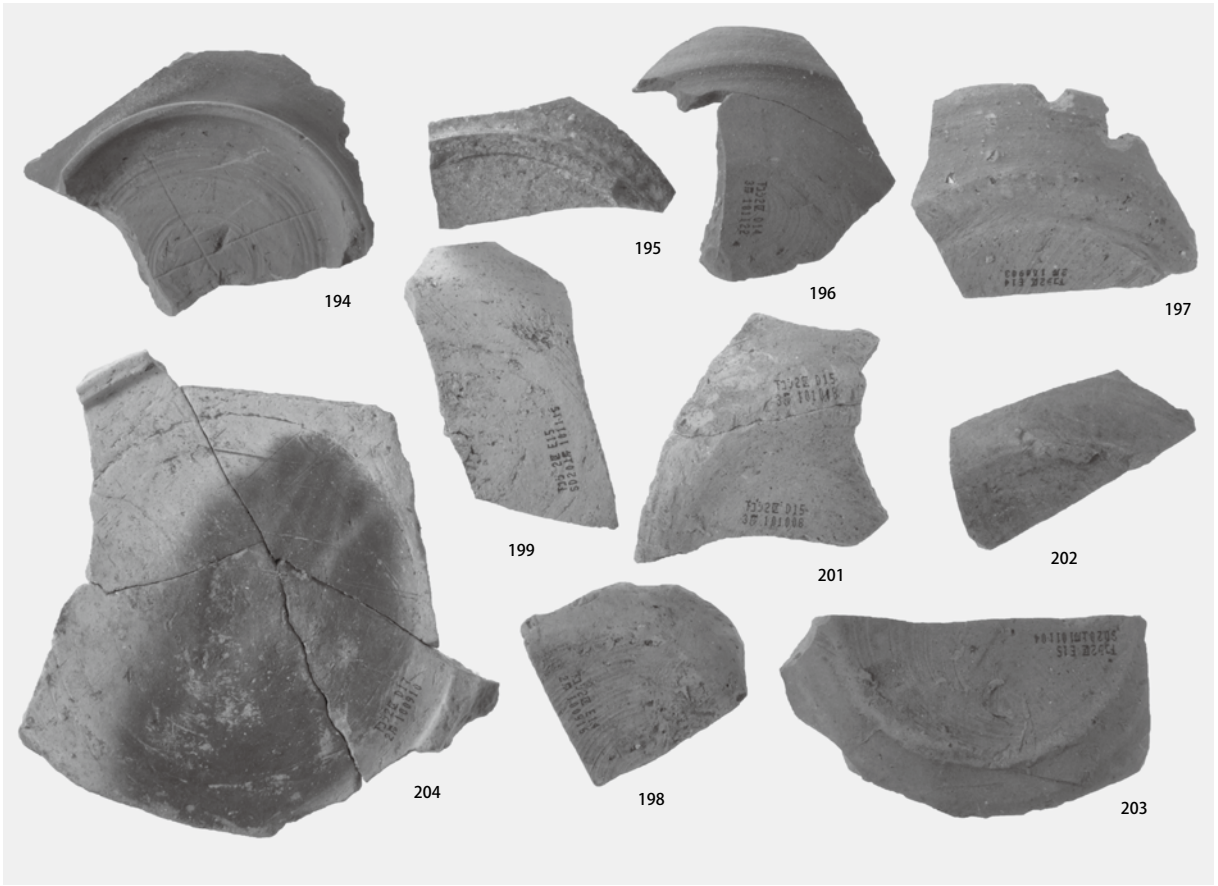


遺構外出土遺物

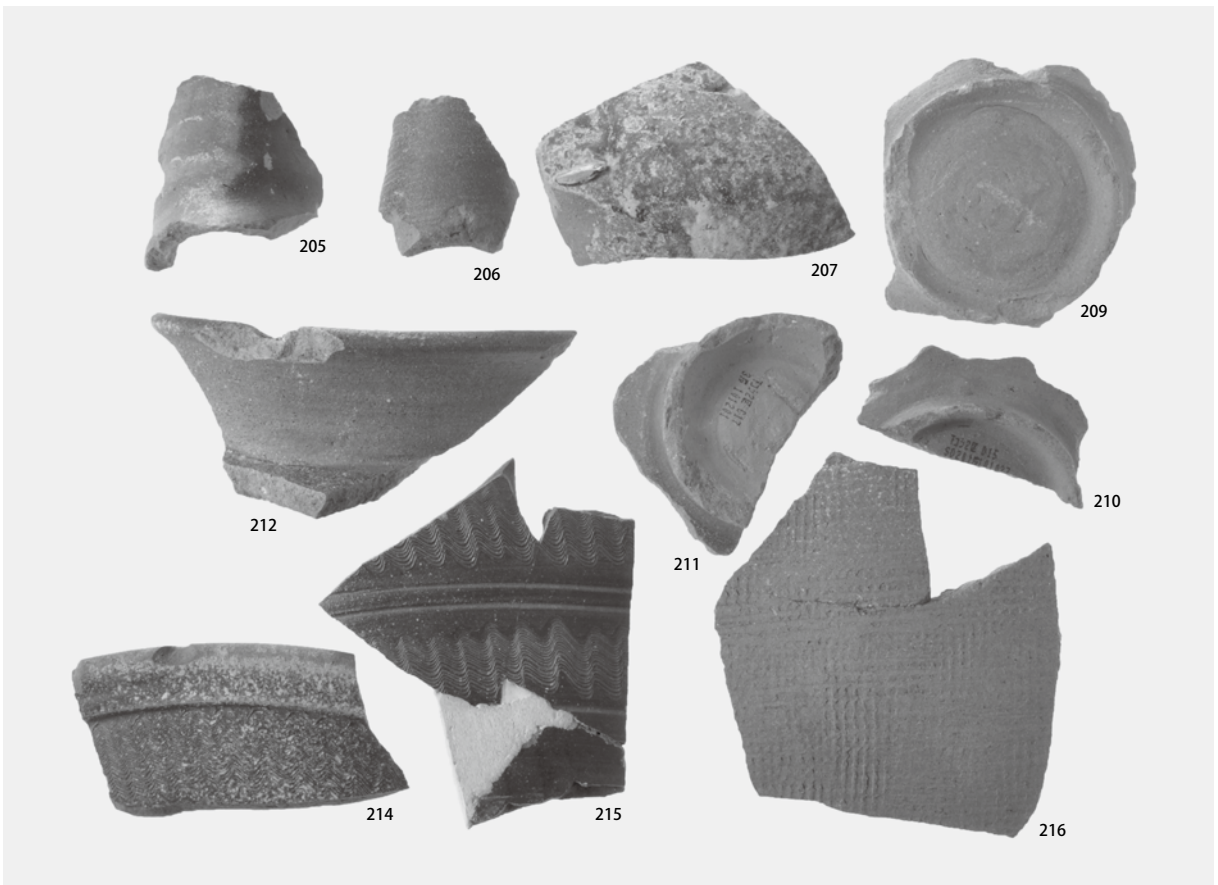




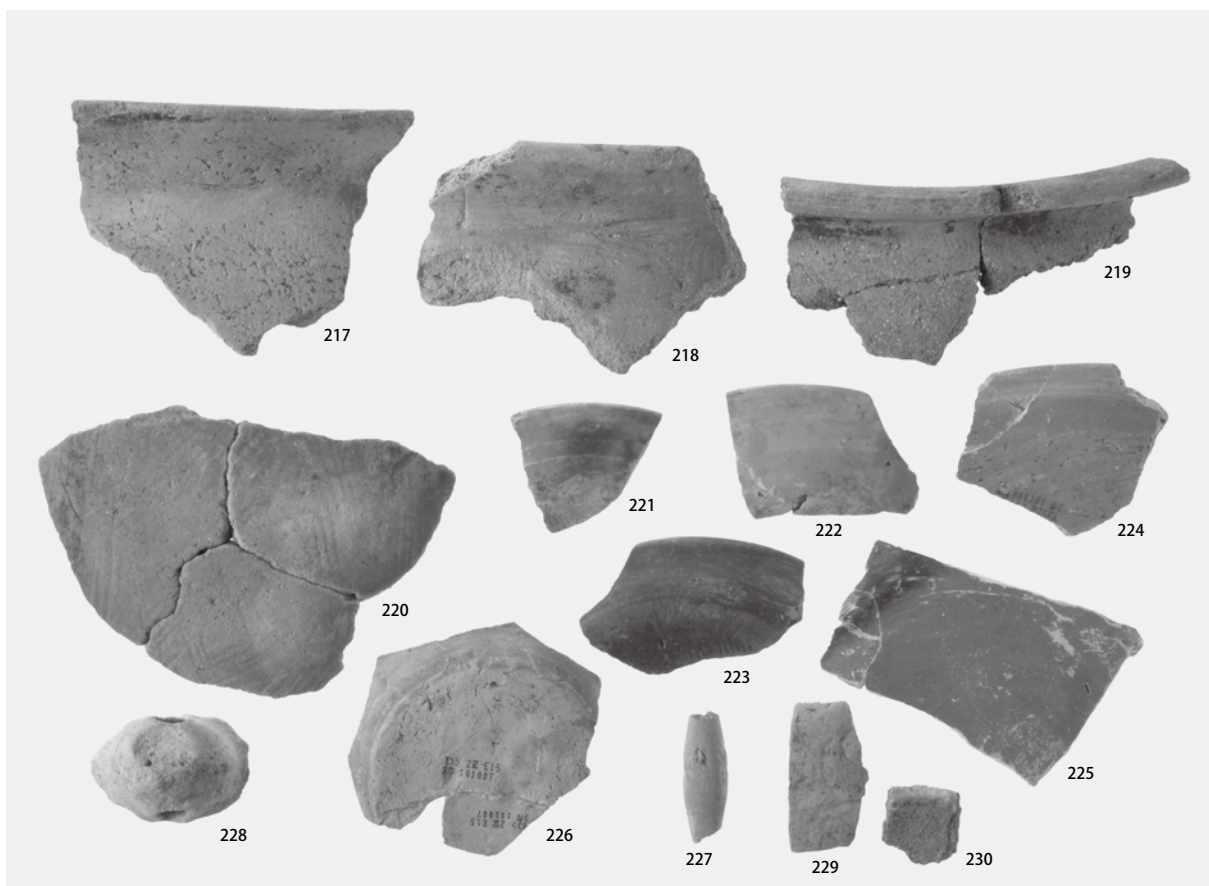
SK201 · SX207 · Pit2371 · 2247 · 遺構外出土土器



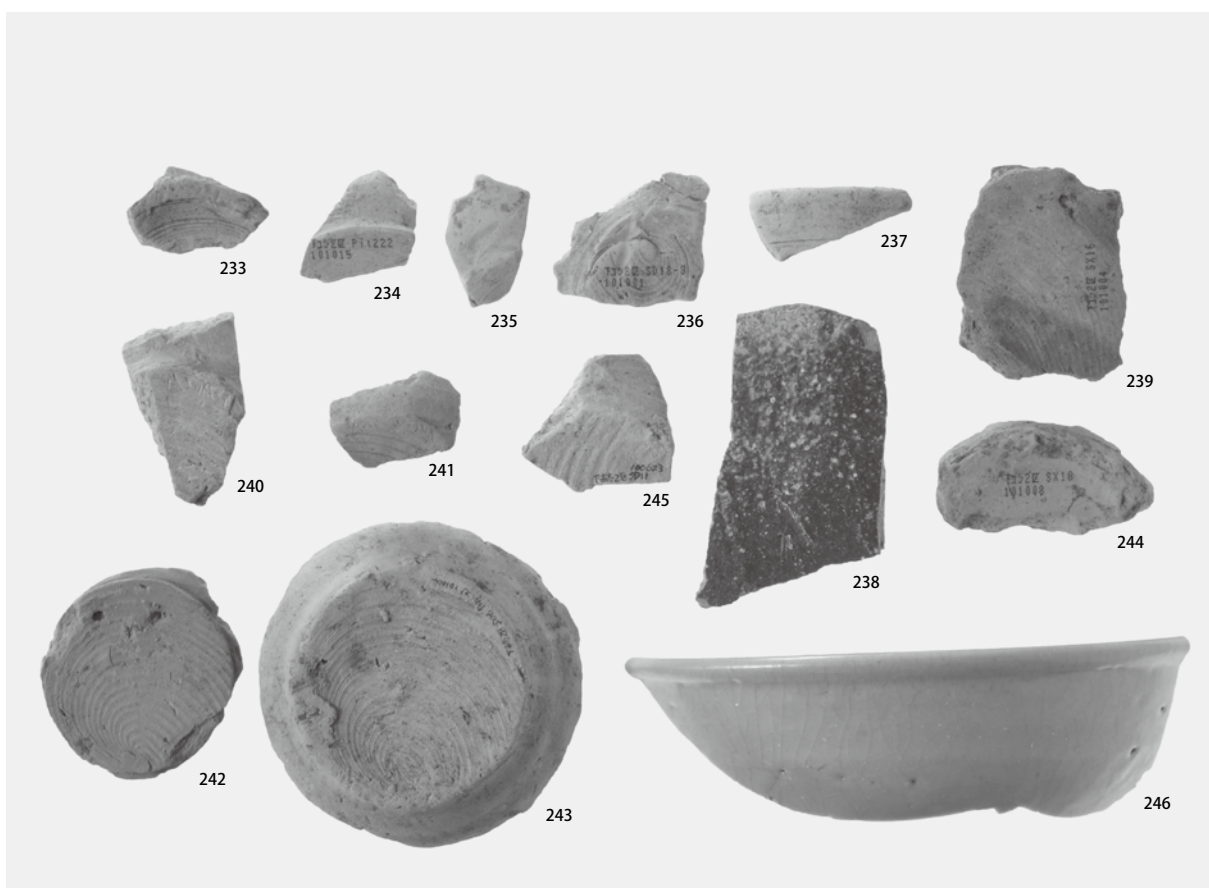
1. 遺構外出土土器 2



2. 遺構外出土土器 3

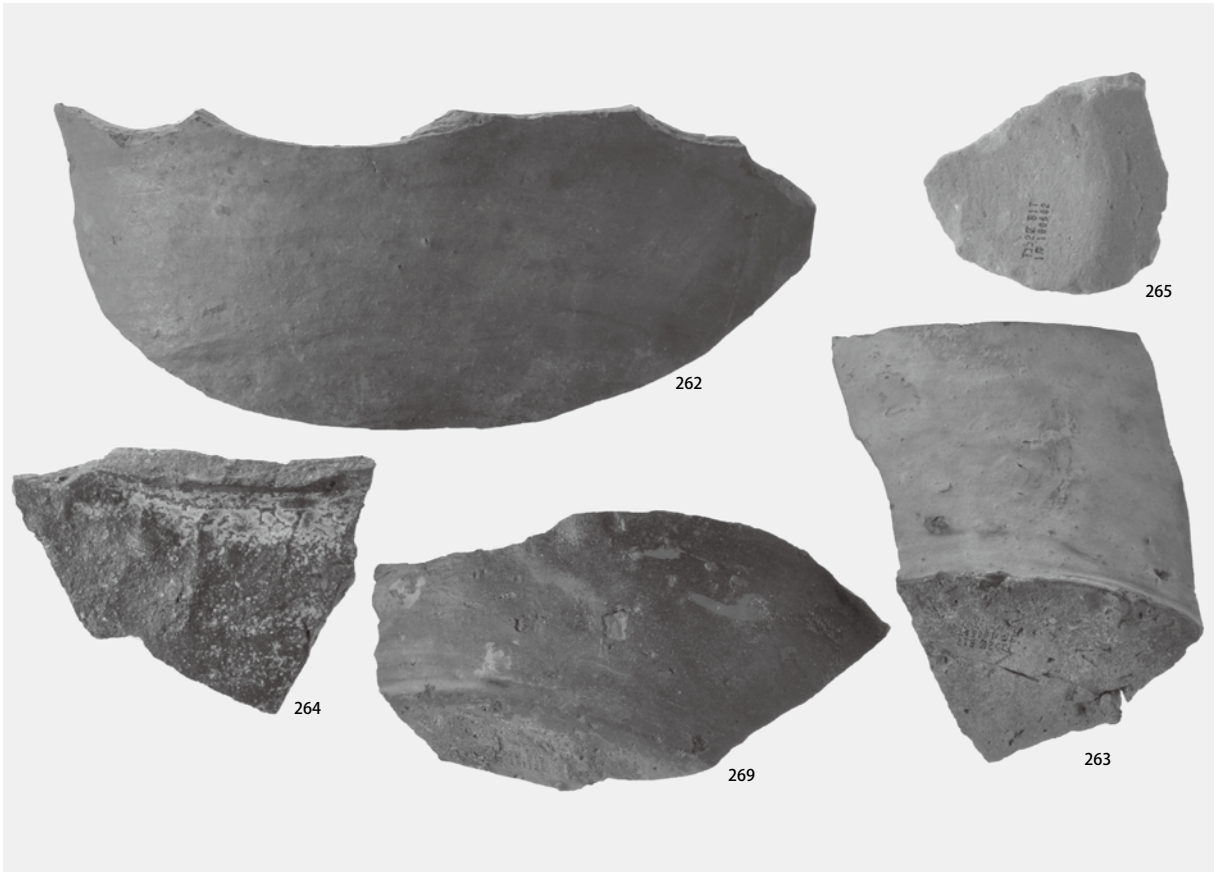


1. 遺構外出土土器 4

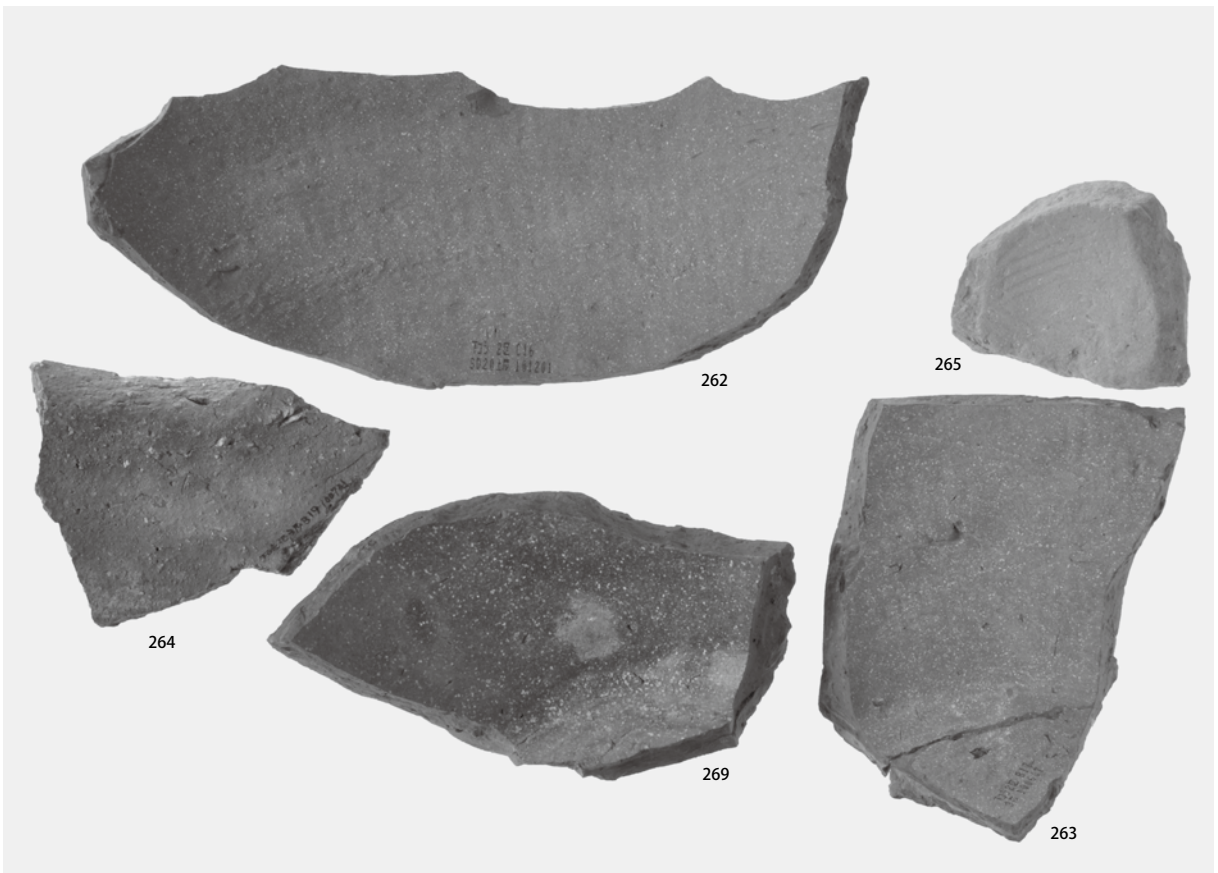


2. SB202・203・SD218・SX216・218・SD208・209・211・Pit2325 出土土器



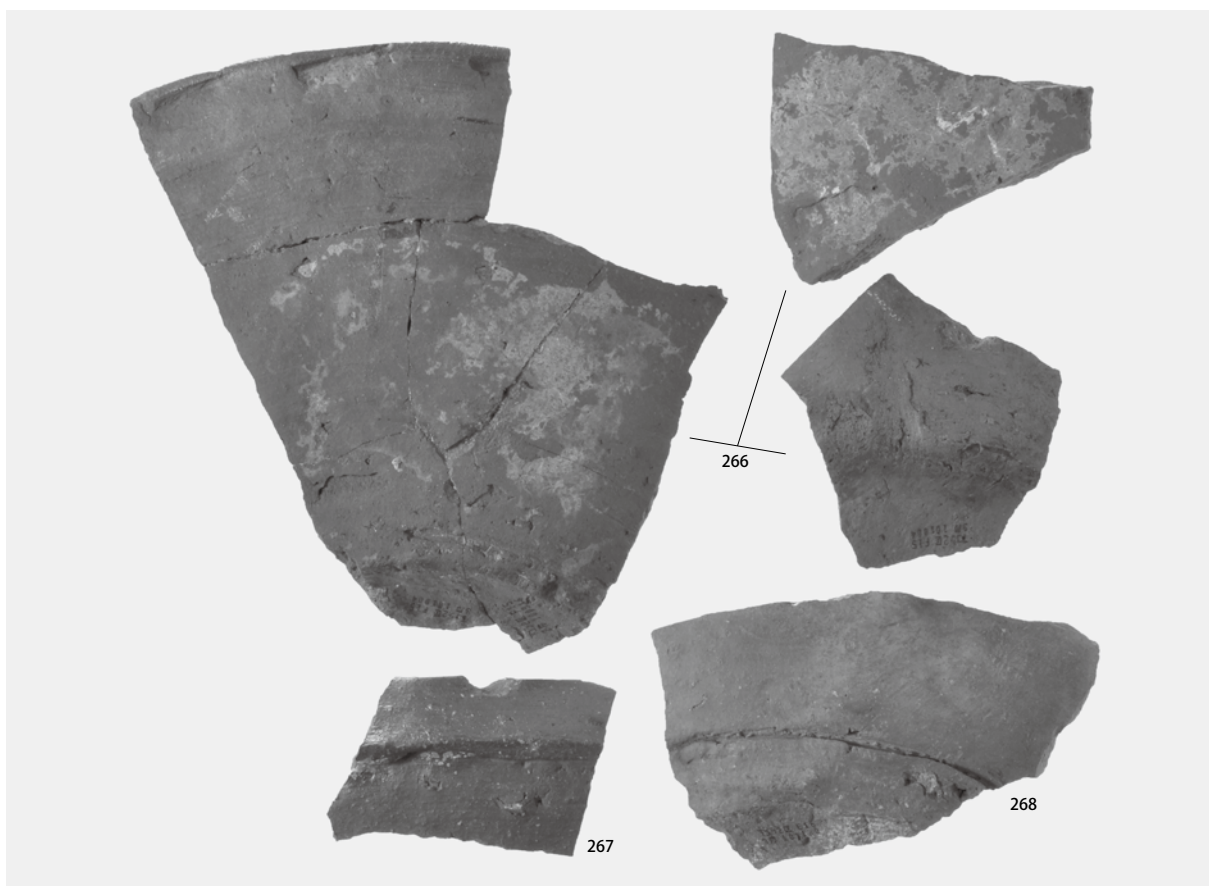


1. 遺構外出土土器 5



2. 遺構外出土土器 5(裏面)

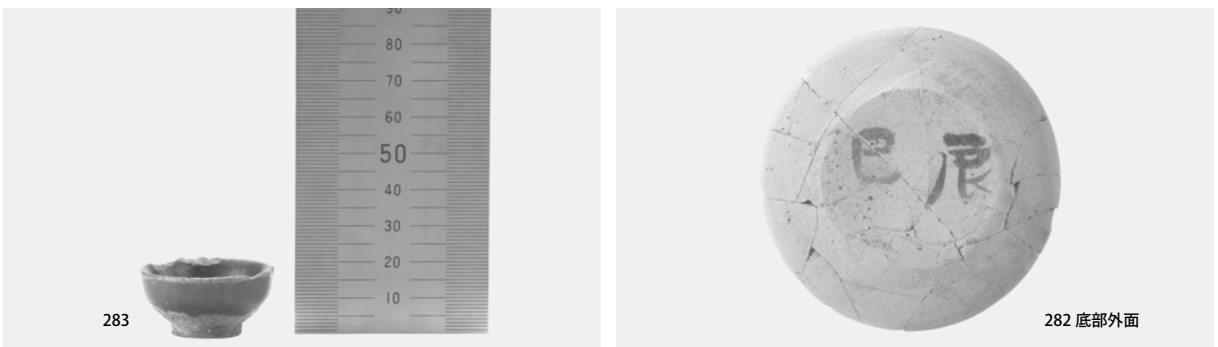
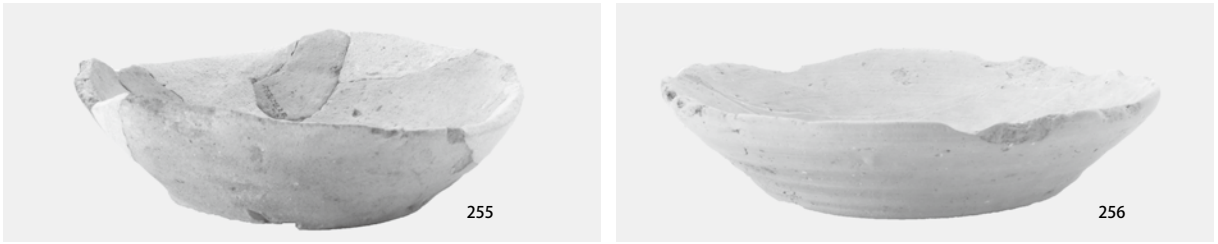


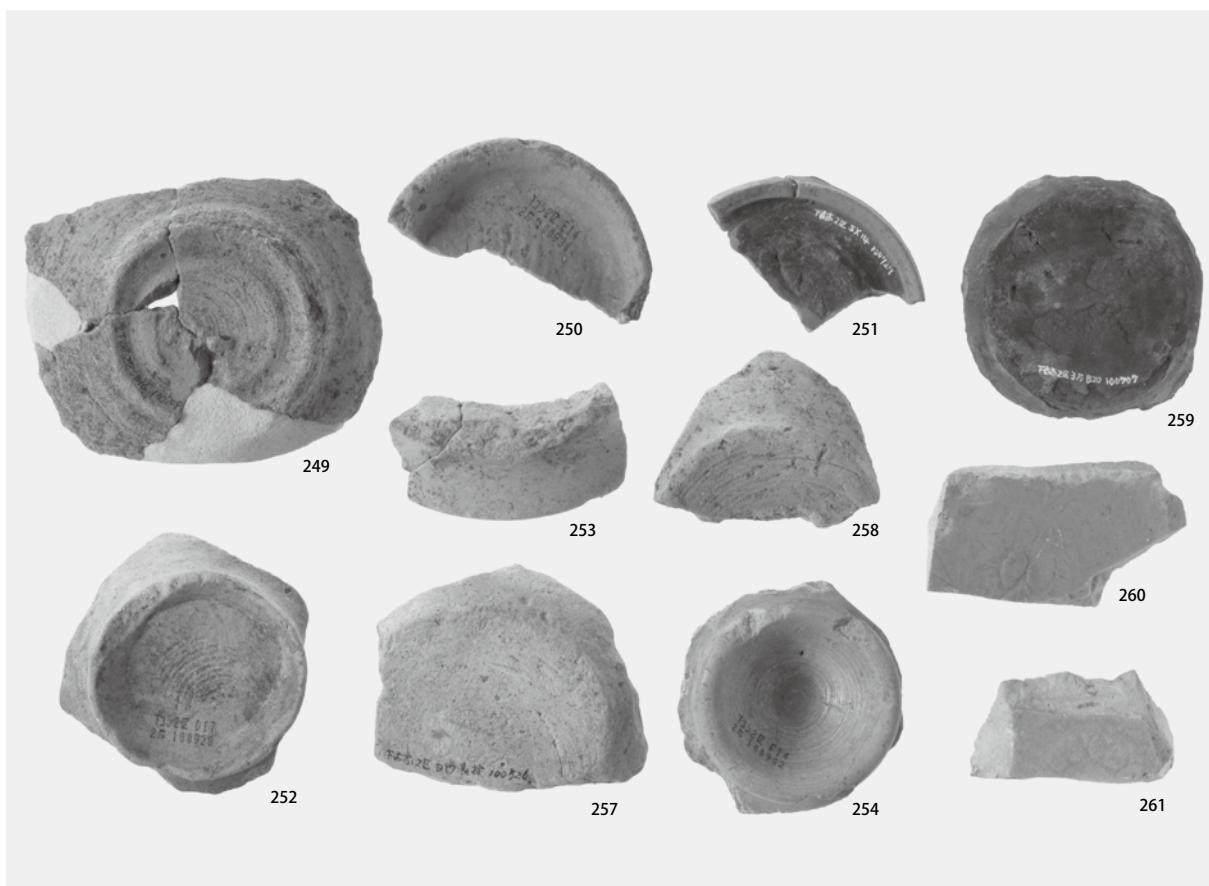


1. 遺構外出土土器 6

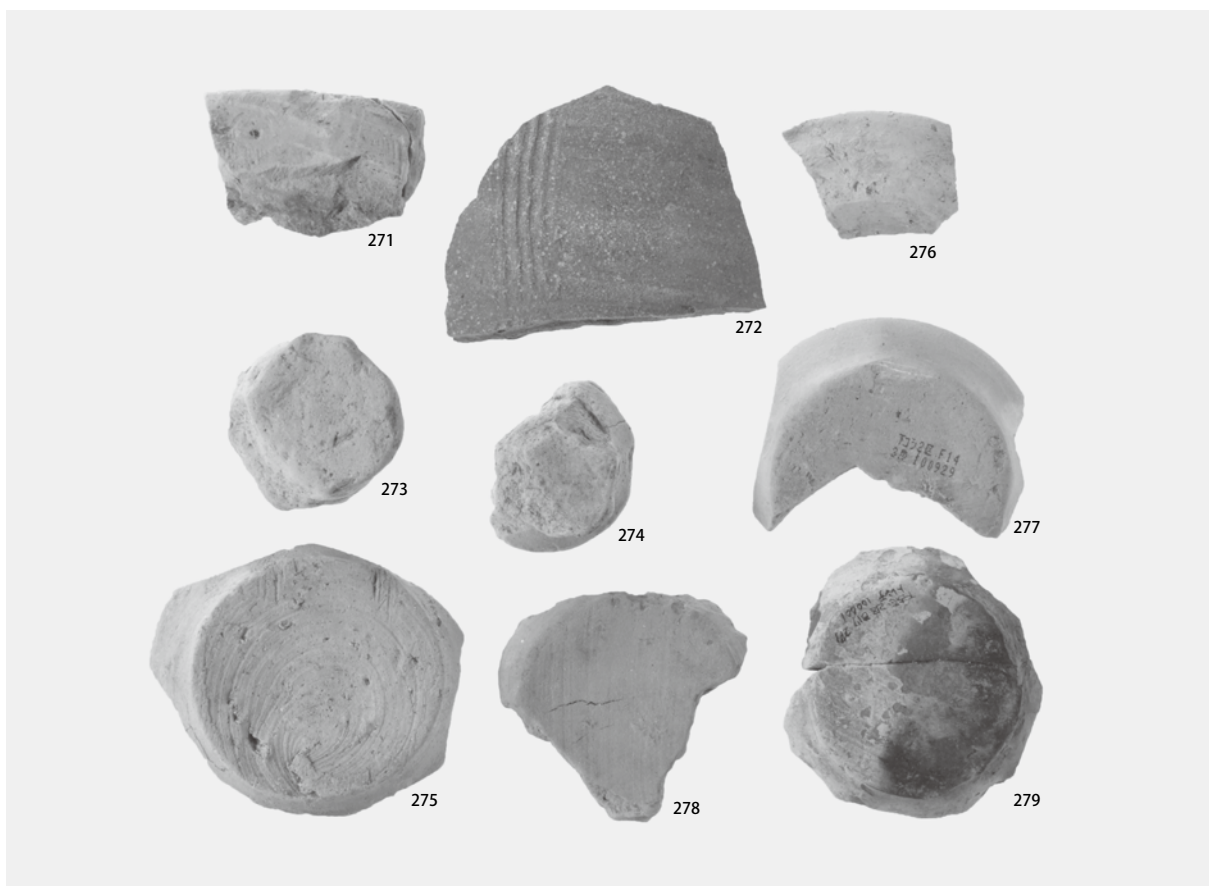


2. 遺構外出土土器 6(裏面)



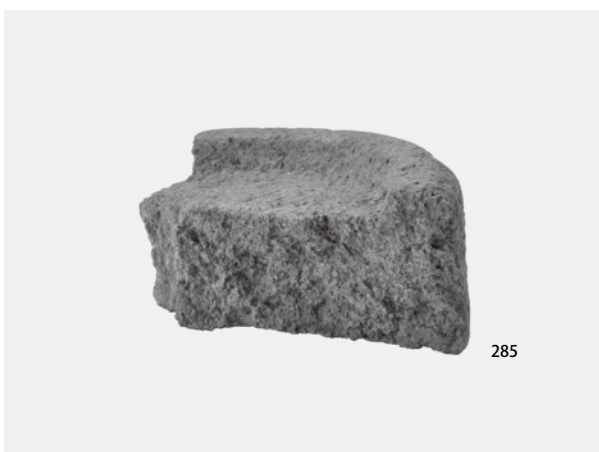


1. 遺構外出土土器 8

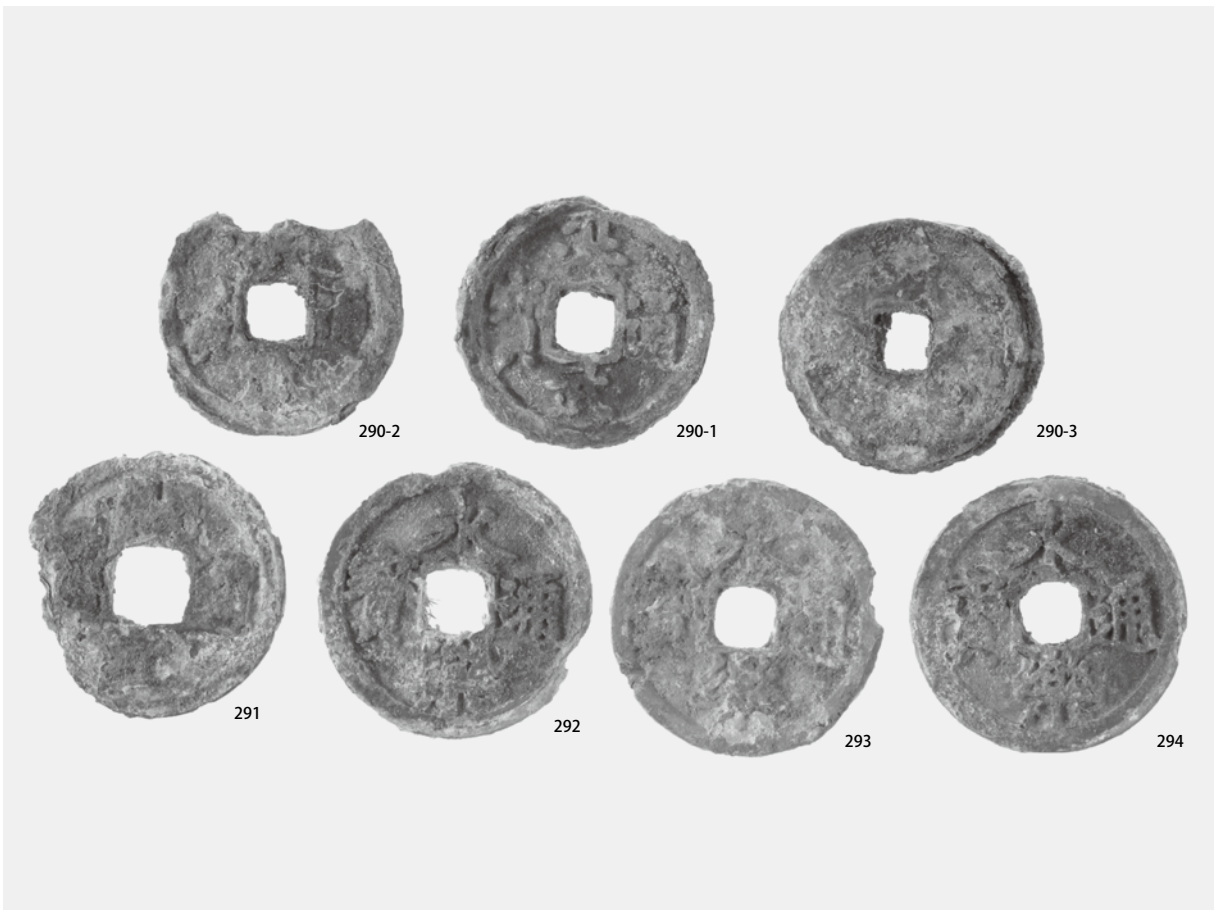
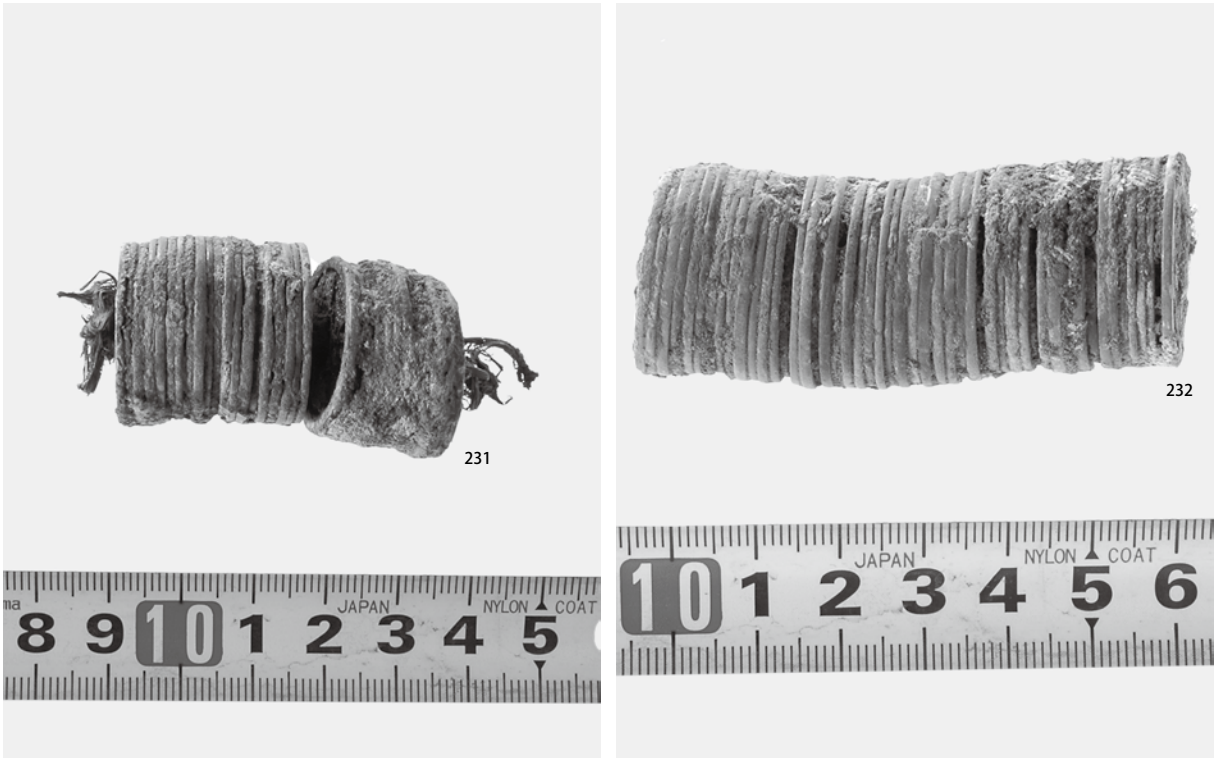


2. 遺構外出土土器 9









古銭

# 報告書抄録

フリガナ	シモゴシイセキ ダイサンジチョウサ							
書名	下古志遺跡（第3次調査）							
副書名	一般県道多伎江南出雲線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	大庭俊次・中川 寧							
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒 690-0131 島根県松江市打出町 33 番地 TEL:0852-36-8608 E-mail:maibun@pref.shimane.lg.jp							
発行年月日	西暦 2012 年 3 月 15 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
シモゴシ 下古志	シマネケンイヌモシ 島根県出雲市 シモゴシチョウ 下古志町	32203	W112	352023	1324404	20100521 ～ 20110121	3,600㎡	道路建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
下古志	集落 散布地	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 戦国時代	掘立柱建物 溝 土坑 井戸 木棺墓 土器埋納坑		弥生土器 土師器 須恵器 中世土師器 国産陶器 輸入陶磁器 石器 古銭 木製品 銅鏡			
要約	下古志遺跡は神戸川左岸の自然堤防上に位置する。弥生時代中期から古墳時代前期の溝、土坑、掘立柱建物、奈良・平安時代の土坑、鎌倉・室町・戦国時代の掘立柱建物や井戸、土坑、墓などを確認した。弥生時代後期の掘立柱建物には布掘建物がある。室町時代の土坑からは古銭がまとめて出土した。弥生時代後期から古墳時代前期の溝には幅が約 6m あるものがあるほか、既存の調査成果から、下古志遺跡の弥生時代後期における居住域の範囲は 200 ～ 300 m の範囲であることを想定した。							



## 下古志遺跡（第3次調査）

一般県道多伎江南出雲線地域活力基盤創造交付金  
（交通安全）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012年3月発行

編集 島根県埋蔵文化財調査センター

〒690-0131

島根県松江市打出町33

TEL 0852-36-8608

印刷

有限会社 黒潮社